シンポジウム

日本の細石刃文化

II

— 細石刃文化研究の諸問題 —

2003年10月

八ケ岳旧石器研究グループ

シンポジウム

日本の細石刃文化

II

— 細石刃文化研究の諸問題 —

2003年10月

八ケ岳旧石器研究グループ

シンポジウム　日本の細石刃文化　II

― 細石刃文化研究の諸問題 ―

目　次

細石刃の機能　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・米田　寛・・・　1
荒屋型彫刻刀の機能　・・・・・・・・・・・・・・・・・・鹿又喜孝・・・　11
いわゆる荒屋型彫器の形態的検討　・・・・・・・・・・・加藤　学・・・　25
細石器文化における遺構　・・・・・・・・・・・・・・・加藤　学・・・　53
細石刃石器群の遺跡形成過程　・・・・・・・・・・・・・野口　淳・・・　65
石材環境と技術適応　・・・・・・・・・・・・・・・・・栗島義明・・・　69
細石刃石器群の技術とその背景：素描　・・・・・・・・仲田大人・・・　83
両面調整石器の問題　・・・・・・・・・・・・・・・・・長沼正樹・・・102
北方系細石刃石器群の移動形態　・・・・・・・・・・・佐野勝宏・・・122
北海道の更新世末における石材消費形態からみた
　　遺跡間変異の検討　・・・・・・・・・・・・・高倉　純・・・132
細石刃石器群の石材需給とセトルメントシステム・・・堤　　隆・・・152
長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群の関係・・・・谷口康浩・・・171
細石刃文化の年代に関する諸問題・・・・・・・・・・・工藤雄一郎・・193
朝鮮半島の細石刃文化・・・・・・・・・・・・・・・・小畑弘己・・・210
中国の細石器文化研究・・・・・・・・・・・・・・・・加藤真二・・・232
シベリアの細石刃文化・・・・・・・・・・・・・・・・加藤博文・・・246
日本細石器文化研究の現状と課題・・・・・・・・・・・橋本勝雄・・・267
細石刃石器群研究のパースペクティブ・・・・・・・・・佐藤宏之・・・276

シンポジウム日本の細石刃文化概要

日　時　2003年10月18日（土）・19日（日）
会　場　〒389-0207　長野県北佐久郡御代田町馬瀬口1901-1
　　浅間縄文ミュージアム
主　催　八ケ岳旧石器研究グループ
共　催　浅間縄文ミュージアム

細石刃の機能

－道具としての細石刃－

米田　寛

はじめに

長野県矢出川遺跡における細石刃発見40周年を記念して行われた『シンポジウム・細石刃文化研究の新たなる展開』（堤編1993）では全国で約1000ヵ所という細石刃石器群の遺跡が集成されたが、それ以後も資料は増加し形態的に変異の少ない細石刃にも着実に検討が行われてきた。形態論では以前から細石刃核の検討に比して利器たる細石刃の研究例は少ないというのが半ば常套句と化していたが、もはやそのような説明を必要としないほど細石刃の研究事例は着々と増加しているように思える。たしかに細石刃石器群研究の多くは細石刃核の形態論を軸とし、細石刃生産技術の検討と技法の設定が行われてきたが、1980年代に入り我が国でも本格的に実体顕微鏡や金属顕微鏡による実験使用痕研究が行われるようなると細石刃にも分析の手が伸び、形態論ばかりでなく実験使用痕研究の立場から機能論的追求がなされるようになった。そして利器としての細石刃には植刃器刃部以外にも使用方法が想定されることを明らかにしている。小稿ではそうした利器たる細石刃の機能的理解を整理することで細石刃石器群における道具としての細石刃に焦点を当てる。

1．細石刃の機能に関する研究例

細石刃は海外での植刃器出土例を参考として、大半は植刃器刃部としての脈絡で形態分析・使用痕分析の解釈が進行した。そのため形態論も植刃器の機能部としての細石刃を念頭において検討が行われてきた。すでに矢出川遺跡の報文で細石刃とは折り取られることが一般的であり、頭部のバルブ除去と末端部の反りの除去を目的とした折断手法によって厚みのほぼ一定な中間部を利器と捉える（戸沢1964）など、矢出川遺跡の細石刃石器群が細石刃製作工程において直線的な刃部の確保を志向する石器群であることに着目している。80年代以降、細石刃の諸属性について定量的なデータ収集が着実に行われた。藤本強は北海道東部出土の細石刃の分析から、細石刃が植刃器側刃部として装着されることを考慮し、細石刃の幅を一定にする必要性があることに着目（藤本1982）している。織笠昭は細石刃の全国的な形態比較（織笠1983、1993）から細石刃の諸特徴に言及している。このなかで織笠は細石刃が形態的斉一性の高い石器であることを数量的に示した。綿貫俊一と堤隆は新潟県荒屋遺跡から特徴的な細石刃刃部調整を抽出し、「荒屋型細石刃」と命名した。これらは細石刃正面右側縁と裏面右側縁の末端部に加工を施すもので、植刃器に逆刺し状に斜行装着するためと解釈された（綿貫・堤1987）。

一方、形態分析のほかに細石刃の実験試料と考古資料との比較検討（大沼・久保田1992、大沼1993）や使用痕分析も散見されるようになった（堤1984、大浦・阿部1986、美安1996など）。細石刃石器群を精力的に研究し続けている堤隆は顕微鏡による微小剥離痕、線状痕、ポリッシュの分析から細石刃の使用痕を数多く検討している（堤 1984、1991、1994、1995ｂなど）。また、長野県中ツ原遺跡の研究によって黒曜石製細石刃のなかからポリッシュＥタイプ（御堂島1986）の可能性がある個体を検出し、皮革加工に利用された可能性を指摘した（堤1995、美安 1996）。これにより細石刃が刺突具側刃部としての機能ばかりではないことが明らかになった。米田寛は東京都多摩蘭坂遺跡と埼玉県横田遺跡の黒曜石製細石刃からＤタイプポリッシュの見られる相対的に厚みがあり、反りが小さく、特徴的な微小剥離痕を有する個体を検出し、それらが植刃器製作時に細石刃をはめ込む溝の製作に使用された「溝彫り刃器」であるとした（米田 2002）。こうした実験使用痕研究による細石刃の検討が継続されることで今後細石刃の機能ばかりでなく、細石刃石器群の理解にも有効なデータを得られるであろう。現状では植刃器刃部としての細石刃、scraping目的の細石刃、cutting、sawing目的の細石刃が使用痕観察によって明らかにされている。

2．使用された細石刃

では、それらの細石刃はどのような特徴を有しどのような場面で使用されたのであろうか。これまでの研究成果をもとに概略してみる。

a）使用痕分析にみる細石刃の特性

細石刃は形態的には極めてシンプルであり、そのサイズや重量から量的に検討が行いやすい。また、シンプルであるがゆえにナイフ形石器、尖頭器などの主要利器と比較して計測値の誤差が少なく、報告書掲載の遺物観察表の数値を大半はスムーズに利用可能である。細石刃は厚さや刃部角などの形態的特徴から極めて破損リスクの高い道具である。破損するが故に他の石器に比して複数作業に使用され難いと考えられ、単体での長時間の継続使用にも向かない。現在のところ使用痕分析は実験データとの比較検討によってその痕跡の種類や生成要因を探り、対象物の同定、機能部位と機能方向などを検討する。その際、実験データは単純なものを使用することが多く、重複する使用痕へのアプローチには適さない。だが、細石刃の場合は破損の機会が多いことが単純な作業痕跡を残す実験資料との比較に役立つため、検討資料として適当である。一方で破損リスクが高いために検討資料によっては使用によって生ずる摩耗、損傷、光沢など石器表面の変化をあまり期待できないというネガティブな面もある。すなわち使用痕が検出されないからといって必ずしも使用しなかったとは言切れないのである。

さて、道具を作るといった特定の作業を行う際に、一定の機能部を継続的に使用することは、その製品の品質を一定に維持することに寄与する。管理的な道具ほど保持する期間が相対的に長く、メンテナンスも入念に行われ、その結果として数多くの使用痕跡が一つの石器に残されることになる。中ッ原第５遺跡Ｂ地点出土のスクレイパー（御堂島 1991）はその好例であり、刃部角の異なる部位にそれぞれ scraping と cutting の痕跡があり、変形を繰り返すスクレイパーの特徴を良く表している。スクレイパーのように刃部角によって掻器と削器の使い分けに相関関係が見られる場合があるように、細石刃にはそのシンプルな形状からわずかな属性の差で使用方法に変化が現れる可能性が高い。例えば刃部角が大きく反りのある個体は scraping に適しており、逆に刃部角が小さく反りの少ない個体は cutting、sawing などに有効であろう。実資料でもそれを裏付ける分析結果が示されている。

b）植刃器刃部としての細石刃

線状痕が一方向からの力によって形成される作業方法は cut である。細石刃の分析からは刃部に並行ないしは斜行する線状痕が見られる場合、多くは cutting の痕跡と考えられる。１遺跡から出土する細石刃の顕微鏡観察を行うと、使用痕ありとされた個体のうち「刃部と並行する線状痕」や散漫に分布する１～２mm程度の微小剥離痕の見られるものの出現率が高い。これらの一部には稜上のつぶれや稜付近に並走する線状痕が観察される。従って細石刃の中で一般的なのは cutting の痕跡のあるものであり植刃器側刃部としての機能であろう。本邦での植刃器出土例は未だ報告されていないが、大陸側では骨製シャフトに埋め込まれた細石刃の出土例が散見される。主に刺突具としての機能が想定されているが、中ッ原遺跡では刃部に直行する線状痕とそれに伴うＥタイプポリッシュの観察された細石刃が出土している（堤 1995ｂ、美安 1996）。細石刃の形状からは手に持って単独で用いたとするよりも、植刃器への装着によって細石刃数本単位で機能した道具を作り出して scraping が行われたと考えられる。新石器時代には稲刈り具として機能した植刃器の報告（梶原洋・佐川正敏・謝駿義 1993）もあり多様な利用方法が想定されるが、旧石器時代においても植刃器は刺突以外の機能をも有する道具として利用されていたのであろう。

さて、刺突具としての植刃器（植刃槍）には両刃と片刃が存在し、刃部素材たる細石刃を並行装着あるいは逆刺し状に斜行装着されていたと想定されている。海外での植刃器出土例においても両刃と片刃が認められる（小畑 1993）。装着例の大半は並行装着のようだが、逆刺しを作り出したモリ状植刃器の出土例もみられることから、本邦の植刃器にも逆刺し状に斜行装着された植刃器があったかもしれない。新潟県荒屋遺跡からは「荒屋型細石刃」と呼ばれる正面右側縁と裏面右側縁の末端部に加工が施された細石刃が存在し、植刃器に逆刺し状に斜行装着するための調整であると解釈された（綿貫・堤 1987）が、堤によると「荒屋型細石刃」の加工されていない刃

部側に線状痕がみられるという（堤 1993）。とすれば正面右側縁の調整は植刃のための下処理だったのだろうか。

ところで、植刃器製作には細石刃を埋め込む際に固定する接着剤が必要で、縄文時代の石器にはアスファルトの利用が広く知られているが、細石刃石器群においては岩手県金ヶ崎町柏山館跡ではニカワに近似するタール状付着物が細石刃から検出されている。報告した小笠原正明によれば、「ニカワはコラーゲンの一種で軟骨などから温水によって比較的容易に抽出でき、熱を加えて乾燥固化すると、水分子を介した特殊な架橋構造が形成されて強力な接着剤となり」、「縄文時代の石器には石油起源のアスファルトの付着がよく観察され、海外の例では植物起源の天然樹脂と思われる物質が散見されているが、柏山館跡でのニカワ状物質の発見は、これらの他に動物性の接着剤が旧石器時代に利用されていたことを示唆する」（小笠原 1996）という。日本列島にいた旧石器人類が自然環境を熟知した狩猟採集民であったとすればどの材料を接着剤に用いてもなんら不思議はないが、細石刃石器群における動物性接着剤の利用には狩猟対象獣の捕獲後の集約的利用が想定されて興味深い。細石刃石器群の中には１遺跡内に数箇所に及ぶ石器集中部の形成と多量の石材消費が行われたベースキャンプ的遺跡と、１、２箇所程度で石器組成も単純で小規模な石器集中部を形成する狩猟キャンプ的遺跡がある。後者に捕獲した動物が搬入されて解体処理される場合、骨・肉類に分離する cut を主たる作業とする道具、生皮の処理には脂肪分を掻き取る scrape に使用する道具、骨の中から蛋白源である骨髄を取り出すために骨を切るあるいは砕くための道具、肉を調理するための燃料などが必要である。また、次なる狩猟のための各種道具のメンテナンス作業や皮製品の製作も行われたであろう。植刃器製作にはシャフトとなる骨・木などを加工する道具、接着剤、細石刃を必要とし、皮革加工には皮の柔軟化を行う磨石、皮なめしを行う掻器を必要とする。このように狩猟キャンプ内での数日以内の作業でも様々な道具を必要とすることが想定されるが、植刃器メンテナンスにおいては狩猟獣獲得から解体に至るプロセスの中で動物性接着剤、シャフト材を確保できる。柏山館跡出土細石刃の動物性接着剤の利用は狩猟キャンプ内での集約的な狩猟対象獣の利用のなかに植刃器メンテナンス作業が組み込まれていることを示唆するであろう。

ｃ）植刃器製作具としての細石刃

細石刃はそのサイズや重量などから単独で利用される機会は少ないものと捉えがちであるが、少ないながらも単独使用を示す使用痕跡が確認されている。東京都多摩蘭坂遺跡と埼玉県横田遺跡からは出土した細石刃全体に占める比率は低いものの、植刃器製作に関係する溝彫り具として使用された可能性のある細石刃が見つかっている（米田 2002）。その特徴は、

①稜は潰れが少ない。あるいは潰れが無い。

②完形ないしは略完形の細石刃を折断せず利用し、やや厚みのある素材が選択されている。

③Sawing と推定される作業方向の線状痕と微小剥離痕の分布が認められる。

④B・D1 タイプのポリッシュと微小剥離痕「中～大・分布B」が観察され、木や骨・角など硬質な対象物への
使用が考えられる。

⑤正面の右側縁上部と左側縁下部、裏面の左側縁下部と右側縁上部に微小剥離痕が顕著にみられものと、逆に
正面の右側縁下部と左側縁上部、裏面の左側縁上部と右側縁下部に微小剥離痕が顕著にみられるものが存在する。

上記の特徴から木や骨・角などを削る作業に使用された細石刃と考えられるが、通常厚さ３㎜程度しかない細石刃は器体の著しい破損を招き易く、耐久性が求められる作業には向かない。石材消費の面からもそうした作業への使用は極めて非効率的と判断される。実資料をみると出土細石刃全体のなかでも特に厚みを有し、刃部角の大きいものを素材として選択し、刃縁がほぼ一直線になるような使用・操作方法が採用されている。植刃器の製作実験を行った堤によると、「細石刃用の植刃器溝切り作業には細石刃もしく細石刃と同様の薄さの剥片が好都合」（堤 1995ａ）という。このことから溝彫り作業という一直線の運動方向であれば、細石刃の薄さの問題もや

や厚みのある素材を選択することで解消される。また、破損リスクの高い細石刃にポリッシュが明確に観察されること自体、継続的な刃部利用が考えられ、破損を抑制する使用方向や方法がとられていると考えられる。これらの特徴を有する細石刃を筆者は「溝彫り刃器」と呼称したが、特定形態および特定使用痕跡ある細石刃と一定作業との強い相関関係を窺わせる事例といえよう。普通、道具はある目的のために作り出されているが、旧石器時代の石器に関しては、むしろ様々な作業に利用されていることのほうが一般的(阿子島 1989)である。しかし、なかには特定の作業と深い結びつきをもつ石器がある。堤は掻器を皮なめし作業との強い相関関係がある「機能的特定性」をもつ道具と評価している(堤 1997、2000)。溝彫り具としての細石刃も特定の作業に使用されているという点で「機能的特定性」をもつ道具として評価できよう。

また、この溝彫り具と考えられる資料の微小剥離痕の分布(前記⑤の微小剥離痕分布)から利き手の同定が可能である。細石刃50本を用意し鹿角の溝彫り作業によって微小剥離痕分布の復原実験を行った結果、以下の分布パターンが認められた。なお、実験は30点を右手、20点を左手でもち刃部が摩耗し、手で持ちにくくなった時点で器体を上下・表裏逆など持ち替えて作業を継続した。

(イ) 右手に持ち、器体の正面が人差し指側、裏面が親指側にくるよう挟んで作業をした場合、正面には比較的大きな微小剥離痕が連続し、裏面にはわずかに小さな微小剥離痕が不連続に分布する。

(ロ) 右手に持ち、器体の正面が親指側、裏面が人差し指側にくるように挟んで作業をした場合、正面には小さな微小剥離痕が不連続に分布し、裏面には比較的大きな微小剥離痕が連続する。

(ハ) 左手に持ち、器体の正面が人差し指側、裏面が親指側にくるよう挟んで作業をした場合、正面には比較的大きな微小剥離痕が連続し、裏面にはわずかに小さな微小剥離痕が不連続に分布する。
すなわち(イ)と同様の分布が観察される。

(ニ) 左手に持ち、器体の正面が親指側、裏面が人差し指側にくるように挟んで作業をした場合、正面には小さな微小剥離痕が不連続に分布し、裏面には比較的大きな微小剥離痕が連続する。
すなわち(ロ)と同様の分布が観察される。

以上の分布パターンを考慮すれば、両手とも人差し指側に微小剥離痕「中～大・分布B」、親指側に微小剥離痕「極小～中・分布D」の出現率が高い。そして次々と使用していない刃部を機能させるべく持ち替えながら作業を続けた場合、細石刃の微小剥離の分布は⑤の微小剥離痕分布が見られることとなる。こうした刃部における微小剥離痕のあり方を検討することによって「溝彫り刃器」使用時の利き手は同定可能であり、好条件の資料であれば細石刃使用者の「個人の癖」にまでアプローチできるかもしれない。

今のところ植刃以外の細石刃使用方法として溝彫り具としての細石刃しか検出していないが、より多くの使用痕分析をすれば多様な使用方法の細石刃が見つかることは十分に予想される。今後も継続的な検討を要するであろう。

3．細石刃石器群における道具類の製作作業と石製利器の相関

さて、これまでは主に細石刃の使用痕分析をもとにその機能を探ってきたが、細石刃石器群内の他の石器についても目を向けたい。

本州島東北部に広く分布し硬質頁岩を利用する荒屋系細石刃石器群(永塚 1997)は両面調整石器の消費過程で生じる調整剥片を石器素材とする。細石刃、細石刃核を除く代表的な石器として角二山型掻器、荒屋型彫刻刀形石器があり、埼玉県白草遺跡の荒屋型彫刻刀形石器からは、彫刀面と素材裏面の接線を刃部として骨・角などの掻き取りに使用された痕跡が確認されている(堤 1997)。また、掻器は皮革加工と強い相関関係を有する石器(堤 2000a・b)と評価されており、この2者には荒屋系細石刃石器群内における特定作業との強い相関関係が想定される。一方、西南日本に広く分布する稜柱形細石刃核を伴う細石刃石器群(以下、稜柱形細石刃石器群と略す)は定型化した石器をほとんど保有していない。スクレイパー類は存在するが一定形態のものは少ない。稜柱形細石刃石器群にも皮革加工と関連するEタイプポリッシュの見られる掻器が検出されている(米田 2002)が、定量

的な分析には至っておらず今後の課題である。南関東の稜柱形細石刃石器群は

（構成１）細石刃の製作体系

（構成２）安山岩を主とする一般的剥片剥離手法に基づく石器製作体系

（構成３）礫器状石核による剥片剥離体系

の３つの技術系列で構成される（田村 1987）ことが指摘されており、各構成要素が必要に応じて選択的に使用されることで遺跡に残される道具類に差が生じる。特に南関東では構成１に黒曜石、チャート、頁岩などの鋭利な石器製作に適した石材が利用されている。このように稜柱形細石刃石器群における技術運用には道具に応じた石材選択がなされる特徴があり、荒屋系が一貫して同一石材を利用するのとは対照的である。荒屋系の同一石材による道具製作・利用という規制条件が機能部をほぼ一定に保持する定形的な道具の維持・管理を徹底させ、作り出される製品の品質を安定させようとするのに対し、稜柱形細石刃石器群は石材別に各製品の製作作業を行うことで作業リスクを分散させ、各道具の消費を抑えている。結果として荒屋系では管理的側面の強い道具、すなわち「機能別の道具」をより多く現出させるのに対し、稜柱形では「機能別石材選択」を重視するために石器形態の一定性よりも機能刃部の形状を優先するのではないだろうか。どちらの細石刃石器群も下記の作業が行われていると考えられるが、現状においては両者の選択した石材とその消費の差が石器形態の差として現れているといえよう。

荒屋系細石刃石器群	作業内容	稜柱形細石刃核を伴う細石刃石器群
細石刃	植刃器刃部の埋め込み作業	細石刃
細石刃および薄手の剥片	植刃器の溝彫り作業	細石刃および薄手の剥片
荒屋型彫刻刀型石器	骨・角などの掻き取り作業	？
角二山型掻器	皮革加工作業	不定形なスクレイパー

また、上記の二者の対照的な部分はそのまま細石刃石器群内での作業量の違いを表すかもしれない。荒屋系のように定形的な道具による特定作業の進行は生業内における特定作業の重要度が増すことを意味するのではないだろうか。骨・角などの掻き取り作業と強い相関関係をみせる荒屋型彫刻刀形石器の存在は、荒屋系内部での骨・角の加工が重要な作業であったことを物語る。おそらく植刃器の製作およびメンテナンスなど、骨角製品の製作・保持が日常化しており、細石刃や荒屋形彫刻刀形石器の使用と深く関わっていたのだろう。

一方、稜柱形細石刃石器群では荒屋型彫刻刀形石器に対応する規格化された作業具が確立しなかった。骨・角などの掻き取り作業が荒屋系に比して低調で骨角製品の製作数自体が多くなかった可能性もある。論を飛躍すれば、稜柱形細石刃石器群では狩猟具の中での植刃槍のウェイトはそれほど高くなかったのではないだろうか。南関東では細石刃石器群隆盛期に尖頭器石器群が共伴しており、槍先形尖頭器も植刃槍のバックアップとして携行していれば骨角製シャフトの製作数は抑制されたであろう。

おわりに

これまでの一連の研究によって細石刃のシンプルな形状から様々なデータが抽出され検討が加えられてきた。機能研究も植刃器との関係性を主として一定の成果を出し続けているが、10 年前の『シンポジウム　細石刃文化研究の新たなる展開』において、細石刃についての機能論的アプローチについて「例えば１ブロックの出土資料など有意なまとまりを持つ資料について継続的に顕微鏡観察がなされることであろう。」（堤 1993）という課題は、未だ継続されるべきものである。今後も細石刃の機能分析とともに、遺跡の立地、他の利器との関わり、石材の獲得と消費、石器製作技術、使用痕分析など多角的な検討を続け、なぜ遺跡に細石刃石器群が残されたのかという「場の機能論」を進めながら細石刃石器群における細石刃の位置づけを検討することで細石刃石器群の理解も一層深まるであろう。

参考・引用文献

阿子島香　1989『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社

大浦真紀子･阿部祥人　1986「細石刃の使用痕　－観察と予察－」『史学』56－2

大沼克彦･久保田正寿　1992「石器製作技術の復元的研究:細石刃剥離方法の同定研究」『ラーフィダーン』13

大沼克彦　1993「細石刃剥離に関する実験的研究」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開』

佐久考古学会･八ヶ岳旧石器研究グループ

小笠原正明　1996「細石刃に付着したタール状物質と伴出有機物の化学分析」『柏山館跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第242集

小畑弘己　1993「東アジアの植刃器について」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ　－細石刃文化研究の諸問題－』

佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ

織笠　昭　1983「細石刃の形態的一考察」『人間･遺跡･遺物 』1

織笠　昭　1993「細石刃研究の最も基礎的な形態」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ　－細石刃文化研究の諸問題－』

佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ

梶原洋・佐川正敏・謝駿義　1993「中国新石器時代の植刃器の機能をさぐる」『旧石器考古学』46

田村　隆編　1989『佐倉市南志津地区区埋蔵文化財発掘調査報告書１　－佐倉市御塚山・大林・大堀・西野・芋窪遺跡－』

千葉県文化財センター調査報告第152集

堤　隆　1984「上草柳地区出土の細石刃について」『一般国道246号（大和･厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』

大和市文化財調査報告書第15集

堤　隆　1991「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』17

堤　隆　1993「細石刃の使用にかかわる二・三の問題」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開』

佐久考古学会･八ヶ岳旧石器研究グループ

堤　隆　1994「細石刃の使用痕分析　－群馬県宮城村前田遺跡細石刃の顕微鏡観察－」『佐久考古通信』63

堤　隆　1995ａ「植刃器製作の実験的研究」『中ッ原第１遺跡Ｇ地点研究Ⅰ』八ヶ岳旧石器研究グループ

堤　隆　1995ｂ「細石刃の使用痕分析」『中ッ原第１遺跡Ｇ地点研究Ⅰ』八ヶ岳旧石器研究グループ

堤　隆　1996「削片系細石刃石器群をめぐる技術的組織の異相　－中ッ原細石刃石器群を中心として－」『古代』102

堤　隆　1997「荒屋型彫刻刀形石器の機能推定　－埼玉県白草遺跡の石器使用痕分析から－」『旧石器考古学』54

堤　隆　2000ａ「掻器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」『考古学研究』47－２

堤　隆　2000ｂ「皮鞣しの場　－掻器の分布と場の機能－」『MICRO　BLADE』1

堤　隆編　1991『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ

堤　隆編　1993『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開』佐久考古学会･八ヶ岳旧石器研究グループ

堤　隆編　1995『中ッ原第１遺跡Ｇ地点研究Ⅰ』八ヶ岳旧石器研究グループ

堤　隆編　1996『中ッ原第１遺跡Ｇ地点研究Ⅱ』八ヶ岳旧石器研究グループ

戸沢充則　1964「矢出川遺跡」『考古学集刊』2-3

永塚俊司　1997「荒屋系細石刃石器群の一つの定点」『人間・遺跡・遺物』３

藤本　強　1982「常呂川流域の細石刃」『北海道考古学』18

御堂島正　1986「黒曜石製石器の使用痕 －ポリッシュに関する実験的研究－」『神奈川考古』22

御堂島正　1991「中ッ原第５遺跡Ｂ地点出土黒曜石製石器の使用痕分析」『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ

美安慶子　1996「細石刃の語るもの」『中ッ原第１遺跡Ｇ地点の研究Ⅱ』八ヶ岳旧石器研究グループ

米田　寛　2002「細石刃の使用と場の機能　－東京都多摩蘭坂遺跡と埼玉県横田遺跡の事例報告－」『法政考古学』28

綿貫俊一・堤　隆　1987「荒屋遺跡の細石刃文化資料」『長野県考古学会誌』54

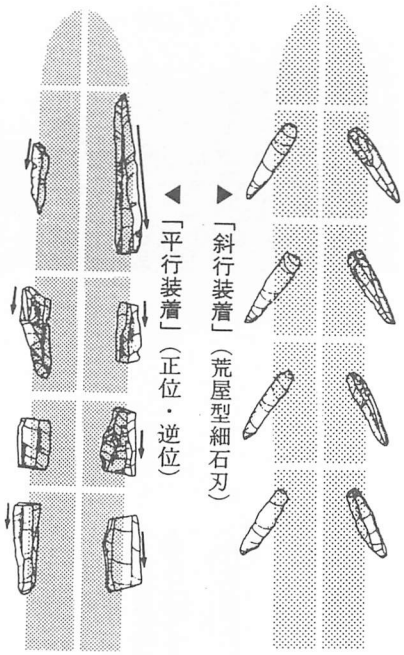


図１　細石刃装着方法（綿貫・堤 1987 より）

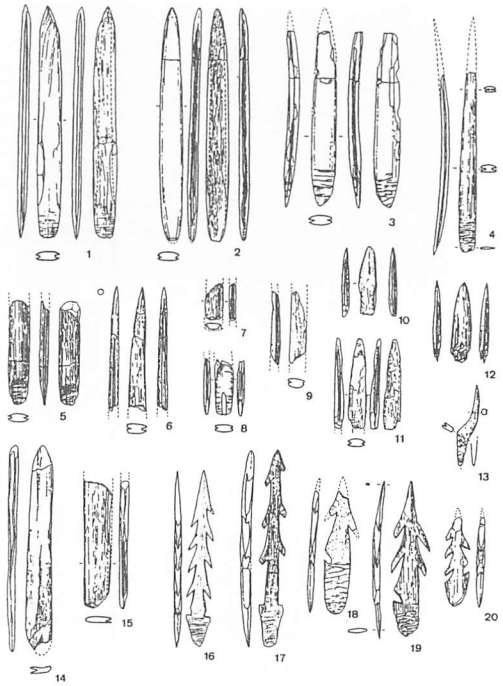


図２　シベリアの植刃器（小畑 1993 より）

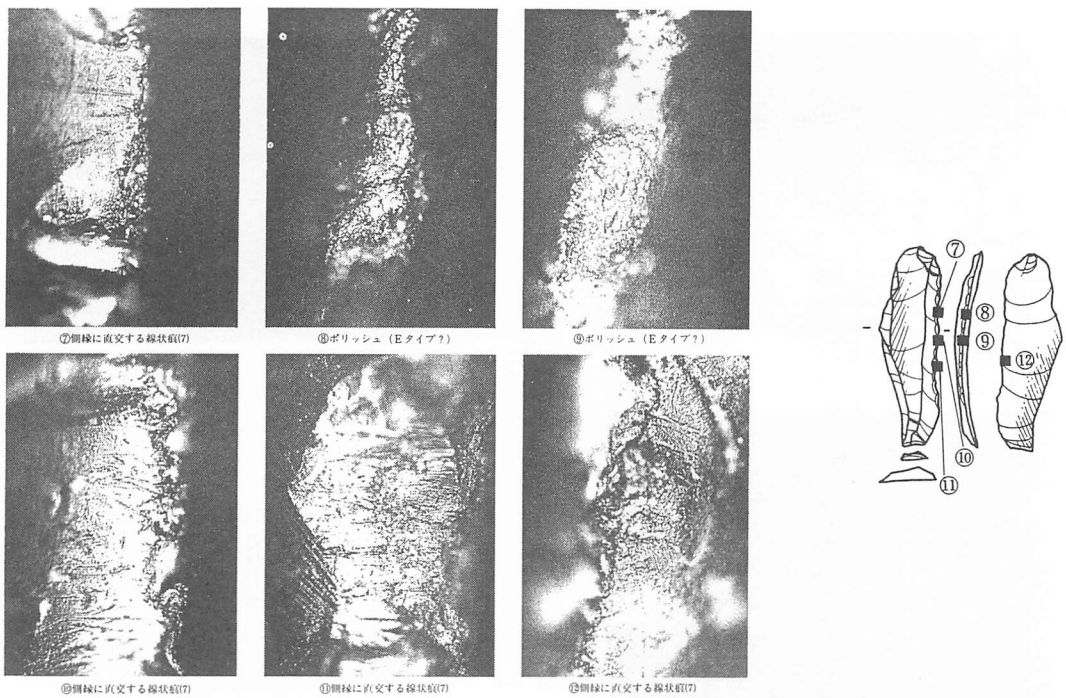
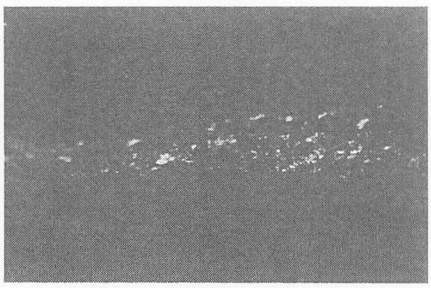
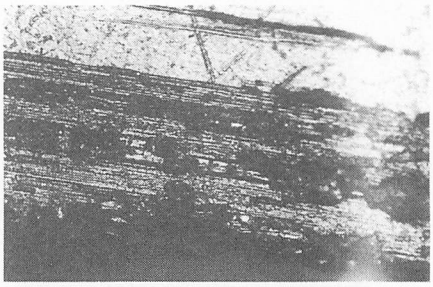


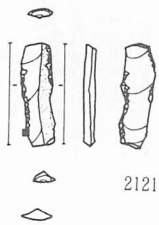
図３　scraping の痕跡を残す細石刃（堤 1995 b より）



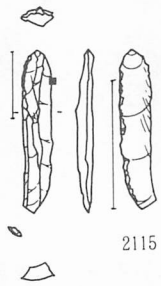
刃部のDタイプポリッシュ　200倍



刃部の損傷と線状a　100倍

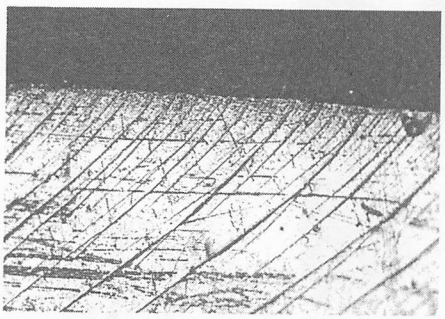


2121



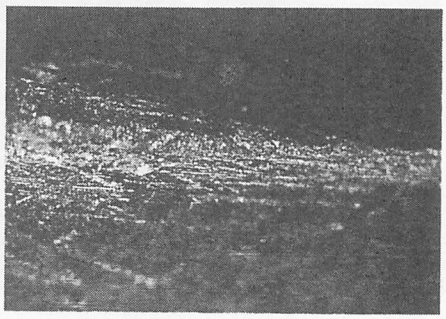
2115

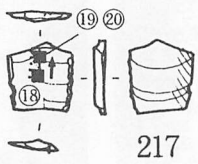
⑱ 稜上の平行する線状痕



⑲ 稜上の激しいつぶれと平行する線状痕

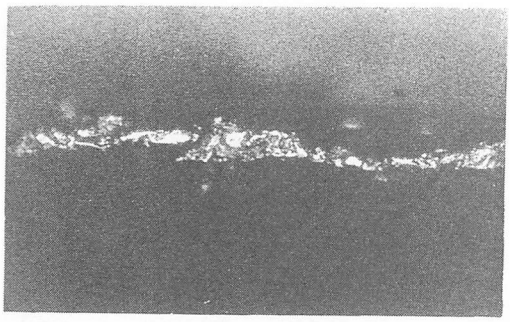
⑳ 稜上の激しいつぶれと平行する線状線



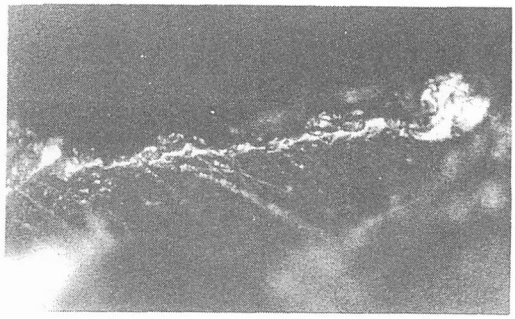


217

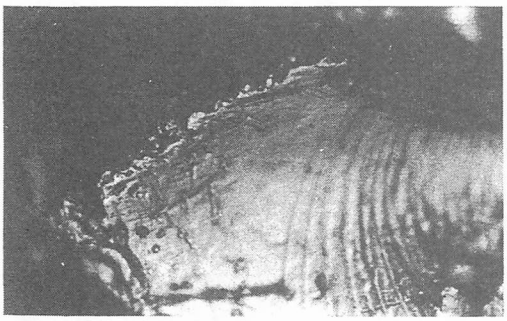
図４　細石刃の損傷（no. 2121 は「溝彫り刃器」）



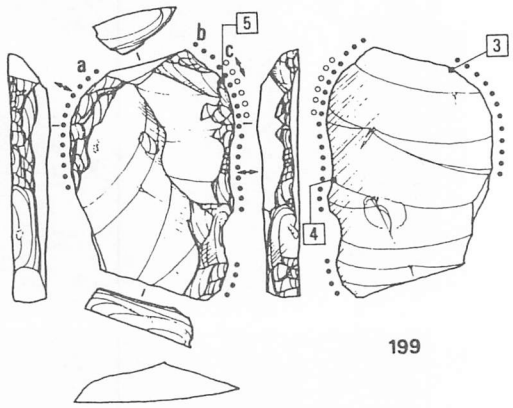
3　No.199-a　ポリッシュ

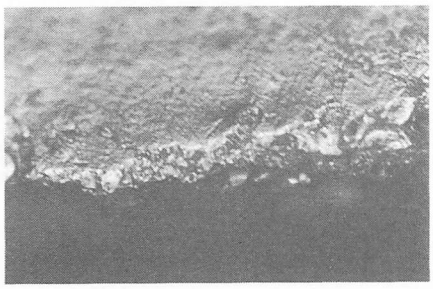


4　No.199-b　ポリッシュ

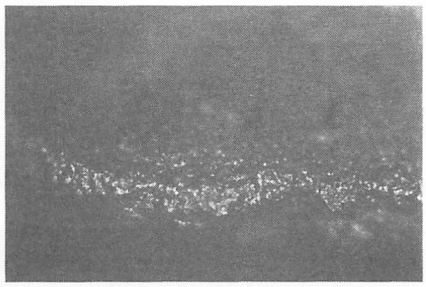


5　No.199-c　ポリッシュと線状痕





Eタイプポリッシュ　200倍



E・Hタイプポリッシュ　200倍

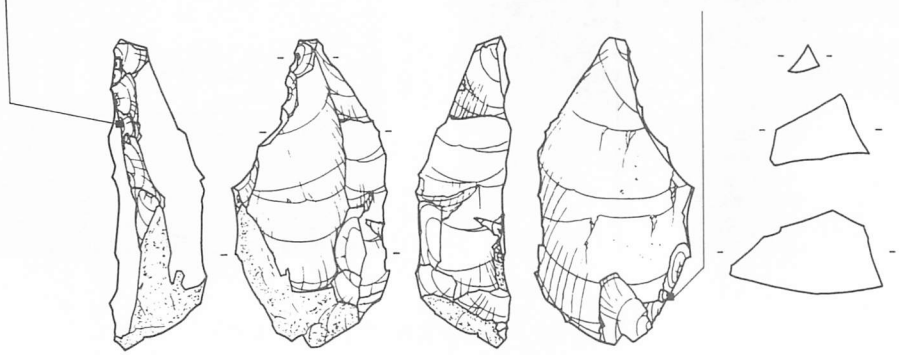


図5　細石刃石器群のスクレイパー（上：中ッ原　下：多摩蘭坂）

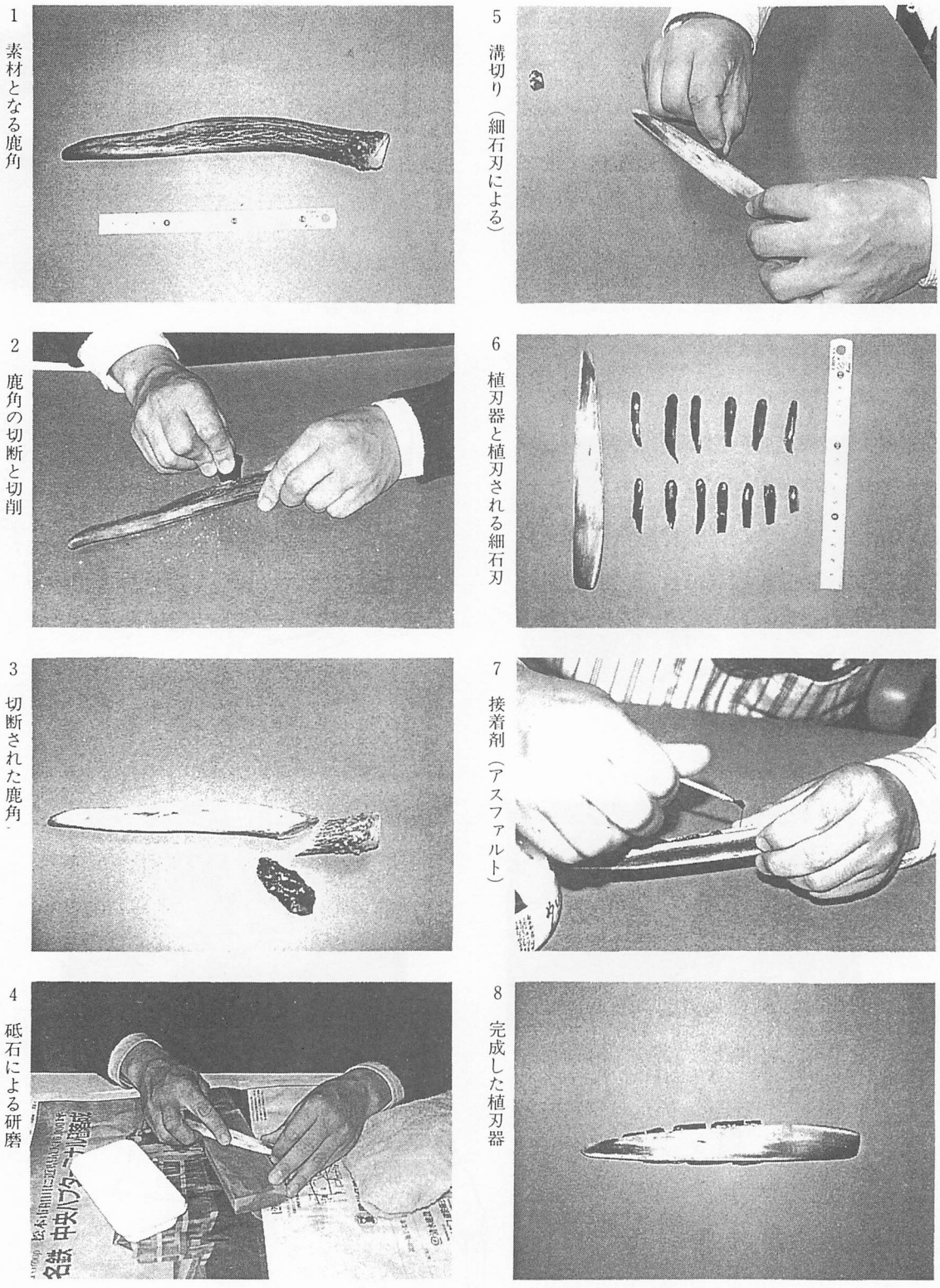


図６　植刃器製作実験（堤 1995a より）

荒屋型彫刻刀の機能

― 荒屋遺跡第2･3次発掘調査出土資料の分析を通して ―

鹿又 喜隆

1. はじめに

日本における荒屋型彫刻刀の関する研究史を振り返り、特に機能について触れられているものを中心にとりあげ、荒屋型彫刻刀の機能研究に関する課題を明らかにしたい。

荒屋型彫刻刀は、芹沢長介によって設定され、その形態・手法から3種類に分けられた（芹沢1959）。また、その分布や共伴する石器群、使用石材についてまとめられ、その特徴が明らかにされた。その後、芹沢は、彫刻刀の使用痕が「刃先にみられず、むしろずっと下方の彫刻刀面と素材の裏面との交わる部分に残されている」事例を紹介している（芹沢1974）。

山中一郎は、荒屋遺跡出土彫刻刀324点を分析し、型式学的検討を行った（山中1975,1982）。その中で、「どの形態が荒屋型彫器なのか」という問題提起をしている。

水村孝行は、山中が示した荒屋型彫刻刀とは何かという問いかけに対し、型式概念に対する研究者間の認識の相違が問題であることを指摘した（水村1977）。また、「組み合わせ道具としての細石刃と骨角器、彫刻刀の発展の問題」が今後の課題と述べている。石材とその機能が無関係ではないと推察し、5項目のあげて荒屋型彫刻刀の定義を行っている。

梶原洋は、モサンル遺跡出土の荒屋型彫刻刀1点が、ファシットの縁辺を利用した水漬けの角か骨を削る作業、同被加工物に対して先端部を利用した溝切り、のちに削りに使ったと推定した（梶原1982）。

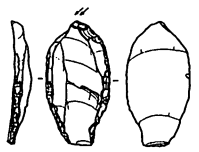
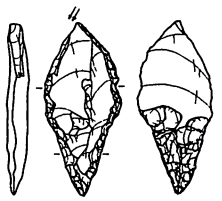
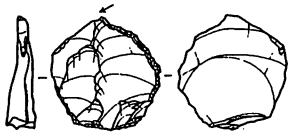
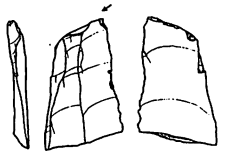
綿貫俊一と堤隆は、荒屋遺跡から採集した資料に基づき、石器の形態的特徴をまとめている（綿貫・堤1987）。荒屋型彫刻刀の調整について、ファシットの作出以外に「周辺急斜度調整」と「フラットグレーバー状剥離」、「ファシット面再調整」の3つをあげている。また、堤は、白草遺跡出土の荒屋型彫刻刀21点の使用痕分析を行っている（堤1997）。約半数の12点に使用痕が確認され、操作は掻き取り（Scrape）、被加工物は骨や角が10点、皮・肉が1点、皮・肉（乾燥）が1点と推定した。130°以上の刃角の彫刻刀では使用痕が認められないことに注目している。

山原敏朗は、暁遺跡から出土した彫刻刀140点の使用痕（特に線状痕）の観察を行った（山原1997）。彫刻刀を技術形態により5分類し、特徴的な1類と2類を中心に検討した。それらの特徴は次のようにまとめられる。1類は、頁岩を使用し、小型幅広である。二次加工は、急斜度剥離が主体であり、平坦剥離もみられる。腹面加工のあるものは、着柄された可能性がある。背面先端部の調整が認められる。硬質の対象物に刃をやや浮かせて「掻く」「削る」「剥ぐ」作業が中心であったと推定された。2類は、黒曜石（Obs-b）の使用率が高く、1に比べて長い（石刃素材）。二次加工は、急斜度剥離が主体。腹面加工のあるものは、着柄された可能性がある。背面先端部の調整は認められない。1類より軟質の対象物に刃をねかせて「掻く」「削る」「剥ぐ」作業が中心であったと推定された。

伊藤典子は、学壇遺跡出土彫刻刀の使用痕分析を行っている（伊藤2002）。分析資料には、2点の荒屋型彫刻刀も含まれており、うち1点が乾燥した皮、もう1点が骨･角の掻きとりに使用されたと推定している。

山科哲は、荒屋遺跡の第1次調査で出土した彫刻刀84点について分析した（山科2002）。その形態的特徴を捉えるとともに、着柄軸を設定し、先端と基部幅の比較によって刃部再生の度合いを推定している。

研究史をまとめると、次のような課題があげられた。①荒屋型彫刻刀の定義の明確化。②荒屋型彫刻刀の具体的な機能の解明。③荒屋型彫刻刀の形態と機能の関係把握（特に刃部再生や調整加工、刃角との関係）。④着柄の有無の問題。これらの課題に対し、荒屋型彫刻刀の機能分析がその解明に役立つと考えられる。

	二次加工分類	彫刻刀面分類	特徴	点数
第1形態 	A	a～f	背面の全周辺に細かい整形が施され、左肩に彫刻刀面を刻んだ形態。芹沢が設定した第1形態に相当する。	364
	B	a～f	背面の左側縁と腹面の左側縁に調整が加えられる形態。芹沢が設定した第1形態は背面全周辺に調整が加えられるのが特徴であるが、この形態も全周辺に調整が加えられ、腹面の縁辺の調整も背面同様の急斜度調整であることから、第1形態に含め	5
	C	a～f	背面の右側縁と腹面の右側縁に調整が加えられる形態。Bと同じ理由により、第1形態に含めた。	10
第2形態 	A	a～f	背面の全周辺に細かい整形が施され、基部の腹面にも剥離が加えられる。基部は舌状に整形される場合もある。芹沢が設定した第2形態に相当する。	22
	B	a～f	背面の全周辺と腹面の左側縁に調整が加えられる形態。腹面の基部調整は、左側縁にのみ加えられるが、調整の角度が緩やかで平坦剥離に近いことから第2形態として含めた。	3
	C	a～f	背面の全周辺と腹面の右側縁に調整が加えられる形態。Bと同じ理由により、第2形態に含めた。	4
	D	a～f	背面の両側縁と腹面の基部の一部に調整が加えられる形態。腹面の調整は急斜度であり、他の形態とは若干異なるが基部調整が加えられる点で第2形態に含めた。	9
第3形態 		a～f	縦横の長さがほぼ等しく、栗の実のような形をしている。特に右肩にノッチ をいれ、そこを打面として左肩に彫刻刀面を刻んでいる。芹沢が設定した第3形態に相当する。	4
第4形態 	A	a～f	背面の一部と彫刻刀面打面への調整のみが加えられる形態。	60
	B	a～f	彫刻刀面打面への調整のみが加えられる形態。	57
	C	a～f	無調整で彫刻刀面を刻んでいる形態。	6
	D	a～f	折れ面を打面として彫刻刀面を刻んでいる形態。	7
その他		a～f	破損のため不明	34

a　左肩に彫刻刀面を有する。
b　右肩に彫刻刀面を有する。
c　左右の両肩に彫刻刀面を有する。
d　基部と先端部の左肩、又は基部と先端部の右肩に彫刻刀面を有する形
e　基部の左肩と先端部の右肩、基部の右肩と先端部の左肩に彫刻刀面を有する。
f　3つ以上の彫刻刀面を有する。

第1図版　彫刻刀の二次加工類型

2．荒屋遺跡から出土した彫刻刀の分類

荒屋型彫刻刀の認定基準を明確にするために、具体的な資料によって、その内容を把握する必要がある。荒屋遺跡から出土した彫刻刀626点を施された調整加工の位置から大きく4類型に分類した。その主体となるのが1類（1A類、芹沢の設定した第1形態）で58%を占める（第1図版）。1～3類は荒屋型彫刻刀として捉えることができる。一方、4類（4A、4b類）は周辺加工が認められず、荒屋型彫刻刀の範疇から外れる。また、これら4類型以外に、荒屋型彫刻刀のバリエーションに含まれるものも存在する。例えば、背面左側辺と腹面左側辺に調整が加えられる形態（1b類）が5点存在する。これらには、結果として全周に調整が施されるが、腹面に認められる調整痕も背面と同様に急斜度であることから、1類のバリエーションとしてとらえることができる。こうして1類のバリエーションとして捉えられるものが15点、2類のバリエーションとして捉えられるものが16点存在する。また、全くの無調整で彫刻刀面のみが刻まれるもの（4c、4d類）が13点存在する。

本論では、基本的に芹沢の認定基準に従い、1～3類を荒屋型彫刻刀として扱いたい。また、4類を含めて、荒屋遺跡出土彫刻刀として、その機能について検討する。

3． 荒屋遺跡から出土した彫刻刀の機能

使用痕分析の対象は、荒屋遺跡から出土した彫刻刀174点、彫刻刀スポール890点である。使用した顕微鏡は、落射照明付き金属顕微鏡オリンパスBMHであり、倍率100～400倍、主に200倍で見鏡した。以下に使用痕が確認された資料について記述し、荒屋遺跡出土彫刻刀の機能についてまとめたい。

a. 使用痕が確認された彫刻刀の事例

4105：彫刻刀の彫刻刀面（facet）と腹面の接する縁辺（以下、刃部と呼ぶ）にD1D2タイプの非常に発達した光沢面と直交する線状痕が認められる（第2図版-1）。刃部縁辺に使用による摩滅がみられる。骨・角を削る作業に用いられたと推定される。

7020：刃部腹面側にE2タイプの非常に発達した光沢面と直交する線状痕が認められる（第2図版-2）。彫刻刀面側にも同様の使用痕がみられる。乾燥した皮をなめす作業に用いられたと推定される。

3948：彫刻刀面が2箇所に施された彫刻刀である。それぞれにE2タイプの光沢面と刃部に直交する線状痕が認められる（第4図版-1･2）。その形態から、背面右側に設定された彫刻刀面縁辺を刃部として使用し、刃部再生が繰り返され、彫刻刀が短くなったため、背面左側に彫刻刀面を作出し、乾燥した皮をなめしたと推定される。

4063：上下に彫刻刀面が設けられた彫刻刀である。ともにE2タイプの光沢面と刃部に直交する線状痕が認められる（第4図版-3･4）。片方が彫刻刀の右肩、もう一方が左肩となるが、ともに彫刻刀面と腹面の接する縁辺を刃部として使用されている。乾燥皮をなめしたと推定される。

b. 使用痕が確認された彫刻刀スポールの事例

30015：彫刻刀スポールの背面左の稜線上にE2タイプの光沢面が広がり、一部にD1タイプの光沢面がパッチ状に残る（第2図版-3）。この部分は、彫刻刀のファシットと腹面の接する縁辺であり、彫刻刀の刃部に相当する部分である。2種類の使用痕が重複する事例であり、骨・角を削った後、乾燥皮をなめしたと推定される。

30243：背面左の稜線上にD2Cタイプの光沢面が広がる（第3図版-1）。より内側にはE2タイプの光沢面が認められる。刃部の摩滅を考慮すると、乾燥皮をなめした後、骨・角を削ったと推定される。

30331：背面左の稜線上にE2タイプの光沢面が広がる（第3図版-2）。直交の線状痕が密集し、縁辺は強く摩滅している。乾燥した皮をなめす作業に用いられたと推定される。

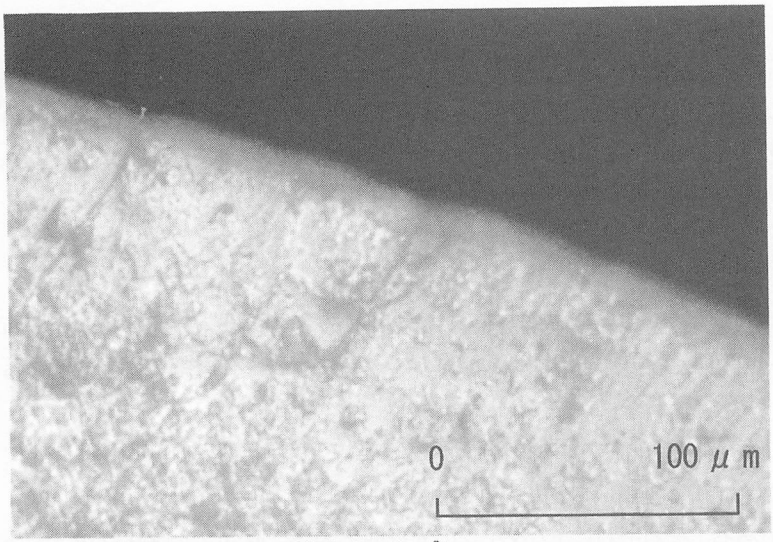
30372：背面左の稜線上にE2タイプの光沢面が広がるが、縁辺の摩滅は認められない（第3図版-3）。線状痕は縁辺に対して直交する。彫刻刀のファシット側に相当する部分には、光沢面が全く認められない。従って、乾燥皮をなめした後、彫刻刀スポールを剥離することにより刃部再生を行ったため、刃部縁辺付近の光沢と摩滅が除去されたと推定される。

30002：背面左の稜線より左側にはE2タイプの光沢面が広がる（第4図版-5）。線状痕は刃部に対して直交する。彫刻刀のファシット側に相当する部分には光沢面が認められない（第4図版-6）。従って、乾燥皮をなめした後、刃部再生され、刃部縁辺の使用痕が除去されたと推定される。

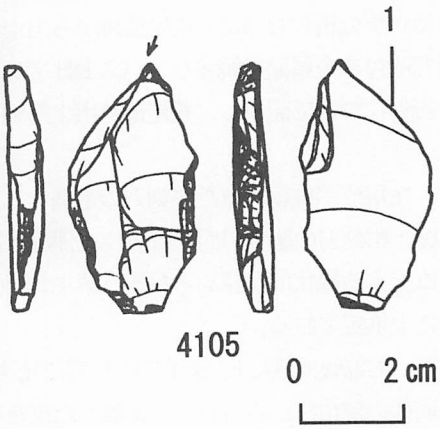
30151：背面左の稜線より左側にはD2Cタイプの光沢面が広がるが、彫刻刀のファシットに相当する部分には連続した剥離痕があり、光沢面は認められない（第4図版-7･8）。従って、骨・角を削った後、ファシット側に二次加工が施され、使用痕が除去されたと推定される。

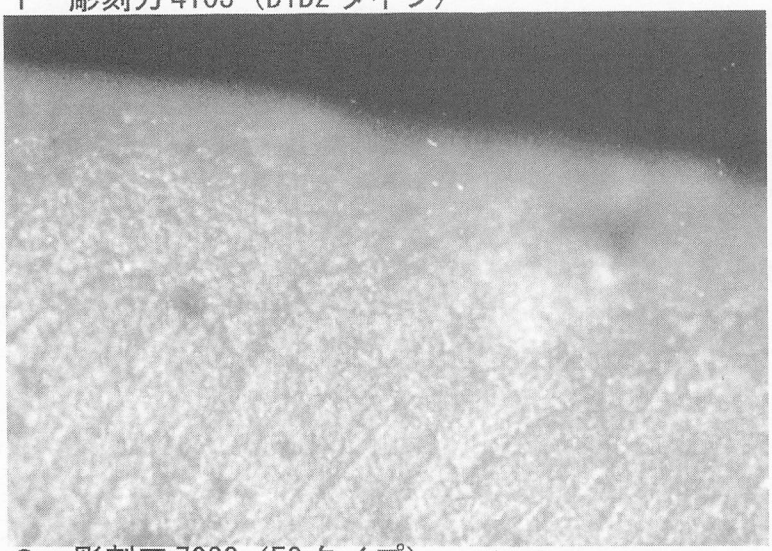
30316：背面左の稜線上にE2タイプとD1D2タイプの光沢面が広がる（第4図版-9）。彫刻刀のファシットに相当する部分には、D1タイプの光沢面が縁辺の凸部にパッチ状に認められる。従って、乾燥皮をなめした後、骨・角を削ったと推定される。

30562：背面左の稜線上にD1タイプの光沢面が広がる（第4図版-11）。彫刻刀のファシットに相当する部分には連続的な剥離痕が認められるが、この剥離面の間の稜線上にはD1タイプの光沢面が認められる（第4図版-12）。骨・角

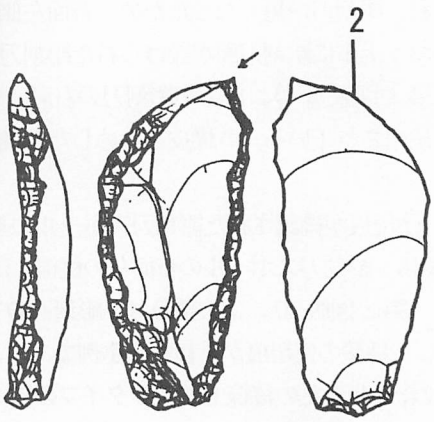


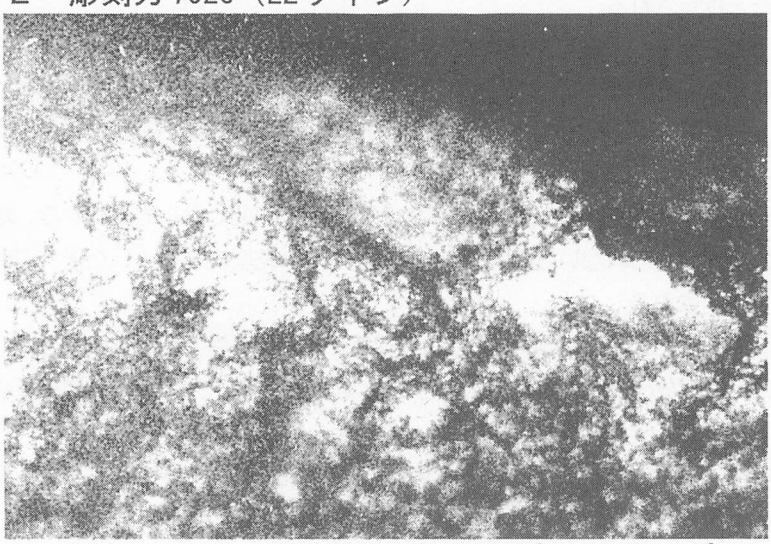
1　彫刻刀 4105（D1D2 タイプ）



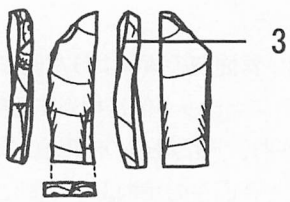


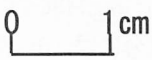
2　彫刻刀 7020（E2 タイプ）



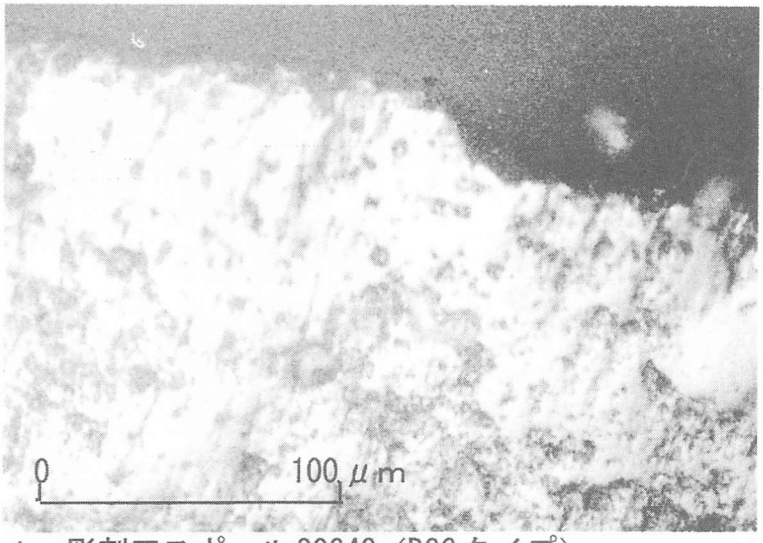


3　彫刻刀スポール 30015（D1 タイプ→ E2 タイプ）

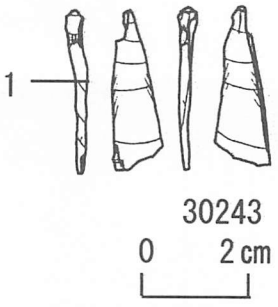


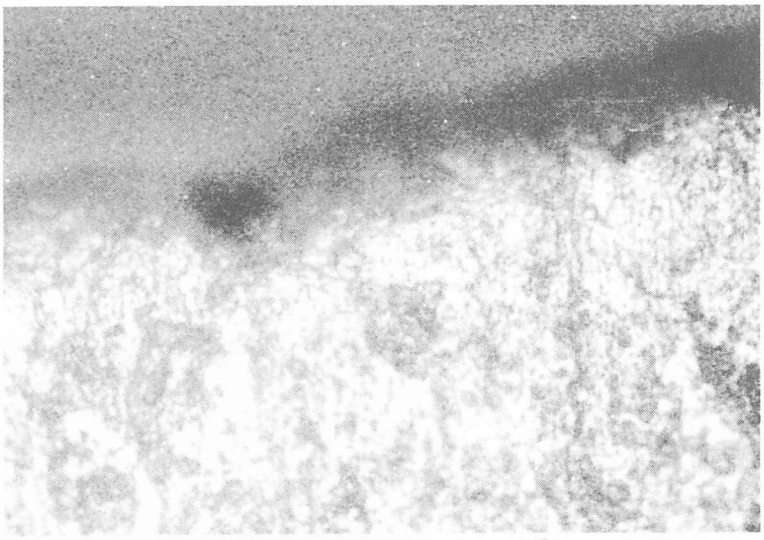


第２図版　彫刻刀および彫刻刀スポールに認められた使用痕

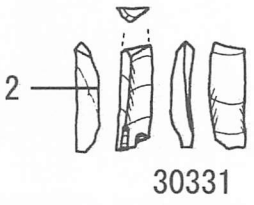


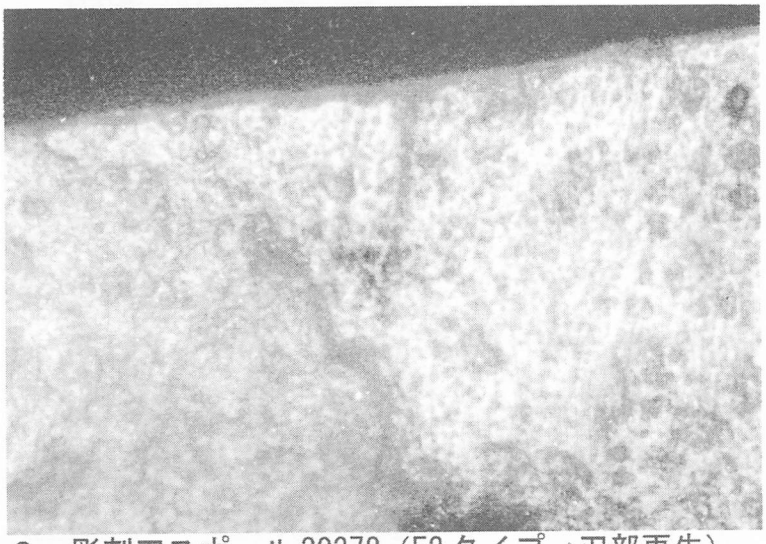
1　彫刻刀スポール 30243（D2C タイプ）



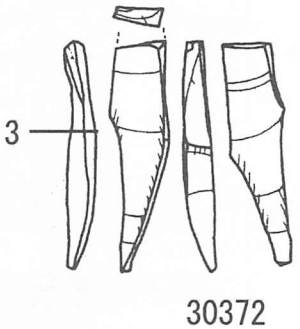


2　彫刻刀スポール 30331（E2 タイプ）

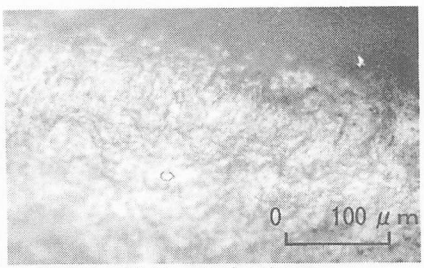




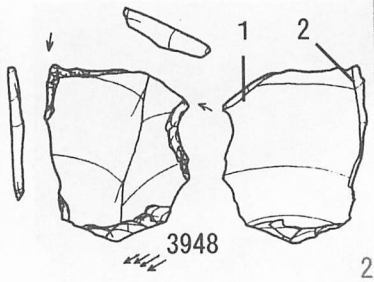
3　彫刻刀スポール 30372（E2 タイプ→刃部再生）



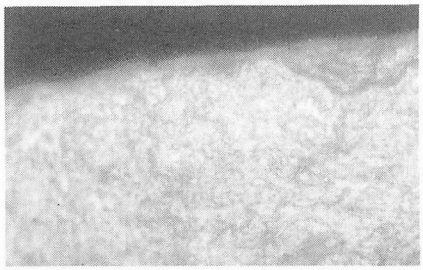
第３図版　彫刻刀スポールに認められた使用痕



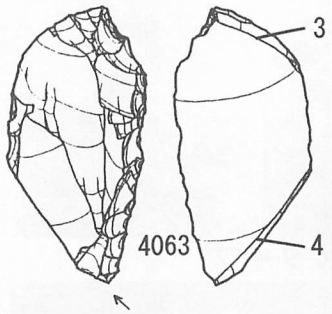
1 彫刻刀 3948（E2ﾀｲﾌﾟ）

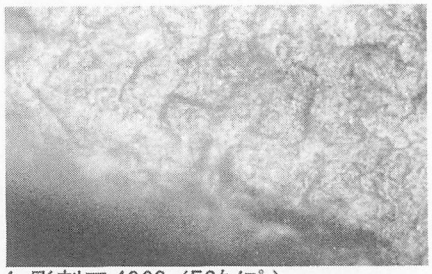


2 彫刻刀 3948（E2ﾀｲﾌﾟ）

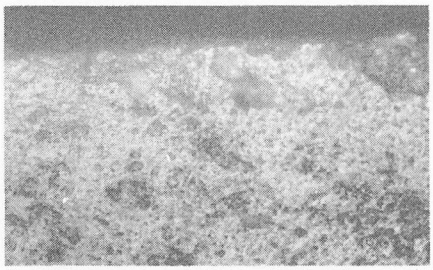


3 彫刻刀 4063（E2ﾀｲﾌﾟ）

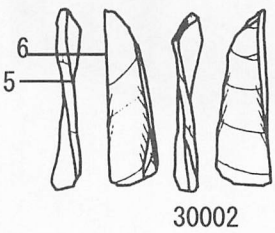


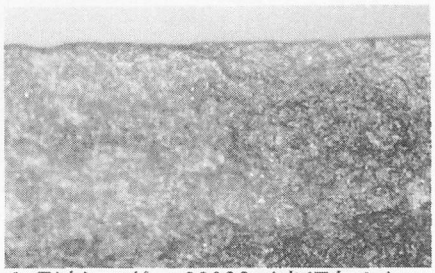


4 彫刻刀 4063（E2ﾀｲﾌﾟ）

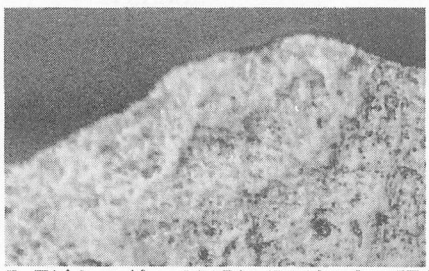


5 彫刻刀ｽﾎﾟｰﾙ30002（E2ﾀｲﾌﾟ→刃部再生）

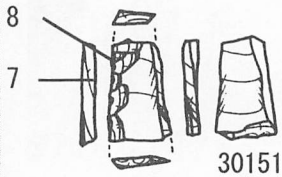


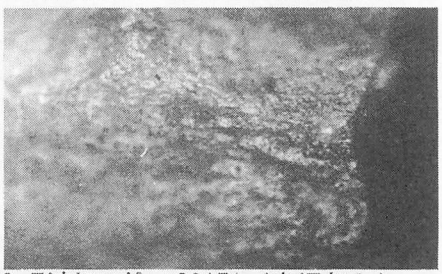


6 彫刻刀ｽﾎﾟｰﾙ30002（光沢無し）

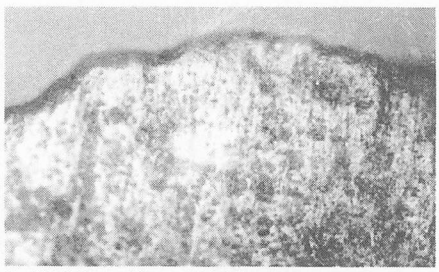


7 彫刻刀ｽﾎﾟｰﾙ30151（D2Cﾀｲﾌﾟ→調整②）

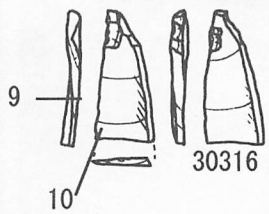


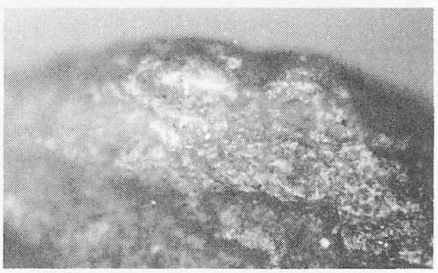


8 彫刻刀ｽﾎﾟｰﾙ30151（光沢無し）

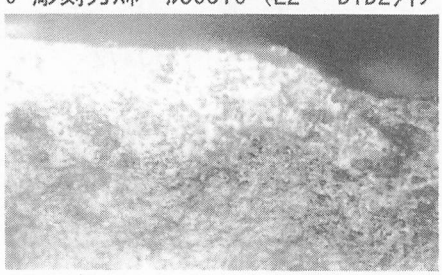


9 彫刻刀ｽﾎﾟｰﾙ30316（E2→D1D2ﾀｲﾌﾟ）

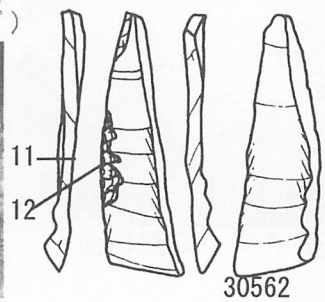




10 彫刻刀ｽﾎﾟｰﾙ30316（D1ﾀｲﾌﾟ）



11 彫刻刀ｽﾎﾟｰﾙ30562（D1ﾀｲﾌﾟ）



12 彫刻刀ｽﾎﾟｰﾙ30562（D1ﾀｲﾌﾟ）

第4図版　彫刻刀および彫刻刀ｽﾎﾟｰﾙの使用痕

					彫刻刀		彫刻刀スポール	
機能類型	骨・角を削る	皮(乾燥)をなめす	刃部再生	彫刻刀面調整②	点数	%	点数	%
Ⅰ	○				18	10.3	177	19.9
Ⅱ		○			23	13.2	21	2.4
Ⅲ		○	○		8	4.6	12	1.3
Ⅳ	○		○		2	1.1	11	1.2
Ⅴ	被加工物不明				22	12.6	85	9.6
Ⅵ	○	○			5	2.9	16	1.8
Ⅶ	○	○	○		3	1.7	17	1.9
Ⅷ	○			○	0	0.0	15	1.7
Ⅸ		○		○	0	0.0	9	1.0
Ⅹ	○	○	○	○	0	0.0	1	0.1
11	○		○	○	0	0.0	2	0.2
その他					0	0.0	6	0.7
なし					93	53.4	518	58.2
総計					174	100	890	100

第1表　彫刻刀および彫刻刀スポールの機能類型(○印は使用痕の認められるもの)

を削った作業が行なわれたと推定されるが、この剥離痕が二次加工であるが、使用による刃こぼれであるかは、判断が難しい。

c. 荒屋遺跡における彫刻刀の機能（被加工物と操作）

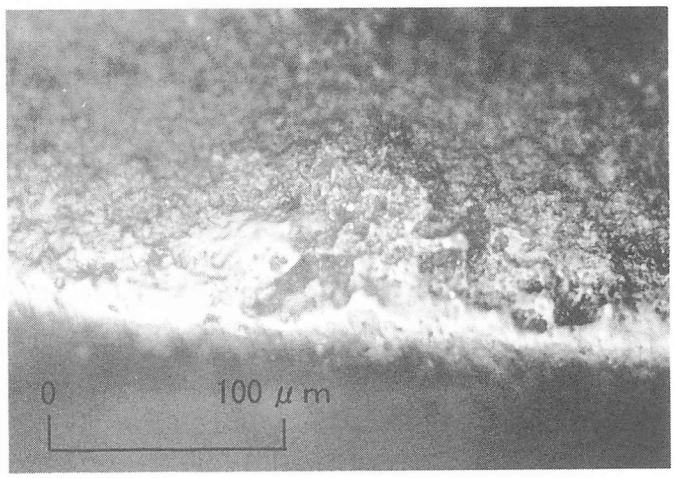
彫刻刀や彫刻刀スポールに認められたポリッシュは、複数の被加工物に対する使用や刃部再生などにより、複雑な様相となる。荒屋遺跡から出土した彫刻刀、彫刻刀スポールに認められたこれらの使用痕を分類すると、11 類型となる（第1表）。

ポリッシュタイプを同定できた彫刻刀は、観察資料 174 点中 81 点（46.6%）である。彫刻刀の腹面とファシットの接する縁辺を利用した作業がほとんどであった。機能類型の中で最も点数が多いのが 2 類（13.2%）、次いで 5 類（12.6%）、1 類（10.3%点）、3 類（4.6%）となる。つまり、「乾燥皮をなめす」、次に「骨・角を削る」作業が多い。刃部再生されているが、前段階の使用痕が残っているものは 13 点、ポリッシュの重複が認められるものは 8 点確認された。

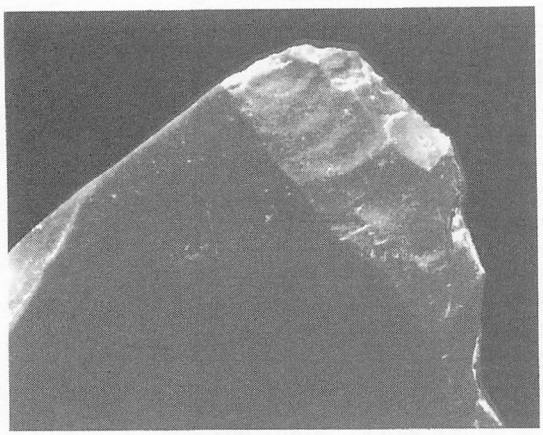
ポリッシュタイプを判定できた彫刻刀スポールは、観察資料 890 点中 382 点（41.8%）である。使用部位は彫刻刀と同様で、彫刻刀面と彫刻刀腹面のなす縁辺がほとんどであった。推定された作業の中で最も多いのが、1 類（19.9%）である。次いで、5 類（9.6%）、2 類（2.4%）、7 類（1.9%）となる。彫刻刀の使用痕に比べると、骨・角を削る作業に用いられる割合が高い。また、被加工物が異なる作業に用いられているものや、刃部再生により光沢面が切られているものなどが多く、複雑な様相を呈する。基本的には、骨・角（水漬け鹿角）削りと乾燥皮なめしの 2 つの作業に用いられたといえる。

d. 彫刻刀の使用度

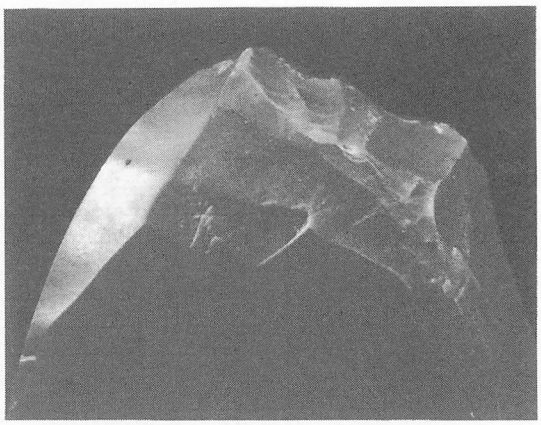
荒屋遺跡から出土した彫刻刀と彫刻刀スポールのポリッシュは、非常に発達しているものが多い。特に発達しているものでは、彫刻刀の刃部から腹面にかけて光沢面が広く分布している。第 5 図版は、複製石器（彫刻刀）を用いて 210 分間（約 42,000 ストローク）鹿角を削って生じたポリッシュである。実際の出土資料にみられる使用痕は、非常に発達しており、使用実験においてかなり長時間使用しても、出土資料にみられる程の光沢面が発達する例はなかなか見受



第５図版　水漬け鹿角削り２１０分　(42,000 回)



Ⅱ類（打点が残る）



Ⅲ類（打点部分が切られる）

第6図版　彫刻刀面調整　①

けられない。刃角や操作方法とも関係する可能性が高く、今後、厳密な実験プログラムに則って解明する必要がある。

4．彫刻刀の形態と機能の関係

a. 刃部再生

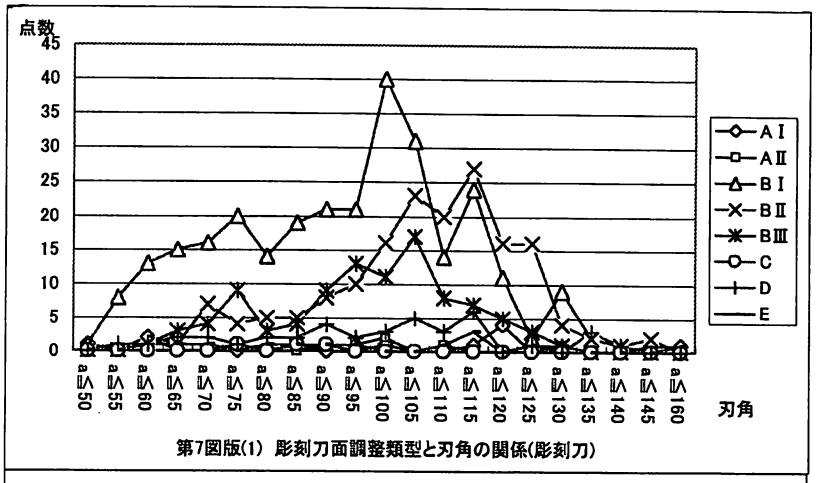
荒屋遺跡第2･3次調査出土彫刻刀および彫刻刀スポールの分析結果に基づき、彫刻刀の刃部再生について簡単にまとめたい。彫刻刀面の調整には、彫刻刀面から彫刻刀背面への調整（調整①）と、彫刻刀腹面から彫刻刀面への調整（調整②）の2種類が認められる。この2種類を組み合わせると、彫刻刀面調整を類型化できる。

調整①は、彫刻刀背面に調整①による打点が残るもの（その彫刻刀面を調整したもの、**Ⅱ類**、第6図版-1）と残らないもの（その彫刻刀面より前の彫刻刀面を調整したもの、**Ⅲ類**、第6図版-2）、調整①のないもの（**Ⅰ類**）に分類される。

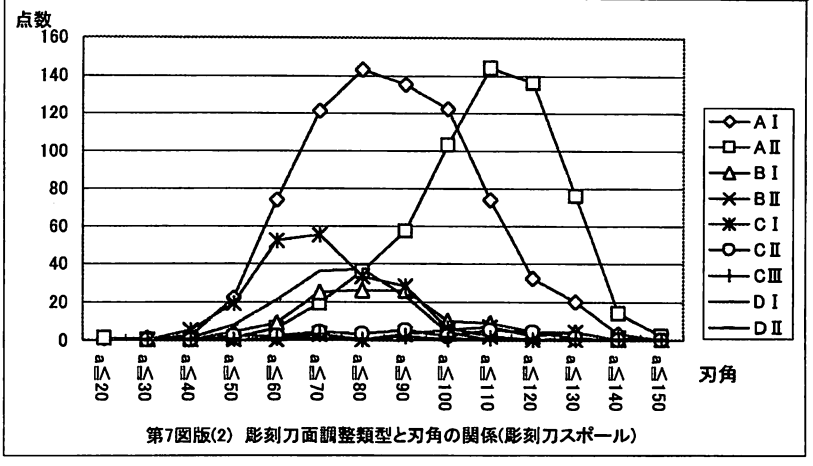
調整②には、**A類**（彫刻刀スポールのみの類型、調整②が認められないもの）、**B類**（腹面から背面への調整後に彫刻刀面が作出され、調整②の痕跡を残すもの）、**C類**（調整②が彫刻刀スポール背面全体にわたって施され、彫刻刀面が残らないもの）、**D類**（彫刻刀面形成後に調整②が施されたもの）、**E類**（彫刻刀面形成後に調整②がなされて、さらの彫刻刀面が作出されたもの）の5類型に分類される。調整①と②を組み合わせると12通り（AⅠ～EⅢ）の彫刻刀面調整類型となる。

彫刻刀と彫刻刀スポールでそれらの調整加工の出現率を比較すると以下のようになる。彫刻刀では、BⅠ類が主体であり（41.6%）、次にBⅡ類（24.6%）、BⅢ類（14.4%）と続く。これらBⅠ～Ⅲ類で8割を占める。調整①の出現率は30%程度である。一方、調整②の出現率は10%に満たない。これに対して、彫刻刀スポールでは、AⅠ類（38%）とAⅡ類（30.2%）が主体であり、次いで、CⅠ類（10.2%）、DⅠ類（6.6%）と続く。調整①の出現率は30%強であり、彫刻刀より若干高い。一方、調整②の出現率は20%程度であり、彫刻刀での出現率の2倍である。これらの点から、調整①は彫刻刀スポールを剥離する直前に加えられる調整というよりも、彫刻刀の製作時にすでに施されていたと考えられる。それに対して、調整②は、彫刻刀スポールにおいてその出現率が倍増することから、彫刻刀スポール作出を契機になされる割合が高いといえる。

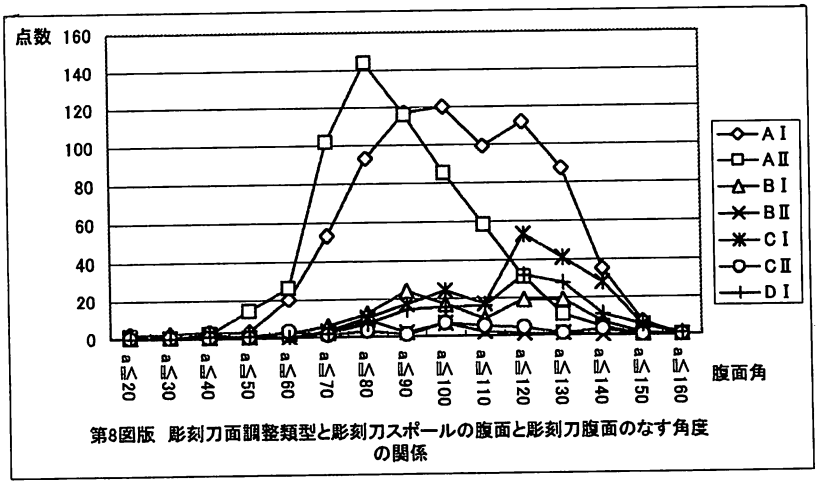
この2種の調整は全ての彫刻刀になされるのではなく、ある傾向をもって施される。彫刻刀面と彫刻刀腹面のなす角を「刃角」と呼ぶ。刃角と先に述べた調整①、②には一定の関係が窺える。第7,8図に刃角と彫刻刀面調整類型の関係を示した。彫刻刀では、調整①、②ともになされないBⅠ類の刃角のピークが100°であるのに対し、調整①の認められるBⅡ類では115°をピークとする。また、調整①のなされた後に彫刻刀面が作出されたBⅢ類の刃角は、BⅠ類に近づき105°をピークとする。彫刻刀スポールでは、調整①、②ともになされないAⅠ類は、80～90°にピークがある。調整①のなされるAⅡ類は110～120°にピークが認められる。一方、調整②の認められるCⅠ類は60～70°がピークとなる。彫刻刀面調整の傾向として、刃角が鈍角のときに調整①がなされ、刃角が鋭角のときは調整②が施



第7図版(1) 彫刻刀面調整類型と刃角の関係(彫刻刀)



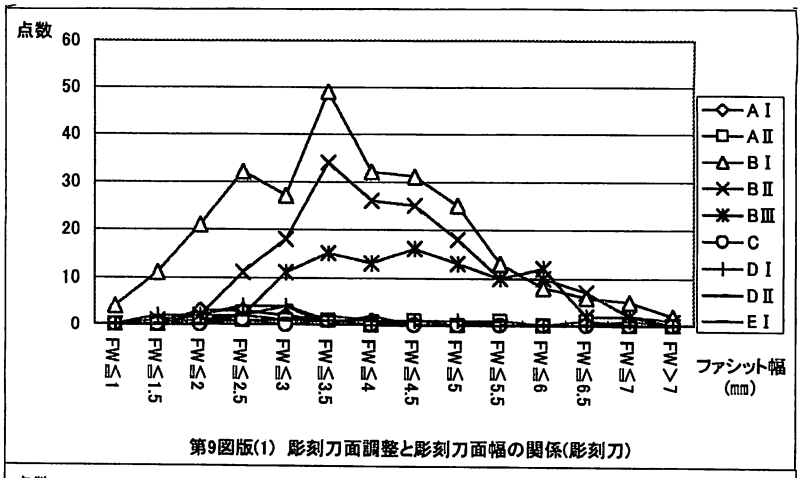
第7図版(2) 彫刻刀面調整類型と刃角の関係(彫刻刀スポール)



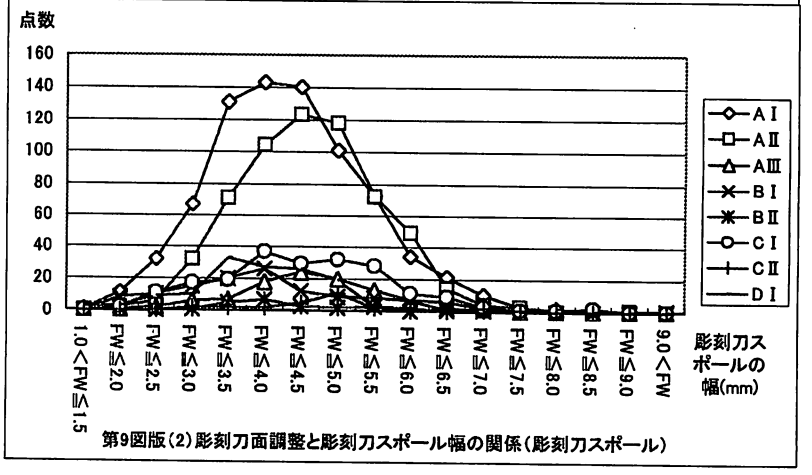
第8図版 彫刻刀面調整類型と彫刻刀スポールの腹面と彫刻刀腹面のなす角度の関係

されるといえよう。

次に、この2種の彫刻刀面調整と彫刻刀面の幅の関係をみる(第9図)。彫刻刀では、AⅠ類とAⅡ類はともに幅3.5㎜が最も多いが、平均値や割合では調整①のなされるAⅡ類の方が彫刻刀面の幅が広くなる。一方、調整②の認められるDⅠ類などは2.5～3㎜が多くなる。彫刻刀スポールでは、調整①のなされるAⅡの方が、調整①のないAⅠよりも幅広となる傾向にある。一方、調整②の認められるDⅠ類などはより狭い彫刻刀面のときになされる割合が高いといえよう。



第9図版(1) 彫刻刀面調整と彫刻刀面幅の関係(彫刻刀)



第9図版(2)彫刻刀面調整と彫刻刀スポール幅の関係(彫刻刀スポール)

以上から、調整①と②は彫刻刀刃部の形態に応じて適用され、その性格から、両者が同時になされることが少ない。しかし、実際の彫刻刀面、あるいは彫刻刀スポールには捩れがみられることから、同一の彫刻刀面の異なった場所に調整①、②がそれぞれ施される例も少数ながら認められる。

彫刻刀面調整が機能的役割をもっていたことについては、使用痕分析事例から推察できる。彫刻刀スポール30385は、刃部が鈍角であり、彫刻刀面調整①が施される。刃部腹面側を中心にD1D2タイプの光沢面が認められるが、この彫刻刀面調整①の剥離痕上にも、D1タイプの光沢面が確認できる。従って、この調整が、彫刻刀の使用後、刃部再生前になされるのではないことが窺える。この点は、彫刻刀と彫刻刀スポールの形態的特徴の比較から得られた推論に合致する。

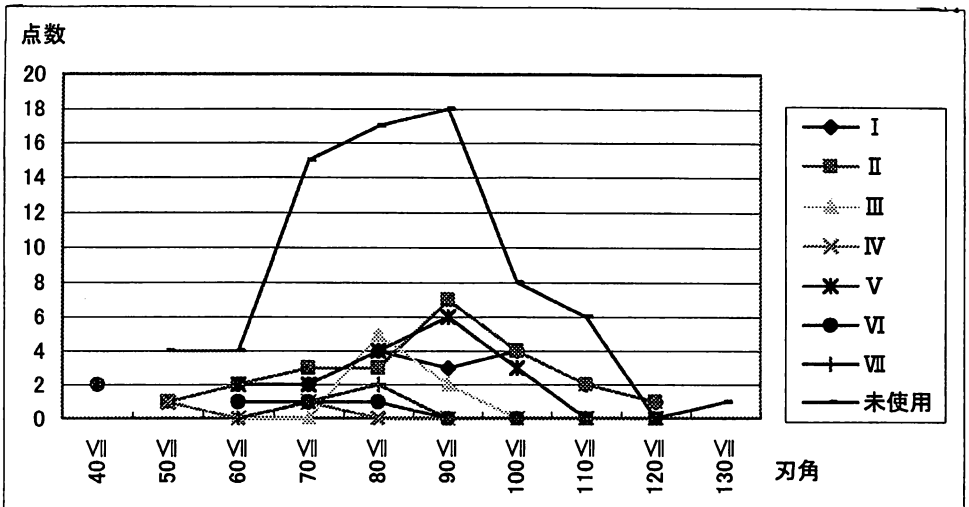
b. 刃角

彫刻刀の刃部再生は、必ずしも使用に伴う刃部の損耗を契機とする訳ではないことが、使用痕分析の結果から、明らかとなった。それでは、刃部の作出と再生において、製作者にとって求められる刃部の形態とは如何なるものなのだろうか。使用痕が確認された刃部を望ましい刃部であったと仮定して考えてみたい。

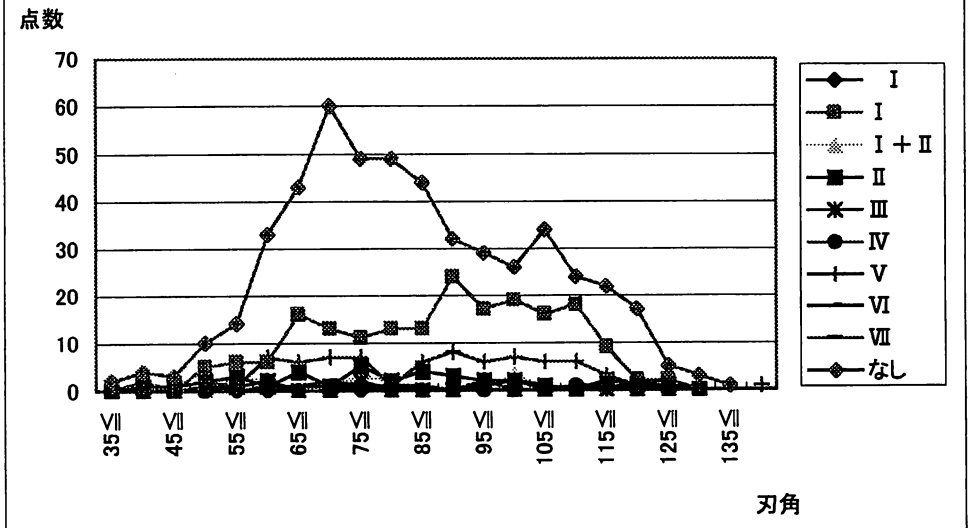
彫刻刀では、使用痕が認められる刃部の角度（刃角）は、100°をピークとする（第10図）。一方、使用痕が認められない彫刻刀の刃角は、95°が最も多い。両者には、大きな相違は認められない。被加工物別に考えても、骨・角を加工した1類と乾燥皮を加工した2類は、ともに100～110°の刃角をもつ彫刻刀に最も多くみられる。

彫刻刀スポールでは、使用痕のある刃部は、90～100°をピークに、60～110までに多い。使用痕の認められない彫刻刀の刃部は、70°のものが最も多い。被加工物別にみても、60～120°の刃部が一様に使用されている。

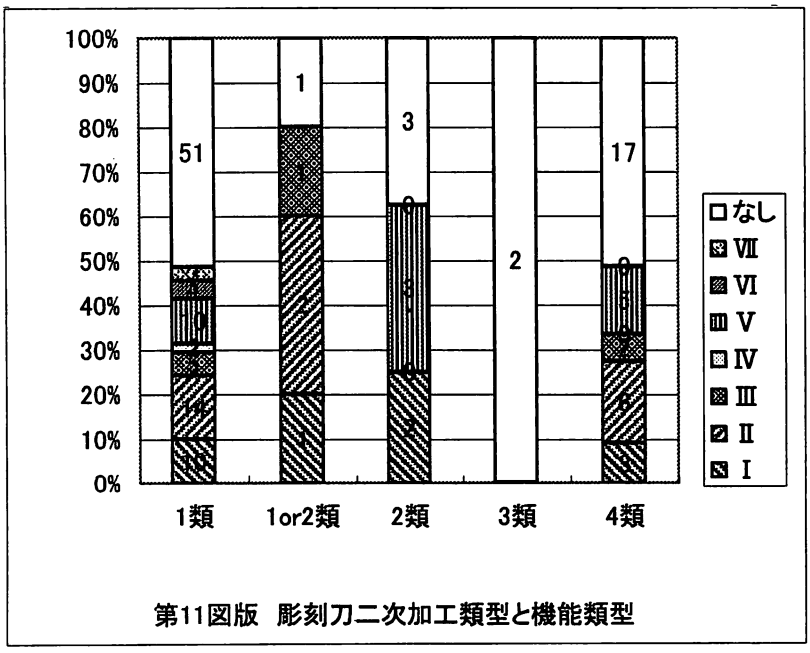
観察結果から、刃角が鋭角のとき、使用せずに再び刃部を作出することが多いものの、60～120°程の刃角を有するものは、使用可能であったと結論付けることができる。ただし、刃部形態を決定する属性は、刃角だけではない。刃部の長さや、平面形態（ファシットが抜けきっておらず、ステップフレイキングとなった場合など）等の諸要素について検討する必要がある。



第10図版(1) 彫刻刀の刃角と機能類型の関係



第10図版(2) 彫刻刀スポールの刃角と機能類型の関係



第11図版 彫刻刀二次加工類型と機能類型

c.彫刻刀の調整加工と機能の関係

彫刻刀に施される二次加工によって、彫刻刀を大きく1～4類に分けることができる。1～3類は、それぞれ芹沢の設定した第1～3形態に対応する。1類は、主体となる荒屋型彫刻刀である。骨・角を削る作業と乾燥皮をなめす作業に用いられる割合がほぼ等しい（第11図版）。2類は、基部を作り出した彫刻刀である。乾燥皮をなめす作用以外は、微弱な光沢が認められるのみである。3類は、栗の実のような形をした彫刻刀であり、使用痕は確認されなかった。4類は周辺加工のない彫刻刀である。骨・角を削る作業が乾燥皮なめしよりも多い。1類に比べると、機能類型が単調であるが、ほぼ同じ割合といえる。

荒屋遺跡から出土した彫刻刀は、形態が多様であるが、その機能はほぼ共通する。彫刻刀2類や3類は分析資料数が少ないため、判断が困難であるが、1類や4類とは、確認された機能類型の内訳が異なっている。ただし、荒屋型彫刻刀の主体である1類の機能の枠内でとらえることも可能であり、他の彫刻刀と異なる機能を有した訳ではない。

6．着柄の可能性

彫刻刀の使用痕分析では、刃部のみならず、石器の表面全体の顕微鏡観察を行っている。観察結果によると、彫刻刀には明瞭な着柄痕が認められなかった。研究史を振り返ると、彫刻刀の着柄を推察する論稿がみられたが、その中には、彫刻刀の基部に棒状の柄を彫刻刀の器軸の延長線上に装着する方法を推定したものがある（山原1997）。これは、彫刻刀の基部加工を根拠としている。本論での使用痕分析の結果から推定された操作法は、被加工物に対して刃部を直交するように当てて「削る」あるいは「なめす」作業である。この作業を行う場合、刃部に対して直交する力を加え、作業を行う。つまり、彫刻刀の右側辺の方から力を加えることになる。上記の装着法では、作業時に刃部に力が加わりにくい。基部加工のある彫刻刀ではないが、横刃の彫刻刀もあり、着柄した場合には、操作法が異ならざるをえない。また、彫刻刀には、刃部再生を受け、器軸に対する彫刻刀面の角度が変化するものや彫刻刀の基部側に彫刻刀面を作出した資料も存在する。これらの点を考慮すると、彫刻刀の着柄については、慎重な態度をとりたい。彫刻刀の周辺加工から、着柄を想定することもできるが、手持ちで使う場合にも、鋭利な縁辺を残さず、刃潰しをする必要が生じる。基部の作り出しのある彫刻刀のみが着柄された可能性もあるが、使用痕分析の結果からは、他の彫刻刀の機能的範疇をはずれる事例は認められなかったため、着柄に関しては慎重に検討する必要があろう。

7．展望

荒屋型彫刻刀の機能について、調整技術や形態、刃部再生も含めて検討した。荒屋型彫刻刀は、型式として極めてまとまりを有するものの、石器群全体からみれば、荒屋型に含まれない彫刻刀を含むなど、バリエーションを有する。機能に関しても、操作は刃部に対して直交方向の作業（削る・なめす）であるが、被加工物が骨・角と皮（主に乾燥）の2種類が認められた。刃部再生に関しては、2種類の彫刻刀面調整が、刃角を中心とした刃部形態と明瞭な関係が認められ、きわめてシステマティックな技術が確立していることが窺える。ただし、同じ刃部にこの2種類の彫刻刀面調整がなされる場合もあり、固定的なものではないといえる。刃角と被加工物には有意な相関は見出せず、ともに60～120°ほどの刃角の場合、骨・角や皮といった異なる被加工物に対して使用されている。このように考えると、荒屋遺跡における彫刻刀の製作、使用といった行動は画一的なものではなく、様々な状況下で柔軟に対応されていたと推定される。本論では触れていないが、荒屋遺跡出土のエンド・スクレイパーは、使用痕の判定されたものでは全て皮なめしに使用されており、機能的に固定化された道具と推定された（芹沢・須藤編　印刷中）。既に述べたように、彫刻刀の機能推定から、被加工物として骨・角や皮が大量に遺跡内にもたらされた可能性が高いと考えられる。こうした大量な動物資源の獲得と、システマティックな刃部再生技術、骨・角と皮という異なる被加工物の加工に使用できるという彫刻刀の機能的柔軟性が、荒屋遺跡から出土した彫刻刀の多さに反映されていると考えられる。

これまでに幾つかの遺跡を対象として荒屋型彫刻刀の使用痕分析が行われている。各遺跡とも皮あるいは骨・角を掻きとるような作業に使用されている。基本的には哺乳動物から得られた資源を加工したと考えてよいだろう。ただ

し、研究史を振り返ると、石器群の分布や遺跡立地を踏まえてサケ・マス類の内水面漁労を想定することが多かったようである（橋本1989、佐藤1992、桜井1993、堤1997など）。荒屋型彫刻刀の機能からみれば、哺乳動物を対象とした狩猟を中心とした生業活動を行っていたと考えるのが妥当だろう。荒屋遺跡の場合、哺乳動物を対象とした狩猟と、それによって得られた資源を利用した骨角器の製作、それを使った狩猟活動が連鎖的に行えたことから、比較的長期間にわたる居住が可能であったと推定する。

本論では、荒屋型彫刻刀の機能に焦点をあてたため、共伴する細石刃やその他の石器との関連について述べることができなかった。水村が指摘したように、「組み合わせ道具としての細石刃と骨角器、彫刻刀の発展の問題」について検討する必要がある。荒屋遺跡は、骨角器を製作した可能性のある彫刻刀が多量に出土しているうえ、組み合わせ道具に関連すると想定される細石刃が多数出土している。この細石刃には二次加工がなされ、骨角器への着装との関係が窺える。今後は、石器群全体を評価し、その石器群によってどのような活動がなし得たかについて探っていく必要があろう。

謝辞

小稿を執筆するにあたり、芹沢長介東北大学名誉教授には荒屋遺跡出土資料の分析結果の公表に快諾いただくとともに、荒屋遺跡の調査・研究について多大なる御教示をいただいた。東北大学大学院文学研究科須藤隆教授には荒屋遺跡発掘調査報告書の作成を通して、様々な御指導をいただいた。阿子島香教授には使用痕研究の基礎から分析方法にわたって多くの御指導をいただいた。東北大学総合学術博物館柳田俊雄教授には旧石器時代研究の方法論に関して様々な御教示をいただいた。また、伊藤典子氏、池谷考史氏、関敦司氏には、荒屋遺跡の使用痕分析や実験研究において多くのアドバイスをいただいた。西井亨氏、神田和彦氏には同遺跡の分析を通して、多くの議論に応じていただいた。あわせて深謝致します。

註

第1、7～11図版および第1表は、現在印刷中の報告書（芹沢・須藤編印刷中）に掲載した図表と同じもの、あるいは同じデータに基づき作成したものである。

引用文献　（刊行年順）

芹沢長介　1959　「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について（予報）」　『第四紀研究』1-5 pp.174～181
芹沢長介　1974　『古代史発掘Ⅰ　最古の狩人たち』
山中一郎　1975　「彫器研究法」『史林』58-3　pp.1-26
水村孝行　1977　「荒屋型彫刻器について」『埼玉考古』第16号　pp.15-32
梶原　洋　1982b　「石器の使用痕分析」『東北大学文学部考古学研究室考古学資料集第4冊　モサンル』pp.11-15
山中一郎　1982　「荒屋遺跡出土の彫器－形式学的彫器研究の試み－」『考古学論考』pp.5-40
綿貫俊一・堤隆　1987　「荒屋遺跡の細石刃文化資料」『長野県考古学会誌』　pp.1-20
橋本勝雄　1989　「東日本の細石刃文化」『考古学ジャーナル』306　pp.12-21
水村孝行　1991　「彫刻器の基礎的研究（一）」『埼玉考古学論集』　pp.113-125
御堂島正　1991　「中ッ原第5遺跡B地点出土黒曜石製石器の使用痕分析」　『中ツ原第5遺跡B地点の研究』pp.116-126
佐藤宏之　1992　「北方系削片系細石刃石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』29　pp.55-83
桜井準也　1993　「細石刃文化遺跡と河川次数」『細石刃文化研究の新たなる展開』pp.252-266
竹岡俊樹　1996a　「彫刻刀形石器の分析（上）－『荒屋型・神山型・上ゲ屋型彫器』の再検討－」　『古代文化』47 pp.33～42
竹岡俊樹　1996b　「彫刻刀形石器の分析（下）－『荒屋型・神山型・上ゲ屋型彫器』の再検討－」　『古代文化』48 pp.25～38
堤　隆　1997　「荒屋型彫刻刀形石器の機能推定－埼玉県白草遺跡の石器使用痕分析から－」『旧石器考古学』54 pp.17～36
山原敏朗　1997　「彫器の形態・技術・機能－暁遺跡における2種類の彫器の分析視点から－」『先史考古学論集』6 PP.1-30

伊藤典子　2002　「彫刻刀形石器の使用痕分析－福島県学壇遺跡群出土石器を中心として－」　『石器使用痕研究会会報』2　pp.4-5
山科　哲　2002　「荒屋型彫器の刃部再生」『駿台史学』115　pp.27-56
鹿又喜隆　2002　「重複する使用痕の実験研究－出土資料による分析方法の再構築にむけて－」　『文化』66-1・2　pp.57-76
芹沢長介・須藤隆編　『荒屋遺跡第2・3次発掘調査報告書』印刷中

いわゆる荒屋型彫器の形態的検討

－　範疇の検討と地域性の把握　－

加藤　学

1　はじめに

1957年、新潟県荒屋遺跡を発掘調査した芹沢長介氏は、出土資料をもとに「荒屋形彫刻刀」を設定した（芹沢1958）。それ以後、芹沢氏はその範疇を数回にわたり示しており、また、何人かの研究者がその内容について検討してきた。その結果、現在では特徴ある石器として認識されている。しかし、細部の条件については検討すべき課題もあるとされている（山中1982など）。

このような状況にあるものの、荒屋型彫器を体系的に整理・検討した事例は意外にも数少ない。一方、出土例の増加に伴い、範疇に含めるべきか否か判断に迷う個性的な形態の存在が明らかになってきている（図2）。特に、標識遺跡である荒屋遺跡の資料においては、第2・3次調査の概要報告（芹沢ほか1990）や種々の資料紹介（中村1961、綿貫・堤1987、立木1988、美安1995、竹岡1996、山本1998、菅沼1999、徳沢1999、山本・安部2002）から豊かなバラエティーの存在を認めることができる。また、地域間に認められる相違も把握されつつあり、山原敏郎氏は荒屋遺跡の荒屋型彫器と北海道の彫器の相違点を指摘した上で、一括して扱うことに慎重な姿勢を示している（山原1997）。こういった状況を鑑みれば、まずは荒屋型彫器の実態を把握することが必要と考えられよう。そこで、本稿では石器を素材・加工・形の3つの視点（織笠1984ｂ）から検討し、実態を把握することとしたい。

なお、本稿は1998年1月17日に開催された新潟考古学談話会の発表に基づいていることを付記しておく。成果の一部については公表済みである（加藤学1999）が、その後の新資料も含めて所見を加えていきたい。

2　研究史

(1)　荒屋形彫器の設定と3つの形態

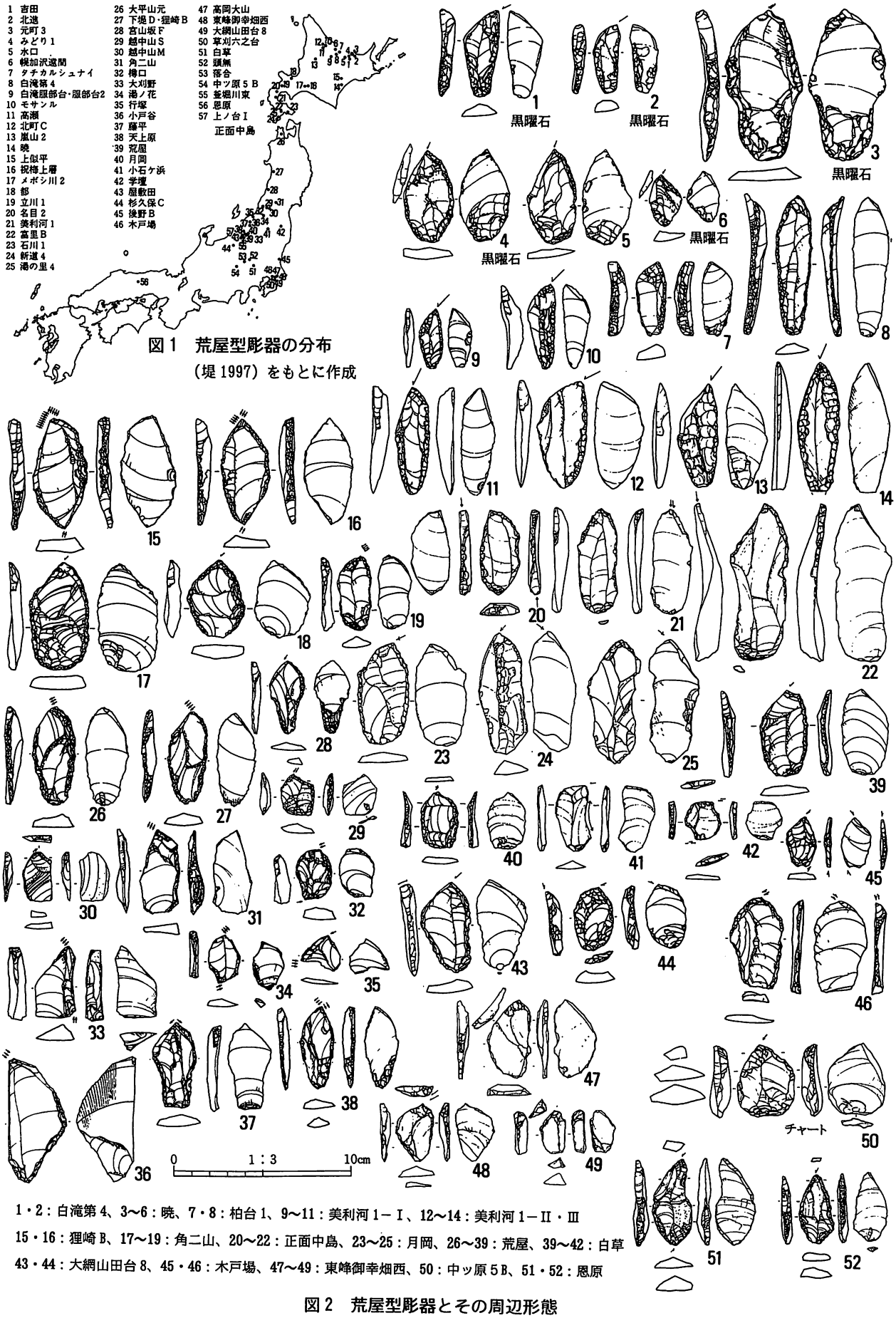
1957年4月に実施された荒屋遺跡の発掘調査成果は、1958年7月『ミクロリス』誌上でいち早く公表された。報告した鈴木重美氏は、出土した多数の彫器について次のように詳述している。

「非常に多く出土したグレイヴァがある。恐らく、日本でこれほど多く出土した類例は、ないであろう。夥ただしい量だ。ざっと数えても300個は下るまい。特徴としてグレイヴァ全体にきれいな調整が加えられていること。刻面の近くが凹んでアングルグレイヴァである点、柄でも付けて使ったかと思われる下の方が両面加工されているもの。以上の様な特徴がある。その他、両端に刻面のあるもの、両側に刻面があるグレイヴァが見られた。大きさは、長さ4cm、巾2cm位が普通。」（鈴木1958）

鈴木氏の記載には、荒屋遺跡から出土した彫器の実態が詳細かつ的確に表現されている。この特徴的な製作過程と形態をもつ彫器に対し、芹沢長介氏は「荒屋形彫刻刀」と命名した。1958年11月『貝塚』誌上において「やや縦に長い剥片を用いて、両側をまず片面加工の尖頭器のように仕上げたうえ、左肩に彫刻刀面をつくるのが通例である。主要剥離面の基部側に、こまかい調整痕を残す例も少なくない。」と定義している（芹沢1958）。そして、翌年6月に刊行された『世界考古学大系1』においては、「荒屋型」と表記している（芹沢1959ａ）。「荒屋形」設定の背景には、一型式と認識しようとした意図が見受けられよう。そして、同年9月には『第四紀研究』誌上で、「荒屋形彫刻刀」が北海道から中部地方までの細石刃石器群に加わるとし、一型式として存立するであろうことを予察している。さらに、「荒屋形彫刻刀」を次に示す3形態に分類した（芹沢1959ｂ、括弧内筆者加筆）。

「第一の形態は、背面（裏面）に加工痕なく、正面（表面）の全周辺にこまかい整形をほどこしたのち、左肩に

図1　荒屋型彫器の分布
（堤1997）をもとに作成



1・2：白滝第4、3～6：暁、7・8：柏台1、9～11：美利河1－Ⅰ、12～14：美利河1－Ⅱ・Ⅲ
15・16：狸崎B、17～19：角二山、20～22：正面中島、23～25：月岡、26～39：荒屋、39～42：白草
43・44：大網山田台8、45・46：木戸場、47～49：東峰御幸畑西、50：中ツ原5B、51・52：恩原

図2　荒屋型彫器とその周辺形態
（特に記載の無いものは頁岩製）

1条あるいは2～3条の彫刻刀面をきざんだ形態である。剥片の周辺を整形するのに、あたかも尖頭器あるいはナイフ形石器のように仕上げるのが特徴であって、周辺整形をもたない例はほとんどないといってもよい。したがって、右肩における整形面は削片をはがし取るさいに、役割を充分にはたしていることになる。

第二の形態は、基部の背面（裏面）にまで剥取がくわえられている。正面（表面）の整形打は、むしろ掻器の刃をつける場合のように、剥離面がみじかいのであるが、これに反して背面（裏面）基部の剥離面は、背面（裏面）に沿って奥ふかく長く、押圧剥離にちかい感じである。しかもこの場合には、彫刻刀の基部は舌状に整形されて頭部から明瞭に分離されている。彫刻刀面の存在を無視するならば、いわゆる有舌尖頭器と見られるかもしれない。

第三の形態は、縦横がほぼひとしく、栗の実のような形をとっている。特に右肩にはノッチをいれ、その端から左肩に彫刻刀面をきざむ方法である。この形態のうち、とくに小形のもの―1～1.5 糎をみると、いわゆるMicro-Burinにきわめてよく類似するようである。」

この3形態は、しばしば荒屋型彫器の定義の原点として引用され、中村孝三郎氏、森嶋稔氏、水村孝行氏は、3形態すべてが荒屋型の範疇に含まれるという認識を示している（中村1965、森嶋1974、水村1977）。一方、この段階では3つの細分形態すべてを荒屋型と呼ぶべきなのか、そのうちのひとつの形態のみを荒屋型と呼ぶべきなのか明らかにされていないと評価されることもある（山中1982）。

その後、芹沢氏は2冊の著書『古代史発掘1』 および『旧石器の知識』 （芹沢1974・1986）において、基部に裏面加工を有する第二の形態に限定するかのように説明しており、このことが問題を複雑にしている。そこで、芹沢氏の『貝塚』誌上における最初の定義を振り返ってみると、「主要剥離面の基部側に、こまかい調整痕を残す例も少なくない。」（傍点筆者加筆）と表現していることがわかる。この一文からは、基部に見られる裏面加工を、あくまで付帯要素として認識していることがわかる。すなわち、当初は必ずしも第二の形態に限定する考えはなかったことが理解されるのである。提唱者である芹沢氏の新しい考えを踏まえて「荒屋型彫器」を認識すべきであろうが、第二の形態のみに限定する理由が明らかにされない現段階においては、『貝塚』誌上に示された原点を基準に考え、より広い範囲で捉えておくべきであろう。

(2) 範疇の検討

先学諸氏が示した定義について、石器観察の三要素「素材・加工・形」（織笠1984ｂ）に分解して整理した。各項目ごとに状況を把握していきたい（表1）。

①素材

【石材】

石材については、芹沢氏が強調するように頁岩に固執することは重要な要素である。黒曜石が多用される地域においても、荒屋型彫器には「頁岩ないしはこれに近似した石材を用いてつくられることが多い」（芹沢1959ｂ）のである。このことについては多くの研究者が指摘しているが、そのスタンスには若干の相違がある。森嶋氏が「すべて頁岩」と限定的に表現している（森嶋1974）のに対し、水村氏は「主に頁岩」とし「稀に頁岩に類似した石材が使われる場合もある」と加えている（水村 1977）。水村氏のより幅広く捉えようとする意図が理解される。また、綿貫俊一氏・堤隆氏は付帯要素として（綿貫・堤1987）、竹岡俊樹氏は「限定が強い」（竹岡1996）とした上で頁岩利用を指摘しており、水村氏と共通する認識を示している。表現方法に差はあるものの、頁岩の多用を指摘している点で共通する。

【素材剥片の形状】

剥片を素材とすることでは共通するが、その具体的な形態に触れた例は少ない。芹沢氏は「やや縦に長い剥片」（芹沢1958）、森嶋氏は「1～2稜の石刃」（森嶋1974）、水村氏は「比較的小形の石刃もしくは剥片」（水村1977）としている。石刃と認識するかは別としても、縦長の剥片を意識して表現しているものと考えられる。

また、剥片とだけ記述している例が多いことにも気付く。芹沢氏は素材について「扁平な10 糎角ほどの打石

表1　荒屋型彫器研究史

文献		素材	加工			形
			周縁	基部裏面	彫刀面	
芹沢長介1958		やや縦に長い剥片。	両側を片面加工の尖頭器のように仕上げる。	主要剥離面の基部側に、こまかい調整痕を残す例も少なくない。	左肩に彫刀面をつくるのが通例。	
芹沢長介1959b		扁平な10稜角ほどの打石斧に似た石核から剥取されているらしい。石核の周辺は、充分に調整されているために、剥片の多くは被調整打面をもっている。				
	第一形態	剥片。	裏面に加工なし。表面の全周辺に細かい整形を施す。周辺整形をもたない例はほとんどない。		左肩に1条あるいは2～3条の彫刀面を刻む。	あたかも尖頭器やナイフ形石器のよう。
	第二形態		表面の加工は、掻器の刃をつける場合のように剥離面が短い。	基部の裏面にまで加工が施される。裏面の加工は奥深く長く押圧剥離に近い。		基部は舌状に整形されて頭部から明瞭に分離される。彫刀面がなければ有舌尖頭器のよう。
	第三形態				右肩にノッチを入れ、その端から左肩に彫刻刀面を刻む。	縦横がほぼ等しく栗の実のよう。小形のものは、いわゆるMicro-Burinに極めてよく類似。
芹沢長介1974		剥片。	全周に裏面からの打撃を加える。	基部だけには表面からも打撃を加え両面加工とする。	最後に右肩から左肩にかけて彫刀面をつくりだす。	
芹沢長介1986		硬質頁岩の剥片。	表面の周辺に沿って打ち欠く。	基部の裏面にも念入りな加工を加え両面加工に仕上げる。	最後に右肩から左肩にかけて彫刀面を刻む。	先端部は尖った形、基部はすぼまった形。
森嶋稔1974		1～2稜の石刃。石材はすべて頁岩。素材の打面と反対の方向に彫刻刀面を作出。	石刃のほぼ全周縁に刃潰し様の調整をめぐらせる。彫刻刀面の長さを調整する抉入状剥離が行われるものが存在。		右肩を打面として彫刀面が作出される。	彫刀面と裏面のなす角度は90度に近い。第三形態は先端が鋭く尖るものがある。彫刀面の幅は3mm前後。
水村孝行1977		比較的小形の石刃もしくは剥片。主に頁岩が使用される。稀に頁岩に近似した石材が使われる場合もある。	表面の全周辺に二次加工を施す。	裏面基部に調整が加えられ、舌状をなすものがある。	右肩の部分を打面として左下にかけて1～2・3条の彫刻刀面を刻む。打撃は長軸に対して鋭角で、素材の打点付近から刻まれることはない。	
山中一郎1982		大部分が調整打面石核より取られた剥片。	全周に表裏部調整をもつ。	基部に両面調整をもつものがある。	彫刀面の作出は右肩から左肩にかけて1～2・3回打撃される。	
稲田孝司1982		縦長剥片。	周縁全体に細部調整を施してやや幅の広い木葉形に整形。	裏面に平坦な剥離を加え基部を細くして茎のようにつくるものもある。	先端から一側縁にそった樋状剥離をうちおろす。	
山田晃弘1984					①彫刀面打面は背面加工によって形成され、器面と直交するものが多い。②彫刀面作出部位は、打面部と同様の角度に調整される。③樋状剥離の打点は、裏面側の稜線上もしくはそこに近接する二次加工面上にある。	彫刀面は規則的なねじれをもつものがめだつ。
綿貫俊一・堤隆1987	必要条件		石器の周縁に急斜度調整。		先端部左側にファシット。	先端部は尖頭状に仕上げられ、その切っ先は基軸のほぼ中央にくる。
	付帯諸要素	頁岩を石材。		基部の厚さを減じるため、基部裏面に平坦剥離がなされる。	先端部の厚さを減じるため彫刻刀面からフラットグレイバー状剥離がなされる。彫刻刀面再生が一般になされる。	彫刻刀面と裏面とがほぼ直交する。
加藤稔1991		縦長剥片。	背面のほぼ全周縁に調整を加える。		先端の右肩から左方向につくり出した。	「角型」彫刻刀。長さ5cm前後と小形のものが多い。
加藤晋平・鶴丸俊明1991					左刃。	直角形・裏面形の刃部をもち横刃型。
竹岡俊樹1996		①細石核の母型の製作工程で剥離された硬質頁岩の薄い剥片。(限定が強い)②剥片剥離軸をほぼ形態の軸とする。	直接打撃による正方向(裏面→表面)の刃先角60°前後の剥離で母型を作成。	正方向の剥離の後に基部を薄くかつ尖る形に両側縁から行われる押圧剥離で、刃先角は多様。	①素材剥片の末端に彫刀面を設定。②彫刀面作成に際し、側方剥離や稜上正方向剥離によって打点付近を細い三角形に整形。③彫刀面再生に際しては、状況に応じて正方向、稜上正方向からの剥離によって整形される。	①下端から1/3の位置での幅・厚さはかなり規定されており、基部加工を考え合わせれば着柄された可能性が強い。②形態軸に対する彫刀面の傾きと打面の傾き、彫刀面打面の輪郭、刃部傾斜角によってによって2つのグループに分類可能。
堤隆1997	最低限の属性	剥片。	急斜度調整を施す。		先端右肩から左肩にかけて彫刀面を作出。	
菅沼亘1999					①彫刀面再生に伴う彫刀面打面は凹形から凸形もしくは直線形に変化。②彫刀面打面が複数のノッチによって形成されることがある。③彫刀面再生のために彫刀面打面が再生されることがある。	
松浦五輪美2000		剥片。	裏面側から刃潰し状の整形を施し、尖頭状に仕上げる。	基部の裏面は押圧剥離などで入念な調整を施す。	先端部から左肩にかけて作出。	芹沢の第二形態をさす。

※用語については、次のように統一的に読み替えた。
彫刻刀・彫刻刀形石器→彫器、彫刻刀面→彫刀面、腹面・主要剥離面→裏面、背面→表面

斧に似た石核から剥取されているらしい」（芹沢 1959ｂ）とも指摘している。そして、石核の周囲は充分に調整されているため、剥片の多くは Prepared platform（被調整打面）を有するとしている。この石核は、両面調整体状の扁平石核（織笠 1979）を指すものと考えられる。扁平石核は、細石核原形との関連性が指摘され、そこから剥離された剥片が彫器の素材に充てられたとされている（大塚 1968、宇野・上野 1975、桜井 1992、竹岡 1996、永塚 1997）。近年ではこのような考えが多くの研究者に支持されており、荒屋遺跡における荒屋型彫器と細石核の接合資料（芹沢ほか 1990、図 10-7）に裏付けられている。すなわち、芹沢氏らが素材を石刃等と限定せず、また剥片としか規定しない研究者が多い所以はここにあると思われる。

【素材の用い方】

素材の用い方を指摘しているのは、森嶋氏と竹岡氏である。森嶋氏は、素材の打面と反対の方向に彫刀面を作出するとしている（森嶋 1974）。すなわち、素材剥片の打面側を基部に充てることを指摘している。一方、竹岡氏は、剥片剥離軸をほぼ形態の軸とする（竹岡 1996）として、素材剥片の基部側が先端部に充てられるものについても範疇のうちに考えている。いずれにしても、素材剥片の剥離軸と彫器の基軸が一致することを指摘している。また、水村氏は素材の打点付近から彫刀面が刻まれることはないとしている（水村 1977）。素材剥片の打点を先端側に充てるときは、二次加工により打点付近を除去することを意味するのであろう。

②加工

【周縁加工】

表面の周縁加工に関する表現方法は様々であるが、すべての定義で触れられている。素材剥片のほぼ全周に急角度の二次加工が施されることは、共通認識として理解しても差し支えなかろう。また、細かい加工で急角度（竹岡氏は 60 度前後と指摘（竹岡 1996））に仕上げられることも特徴として示されている。そして、この二次加工により「尖頭器やナイフ形石器のような」（芹沢 1958、1959ｂ）あるいは「やや幅の広い木葉形」（稲田 1982）の原形が作出される。また、右肩にノッチが刻まれることも指摘されており、ここが彫刀面作出時の打面になると指摘されている（鈴木 1958、芹沢 1959ｂ、森嶋 1974、菅沼 1999）。

【基部の裏面加工】

基部の裏面加工については、多くの研究者が取り上げている。芹沢氏は当初「主要剥離面の基部側に、こまかい調整痕を残す例も少なくない。」（芹沢 1958、傍点筆者加筆）とし、裏面加工を必要条件としない立場を明らかにした。その上で、基部の裏面加工を第二形態の特徴として解説している（芹沢 1959ｂ）。しかし、芹沢氏がその後に示した定義をみると、必要条件とも捉えうる表現を採用している（芹沢 1974、1986）。ただし、芹沢氏が如何なる理由で立場を変更したのかは明らかでない。

一方、これと前後して水村氏は「裏面基部に調整が加えられ、舌状をなすものがある」（水村 1977、傍点筆者加筆）とし、基部の裏面加工を必要条件としない立場を明らかにしている。その後、何人かの研究者が同様の見解を示している（山中 1982、稲田 1982、綿貫・堤 1987）。

また、芹沢氏の見解を踏襲して、裏面加工を必要条件とする場合についても、限定的な理解であることが窺える。山田晃弘氏は荒屋型彫器の分析において「基部腹面加工のないもの（芹沢の言う第一形態）も含めて検討」（山田 1984）しているし、松浦五輪美氏は「一般には（中略）基部裏両側に調整のないものも含まれる」（松浦 2000）としている。また、荒屋遺跡第 2・3 次調査の概報において須藤隆氏・会田容弘氏は、裏面加工のない資料も含めて「広義の荒屋型彫刻刀」と呼称している（芹沢ほか 1990）。第二の形態に限定しようとする一面も窺えるが、基部の裏面加工を付帯要素として捉えても、必要条件としない大きな流れにあるといえよう。

また、この裏面加工の特徴として奥深く長い平坦剥離であることが指摘されている。したがって、表面の周縁加工とは対照的な在り方といえる。その効果について、基部の厚さを減じる効果や着柄の可能性が指摘されている（鈴木 1988、綿貫・堤 1987、竹岡 1996）。

【彫刀面の作出】

彫刀面は、芹沢氏が右肩から左肩にかけて作出されると指摘している。このことは芹沢氏が一貫して指摘して

いる点であり、多くの研究者によって追認されている。そして、彫刻面は1条ないしは2・3条が刻まれるとしている（芹沢1959b、水村1977、山中1982）。

一方、稲田孝司氏は「先端から一側縁にそった樋状剥離をうちおろす。」（稲田1982）、竹岡氏は素材剥片の「末端に彫刻刀面を設定する」（竹岡 1996）としている。彫刻面が器体長軸上の一端に形成されることを指摘しているものの、左肩に設定されるとは規定していない。むしろ竹岡氏は、「『荒屋型彫器』の側方剥離（＝樋状剥離＝筆者加筆）は」右肩に彫刻面を有する1点「を除き右辺（形態の軸に対して）から左辺へ向かってなされる（30点中29点）」としている。左肩に彫刻面が設定されるものが大多数であることを指摘しつつも、右肩に彫刻面を有するものも範疇に含めているようである。芹沢氏も「左肩に彫刻刀面をつくるのが通例である」（芹沢 1958、傍点筆者加筆）としており、「通例」という語の理解によっては、必ずしも左肩に限定しないという解釈が可能かもしれない。しかし、芹沢氏はその後も左肩の彫刻面を重要な要素として繰り返し指摘している。いずれにしても、大多数の資料に見られる左肩の彫刻面は、「荒屋型」にとって極めて重要な要素といえる。

彫刻面の作出にあたっては、打面付近に特徴的な加工が施されることが指摘されている。周縁加工が右肩付近でノッチ状に仕上げられ、ここを打面とするとしている（芹沢1959b、森嶋1974、菅沼1999）。また、これに加えて右肩に短い樋状剥離を加えることもあるようである（竹岡 1996）。そして、裏面側の稜線上もしくはそこに近接する二次加工面上に彫刻面の打点が設定されている（山田 1984）。彫刻面作出にあたって、入念な準備過程が存在することが指摘されているといえよう。

【フラットグレーバー状剥離】

先端部付近に彫刻面から表面に向かう平坦な剥離痕が確認される。須藤氏・会田氏は彫刻刀面調整（芹沢ほか1990）、綿貫氏・堤氏はフラットグレーバー状剥離（綿貫・堤1991）、竹岡氏は稜上正方向の剥離（竹岡1996）と呼称している。彫刻面全体を整形し先端部を薄く仕上げるために行われた加工と考えられている（綿貫・堤1991、竹岡1996）。

【彫刻面と裏面とがなす角度】

彫刻面と裏面とがなす角度が、ほぼ直交する位置関係にあることは、森嶋氏、山田氏、綿貫氏・堤氏らが記述している（森嶋1974、山田1984、綿貫・堤1987）。ただし、全体的にはほぼ直交するものの、彫刻面は規則的にねじれをもつものが目立つとされる。特に、打点近くではむしろ裏面側に傾くものが多いことが特徴的とされる（山田 1984）。これは、彫刻面作出の打点が裏面側に偏っていたことと関係するのであろう。また、ねじれを起こさず全体が裏面に傾く特徴をもつものもある。このような状況から、加藤晋平氏・鶴丸俊明氏は「裏面形」（加藤晋平・鶴丸1991）と呼称しているのであろう。なお、彫刻面と裏面とが交差する付近からは使用痕が確認されており（堤1997等）、荒屋型彫器を検討するうえで重要な要素になるものと考えられる。

③形

先端部は、「尖った形」（芹沢1985）あるいは「尖頭状」（綿貫・堤1987）との記述がある。切っ先が器軸のほぼ中央に位置することを表現しているようである。

基部は、芹沢氏が第二の形態の解説において「基部は舌状に整形されて頭部から明瞭に分離される。（中略）彫刻刀面の存在を無視するならば、いわゆる有舌尖頭器（Stemmed Point）と見られるかもしれない。」（芹沢1959b）と詳述している。そして、この形態的特徴が、裏面加工と関係するとしている。その後も基部形態について「舌状」（水村 1977）、「すぼまった形」（芹沢 1984）、「細くして茎のよう」（稲田 1982）、「薄くかつ尖る形」（竹岡1996）と表現は様々であるが、いずれも細身に仕上げられるとしている。この場合もやはり裏面加工との関係が指摘されている（稲田1982、竹岡1996）。加えて竹岡氏は「下端から1／3の位置での幅・厚さはかなり規定されており、基部加工と考え合わせて、『荒屋型彫器』は着柄されていた可能性が強い。」（竹岡1996）としている。このように基部に関する記述は、先端部と比べるとより具体性をもっていることがわかる。

(3) 小括

以上のように先学が示した定義を検討してくると、基本的には芹沢氏が示した定義を踏襲しつつも、新たな属性が加えられていることがわかる（表1）。しかし、詳細な分析により導き出された特徴についても、ほとんどが付帯要素に位置付けられるものである。すなわち、必要条件としてほぼ共通して認識されている要素となると「①素材剥片の周縁に二次加工をめぐらすこと。②右肩から左肩にかけての彫刀面を作出すること。」のみである。加工の過程が重視される一方、素材や形について示された定義は具体性を欠くものが多く、理解を困難にしている。

こういった問題や3つの形態をめぐる問題は、荒屋型彫器の形態的多様性に一因があると考えられる。ただし、その多様性を拡大して荒屋形彫器＝斜刃彫器とすることには大きな危険性をはらんでいる（水村1977）。木村英明氏は、典型例とはいえない一群について「類荒屋型彫器」と区別して呼称している（木村1995）が、典型例との境界は示されているわけではない。すなわち、両極端の二者を比較すればその相違は一目瞭然であるが、両者の間には中間的な形態も存在する。「荒屋型彫器」と「類荒屋型彫器」は形態的に連続しているため、境界が不明瞭ということなのであろう。

このような現状を鑑みれば、一石器群内もしくは地域的段階的に限定した石器文化内での「典型的な型式」が存在する場合に限定して「多様性」を理解する必要があろう（山原1997）。また、荒屋型彫器とともに北海道では服部台型式（杉原・戸沢1975）・ホロカ型（白滝団体研究会1963）・双面形、本州北半では神山型類似例・双面形が出土することがある。すなわち、各地域で彫器の細分形態による組合せが認められるのである（織笠1984a）。まずは、これら共伴する類似形態も含めて、より広い範囲で荒屋型彫器を理解することから検討を開始したい。

3　分析対象

今回の分析にあたっては、細石刃石器群に加わる荒屋型彫器およびその類似形態を選択的に分析対象とした。基本的には点数的に充実している遺跡を選択したが、地域性を加味した面もある。単発的に出土することの意味も検討すべきであろうが、ここでは一定のまとまりを有するものを対象とすることで、細分形態の組合せを明らかにすることとしたい。なお、分析項目により対象点数が異なる場合があるが、これは項目により分析可能な資料数が異なるためである。

分析対象としたのは、北海道・白滝第4（松谷1987、10点）、北海道・暁（北沢1985・1986・1989、116点）、北海道・柏台1（福井1999、4点）、北海道・美利河1-Ⅰ（34点）・ⅡⅢ（15点）（長沼1985）、秋田県・狸崎B（菅原・石川1993、4点）、山形県・角二山（宇野・上野1975、剣持1979、桜井1992、14点）、新潟県・正面中島（佐藤・佐野2002、9点）、新潟県・月岡（中村・小林1975、12点）、新潟県・荒屋（綿貫・堤1987、立木1988、芹沢ほか1990、美安1995、92点）、埼玉県・白草（川口1993、22点）、茨城県・後野（川崎ほか1976、7点）、千葉県・大網山田台No.8（田村1994、9点）、千葉県・木戸場（千葉県文化財センター1987、8点）、千葉県・東峰御幸畑西（永塚2000、10点）、長野県・中ッ原5B（八ヶ岳旧石器研究グループ1991、3点）、岡山県・恩原（稲田ほか1996、4点）の17遺跡373点である。白滝第4が広郷型、柏台1が蘭越型、美利河1-Ⅰが峠下型、美利河1-Ⅱ・Ⅲが蘭越型・美利河技法・広郷型に伴うものであるほかは、おおむね湧別技法札滑型あるいは荒屋型・角二山型の範疇に含まれるものである。一括して扱うべき資料か否かという問題はあるが、細石核型式間における相違についても言及したい。

なお、北海道における資料は、本州東北部の資料と大局的に比較するデータとして提示することとした。また、北海道の資料については、範疇の理解によって「荒屋型」の捉え方が異なる。まずは類似形態も含めてより広く捉えて、範疇を検討する上での材料としたい。

4　分析の視点と方法

(1)　素材

① 石材

石材は、頁岩を多用するとされる。そこで、実際に頁岩がどの程度の割合で利用されているのか、また頁岩以

外にどのような石材が充てられているのかを明らかにしたい。加えて、頁岩産出地域との位置関係等を含めて地域差についても触れていくこととしたい。このことを検討するために、石材ごとの数量比を遺跡ごとに示すことで傾向を把握していくこととする。なお、石材の分類にあたっては、報告書等に記載されている分類にしたがった。ただし、「珪質頁岩」と「硬質頁岩」は、同質の石材を指すものと考えられ、「頁岩」と統一することにする。また、「頁岩」とのみ記載されている報告書があるが、その多くは珪質頁岩を指しており、ここでは敢えて区別していない。ただし、「珪質頁岩」と「頁岩」とを意図的に使い分けて記載している場合があり、このときはその旨の記載を加えることとしたい。

② 大きさ

荒屋型彫器は、剥片の全周に二次加工が及んでおり、また変形を繰り返していることが予想される。したがって、荒屋型彫器の大きさを計測することが、素材の形状を必ずしも反映しない。しかし、大局的な傾向をつかむためには、ひとつの有望な素材となり得ると考えられる。そこで、長さ・幅を計測することとしたい。なお、折損・欠損資料は分析対象から除外した。

③ 素材剥片の剥離軸構成

素材剥片の形状について芹沢氏は、「やや縦に長い剥片」（芹沢 1958）が「扁平な 10 糎角ほどの打石斧に似た石核から剥取されている」（芹沢 1959ｂ）としている。また、森嶋氏は石刃（森嶋 1974）、大塚氏らは細石核の成形・整形時に産した剥片（大塚 1968 等）としている。これらの指摘を検証するため、彫器の表裏に残された素材剥片の剥離軸の構成に着目して分析することとしたい。

分析にあたっては、裏面の剥離軸を基軸とし、表面を構成する剥離面の剥離軸をａ～ｈの８通りに分類することとした。分類は、図 9 に示すとおりである。まず、裏面の剥離軸をｅ方向に固定して、そのとき表面の剥離軸がどのような組合せになるのかを調べる。そして、遺跡ごとに各軸の面数を累積し、それを分析対象数で除することで、１つの石器の表面における平均的な剥離軸の組合せを求めた（加藤学 1999）。

例えば、「e」が「１」という数値を示せば平均的な表面に「e」軸の剥離面「１」面が、「0.5」なら 2 点の石器に 1 面が構成する確率を意味する。そして、各方向の平均値を結線してグラフ化することで、その組合せを示した。結線によって囲まれた範囲が ａ - ｅ の軸に収斂するほど石刃技法に近く、横方向にも広がるほど打面転位が頻繁に行われたことを意味する。なお、図の目盛は 0.5 刻みとなっている。

このような分析により、各遺跡における素材剥片表裏の剥離軸構成を把握することができる。これをもとに素材剥片の形成過程を検討していきたい。

④素材の用い方

素材剥片の用い方については、森嶋氏、竹岡氏によって剥片剥離軸が彫器の基軸となることが指摘されている。森嶋氏が素材剥片の打面側を基部側にすることを指摘する（森嶋 1974）一方、竹岡氏はその逆も含めて範疇としている（竹岡 1996）。そこで、器軸に対する裏面（素材剥片の主要剥離面）の剥離方向を集計したい。剥離方向の分類は、「③素材剥片の剥離軸構成」の分析と同様である（図 4）。さらに、③の結果と総合して、素材剥片の形状と用い方を次に示す 8 類に分類し、それぞれの比率を示すこととしたい（図 5）。

Ⅰ類：単設打面の石核から剥離されたかのような縦長剥片。打面側を彫器の基部に充てる。

Ⅱ類：両設打面の石核から剥離されたかのような縦長剥片。打面側を彫器の基部に充てる。

Ⅲ類：90 度方向の打面転位を頻繁に行う過程から作出されたかのような縦長剥片。打面側を彫器の基部に充てる。

Ⅳ類：単設打面の石核から剥離されたかのような縦長剥片。打面側を彫器の先端部に充てる。

Ⅴ類：両設打面の石核から剥離されたかのような縦長剥片。打面側を彫器の先端部に充てる。

Ⅵ類：90 度方向の打面転位を頻繁に行う過程から作出されたかのような縦長剥片。打面側を彫器の先端部に充てる。

Ⅶ類：横長剥片。打面を彫器の側縁に充て、長さを確保する。

Ⅷ類：両面調整により剥片の形態は不明。小形の尖頭器状に加工された素材の長軸を彫器の器軸とする。

(2) 加工

①周縁加工の加工頻度

芹沢氏は、全周に裏面から表面への二次加工が施されることを重要な要素としている。このことは、後に多くの研究者によって追認されている事項である。このことが実態であるか否かを検討することとしたい。分析の視点は、各部位の加工頻度に置くこととする。器体の周囲を A～I に９分割し、遺跡ごとに各部位における加工の有無を調べ、存在数を累積する。そして、それを分析対象数で除することで、各部位の加工頻度を示すこととしたい（図 11）。なお、分析方法は、野口淳氏のナイフ形石器の分析（野口 1996）を参考にしたところが大きい。

②裏面加工の加工頻度

芹沢氏は、基部裏面に二次加工が施されることを重要な要素とし、荒屋型の必要条件ともしている。その存在については、後に付帯要素等として認識されることが多いが、それが実態であるか否かを検討することとしたい。分析の視点は、各部位の加工頻度に置くこととする。器体の周囲を A～I に９分割し、遺跡ごとに各部位における加工の有無を調べ、存在数を累積する。そして、それを分析対象数で除することで、各部位の加工頻度を示すこととしたい（図 11）。なお、器体周囲の分割にあたっては、表裏の加工頻度を比較できるよう、表面の周縁加工の分割に準じた。

③彫刀面の構成

荒屋型彫器における彫刀面は、右肩から左肩にかけて形成されるといわれている。このことは、荒屋型彫器およびその類似形態のほとんどに共通する重要な要素といえる。しかし、実際に一石器群における彫器を観察したとき、実に多様な彫刀面の在り方が認められる。このことについて、次のように分類して、その組合せの実態を示すこととしたい（図 12）。

Ⅰ類：左肩に彫刀面が形成されるもの。

Ⅱ類：器体上下両端の左肩に彫刀面が形成されるもの。

Ⅲ類：左肩と右肩の彫刀面が複合するもの。いわゆる双面彫器。

Ⅳ類：右肩に彫刀面が形成されるもの。

Ⅴ類：器体の一端に左肩、他端に右肩の彫刀面が形成されるもの。

Ⅵ類：器体の一端に左肩と右肩の複合（双面）、他端に左肩の彫刀面が形成されるもの。

④彫刀面作出打面の形状

彫刀面作出にあたっては、その打面となる周辺に特徴的な加工が施されるとされる。その形状について、「Ⅰ類：内弯形、Ⅱ類：直線形、Ⅲ類：外弯形、Ⅳ類：無加工、Ⅴ類：彫刀面」の５類に分類し（図 13）、各比率を算出し、彫刀面作出過程との関連について検討したい。なお、同様の分類は須藤氏・会田氏、菅沼氏が提示している（芹沢ほか 1990、菅沼 1999）。

⑤フラットグレーバー状剥離の有無と加工範囲

彫刀面全体を整形し、先端部を薄く仕上げるために行われたとされるフラットグレーバー状剥離が施される頻度を示すこととしたい。フラットグレーバー状剥離の有無を確認して累積し、存在の頻度を算出することとする（図 15）。また、先端部を薄くするとされるが、実際に彫刀面のどの範囲に施されるかを、「Ⅰ類：彫刀面の打面付近、Ⅱ類：彫刀面の中間部付近、Ⅲ類：彫刀面の末端付近」の３類に分類して（図 16）、部位別の加工頻度についても算出したい。

(3) 形

①大きさ

基部の裏面加工やフラットグレーバー状剥離の存在によって、器体の厚さが調整されると指摘されており、厚さには製作上の意図が反映されている可能性がある。そこで、各遺跡における平均的な厚さを算出したい。さらに長幅比との関係をグラフ化することで、遺跡間の共通点と相違点を見出したい（図 8）。

②彫刀面と裏面とがなす角度

彫刀面と裏面のなす角度がほぼ直交関係にあることが指摘されている。このことを具体的に検証するために、「Ⅰ類：裏面側に偏るもの（鈍角）、Ⅱ類：ほぼ直交関係にあるもの（直角）、Ⅲ類：表面側に偏るもの（鋭角）」の3類に分類（図14）して大局的な傾向をつかみたい。

③先端角

彫器の切っ先は機能部位とされることがある（S.A.セミョーノフ1968、鈴木1984など）。また、彫刀面作出の打角にもあたり、打撃において重要な意味を有すると考えられる。そこで、彫刀面とその打面とがなす先端角を計測し（図18）、10度刻みに集計して傾向を観察することとしたい。

④彫刀面の位置

切っ先は基軸のほぼ中央に位置するとされるが、このことが実態であるか否かを検討する。検討にあたっては、基軸を基準にａ基端部の中心点、ｂ彫刀面の打点、ｃ彫刀面の末端の3点を結線してグラフ化したい（図19）。なお、基軸はａ基端部の中心点を基点とし、基部両側縁が線対称となるライン上に設定した。これにより、基軸に対する彫刀面の位置および傾き、彫刀面の長さを表現したい。

⑤基部形態

竹岡氏は「下端から1／3の位置での幅・厚さはかなり規定されており、基部の加工と考え合わせて、『荒屋型彫器』は着柄されていた可能性が強い。」（竹岡1996）としている。着柄を意図しているとすれば、基部形態に特徴を見出せる可能性がある。そこで、基部の平面形態に着目したところ、次の5類に分類することができた（図17）。各分類の構成比を算出して検討したい。

Ⅰ類：平基。基端部が小さく、両側縁は基軸に対してそれぞれ20度以上開く。

Ⅱ類：平基。基端部が比較的広く、両側縁は基軸に対してそれぞれ10度ほど開く。

Ⅲ類：平基。基端部が比較的広く、両側縁は基軸とほぼ平行関係にある。

Ⅳ類：円基。基端部は、二次加工により丸みを帯びている。

Ⅴ類：尖基。基端部は、二次加工により尖頭器状をなす。

5　分析結果

(1)　素材

①　石材（図3）

各遺跡における使用石材は、珪質頁岩またはそれとよく似た性質の石材が大半を占めている。中でも本州東北部においては、ほとんどが珪質頁岩である。芹沢氏は、荒屋型彫器を設定した際に「つねに硬質頁岩ないしはこれに近似した石材を用いてつくられることが多い」（芹沢1959ｂ）と指摘しているが、そのことが大きく変更されることはない。水村氏が指摘するように「頁岩、流紋岩、硅岩などといった石材を用いるのは機能と無関係でない」（水村1977）のであろう。また、黒曜石を主体とする石器群にあっても、荒屋型彫器だけは頁岩あるいはそれに近似した石材を用いていることが指摘されており（芹沢1959ｂ）、形態と石材が密接に関連するものと考えられる。珪質頁岩が選択的に利用される状況が理解される。

しかし、水村氏や木村氏による荒屋型彫器の集成（水村1977、木村1995）でも明らかなとおり、北海道の黒曜石を多用する地域では彫器の石材に黒曜石が選択されることが珍しくない。中でも、暁は珪質頁岩が38％、黒曜石が62％であり、その顕著な例といえる。一方、珪質頁岩を産出する道南の遺跡では、すべて珪質頁岩である。木村氏が指摘するように、「外来の石材（珪質頁岩）の入手を基本としながらも、黒曜石の依存地帯にみられる黒曜石製荒屋型彫器は、石材不足に伴う緊急止むをえずして、現地石材をもって補給したということ」（木村1995）であろう。

本州においても同様の現象が認められる。分布の集中域および珪質頁岩の原産地から距離をおく中ッ原5Ｂ遺跡（八ヶ岳旧石器研究グループ1991）では緑色チャート、恩原遺跡（稲田ほか1996）では玉髄・メノウが用いられている。これらの石材は、在地で産出される珪質頁岩に似た性質の石材であり、代用された可能性を指摘で

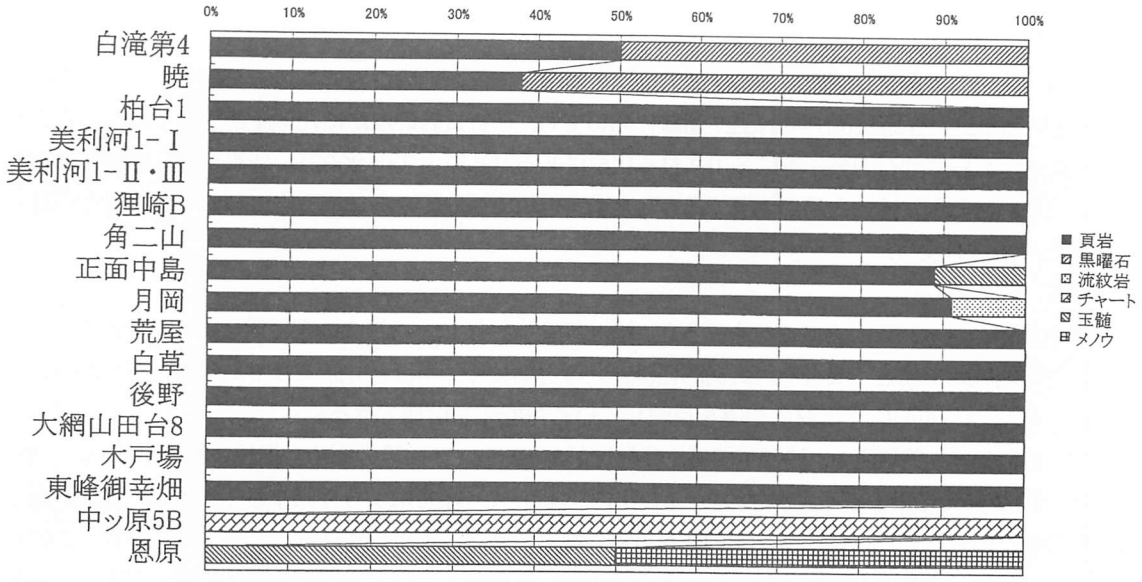


図3　石材構成

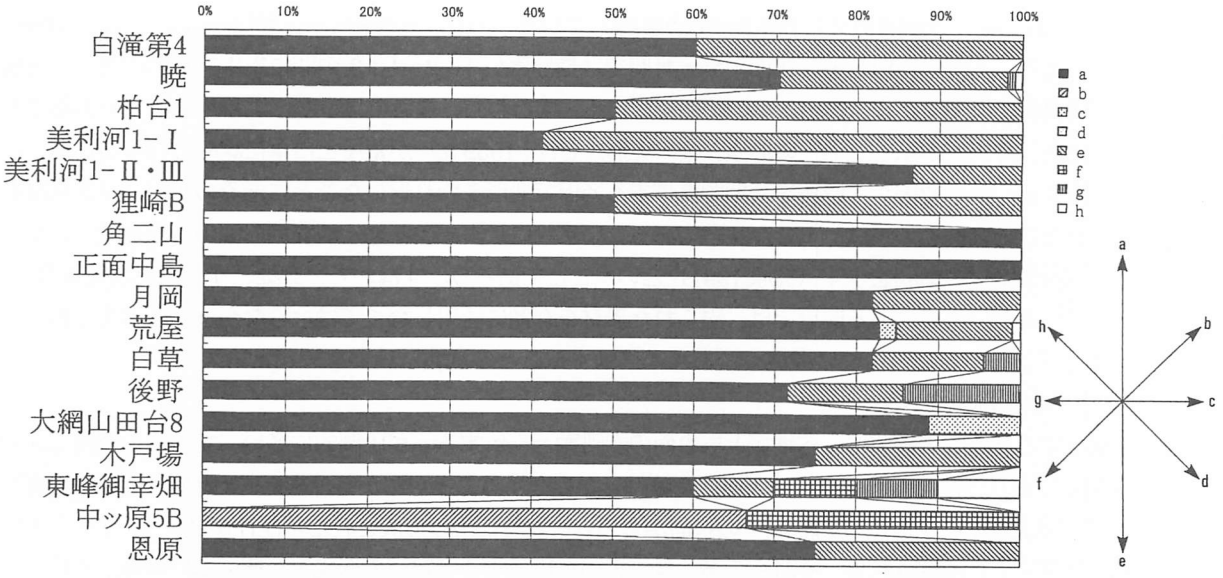


図4　裏面の剥離方向

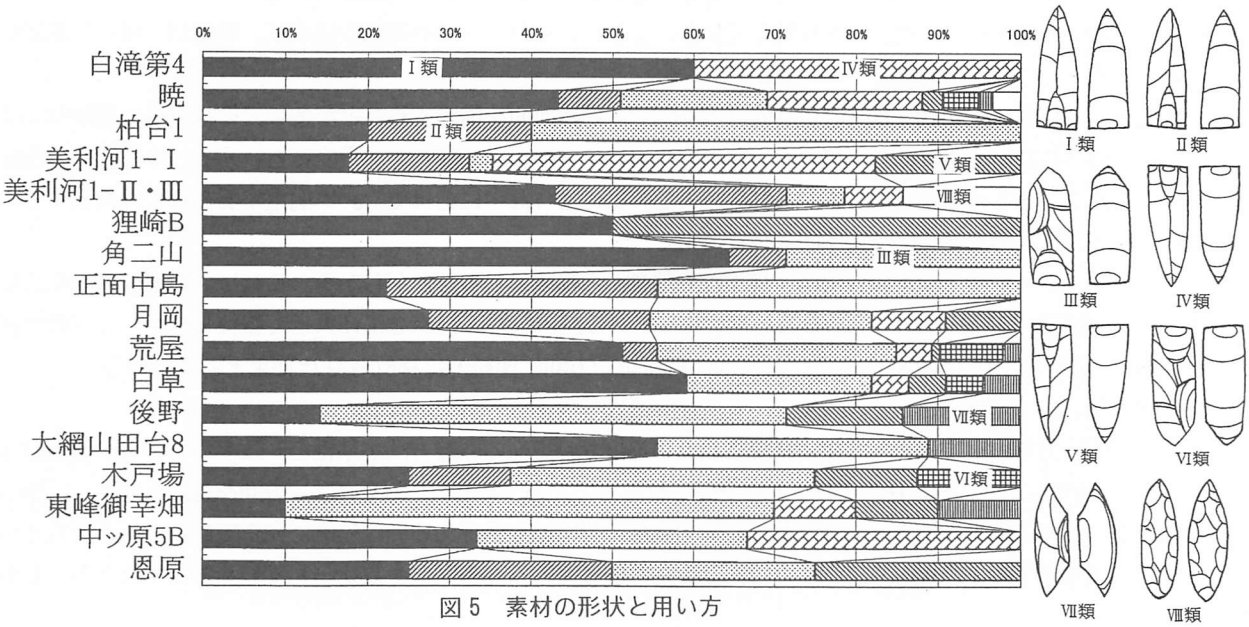


図5　素材の形状と用い方

きる（稲田 1996）。また、珪質頁岩原産地に比較的近い正面中島では在地の頁岩で不足分を補っているとされている（佐藤・佐野 2002）。福島県笹山原 No.27 遺跡においても、珪質頁岩のほかに在地産とされる凝灰質頁岩が 100 点に及ぶ荒屋型彫器や細石刃製作等に多用される状況にある（高原・浅川 2002）。珪質頁岩に固執することは間違いないと思われるが、その入手が困難であったため、近隣で採取できる珪質頁岩に類似した性質の石材で補充した結果と考えられよう。

②大きさ（図 6）

長さと幅の計測値を図 6 に示した。これをみると、幅は各遺跡とも 1.5～3.0 ㎝の中に収まることがわかる。これに対し、長さは地域間で大きく異なる。大局的には、北ほど細長く、南ほど寸詰まりであることがわかる。二次加工や変形を経ているものの、素材の相違を反映している可能性を指摘できる。

北海道では、白滝第 4・美利河 1・柏台 1 では、長幅比が 1：2～1：3 前後の極めて細長いものが多い。一方、暁では、1：1～1：2 前後に集中する。すなわち、前者はより細長く、後者はより寸詰まりであるといえる。両者は、最終的な形態だけでなく周縁の二次加工の在り方も異なる。前者はより急角度の二次加工が施されるのに対し、後者はより平坦な二次加工が施されることが多い。また、美利河 1 では、長幅比や器体の厚さが大きく異なる。

本州では、荒屋の第 1 次調査直後に鈴木重美氏が指摘しているように、長さ約 4cm、幅 2cm ほど（鈴木 1958）が平均的といえる。ただし、狸崎 B・正面中島・月岡では長幅比が 1：2～1：3 の間に集中するのに対し、荒屋と関東方面の資料では多くが 1：2～1：1 の範囲に収まる。すなわち、後者のほうが、より寸詰まりであることがわかる。また、芹沢氏が示した第三の形態（栗の実形）（芹沢 1959 a）が荒屋と白草に認められることは、この結果と一致する。その要因が、彫器を長期間携帯する過程で変形を繰り返したことにあるのか、寸詰まりな素材が用いられたことにあるのかは、重要な課題である。いずれにせよ、原産地と消費地の関係が遠隔地へいくほど小型化、利用効率化の傾向を示す（梶原 1991）ということであろう。すなわち、必要とする石材（珪質頁岩）を容易に入手できない環境にある関東では、限られた素材を有効に活用しなくてはならなかったと考えられる。また、必要とする石材を補いにくい環境へ、あえて移動することの意義は重要な問題といえよう。

③ 素材剥片の剥離軸構成（図 9）

表面を構成する剥離軸の構成は、各地域とも裏面の剥離軸と一致する e が圧倒的に多い。すべての遺跡で e の値は 1 を超えており、ほとんどの資料の表面に剥離軸 e が存在することがわかる。また、e と最も近い軸を有する d・f がこの次に多い。e と d・f は、同一の打面からの剥片剥離により形成された可能性が高く、e を中心とする剥離軸に傾倒すると理解される。それらの多くは、表面を構成する剥離面の形成と一連の剥片剥離から得られたと考えられる。このほか、e とは正反対の a が一定数認められたことも各遺跡に共通する。このことは、上下両端に打面が設定されていたことを反映している。しかし、それ以外の剥離軸の構成は、地域間で顕著な差異が認められる。

北海道および狸崎 B・角二山・正面中島・月岡は、e が複数面を構成することが多く、それ以外の剥離軸がほとんど認められない。すなわち、ほとんどの資料において、表裏の剥離軸が一致するといえる。単設打面の石核から得られたであろうことを推察させる結果である。このような中にあって、e に偏重する在り方は共通するものの、暁では、より多方向の剥離軸が認められる。

一方、角二山・荒屋と関東以西では、様々な剥離軸から構成されることがわかる。これは、頻繁な打面転位を繰り返した結果、得られた剥片であることを意味している。中には、「打点を横に大きく転位しながらなされた剥片剥離」（織笠 1979）も認められる。これは、打点を一方向に連続的に移動させた結果と考えられる。

④素材の用い方（図 4・5）

素材の用い方を観察すると、すでに指摘されているとおり裏面の剥離方向が基軸と一致するもの（a および e 方向）が圧倒的に多い（図 4）。これ以外に分類されるものであっても、a あるいは e 方向を意識しながら、やや斜位に用いるものが大半である。すなわち、素材剥片の打面側を基部あるいは先端に充てているといえる。さらに森嶋氏が強調するように、素材剥片の打面側を基部側に充てる a 方向が半数を超えていることがわかる。しか

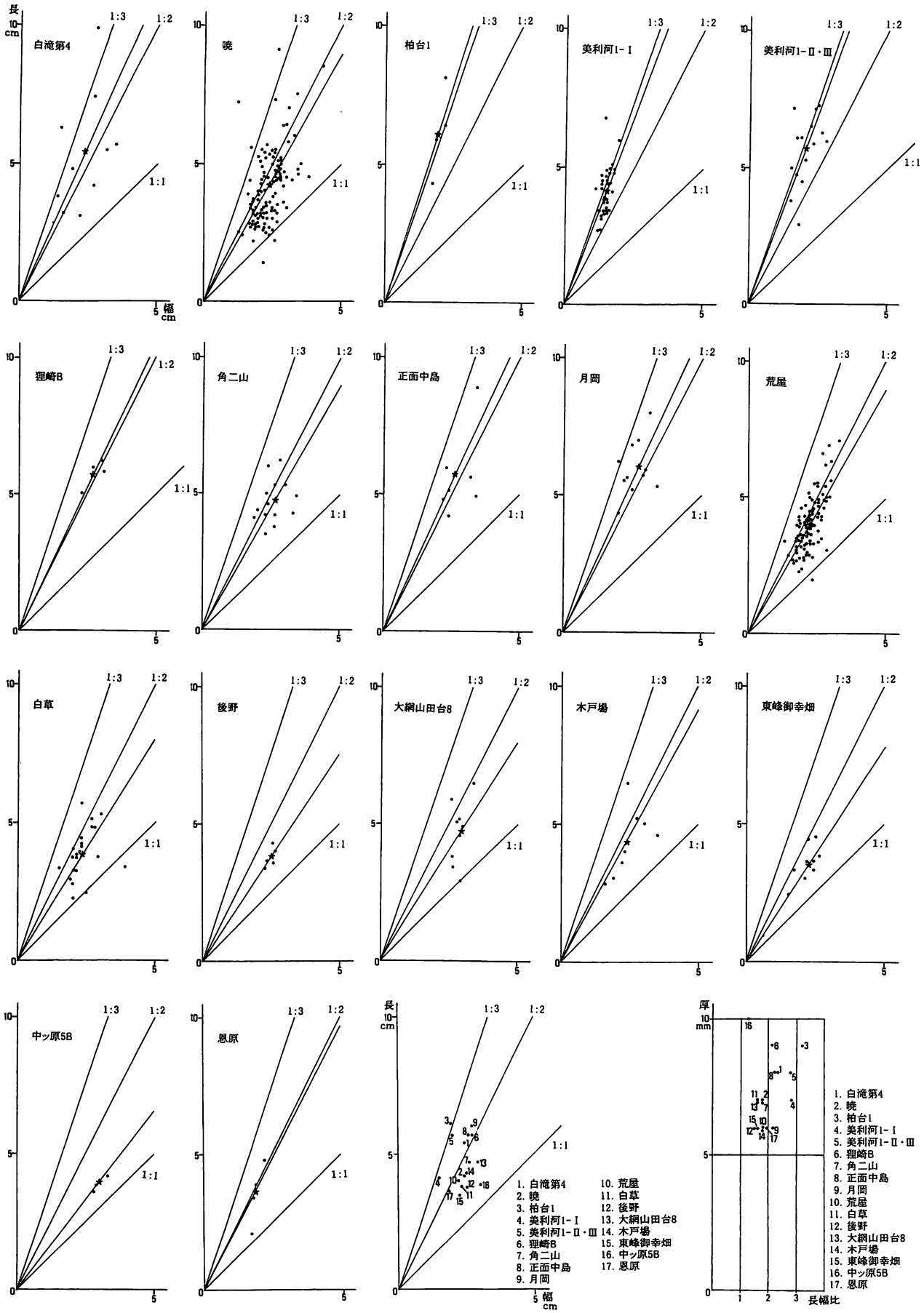


図6　彫器の長さと幅（★は各遺跡の平均値）

図7　各遺跡における
長さ・幅の平均値

図8　長幅比と厚さの
相関関係

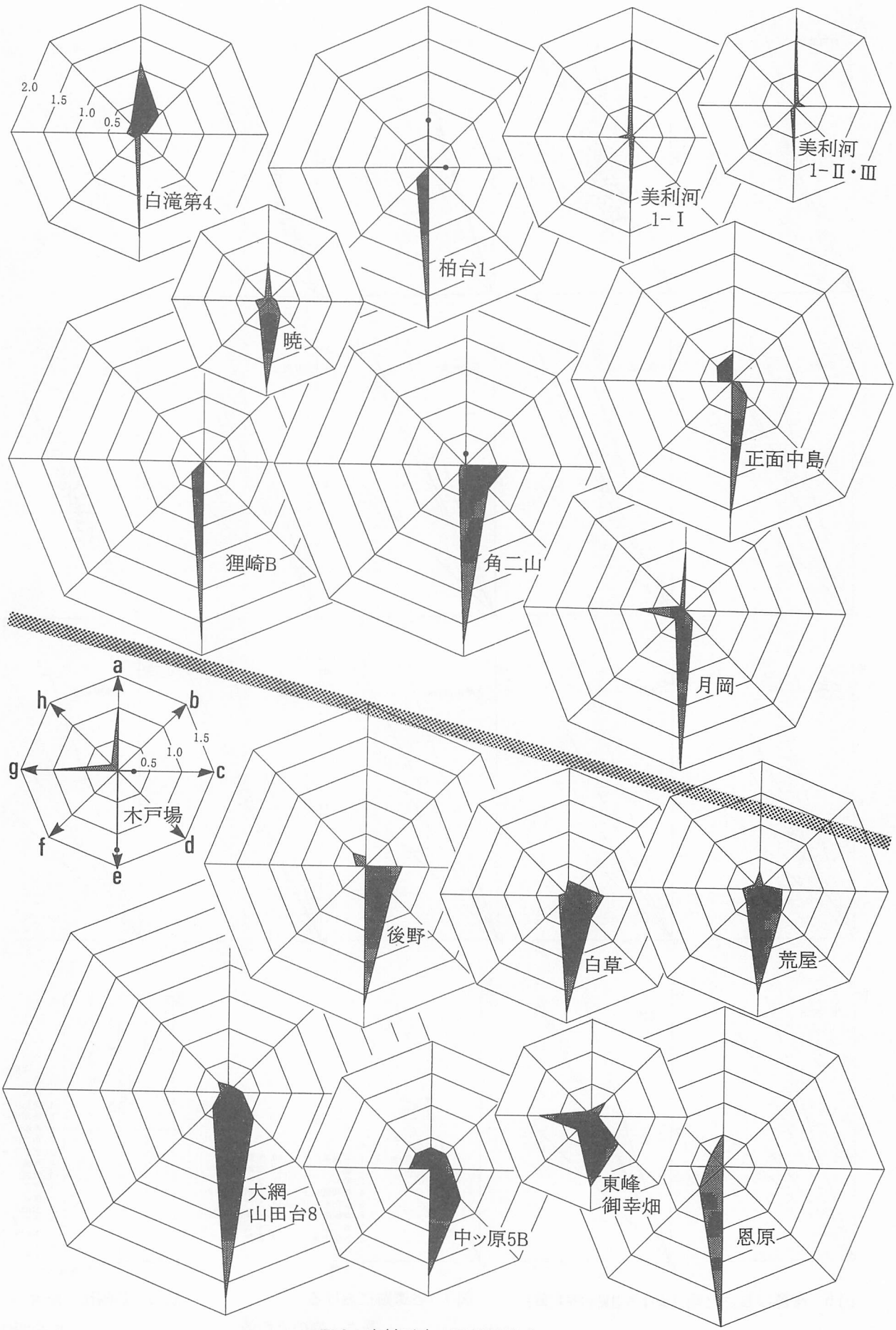


図 9　素材剥片の剥離軸構成

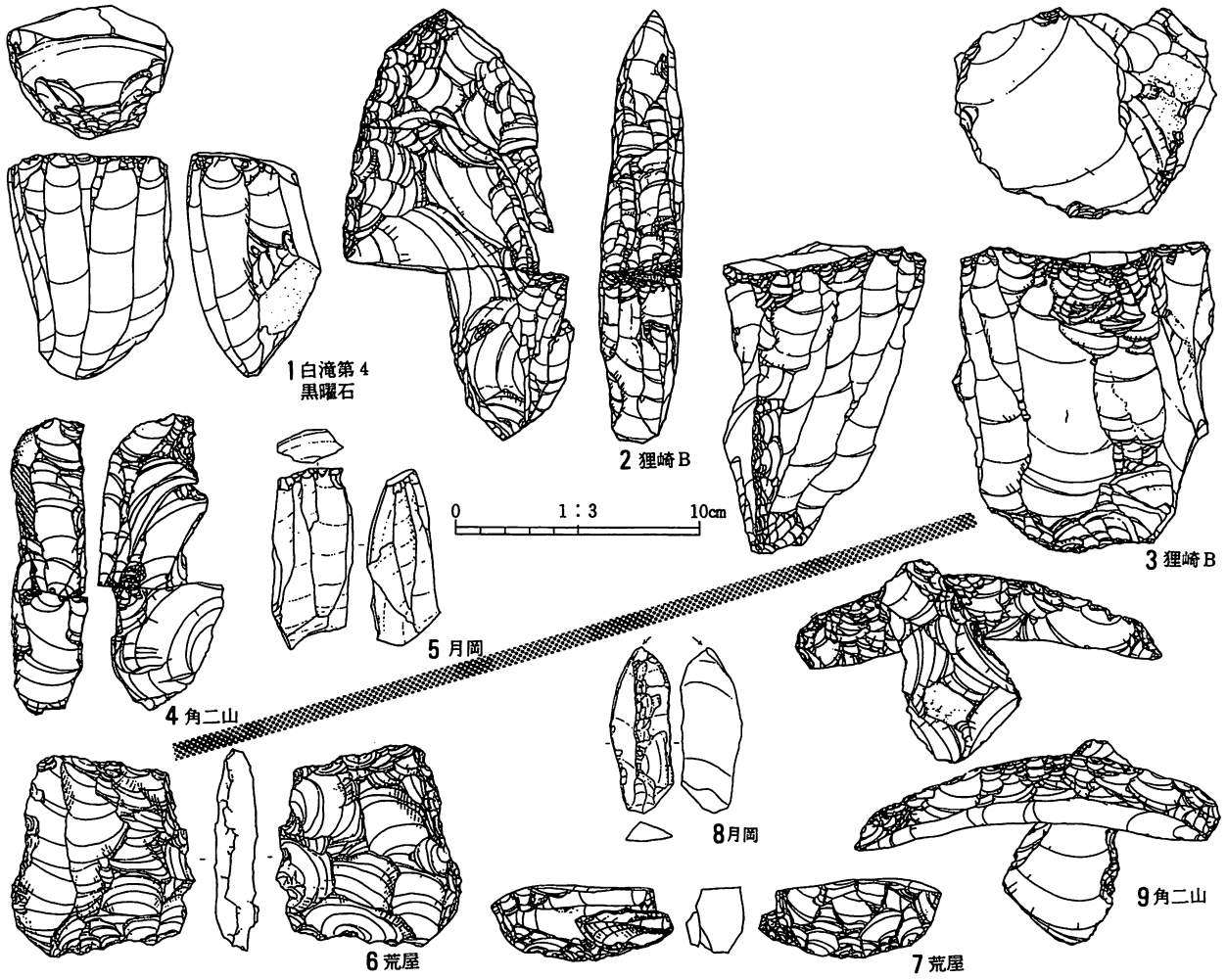


図10　素材剥片製作に関する資料

1～5：単設打面あるいは両設打面の縦長剥片石核　　6：90度方向の打面転位が顕著な石核

7・9：細石核の調整剥片から製作された剥片石器　　8：細石核の削片から製作された彫器

し、先端側に充てるものも安定的に存在することは明らかであり、これを含めずに荒屋型彫器を考えることは適当でない。一方、素材剥片の打面を側縁側に充てるもの（c および g 方向）も少数ながら存在する。これは、横長剥片の長軸を基軸に充てた結果を意味する。

器軸に対する裏面の剥離方向と③の分析を総合すると、いずれの遺跡でもⅠ類の比率が上位にあることがわかる（図5）。森嶋氏が素材を「石刃」と規定した所以は、ここにあるのだろう。しかし、その割合は地域間で異なる。北海道・東北ではⅣ類も含めて単設打面から剥離された石刃状の縦長剥片が大きな比率を占めるのに対し、新潟から関東にかけてはより小さな比率といえる。この状況と反比例するかのように、新潟から関東にかけてはⅢ類・Ⅵ類の比率がより大きくなる。このことは、剥片剥離過程の相違を意味するものと考えられる。

素材の用い方は、表面の剥離軸構成に関わらず、素材剥片の打面側を基部に充てている。このことは、各遺跡においてⅣ類よりⅠ類、Ⅴ類よりⅡ類、Ⅵ類よりⅢ類がより大きな割合を占めていることからも明らかである。

⑤小括

芹沢氏は「荒屋形彫刻刀」を設定した際に「やや縦に長い剥片」を用いることが通例としており（芹沢 1958）、その剥片は多く「Prepared platform（被調整打面）をもっている」（芹沢 1959 b）としている。しかし、調整されているようにみえる打面は、尖頭器や両面調整体の縁辺の特徴とよく一致することがある（加藤学 1998）。大塚氏、宇野氏・上野氏、桜井氏、竹岡氏、永塚氏（大塚 1968、宇野・上野 1975、桜井 1992、竹岡 1996、永塚 1997）らが指摘するように、扁平石核から得られた剥片や、細石核の成形・整形時に生じた剥片が素材として用

いられたのであろうか。先に検討した表面の剥離軸構成では、多方向のものが角二山・荒屋と関東で顕著に認められるし、荒屋における荒屋型彫器と細石核の接合資料（芹沢ほか 1990）、角二山におけるスクレイパーと細石核成形時の削片との接合資料（桜井 1992）、月岡における削片の転用例（図 10-7～9）は、それを裏付けるものであろう。また、暁においても両面調整石器の調整剥片が、特定の形態に特徴的に充てられており（山原 1997）、細石刃の製作と素材剥片の製作が一体化していたことが予想される。しかし、細石核の成形・整形時に生じる剥片は副次的な生産物であるため、斉一的な形態を連続的に作出することは困難であったと考えられる。それゆえに、器体の全周に二次加工を施し、一定の形状に仕上げる必要があったのであろうか。

一方、これとは対照的に、北海道・狸崎 B・正面中島・月岡における表面の剥離軸は、裏面の剥離軸と一致する傾向が極めて強い。その多くは、両側縁と平行する 1～2 条ほどの稜線を有する石刃ともいい得る縦長剥片であり、形態的斉一性が認められる。このような縦長剥片は、偶発的・副次的に生産されたとは考えにくく、一定の形態を連続的に製作する剥片剥離過程が想定される。

以上のように、在り方に地域差が認められるものの、芹沢氏が通例とした「縦長剥片」を用いる原則にはかわりない。今回、分析対象とした資料 373 点のうち、365 点（97.8％）が縦長剥片を素材としていた。その剥片剥離軸を彫器の基軸に充てて形態を作出することは極めて重要な要素といえよう。

しかし、8 点（2.1％）と少ないながらも横長剥片を素材とするものも認められた。横長剥片を素材とするものは、暁で 4 点（うち 2 点は黒曜石製）、荒屋で 2 点、白草で 1 点、大網山田台 No.8 で 1 点である。荒屋の第 2・3 次調査の概報においても、「横形剥片は 2 点（1.5％）」含まれるとしており（芹沢ほか 1990）、少数ながらも存在することは明らかである。素材剥片の形状を縦長剥片と規定するのであれば、これは荒屋型の範疇に含まれない。しかし、素材以外の条件すべてを満たしており、典型とはいえないがひとつの在り方と考えられる。また、横長剥片は縦位に用いられることはなく、必ず横位に用いられている。すなわち、横長剥片の打点は側面側に充てられ、剥片の長軸が成品の器軸に据えられているのである。横長剥片を用いながらも、彫器を縦長に仕上げようとする意図が理解される。また、横長剥片を素材とするものが出土した遺跡は、珪質頁岩の原産地と距離をおいている。数少ない横長剥片の利用例は、限られた石材を有効に利用した結果を反映しているものと考えられる。

(2) 加工

①周縁加工の加工頻度（図 11）

周縁加工は、彫刀面が作出される左肩（H・I）と基端部（D・E）を除けば、ほぼ全周に急角度に施される。このことは、荒屋型における重要な要素といえる。特に、基端部に加工が施されないことは注目される。これは、素材剥片の打面を基部側に充てる資料に多く認められる。すなわち、打面付近が残置されるケースが多いといえる。この付近には、剥片剥離に先行して形成された頭部調整に似た剥離面が認められ、予め他より急角度な縁辺が準備されている。この部位に周縁加工が施されないのは、このことと関係する可能性がある。なお、A・G・H・I については、彫刀面が形成される範囲であり、周縁加工の頻度は安定していない。しかし、この周辺についても彫刀面を除けば周縁加工が施される頻度が高く、特に彫刀面の打点周辺はほぼ例外なく施される。

②裏面加工の加工頻度（図 11）

基部の両面加工をもとに着柄との関係が指摘されているが、実質的には裏面加工が施される頻度は低い。北海道では裏面加工の頻度が暁で 40％ほどと高率であるが、そのほかは数％～20％ほどである。一方、東北～関東においては、多くても 20％程度であり、数％あるいは認められない場合がほとんどである。特に、関東での頻度はより低い。

裏面加工の範囲は、基部周辺に偏って認められる。特に、基端部周辺における頻度が比較的高い。このことは周縁加工の頻度とは対照的であり、相互の補完関係が想定される。この加工により、円味を帯びた基部が作出されている。基軸に対する、左右の偏りについては、やや右側（左肩の彫刀面と反対の側）に偏る傾向があるものの遺跡間で異なる状況を示す。

これら基部に特徴的に施される裏面加工は、素材剥片の反りや厚みの調整にあるものと考えられる。しかし、

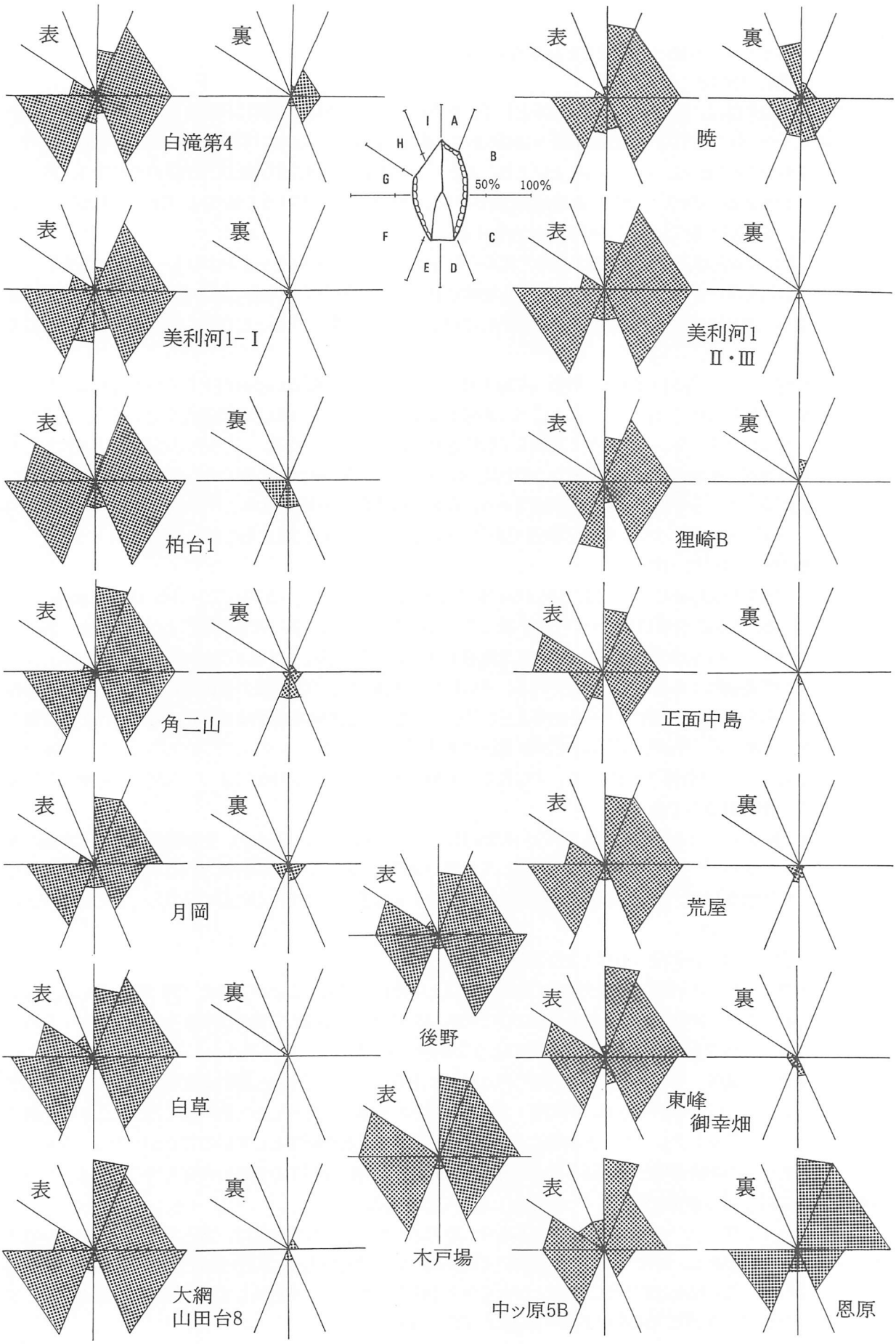


表
裏
白滝第4
暁
美利河1-Ⅰ
美利河1
Ⅱ・Ⅲ
柏台1
狸崎B
角二山
正面中島
月岡
荒屋
後野
白草
東峰
御幸畑
木戸場
大網
山田台8
中ッ原5B
恩原
A
B
C
D
E
F
G
H
I
50%
100%

図 11　二次加工の頻度

このことのみをもって着柄との関連を想定することは難しい。

③彫刀面の構成（図 12）

彫刀面の作出位置は、荒屋型の重要な要素として指摘されているように、左肩に作出されるⅠ類が多い。しかし、遺跡間でその状況は異なり、25％前後～100％までと多様である。大局的な状況は、道南の美利河 1・柏台 1 において低率であるほかは、軒並み高率といえる。また、上下両端に左肩の彫刀面が作出されるⅡ類は、数％～20％ほどと幅があるものの、半数ほどの遺跡で認められる。荒屋と白草におけるⅡ類には、芹沢氏が指摘した「栗の実のような形」が少数ではあるが特徴的に存在する。

一方、いわゆる双面彫器であるⅢ類が高率で認められる場合がある。美利河 1-ⅠおよびⅡ・Ⅲで 50％を超える高率で認められるほか、東北～新潟を中心とする地域で 10～30％の割合で安定的に加わる。しかし、両者では在り方が異なる。前者はあくまでⅢ類が主体であるのに対し、後者はⅠ類を中心としながらⅢ類が加わる状況にある。

Ⅳ類（右肩）、Ⅴ類（左肩＋右肩）、Ⅵ類（左肩＋双面）については、彫器が多数出土している暁および荒屋において少数ずつ加わる状況にある。これらには、素材および加工においてⅠ類との共通性を見出せる。荒屋型の典型とはいえないだろうが、Ⅰ類を強く意識して製作された形態と考えられる。こういった形態も、多数の彫器が製作される過程で産出されるのであろう。その意義についてはさらに検討が必要であろうが、「荒屋型」を含む彫器の形態組成にこれらが加わることは事実である。なお、狸崎 B でⅥ類が 50％、中ッ原 5B ではⅣ類が 33％を占めているが、全体数が少ない中での状況であり、他の遺跡と同等に比較することは適切でない。

④彫刀面作出打面の形状（図 13）

荒屋における彫刀面打面については、1958 年に鈴木重美氏が「刻面の近くが凹んで」いる（鈴木 1958）ことを指摘している。今回の分析結果においても、総じて内弯形をなすⅠ類が多く含まれることがわかった。特に、東北～関東においては 50％前後という高率で、北海道よりも安定的に認められる。内弯形の作出意義については、彫刀面作出の準備過程であることが想定される。すなわち二次加工により形成された内弯形は、彫刀面打撃時の打面として、有利な条件をもたらすものと考えられる。二次加工により形成される直線形のⅡ類・凸形のⅢ類も存在するが、Ⅰ類との「平面形の差は、（中略）彫刀面再生の段階差であり、再生に伴い凹形から凸形・直線形へ変化すると考えられ」（菅沼 1999）よう。すなわち、Ⅰ類のノッチが彫刀面作出によって欠失し、結果としてⅡ類やⅢ類が作出されるのであろう。

一方、彫刀面の打面付近に加工が施されないⅣ類はほとんど認められないものの、折断面に二次加工を施さず打面とするものがわずかに存在する。いずれにしても彫刀面作出において、その打点となる周辺の加工を重視していることが理解される。また、彫刀面を打面とするⅤ類が北海道・東北を中心に認められることも特徴的といえる。

⑤フラットグレーバー状剥離の有無と加工範囲（図 15・16）

フラットグレーバー状剥離は、各遺跡ともほぼ半数以上の資料に認めることができた（図 15）。このような高率で認められることを勘案すれば、荒屋型およびその周辺形態にとって極めて重要な要素ということができる。それでは、フラットグレーバー状剥離は、どのような範囲に施されるのであろうか。

集計の結果、各遺跡ともほとんどが彫刀面の打点付近に認められた。打点から離れるにしたがって、加工頻度が減少していくことは明らかである。中間部・末端部に施される場合であっても、例外なく打点付近から連続する。すなわち、フラットグレーバー状剥離は、切っ先周辺に施すことを原則としていることがわかる。さらに、これが彫刀面作出の準備過程とも評価される右肩の彫刀面と連続的に分布する資料の存在も注目される。双方の関係については、より厳密な観察によって検討しなくてはならない。

また、フラットグレーバー状剥離が施される場合、彫刀面と裏面とがなす角度は、ほとんどが直角あるいは鈍角である点は重要である。特に、打点付近において裏面側に偏る傾向があり（山田 1984）、相互の関連が想定される。すなわち、この傾向は彫刀面と表面とがなす角度が鋭角であることを意味しており、この角度を調整して直角に近い状態に仕上げた可能性がある（図 15 右下の∠b）。

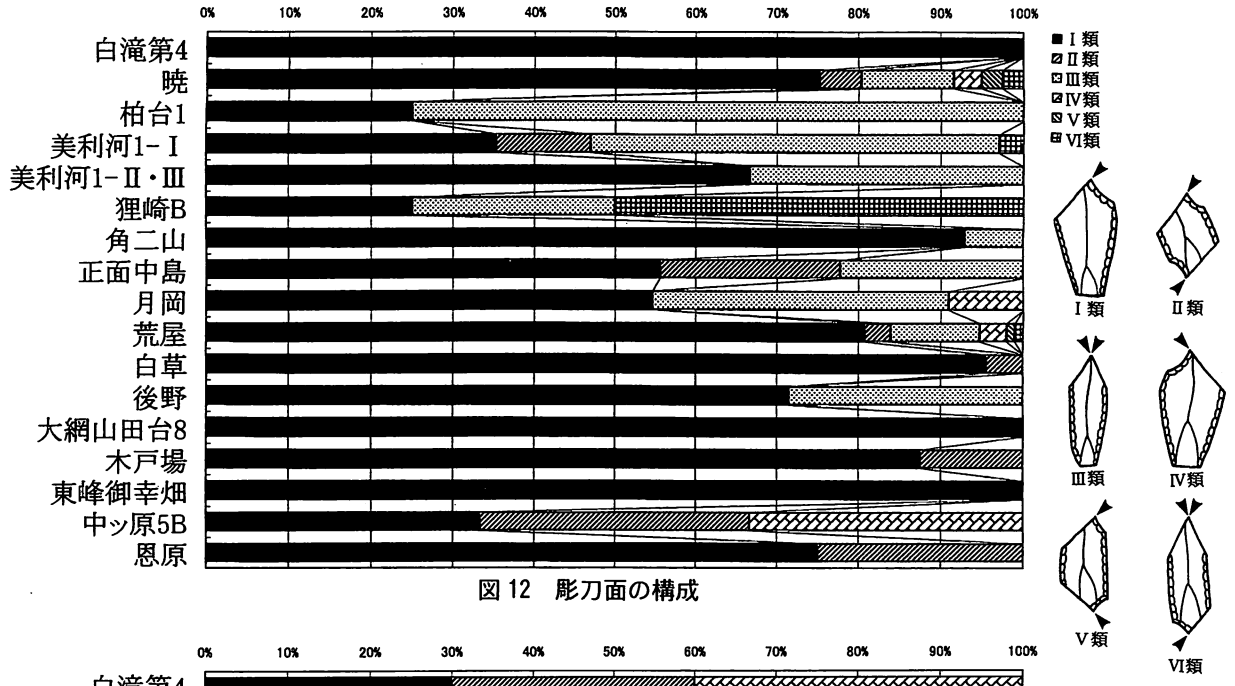


図 12　彫刀面の構成

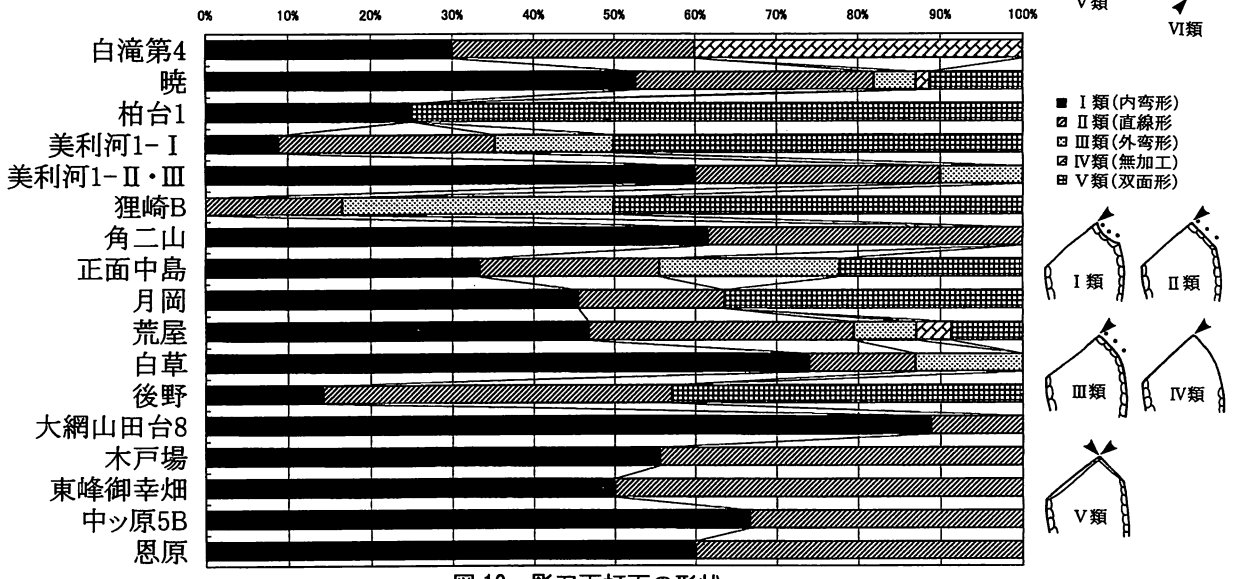


図 13　彫刀面打面の形状

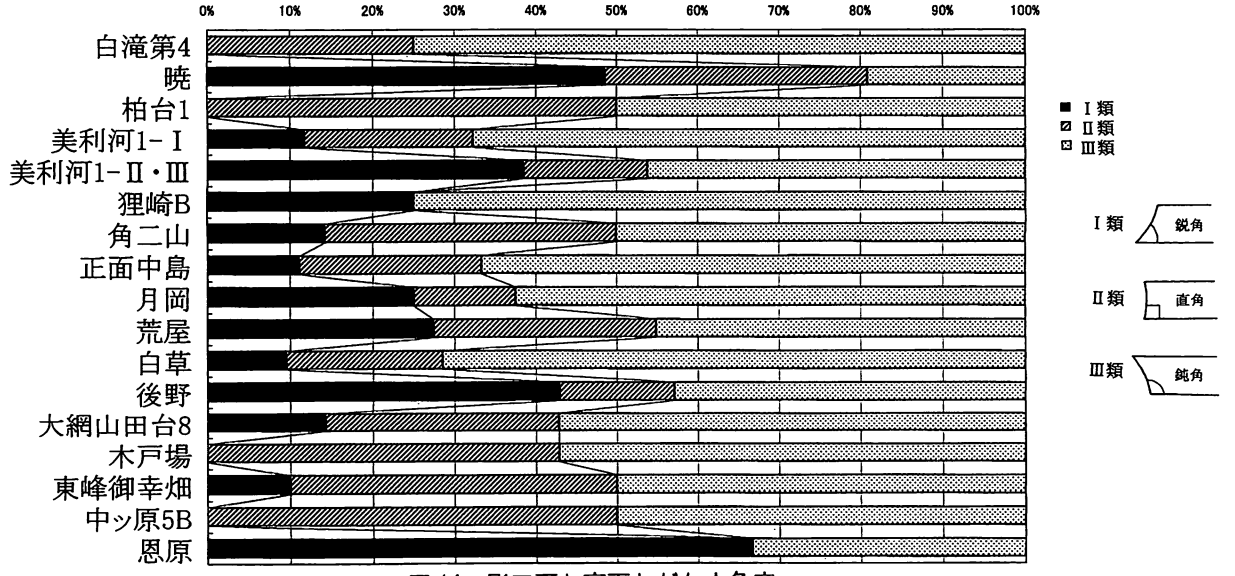


図 14　彫刀面と裏面とがなす角度

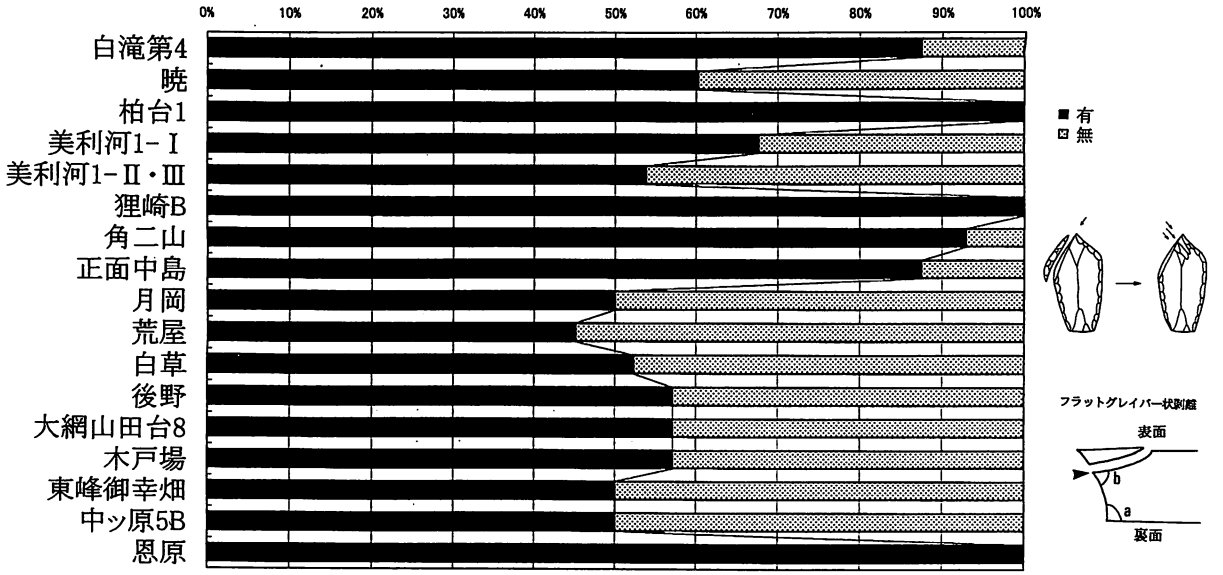


図 15　フラットグレイバー状剥離の有無

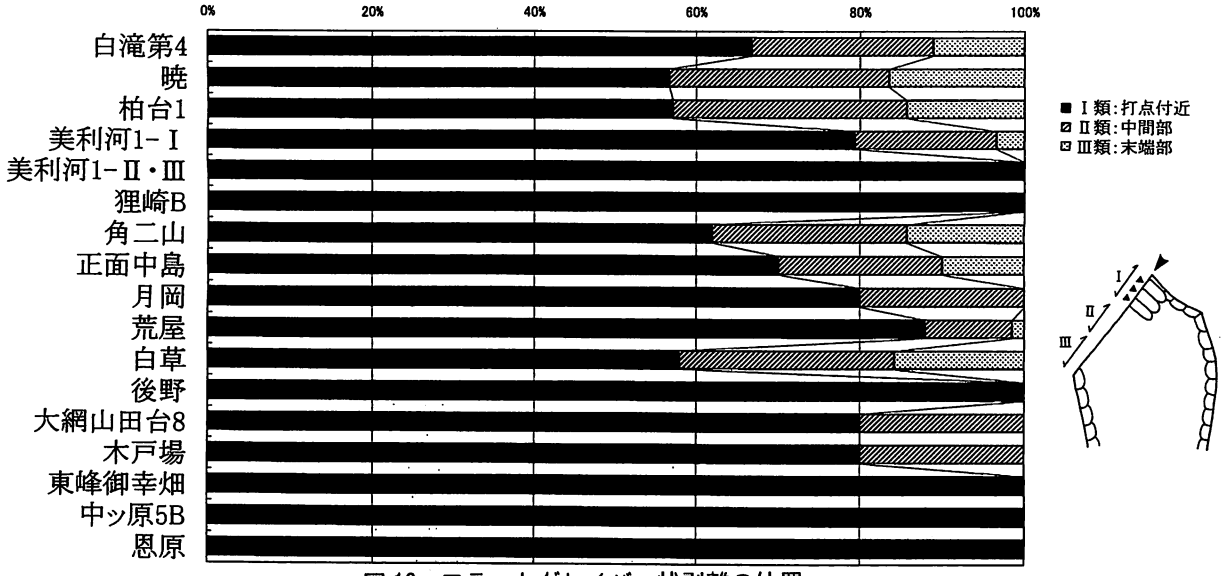


図 16　フラットグレイバー状剥離の位置

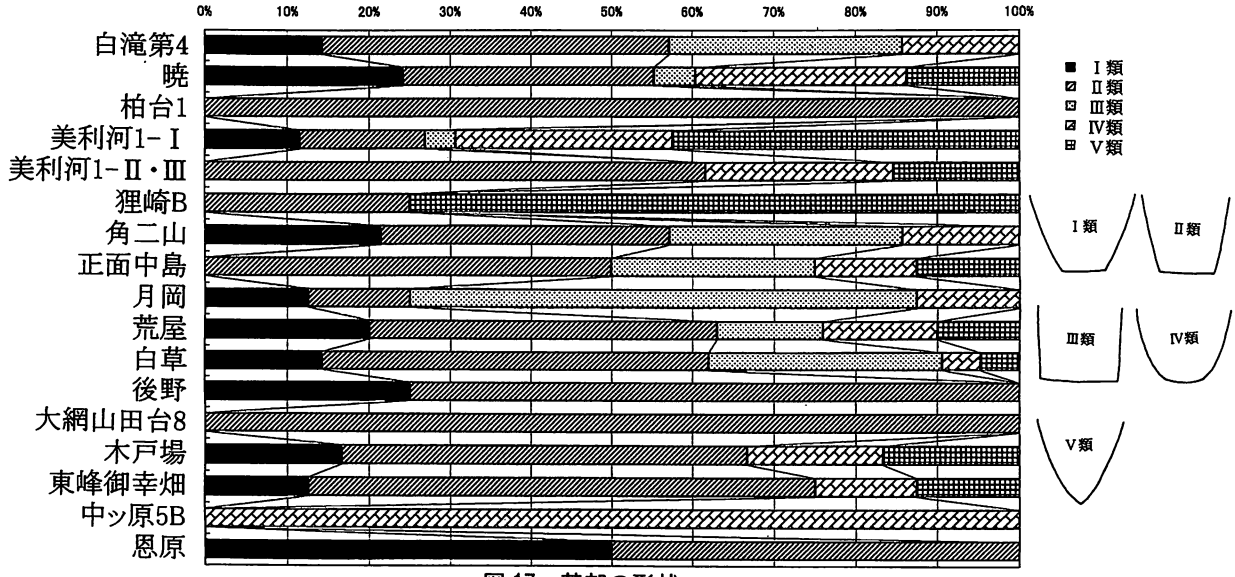


図 17　基部の形状

(3) 形

①大きさ（図7・8）

長さと幅についての計測値は、素材との関係で触れたとおりであり、ここでは各遺跡の平均値を示すこととした（図7）。そして、長さと幅の計測から導き出された長幅比と厚さの平均値を示した（図8）。

長さは、3.5～6cmほどと幅広いが、頁岩原産地と離れるに従い小形化することは先述のとおりである。一方、幅は1.5～3cmの間に認められるが、ほとんどが2～3cmの内に収まる。長幅比は、1：1～1：3の内に収まるが、地域差を認めることができる。北海道および狸崎B・月岡・正面中島が1：2～1：3の内に収まるのに対し、それ以外の資料はすべて1：1～1：1.5の間である。すなわち、縦長のものと、寸詰まり気味のものとに大別できる。

厚さについては、この長幅比と密接に関係する結果が得られている。厚さの集計結果は0.6～0.9cmの内に収まるが、長幅比1：2～1：3のものの厚さは0.8～0.9cm、1：1～1：1.5のものは0.6～0.7cmである。このことは素材剥片の剥離過程の相違を反映していると考えられる。なお、裏面加工やフラットグレーバー状剥離により厚さが調整されていることも予想されるが、それ以上に素材剥片の厚さの差が反映されていると考えられる。

②彫刀面と裏面とがなす角度（図14）

荒屋型彫器における彫刀面と裏面の境界付近には、使用痕が確認されている（山田1984、芹沢ほか1990、美安1995、堤1997）。その資料をみると、両者がなす角度が直角あるいは鈍角である場合が多い。ただし、130度を超える場合には使用痕が確認されていない（堤1997）。鋭角の資料については使用痕が確認されていないわけではないが、存在が明らかになっている資料においては少数派である。

この状況と対応するかのように、彫刀面と裏面とがなす角度は直角または鈍角であることが多い。鈍角のものは50～70％前後、直角のものも20～50％前後と多くの資料に認められる。両者を合わせれば、80％以上の資料が90度以上の角度を有することとなる。また、鈍角や鋭角であっても直角に近い値のものが多い。鈍角に偏るものの直角に近い資料が主体を占めるといえる。荒屋の資料について、綿貫氏・堤氏、竹岡氏、菅沼氏によって具体的な角度の在り方が指摘されている（綿貫・堤1987、菅沼1999）が、同様の傾向は他の遺跡に共通して指摘することができる。

ただし、暁、美利河1-Ⅱ・Ⅲ、後野、恩原においては、鋭角の資料が50％に近い値を示している。このうち後野については、鋭角といっても直角に近い値を示すものであるが、そのほかについては彫刀面が表面に大きく偏る状況にある。特に、資料数が多い中で安定的に存在する暁、美利河1-Ⅱ・Ⅲについては、荒屋の彫器と大きく異なる。恩原については資料数が少ないものの、表面に著しく偏った資料が多く異質といえる。

③先端角（図18）

先端角は、全国的には90度台を中心に、70～110度台にほとんどの資料が含まれる。中でも80～100度台に60％を超える資料が含まれる。この角度の分布は、一般的な剥片剥離の打角と共通しており、彫刀面剥離を意識した準備過程と関係する可能性がある。

しかし、顕著な地域差を窺い知ることもできる。北海道および恩原は先端角が70～80度台に、本州東北部は90～100度台にピークを認めることができる。すなわち先端角は、前者では鋭角をなすものが、後者では鈍角をなすものが主体であることが明らかである。この状況は、彫器の形態差と密接に関わる。鋭角のものは細長い形態に、鈍角のものは寸詰まりの形態に特徴的に認めることができる。

また、彫刀面と裏面とがなす角度の状況ともよく対応する。その角度が鋭角のものは先端核も鋭角、鈍角のものは先端角も鈍角となっていることがわかる。双方に有意な関係を認めることができるかもしれない。

④彫刀面の位置（図19）

基軸を基準にａ基端部の中心点、ｂ彫刀面の打点、ｃ彫刀面の末端の3点を結線してグラフ化したのが図19である。このグラフから、切っ先が先端ほぼ中央に位置することは明らかである。ただし、須藤氏・会田氏が指摘しているとおり、彫刀面の変形を繰り返すことで「彫刻刀面の位置、打撃点の位置はより右肩に移動」する（芹

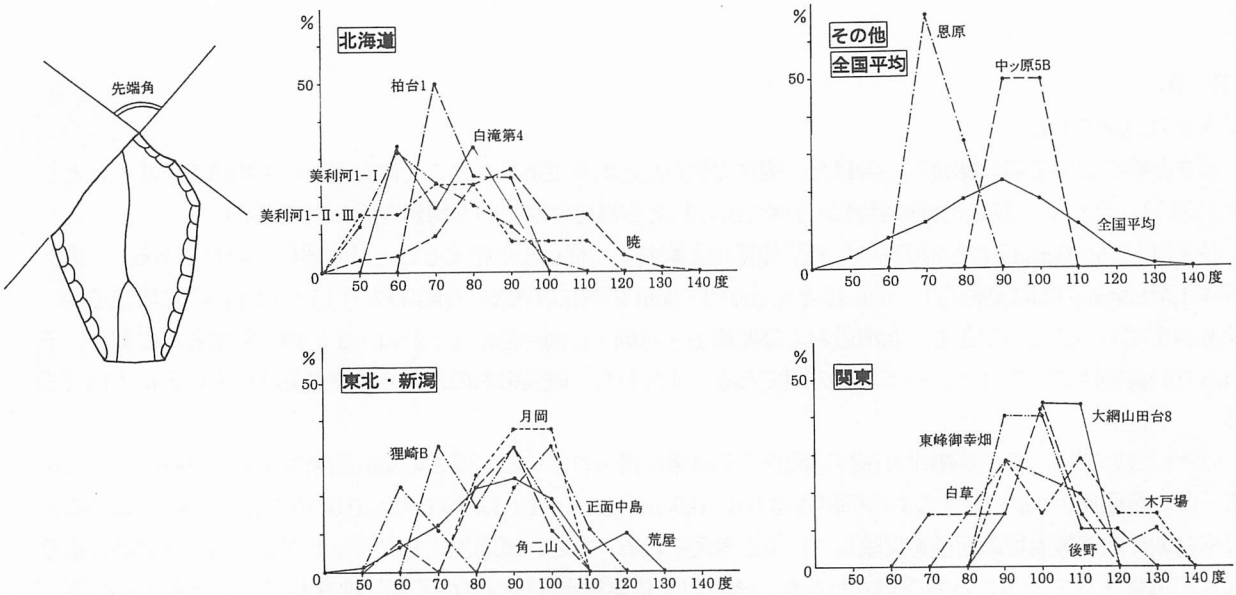


図 18　先端角の計測値

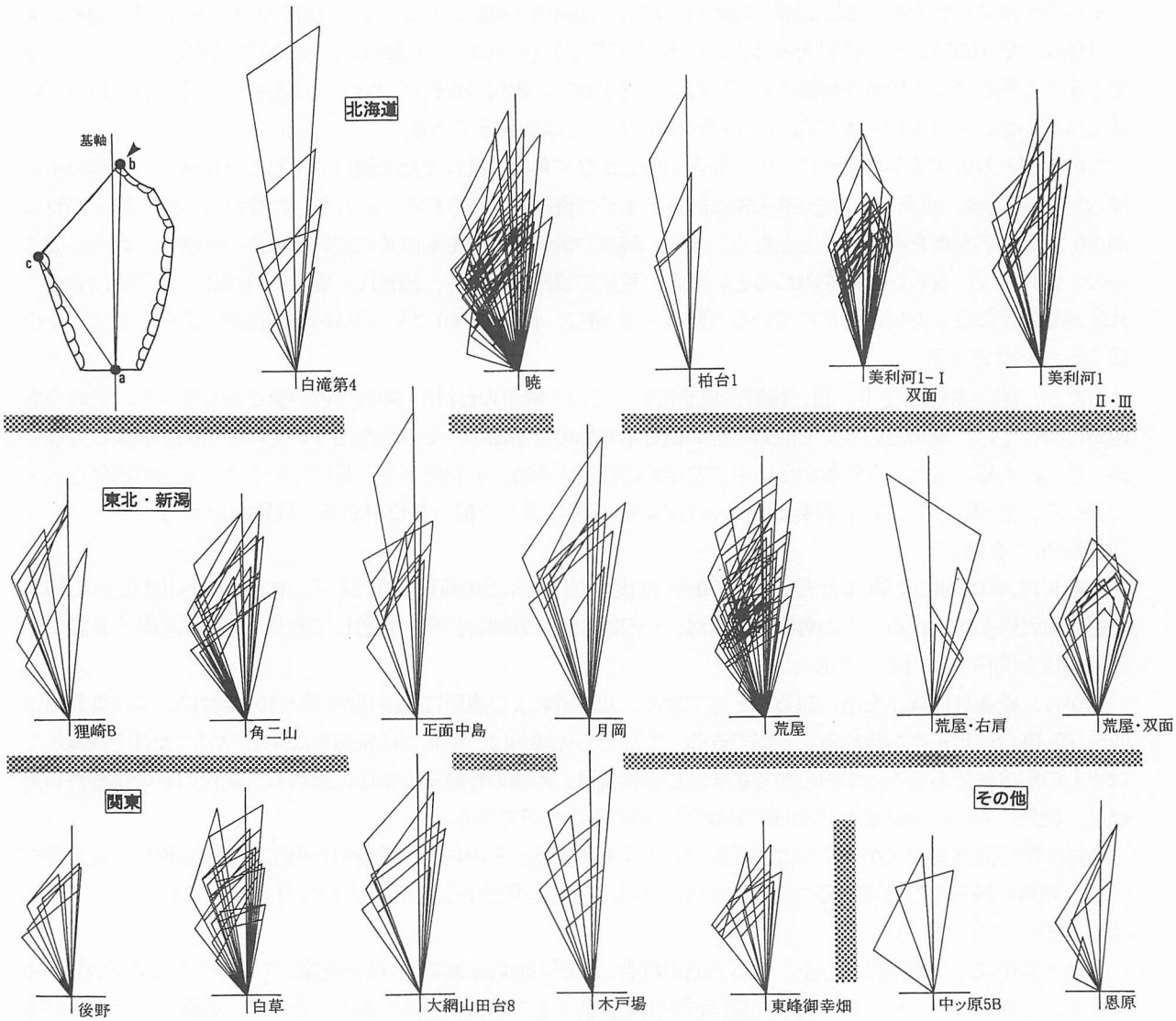


図 19　基軸に対する彫刀面の位置（S=1／4）

沢ほか 1990）ため、彫刀面打点がやや右側に偏るものが多い。なお、切っ先が基軸の左に偏り彫刀面が器体の側方に形成されるもの、右に偏り器体を横断するように形成されるものなど、バラエティーの存在を理解することができる。

各遺跡において総じて相似形を描くことがわかる一方、地域間に顕著な相違が認められる。北海道では基端部を頂点とする角度が 15～30 度ほどと小さく、本州では 20～40 度ほどとより大きく幅広い。これに対し、彫刀面の打点を頂点とする角度は、両地域とも多くが 20～40 度を測る。この両者の角を比較すると、北海道では「基端部を頂点とする角＜彫刀面の打点を頂点とする角」、本州では「基端部を頂点とする角≒彫刀面の打点を頂点とする角」ということになる。すなわち、彫刀面の打点を頂点とする角が、北海道ではより大きく、本州ではより小さいということになる。このことは、北海道では彫刀面の位置が素材をより短く断ち切るように、本州ではより長く側縁に偏ることを意味する。また、これに伴い、基軸と彫刀面がなす角度は北海道で 20～50 度、本州で 30～60 度ほどを測り、基軸に対する傾きが若干異なる。

このことと連動するように、彫刀面の長さは各地域とも 2～3cm ほどであるが、器体の長さに対する比率をみると、より長い北海道では短く、より短い東北・関東では長いといえる。殊に、本州では彫刀面の末端を頂点とした二等辺三角形に近いものがより多く特徴的である。すなわち、器体の大きさに係わらず、一定の長さの彫刀面が作出されたといえる。

また、荒屋の右肩彫器（Ⅳ類）および双面彫器（Ⅲ類）、美利河 1-Ⅰの双面彫器（Ⅲ類）について、各頂点を結線したグラフを作成した。これをみると、Ⅳ類は、左肩の彫器（Ⅰ類）と基軸を中心としてほぼ線対称の形態をなすことがわかる。Ⅲ類は、各遺跡におけるⅠ類と左肩については共存するが、右肩はより短く基軸となす角度がより大きい。すなわち、左肩の彫刀面がより基軸に対する角度がより小さく長いのに対し、右肩はより角度が大きく短いといえる。右肩の彫刀面は、周縁加工により作出された張り出しの角度・長さと概ね一致しており、左肩の彫刀面作出時の打面としての役割を果たした可能性がある。相互の切り合い関係など、より詳細な検討が必要となろう。いずれにしても、左肩の彫刀面の作出をより重視しているものと考えられる。

⑤基部形態（図 17）

基部の形態は、大きく平基（Ⅰ～Ⅲ類）、円基（Ⅳ類）、尖基（Ⅴ類）に分類することができる。この大枠による構成をみると、各遺跡とも平基を安定的に組成することがわかる。しかし、その比率をみると、北海道では遺跡間で各形態の構成比が異なるのに対し、本州東北部（東北～関東）では平基が圧倒的に多いことがわかる。

平基は、基軸に対する側縁の開き具合によりⅠ～Ⅲ類に細分したが、基軸に対し左右 10 度ほどずつ開くⅡ類が最も多い。特に、関東では圧倒的多数を占める。20 度以上開くⅠ類も、Ⅱ類のような高率ではないが、10～20％の割合で安定的に加わる遺跡が多い。Ⅰ類については、円基のⅣ類との形態的連続性が認められ、共存する在り方が理解される。基軸とほぼ平行する側縁のⅢ類は、白滝第 4 と山形～新潟付近で 20％前後と安定的に加わる。円基Ⅳ類は、北海道南部の資料を除けば 10％前後と比率は小さいものの安定的に加わる。尖基Ⅴ類も 10％前後と比率は小さいものの安定的に加わる。

基部の分類と二次加工との関わりをみると、一定の傾向を把握できる。平基は、片面加工による周縁調整が圧倒的に多い。ただし、素材剥片の打面側が基部に充てられる場合は、基端部への二次加工は施されない傾向が強い。また、Ⅲ類は石刃状の素材に二次加工を施さないものが多い。すなわち、Ⅲ類については、両側縁が平行する素材剥片の形状を大きく修整しないものが特徴的といえる。円基には、裏面加工が特徴的に加わる。基部の丸みは、裏面加工により形成されたものと考えられる。尖基は、両面調整により尖頭器状に仕上げられたものと、両端に彫刀面が作出されるものとが存在する。前者は北海道で特徴的に認められるのに対し、後者は北海道から関東まで幅広く認めることができる。

このように基部形態にはいくつかのバラエティーを認めることができるが、これは二次加工の在り方と密接に関連するといえる。また、着柄との関係については、今回の検討結果のみでは充分な裏付けをもって指摘することはできない。むしろ、両端に彫刀面が作出される資料の存在を考えれば、裏面加工の存在をもって一概に着柄の可能性を指摘することはできない。また、芹沢氏らが指摘する有舌尖頭器のような基部を有するものは、ごく

少数にしか認められない。着柄の実態を解明するのであれば、基部の幅や微細な着柄痕跡などの検討が必要となろう。

6　荒屋遺跡出土の彫器

これまで検討してきたとおり、「荒屋型」およびその周辺形態とされる彫器は、多様であることがわかる。この多様性すべてを荒屋型とすることは問題であるが、多様な形態の組合せによって表現されるべきかもしれない。こういった側面は、付帯要素として取り上げられてきた点を反映している。また、地域間での様相が異なることも明らかになった。特に、北海道と本州東北部の様相は大きく異なり、本州東北部においては比較的形態的斉一性を強く認めることができる。

このような現状を鑑みれば、荒屋型彫器については、芹沢氏が提示した荒屋遺跡の第1次調査の資料を基準に考えるべきであろう。その実態解明が急務であり、資料の公表が望まれる。しかしながら、第2・3次調査の概報やいくつかの資料紹介をみれば、極めて限定の強い形態であることが理解される。一方で、細部においては豊かなバラエティーが認められることも明らかになった。荒屋遺跡出土彫器の概要をまとめると次のようになる。

①素材

・原則として珪質頁岩が用いられる。
・両面調整体に近い扁平な石核から剥離された縦長剥片を素材とする。石核となった両面調整体は、細石核の原形となった可能性が高い。
・素材には、長幅比1：1～1：2の縦長剥片が多用される。しかし、横長剥片を使用することも稀にある。
・素材剥片の表面を構成する剥離軸は、主要剥離面と同一方向であることが多い。しかし、90度方向の打面転位を示す資料も安定的に認められる。
・素材剥片の剥片剥離軸を彫器の基軸とすることが原則である。特に、素材剥片の打面を基部側に充てるものが85％と大多数を占める。なお、横長剥片を素材とする場合は、長軸（剥片の計測における幅の側）を基軸とする。

②加工

・急角度な周縁加工がほぼ全周に施される。
・基部裏面に平坦剥離が施されることがあるが、その頻度は極めて低い。
・彫刀面は、左肩に施すことを原則とする。しかし、少数ながらも、上下両端、右肩、双面に施されるものも認められ、それらの組合せから構成される。なお、双面の場合、左肩の彫刀面がより長く作出されており、左肩がより強く意識して作出された可能性が高い。
・彫刀面の打面は、周縁加工と連続して形成される。急角度な内弯状の加工面を打面とする場合が多い。
・フラットグレーバー状剥離が半数近くの資料に認められる。その加工部位は、彫刀面の打点周辺に偏って分布する。

③形

・大きさは、長さ2.5～6cm、幅1.5～3cm、厚さ0.5～0.7cmほどである。平均値は、長さ4cm、幅2.2cm、幅0.6cmである。
・長幅比は1：1～1：1.5の間に収まる資料が大多数であり、寸詰まりな形態が多い。
・切っ先は器体先端のほぼ中央に位置するが、やや右方に偏る傾向がある。
・彫刀面と裏面がなす角度は、90度前後～鈍角を示すものがほとんど（75％）である。
・基軸と彫刀面がなす角度は30～60度ほどである。双面彫器においても、同様の傾向にある。
・彫刀面の長さは2～3cmほどである。
・先端角は90度前後の資料がほとんどである。
・基部形態は、先端と比べると細身に仕上げられており、基軸に対し両側縁が左右に10度ほどずつ開く平基で

あるものが多い。ただし、裏面加工が加わる場合は、より円味を帯びた形態をなす傾向にある。

7　荒屋遺跡出土資料と他地域の資料

荒屋遺跡出土の資料と他地域の資料を比べたとき、多くの共通点を見出せる一方、相違点の存在を看過することはできない。総じて北海道内の資料との相違は顕著である。中でも、蘭越型・峠下型・広郷型細石核に伴う一群は、石刃ともいいうる縦長剥片を素材とする点、縦長の形態をなす点、双面彫器が多数を占める点、先端角および彫刀面と裏面とがなす角度が鋭角である点など、荒屋の資料とは大きく異なる。特に、素材の相違については注意を払わなくてはならない。

荒屋の素材剥片において特徴的なことは、表面の剥離軸が多方向から構成される比率がより高いことである。裏面の剥離軸と一致するものが優位であるが、そのほかに様々な剥離軸を伴うことが多い。このことは、打面転位を頻繁に行った結果と考えられる。こういった表面の剥離軸構成と対応する石核となると、荒屋出土の扁平石核（芹沢 1959ｂ、織笠 1979、図 10-6）を挙げることができる。しかし、おびただしい数の彫器が出土しているにもかかわらず、それと対応する石核がわずかしか出土していない（大塚 1968、水村 1977）。しかも、その石核は、両面調整体や打製石斧にも似た（芹沢 1959ｂ）ものであり、細石核原形になり得るものである。荒屋における荒屋型彫器と細石核の接合資料（芹沢ほか 1990、図 10-7）は、この予測を裏付けるものといえる。すなわち、彫器･掻器･削器の素材となる縦長剥片のみを得ることのみを目的とした石核は準備されなかったと考えられる。同様の素材は、角二山・白草・後野・大網山田台 No.8・木戸場・東峰御幸畑西に認められる。角二山を除けば、比較的、頁岩原産地から距離を置いた地域に認めることができる。荒屋の資料は、どちらかといえば頁岩原産地から遠距離にある関東方面の資料に共通点が見出せるのである。

この状況とは対照的に、北海道および本州東北部の狸崎Ｂ・正面中島・月岡においては、裏面の剥離軸と表面の剥離軸が一致する縦長剥片が多用される。この種の素材を用いる石器群には、縦長剥片の石核が伴う（図 10-2～5）。黒曜石依存地帯の白滝第４では黒曜石製、珪質頁岩依存地帯の美利河 1・狸崎Ｂ・月岡で珪質頁岩製の縦長剥片石核が報告されている。石核は、入念な打面調整を行わない単設あるいは両設打面の大形品であり、作業面には平行する複数の稜線が確認される。共伴する石核と、表面を構成する剥離面の剥離方向の分析結果が一致するといえる。斉一性の高い形状は、こういった石核から連続的に獲得された結果と考えられよう。また、このような石核を出土する遺跡の多くは、背後に原産地が存在する。石核が大きいことは、その反映ということができる。このような状況から考えるに、これらの遺跡から出土した彫器の素材は、細石刃の製作と一体化せず、別途に製作されていた可能性が高い。素材の相違は、加工や最終的な形態にも大きな影響を与えており、素材の斉一性が強い一群においては、二次加工による形状修整の度合いが比較的小さいものと推察される。

一方、荒屋を含む素材の斉一性が弱い一群においては、必然的に二次加工による形状修整の度合いが、より大きくなる。すなわち、素材の形状には強く固執せず、横長剥片が用いられる場合もある。このことからは、剥片剥離の過程よりも大きさの確保を重視する在り方が理解されるのである。実際、それらの資料は、素材以外の条件が二次加工によって満たされている。このような資料の存在が、形態的多様性を生み出す大きな要因となっているのであろう。また、この一群の彫器は、寸詰まりで小形であることが多い。これは、素材が小形であること、変形を繰り返していること、双方の要因が複合した結果と考えられる。原産地と消費地の関係が遠隔地へいくほど小型化、利用効率化の傾向を示すとされる（梶原 1991）が、そのことを象徴するかのような現象といえよう。

ただし、荒屋で使用されている珪質頁岩の総量を勘案すれば、周辺に珪質頁岩の原産地が控えていることも予想される。比較的近隣に位置する正面中島においては、細石刃製作とは一体化しない剥片剥離から得られた大形の縦長剥片が多用されており、一見すると、その可能性を支持するかのような状況とも捉えうる。しかし、在地石材による補給が一部に認められるものの、基本的には遺跡内で珪質頁岩の剥片剥離を行った形跡を積極的に認めることはできない（佐藤・佐野 2002）。素材あるいは完成品の状態で搬入された可能性が高いといえよう。やはりこの場合でも珪質頁岩の原産地が近隣に控える状況を、石器から説明することは難しいのである。なお、この両者をめぐっては編年差の存在が指摘されており（吉井 1999）、相違がそういったことに起因する可能性もあ

ろう。しかし、筆者は石器搬入の状態の相違、遺跡をめぐる環境の相違を反映している可能性がより高いと考えている（加藤学 2001）。

このように、製作順序が共通する近隣の遺跡間でも、遺跡が置かれた環境によって、素材・加工・形の在り方は異なることが予想されるのである。これは、単に大きさの相違や石材原産地からの距離関係のみで説明できる課題ではなく、石器群全体を総括して判断されなくてはならない。

8 おわりに

本稿では、荒屋型彫器およびその周辺形態を対象として形態的検討を試みた。広域の資料を対象とし、石器観察の3つの視点（素材・加工・形）を等質的に比較することに留意して分析した。石器の形態を、様々な要素に解体して分析し、要素を再び結合することで形態認識することを目指した。

その結果、「荒屋型」とされてきた彫器は、これまでいわれているように、多くの共通項を有する特徴ある形態として認識できた。しかしながら、それと同時に実に多様な形態から構成されていることも明らかになった。このことは、1点ごとの石器の個性が表徴された結果ではなく、偶発的には生じ得ない遺跡間・地域間の相違に帰結する問題と考えられた。

そこで、標識遺跡である荒屋遺跡の彫器の地域的位置付けを検討したところ、今回の分析からは、関東地方との共通性がより強く見出された。一方で、東北地方以北、殊に北海道の資料とは異なる要素が多々認められた。加藤晋平氏は、荒屋遺跡出土の「荒屋型彫器」が北海道や大陸のものと異なることを指摘した上で、芹沢氏が示した荒屋型彫器を「本州化が進んだもの」と評価したことがある（加藤晋平 1984）。このことは極めて重要な指摘であったにもかかわらず、その後、「荒屋型彫器は、その存在によって、本州中部と北海道の先土器時代文化相互の関係が論ぜられることがあっても、東北地方に多い彫器と北海道の彫器との関係は、具体的になに一つ語られないといったようなことがある。」（戸沢 1990）。

本稿では、このような問題を抱えた地域間の相違を具体的に示したことに、一定の意義を見出すことができよう。しかし、この「地域性」と「型式」との相関については大きな課題がある。地域間に認められた相違は、遺跡が置かれた環境の相違を反映するものと予測されたからである。すなわち、共通する技術を有していても、環境の相違に応じて異なる形態が作出され得ると考えられた。また、変形論（山科 2002）との整合性についても、今後の大きな課題と考えられる。特定の石材利用に固執する「荒屋型」の範疇理解においては、特にそのような要素を含めて検討しなくてはならないのであろう。

謝 辞

本稿執筆にあたっては次の方々から貴重なご教示を賜りました。末筆ではありますが、深く感謝申し上げます。

織笠 昭先生、織笠明子氏、大倉 潤氏、佐藤雅一氏、澤田 敦氏、鈴木俊成氏、立木宏明氏、堤 隆氏、中沢祐一氏、永塚俊司氏、山本 克氏、吉井雅勇氏

追記

本稿は、織笠 昭先生のご指導を得て、平成15年3月末に脱稿したものである。脱稿後間もなく、先生のあまりに早い訃報に接することになった。ご冥福を祈りつつ、本稿を先生に捧げたい。

引用・参考文献

安蒜政雄 1983「縦長ナイフ形石器の製作」『季刊 考古学』4 雄山閣

稲田孝司 1982『旧石器時代』日本の美術188 至文堂

稲田孝司編 1996『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団

宇野修平・上野秀一 1975「角二山遺跡」『日本の旧石器文化2 遺跡と遺物（上）』雄山閣

大塚和義 1968「本州地方における湧別技法に関する一考察」『信濃』20－4 信濃史学会

小野　昭 1986「第 1 章　旧石器時代の社会と文化」『新潟県史』通史編 1　原始・古代　新潟県
織笠　昭　1979「中部地方北部の細石器文化」『駿台史学』47　駿台史学会
織笠　昭　1984ａ「細石器文化組成論」『駿台史学』60　駿台史学会
織笠　昭　1984ｂ「石器形態の復原」『東京考古』２　東京考古談話会
織笠　昭　1990「茂呂系ナイフ形石器の形態学的一考察－茂呂遺跡の資料による石器器体角度研究－」『石器に学ぶ』3　石器に学ぶ会
梶原　洋　1991「石器群形成に及ぼす石材環境の意義」『北からの視点』日本考古学協会宮城仙台大会シンポジウム資料集
加藤晋平　1984「日本細石器文化の出現」『駿台史学』60　駿台史学会
加藤晋平・鶴丸俊明　1991『図録・石器入門事典〈先土器〉』柏書房
加藤　学　1998「いわゆる角二山型掻器の検討－荒屋遺跡採集の掻器から－」『新潟考古学談話会会報』19　新潟考古学談話会
加藤　学　1999「荒屋型彫器の地域間対比－素材剥片の検討を中心として－」『新潟考古学談話会会報』20　新潟考古学談話会
加藤　学　2001「荒屋遺跡と中土遺跡－共通点と相違点の実態把握と検討」『研究紀要』3　新潟県埋蔵文化財調査事業団
加藤　稔　1973「東北地方の旧石器文化」『山形県立山形中央高等学校 研究紀要』3　山形県立中央高等学校
加藤　稔　1991「東北日本の細石器文化の展開」『山形県立博物館研究報告』12　山形県立博物館
川口　潤　1993『白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 129
川崎純徳・鴨志田篤二・安蒜政雄・矢島国雄ほか　1976『後野遺跡－関東ローム層中における石器と土器の文化－』勝田市教育委員会
北沢　実　1985『帯広・暁遺跡』北海道帯広市埋蔵文化財調査報告 1
北沢　実　1986『帯広・暁遺跡 2』北海道帯広市埋蔵文化財調査報告 5
北沢　実　1989『帯広市 暁遺跡の発掘調査』十勝考古学研究所調査報告 1
木村英明　1995「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学の諸問題』北海道考古学 31
栗島義明　1993「細石刃文化と石材環境」『細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅱ
剣持みどり　1979「角二山細石刃石器群の構造」『山形考古』3－2　山形考古学会
桜井美枝　1992「細石刃石器群の技術的構造－山形県角二山遺跡の分析－」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』
佐藤雅一・佐野勝宏　2002『正面中島遺跡』津南町文化財調査報告　第 37 輯
白滝団体研究会　1963『白滝遺跡の研究』
杉原荘介　1974『日本先土器時代の研究』講談社
鈴木重美　1958「越後川口町荒屋遺跡の発掘から」『ミクロリス』16　明治大学考古学研究室
菅沼　亘　1999「北魚沼郡川口町荒屋遺跡の採集資料について－彫刻刀形石器の分析を中心に－」『新潟考古』10　新潟県考古学会
菅原俊行・石川恵美子　1993『狸崎Ｂ遺跡　地蔵田Ｂ遺跡』秋田市教育委員会
杉原荘介・戸沢充則　1975『北海道白滝服部台における細石器文化』明治大学文学部研究報告考古学 第 5 冊
芹沢長介　1957『考古学ノート 1　先史時代Ⅰ無土器文化』日本評論新社
芹沢長介　1958「細石器問題の進展（その一）」『貝塚（考古ニュース）』82
芹沢長介　1959ａ「ローム層に潜む文化 先縄文時代」『世界考古学体系 1 日本Ⅰ』平凡社
芹沢長介　1959ｂ「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について」『第四紀研究』1－5　の本第四紀学会
芹沢長介　1974『古代史発掘 1　最古の狩人たち』講談社
芹沢長介　1986『旧石器の知識』考古学シリーズ 11　東京美術
芹沢長介・須藤隆・会田容弘・山田しょう　1990『荒屋遺跡－第 2・3 次調査概報』東北大学考古学研究室・川口町教育委員会
S.A.セミョーノフ（田中琢抄訳）　1968「石器の用途と使用痕」『考古学研究』14－4　考古学研究会
高原要輔・浅川文雄　2002「福島県会津若松市笹山原 No.27 遺跡」『第 16 回　東北日本の旧石器文化を語る会』予稿集
竹岡俊樹　1996「彫刻刀形石器の分析(上)(下)－『荒屋型・神山型・上ゲ屋型彫器』の再検討－」『古代文化』48－7・9　古代

學協会
田村　隆　1994『大網山田台遺跡群Ⅰ－旧石器時代篇－』山武郡市文化財センター
千葉県文化財センター　1987「木戸場遺跡」『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』千葉県文化財センター
立木宏明　1988「(2) 旧石器時代の遺跡」『FIELD　NOTE』5　新潟大学考古学研究部
筑波大学遠間資料研究グループ　1990『湧別川 遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録』北海道遠軽町教育委員会
堤　　隆　1997「荒屋型彫刻刀形石器の機能推定 －埼玉県白草遺跡の石器使用痕分析から－」『旧石器考古学』54　旧石器文化談話会
寺崎康史　1990『神丘2遺跡』北海道今金町文化財調査報告2
徳澤啓一　1999「星野コレクションの記録　川口町荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器」『越佐補遺些』4　越佐補遺些の会
戸沢充則　1990『先土器時代文化の構造』同朋舎出版
永塚俊司　1997「荒屋系細石刃石器群における一つの定点」『人間・遺跡・遺物』3　発掘者談話会
永塚俊司　2000『東峰御幸畑西遺跡（空港No.61遺跡）』千葉県文化財センター調査報告　第385集
長沼　孝　1985『美利河1遺跡』北海道埋蔵文化財調査報告書23
中村孝三郎　1961『越後の石器』長岡市立科学博物館研究調査報告第4冊
中村孝三郎　1965「中部地方北部の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』河出書房
中村孝三郎・小林達雄　1975「月岡遺跡」『日本の旧石器文化2　遺跡と遺物（上)』雄山閣
中村由克　1988「野尻湖・信濃川中流域の旧石器時代遺跡群と石器石材」『信濃』38－4　信濃史学会
野口　淳　1996「ナイフ形石器」『石器文化研究5　AT降灰以降のナイフ形石器文化～関東地方におけるⅤ～Ⅳ下層段階石器群の検討』　石器文化研究会
橋本勝雄　1989「東日本の細石器文化－東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究の動向－」『考古学ジャーナル』306　ニュー・サイエンス社
福井淳一　1999『柏台1遺跡』北海道埋蔵文化財調査報告書　第138集
松浦五輪美　2000「荒屋型彫器」『旧石器考古学辞典』旧石器文化談話会編　学生社
松谷純一　1987『白滝第4地点遺跡』北海道白滝村教育委員会
水村孝行　1977「荒屋型彫刻器について」『埼玉考古』16　埼玉考古学会
美安慶子　1995「荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器について」『佐久考古通信』65　佐久考古学会
森嶋　稔　1974「一系列文化におけるグレイバーテクニックの変遷」『信濃』25－4　信濃史学会
八ヶ岳旧石器研究グループ　1991『中ッ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ
山科　哲　2002「荒屋形彫器の刃部再生」『駿台史学』115　駿台史学会
山田晃弘　1984「彫刻刀形石器の製作技術」『考古学ジャーナル』229　ニュー・サイエンス社
山中一郎　1982「荒屋遺跡出土の彫器－型式学的彫器研究の試み－」『考古学論考』
山原敏朗　1997「彫器の形態・技術・機能 －暁遺跡における2種類の彫器の分析視点から－」『先史考古学論集』6　安斎正人
山本　克　1998「川口町荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器」『越佐補遺些』3　越佐補遺些の会
山本　克・安部英二　2002「川口町荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器(2)」『越佐補遺些』7　越佐補遺些の会
吉井雅勇　1999「第1章　旧石器時代　第5項　細石刃石器群」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　高志書院
綿貫俊一・堤　隆　1987「荒屋遺跡の細石刃文化資料」『長野県考古学会誌』54　長野県考古学会

細石器文化における遺構

－　地域的偏在の把握と検討　－

加藤　学

1　はじめに

細石器文化の遺構については、すでに鈴木忠司氏（鈴木 1983）、辻本崇夫氏（辻本 1984、1993）、金山喜昭氏（金山 1992）、堤　隆氏（堤 2000）、小畑弘己氏（小畑 2000）等により詳細に解説されている。殊に、辻本崇夫氏の論考は、徹底した資料集成を基に解説されたものであり、資料が増加した現在においても論旨が大きく変更されることはない。また、日本考古学協会 2000 年度鹿児島大会『旧石器から縄文へ－遺構と空間利用－』においては、資料の集成がなされたほか、遺構の機能・性格に迫る論考も発表されている。

これらの先行研究があるため、筆者によって新たに加えるべき所見は少ないものと考えられるが、本稿では遺構の地域的偏在の状況に着目して若干の考察を加えることとしたい。なお、調査者の認識の相違もあり、遺構を統一的に理解・認定することは困難な状況であるが、大局的な傾向を把握することを目指したい。検討にあたっては、鈴木忠司氏・辻本崇夫氏の集成（鈴木 1983、辻本 1984）、日本考古学協会 2000 年度鹿児島大会における集成（日本考古学協会 2000）を基礎資料とすることとし、適宜、追加することとする。なお、本稿ではブロックやユニットといった遺物集中域については検討の対象としていない。

2　遺構の分類と分布

(1)　火処

火処は、炉跡として具体的に把握されているもののほか、焼土や炭化物の集中により把握されるものもある。しかし、より短期間に形成された火処は残存しない可能性もあり、調査で得られた所見は実態の一部と考えるべきかもしれない。したがって、今回の検討が必ずしも実態を反映していない可能性もあるが、裏を返せば明瞭に認識できた痕跡は仮設的な施設でないことを意味するかもしれない。

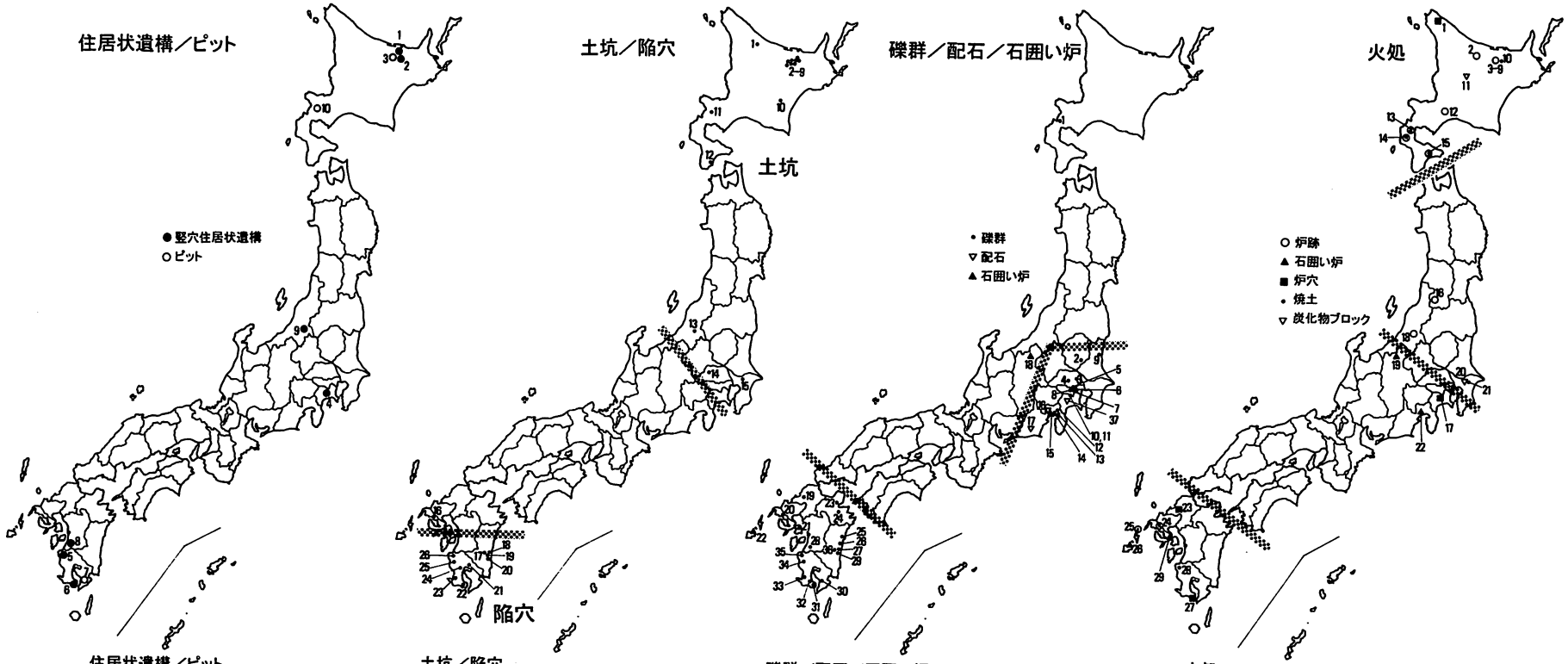
比較的長期間にわたって形成されたと考えられる炉跡は東北日本と九州で認められるが、中でも北海道に偏在する様子が理解される（図 1）。また、焼土も炉との関連を念頭に置くべき（鈴木 1983）であろうし、炭化物の集中も火の継続的利用を示唆するものである。焼土や炭化物集中についても、炉と同様に北海道に偏在する状況が理解できる。一方、石囲い炉はこれらと異なる地域的偏在の状況を示している。

石囲い炉は、1962・1964 年の休場遺跡（静岡）の調査で 2 基検出されている（杉原・小野 1965）（図 2）。これは、炉石内面に炭が付着するほか（1 号・2 号）、炉体の内部（炉底）に焼土や炭化物が明瞭に検出されており（1 号）、炉であることを具体的に把握できるものであった。このように石囲い炉の存在は、研究史上早い段階から注目されてきたものの、その後、類例が増加しなかったこともあり積極的に検討されてこなかった。

そのような状況の下、中村由克氏は上ノ原遺跡（長野）の発掘調査をとおして石囲い炉の検出を報告し（図 2）、その定義について「平面形：円形または半円形、U 字形、構成礫の大きさと個数：20～30cm の礫を 10 点前後利用するのが通常」とした（中村 1992、1993）。しかし、実際に焼土や灰が残されるのは稀で、炭化物の有無、構成礫の被熱状況（炉心側が著しく赤化を受けていることなど）の把握など、裏付けも必要と指摘している。

中村氏の集成によれば、細石器文化の石囲い炉は、休場遺跡と上ノ原遺跡のみであり、一般的な施設とはいい難い（堤 2000）ものの、2 遺跡が中部地方に偏在する状況は注目される。また、西北九州でも石囲い炉が認められる（茶園・鷹野 A、図 2）が、ナイフ形石器文化から継承される様相と考えられている（小畑 2000）。

このように事例の少ない石囲い炉ではあるが、礫群と形態的に共通する場合もままみられ、認定者の認識次第



住居状遺構／ピット

1. 上口A
2. 中本、北進
3. 広郷
4. 上和田城山
5. 上場
6. 水迫
7. 榎崎B
8. 石飛分校
9. 荒屋
10. 峠下

土坑／陥穴

1. モサンル
2. 上口A
3. 吉田
4. 間村
5. 中本、北進
6. 本沢
7. 常川
8. 広郷
9. 吉井沢
10. 南町
11. 峠下
12. 湯の里4
13. 荒屋
14. 白草
15. 高根北
16. 泉福寺
17. 別府原
18. 船野
19. 上ノ原、下屋敷
20. 垂水第一
21. 長ヶ原
22. 岩本
23. 志風頭
24. 仁田尾
25. 鹿村ヶ迫
26. 大久保

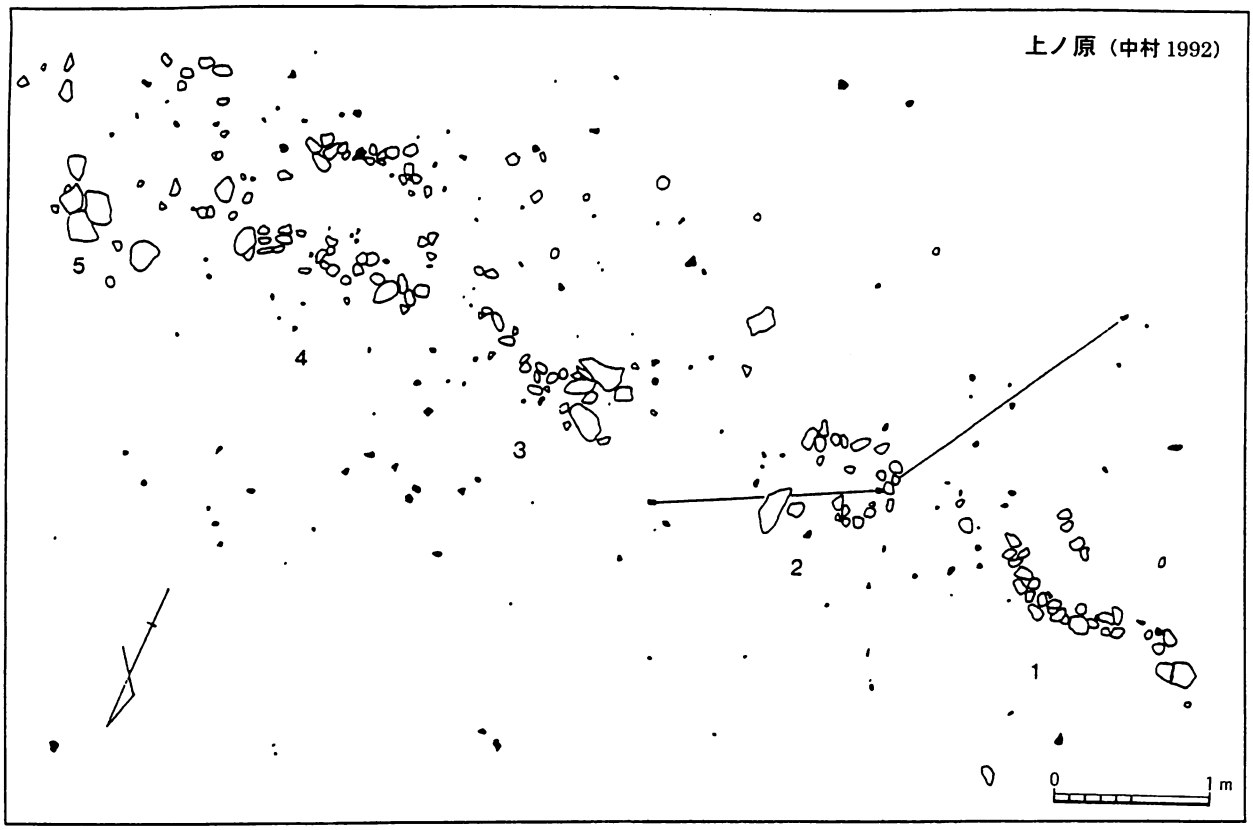
礫群／配石／石囲い炉

1. 立川1
2. 寺野東
3. 逆井
4. 下向原
5. 田無南町
6. 第五中学校
7. 御殿山ＩＤ
8. 野川中洲北
9. 額田大宮
10. 木曽森野
11. 小山高町
12. 野台
13. 中村C
14. 中三代Ⅲ
15. 休場
16. 西洞b区
17. 包坂中
18. 上ノ原
19. 乙幡木山城戸
20. 泉福寺
21. 百花台
22. 茶園Ⅴ
23. 口野尾、目久保第1
24. 市ノ久保
25. 赤木
26. 瀬戸口
27. 船野
28. 白鳥平B
29. 上ノ原
30. 榎崎A、榎崎B、西丸尾
31. 水迫
32. 帖地
33. 平田尻
34. 床並B
35. 上場
36. 別府原
37. 柏ヶ谷長ヲサ

火処

1. 浅茅野
2. 白滝Loc.32
3. 水口A
4. 吉田
5. 間村
6. 中本
7. 北進
8. 常川
9. 広郷
10. 吉井沢
11. 日東
12. 柏台1
13. オバルベツ2
14. 美利河1
15. 石川1
16. 湯ノ花
17. 上和田城山
18. 荒屋
19. 上ノ原
20. 復山谷
21. 高根北
22. 休場
23. 宮牟田黒龍
24. 泉福寺
25. 城ヶ岳平子
26. 茶園Ⅴ
27. 水迫
28. 上場
29. 鷹野A

図１　細石器文化における遺構の分布



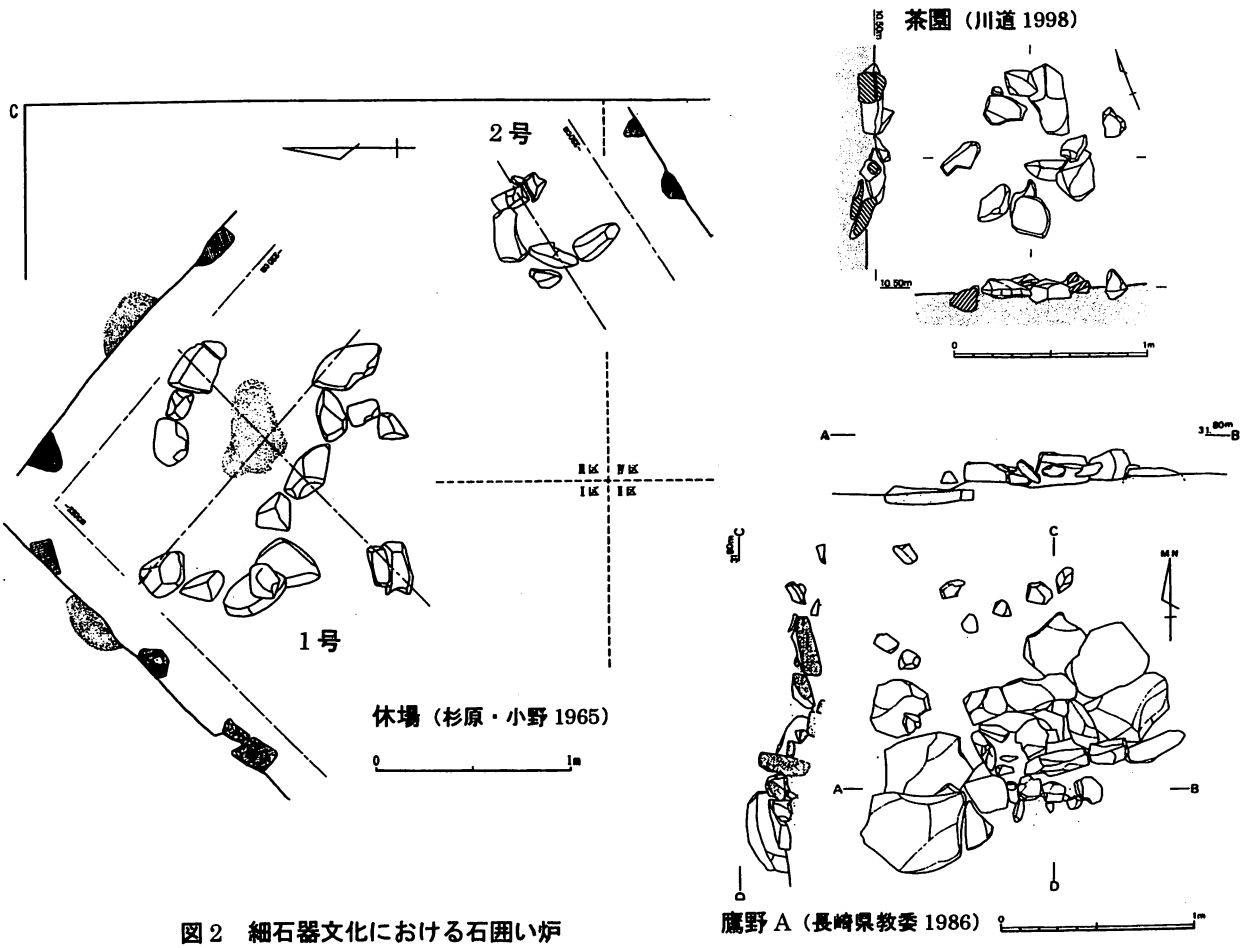


図2　細石器文化における石囲い炉

で、分類が異なる場合がある。すなわち、礫群として認識されているものの中に石囲い炉が含まれている可能性がある（辻本1993）。一方、小さな礫を主体とするものは、石囲い炉でなく礫群とすべきという見解もある（笹原・瀬川1992）。したがって、石囲い炉の認定にあたって評価が異なる場合があるが、礫群と比べると大ぶりな礫から構成される点、炉内を遮蔽するかのように礫が配置される点を勘案すれば、遺構の一つの在り方として積極的に評価すべきであろう。しかし、炉内から焼土や灰層は残される事例は少なく、機能面の評価については含みをもって考えておくべきかもしれない。

(2) 礫群

細石器文化において礫群が安定的に分布するのは、関東～東海地方および南九州のみである。いずれの分布の集中域とも、先行するナイフ形石器文化から継続的に礫群が盛行する地域といえる。また、関東～東海地方においては、稜柱形の細石核に伴うことも特徴的といえる。

検出された礫群は、1遺跡から数基検出されるのが通常であり、礫群の数・遺跡数ともにナイフ形石器文化と比べると少ない。ナイフ形石器文化に発達する礫群は、細石器文化になると一転弱体化する（辻本1984）といえよう。そういった状況の中で、26基の礫群が検出された東海地方の中見代Ⅲ遺跡（静岡）は特異な存在といえる。

南九州でも、帖地遺跡（鹿児島）で10基、榎崎B遺跡（鹿児島）で9基（図3）と、1遺跡から多数の礫群が検出されている。南九州における礫群の発達は、先行するナイフ形石器文化に発達する礫群、後続する縄文時代の焼礫集積遺構と関連付けて考えることができよう。すなわち、地域において類似した遺構が継続的に出現する状況が理解され、地域の伝統と捉えることもできる。他方、地域において継続的に出現する必然性については、検討を要する重要な視点といえる。

(3) 土坑

土坑については、1957年の荒屋遺跡（新潟）の発掘調査をとおしてすでにその存在が明らかにされている（芹沢1959）。その後の検出例は決して多くないが、山下秀樹氏の資料集成（山下1989）でも明らかなとおり、土坑の分布は北海道に偏在する。このほか、東北日本では荒屋遺跡・白草遺跡（埼玉）においても検出されているが、いずれも北方系の石器群を伴うものであり特徴的な事象といえる。形態の詳細については明らかでない面もあるが、断面が皿状をなすものが特徴的である。特に、湯の里4遺跡（北海道）では、径110×90cm、深さ30cm以上と推定される楕円形の土坑底面から赤色土壌が検出され、琥珀等の玉および細石核が出土した。また、赤色土壌の分布と重複するように脂肪酸が検出されており、埋葬に供した遺構と考えられている（畑1985）（図5）。具体的に埋葬の様子を示す、国内唯一の事例といえる。白草遺跡においては、径230×150cm、深さ50cmほどの断面皿状の土坑が検出されている。覆土からは細石刃25点・彫器削片2点等、99点の石器が出土しているうえ、覆土の上位からは火山灰As-Kが検出されている。石器群の年代観を検討する上で極めて重要な資料といえるほか、確実に細石器文化の遺構として捉えられる事例といえる（図7）。

一方、荒屋遺跡についてはこれらと異なり、ほぼ垂直に立ち上がる円筒状をなす比較的深い土坑であり特徴的といえる。部分的な発掘調査ではあるものの、その範囲内で切り合い関係をもちながら複数検出されている（図9）。この特徴的な土坑は、調査を実施した芹沢長介氏により貯蔵穴と評価されている（芹沢1960）。また、近年では大量に捕獲されたとされるサケの保存用施設であった可能性も指摘されている（堤2000）。

土坑は、北方系の石器群に伴うほか、九州（特に南九州）でも特徴的な形態のものが検出されている。土坑とされているものの多くは、隅丸長方形や円形の平面形態を示し、ほぼ垂直に立ち上がる深みの断面形態を呈する。これらは、南九州に特徴的に認められる陥穴と、形態上の連続性をもって捉えることができるのかもしれない。また、一部で皿状の土坑も確認されているが、主体的な存在かどうかは定かでない。

(4) 陥穴

陥穴は、南九州を中心に最近増加傾向にある（小畑2000）。それらは、細石器文化から縄文時代草創期にかけ

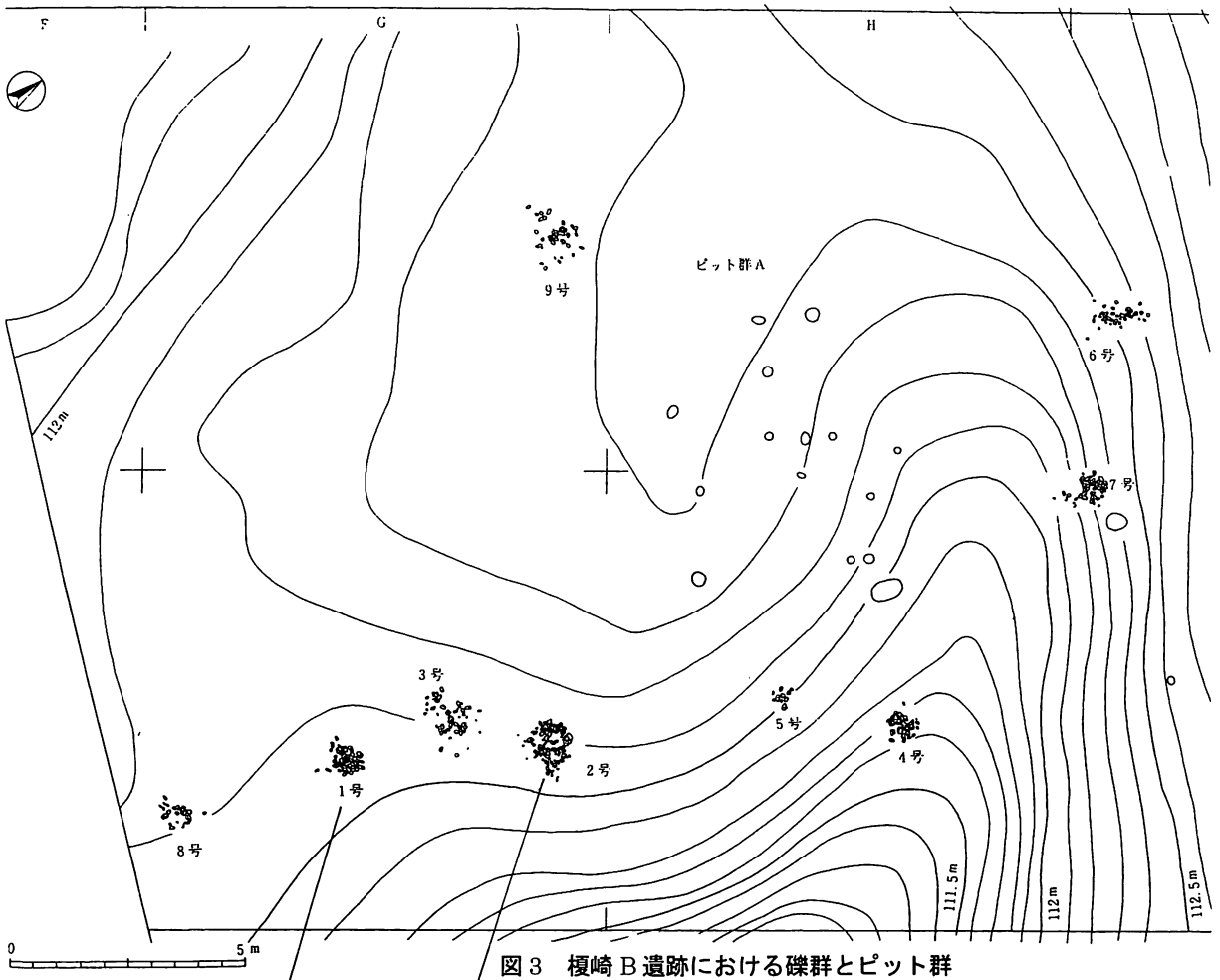
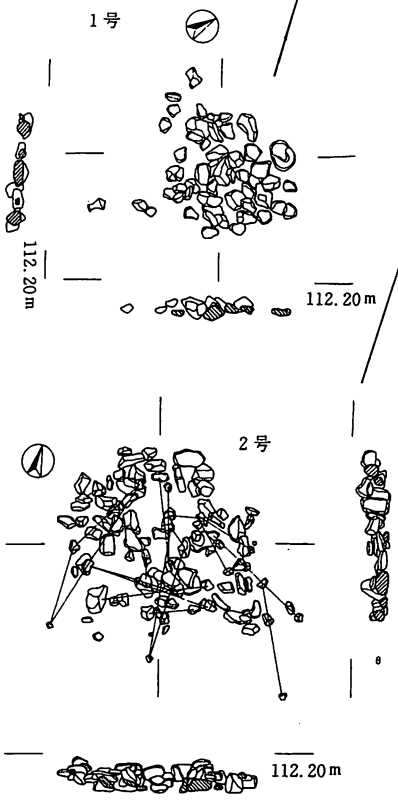


図3　榎崎B遺跡における礫群とピット群



（鹿児島県埋文センター1993）

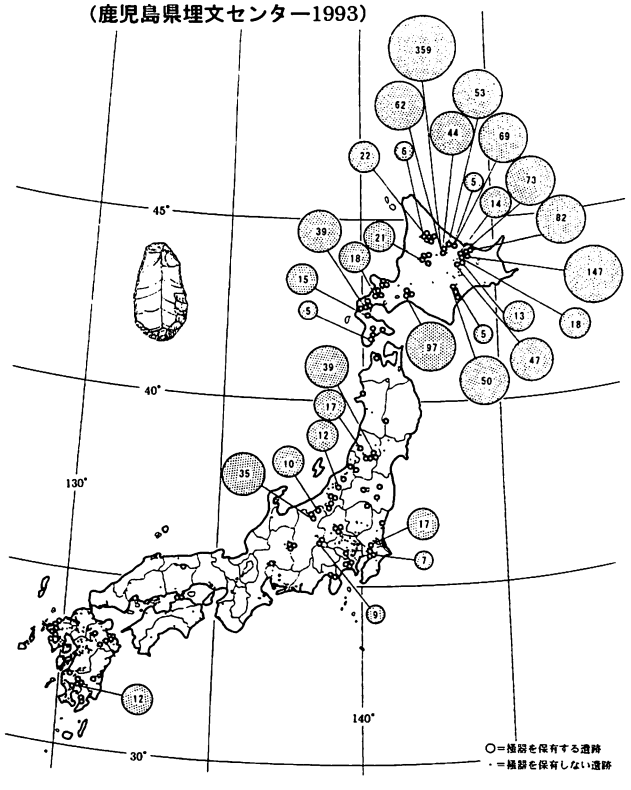


図4　細石器文化における掻器の点数分布（堤2000b）

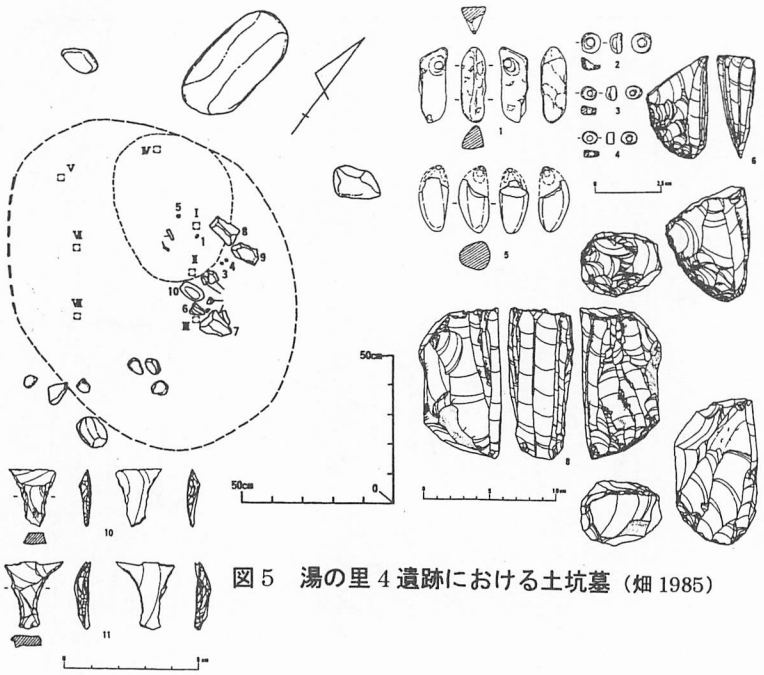


図５　湯の里４遺跡における土坑墓（畑 1985）

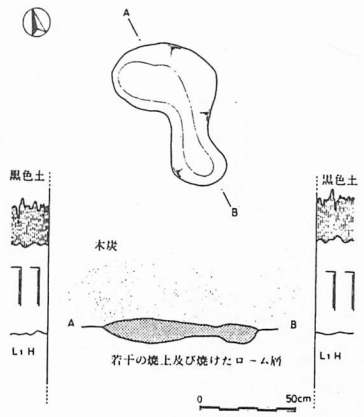


図６　上和田城山遺跡における
ファイヤーピット（中村・曽根 1979）

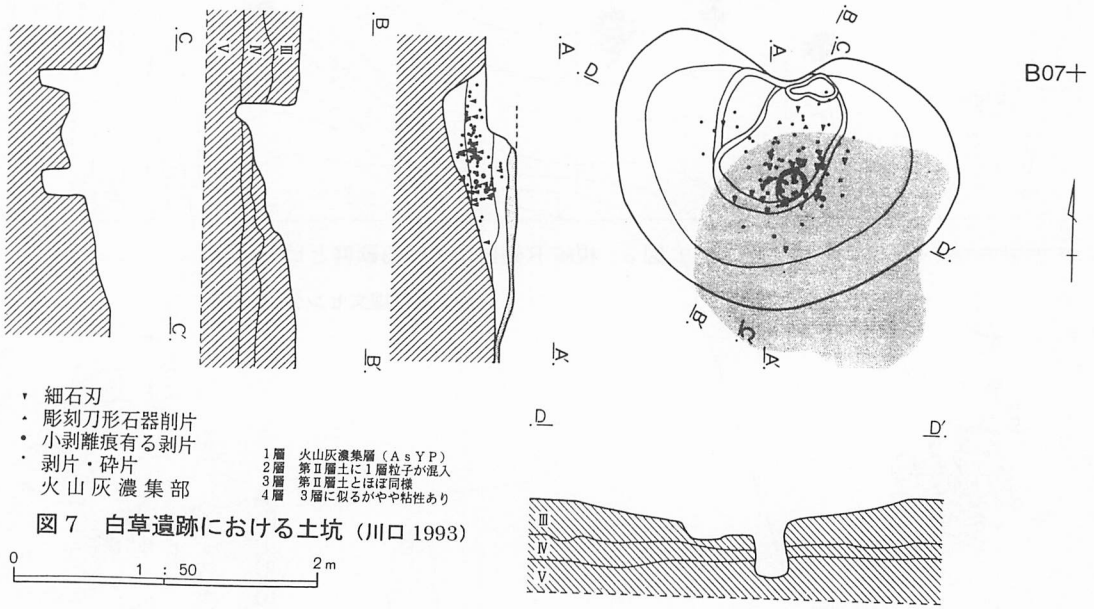


図７　白草遺跡における土坑（川口 1993）

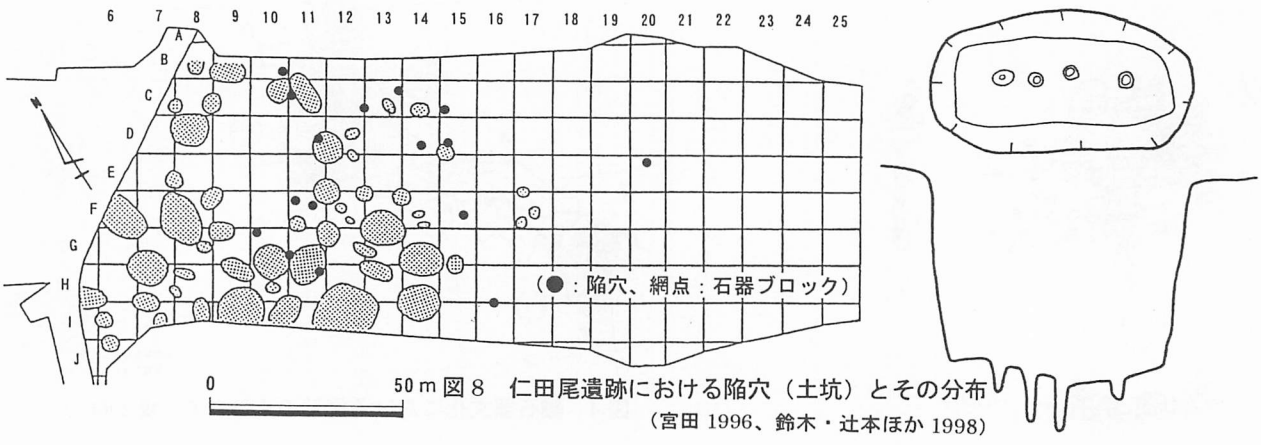


図８　仁田尾遺跡における陥穴（土坑）とその分布
（宮田 1996、鈴木・辻本ほか 1998）

て位置付けられるものであり、この時期・地域に盛行する特徴的な遺構といえよう。形態的には、平面が隅丸長方形や円形で、ほぼ垂直に立ち上がる深みのものが特徴的である。中には底部構造と考えられる小穴を有するものがあり、陥穴として機能を果たしたことは想像に難くない。ただし、縄文時代にみられるように、獣道に沿うかのように連続的に分布するものはない。1 遺跡において多数の陥穴が発見されている事例は数少なく、上ノ原遺跡（宮崎）で26基、別府原遺跡（宮崎）で18基、仁田尾遺跡（鹿児島）で16基である。しかし、これらについても縄文時代の陥穴にみられるような分布とは一致せず、また石器出土の集中域と一部重複する状況にある（例：仁田尾、図8）。陥穴と石器出土ブロックには微妙な時間差があり、両者は併存しないものと考えるべきであろう（堤2000a）。

(5) 住居状遺構

住居とされている遺構は、上口A遺跡（北海道）、中本遺跡（北海道、図12）、北進遺跡（北海道）、荒屋遺跡（新潟、図9）、上和田城山遺跡（神奈川、図10）、上場遺跡（鹿児島、図11）、水迫遺跡（鹿児島）、石飛分校遺跡（熊本）の8遺跡で確認されている。このほか、水迫遺跡で175基、榎崎B遺跡で21基、峠下遺跡（北海道）で5基のピットが検出されており、住居を構成する構築物である可能性が考えられる。

確認された住居は、いずれも縄文時代以降に見られる明瞭な掘り込みを有するものとは異なり、微妙な土質の相違によって検出されたものである。形状は、概ね円形（上和田城山・上場）または隅丸方形（中本）を呈し、立ち上がりは不明瞭で浅い。それぞれが歪な形態であり、個性的な存在といえる。また、北海道の道東において特徴的に検出されているが、これらについては周氷河現象に伴う土壌撹乱の痕跡（鶴丸1975）の可能性もあり評価に迷うものである（辻本1984）。

このような状況ではあるが、上和田城山遺跡と上場遺跡では共通性が認められる（中村・曽根1979）。先にあげた掘り込みの形状（平面：円形、断面：皿状）のほか、ピットが多数存在する点を挙げることができるが、規則的な配置とはいい難いものである。また、焼土が存在する点でも共通する。中本・上和田城山では住居状遺構のほぼ中央に位置するのに対し、上場2号は張り出し部に位置する。これらは屋内炉の存在を示唆する可能性があろう。一方、上場では住居から遺物が出土しているのに対し、上和田城山では遺構及びその周辺から時期を特定できる石器は出土していない点で相違する。

いずれにしても住居状遺構の検出例は少なく、今後の資料の増加を待って検討する必要があろう。

3 分布の相違が意味すること

これまで遺構の種別ごとに分布状況を把握してきた結果、種別ごとに分布が偏在する状況が把握された。偏在の状況により把握される「地域」は、石器に見られる地域性（図14・15）とおおむね重複することを読み取ることができる。

火処と想定される遺構（炉跡・焼土・炭化物ブロック）は、北海道～東北日本と九州で分布が認められたものの、北海道に偏在することが明らかになった。焼土や炭化物が検出されている事例は、火処が比較的長時間にわたる被熱の累積結果を反映している可能性がある一方、より短期間の痕跡は表面的には検出されない可能性もある。すなわち、あくまで一側面的な事象と捉えるべきかもしれないが、こういった分布の在り方は気候条件と相関関係にあるかもしれない。すなわち、火への依存度が高い（利用の範囲が広い）地域ほど、火処が多数検出されていると考えられよう。また、近年では炭化物の詳細な記録と熱残留磁化測定を通して、表面的には具体的に把握することができない火処に具体的に接近する新たな方向性も示されており（織笠・會田2003）、今後、新たな理解が生まれるかもしれない。

火処の顕在化は、同じく火の利用と密接に関係する礫群の衰退と相反する消長関係をもって理解することができると指摘されている（辻本1984）。確かに、礫群は先行するナイフ形石器文化より相対的には弱体化するが、辻本氏の論考以降、南関東～東海地方および南九州で多数の礫群が検出されている。辻本氏は、火処と礫群の関係について時間的消長関係を指摘しているが、新資料の増加によってむしろ地域的消長関係にあることを指摘で

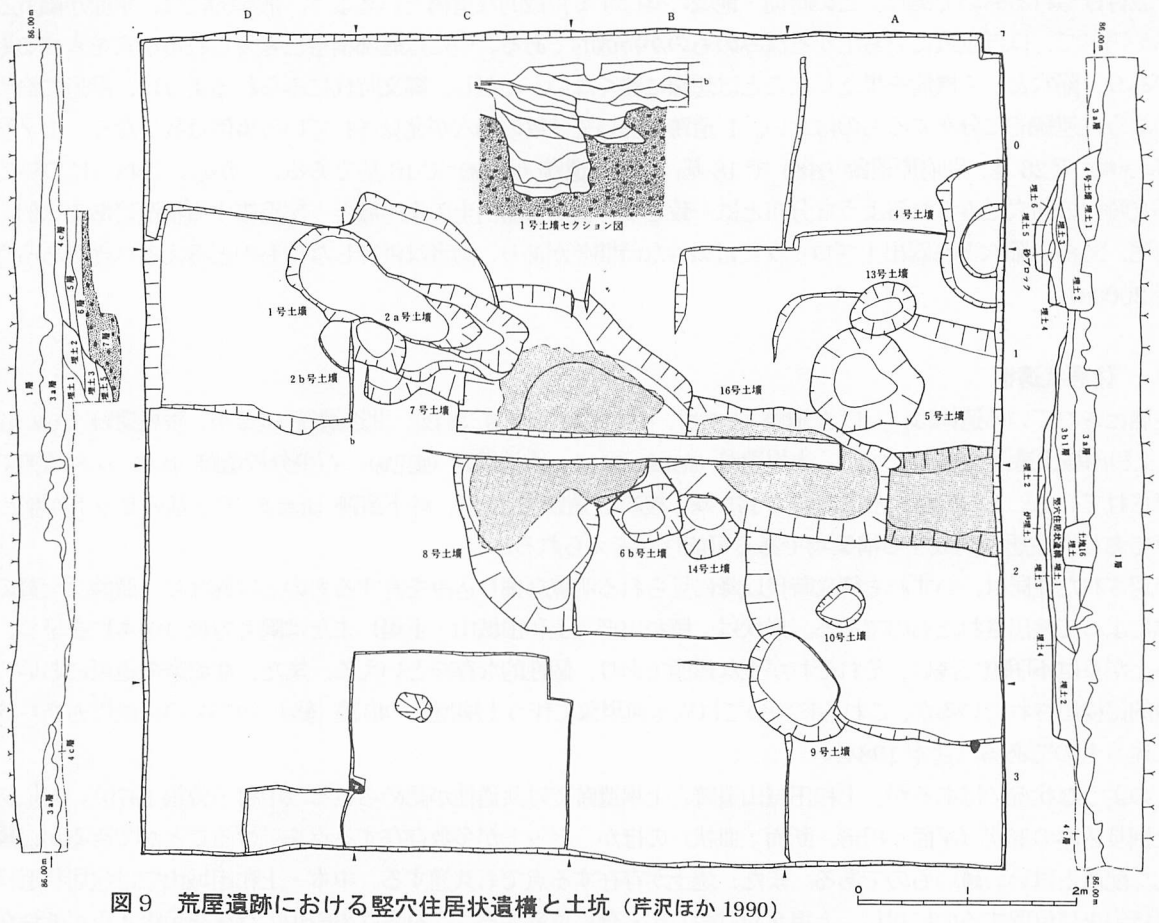


図9　荒屋遺跡における竪穴住居状遺構と土坑（芹沢ほか 1990）

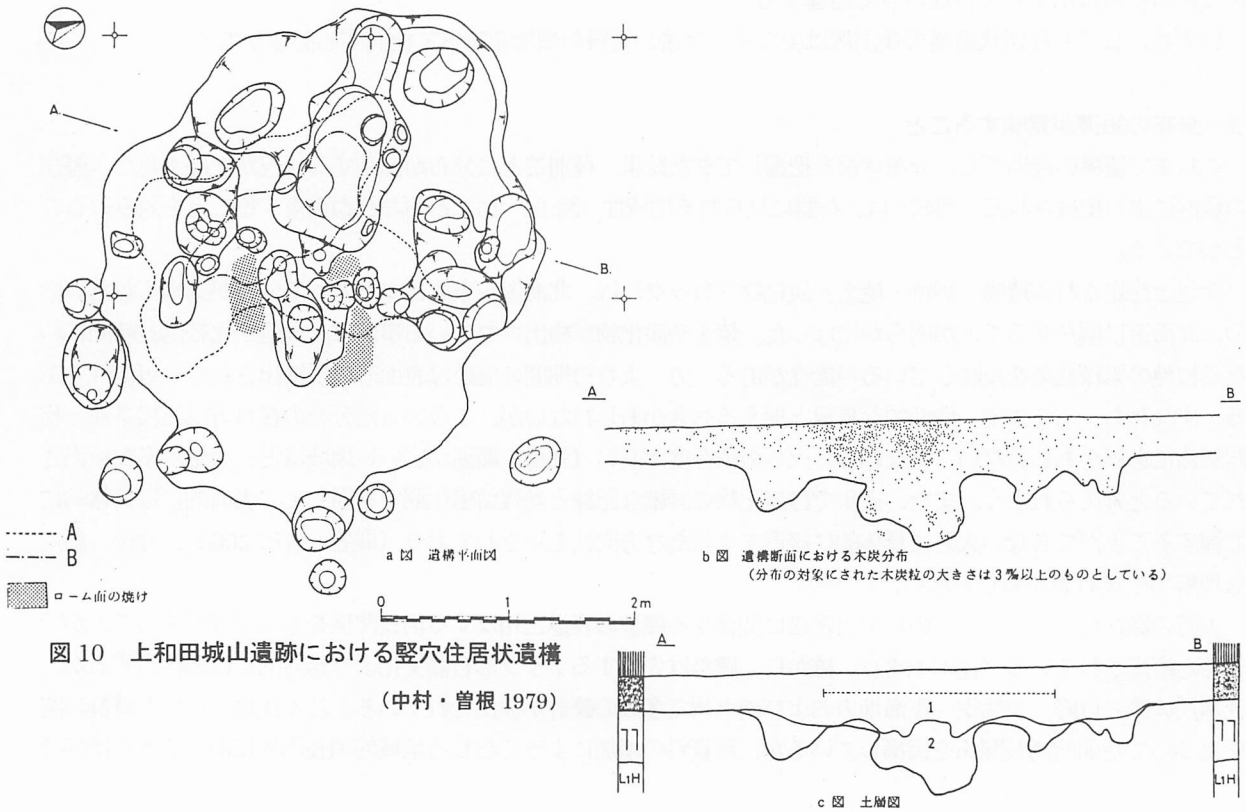


図10　上和田城山遺跡における竪穴住居状遺構

（中村・曽根 1979）

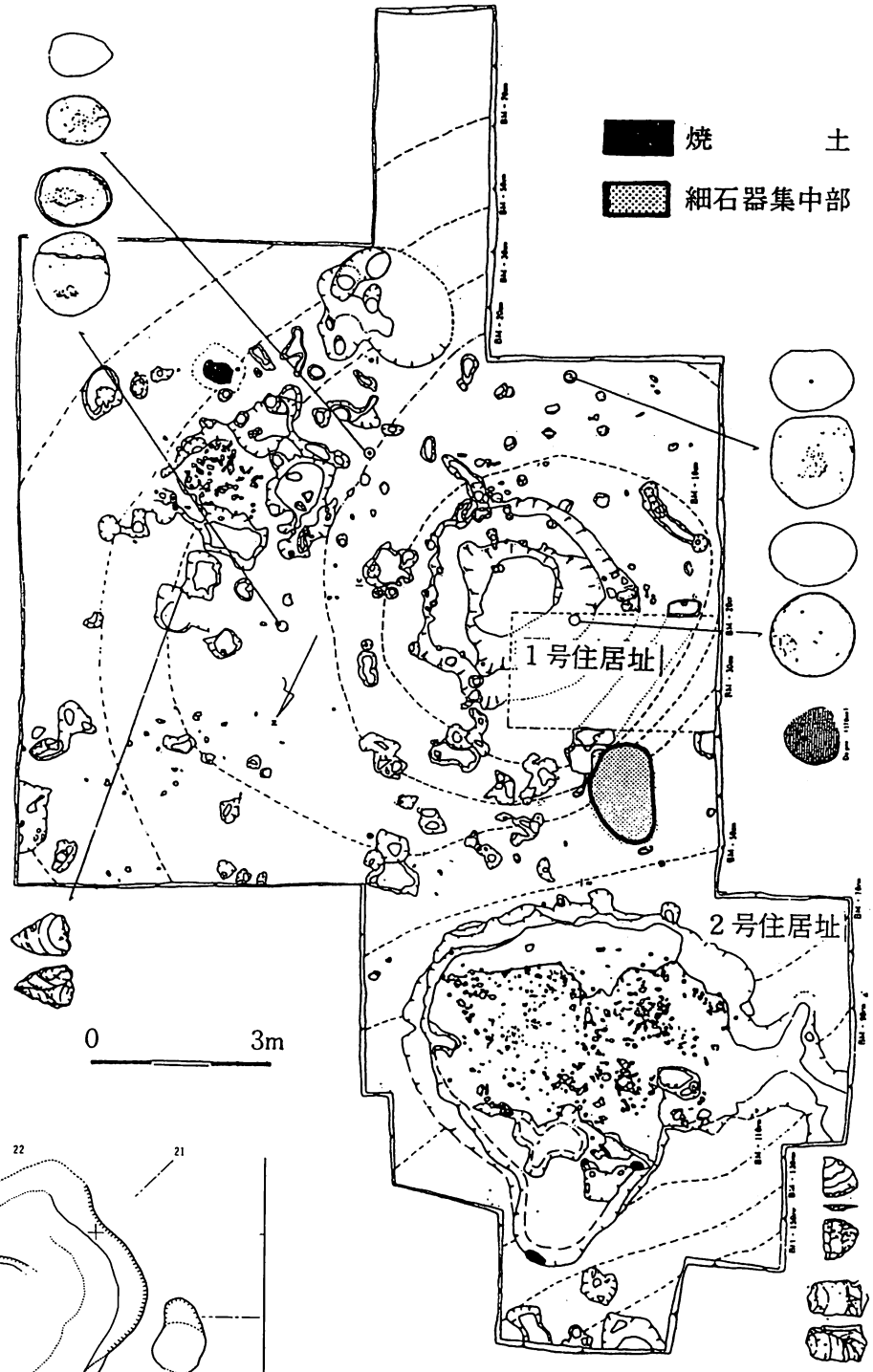


図 11　上場遺跡における竪穴住居状遺構

（池水 1974）

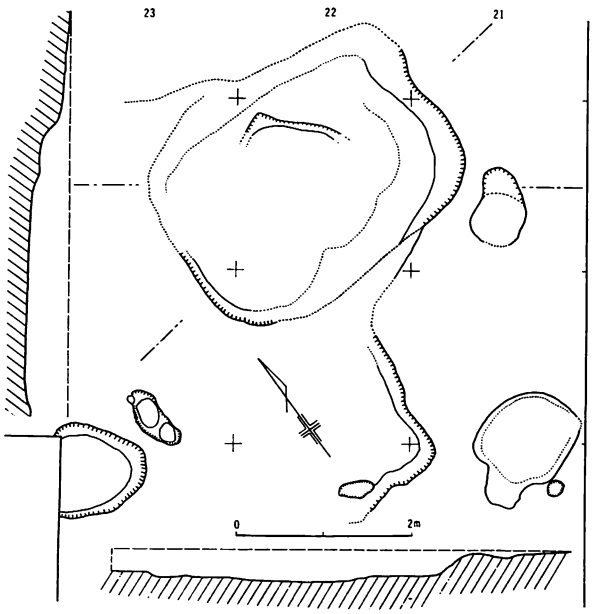
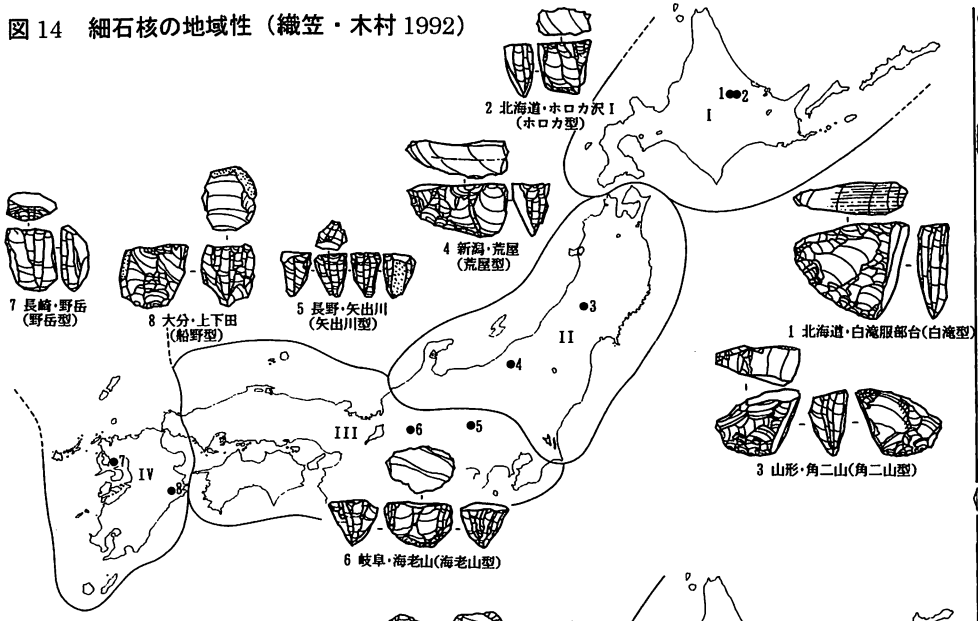


図 12　中本遺跡における竪穴住居状遺構

（加藤・桑原 1969）

図 14　細石核の地域性（織笠・木村 1992）



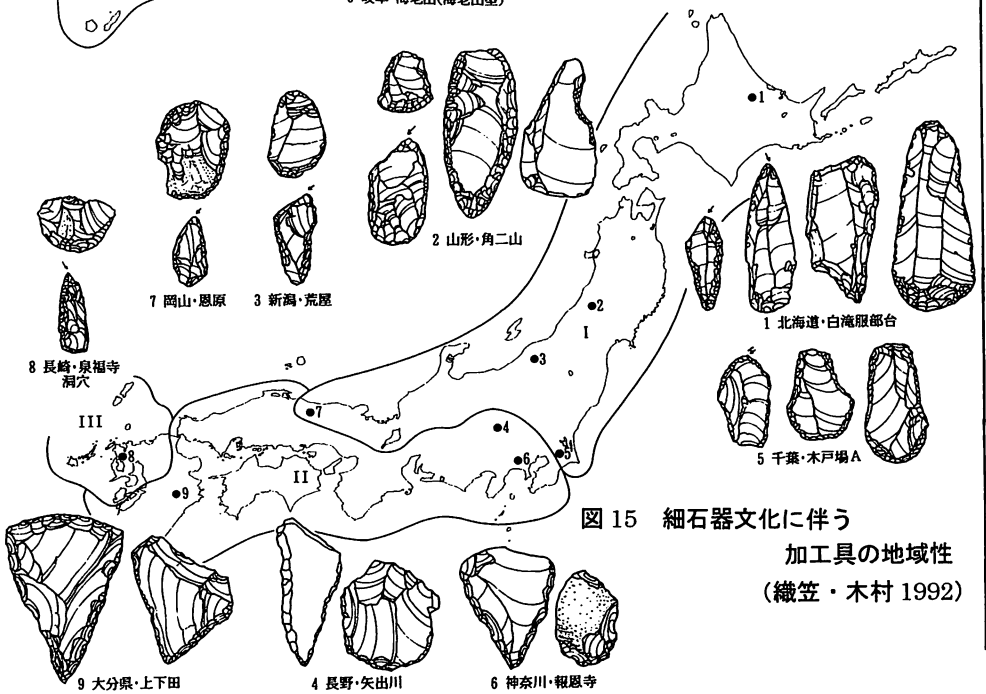


図 15　細石器文化に伴う
加工具の地域性
（織笠・木村 1992）

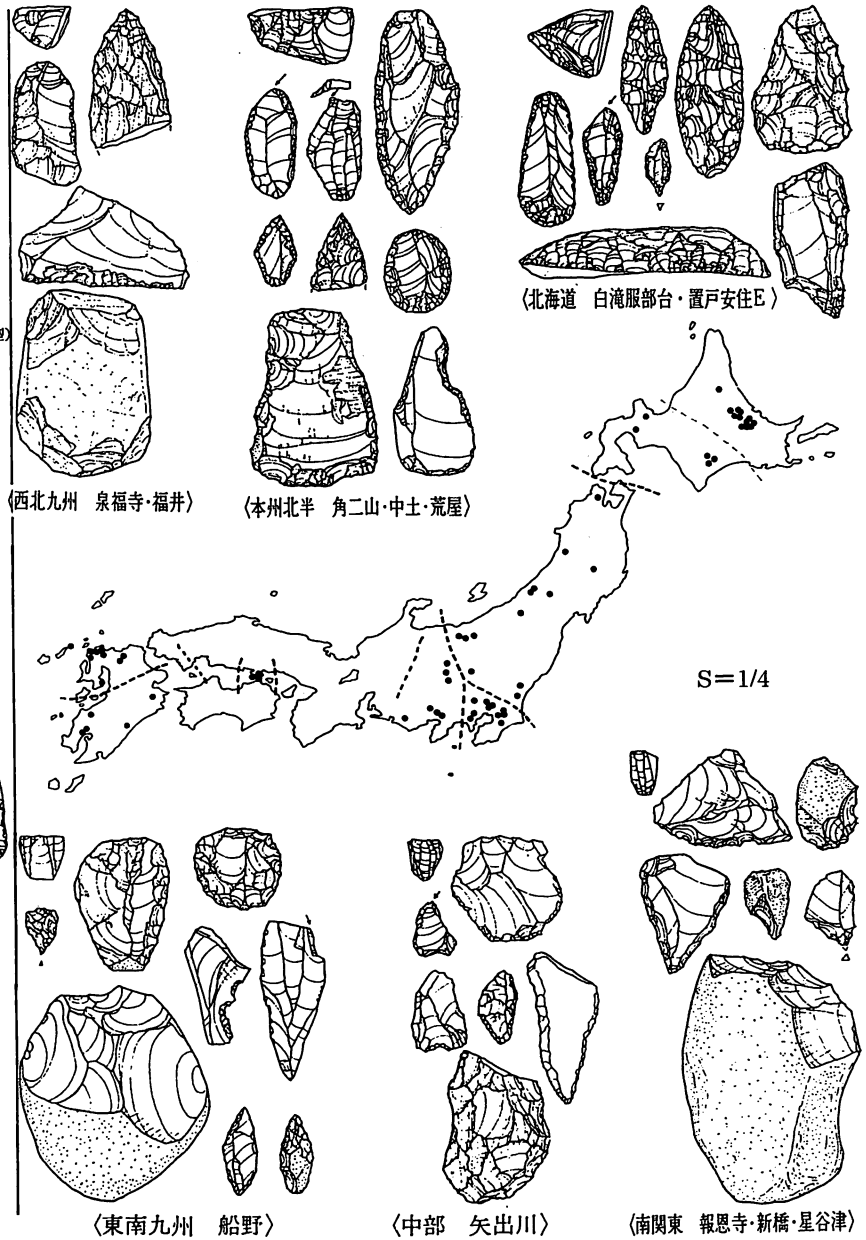


図 13　細石器文化における石器組成とその分布（織笠 1984）

きる。

地域的消長関係は、石器組成の相違とも一体化して捉えることができる。毛皮利用の重要性を物語る掻器の分布は東北日本に偏在しており、このことは寒冷地適応の一端を示す現象と捉えられている（堤 2000b、図 4）が、これと対応するかのように火処の分布は東北日本に偏在している。一方、西南日本における掻器の分布は稀薄であり、より温暖な気候であったことを推測することができるという（堤 2000b）。殊に、南九州においては温帯林から生み出される堅果類の利用を象徴すると考えられる磨石・石皿類が多数出土する傾向にある（黒坪 1983・1984、堤 2000a）。この状況と対応するかのように、南九州においては蒸し焼きの調理施設とされる礫群が顕在化する。

掘り込みを有する土坑や竪穴住居状遺構については、事例が少ない上に、いずれも「非常に微妙な観察結果に基づき摘出されて」いるものである。「実測図と写真、そして若干の「客観的事実記載」のみが示されても、多くの研究者はその吟味すらできないのが現実であ」り（辻本 1983）検討に限界があるものの、土坑について地域的偏在の状況が理解された。

東北日本の北方系石器群には、断面が皿状の浅い土坑が偏在する状況を把握できた。特に、北海道の道東において遺構が集中しているが、それらは 1950 年代～1970 年代の調査で検出されているものが多いことがわかる。一方、北海道において近年実施されている発掘調査においては、掘り込みを有する遺構はさほど検出されていない。鶴丸俊明氏が指摘するように、周氷河現象に伴う土壌撹乱の痕跡である可能性（鶴丸 1975）も考えられよう。実際、そのように評価されているためか、日本考古学協会 2000 年度鹿児島大会資料集には、遺構として掲載されていない土坑や竪穴住居状遺構が多数ある。こういった点を差し引いて考えたとしても、一定の傾向を理解することができる。

一方、南九州では陥穴と考えられる遺構が顕著に存在する。東北日本に顕著な浅い土坑とは異なり、深く急な立ち上がりを有するものである。中には、底部構造を有するものもあり、陥穴と積極的に理解することを支持している。陥穴は、礫群と同様に南九州を特徴付ける遺構と考えられ、生業活動の相違を反映している可能性が高いと考えられよう。石器群の内容からも九州は西北九州と東南九州とに大別することができ（織笠 1984、図 13）、そういった傾向と一体化して理解できるものであろう。今後は、石器群および遺構の系譜の追求することで、そのことをより具体的にアプローチすることができよう。

以上のように、細石器文化の遺構が偏在する状況が把握されたが、いまだ事例が少ないのが現状である。加えて調査者の認識次第で把握の範囲も異なることであろう。今後は、資料の増加を待って、時期別・地域別の普遍性と特殊性をより具体的に把握する必要がある。遺構の機能・性格については、そういった基礎的資料の蓄積を踏まえて検討すべきであろう。また、空間利用の問題については、遺物集中域や空白域の状況も踏まえて総合的に検討される必要があるが、遺構の機能・性格を十分に吟味した上で成立するものであろう。

本稿を執筆するにあたり、織笠明子氏、堤　隆氏、藤田健一氏から貴重なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

引用参考文献

織笠　昭　1984「細石器文化組成論」『駿台史学』60　駿台史学会

織笠　昭・木村英明　1992「Ⅱ旧石器時代　2 道具の組合せ　f 細石器文化」『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会

織笠　昭・會田信行　2003「先土器時代における火処の探求－上草柳第 3 地点南遺跡の炭化物分布と熱残留磁化測定－」『大和市史研究』29　大和市役所

金山喜昭　1992「4 住居と集落　b 礫群、配石、石囲い炉、土坑、住居」『図解　日本の人類遺跡』東京大学出版会

黒坪一樹　1983・1984「日本先土器時代における敲石類の研究（上）（下）」『古代文化』35－12、36－3　古代学協会

笹原芳郎・瀬川裕一郎　1992「旧石器時代後期の炉跡・焚火跡　とくに愛鷹南麓・箱根西麓を中心として」『考古学ジャーナル』351

杉原荘介・小野真一　1965「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』3-2　東京考古學會
鈴木忠司　1983「住居とピット」『季刊考古学』4　雄山閣
芹沢長介　1959「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について（予報）」『第四紀研究』第1巻5号
芹沢長介　1960『石器時代の日本』築地書館
辻本崇夫　1984「細石器文化の遺構」『駿台史学』60
辻本崇夫　1993「細石刃文化期の遺構」『細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅱ　佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ
堤　　隆　2000a「細石刃文化期の遺構と空間利用」『旧石器から縄文へ－遺構と空間利用－』日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集
堤　　隆　2000b「皮鞣しの場－掻器の分布と場の機能－」『MICRO BLADE』八ヶ岳旧石器研究グループ
鶴丸俊明　1975「増田遺跡」『日本の旧石器文化』2
徳永貞紹　1991「九州の礫群等に関する覚書」『九州旧石器』2　九州旧石器文化研究会
中村喜代重・曽根博明　1979『上和田城山遺跡』大和市教育委員会
中村由克　1992「長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構」『考古学ジャーナル』342・344　ニュー・サイエンス社
中村由克　1993「細石刃文化の石囲い炉」『細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅱ　佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ
畑　宏明　1985『湯の里遺跡群』北海道埋文調査報告18
山下秀樹　1989「先土器時代の土坑」『考古学の世界』慶應義塾大学民族学考古学研究室編

細石刃石器群の遺跡形成過程

－　とくに、関東平野南部、いわゆる「非削片系」細石刃石器群への視点　－

野口　淳

1.

旧石器時代研究に限ったことではないが、考古学では全般的に、遺物と、遺構・遺跡とは、それぞれ別個の分析対象として扱われる場合が多く、両者を結びつけるのは、わずかに「分布」を手がかりとする場合に限られる傾向にある。しかし、遺物と、遺構・遺跡は、それぞれの形成過程において密接に関連している。

日本列島の後期旧石器時代の遺跡では、考古学的な検討対象となり得る構成要素はきわめて限定されており、遺構として明確に捉えられる事例は乏しい。そのような中で、とくに石器集中部－いわゆる「ブロック」－は、遺構に準じるものとして扱われている。しかしその実態は、遺跡内における遺物（＝石器）分布の状態に過ぎない。一方で、そこに残されている遺物の集合体（＝石器群）からは、原料としての石材の獲得から、石器の製作－使用－廃棄にいたる一連の技術的過程、人間行動の一端を読み解くことが可能である。

というよりも、石器集中部とは、石器製作の工程から使用－廃棄行動にいたる一連の過程の中で、ある部分が切り出されて（遺棄または廃棄されて）残されているものとして理解すべきものなのである。したがって、石器集中部そのものと、そこに残されている石器群の、それぞれの形成過程は、表裏一体というか同時並行的に継起するものとして捉えられる。当然、石器集中部の集合体として捉えられる「遺跡」についても、石器集中部単位で捉えられる形成過程の累積、または複線的、連続的な継起の中で、全体として形成されたものということになる（野口 2003a,b,c）。

遺跡と、そこに残されている石器群の形成過程は、一つのまな板の上で料理されるべきである。そして、「組成論」「技術論」「分布論」「遺跡論」といった研究の分野の区別は、検討対象にもとづく分断的なものではなく、「形成過程」をひとつの核として総合化するための個別事例分析の枠組みとして捉えられることになるだろう。遺跡の形成過程を捉えるということは、遺跡構成のなりたちを捉えることだけに限定されず、遺跡内に残されている石器群の形成過程を捉えることでもあり、そこでは、石器群が生み出される際の「型」＝技術的特徴の検討も不可欠となる。

また、石器の製作から廃棄にいたる一連の人間行動を検討するためには、その行動の端点となる原料としての石器石材の獲得、そして必要とされる場所への運搬、補給の過程の追及が不可欠となる。あわせて、遺跡間の移動をかなり頻繁に繰り返していたと考えられる遊動生活の中では、製作した石器を、必要に応じて持ち運び、使用し、補修し、最終的に廃棄するという過程を追及することも不可欠となる。ここに、遺跡の形成過程は、単に限定された一空間にのみ着目するのではなく、石材の産地から各活動の場にいたる多数の空間＝遺跡の連鎖を総体的に扱うことで、はじめて明らかにできるだろうことが指摘される。

2.

いうまでもなく、石材獲得、運搬・補給から、石器製作、搬出入と使用・廃棄にいたる一連の過程を検討する枠組みは、「技術組織論」として提起されている。細石刃石器群については、とくに、いわゆる「削片系」細石刃石器群を対象として、具体的な分析の実践例が示されている（堤　1996、など）。一方で、いわゆる「非削片系」細石刃石器群に目を向けると、いまだに十分な検討がなされているとは言い難いのが現状である。

とくに削片系細石刃石器群については、細石核の準備・整形から細石刃の生産に至る過程と、そのほかの石器の素材生産の過程とが、たとえば「連動システム」（永塚　1997）といったかたちで把握され、分析対象とされ

ている。そして、このような石器群の特徴自体が、一遺跡の石器群全体を総体的に捉え、石器製作技術、石器組成の形成、石材利用について横断的に検討することを可能にし、さらには石材利用への視点もあわせて、遺跡連鎖の枠組みが追及されているのである。

一方で、いわゆる「非削片系」細石刃石器群については、細石核の準備・整形から細石刃の生産に至る過程についてすら、明らかにされている事例が少ない。さらに、細石核・細石刃と、そのほかの石器との技術的関係、工程上の関連性について、わずかな接合資料から断片的に検討されているに過ぎないのが現状である。

もちろん、このことは「非削片系」細石刃石器群の技術工程についての研究が立ち遅れていることを示しているわけではない。むしろ、細石核・細石刃とそのほかの石器との間で異なる石材が選択される傾向にあること、そのために、実体として、一連の作業工程の中から細石核・細石刃とそのほかの石器とが連続的に生産される事例が少ないことなど、石器群そのものの技術的、工程上の特徴が、一貫した検討を阻んでいるのである。

さらに、分析を困難にしている理由として、複数遺跡にまたがる工程の分割配置、遺跡間連鎖の現象がある。これは、細石刃石器群に限らず後期旧石器時代全般に通じることでもあるが、遊動生活の中で、石器製作の作業工程の一部分ずつが各遺跡に残されるような状況の中では、一遺跡の石器群から技術的特徴、作業工程の全体を把握することは困難になる。

その上、細石核・細石刃と、そのほかの石器との間で、石材選択の段階から作業工程が分かたれているような状況下では、個別の石器－石材の組み合わせごとに、さらに遺跡ごとに作業工程が分割され、寸断された部分のみが残されることになる。異なる石器－石材の組み合わせ相互の関係を検討するためには、まず、個々の石器－石材について一貫した作業工程の全体像を把握しなければならないのだが、それについてすら個別遺跡では十分に把握することが困難な状況で、どのようにして全体像に迫ることができるのだろうか。まずは個々の石器－石材ごとに、一つの遺跡からはじめなければならいであろう。

実は、「非削片系」細石刃石器群を対象として、一遺跡に残されている作業工程を復元的に検討し、遺跡外からの搬入、および遺跡外への搬出の現象までの視覚化は、すでに 30 年前に提起されている（服部・矢島 1974）。同様な視点で、複数の遺跡・石器群について個別的な検討を加え、遺跡間での関係性を捉えるところまで進展すれば、最終的には遺跡間の枠組みの中で、一貫した作業工程の全体を把握することが可能となり、その上で、今度はあらかじめ遺跡間の枠組みを出発点として、複数の石器－石材の組み合わせ相互の、技術的、工程上の関係、関連性を検討することが可能になるだろう。しかし、このような視点での事例分析や議論の展開は、まずナイフ形石器群を対象に展開してきた。そして現在にいたるまでの間、分析方法、説明的枠組み、および石材の産地推定分析など援用可能な他分野の成果が蓄積されている。今後は、「非削片系」細石刃石器群についても、個別の事例分析、および総合的な枠組みの検討が進められるべきである。

3.

残念ながら、本稿では、十分な事例分析にもとづく議論の展開を図るまでには至らない。関東平野から中部高地一体を中心に広がる、いわゆる「野岳・休場型」細石核に特徴づけられる「非削片系」細石刃石器群を対象として、検討すべき問題点のいくつかについて指摘し、今後の議論の礎を提供できればと考える。

対象とする石器群では、細石核・細石刃には黒曜石が、そのほかの石器については黒曜石以外の石材が選択される傾向がある。とくに、そのほかの石器のうち、大型のものについては、いわゆる「在地石材」－黒曜石に比べて石材の採取可能地がより遺跡の近傍にある石材－が選択される傾向がある。

細石核・細石刃の原料として選択される黒曜石の原産地については、望月・堤（1997）による相模野台地の分析、望月・天野（1997）による入間台地横田遺跡群の分析、そして望月および筆者らが実施した武蔵野台地北部の分析（門内 2002、野口 2002）などがある。分析結果からは、「信州系」、「神津島系」、「伊豆・箱根系」の利用が明らかとなっているが、距離、方角、そしてアクセス経路と方法がまったく異なる信州系と神津島系産地群が共伴する事例は、ほとんどみられない（「信州系と神津島系の非共存関係」：堤 2002）。中部高地と相模野台地、

神津島と相模野台地、そして、いずれかの産地群から伊豆・箱根を経由する場合とが想定される（堤・望月 1997、堤 2002）。武蔵野台地北部の事例でも、おおむね同様な傾向が指摘できる（望月・天野 2002、門内 2002）。ただし、武蔵野台地北部の分析では、信州系と神津島系が同一遺跡に認められる事例が散見された（門内 2002）。そのうち、東京都瑞穂町狭山Ｂ遺跡、武蔵村山市後ヶ谷戸遺跡例については、一括性について問題が残る。埼玉県所沢市清橋遺跡例については、さらに男鹿金ヶ崎群と判別された細石刃１点も含んでおり、なお検討が必要である。現状では、少数の例外を除いて、望月・堤（1997）の提示した枠組みによる説明が有効であると言えるだろう。

ところで、これら各原産地からの黒曜石石材は、個々の遺跡に直接搬入されているわけではない。多くの遺跡では、原石の状況をうかがうことのできる資料－礫面つきの剥片や、原石からの石器製作過程を示す接合資料などが認められない。すでに整形されて細石刃の生産が行なわれている状態の細石核と細石刃、細石核の打面再生剥片などが中心である。そのなかで、横田遺跡群の接合資料と、隣接する大谷川流域の各遺跡における類似した石質資料の存在（田中 1995）は、原料原石が特定の遺跡へ搬入され、細石核の準備、整形がそこで行なわれた後に、細石核が周辺の遺跡へと持ち運ばれ、細石刃の生産が次々に行なわれている状況を暗示している。

黒曜石製石器の個体別資料分類は非常に困難であるが（五十嵐 1998）、産地推定分析の結果から見ても、細石刃だけが残されている個体別／産地別／石材別資料が認められる一方で、細石核のみが残されている個体別／産地別／石材別資料が認められる。特定の遺跡で原石から準備・整形された細石核は、細石刃生産のための可搬原材料として持ち運ばれ、破損・消耗分の補充のために各遺跡で細石刃が生産されている。その過程で、補充・交換され不要になった細石刃、そして消耗した細石核が順次廃棄されるのだが、その間に介在する遺跡間の移動にともなって、細石刃の生産－使用・廃棄と細石核の廃棄の機会、場所にずれが生じ、一遺跡の石器群だけを取り上げたときに、個体別／産地別／石材別資料ごとに細石核と細石刃が組み合わせにならない状況が生じるのである。

なお、細石核の搬入・細石刃の補充生産を中心とする遺跡では、石器集中部は 1、2 ヶ所、出土石器点数も多くなく、そのほかの石器をほとんど共伴しないといった共通点が認められる。ここから、原石の搬入と細石核の準備・整形が行なわれる遺跡との、工程配置の差異だけでなく、より大きな枠組みでの遊動パターン内での位置づけが明らかになる。後者は、黒曜石原産地を含む広い領域の移動、石材獲得を含む活動の一端に組み込まれた地域的な「ハブ」であり、前者は、そうした「ハブ」から分散的に形成される、地域内生活の場の一つ一つであると。後者の遺跡では、石器集中部の数が多いだけでなく、その中に、さらに累積的な大型の集中部が必ず含まれていること、より多様な石器組成が認められる場合が多いことも、注意すべき点である。

4.

一方で、そのほかの石器については在地系の石材が選択される場合が多く、同じ石材が、細石核・細石刃の一部に利用されている場合もある。黒曜石の獲得－細石核の準備から細石刃の生産に至るまでの過程については、上述のように、中部高地または神津島を一方の端点とした往復の中で行なわれる。一方、そのほかの石器については、黒曜石獲得の経路上か、あるいは異なる機会に遺跡近傍で、石材が獲得されていることになる。その中で、黒曜石を補充・補完するかたちで、非黒曜石石材の一部が細石核・細石刃に振り向けられることもあるのだろう。

しかし、非黒曜石石材による、細石核・細石刃生産とそのほかの石器の素材生産とが、包括的に、また大規模に残されている事例は乏しい。黒曜石石材についての、石材原産地－地域的「ハブ」－地域内生活の場を結ぶ資源獲得・利用と遺跡間連鎖の枠組みと、非黒曜石石材－そのほかの石器のそれとは、「連動」しない別立てとなっている。

ナイフ形石器群では、主要石器であるナイフ形石器だけでなく、そのほかの石器も、石材利用と素材生産の過程を共有している場合がほとんであり、資源獲得・利用と遺跡間連鎖の枠組みは、一体のものとして理解することが可能な事例が多い。一方、削片系細石刃石器群では「連動システム」が指摘されている。対して、「非削片系」

細石刃石器群については、石材－石器種ごとに異なる枠組みの発現を指摘することができる。細石核・細石刃の生産をめぐる遺跡間連鎖については、「砂川モデル」と共通する後期旧石器時代的な遊動生活の様相を捉えることができるが、一方で、石材－石器種ごとの枠組みの発現は、石鏃・小型石器類－削器・中型石器類－打製石斧・大型石器類－礫石器類といった、複数の枠組みを統一的に運用する縄文時代的な資源獲得・利用と石器製作・使用・廃棄パターンのあり方に通じるものを捉えることも可能なのではないだろうか。

「非削片系」細石刃石器群への注目は、より大きな枠組みでの細石刃石器群研究、さらには日本列島における石器時代史研究の入り口として大きな可能性を秘めている。それはもちろん、本稿を提起した筆者自身への課題であるが。

（2003年神無月稿了）

引用参考文献

五十嵐彰　1998「考古資料の接合－石器研究における母岩・個体問題－」『史学』第67巻3・4号、三田史学会

門内政広　2002「付編　東村山市および周辺市町村出土の黒耀石製石器の原産地推定分析」『東村山市史5　資料編　考古』、東村山市

田中英司編 1995『横田遺跡　首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅵ－』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団（同事業団報告書第163集）

堤　　隆　1987「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』第13号、大和市総務部情報資料室編

堤　　隆　1991「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』第17号、大和市総務部情報資料室編

堤　　隆　1996「削片系細石刃石器群をめぐる技術的組織の異相－中ッ原細石刃石器群を中心として－」『古代』第102号、早稲田大学考古学会

堤　　隆　2002「信州黒曜石原産地をめぐる資源開発と資源需給－後期旧石器時代を中心として－」『國學院大學考古学資料館紀要』第18輯、國學院大學考古学資料館

永塚俊司　1996「細石刃生産システムとその工程分割・遺跡間連鎖」『中ッ原第1遺跡G地点の研究Ⅱ』、佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ

永塚俊司　1997「荒屋系細石刃石器群における一つの定点」『人間・遺跡・遺物3』、発掘者談話会

西井幸雄　1994「Ⅴ　結語」『清橋遺跡　国道463号（旧県道所沢入間線）関係埋蔵文化財発掘調査報告』、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団（同事業団報告書第142集）

野口　淳　2002「第2章　旧石器時代」『東村山市史5　資料編　考古』、東村山市

野口　淳　2003a「ブロックの構成と遺跡形成過程の検討」『粟生間谷遺跡　旧石器・縄紋時代編』、(財)大阪府文化財センター

野口　淳　2003b「八尾南遺跡第6地点における遺跡形成過程の再検討」『粟生間谷遺跡　旧石器・縄紋時代編』、(財)大阪府文化財センター

野口　淳　2003b「粟生間谷遺跡を中心とした遺跡間分析」『旧石器人たちの活動をさぐる－日本と韓国の旧石器研究から－講演会・シンポジウム予稿集』、大阪市学芸員等共同研究「朝鮮半島総合学術調査団」

服部久美・矢島國雄　1974「Ⅴ　下耕地遺跡の調査　1　先土器時代の遺物」『春日台・下耕地遺跡』、八王子市春日台遺跡調査会

望月明彦・天野風人　1997「蛍光X線分析による横田遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『埼玉考古　別冊第5号－特集号埼玉の旧石器時代－』、埼玉考古学会

望月明彦・堤　隆　1997「相模野台地の細石刃石器群の黒曜石利用に関する研究」『大和市史研究』第23号、大和市役所総務部情報資料室編

石材環境と技術的適応

－　関東地方における黒曜石と在地系石材の利用　－

栗島　義明

1　はじめに

関東地方における後期旧石器時代の終末を特徴付ける石器群として細石刃石器群がある。長さ数センチ、幅数ミリの細石刃とそれを制作する母体としての細石核との組成を典型とした細石刃石器群は、地域毎にその出現や消失に時間的な不整合を見せつつも、日本列島のみならず広く東アジア地域に及ぶ広範囲な分布を示すことは既に良く知られているところでもある。旧石器時代の終末期にあって広く日本列島を席巻した細石器文化がとりわけ注目される背景には、それに先行するナイフ形石器の消滅や続く縄文文化との関係を抜きにしては考えられない。そうしたなかで型式学的特色に乏しい当該期における目的的石器である細石刃それ自体ではなく、その制作に関わる技術工程が残影された石核に照準を当てた研究が推進されてきたことは、当該期研究の一つの特徴とも言うことができよう。

さて、旧石器時代研究のなかになってもとりわけ量質共に抜きん出た細石器研究は、学史的な回顧に従えば、これまでに大きく三つの区分が可能であるとの印象が強い。以下、その概要について概観しておこう。1953年矢出川遺跡での細石器文化の発見以後、細石核それ自体の形態的特質を区分原理として研究が進められ、そうした方向性は『日本の考古学』Ⅰの麻生論文（麻生　1965）において一定の到達点に至ったと認識されよう。その後、形態的特徴を手掛かりとして汎日本的な資料蓄積がなされた後に型式学的な分析が推し進められと同時に、製作工程に関する技術的な分析が強力に推し進められたことは注目すべきであろう。こうした研究の方向転換を成し遂げ、その到達点を示すものとして鈴木論文と安蒜論文のそれぞれを挙げることに異存はあるまい（鈴木　1971、安蒜　1979）。以後に定向化された当該期研究の大きなうねりのなかで、広域に分布した細石器石器群に関わる単位性、素材形状、石核調整、打面形成等々を基に幾つかの「技法」設定が定着し、その空間的分布や相互の技術的関与性等が積極的に論じられてゆくのであった。こうした列島各地で共有された研究姿勢を背景として、1993年に細石器文化研究に関わる包括的な研究が堤　隆氏を中心として周到に企画された野辺山シンポであった。『細石刃文化研究の新たなる展開』と題されて上梓された資料集と論文集は、そのタイトルが適切に示すようにそれまでの当該期研究の総括であると共に、その後の研究を方向付けるものであったと言っても決して過言ではあるまい。

そして2003年、前回のシンポジュームから十年を経て再び細石器文化研究の包括的シンポに望み、新たな研究視点への着目や提唱については２～３０代の若手研究者に付託することとし、第1回野辺山シンポ参加者としては再び前回も着目した細石器文化に関わる石材環境問題について、問題点の深耕を心がけることによって与えられた責務を果したいと考えている。

ところで、細石刃分割例の全国的平均値は「長さは1.53cm、幅は0.61cm、厚さは0.18cm」（織笠　1993）とされているが、関東地域では幅、厚さはともかくとして長さについては平均1.25cmとこれら全国平均値を若干下回る傾向がある（栗島　1993）。いずれにしても分割以前の形態を考慮するならば、長さ2cm、幅5mm、そして厚さ2mmの細石刃を連続的に剥離するには、細石刃剥離に関わる技術的問題は無論のこと、その前提となる良質な石材獲得が不可欠となる。こうした極小石器生産に支えられた細石器文化段階では旧石器時代のどの時期にも増して黒曜石という特定石材への依存傾向を強めていったと言える。しかしながら、日常的な石材確保が困難な黒曜石を恒常的に消費することは、原産地から離れた地域を領域をした集団にとってはとりわけ困難な事柄であり、この為に黒曜石という領域内で確保できない希少石材と珪岩や頁岩、安山岩などそれぞれの地域に産出する在地系石材とを組み合わせて当該期石

器群の構成を計っていた蓋然性がたかい。前回の論考では黒曜石製稜柱型の細石器群を中心に分析をおこなったが、今回はそれに加えて在地系の各種石材を用いた細石核群も対象として分析を加え、当該期石器群における石材環境が石器群形成に果した役割と、そうした環境下で地域毎に如何なる技術的適応がなされていたのかを探ってゆくこととしたい。

2　細石刃長に見る地域性について

数多ある細石器文化研究のなかで特にユニークな研究として記憶されるのが、織笠氏による細石刃の形態的研究である（織笠　1983）。氏の研究に倣って著者も南関東地域を中心に黒曜石製細石刃の形態的研究をおこなったが、その概要を記せば、細石刃の完形品の長さは黒曜石原産地を離れるに従い減少傾向が認められること、そして細石刃の分割に地域的な相違が指摘できる可能性の存在した点にある。

さて、93年以後に蓄積された資料群を加えて、改めてこの問題について追求してみよう。先ず最初に細石刃完形品の長さについて瞥見してみたい。男女倉Ⅲ、Ⅳ、そしてH地点などといった黒曜石原産地を控えて形成された遺跡から出土した資料は、その平均値が2.5～3cmという突出した長さを誇っている。武蔵野、相模野両台地に分布する遺跡から出土した細石刃の平均長が1.5～2cmであることを考えると、原産地地域内の遺跡に残された完形細石刃の大きさが一目瞭然である。無論、完形と認定された一群が細石核作業面長をそのまま反映していない点は明らかであるが、相対的比較においては有意な傾向を指摘することは可能であると考えている。

著名な矢出川遺跡群から発見された一群は平均で2.1cmと、横田、柳戸、新山といった埼玉県西部に位置した遺跡から出土した例とほぼ同様な平均値を示している。横田、柳戸、新山といった埼玉西部域の細石器遺跡群では一部で在地系石材を用いた中型剥片の生産がなされているものの、圧倒的多数が良質な黒曜石を石材として細石刃が生産されている。また7×4cm、6×5cm程の黒曜石製角礫を分割して細石核及びその原形を製作した接合資料も検出されており興味深い。一部の礫器や大型削器等を除いた殆ど総ての石器群が黒曜石を石材に成立している状況は、原産地に隣接した矢出川遺跡と類似する。比較的安定した石材供給手段が確保されていた石材環境を背景に、完形細石刃の長さに見る平均値2cmという値が維持されている可能性がある。

ここに見る完形細石刃長の平均値2cmは、グラフを一瞥しても理解されるように黒曜石原産地である中部高地（和田峠・麦草峠）を離れるのに従って小型化しているかというと、強ちそういった傾向も看取することができない。近年の資料増加によって武蔵野、相模野両台地内の遺跡でも1.5cmを下回る平均値を示す事例が存在する一方、下総台地にあっても完形細石刃の平均長が2cmを計測する油作遺跡例などが知られるようになってきたからである。各台地では完形細石刃が2cmを計測する遺跡が少数存在し、他の遺跡ではその数値を下回る1.5cm程を標準とし、両者が一体となった状況がグラフから読み取ることが可能であろう。こうした黒曜石製細石刃と共に注意されるのが珪岩や頁岩、安山岩など在地系石材を用いて生産された細石刃の長さであり、相模野台地の相模野149遺跡、三ノ宮・山谷屋遺跡では2.8cm、2.4cm、武蔵野台地の出山遺跡、雨間地区遺跡群などでは2cm程という数値が看取されている。明らかに非在地系石材である黒曜石を用いて製作した場合よりも大きな数値を示し、それは黒曜石原産地を控えた遺跡のそれに近似していると言えよう。若干、相違する数値を示しているのが下総台地における非黒曜石を石材として成り立っている細石刃の一群であり、ここでは黒曜石製の例と同様に2cm程の中型の一群とそれを下回る小型の一群との構成が見られる。こうした様相は黒曜石製の一群と共通するものであり、黒曜石以外の石材である頁岩や珪岩などが武蔵野の珪岩や相模野の凝灰岩、安山岩等と同様に在地系石材としては認識できないことを示唆するものと理解できようか。

いずれにしても、こうした細石刃長に見られる様相については、後に検討する細石核の作業面長や重量の比較成果も考慮して総合的な判断を下す必要があろう。

3　細石刃部位の構成について

細石刃が「折断」という工程を経て機能する石器であることが指摘されて久しい（杉原・小野　1965）。確かに各遺跡出土細石刃に見る多様な部位構成は、細石刃が一般的にそのままの状態で利用されるのではなく、打瘤部や末端

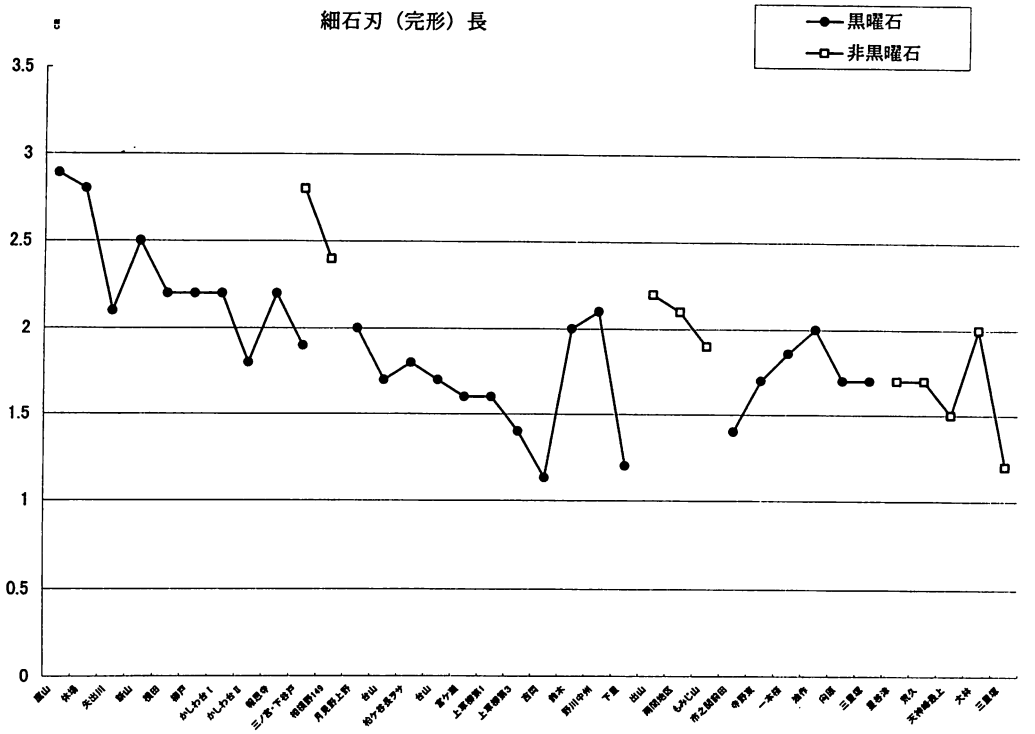


図1　細石刃の長さ（完形）

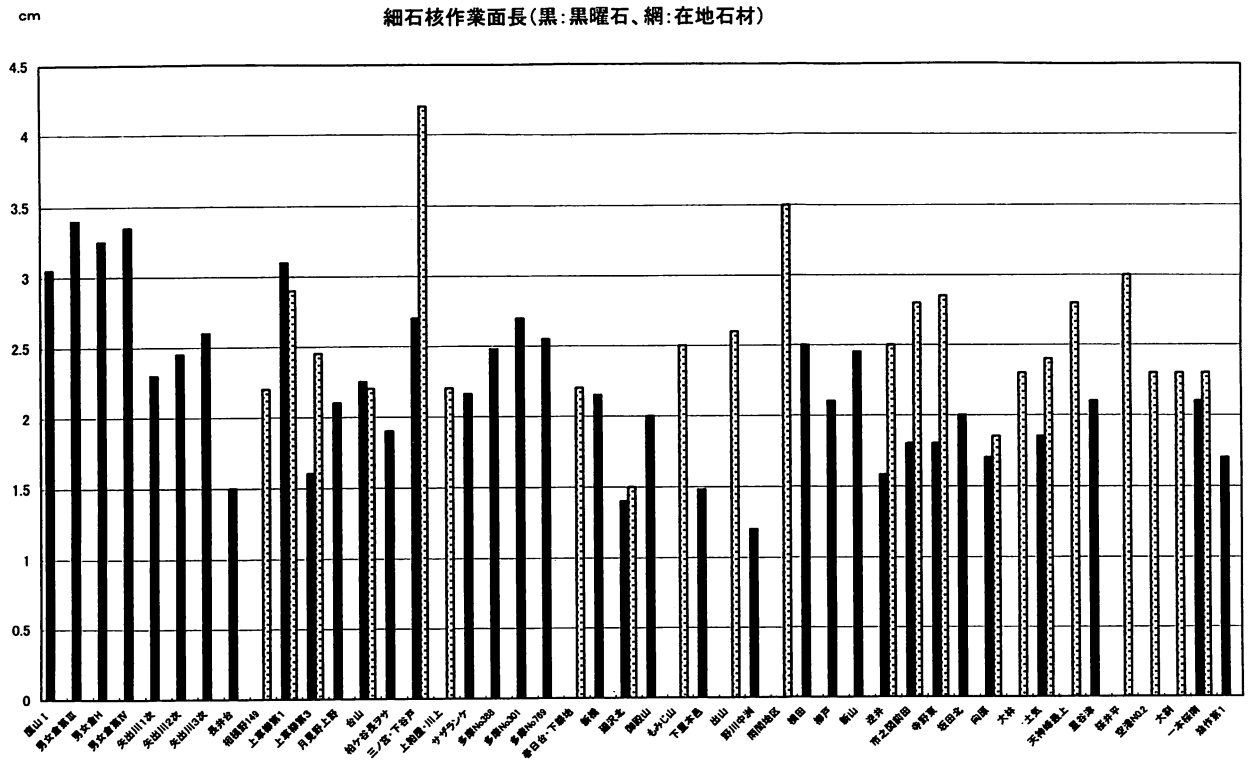


図2　細石核作業面長　（黒：黒曜石　網：在地石材）

部を「折断」という形態変革工程を介在させることによって利用されていた可能性を示唆していると言えよう。しかしながらそうした形状変革の工程が、中間部という一見理想的な部位形態を具備した細石刃の存在から演繹されたような「頭部・尾部（末端部）の除去=中間部」という工程に結びつかない点についてはこれまで多くの指摘があったとおりであろう。こうした点について十分に認識しつつ、ここでは再度、細石刃部位の問題について触れておくこととしたい。

先ず最初に完形細石刃の割合を見てみると、50％を上回る割合で構成した遺跡が存在している。大林、油作、向原等の遺跡群でいずれも下総台地である。大林遺跡以外は共に黒曜石を石材として用いた細石刃である。これらに続いて25～50％が完形で占められた遺跡として埼玉県横田遺跡、逆井遺跡、東京都下里本邑遺跡、多摩ニュータウンNo.301遺跡、模野No.149遺跡、サザランケ遺跡等が存在し、他は完形細石刃の割合が１～２割程度を示しているのが通例のようである。

次に頭部を見てみよう。細石刃の殆どが頭部破片によって占められ、その割合が50％を越す遺跡がある。栃木県寺野東遺跡、千葉県大割遺跡である。続いて25％以上の割合で頭部破片を含んだ遺跡として群馬県市ノ関前田遺跡、埼玉県横田遺跡、逆井遺跡、東京都御殿山遺跡、新橋遺跡、野川中洲遺跡、そして神奈川県下では総ての遺跡が該当する。下総台地の遺跡にあっても十余三稲荷遺跡、向原遺跡、荒久遺跡、三里塚馬場遺跡、天神峰最上遺跡で25％を上回る構成が認められている。

中間部はどうであろうか？中間部が細石刃構成の半数以上を占めた遺跡は埼玉県新山遺跡、柳戸遺跡、そして東京都御殿山遺跡の３遺跡である。全体の四分の一以上、即ち25％以上が中間部によって占められている遺跡は群馬県市ノ関前田遺跡、埼玉県逆井遺跡、千葉県荒久遺跡、東京都もみじ山遺跡、神奈川県上草柳遺跡第1地点、月見野上野遺跡等である。

尾部については上記した部位のように突出した出現率を示す遺跡はなく、多くの遺跡で10％程の出現率を示している。こうした中で埼玉県横田遺跡や千葉県大林遺跡、十余三稲荷峰遺跡、三里塚馬場遺跡、東京都新橋遺跡などでは20～25％の割合で尾部が出現する。また神奈川県下の諸遺跡では割合は決して突出しないが20％前後と比較的安定した尾部出現率を示す傾向がある。

細石刃の部位別出現率を概観してきたが、この問題への厳格な意味でのアプローチについては部位類別の厳密な基準作成は無論のこと、そもそも発掘調査時点での回収方法も大きな課題であると言えよう。一定の地域的傾向を捉えるに足る遺跡数の欠落な最も大きな問題と認識される。しかしながら、こうした地域毎の部位別出現率で最も顕著な特徴としては下総地域での完形品の占める割合の相対的な多さにあろう。その点は黒曜石製（油作第1、向原）か非黒曜石製（大林、天神峰最上）かを問わず、共通して看取できるところでもある。この点については以前に指摘したとおり一つの地域性として注意しておく必要があろうか。中間部の出現率については幾つかの遺跡で際立った傾向が見られるものの、それが石材や地域との有意な関係を成立させていたとは考えられない。特に在地石材による細石刃製作が明瞭な武蔵野、相模野両台地の雨間地区遺跡、相模野No149遺跡それぞれの細石刃部位別出現率をみても、黒曜石製のものとの大きな相違点は認め難いからである。

もう一点注目しておきたいのは相模野台地遺跡群に見る部位別出現率である。当該地域の遺跡は他の地域に比べ、安定した石器群の量的保証が確保されている特徴がある。細石刃核の整形から石核調整、細石刃剥離作業、そして打面再生に至る一連の遺物が例外なく検出されており、北関東や武蔵野台地にこれらと比肩できる遺跡は殆どない。その相模野の遺跡では他台地の遺跡に見られるような部位別出現率に大きな凹凸がなく、相互に似通った割合によって構成されているのである。部位別出現率がこうした遺跡差を一面において反映している可能性は十分に考えられるであろう。と共に今後は石材差による出現率についても注意を払ってゆく必要があろう。埼玉県の逆井遺跡は頁岩と黒曜石それぞれを石材に用いた細石刃がほぼ６対４の割合で組成しているが、石材別に部位構成を眺めてみると黒曜石製細石刃に関しては半分以上が完形品によって占められ、一方、頁岩では中間部の出現率が40％以上にも及んでいるからである。石材獲得の難易度（非在地系／在地系）によって分割という細石刃形態の変革がなされるか否かが一部地域で選択されていた可能性が指摘できるかも知れない。

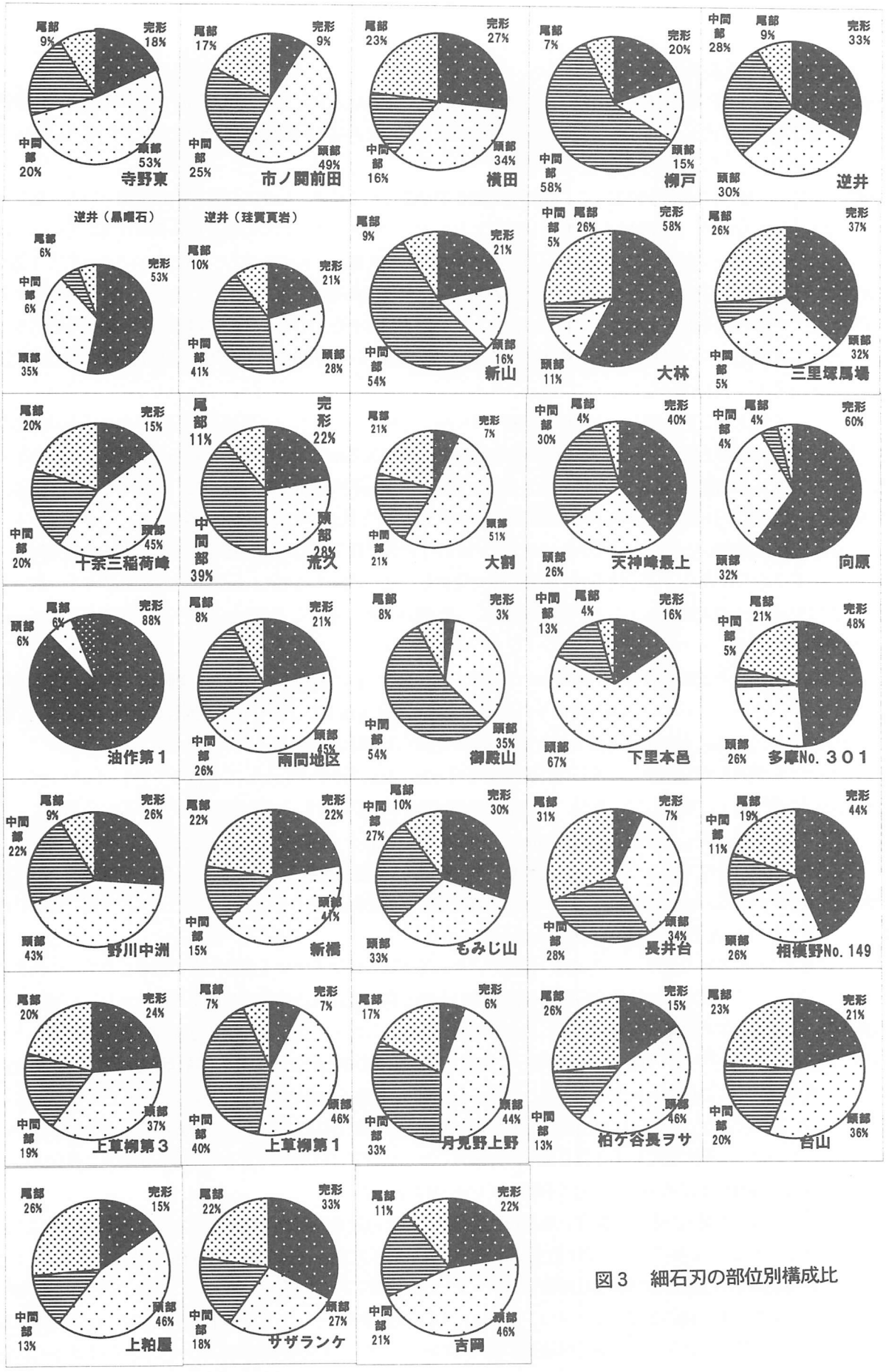


図3　細石刃の部位別構成比

4　細石刃核の作業面長について

相模野・武蔵野地域の細石核を見慣れた研究者が下総台地の細石核を見た場合、相対的に小型であるとの印象を抱いたことがあるに違いない。同じく原産地地域の細石核を見慣れた人は相模野・武蔵野の資料についても同様な印象を持つであろう。

細石核が石核原形への調整を踏まえての細石刃剥離作業が進行してゆき、やがては遺跡内に廃棄される対象であることは多言を要しないが、その廃棄の基準は一律ではない。とりわけ黒曜石のような非在地系石材を用いている場合、細石刃剥離作業の停止・細石核の廃棄とは、直接的に新たな石材の確保・補充と結びついたものであった筈である。当然のことながら移動領域内で確保可能な在地系石材ならば容易に補充ができたであろう反面、非在地系石材である黒曜石などの場合にはそれらとは違った扱いがなされていた蓋然性がたかい。具体的には細石刃剥離作業の進展に伴い、黒曜石製の細石核などは打面の再生や調整、作業面の転移等の技術を駆使して有用法量を究極まで細石刃生産に転化しようとしていたに違いないからである。

さて、ここで細石核に残る細石刃剥離作業面長（平均値）を検討してゆこう。黒曜石原産地域に形成された男女倉Ⅲ、Ⅳ、Hや鷹山遺跡などから出土した細石核作業面長は3cmから3.35cmを計測する。これらの原産地に比較的近い距離に存在する矢出川遺跡では2.3から2.45cmと、前者と比較して5mm程作業面が短くなっていることが明瞭である。この5mmという数値はほぼ打面再生による作業面長の縮小に対応した数値である点は興味深い。

こうした矢出川遺跡例と同様な作業面長さを示すのが埼玉西部に位置する横田、柳戸、そして新山の各遺跡から出土している細石核群である。同じ埼玉でも東部地域に位置した逆井遺跡では更に5mm程の作業面長の減少が観察される。北関東の利根川以北に分布する市ノ関前田遺跡、寺野遺跡、坂田遺跡などでも2cmを下回る作業面長の細石核が特徴的となっている。

東京都下に分布した遺跡ではどうであろうか？多摩ニュータウン内の遺跡から出土した細石核に見る作業面長はいずれも2.5cmを上回っているが、武蔵野台地上の遺跡では2cmから1.2cmまでと著しい作業面長の減少が見られる。特に台地中央から東・北部に存在する遺跡でそうした傾向がとりわけ顕著に伺われるようである。

神奈川県下の遺跡群から出土した細石核作業面長を見ると、2cm前後を中心としてそれをやや上回る例が多い。殆どの遺跡は相模野台地に集中しているが、三ノ宮・山谷屋遺跡は相模川右岸、長井台遺跡は三浦半島に位置している。こうした位置関係を反映してか前者では3.1cm、一方後者では1.5cmを下回るまでに作業面長が減少している。

下総台地上の遺跡を見て見よう。星谷津遺跡や一本桜南遺跡では2cmを越える作業面長を有しているが、油作第1や向原などの遺跡からは1.7cmの作業面長が得られている。資料的な制約があるものの、下総台地内の黒曜石細石核作業面長が平均でも1.5cmを下回らない点は意外とも言えようか。

原産地地域に形成された遺跡から武蔵野、相模野、そして下総台地にまで至る遺跡出土の黒曜石細石核の作業面長を観察してきた。ここで示した作業面長は単体例を除いた細石核に残された作業面長の平均値であり、地域的な偏在は無論のこと遺跡単位の数量的多寡は否定しようもない。しかしながら、グラフの概要を検討する限りにおいても幾つかの興味ある事実が明らかとなろう。まず第一に黒曜石原産地での細石核に見るその作業面の長さがある。男女倉、鷹山など原産地遺跡での作業面値を平均すると3.26cmを計測し、黒曜石製細石核作業面長の平均値である2.2cmを約1cm以上も上回ることとなる。豊富な原産地に形成された遺跡内では細石核における細石刃剥離作業が比較的初期の段階で終了していたこと伺わせていると言えよう。無論、こうした背景には原材料である黒曜石が容易に確保・補充できるといった石器石材を巡る環境が大きく作用している点は疑いない。

さて、このような作業面長から判断される細石核廃棄基準は、原産地を離れるに従って次第に規制されてゆくようである。原産地から30Km程の距離を隔てた矢出川遺跡では平均して2.5cmを下回る作業面長となっている。この2.5cmという作業面長は細石核上での細石刃剥離作業停止の一つの基準であった可能性がたかく、埼玉西部の横田、柳戸、新山などの遺跡群、東京都の多摩ニュータウンNo.388、301、769遺跡、そして上草柳第1、三ノ宮・山谷屋遺跡などでもほぼ同様な作業面長に至っての細石核廃棄が認められる。三ノ宮・山谷屋遺跡例については伊豆方面からの石材

供給も考慮されるところであるが、いずれにしても各地域に似通った数値で石核廃棄基準の見られる点は興味深い。加えてこうした作業面長の数値を示す遺跡が各地域を単位として見た場合には突出した数値であることに加え、そして埼玉西部や多摩の遺跡では石器群の殆どが黒曜石に拠っていることから、恐らくこれらの遺跡は黒曜石石材が確保・供給された直後に残された可能性がたかい。

相模野・武蔵野そして下総台地に分布する遺跡では、遺跡単位に若干の相違を顕現させながらも通常2cmから1.5cmに至るまで細石刃剥離が継続されてゆく。相模野での長井台遺跡や武蔵野の廻沢北、下里本邑、新橋遺跡に見るように作業面長が1.5cm或いはそれをも下回るまで細石刃剥離が進行している点は、こうした細石核の究極的とも言える消費（細石刃剥離作業の進行）が地域的なものではなく、地域内移動に伴う非在地系石材（黒曜石）製細石核の有効活用という点にその要因が求められるべきことを示唆していよう。下総台地には現状ではこうした作業面長が1.5cmに至るまでの平均値を示す遺跡は存在しないものの、個別資料としては該当する事例も存在することから、今後は同様な類の遺跡が確認される可能性はたかい。

黒曜石製の細石核に観察される作業面長を地域単位に概観したが、もう一つ注意すべき点は各地遺跡で黒曜石製と共に在地系の珪岩・凝灰岩・頁岩等の石材を用いた細石核が比較的安定して見られる点にある。相模野では凝灰岩、流紋岩、珪岩が、武蔵野では珪岩、凝灰岩、頁岩、そして下総では珪質頁岩、安山岩、珪岩などが細石核石材として用いられている。相模野、武蔵野両台地では黒曜石石材とこれら在地系石材とが補完的に遺跡内や遺跡単位に構成した姿が看取される一方、下総台地では明らかに在地系石材を主構成に黒曜石石材をそこに組み込んだ細石核構成を読み取ることが可能である。下総台地とほぼ同様な構成が逆井、寺野東、市之関前田などの諸遺跡でも看取されることから、旧利根川左岸側の北・東関東地域にかけては在地の石材を用いた細石核に非在地系石材である黒曜石製のそれとを組み合わせることによってバランスをとりつつ細石刃の生産がなされていたものと考えられるのである。貴重な黒曜石は作業面長が平均で約1.75cmになるまで剥離作業が展開する一方、在地系石材に拠る細石核については2.5cm程となった段階で作業が停止し、遺跡内へと廃棄されていたのであろう。

相模野や武蔵野などの地域においも在地系石材を用いた細石核に関して、それぞれ興味深い事例が存在する。前者ではガラス質黒色安山岩を用いた三ノ宮・下谷戸遺跡であり、後者は珪質頁岩を用いた雨間地区遺跡で各々が4.2cm、3.5cmという、それぞれ在地系石材を用いた細石核作業面長が突出した数値であることは改めて指摘するまでもないだろう。石材の構造上、黒曜石と同様な薄く幅狭な細石刃を剥離することが困難で、必然的に大型とならざるを得ない点は考慮しなくてはならないが、大局的に見ればこれらが男女倉や鷹山などの原産地遺跡に近似した作業面長を示す点は看過できない。領域内に産出する豊富な在地系石材を用いて細石刃剥離作業を展開した場合、やはり石核廃棄の基準は緩やかとなっていた点は間違いないと言えよう。

5　細石刃核及び原形重量

前章では細石核に残された細石刃剥離作業面長を一つの手掛かりとして、細石核が遺跡内へと廃棄される基準、どの段階に至って細石核が細石刃剥離が困難との判断が下されたかを検討してきたが、ここでは同じく細石核に注目しつつもその重量についての地域的毎の比較をおこなってみたい。

最初に武蔵野台地の黒曜石製細石核の重量を見ると御殿山、野川中洲といった遺跡で４ｇ台の重量値を示す一方で、鈴木遺跡、下里本邑遺跡などでは２ｇ台となっている。一方で多摩川を挟んで対面する多摩丘陵地域内の諸遺跡から出土した細石核重量は４～５ｇの重量を持ち、明らかに多摩川を境として細石核廃棄時の重量比に差異の生じていることが理解される。即ち、多摩丘陵にあっては細石核重量が４～５ｇで廃棄されるのに対して、武蔵野台地側では、特に東部や北部域にあっては重量的にはその半分の２ｇ台に至るまで細石刃の剥離作業の展開が進められていることを知る。

この武蔵野台地とは入間川を隔てて北に位置する埼玉県西部では、柳戸遺跡などのように４ｇ台の細石核重量を示す遺跡と、横田、新山遺跡のように７～６ｇ台の数値の認められる遺跡とが存在している。細石核が５ｇ前後に至って廃棄されているという点では、隣接した武蔵野台地よりも、寧ろ多摩丘陵の諸遺跡と類似していると言えるであろ

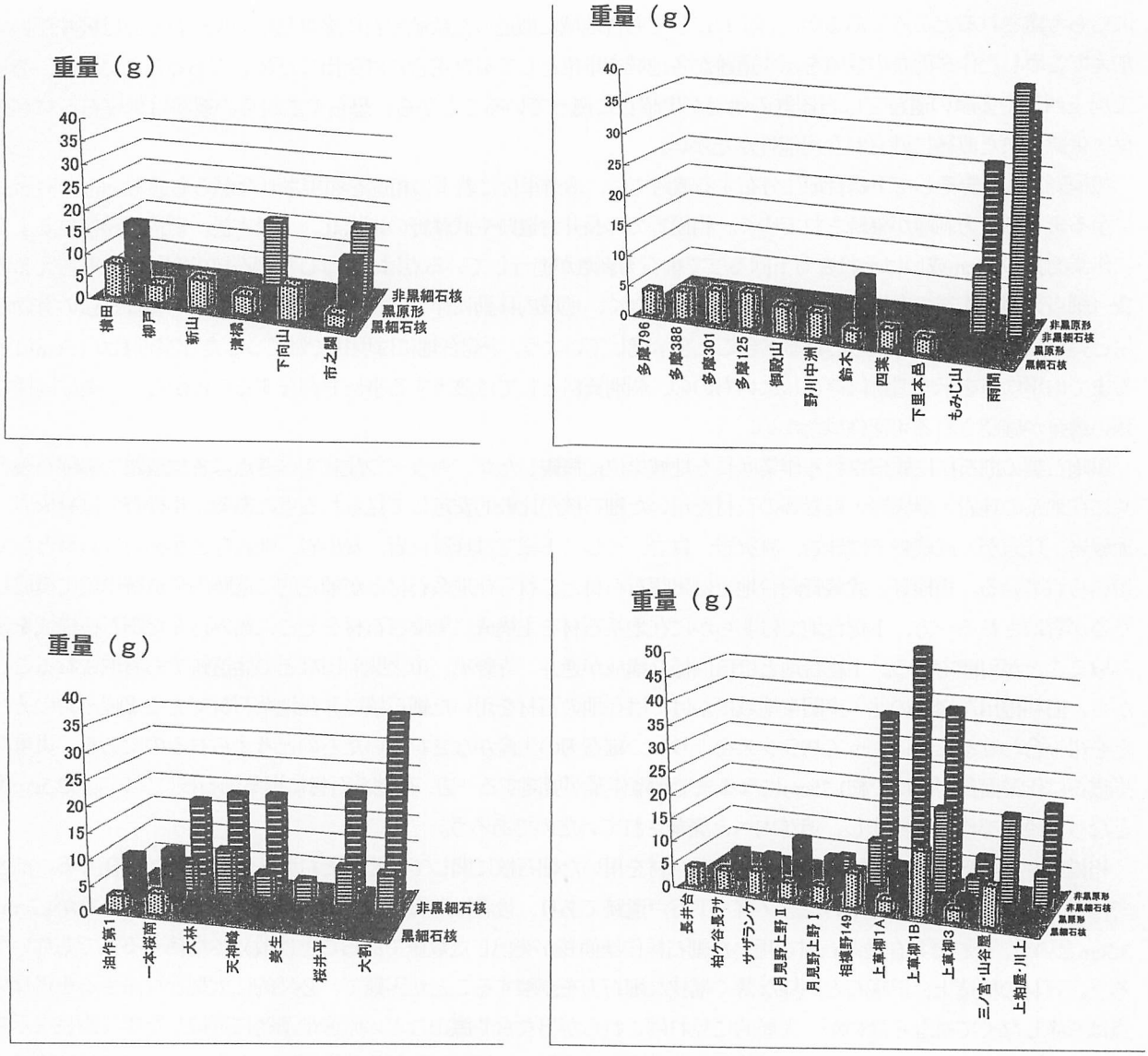


図４　細石核、細石核原形の重量

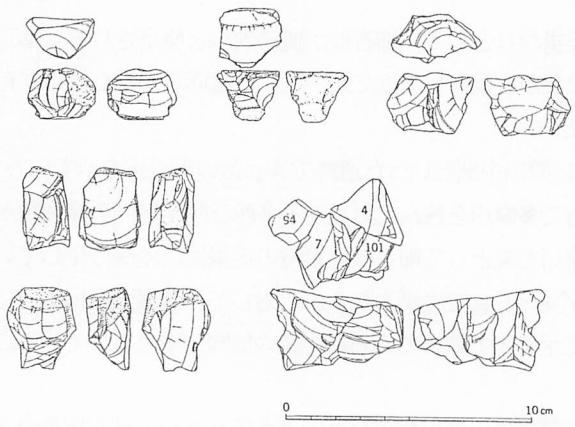


図５　同一母岩による細石核原形の製作　（春日台・下耕地）

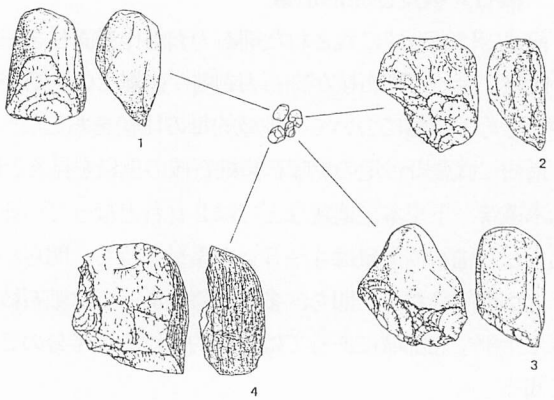


図６　礫器のキャッシュ（雨間地区遺跡）

う。

相模野台地での様相を眺めてみよう。上草柳遺跡第1地点でやや突出した状況（10g）が見られるが、大略的には他地域と同様であると言えよう。サザランケ遺跡や吉岡遺跡で平均で5ｇ台の細石核重量が看取される一方で、月見野上野遺跡で3ｇ台、上草柳遺跡第３地点では2.6gとなるまで細石刃の剥離作業が進んでいる。重量の上限と下限の数値は、武蔵野台地でのそれと比較的類似したものと解することが可能であろう。

下総台地ではどうであろうか？黒曜石製細石核の重量値の掲載された遺跡は僅かに２遺跡、一本桜南遺跡（4.1g）と油作遺跡（2.6g）に留まっている。しかし、単独資料も含めた他遺跡の状況も加味して、本地域での黒曜石製細石核が武蔵野台地などと比較した場合に際立った小型化が、即ち究極的とも言える細石刃剥離作業の進展とそれに伴う重量値の減少をそこに看取することはできない。意外との印象もあるが、しかしこうした状況は、前章で検討した同じ黒曜石製細石核作業面長とも見事な対応関係を成立させている。黒曜石細石核の場合、作業面長は1.5cm前後、そして重量に関しては２ｇ後半の数値が、いずれも地域を越えた利用限度として認識される可能性がある。

こうした細石核重量と共に看過できないのが、細石核原形の存在である。矢出川型に見られる石核の面構成などを勘案する限り、恐らく原礫面を残存させた厚手の大型剥片なども、石核調整を経て明確な原形として用意されたものと類似した価値を有していたのであろう。と同時に、従来より細石核として捉えられてきている一部の大型細石核（下里本邑、御殿山など）については、確かに細石刃剥離作業の痕跡を僅かに留めるものの、作業展開の程度や石核法量（特に共伴する他の細石核と比較すると突出した数値を有している）などを勘案する限り、これらも細石核原形の範疇で理解すべきと考えている。比較的資料の安定した相模野台地では、原形重量は上草柳遺跡第３地点、台山遺跡などで３ｇ程のものもあるが、柏ケ谷長ヲサ遺跡(6.4g)、月見野上野遺跡(7.5g/10.7g)、吉岡遺跡(6.7g)、上草柳遺跡第1(7.8g)、サザランケ遺跡(6.2g)というように6g以上の重量を持っているのが一般的で、原形重量は細石核重量と比べて1.5～2倍以上の数値を示すのが通例と言うことができようか。

さて、先に概観したように黒曜石細石核に関しては、石核重量値の上限と下限とが地域的なバラツキを見せずに比較的近似した様相を示しているのに対して、他の在地系石材を用いた細石核群はどうであったろうか？周知のように武蔵野・相模野両台地に点在する遺跡では黒曜石製と共に在地の珪岩や凝灰岩、頁岩などを用いた石核群の構成が一般的である。相模野では月見野上野遺跡(珪岩：5.5g)、相模野No149遺跡(凝灰質頁岩：7.4g、珪岩9.8g)、上草柳遺跡第３(流紋岩：4.25g)、上粕屋・川上遺跡(ガラス質流紋岩：3.7g、珪質頁岩：14.5g、凝灰岩：5g)と、ほぼ黒曜石製細石核原形重量と近似した数値が看取されている。非在地系石材である黒曜石に比べてその廃棄基準が緩やかなものであったことが一目瞭然である。こうした状況と呼応するように、これら在地系石材を用いた細石核原形重量はバラツキが顕著なものの平均すると30ｇである。在地系石材による細石核は黒曜石製原形とほぼ同じ重量を示し、その原形に至っては更にその3～8倍もの重量を備えた大型品である点は注目しておく必要があろう。

石器石材が希少とされる下総台地ではどうであろうか？大林遺跡（珪岩:7.5g、珪質頁岩：6.9g、凝灰岩：7.9g、安山岩：12.45g）、大割遺跡（珪質頁岩：6.8g）、天神森最上遺跡（珪質頁岩：4.6g）、美生遺跡（頁岩：4g）、桜井平遺跡（黒色安山岩：7.2g）、空港No2（珪質頁岩：8.6g、珪岩：6.2g）と、最小値は４ｇから最大で12.5ｇ程とやや幅はあるが、平均すれば7g前後の重量に至って遺跡内へと打ち捨てられていることが解る。こうした重量値は先に見た相模野台地での在り方と同様で、黒曜石製細石核原形とほぼ同じ重量であると言うことができよう。ではこれら在地系石材を用いた細石核原形ではどうであろうか？大林遺跡（珪岩：10g、凝灰岩28g）、天神峰最上遺跡（珪質頁岩：18g、流紋岩：14.6g）、大割遺跡（珪質頁岩35.6g、珪岩：10g）、一本桜南遺跡（頁岩16g）と、細石核重量を上回る値を示している点は改めて述べるまでもない。しかし、その数値は相模野で見られたような3～8倍もの重量値は示さず、また、武蔵野での雨間地区遺跡のように平均値の突出した遺跡も見られない。加えて下総台地で看過できない点は、他地域と比べて細石核重量値に遺跡単位のバラツキがそれ程に顕著でないことが挙げられる。上記石材が下総台地にあって、武蔵野・相模野両台地における珪岩や凝灰岩などと同様に在地系石材として把握可能であるのか検討しなくてはならないが、いずれにしてもこうした数値にも当該地域の石材環境が反映されていると見なして間違いないであろう。

6　石材環境と技術的組織

これまでに当該期石器群を代表する細石刃及びその生産に係わる細石核に関する分析を進めてきたが、以下ではこれまでに得られた成果を基に、地域毎に相違する石材環境を克服しつつ等質的な「細石器文化」が如何に維持されたか、その背景と要因を探ってゆくこととしたい。換言するならば、それは関東地域の細石器文化が非在地系石材と在地系石材との構成を基にどのような技術的な組織化を計っていたかを追及するこでもある。

最初に完形細石刃の長さと細石核に見る作業面長との関係について触れておこう。黒曜石製のそれを対象とした場合、両者の対応関係は一目瞭然である。原産地に形成された鷹山、男女倉などの遺跡群では他地域と比較しても突出した数値（細石刃完形品：2.7～2.8cm、作業面長：2.9～3.4cm）を示している。当然のことながら、豊富な原石存在を背景に細石核素材の確保・補充が容易であるという石材環境を反映しているとの判断が下されよう。恐らく原産地下に形成された遺跡では通常遺跡に見られる細石刃剥離作業の進行に付随した打面の調整、再生、石核調整などの一連の修正工程は、細石核それ自体の更新によって代替されていたと解すべきなのであろう。この点は投下コスト（修正工程）と回収率（細石刃生産）との関係から判断しても至極当然のことと見なせようか。

ところで細石核作業面長や完形細石刃長に見られた値が、原産地を離れると共に減少してゆく傾向については以前にも指摘したことであるが、しかし、その減少の割合が原産地からの距離と整合的に呼応するものでない点は注視しなくてはならない。完形細石刃長と細石核作業面長は、原産地に隣接した矢出川遺跡と埼玉西部の横田、柳戸、新山などの諸遺跡、そして東京都西部の多摩丘陵の遺跡群とではほぼ同一な数値を示しているからである。原産地との位置関係から判断するならば矢出川遺跡は近（隣）接地であるのに対して、後者の多摩、埼玉西部は明らかに遠隔地として理解される。しかしながら、両者間には完形細石刃長、細石核作業面長等において明確な相違を見出すことが困難であった。後者遺跡群の一部（多摩）については不明な点もあるが、しかし、いずれも石器群の殆ど総てが黒曜石という非在地系石材に依拠したものである点は矢出川遺跡群とも共通した特徴と言えるであろう。横田遺跡例からも明らかなように、そこには拳大の黒曜石製角礫を分割して複数の細石核素材を作出した事例も存在する。同様な黒曜石原石分割事例は市之関前田遺跡や月見野上野遺跡等でも確認されており、原産地から離れた地域における黒曜石原石の入手が粗割りされた石核原形だけでなく、こうした角礫状態での搬入も存在したことを知る。加えて、その石器群構成に目を転じるまでもなく、大型礫器や削器などといった石器組成を構成する一部の大型石器を除いた殆ど総てが黒曜石石材に依拠したものである点は、これらの地域にあっても遠距離石材である黒曜石を総じて安定的に確保・補充し得る石材環境下にあったことを伺わせるに十分である。

さて、これまで黒曜石製細石器石器群が希少であった下総地域での近年での資料蓄積には大変興味深いものがある。とりわけ十余三稲荷峰遺跡は細石器文化期の大規模な遺跡で、五箇所の遺物集中から6,400点にも及ぶ関連遺物が検出され、そのうち80％約5,000点が信州産黒曜石によって占められているという。拳大程の黒曜石礫を素材に細石核が作出された事例も存在する。僅かに公表されている細石核を瞥見しても作業面長平均は2.6cmを計測し、同じく黒曜石を主体とした石器群（多摩、埼玉西部）と酷似した値を示しているのである。少数ながらも同様に黒曜石を主体的にした構成は向原遺跡、一本桜南遺跡、油作第1遺跡などでも見受けられことから、十余三稲荷峰遺跡が決して特異な内容を示すものではないことを明示している。在地系石材を主構成とした遺跡群が多数を占める一方で、非在地系石材である黒曜石を用いた石器群が少数ながらも存在するこうした下総台地での様相は、相模野台地や武蔵野台地での黒曜石を主石材に構成された遺跡群と共に、在地系石材を用いて成立している遺跡が少数顕在している傾向（武蔵野：もみじ山、出山Ⅱ、三鷹市立第五中学校、相模野：相模野No149、上粕屋・川上）と極めて類似したあり方として注視する必要があろう。

こうした問題と関連して注目すべき現象が在る。黒曜石と在地系石材との構成を概観すると、西関東の埼玉・東京・神奈川で若干の地域差が顕現している可能性がある。武蔵野台地や相模野台地上に点在した遺跡群では黒曜石製の細石核・細石刃を主体としながらも、そこに在地系石材のそれを客体的に組成している点はこれまで詳述してきたとおりであるが、両台地の挟まれた多摩丘陵部や武蔵野台地北に位置する入間川北の遺跡群では、明らかに石器群の圧倒

的多数を非在地系石材である黒曜石によって成立している石器群が存在している。両地域内での資料増加を待たなくてはならない点も在るが、いずれにしても関東山塊から続く丘陵部を含むこれらの地域では、非在地系石材である黒曜石の確保・入手が台地部よりも恵まれた石材環境下にあった点を伺わせているとして理解しておきたい。

在地系石材の利用と関連して注目すべき事例が存在する。春日台・下耕地遺跡と雨間地区遺跡で、共に珪岩や珪質岩など在地系石材を用いた細石器石器群の製作痕跡を明瞭に留めている。特に春日台・下耕地遺跡では珪岩製の細石核３点、細石刃２点という貧弱な組成を示しながらも、細石核素材と考えられる3cm程の直方体形状の珪岩製石核が11点も報告されている。礫表皮を除いた複数加撃による直方体形状の原形作成は、大型礫の分割という要因と共に珪岩等石材が堆積岩に由来することから黒曜石などと比べて均質的でなく、岩脈等を典型とした不純部などの除去がなされた結果であろう。河川氾濫原に隣接した場所でのこうした在地系石材による細石核原形の生産が他の生産活動と切り離された活動であったことは、石器組成だけでなく黒曜石製の石器を一切含まないことからも肯首されるところである。雨間地区遺跡では細石核原形だけでなく礫器製作も集中して行なわれていた可能性があり、遺跡からは４点の礫器が刃部を中心に揃えた状態でのキャッシュが確認されている。現在、こうした細石核製作に係わる在地系石材を用いた製作跡については、武蔵野台地以外では明確な存在が知られてはいないものの、雨間地区と同様な礫器製作については相模野台地の栗原中丸遺跡でも看取されている。細石核１点、細石刃117点に比べて礫器４７点の出土は異常である。粘板岩や硬砂石、凝灰岩などといった在地産礫を用いた礫器は、その殆どが同一個体の剥片類を含むと同時に接合資料も見受けられ、ここ栗原中丸遺跡において河原礫を用いた礫器製作が行なわれていたことを疑う余地はない。在地系石材を用いた細石核のみならず、礫器のような重量感の在る石器もまた移動先で逐一、原石確保、加工という手順を踏まえて臨機的に製作するものではなく、特定の遺跡で集中的に製作していた可能性を示唆していると解することができようか。

尚、今後の資料蓄積に拠るところが多いと言わざるを得ないが、武蔵野・相模野両台地の遺跡群では珪岩製や凝灰岩製、珪質頁岩製などといった在地系石材を用いた細石核・細石刃の偏在が遺跡を単位に見いだされる事実からは、非在地系石材である黒曜石製細石核の携帯を基本に細石刃生産を行いつつも、そこに在地系石材による細石核原形を補填装備することによって、移動に伴う黒曜石製細石核の計画的消費をより安全的に保証するという、危機回避のシステムが作用していた蓋然性はたかい。

相模野台地では信州産の黒曜石に加えて伊豆産や神津島産の黒曜石利用も恒常的現象として理解しておく要があるが、その価値（非在地系石材としての扱いや位置付け）に関しては、信州産のそれと大きな隔たりは無かったに違いない。相模野台地での石材構成が武蔵野台地でのそれと比較的類似したものである点はこれまで指摘してきた通りであり、明らかに在地系石材との組み合わせを通じて石器群の形成が計られていたと言えよう。信州産黒曜石が原産地域を離れて武蔵野台地に見るような在地系石材との構成を保持する間、主体的に信州産黒曜石を消費して石器群形成の計られている埼玉西部や多摩地域の介在が見られることは、相模野台地より更に原産地に近い箱根山西麓や愛鷹山麓における石材構成に相通づるものがあり、看過できぬ現象として記憶しておく必要がある。

こうした非在地系石材である黒曜石利用の状況を念頭に置く限り、やはり特異とも言えるのが下総台地のあり方であろう。当該地域にあっては頁岩、凝灰岩、そして珪岩や流紋岩などが純粋な在地系石材として捉え得るか再考の余地はあるが、こられの石材を主体に石器群の構成維持がなされていることは否定しようもない。だが、その一方で遠隔地に産する黒曜石を主体とした石器群形成も見受けられ、しかもそれらの遺跡に残された石器群（細石核、細石刃）の属性の詳細は、これまでの分析からは基本的に黒曜石原産地により近い武蔵野台地などと大きな隔たりを見い出すことができないのである。黒曜石の移入形態も両面加工品（星谷津遺跡）、大型剥片（一本桜南遺跡、油作遺跡）などと共に礫形状（十余三稲荷峰遺跡）も認められるなど多用であり、少なくともそこに細石刃剥離作業に係わる異所製作の痕跡を見い出すことはできない。つまり下総台地にあっても非在地系石材である黒曜石は、より原産地に近い武蔵野台地などと同様な形態で持ち込まれ、そして同じ消費形態への途を辿ったことが明らかなのである。希少石材として在地系石材の消費に付随してごく僅かな量を適時、消費しつつ細石刃生産を行なった痕跡は認め難く、寧ろ在地系と認識される頁岩や凝灰岩、珪岩などと同様に細石核製作の重要な石材としての地位を確保した姿が浮かび上が

ってくる。十余三稲荷峰遺跡などを念頭に置く限りは、下総台地にあっても非在地系石材である黒曜石がこれまで想像されていた以上に安定的に、しかも大規模に確保される何らかの石材獲得システムの存在が想起されるのである。

7　まとめ

旧石器時代後期の砂川段階に至り、石材の交換等によって伺い知ることのできる広範な空間に及ぶ社会的ネットワークが形成されたものと考えられる。南関東地域でとりわけ顕著な「砂川期」においては、等質的な石材交換に加えて象徴的意味を含んだ非生産的とも思われる石材交換さえも認められている。こうした事実は、本段階をもって「広域的な婚姻（mating　network）」が形成されたとする見解（田村　1993）を強く支持していると理解できよう。居住域を異にした集団が互いに石材等を持ち寄る契機が定期的に且つ、安定的に設置されていたとすれば、石材交換に際しての等価性の認知は無論のこと、技術情報を始めとした様々な情報の交換が積極的に推進されていたに違いない。

ナイフ形石器、尖頭器、そして細石器へという劇的とも見える石器群の交替劇の背景には、極めて密接で親和的とも言える関係で結束した集団間のネットワークの網目を通じて、有用技術情報そのものや各種情報がスムーズにやり取りされていたからでもあろう。確かに細石器文化段階にあっての地域差、地域単位に顕現した石器群の多用性は否定し難い事実でもある。しかし、各々の地域が潜在的に有する生態学的条件を加味するまでもなく、ネットワークを通じて齎される技術情報等を選択的に採用していたという見解に立脚するならば、石器組成のみならず従来より時間差をもって理解されて来た細石核型式の一部に関しても再考の要があろう。

「砂川期」以後、南関東や中部地方の一部では尖頭器と小型ナイフ形石器という製作技術を異にした石器群を適時、使い分けるという戦略を採用していた。そこでの石器形態の使い分けは単に製作技術だけを意味するものではなく、石材の確保から消費、補充は無論のこと、完成後の石器の使用までをも包括したものであったと見なすべきである。しかしながら、当該期に顕著な地域性の枠内で広域に分散生息したシカ、クマ等の中型獣（鈴木　1988）を対象に狩猟活動を維持する行動形態－しかも製作技術等を異にした石器を使い分けつつ－には、一定の限界が露呈しつつあったに違いない。画一的な石器形態の作出が容易で、その組成により全体形の形成が自在に可能な植刃器、槍等の採用、しかもその基本的な製作技術は従来からの石刃技法の置換によって対処し得るという点を視野に入れれば、細石器文化への急激な傾斜は極めて当然な現象であったと判断されるのである。

過搬性に優れた細石器製作技術の採用により、それまでのネットワーク形成を担った集団内でより相互に親和的な集団同士が再編され、従来より一層広範囲な行動領域が形成されていったものと思われる。従来の地域差を越えて中部高地の黒曜石原産地から武蔵野台地にまで至る、等質的とも言える細石刃生産に係わる技術的様相の形成された背景には、そうした集団関係の再編成が潜在していたのであろう。黒曜石原産地から離れるに従って在地系石材を石器製作に組み込んでゆくという石材構成を廻る組織化は、明らかに前代の技術知を取り込んだ上での行動論的な整備と認識すべきである。

だが、細石器文化への移行により、それまでに形成されたネットワークが一新されたとは考えられない。黒曜石原産地を中心に中部高地から南関東にまで至る垂直的な広域移動へと再編された集団と対峙するように、関東北部から下総にまで及ぶ水平的な広域移動も存在したことは、下総台地に残された遺跡群に見る石材構成からも明らかである。領域内に産出する頁岩、流紋岩、そして凝灰岩、安山岩等の石材を用いた細石核・細石核原形を携帯し、小規模な遺跡を形成しつつ頻繁に移動を繰り返すこれらの集団も、安定的に非在地系石材である黒曜石を入手した痕跡を残しているからである。集団間の新たなネットワーク化を推進しながらも集団間相互の関係態は維持し、広範な空間を頻繁に移動する過程の中にも互いが石材や技術、情報を交換する契機が明確に存在していたと判断される。北関東から下総台地にかけての地域がいち早く北方系舟形細石核群を受容したのに対して、南関東から中部高地の地域では従来より続く矢出川型細石核を中心に石核構成の組み替えで対処している状況も、地域的な生態系に根ざした適応形態を如実に反映したものであると同時に、張り巡らされたネットワークを通じて技術的な知識が集団毎に選択的に採用されていたことを物語っているのである。いずれにして、もはや細石器文化の研究が従来から続く細石核に残影として残る特定技術工程を手掛かりに、伝播概念を主軸に据えて解釈し得ない点は自明と言えるであろう。

最後になってしまったが、執筆の機会を与えていただいた堤氏に厚く感謝申し上げたい。これを機会に改めて９３年のシンポジューム記録集を読み返し、田村論文を始めとした多くの論文から刺激を得ることができた。田代　孝、永塚俊司、麻生敏隆、西井幸雄の各氏には文献入手等でお世話戴いた。深謝。

(2003.9.15)

引用参考文献

麻生　優　1965　「細石器文化」『先土器時代』日本の考古学Ⅰ　河出書房

安蒜政雄　1979　「日本の細石核」『駿台史学』47

安蒜政雄　1984　「日本の細石器文化」『駿台史学』60

織笠　昭　1984　「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物』文献出版

織笠　昭　1993　「細石刃研究の最も基礎的な研究」『細石刃文化研究の新たなる展開』　Ⅱ

栗島義明　1993　「細石刃文化と石材環境」『細石刃文化研究　の新たなる展開』Ⅱ

栗島義明　2003　「石材環境から見た移動と領域」『旧石器人たちの活動をさぐる』

佐藤宏之　1992　『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房

佐藤宏之　1995　「技術的組織・変形論・石材供給－下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察－」『考古学研究』　42-1

杉原荘介　1974　『日本先土器時代の研究』講談社

杉原荘介・小野真一　1965　「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』

鈴木忠司　1971　「野岳遺跡の細石核と西南日本にける細石刃文化」『古代文化』23-8

鈴木忠司　1988　「素描・日本先土器時代の食料と生業」『朱雀』1

田村　隆　1993　「野辺山を視る眼－石器の行動理論構築に向けて－」『細石刃文化研究　の新たなる展開』Ⅱ

(財) かながわ考古財団　1998　『吉岡遺跡群Ⅴ』

宮城村教育委員会　1991『市ノ関前田遺跡』

(財) 栃木県文化振興事業団　1998　『寺野東　遺跡』(旧石器時代編)

(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1995　『柳戸/新山/向山/青棚/光山遺跡群』

宮代町教育委員会　1997　『逆井遺跡・山崎山遺跡』

(財) 千葉県文化センター　1989　『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書』

(財) 千葉市文化財調査協会　1996　『土気南遺跡群』

(財) 千葉県土地公社　1973　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』

(財) 千葉県文化財センター　2001　『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書』―天神峰最上遺跡―

(財) 千葉県文化財センター　1982　『成田市三里塚馬場遺跡』

(財) 千葉県文化財センター　1978　『佐倉市星谷津遺跡』

(財) 君津郡文化財センター　1994　『美生遺跡群』

(財) 君津郡市文化財センター　1983　『清水川台遺跡調査発掘調査報告書』

(財) 千葉県文化財センター　1989　『千葉市荒久遺跡』

(財) 千葉県文化財センター　1991　『四街道市内黒田遺跡群』

(財) 千葉県文化財センター　1991　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』

(財) 印旛郡市文化財センター　1991　『油作第１遺跡発掘調査報告書』

東京都埋蔵文化財センター　1999　『多摩ニュータウン遺跡』

東京都埋蔵文化財センター　1999　『多摩ニュータウン遺跡』　―No.１２５遺跡―

東京都埋蔵文化財センター　1992　『多摩ニュータウン遺跡』　平成２年度

新橋遺跡調査会　1997　『新橋遺跡』

世田谷区遺跡調査会　1981　『廻沢北遺跡』　第５，６次調査概報

三鷹市遺跡調査会　1980　『井の頭池遺跡群A地点発掘調査報告書』

東京都埋蔵文化財センター　1983　『多摩ニュータウン遺跡』―昭和５７年度―
八王子市春日台遺跡調査会　1974　『春日台・下耕地遺跡』
日本道路公団　東京外かく環状道路　練馬地区遺跡調査会 1995　『もみじ山遺跡』
日本道路公団　東京外かく環状道路　練馬地区遺跡調査会　1995『愛宕下遺跡・比丘尼橋遺跡・宮ヶ谷戸遺跡』
板橋区四葉遺跡調査会　東京都建設局　1996　『四葉地区遺跡』平成８年度　〔旧石器時代編〕
下里本邑遺跡調査会　1982　『下里本邑遺跡』
三鷹市教育委員会　三鷹市遺跡調査会　1985　『井山遺跡』
三鷹市遺跡調査会　1983　『三鷹市立第五中学校遺跡』
三鷹市教育委員会　三鷹市遺跡調査会　1996　『羽沢台遺跡』
東京都建設局　小平市鈴木遺跡調査会　1980　『鈴木遺跡』
鈴木遺跡刊行会　1981　『鈴木遺跡』
東京都建設局　小平市遺跡調査会　1984　『鈴木遺跡』
小金井市遺跡調査会　1989　『野川中洲北遺跡』
雨間地区遺跡調査会　1998　東京都あきる野市『雨間地区遺跡群』
横須賀市教育委員会　1990　『長井台地遺跡群』
大和市教育委員会　1989　『相模野代１４９遺跡』
大和市教育委員会　1984　『一般国道２４６号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告書』
大和市教育委員会　1986　『月見野遺跡群上野遺跡第１地点』
台山遺跡発掘調査会　1988　『神奈川県大和市　台山遺跡発掘調査報告書』
神奈川県立埋蔵文化センター　1984　『栗原中丸遺跡』
神奈川県埋蔵文化センター　1986　『代官山遺跡』
財団法人　かながわ考古学財団　1998　『吉岡遺跡群』旧石器時代３ 縄文時代２
柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団　1997　『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』
財団法人 かながわ考古学財団　1996　『宮ヶ瀬遺跡群』 サザランケ（№12）遺跡
和田村教育委員会　1975　『男女倉』
宮坂英弌・宮坂虎次　1966　『蓼科』尖石考古博物館研究報告叢書第二冊

細石刃石器群の技術とその背景：素描

― 相模野台地を中心として ―

仲田 大人

1 はじめに

石器は、その物理的な性質から、以下のような特徴を有している。すなわち：

○石器表面に残される剥離面を解読することによって、製作者が実践した製作にかかわる一連の手続きを、ほぼ例外なくたどることができる。

○製作者や使用者の行為の意図が、痕跡として残される。つまり、石器はそのような意図を端的に示してくれる「良い指示者」（Perles1992）である。

ここでは、石器のもつ特質を活かし、細石刃石器群にみられる技術を通時的に整理し、石器群の構造性という枠組みに基づいた変化の様態を跡づける。そのために、層位的出土例に恵まれている相模野台地とその周辺の細石刃石器群をとりあげ、石器群の構造性をもとに遺跡間の関係性について言及する。

われわれが理解する石器群とは、石器石材の選択、剥片剥離技術、二次加工技術、石器型式、廃棄の様式などが有機的に組み合わさることによって表出される。相模野台地の細石刃石器群は、基本的に、稜柱形細石刃石核によって構成されるもの（いわゆる「野岳･休場型」）と舟底形細石刃石核がともなう石器群（「船野型」「海老山型」）とがある。ここでは、石核型式の分類枠をこえて、技術構成という観点からこれらの石器群を捉えなおしてみることにしたい。

個々の石器群を成り立たせている原則をそれぞれの技術系列を通じて理解し、石器群を評価してゆく方向性は、技術構造論として広く膾炙した方法論である。こうした見方から、細石刃石器群の構造性を明らかにする見解は、鈴木次郎・矢島国雄（1979）、田村隆（1989b）らによってあらわされている。しかし、これらの作業をもとにして、細石刃石器群の全体的な構造性が議論されてきたとは必ずしもいえない。細石刃石器群において、細石刃の製作が目的だとすれば、そこに到るさまざまなプロセスを考古学的なデータから「読む」ことが必要になる。

本論では、以上の問題に応えるために、個別の石器群にみられる変化を通時的に検討してみる。そして、石器群構造の枠組みとその変化の過程を跡づけ、さらにはその背景についての若干の考察を行なうことにしたい。とくに、層位的出土例に恵まれている相模野台地の細石刃石器群を対象とする。なかでも、編年的に一致した見解のみられないBB0層前後の層準から出土した細石刃石器群に焦点をあててみたい。

2 視点と方法

どのような石器群であれ、考古学的な事実として実体化される過程には、つぎにあげる６つの段階がふまえられねばならない。すなわち、①原材料の選択と獲得、②剥離技術とその方法、ここでは接合資料が有力な情報となろう。③遺跡に残される石材消費・製作工程の段階的な把握。④製作される石器型式、⑤再生や修整などの変形の手続き、⑥廃棄、という一連の製作・使用・廃棄のつながり、である。こうしたハードウェアとしての記録以外に、ソフトウェアとしての知識・記憶・技術的選択への意思決定プロセスなどが、適宜、作動していることはいうまでもないが、この点については稿をあらためたい。

細石刃核にみられる形態の変異も、こうした一連の技術システムの内部で理解することが本来、望まれるところである。特徴的な器種・型式に焦点をあてて、分類・記述することは最重要である。それとともに、技術をシステムとして捉え、そのサブシステムとして技術的・経済的・社会的な人間行動の変異の結果として、型式を見つめなおす視点も同時に深化する必要がある。両者は必ずしも相容れないものではない。むしろ、つねにフィードバックしながら相互に検証しなくてはならない。

表1　相模野台地における細石刃石器群の組成と変遷

諏訪間	砂田	遺跡名	層位	MB	MC	MCM	Kn	Po	Es	Ss	No	Ow	Bu	Pie	Sr	Rf	Uf	Ch	Ax	Eg	Gr	Ham	F	C	Co	P	計
段階XI	第5段階	三ノ宮Ⅰ	FB下					407	12	5		3		13		302	83	19	2	1		25		52881	42	150	53945
		勝坂45次	LIS上	1	1			9	5	2		1				5		1				1	301	280		21	628
		上和田城山	LIS上	29	12					2						2	1	2			1	1					50
		上野Ⅰ-Ⅱ	LIS上	31	2		5	10	2	2						2	1		1	1		1		1628	1	24	1711
	第4段階	長堀北Ⅱ	LIS中	52	1	1		13		1				1		3			1				337	474			884
		寺尾Ⅰ	LIS			1		58		5					1	3	4		5	1		1	91	1005	1	46	1222
段階X		上草柳3東	LIS	3																							3
		上草柳4	LIS	2																							2
		福田札ノ辻	LIS		1																						1
	第3段階	下鶴間長堀	LIS下	321	27	15	1			15						4	11	3				1	767	46			1211
		相模野No.149	LIS下	62	11					1	6						1						224		1		306
		新戸	LIS下	4													1	1				1	4	2	4		17
		栗原中丸Ⅱ	LIS下	117	1	2				9				3		7	15	44				10	210	472	14		904
		上野3-Ⅰ	BBO		1													1					3				6
		報恩寺	BBO上	68	12	1	2		2	10		4				10	16	10					178	268	10		591
		深見諏訪山Ⅱ	BBO上	17	1					2																	20
		上和田3-Ⅱ	BBO上	1														2									3
		台山Ⅱ	BBO上	566	12					6		4				14	11	6					796				1415
		代官山Ⅱ	BBO上	12	4		1	1		1						5	5				2	1	65	348			445
		長堀北Ⅲ	BBO上	7			1									4	3						45	15			75
		風間Ⅰb	BBO上	19	1		1	6		15				5		9	27	6			8	20	179		13		309
		かしわ台駅前	BBO上	141	4	4						1		1		3	6						16	233	1		410
		下九沢山谷	BBO上	1	1																						2
		三ノ宮Ⅲ	BBO中	825	36				1	7		2	1	16		110	49	8				7	2757		51		3870
		草柳中村	BBO中	12			1			3					2	2	10						54	18			102
		上草柳1-Ⅰ	BBO中	147	6	5	1	4		3	1					3	5	1					220	107	4		507
		上野Ⅲ-Ⅱ	BBO中	95	5	2				3		1					28	1					168		1		304
		中村Ⅱ	BBO中	10	6	3	1			2				1			12						212		1		248
段階IX	第2段階	上野Ⅲ-Ⅰ	BBO下	225	5	3			1	2		1				3	20	1					262		1		524
		上野Ⅲ-Ⅲ	BBO下	5												1	4	14					518				542
		上草柳3中	BBO下	96	7	2	2			3		2				1	10						207	86	2		418
		上和田4ⅡA	BBO下	40						7							5						36	9	4		101
		上和田4ⅡB	BBO下	8	4	1				5		1					11						57	14	5		106
		上和田4ⅡC	BBO下	4				12		6							15						355	78			470
		慶応SFC	BBO下		1			1								1							26				29
		サザランケ	BBO下	67	12	2				2							12	1				3	46	84			229
		柏ヶ谷長ヲサ	LIH上	154	1	4				2				2		4	2	3					271	269	4		716
		かしわ台駅前	LIH上	85	1												2						8	28			124
	第1段階	打木原	LIH上	-	11	-																					634
		代官山Ⅲ	LIH上	461	36	8		4	1							3	3					1	288	689	1		1495
		吉岡B	LIH上	1021	74	61		5								1	4	2	1			8	213	7			1397
		計		4709	297	115	16	530	24	121	7	20	1	42	3	502	378	126	10	3	11	81	8914	59041	161	241	75353

さて、細石刃石器群を、器種と技術との結びつきという視点にたって整理してみたい。３つの系列にまとめることができる（表１）。そうした系列を、ここでは「技術構成」と呼ぶ。

構成１は、細石刃製作技術である。目的器種は、細石刃。剥離の経過によって多様な形状を示す細石刃核に注目が集まるが、ここでは石核はあくまで副次的産物であるという認識に立つ。細石刃核は、その型式性ばかりをことさら注目するのではなく、一連のコンテクストのなかで、どのようにして作られ、どのようにして細石刃剥離がおこなわれ、いかに廃棄されているか、ということに着眼の比重が置かれるべきである。

構成２は、一般剥片剥離技術であり、各種の石器製作を目的とする。この場合、剥片形状に規定はないが、やや幅広の鱗状剥片が作出される。石核には、縦長剥片石核、板状剥片石核、打面転位石核などがみられる。剥離された素材剥片は二次加工剥片に転用される。

構成３は、打割具としての礫器と、その調整剥片の作出である。すでに述べたように、この場合の礫器は単一機能のみを担う器種ではないことに注意したい。複数の母岩別・個体別資料からなる調整剥片のみが廃棄される場合も、この系列に含める。

各構成は、石器群の内部において構造化され、その組み合わさり方もまた複雑きわまりない。３種類の技術構成は比較的に抽出しやすい。ただし実際には、構成間の関係は固定的ではない。技術相互は依存的な立場におかれており、廃棄形態にもいくつかの変異が生じる。われわれの眼前にある遺跡（石器群）とは、それぞれの生態系への適応を反映した、行動パターンが間遺跡的に残されたものである。そこで把握された遺跡類型とは、石器製作活動の単なる反映ではなく、資源開発の時間的・空間的な適応のありかたとして構造化される。ここでは、細石刃石器群にみられる製作技術の構成差を抽出したのちに、石器群をいくつかの類型にまとめたうえで、その背後にある行動論的な考察にまで大胆に踏みこんでみたい。

３　L1H 層上部出土細石刃石器群の技術構成

はじめに、代官山遺跡第Ⅲ文化層・吉岡遺跡群Ｂ区 L1H 層から出土した石器群をとりあげる。これらの石器群は、相模野台地では出現期の細石刃石器群として位置づけられている。技術構成としては、細石刃技術、一般剥片製作技術、礫器製作技術が識別される。それぞれは相互に独立した技術ではない。また、わずかながら尖頭器製作技術がのこされている。この石器の共伴に関してはいろいろと賛否があるが、ここでは共伴と考える立場である。

構成１　細石刃核原材、細石刃核のブランク（母核）、細石刃核、細石刃、細石刃核製作調整剥片という５つの段階がある。石材は柏峠産黒曜石、上多賀産黒曜石の利用が主体的である。

〔原材とブランク〕

原礫の準備と持ちこみ、分割までの各段階が含まれる。代官山遺跡第Ⅲ文化層、吉岡遺跡Ｂ区は、細石刃核の製作工程を復原しうる、良好な石器群である（砂田 1986、砂田ほか 1998）。これをもとに、出現期と目される石器群の特徴をみておきたい。

まず L1H 層上部の細石刃核の基本的なイメージをまとめておこう。それは次のようなものである。①打面が平坦な原礫面かあるいは一枚の剥離面である。②打面調整が施される例はほとんど稀で、細石刃核調整技術の適用は個体間においても顕著ではない。③細石刃核側面調整が細石刃剥離の進行とともに随時、適用される。④原材が打面の条件を満たしており、打面に接する石核側面形態がすでに具備される。こうした諸条件を満たす素材容量の獲得が、この段階の細石刃核製作技術とおおいに関係しているらしい。基本的には、直方体・立方体状を呈した角礫を選択することが多い。

１類：細石刃核と原材・母核が１：１に対応する関係にあるパターン。直方体状の原石を原材に用いている。打面を平坦面に設定し、適宜、側面調整剥離を行ない、左右両側面にはさまれた小口部が作業面となる。この類型の細石刃核は、細石刃剥離を一定して連続的におこなったあとで、側面調整を施し、ふたたび細石刃剥離作業

表２　相模野細石刃石器群の技術構成

層準／石器群	細石刃製作技術（構成１）				一般剥片剥離技術（構成２）				礫器製作技術（構成３）	
	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b
L1H層										
代官山Ⅲ文	●	●	●	●		○	○	○	＋	＋
吉岡AL1HU	●			●			○			
吉岡BL1HU	●	●	●	●		○	○	○	＋	
打木原		●	●	●			○	○		
柏ヶ谷長ヲサⅣ文		●	●	●		○	○●	○●	＋	＋
BB0層										
サザランケⅡa文									＋	＋
サザランケⅡb文		●	●	●				●	＋	＋
上和田城山４ⅡA			(●)	●			○	○●		
上和田城山４ⅡB		●	●	●		○	○	○●		
上和田城山４ⅡC						○●	○●	○●		
月見野上野１Ⅲ文Ⅰ群	●	●	●	●		○				(＋)
月見野上野ⅠⅢ文Ⅱ群	●	●	●	●○				●		
月見野上野１Ⅲ文Ⅲ群				●					＋	＋
三ノ宮Ⅲ文	(●○)	●○	●○	●○	(○)	○	○	○	＋	
中村Ⅱ文		○	●○	●○	○	○	○	○		
上草柳１-ⅠA	●	●○	●	●○				○		
上草柳１-ⅠB	●	●○	●○	●○	○●	○●	○●	○●	＋	
上草柳第３中央		●○	●○	●○		○●	○●	○●		(＋)
かしわ台駅前Ⅰ文		●	●○	●○			○●	○●		
かしわ台駅前Ⅱ文			●	●						
代官山Ⅱ文		●○	●○	●○			○	○		
長堀北Ⅲ文				●○				○●		
南鍛冶山0702									＋	＋
台山Ⅱ文		●○	●○	●○		○	○	○●	＋	＋
深見諏訪山Ⅱ文			●	●○				○		
谷津山神								○	＋	＋
日向南新田								○	＋	＋
中原									＋	＋
上原								○	＋	＋
報恩寺		●○	●○	●○		○	○	○	＋	＋
L1S層下部										
下鶴間長堀Ⅰ(a)	(○)	○	○	○	○	○	○	○	＋	＋
新戸				●○		○	○	○	＋	
栗原中丸Ⅱ文1～11	●	●○	●○	●○		●	●○	●○	＋	＋
栗原中丸Ⅱ文12			●	●			○	○		
相模野No.149		○	○	○			○	○		＋

凡例

・構成１・２　a：原石の搬入、b：石核（素材）の搬入、c：石核の製作、d：製品のみ

・構成３　a：礫器製作、b：調整剥片のみ

・●：黒曜石（産地は不問）　○：非黒曜石　＋：非黒曜石（構成３のみ）

・（）はその痕跡が不明瞭なもの。または、判断がつきにくいもの。

へと循環する。

2類：扁平な自然礫を素材とする。長軸または短軸方向に打撃をおこなってえられた分割礫や厚手剥片を角柱状の細石刃核素材とする。素材および細石刃核の背面もあるいは側面に、原礫分割時の剥離面を有し、その剥離面を打面や作業面に設定することもある。

3類：基本的な工程は2類とかわらない。ただし、石核素材の剥片をえるまでに最低でも2段階を経ており、素材の作出までに手数がかかることが、ほかと異なっているところである。つまり、素材背面に原礫面を残す大振りの剥片を、ほぼ石核の節理に沿って分割し、さらに素材剥片を分割してブロック状剥片を細石刃核の素材とする。細石刃核素材には原礫面や節理面、分割時の剥離面が石核に残される。素材整形後には、原則的に打面への調整剥離はおこなわれないが、側面調整は個体ごとに偏在することが読みとれる。

〔調整剥片〕

原材および母核形成の過程において、多数の調整剥片が生じる。調整剥片のうち、刃器状石器として石器へ転用される。この転用は、明らかに細石刃核整形過程に組み込まれている。L1H層上部石器群では、大半が使用痕のある剥片として残される。

〔細石刃核〕

細石刃核は、代官山遺跡第Ⅲ文化層で33点、吉岡遺跡B区に74点ある。これらはおおむね同じ形態であるが、いくらかの形態変異がある。

Ⅰ類：単設の打面をもついわゆる半円錐形を呈するもの。製作工程との対応という観点から、大体の個体は製作技術1類から製作される。形状は、ほぼ立方体で、打面長軸に対して直交して作業面が設定されるものと、打面長軸に並行して作業面を設定するものとがある。それぞれ打面には打面調整、打面再生はおこなわれない。

Ⅱ類：単設打面で、打面幅に比して縦軸に長い。Ⅰ類とは、側面観が長方形を呈することで区別されるが、個体数は少ない。打面は、水平なものが多く原礫面・調整打面がある。作業面は、石核長軸の端部に設定される。正面観は船底状、楔形状、D字状などいくつかのタイプが確認できる。

Ⅲ類：90度打面転位が観察されるいわゆるサイコロ状石核。形状は、立方体状。事例数はそれほど多くはない。打面の固定はゆるやかである。石核への調整過程は顕著ではない。作業面を除いて原礫面に覆われている。

Ⅳ類：打面と細石刃剥離作業面との交角が鋭いもの。基本的に打面は一方に固定される。石核形態によってこれを立方体ないしは角柱状を呈するものと、やや扁平な剥片素材がある。

Ⅴ類：形態的にはⅣ類によく似ている。側面観で打面／作業面の交角がやや平坦になるものもを含めてⅤ類としておきたい。板状素材の小口面に、比較的幅の狭い細石刃剥離作業面が設定される。打面には礫面を残す平坦打面と調整打面の両者があり、側面調整が頻繁である。

これらの類型のうちⅠ類・Ⅱ類を除いて考えると、母岩別・個体別資料に対応関係がみられないことはとくに重要である。また、ブランクの製作工程2・3類で獲得された素材に側面調整や部分的な頭部調整を適宜加えながら、細石刃剥離を進行させている。また、剥片素材を多用するⅣ・Ⅴ類では、細石刃剥離とほぼ平行して、側面調整を行なう資料もある。不定形な素材剥片を整形することで、正面観を楔状に保ち、細石刃の剥離作業を安定させる働きをもっていたと推測される。

〔細石刃〕

代官山遺跡第Ⅲ文化層では461点、吉岡遺跡B区では1022点の細石刃が検出された。細石刃核との比率は、前者が細石刃核1点／12.8点の細石刃が剥離される計算になる。後者では細石刃核1点／14.2点の細石刃が剥離される。両側縁が並行せずやや湾曲する細形の細石刃が多い。

構成2　一般的剥片剥離手法によって剥片石器を製作する。安山岩、ガラス質黒色安山岩、ホルンフェルス、硬質細粒凝灰岩を素材とし、構成1とは石材利用が異なっている。

〔剥片剥離技術〕

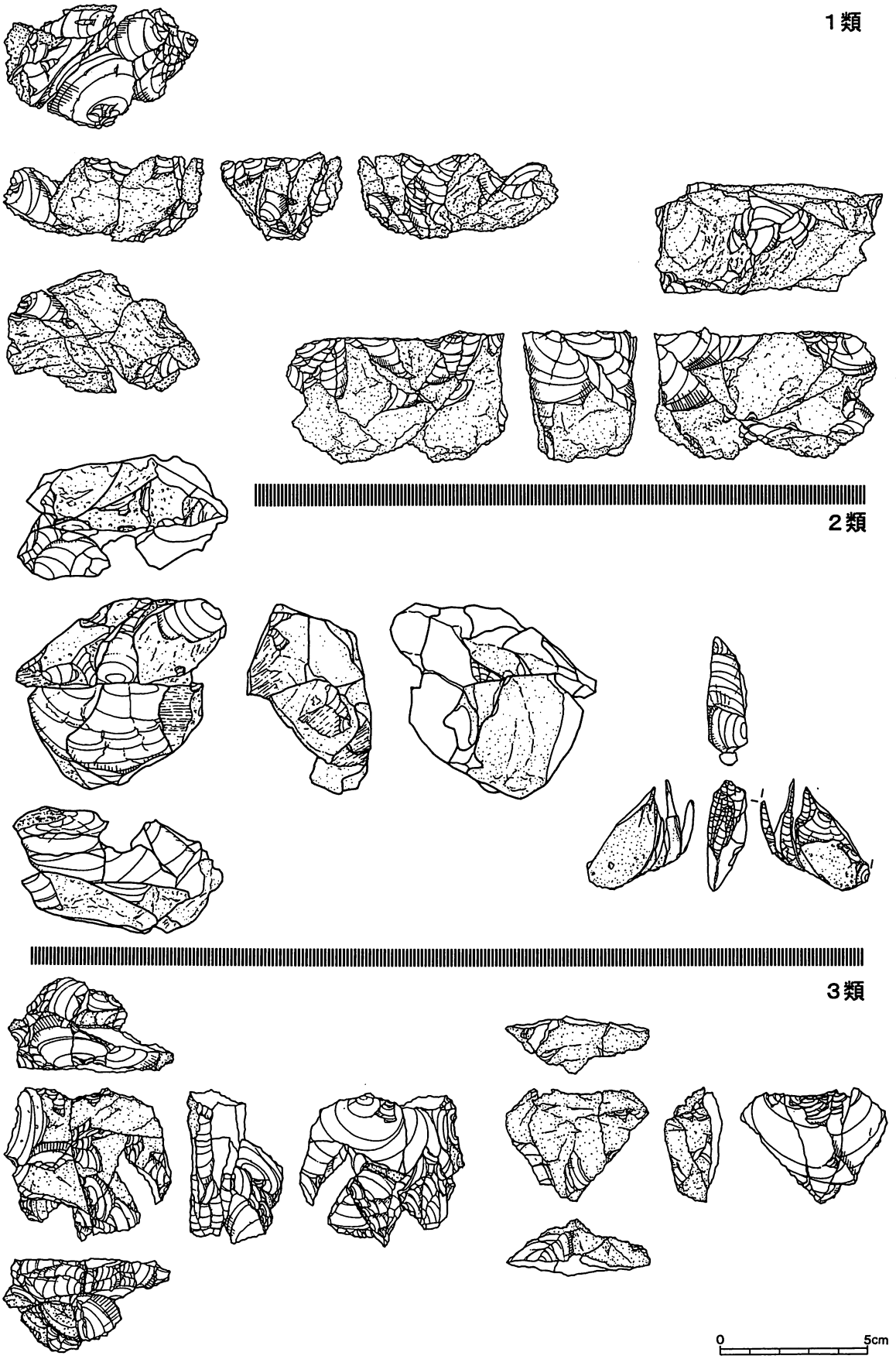


図1　L1H層上部細石刃核の製作工程

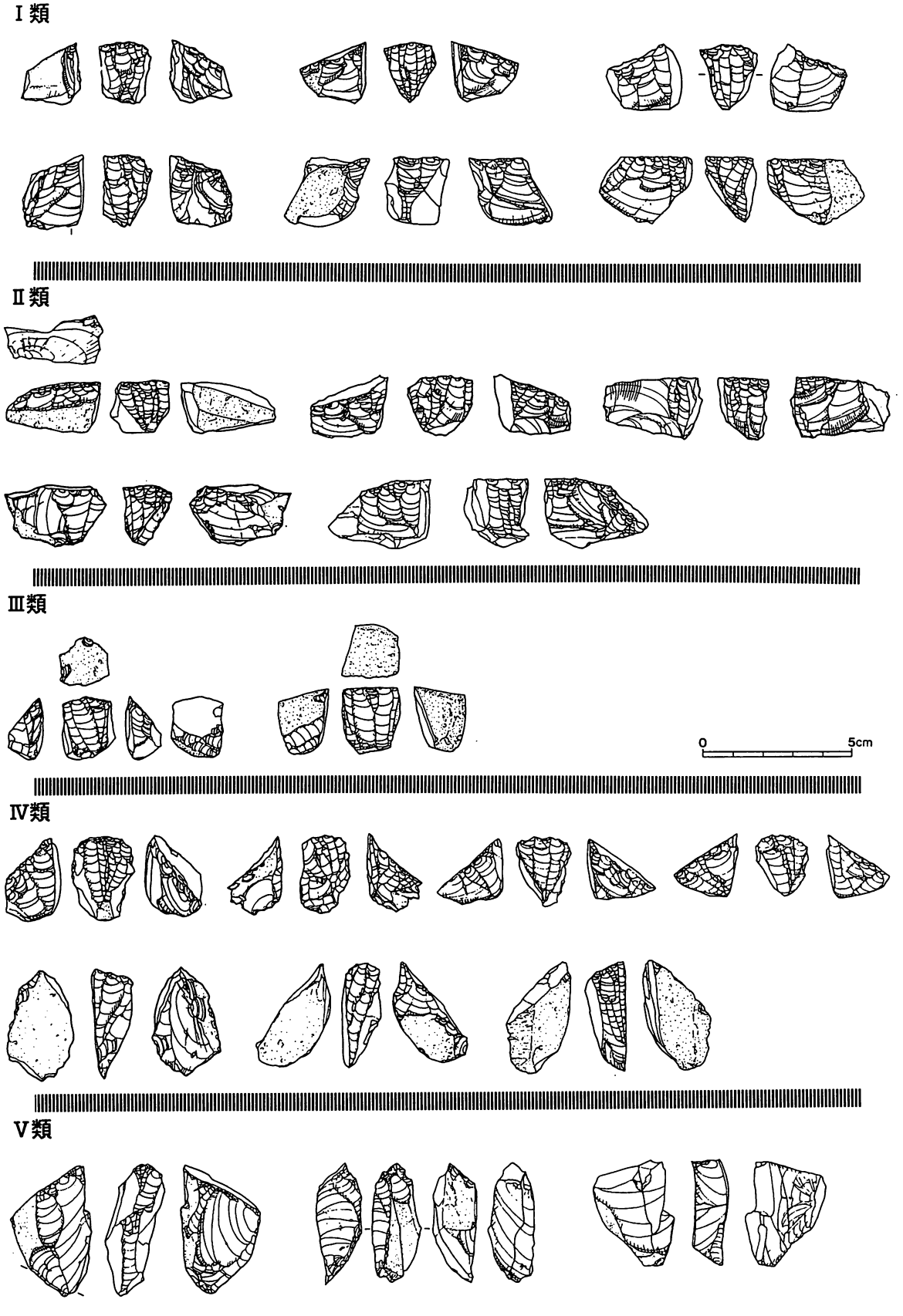


図２　代官山遺跡・吉岡遺跡群Ｂ区出土細石刃核の形態

良好な接合資料や石核などは遺存していないが、剥片の種々の属性を総合すると、以下の剥片剥離手法がみられる。

Ⅰ類：打面を180度転位するもので、打面は調整打面、非調整打面の両者が確認されるが、石核調整はほとんどおこなわれない。剥離される剥片は縦長剥片である。打面転位の過程は不明だが、石核の周辺に沿って打点を移動させ、剥離を行なう。

Ⅱ類：短寸の部厚い剥片の最終剥離面に打面を設定し、素材の縁辺に沿って移動しながら、貝殻状の小形剥片を連続的に剥離する。いわゆる板状剥片石核。

Ⅲ類：厚手のブロック状剥片を素材とし、頻繁に打面の反転を行ないながら打面／剥離作業面を入れかえるもの。残核形態はサイコロ状石核である。

〔剥片利用〕

この過程で剥離された剥片類は、ほとんど遺跡内では製作された形跡をもたない。剥片には明瞭な使用痕および二次加工が施されるものはみられない。使用痕のある剥片、加工痕のある剥片に素材供給される。

構成3　礫器状のチョッパー・コアが目的とされる。その過程では打割具のみならず、礫面を残した厚手の大形剥片もまた利用される。この系列の認定は、打割具か石核かという二択にもとづいた判断で議論されることが多くみられる。ある器種がなんらかの機能と即応するといった見方はいま一度、見直してしかるべきであろう。機能と型式（形態）との関係は今後、実験研究も含めて追求するべきものであり、アプリオリな理念のみから断定していくことはまず難しいだろう。

〔礫器（状石核）〕

いずれの機能が主体的に発揮されるかは、この石器の置かれていた脈絡（コンテクスト）に左右される。

〔調整剥片〕

礫器それ自体の機能価よりも、素材剥片の使用過程に重点がおかれていた。このことは、大形剥片が遺存することからも窺知されるだろう。構成1でえられた剥片の長幅比、幅厚比などの相関を調べると、構成3の剥片よりも大形である場合が多い。二次加工がおこなわれる例は少なく、選択的に遺跡内に残されたことが廃棄状態からは類推される。

構成4　両面体石器の製作技術系列。ここでは槍先形尖頭器が作られる。裏面に素材となる縦長剥片の主要剥離面をのこし、代官山例では、打面部を基部側に設定する。吉岡例では両面加工形態となる畑宿産・柏峠産などの黒曜石が用いられる。単体ないしはそれに準じる母岩構成である。この技術では、調整加工は比較的面的な剥離が施され、代官山では周縁部に、吉岡では器体中央に達する程度の調整加工がそれぞれ施されている。細石刃技術との関係については、これ以上の情報がない。おそらく、細石刃石器群とは独立した技術と考えるのが良さそうである。それ故に遺跡の廃棄パターンにも反映されていると見なせる。

L1H層上部出土細石刃石器群の特徴は次のようにまとめられる。

（1）　石器群を大別すると、代官山遺跡第Ⅲ文化層では1488点の石器群が3箇所のブロック群を、吉岡遺跡B区では4620点の資料が4箇所のブロック群をそれぞれ形成している。これらのブロック群は接合関係から、それぞれが排他的な関係あったのでなく、同一時期の単一ユニットとして把捉することができる。

（2）　柏峠という比較的至近な距離にある原産地から搬入された黒曜石の小礫ないしは角礫を素材とし、これを、そのまま原材として利用したり、粗割りしたのち、分割してえられる部厚な板状剥片を素材とするものなどいくつかの素材獲得作業が遺跡内で行なわれている。素材は、このうちの適当なものが選択されて細石刃剥離が開始される。細石刃剥離に用いられた残核は変異をもつが、これは剥離作業の進行と、石核容量の有効利用を意図した各種の調整作業の多寡に反映される。

（3）　これとはまったく別に、安山岩、ガラス質黒色安山岩、ホルンフェルスなどを利用した一般剥片剥離手法がある。石器の廃棄形態には２種類あり、①剥片が遺存するもの、②石核のみが遺存するものがある。剥片は基本的に縦長剥片で、遺跡内にはごく少量しか残されない。後者はあまり良質でない石材を適宜割って、矩形・横長あるいは貝殻状などの剥片を製作する手法で、縦長剥片のみが製作されるような単相的なブロックは見あたらない。

（4）　礫器状石核の一群は、綾瀬市報恩寺遺跡（鈴木・矢島 1979）にてはじめて注意された。報恩寺遺跡の石器群出土ピークはBB0層上部であることから、さらに古い段階の石器群に同様な構成が認められたことは、この技術系列が相模野細石刃石器群の出現段階から連綿とつづく可能性を暗示しているものといえる。

（5）　尖頭器製作技術は縦長剥片を素材とする。ただし素材の形状によっては、面的な平坦剥離によって両面体に製作されることがある。構成４が石器群全体におよぼす影響は今のところ未知数である。

L1H層上部細石刃石器群は、石器石材、剥片剥離技術、二次加工技術、石器形態、廃棄パターンにおいて相互に対照的なグループに分けることができる。これらは、各技術系列内において組織化されていることが最大の特徴である。そして、それぞれに自立した製作工程をもっている。細石刃石器群はすでに出現段階において、さまざまな石器群の構成が観察されていることが理解できる。だとすれば、これらの変異をうみだす技術構成を各系列に還元して考えると、地域的・時間的な変容の様相とはどのように理解されるのだろうか。つぎに、BB0層における石器群を観察することにしよう。

4　BB0層出土細石刃石器群の技術構成

最近、筆者が整理に携わる機会をえた小田原市谷津山神遺跡第Ⅰ地点をみてみたい。礫器、刃部調整剥片、調整剥片、剥片、磨石、樋状剥離を有する剥片という、組成的には礫器製作に集約される内容であることが異色である（諏訪間ほか 2003）。分類上の帰属が明らかでない樋状剥離を有する剥片を除いてみると、この石器群は、構成３の単相的な石器群だということができる。出土層位は相模野台地BB0層上部に相当する。

組成的・出土状況的にみて、谷津山神遺跡と比較できる遺跡に、日向南新田遺跡第Ⅰ文化層（服部 1987）がある。石器組成は、礫器、石核、磨石、剥片である。このうち、石核とされた資料は片刃礫器状のもので、石材は細粒凝灰岩である。構成２の存在は著明でなく、全体的に構成３の石器群といえそうである。このほかにも、構成３のみの石器群を検索してみると、南鍛冶山遺跡0702遺物集中（望月 1996）、上粕屋・上尾崎遺跡（宍戸ほか 1999）、宮ヶ瀬遺跡群中原（№13C）遺跡第Ⅱ文化層（鈴木 1997a）、上原（№13）遺跡（鈴木 1997b）がある。大野原（№13D）遺跡では、使用されたと考えられる調整剥片がまとまって出土しており、構成３の内部においても廃棄パターンは多岐にわたる。このように、構成３の技術系列しかもたない石器群のありかたは、細石刃石器群全体のなかで、いったいどのように評価されるのであろうか。このほかの廃棄パターンを眺めてみることにしよう。

構成１＋構成２＋構成３という石器群には、報恩寺遺跡 BBO 層出土石器群がある。細石刃、細石刃核、細石刃核素材、スクレーパー、揉錐器、使用痕のある剥片、加工痕のある剥片、石核、礫器状の石核、剥片・砕片類が報告されている。

一般剥片剥離手法を示す資料は、総じて小形である。剥片は、幅広・矩形の形状を示すものが多い。石核素材の最終剥離面を打面として、素材縁辺を周回しながら連続的に剥離を進行する剥離技術によって製作されたものといえるだろう。これとは別に、素材の礫面を打面として作業面と打面とを交互に入れ替える打面転位石核もあり、その残核は礫器状の形態になる。このほか、サイコロ状に規則正しい角柱形になるものなど、作業過程に応じて生じる形状もまた多様である。ただし、いずれも遺跡内での製作痕跡が明瞭ではない。上草柳第Ⅰ地点遺跡第Ⅰ文化層Ｂブロック（堤 1984a）は、構成２か構成３かはっきりとしないところもあるが、すべての技術系列が残されているようだ。相模野№149遺跡（鈴木 1989）、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅳ文化層（堤 1997a）、下鶴間長堀

遺跡第Ⅰ文化層（堤 1984c）、三ノ宮・下谷戸遺跡第Ⅲ文化層（三瓶 1998）などがこのグループに含まれるようだ。代官山遺跡第Ⅲ文化層（砂田 1986b）や吉岡遺跡群Ｂ区 L1H 上部出土石器群（砂田ほか 1998）も同様で、複合した系列をもつ集合的性格の強い遺跡である。

構成１＋構成３では、宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第Ⅱ文化層（鈴木 1996）が好例である。文化層は、Ⅱa・Ⅱb に分けられているが、両者を同一の文化層としてみなして考えてみたい。このユニット構成は相模野台地の細石刃石器群に通有的な廃棄パターンであることがわかる。

第Ⅱa 文化層の石器組成は、礫器、敲石、剥片であり、いずれも単体資料である。礫器の刃部再生過程に生じる剥片は選択されて、刃器類への転化が意図される。典型的な構成３の石器群。

第Ⅱb 文化層では、２箇所のブロックから細石刃、細石刃核、細石刃核原形、スクレーパー、使用痕のある剥片、剥片、砕片、礫器、敲石が出土している。石材は、黒曜石をはじめとして、硬質砂岩・頁岩・硬質細粒凝灰岩が利用される。黒曜石は、細石刃・細石刃核・刃器類など、構成１に用いられる。また、近傍産石材は礫器および敲石に利用される。石材利用と技術系列には選択性があるようだ。礫器から剥離された調整剥片は、状況に応じて刃器に転用される。石器群は、構成１＋構成３の複合的系列である。この石器群に対比される遺跡として、栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層第 1～11 号ブロック（鈴木 1984）、月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅲ文化層Ⅲ群（堤 1986）がある。いずれも異なる技術系列による廃棄ブロックを併存する。

構成１＋構成２の遺跡には、上草柳第１地点遺跡第Ⅰ文化層Ａブロック（堤 1984a）がある。石器組成は、尖頭器、細石刃、細石刃核、同素材、同調整剥片、掻器、加工痕のある剥片、使用痕のある剥片、石核、剥片・砕片からなる。尖頭器は、ブロック外出土資料も含めて、文化層全体で４点ある。黒曜石製で、剥片石器との素材供給が重なる可能性がある。構成２は、遺跡内での剥片剥離の痕跡が乏しく、明瞭に製作工程を遡及できる資料に欠けるために判断がむずかしい。構成２を痕跡的に残す石器群としては、栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層第 12 号ブロック（鈴木 1984）、深見諏訪山遺跡第Ⅱ文化層（曽根 1983）、上草柳第３地点中央遺跡（堤 1984b）、月見野遺跡群上野遺跡第Ⅲ文化層Ⅱ群（堤 1986）、中村遺跡第Ⅱ文化層（伊藤ほか 1987）、上和田城山遺跡第Ⅱ文化層（曽根 1979）がある。

構成１を主体とする石器群には、代官山遺跡第Ⅱ文化層（砂田 1986a）、かしわ台駅前遺跡第Ⅰ文化層・第Ⅱ文化層（滝沢ほか 1991）、月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅲ文化層Ⅰ群（堤 1986）がある。

代官山遺跡第Ⅱ文化層では、細石刃、細石刃核、スクレーパー、楔形石器、ナイフ形石器、使用痕のある剥片、二次加工のある剥片、剥片、砕片、敲石、磨石が出土した。利用石材は黒曜石（神津島産）、ガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩、ホルンフェルス、チャート、頁岩である。いずれの石材も細石刃製作に用いられている。とくに黒曜石は、遺跡内での細石刃核整形および細石刃製作が明らかで、側面調整剥片が刃器へと転化する。段階的なコアリダクションに、刃器への素材剥片の転化が組み込まれる。また、凝灰岩では、細石刃核、スクレーパー、二次加工剥片などがほぼ製品の状態で持ちこまれる。細石刃製作にかかる剥片類の二次的利用は顕著だが、廃棄に至る過程をみてみると、石材ごとの対照的な性格が生じている。

基本的な構成として、構成１＋構成２＋構成３、構成１＋構成３、構成３という類型化が可能である。また、構成１＋構成２、構成１という組み合わせも抽出される。この地域の細石刃石器群には、こうした５つの廃棄パターンが立ち現れることによって、遺跡間の変異が生じている。

BB0 層の細石刃石器群を構成する技術的な系列の組み合わせは、変異が激しい。基本的には、細石刃技術、一般剥片剥離技術、礫器製作技術の３者が抽出され、構成４とした両面体石器の技術系列は不分明である。

いまこれを、黒曜石を主体とする石器群と西相模・丹沢山地を給源とする石材利用が顕著な石器群とに便宜的に分けて考えてみると、次のような事実が把握される。

信州系黒曜石を利用するサザランケ遺跡、神津島系黒曜石に依存・消費していた三ノ宮・下谷戸遺跡では、構成１が示すように、原石段階から細石刃製作までの段階的な細石刃製作によって細石刃が量産される様態が理解される。この製作体系では、均質な塊岩状の石器石材が選択され、遺跡内への搬入が前提となっているようであ

る。ブロックへの供給形態は原材や母核整形段階のものが大部分である。

黒曜石は、細石刃核の製作に付随して多量の個体が集約的に消費されており、しかも遺跡内にほぼ限定的に分布する。代官山遺跡第Ⅱ文化層や報恩寺遺跡では、集約的な母岩消費を行なう黒曜石石器群とともに、ごく少量の非黒曜石製の細石刃ないしは細石刃核がブロック内に遺存している。これらの製作工程は断片的であり、また分布も異なっているため即断はできないが、いずれも製品が遺跡内に持ち込まれたものと理解される。黒曜石石器群がブロック内での母岩消費を選択しているのとは対照的な廃棄パターンを示している。

また、近傍石材を利用して刃器への素材供給のありかたがみられる。小形で幅広の鱗状剥片が目的とされているようだ。残核は、板状剥片石核や打面転位石核が多く、縦長剥片を製作する石核は用意されていない。小形剥片は、スクレーパー、石錐、使用痕のある剥片、二次加工剥片に素材供出されており、細石刃石器群において確実に構造化されている。しかし、遺跡内での母岩消費が確認できる個体は少なく、石核から幅広剥片、刃器までの段階的な製作過程はよくわかっていない。

礫器は打割具であると同時に、石核としても機能するようだ。しかし、こうした機能的要請は前述したように活動のコンテクストに依拠していると考えている。それゆえ、行動によっては単一の機能的発現に偏在することもあったであろう。石材は、硬質細粒凝灰岩、安山岩、硬質砂岩などが選択され、遺跡が立地する至近河川を採取地として、搬入される。

これらの観察から、BBO 層出土石器群の特徴は、以下のようにまとめられる。

（1） 石器群はL1H 層上部において観察されたように、基本的には構成１、構成２、構成３という３種を抽出できるが、遺跡ごとにその複合のありかた、樹状状に内在する技術構造の発揮は偏在的である。

（2） 構成１には、信州系とともに神津島系、箱根系黒曜石が選択される。黒曜石利用については、特定原産地が主体的に用いられる場合、複数の原産地組成を示す場合など、その組み合わせは幾通りかの類型化が可能なほどである（望月・堤 1997）。黒曜石は、母岩を単位とした段階的な石材消費がみられる。その結果、多量の剥片・砕片類が遺跡内に遺存することになる。すなわち、①原石の粗割り、②母核（ブランク）の作出と整形、③打面形成・再生、側面調整などの細石核調整過程は個体ごとに偏在的に行なう、④細石刃剥離という一連の手続きが復原される。作業④は作業③と適宜手順を組み替えて、細石刃を企図的に製作している。

（3） 細石刃製作では、②および③の過程で生じる調整剥片は素材の有する属性の選択を媒介として刃器類製作へ供出される。これらは通常、スクレーパー、石錐などの器種へと分化する。このほかに、楔形石器の製作がみられ、小形剥片が製作される。

（4） 石材利用では、黒曜石と対照的なありかたを示すのがチャート、硬質細粒凝灰岩、頁岩を用いた一群である。これらは、遺跡内に既製品として単体搬入される。

（5） 非黒曜石製石器群は、細石刃製作と連動して一般剥片剥離手法による幅広剥片製作を技術構造に組織化する。石核形状、製作される剥片の形態などから、構成２で得られる剥片形態と共通する属性が看取される。遺跡内・ブロック内にはこの一般剥片剥離手法を段階的に復原する資料は見当たらず、具体的な搬入の形態などは不分明である。これによって、細石刃製作と同様の母岩であることだけを根拠に、細石刃製作に集約した母岩であると認識することはむずかしくなる。

（6） 構成２は、幅広剥片製作にともなう板状剥片石核と求心状石核が剥片製作の基本構成であり、遺跡よって①石核のみ搬入、②石核と横打剥片が搬入、③剥片（多くは刃器への転化後）のみの搬入というパターンが経験的に知られている。この差異は、遺跡の廃棄パターンとも通底している。

（7） 構成３による礫器調整剥片が刃器類への素材転化がみられる。これは遺跡内部の微視的な分布でも明らかである。また剥片のみが密集帯からやや離れて出土していることから、剥片が二次加工をへて刃器として再利用されることが予想される。

（8） この段階には、石器石材の側面から２つに大別される石器群がある。構成１を黒曜石のみで構成するグ

ループと構成１に少量の近傍石材をともなうグループである。この両者は、石材消費に著しい偏りが看取される。この石器群の大きな特徴であるといえる。

従来、この２つの石器群は石材利用の多角化をもとにして、時間的な経過と変遷をあらわしていると認識されている（堤1987、砂田1993、1994）。時間軸を整列させるうえでは妥当であるといえる。ただし、この段階の細石刃核に共通する特徴として、製作技術上、基本的に厚手の剥片を分割し、立方体または角柱状、類船底状に整形して、細石刃製作を進行させることや、形態的にも、技術的にも相互の類似性をみることができる。また、打面調整や側面調整などの適用の多寡を細石刃核の時間的指標として捉えることも十分な説得力があるが、基本的には細石刃核の技術形態的特徴を強調したというよりは、石器群の出土層位にもとづいた深度差を石器群の時間的推移とともにパラレルに推移する指標的属性に読みかえているとも見えなくない。細石刃核への調整加工は同じ石器群のなかにあっても選択的・偏在的であることはこれまでに述べてきたとおりである。

化石化した行動パターンとしての石器資料から、目につきやすい属性のみを取りあげて、何らかの解釈を行なった場合、それが遺存するアセンブリッジ総体の内部において、どのような意味を有しているのかを再検証してみてもよいだろう。いわば、コンテクストの内部で、どのように評価できるのか、もう一度、問いなおすことも無意味ではなかろう。そのような観点からすれば、これらの石器群の関係性は、相互に対位する属性群が対照的な機能的特性を保持・発現したものと評価することも可能である。このことは、石器製作技術におけるこの両者の関係を、種々の属性群の「相補的集合」（安蒜1984）の振幅内に位置づける立場にたつことでもある。

5　L1S 層下部における石器群の諸相

栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層からは、12基のブロックが検出されている。このうち１号～11号ブロックと12号ブロックは80mほど離れて分布しているが、両者には層位的な懸隔があるわけではない。しかし、内容をみるとブロックを構成する石器群は相互に個性的である。石器群は、構成１と構成３による。

黒曜石は、構成１と構成２に適用され、遺跡内での剥片剥離作業に利用される。それ以外の石材は、単体資料ばかりで、地点内での石材消費の痕跡は対照的といえる。いっぽう、相模野№149 遺跡では、凝灰岩質頁岩、チャート、黒色頁岩などが利用され、凝灰岩質頁岩では最低でも２個体分の消費がおこなわれる。

構成１の特徴として、黒曜石の遺跡内消費が零細であることを勘案しても、消費される石材に違いこそあれ、遺跡内で消費される個体と遺跡外から搬入される個体という石材利用の図式は共通している。この事例は、L1S 層の細石刃石器群に顕著で、BB0 層段階とは対照的な石材消費の傾向であることが指摘される。

こうした石材利用の多用性は、時間的な変遷の根拠としてとらえる見方が通有的であった。この両者の時間的な位置づけをめぐっては、より厳密な判断が要求されるが、層位の上下差こそあれ、観察される石器群間変異はほとんど看取することができない。自然層の区分によって石器群の関係性を切断し、時間的階梯に振りわけようとするのではなく、石器群のもつ構造性を強調するのであれば、時間差ばかりにこれらの石器群を還元して説明することには無理がある。少なくとも、BB0 層における各廃棄単位（＝石器群）は、各集団の来歴を示している可能性が高く、その過程で獲得した石材種、別の遺跡から持ち運ばれた石器などの集合体から構成されていることを評価すれば、この集合の振幅とは、遺跡がもつ機能性の差異が表出したものだと見做すことができる。こうした構造性は、いわゆる「船野型」、「ホロカ型」、「海老山型」などと評される細石刃核をもつ石器群にも適用できると思われる。つぎに、大和市上草柳第１地点第Ⅰ文化層、同下鶴間長堀遺跡第Ⅰ文化層、同上和田城山遺跡第Ⅰ文化層の石器群を参照することで、これを検証してみたい。

細石刃製作技術（構成１）は、細石刃石核・細石刃石核素材の石核整形のしかたと形態的特徴によって２つに区分されるという（堤 1984a・b）。それぞれ、「石核形態が船底形に整形されるもの」（Ⅰ類）、「石核原形の形成に一定のあり方が認められず、形態的にもバラエティをもつもの」（Ⅱ類）である。Ⅰ類に相当するものは「船野型」あるいは「ホロカ型」などとよばれてきた経緯があるが、筆者はⅠ類を限定的な意味としての「船野型」と捉える。反対に、Ⅱ類は「船野型」に類する形態も含まれ、型式認定や個別名称を付与することがむずかしい。

Ⅰ類とⅡ類は石器石材・製作形態・廃棄パターンなど、属性相互にどのように布置されているのであろうか。これを、Ⅰ類・Ⅱ類を同一の石材、同一の母岩から製作されている遺跡（A：下鶴間長堀・上和田城山）、Ⅰ類とⅡ類では選択される石材と廃棄パターンが対照的なありかたを示す遺跡（B：上草柳第Ⅰ地点例）とに分けて考えてみると、石器群Aは、近傍石材を主とした細石刃石器群で、Ⅰ類・Ⅱ類ともに凝灰岩やチャートの志向性があることがわかる。また、石器群BではⅠ類細石刃核に近傍産石材、Ⅱ類に黒曜石が用いられる。石器群AとBは、石材ごとにそれぞれ廃棄パターンも異なっており、前者は遺跡外からの搬入、後者は遺跡内での製作という対峙が明確である。黒曜石は、神津島、畑宿、柏峠西という産地組成であり（望月・堤前掲）、居住地近傍の石材種のみならず、相模野台地から140kmも離れた遠隔地の神津島系黒曜石も断続的に入手し、消費活動を繰り返していたと考えられる（堤2002）。

いわゆる「野岳・休場型」細石刃石器群や、「船野型」細石刃石器群と型式学的な特徴によって識別される石器群をみても、マクロ的な視点から鳥瞰してみると、石器群は構成1、構成2、構成3という技術系列から成立し、遺跡の機能性およびコンテクストの役割によって単相的あるいは複合的にあらわれると理解される。複雑にみえる細石刃石器群も遺跡ごとの技術の表現型をもとに捉えなおしてみると、その基本構成は構成1または構成1＋構成3という組み合わせであり、構成2も構成1との技術的融合がみられる。また、各構成において、石材消費は双極化の傾向を示すことも重要である。それは石材産出地の性格にとどまるものではない。遺跡内での廃棄パターンにも顕著な対照性として認められる。以上のように、技術の質的構造に注目すれば、細石刃核の型式学的な差異以上に、この両者は石器群の表出形態と、石材消費をも律する石材消費戦略の選択において、同質的な要素を多く共有しているといえそうである。

6　L1S層上部～FB層に含まれる細石刃石器群

この段階は、石器製作が細石刃技術（構成1）と両面体製作技術（構成4）にほぼ分極したあらわれかたをもつ。ただしこの双方に通底するのは、バイフェイス・リダクションである。まさしく石器群は両面調整技術によって技術構造が一変するようなありかたを示している。ここでは、目的器種と利用石材との組み合わさりを考慮し、製作技術内での分化を意識することで、廃棄のありかたにいくつかの変異を設定できる。たとえば、勝坂遺跡第45次調査では、安山岩には、尖頭器調整剥片、石核、大型剥片、剥片、微細剥片が分類され、遺跡内での製作・成形の作業があっことがわかっている。母岩別資料にはやや幅厚のある横長剥片もふくまれることから、尖頭器素材の供出といった工程もおこなわれた可能性がある。これに対して、凝灰岩には細石刃核打面調整削片のほか、有舌尖頭器、スクレーパー、尖頭器が各1点ずつあり、細石刃核製作の工程と尖頭器（有舌尖頭器）製作が同一母岩において連動している状況がみてとれる。同じように、母岩13でも、細石刃核、尖頭器調整剥片がふくまれており、これらも構成1＋構成4の様態が図られている事実が示唆される。

また、上野遺跡第1地点第Ⅱ文化層では、64個体の石器資料が識別されている。それぞれ、黒曜石、凝灰岩、玄武岩、チャート、粘板岩、砂岩、片岩、ホルンフェルスである。このうち、100点以上の石器類をもつ個体は、いずれも砂岩である。この一群は、他のユニットとは分布や石材構成を異にしている。そのうちの2個体は剥片による組成であり、石核や二次加工を有する石器を一切もっていない。また、砂岩の個体には細石刃石核、細石刃・細石刃様剥片がふくまれる。ブロック内での構成1のありかたがよくわかる資料群である。

これとは対照的に、黒曜石、凝灰岩、玄武岩、チャートに分類される個体資料は僅少である（8.2%）。尖頭器、細石刃石核、掻器・削器、ナイフ形石器、打製石斧、磨製石器など多様な器種をふくんではいるが、いずれも単体資料である。

長堀北遺跡第Ⅱ文化層では、尖頭器、細石刃石核、同原形、細石刃、削片、打製石斧、剥片、砕片という比較的明瞭な組成を示している。細石刃石核は「削片系」の細石刃石核。尖頭器と細石刃石核は第2ブロック、第3ブロックで共伴しており、細石刃に至っては遺存するすべてのブロックで尖頭器との共伴が認められる。

884点の出土石器は、78個体に識別され、黒曜石、チャート、凝灰岩、安山岩、砂岩、粘板岩という石材組成

である。個体別では、構成1は安山岩30に限られているが、細石刃および細石刃石核削片などもふくめてみた場合、安山岩8個体、黒曜石1個体、凝灰岩2個体に分類され、構成1がおおむね安山岩を主体に利用されていたことが理解できる。

いっぽう、尖頭器（構成4）をみてみると、遺跡内で製作の痕跡をトレースしうるのが明らかな個体は凝灰岩19のみである。それ以外はすべて単体での搬入品である。上述したように、この両者はブロック別の分布においても偏在性を示しておらず、共伴とみても間違いはないだろう。これによれば、この2つの技術構成はほぼ同時期の所産として理解してもよい。

両面体の製作という構造性の内部には、石材と器種による対応によった製作工程が相互に確立していることが、この時期の特徴であろう。

7　箱根山麓西部における細石刃石器群の様相

近年、良好な細石刃石器群を相次いで報告している箱根山西麓地域の石器群についても、触れておこう。この地域の細石刃石器群は、基本的に愛鷹ローム休場層（YL）中から出土する。休場層は、間層をはさんで上下2枚のスコリア層（YL-S1、YL-S2）が確認され、これらを境として上層（YLU）、中層（YLM）、下層（YLL）に分層される。細石刃石器群は、YL-S1より上位のYLU上部から出土しており、YL-S1は相模野台地のY-137に、YLUは相模野台地BBO層～L1S層にそれぞれ比定できる。

上原遺跡第Ⅰ文化層（伊藤2001）では、18ブロックから、細石刃、細石刃核、ナイフ形石器、掻器、削器、ピエス・エスキーユ、使用痕のある剥片、加工痕のある剥片、石核、剥片・砕片、赤鉄鉱からなる2497点が出土している。このうち、単体資料の安山岩製石核以外は、すべて黒曜石であり、神津島産が大部分を占める。個体別資料分類を参照する限り、構成1と構成2は、ほぼ同一の技術構造として融合される。構成1は、原石ないしはブランクの状態で遺跡内に持ち込まれ、細石刃製作作業が開始される。角礫・分割礫を素材とし、細石刃核への整形段階の調整剥片が、刃器類の素材へと転化される。構成2は、3種類の剥離工程がみられる。すなわち、やや厚みのある調整剥片の腹面に作業面を設定し、背面から打面を側縁に沿って移動させて、短寸の剥片を剥離する、いわゆる板状石核。これとは別に、石核の反転を繰り返して、打面・作業面を交互に置換して剥片剥離を行なうもの。最後に、いわゆる礫器状の石核である。こうした資料が、本来、構成2か構成3かどうかは俄かに判断しがたい。黒曜石資料はこれ以外皆無であることを考えると、構成1＋構成2の構造化された石器群である。

大奴田場A遺跡は、細石刃、細石刃核、掻器、削器、錐、磨石、使用痕のある剥片、加工痕のある剥片、石核、剥片・砕片類という組成である（伊藤1989a）。

一見して、構成1を主体とする石器群のようにも映るが、ガラス質黒色安山岩製の縦長剥片、硬質砂岩や安山岩の自然面を有する大型剥片が刃器素材として利用されており、構成1を主体としつつも、構成2・構成3の断片的な痕跡がみられる。

このほか、山中城跡三ノ丸第一地点第Ⅰ文化層（伊藤1995）、中村C遺跡（池谷ほか1992）、柳沢B遺跡（伊藤1989b）、柳沢C遺跡（伊藤1989c）などは、いずれも構成1に属する。刃器類をともなうが、構成1における調整剥片を素材とした転用形態が目立つ。

限られた遺跡から全般的な傾向を窺うことはむずかしいが、おおむね構成1＋構成2、構成1を主体とする石器群が顕著であることと、構成3の存在を明確に規定できる資料が今のところ見当たらないといったことが確認される。ただし、大奴田場A遺跡のように、この地域においても構成3が石器群を構成する間接的な資料もえられており、注意が必要である。

8　廃棄パターンと遺跡間の変異

石器群を構成する技術的な系列の組み合わせは、遺跡・石器群ごとに変異がある。こうした技術系列の遺存の偏りについて、整理してみたい。

類型A：構成１＋構成２＋構成３をすべて残す、全体的集合の石器群。報恩寺遺跡 BBO 層出土石器群、上草柳第Ⅰ地点遺跡第Ⅰ文化層Ｂブロック、相模野№149 遺跡、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅳ文化層、下鶴間長堀遺跡第Ⅰ文化層、三ノ宮・下谷戸遺跡第Ⅲ文化層、代官山遺跡第Ⅲ文化層、吉岡遺跡群Ｂ区 L1H 上部出土石器群、大奴田場Ａ遺跡第Ⅱ文化層。

類型B：構成１＋構成２による石器群。上草柳第１地点遺跡第Ⅰ文化層Ａブロック、栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層第 12 号ブロック、深見諏訪山遺跡第Ⅱ文化層、上草柳第３地点中央遺跡、月見野遺跡群上野遺跡第Ⅲ文化層Ⅱ群、中村遺跡第Ⅱ文化層、上和田城山遺跡第Ⅱ文化層、上原遺跡第Ⅰ文化層。

類型C：構成１＋構成３による石器群。宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第Ⅱ文化層、栗原中丸遺跡第Ⅱ文化層第 1～11 号ブロック（鈴木 1984）、月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅲ文化層Ⅲ群。

類型D：構成１が主体となる石器群。代官山遺跡第Ⅱ文化層、かしわ台駅前遺跡第Ⅰ文化層・第Ⅱ文化層、月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅲ文化層Ⅰ群、山中城跡三ノ丸第一地点第Ⅰ文化層、中村Ｃ遺跡、柳沢Ｂ遺跡、柳沢Ｃ遺跡。

類型E：構成３が主体となる石器群。谷津山神遺跡、日向南新田遺跡第Ⅰ文化層、月見野遺跡群上野遺跡第Ⅲ文化層３群、南鍛冶山遺跡 0702 遺物集中、上粕屋・上尾崎遺跡、宮ヶ瀬遺跡群中原遺跡第Ⅱ文化層、同上原遺跡、同大野原遺跡。

類型Ｆ：構成１＋構成４という石器群。いわゆる削片系細石刃核と大形尖頭器をもつ石器群はこの類型にふくまれる。構成２は、以上の技術構成と包摂される関係にある。この類型の詳細な検討は後日に期したい。

非常に大まかな括りかたではあるが、こうした類型が示す廃棄パターンは、礫群や配石、炉跡などの遺構の有無を考慮し、さらに廃棄単位ごとの母岩・個体の運用状態を平面的におさえることによって、その意味する内容は、より複雑になると予想される。

これまで、相模野台地を中心とした地域の細石刃石器群（L1H 層上部～L1S 層下部出土に限定した資料）を比較検討することにより、層位的な上下関係を超えて共通する石器群構造を指摘することができた。基本的な技術構成として、構成１（細石刃製作技術）・構成２（一般剥片剥離技術）・構成３（礫器製作技術）の３系列にまたがる器種―石器製作技術の様態が抽出される。これは、ブロック間を単位とした分布や、遺跡間を単位とする分布も含めて、集合的に発現する場合もあれば、技術的に部分的あるいは離散的に表現されることもあることを暗示している。そのことは、ここに掲げた６類型の廃棄パターンに端的に示される。遺跡内、遺跡間という異なる階層の空間分布のなかで、技術構成組み合わせにおいてさまざまな変異形をもちながら共存するのが、細石刃石器群の特徴である。これは細石刃石器群に、二極構造（佐藤 1992）あるいは二項的モード（田村 1989a）と呼ばれるような剥片石器群の技術構造が通底していることを暗示するものと考えられる。相模野台地の細石刃石器群をみると、報恩寺遺跡や代官山遺跡に代表される集合的遺跡（拠点的遺跡）では、石器群を構成するすべての構成が立ち現われ、それ以外の大部分の遺跡、つまり類型Ｂ～類型Ｅに属する遺跡では、技術構成のいずれかが部分的に偏在するという実態からも推理される。

しかしながら、細石刃石器群の二項性とは、後期旧石器時代成立期にみられるような台形様石器とナイフ形石器（基部加工尖頭形石器）の二者によるものとは表現型が異なっている。細石刃製作技術（構成１）は、石刃・縦長剥片剥離技術との技術的な相似関係におかれると考えられる。それ以上に、細石刃技術と一般剥片剥離技術とが、部分的とはいえ、技術的に融合する状態を示しており、構成１と構成２は同一個体におけるコアリダクション戦略を共有する技術基盤をもっている。このことは、L1S 層上部以降に出現する削片系細石刃石器群における両面体石器の多機能性とも通じるところがあり、その技術的適応を辿るうえで興味深い。ただし、一般剥片剥離技術として、求心状の円盤形石核や板状石核から短寸の矩形剥片も作出されており、石器群全般の技術基盤は、石刃技術による一群（構成１）と幅広・矩形剥片の一群（構成２）と捉える余地も残されている。これによれば、技術構造的には変容した姿形であるとはいえるが、細石刃石器群にも二項性は継続的に存在していたと解釈することもできるといえよう。

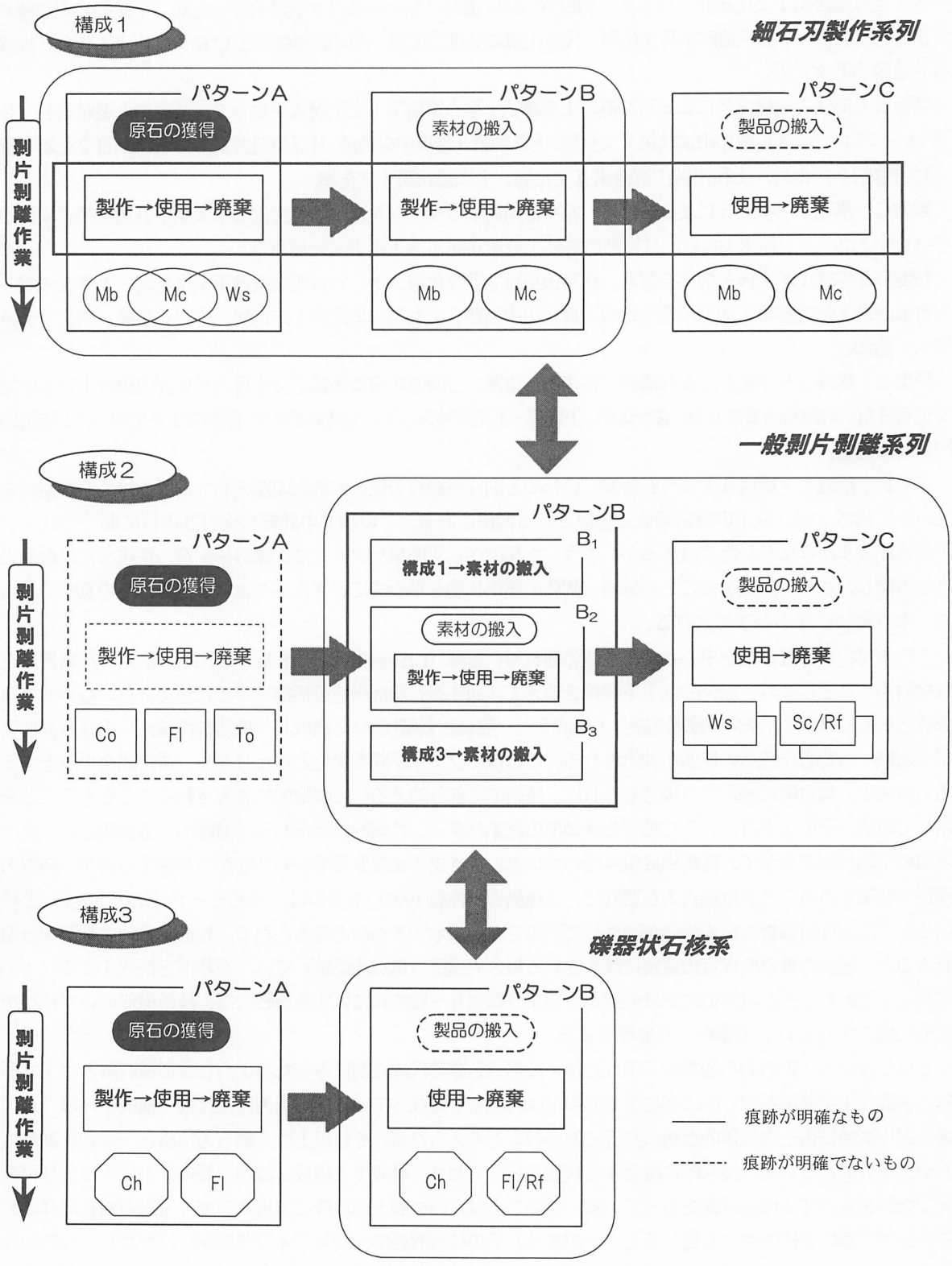


図３　技術構成の相互関係

9　細石刃石器群、技術と変容の背景

一般的な評価として、細石刃石器群の時期になると、遺跡の規模が一般的に縮小されるという了解がある。これは、相模野台地の細石刃石器群はその多くが作業内容をほぼ同質とする遺跡を残しながら、かなりの広域（信州原産地や神津島原産地）を往還する移動型の戦略を採用していたという仮説にもとづいている。この考えはおおむね首肯される。これまで論じてきたように、具体的な実態として、５類型にわたる石器群が分散的な居住のありかたを示すことが、これを傍証しよう。

L1H 層細石刃石器群にみられるように、至近の黒曜石（柏峠産）を一括して持ちこみ、遺跡内での消費が顕著な遺跡がある。また、近傍石材による石核や剥片がブロック外搬入され、両者は対照的な石材消費のありかたを表わしている。これらの遺跡は、製作址的性格を有しており、細石刃製作の全体的集合が観察されることや、遠隔地系黒曜石を選択していないことなどを総合して考えると、この段階の遺跡型から判断する限り、地域に密着した核集落をもちながらも、日常的には、比較的少人数の集団（パーティー）が分散的に活動する移動・居住形態を採用していた可能性が高い。こうした小規模・分散居住のありかたは、後述するような石材獲得戦略を包摂する生業戦略と密接な関わりが想定される。代官山遺跡・吉岡遺跡群Ｂ区に代表される大規模遺跡は、各作業集団が小規模に分散･展開して活動を行なう以前の遺跡型を表わしているものと推測される(分散後の遺跡として、横須賀市打木原遺跡、町田市根岸山遺跡・小山高町遺跡、長泉町野台遺跡などが該当しよう)。

BB0 層以降になると、神津島系黒曜石の利用を画期として、分散居住は活発化する。集団の生活領域とほぼ重複すると考えられる黒曜石原産地の拡大利用は、相模野台地を基点として、信州から神津島に至る範囲に用材圏が拡大した。産地組成の面からみると、基本的な組成として神津島系黒曜石が多用され、信州系、伊豆・箱根系黒曜石が相互補完的・相互依存的に利用されつつ、凝灰岩などの在地石材の多用が明らかである。さらに、一般剥片剥離技術には、継続的に在地系の非黒曜石石材を選択するように、多様な来歴をもつ石材採取・利用の形態に依存するようだ。

細石刃製作（構成１）では、一般的にすべての遺跡において斉一性を有しながら、各遺跡内での段階的な製作過程の跡づけが可能なようにも映る。しかし、母岩・個体別資料に還元して、石器群を再度、捉えなおしてみると、L1H 上部の石器群とは明らかに異質な構造を有している。当段階には、遺跡内に原石段階から細石刃製作を行なう段階的な石材消費活動が著明でなく、石材消費過程の復元は困難である。

遺跡内での細石刃製作は、通常、細石刃石核素材や整形後の細石刃核の持ち込みから開始されることが一般的であり、搬出の機会に応じて、製品が携行されることが多くなることが特徴である。BB0 層から出土する細石刃石器群のほとんどは、こうした不完全な組成を示している。L1H 上部段階では、ほぼ等質的に細石刃製作が遺跡内で行なわれ、きわめて豊富な細石刃を日常的に製作する遺跡がある。対照的に、BB0 層から L1S 層下部に出土層準をもつ遺跡では、原石の獲得、素材の製作、細石刃核や細石刃の搬出にいたる各工程に応じて、前段階とは廃棄パターンが異なった発現をする。これは構成１に限ったことではない。構成２や構成３においても同質であるといえる。つまり、これらの技術系列も、遺跡内での原石の段階的消費が完全にトレースされる資料は含まれず、石核や素材剥片はいずれも他の場所から持ち込まれている。

石器石材も、近在地の流域河川での採取が容易な素材を選択している割には、遺跡内での消費過程を遡及できる資料は認められない。こうしたことから、後期旧石器時代の石材獲得戦略のうち、「原産地遺跡:消費地遺跡」として知られる石材需給の二分的な図式では、細石刃石器群の石材消費戦略は説明することができなくなる。黒曜石原産地や原産地型遺跡の利用形態が他時期とは異なっていた可能性が高く、直接採取と交換という獲得戦略が織りなす石材採取のネットワーク化に変化が生じたものと予想される。

とりわけ、著名な矢出川遺跡群では、全体として大量の細石刃石器群が出土・表採されている。なかでも、比較的多量の神津島産黒曜石が信州系黒曜石とともに細石刃石器群に利用されているという（堤隆氏・諏訪間順氏の御教示)。おそらく、八ヶ岳を取り囲んだ関東・東海地域を生活領域とする集団の頻繁な周回・折衝によって、神津島産黒曜石を獲得していたことが窺われる。ただし、堤の所論（2002）にも正しく指摘されているように、

神津島産黒曜石の利用については、獲得方式の違いによって複数の解釈・説明が可能になるため、その利用の背景を一義的な説明でもって規定できるとは考えられない。移動戦略における石材消費活動の様態については、いまだ不明な点ばかりが多く、断定的な議論ではない。現状での見通しとして理解されたい。

１０　おわりに

相模野細石刃石器群の技術構造は、削片系細石刃石器群をのぞいて考えた場合、基本的な構成として３種の技術系列が場面を変えつつ、６つの組み合わせをもって遺存していたのが、実情のようだ。昨今、旧石器時代の石器群の存続年代が盛んに論議されている（砂田 1999、諏訪間 2002）。^{14}Ｃ年代（ＡＭＳ法）を暦年較正プログラムにかけて算出した結果、細石刃石器群の出現期に位置づけられる吉岡遺跡群Ｂ区（19,850cal. B. P.）から、縄文時代初頭、土器出現期に目される宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡第Ⅰ文化層（吉田 1998：15,425cal. B. P.）に至るまでの確からしい値は、較正暦年代において約 4,400 年程度の懸隔がある。かなりの存続期間といえるだろう。むろん、この数値が示す範囲には、本論で取りあげなかった削片系細石刃石器群も含まれており、一概にその年代値だけを誇張するわけにいかない。それでも、上述の技術構成が構造上、安定的に作用していたことが、比較的長期間にわたって細石刃石器群が持続させた背景にあったと考えることは的外れたものではないだろう。特徴的な細石刃核の型式性や黒曜石原産地利用の変化など、視覚的にはいくつかの変革が生じていたことは容易に想定される。しかし、削片系細石刃石器群を除けば、そうした個別の表現型以上の、技術的な構造的画期をここに見出すことはできない。より詳細な検討によって、反証が提示されることは十分予想されるが、ここで提示した考えかたも、あながち穿った見方ではない。

とはいえ、相模野台地というごく限定的な事象がいったいどの程度の空間的範囲において敷衍できるのかという課題には、触れることすらできなかった。細石刃石器群における社会的境界（social boundaries）や文化的アイデンティティーはいったいどのように設定されるのだろうか。このためには、技術の適応論的観点だけではなく、主体の働きかけ（agency）としての技術・身体論的なアプローチも必要になるだろう。本論は、そうした細石刃石器群の多角的な検討に向けての、ごく一歩にすぎない。

引用参考文献

安蒜政雄　1984　「日本の細石器文化」『駿台史学』第 60 号、133-159 頁。

安蒜政雄　1997　「旧石器時代の集団―南関東における移動生業集団と石器製作者集団」『駿台史学』第 100 号、147-171 頁。

池谷信之ほか　1992　『三島スプリングスＣ。Ｃ。ゴルフ場内発掘調査報告書』、三島市教育委員会。

伊藤恒彦　1987　「先土器時代の調査」『中村遺跡』、中村遺跡発掘調査団。

伊藤恒彦　1989a　「大奴田場Ａ遺跡」『函南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』、函南町教育委員会。

伊藤恒彦　1989b　「柳沢Ｂ遺跡」『函南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』、函南町教育委員会。

伊藤恒彦　1989c　「柳沢Ｃ遺跡」『函南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』、函南町教育委員会。

伊藤恒彦　1995　「第Ⅰ文化層」『山中城三ノ丸第一地点』、三島市教育委員会。

伊藤恒彦　2001　「第Ⅰ文化層」『上原遺跡』、函南町教育委員会。

佐藤宏之　1988　「台形様石器研究序論」『考古学研究』第 73 巻３号、1-37 頁。

宍戸信吾ほか　1999　『上粕屋・上尾崎遺跡（No.14）』、財団法人かながわ考古学財団。

白石浩之　2001　『石槍の研究―旧石器時代から縄文時代初頭にかけて―』、ミュゼ。

鈴木次郎　1984　「第Ⅱ文化層」『栗原中丸遺跡』、神奈川県立埋蔵文化財センター。

鈴木次郎　1996　「第Ⅱ文化層」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ　サザランケ（No.12）遺跡』、財団法人かながわ考古学財団。

鈴木次郎　1997a　「第Ⅱ文化層」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ　中原（No.13C）遺跡』、財団法人かながわ考古学財団。

鈴木次郎　1997b　「第Ⅱ文化層」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ　上原（No.13）遺跡』、財団法人かながわ考古学財団。

鈴木次郎・矢島国雄　1978「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の細石刃石器群」『神奈川考古』第６号、1-53 頁。

砂田佳弘　1986a「第Ⅱ文化層」『代官山遺跡』、神奈川県立埋蔵文化財センター。
砂田佳弘　1986b「第Ⅲ文化層」『代官山遺跡』、神奈川県立埋蔵文化財センター。
砂田佳弘　1993「相模野細石器の出現―器種変遷と石材流通―」『國學院大學考古学資料館紀要』第10輯、1-41頁。
砂田佳弘　1994「相模野細石器の変遷」『神奈川考古』第30号、1-20頁。
砂田佳弘　1999「相模野細石器の暦年補正年代」『吉岡遺跡群Ⅸ　自然科学分析・考察編』、25-30頁、財団法人かながわ考古学財団。
砂田佳弘ほか　1998『吉岡遺跡群Ⅴ　旧石器時代３・縄文時代草創期２』、財団法人かながわ考古学財団。
諏訪間順　2002「相模野旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』第72巻第６号、636-643頁。
曽根博明　1979　『上和田城山』、大和市教育委員会。
曽根博明　1983　『深見諏訪山遺跡　先土器時代～縄文時代草創期の調査』、大和市教育委員会。
滝澤　亮ほか　1991　『かしわ台駅前遺跡発掘調査報告書』、相武考古学研究所。
田村　隆　1989a「二項的モードの推移と巡回―東北日本におけるナイフ形石器群成立期の様相―」『先史考古学研究』第２集、1-52頁。
田村　隆　1989b「第６章　収束」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書―佐倉市御塚山・大林・西野・芋窪遺跡―』、財団法人千葉県文化財センター。
堤　隆　1984a　「第Ⅰ文化層」『一般国道（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』、大和市教育委員会。
堤　隆　1984b　「第Ⅰ文化層」『一般国道（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』、大和市教育委員会。
堤　隆　1984c　「第Ⅰ文化層（a）」「第Ⅰ文化層（b）」『一般国道（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』、大和市教育委員会。
堤　隆　1986　「第Ⅲ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第１地点』、大和市教育委員会。
堤　隆　1987　「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』第13号、1-43頁。
堤　隆　1991　「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』第17号、1-32頁。
堤　隆　1997a　「第Ⅳ文化層」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡　相模野台地における後期旧石器時代遺跡の調査』、柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査団。
堤　隆　1997b　「更新世末期における礫器使用行動の意味―細石刃文化における礫器顕在化についての解釈―」『長野県考古学会誌』第82巻、29-41頁。
堤　隆　2002　「信州黒曜石原産地をめぐる資源開発と資源需給―後期石器時代を中心として―」『國學院大學考古学資料館紀要』第18輯、1-21頁。
服部実喜　1987　「第Ⅰ文化層」『日向南新田遺跡』、神奈川県立埋蔵文化財センター。
三瓶裕司　1998　「第Ⅲ文化層」『三ノ宮・下谷戸遺跡（No.14）Ⅰ』、財団法人かながわ考古学財団。
御堂島正　2001　「相模野旧石器編年の年代観（^{14}Ｃ年代測定法と暦年代）」『相模野旧石器編年の到達点』、101-108頁。
望月　芳　1996　『南鍛冶山遺跡　第３巻　先土器時代』、藤沢市教育委員会。
望月明彦・堤　隆　1997　「相模野台地の細石刃石器群の黒曜石利用に関する研究」『大和市史研究』第23号、1-36頁。
吉田政行　1998　「縄文時代初頭　第Ⅰ文化層」『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅤ　北原（No.10・11北）遺跡』、財団法人かながわ考古学財団。
Perles,C。　1992　In search of lithic strategies: A cognitive approach to prehistoric chipped stone assemblages。 In *Representaions in archaeology*。 Indiana University Press。

両面調整石器の問題

― 予備的な一考察 ―

長沼　正樹

1：はじめに

日本考古学の後期旧石器研究には、「狩猟具発展史観」があるかに見える。「狩猟具発展史観」とは、ナイフ形石器→尖頭器→細石刃→有茎尖頭器→石鏃との石器の変化を、手持ちの石槍→より向上した手持ちの石槍→植刃槍→投槍→弓矢との、狩猟具の進歩・発展として評価する筋書である。両面調整石器の評価も、おもに尖頭器としてこの文脈の中にあった。未熟から高度へとのシナリオは、石器出現以後の初期人類から現世人類までの生物学的進化を見すえた、ルロワ＝グーランのモデル（Leroi - Gourhan 1964[荒木訳]1973）にも似て、親しみやすい。だが世界的には、両面調整の石器は古くからある。前期旧石器のハンドアックスはもちろん、中期旧石器のムスチエ石器群の一部にも薄手の両面調整石器がある。近年ではシベリアの後期旧石器初頭のデルビーナ５遺跡で、^{14}C測定値で30ka前後を測る、薄く精巧な両面調整の木葉形尖頭器が報告された（Акимова 2000）。日本列島内でも武蔵野台地Ⅹ～Ⅸ層の斧形石器など、後期旧石器の初頭から両面調整の石器は確実にある。

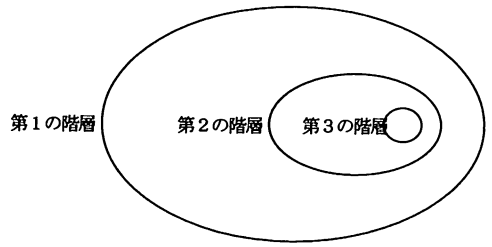
後期旧石器の人類の脳容積や認知能力・生物的な身体機能は、すでに今日の我々と同じ現世人類とされる。ゆえに日本の後期旧石器の「狩猟具発展史観」は、人類の生物学的進化を扱うルロワ＝グーランの射程とは異なる。また台形様石器やナイフ形石器が弓矢のヤジリである可能性も、完全に反駁されているわけではない。日本列島内という狭い空間範囲の中で、はじめは稚拙な狩猟具がやがて高度化するとの歴史像は、一面的にすぎはしないか。ここには、文化史的な手法で把握した現象面の変化（＝石器文化）を、生産力の増加という唯物史観の枠組みで解釈しようとする、論理の飛躍があるのではないか。石器群の変遷という現象は、「狩猟具の威力の向上＝労働生産力の強化」との解釈の他にも、遊動生活の中での石材の獲得・消費の戦略の変遷としても、読み直すべきであると考える。さらに気温や植生といった古環境の変遷とくらべることで、生態学的な行動復元への見通しが得られよう。このような問題意識に立つ場合、両面調整石器は重要な手がかりの一つとなる可能性をもつ。

一方で「縄文草創期」や「縄文文化起源論」の枠組みは、「日本史」や「縄文時代」を実体視してそこから遡る発想のため、現在日本国とされる空間範囲から外れた遺跡をあつかえない。また高精度編年化した古環境情報との対比にも齟齬をきたす（小野1998など）。筆者は先に両面調整石器群を提案したが、これは一国史的な前提や旧来的な時代区分・年代観を排除して、大陸側資料や古環境情報との比較（註１）を中立的に行う枠組みの一案として、意図したものであった（長沼 2002）。ゆえに大陸や古環境との比較など求めず、小地域内に限定した人工遺物の研究に閉じた議論で満足する立場、あるいは山内清男氏の短期編年の年代観を受けつぐ立場からは、筆者の意図は見えにくいと思われる。また他にも紙幅の都合上から省いた論点や、脱稿後に得た認識もある。

小稿は前掲拙稿で論じ残した部分を含む予備的な一考察であるが、いまなお不十分なものである。ここでは細石刃石器群にとどまらず、また特定の小地域や時期の細部に固執するのではなく、より一般的に両面調整石器の理解を深めるための準備を試みたい。

2：階層的モデルについて

両面調整石器の包括的な説明には、３つの異なる階層（註２）のモデルが必要と考えている。第１の階層は全域をおおう一般モデルで、世界中のすべての地域・時代の両面調整石器に共通する一般的特徴に関するものである。ある出来事や事態の歴史的固有性に価値をおく立場から、このような一般論の展開に疑問を抱く向きもあろう。しかし各地・各時期の具体的な個別事例を特殊なものとして互いに無関係に理解するのではなく、全体の説



第１図　階層的モデルの包摂関係

明を体系化したいと考えるために、この階層の議論の必要性と有効性を認めたい。

これに対して第２の階層以下は特殊モデルである。第２の階層は、更新世終末期の日本列島から極東大陸部という、広範囲ではあるが一定の限定を持つ歴史的に固有な時空間をあつかう。第３の階層はより局所的で、当時の集団の生活圏内でのミクロな環境条件や、各集団に固有な文化的・社会的コンテクストなどを反映して、短い時間幅で移り変わる個別的な時空間をあつかう。この第３の階層の内にのみ実践的な研究を限定するべきとの考えもありえよう。しかし枠組みの議論を棚上げにしたまま、個別遺跡や個別資料の細かな分析を重ねても、おおもとの枠組みから外へ出ることはむずかしい（註３）。筆者の現状認識では、枠組みの議論こそがむしろ急務と考えている。

各階層間の包摂関係を第１図に示す。第２の階層は第一の階層の特殊な一部で、第３の階層は第２の階層の特殊な一部である。また第２、第３と抽象度を下げるにつれ、モデルは各地・各時期の個別性に応じて、具体性を増すと同時に多数（無数）になろう。しかし筆者個人の力では全ての網羅はかなわない。そこで第３の階層は問題点の指摘にとどめ、小稿では主に第１と第２の階層のモデルについて、中心的に考えていきたい。

（１）第１の階層（一般モデル）―「両面調整石器」とは何か

第１の階層は最も抽象度が高い。すべての地域・時代の両面調整石器に共通する内容の提示が理想だが、最大公約数的な内容となろう。先述のように両面調整の技術は、石刃技術や細石刃技術などとともに古くからあったことを認めるならば、両面調整石器それ自体は普遍的な存在で、全域的・一般論的には、特定の発展段階や歴史的時空間を区切る指標にはなりにくい。また両面調整石器というくくり方は、機能や用途、製作者の意図の違いなどを暗示する石器分類名称とは異なる。例えば両面調整の掻器や削器があってもよいし、尖頭器や石斧（斧形石器）でも両面調整でないものは、両面調整石器とは呼べない。

ケリー（Kelly1988）は両面調整石器を「一般的に、両面調整石器とは、剥片または核を素材として、剥離そしてしばしば押圧剥離によって、二つの平行だが対向する刃部から両方の面を縮小され、特定の形に整形されたもの」―In general, a biface is a flake or core blank that has been reduced on both faces from two parallel but opposing axes through percussion, and, frequently, pressure flaking, and is shaped into a specific form―(Kelly1988, p.718, l.5-17)と定義した。これは現象論的把握と言える。これを定義１とする。さらにケリーは①石核、②頑丈で再生可能な刃部をもつ利器、③結果としての両面調整、という３つの側面をもつとも指摘した。これらは解釈論的説明と言えよう。以下ではこのケリーの議論を土台に、いくつかの検討を加えてみたい。

①石核としての両面調整石器

石核としての側面は、接合資料で直接に証明されている。接合しない場合でも、背面を覆う先行剥離面の構成、側面観、打面周辺部の特徴や剥離角などを手がかりに、両面調整石器の整形時に生じた剥片を弁別できる。この点ではケリーの理解に大きな問題はない。むしろ問題は、両面調整石器がはじめから核なのか、それとも剥片素材に二次加工を加えたものなのかを識別しにくいことである。この問題は「両面調整尖頭器は製作工程の復元が困難」（栗島 1986）などとして知られていたが、石核としての側面を考慮した場合に顕在化する。

剥片石器の原理論では、剥離によって核と剥片が生じるとされる（竹岡 1979）。これに即して最終剥離面がネガならば核・ポジならば剥片との定義を徹底すれば、全ての両面調整石器を核であると言える。これでは二次加工のある各種の「器種」（トゥール）も全て核になってしまうはずだが、ふつうはそうは考えない。なぜならば、石器の背面を覆う剥離面を、主剥離面の生成に先立つ先行剥離面と、後に二次加工によって生じた剥離面とに、はっきりと分けられるとの前提を挿入することで、「器種」としての分節が成立しているためである。この分節によって、二次加工の剥離面は最終剥離面とはみなされない。したがって各種の「器種」（トゥール）が核とされる

ことは、通常ありえない。

しかし両面調整石器を覆う剥離面は、主剥離面の生成に先立つ先行剥離面／後に二次加工で生じた剥離面の区別がむずかしい。尖頭器など平面形が決められている場合や、石斧など刃部が明らかな場合には、縁辺部の小剥離面や刃部整形に限れば二次加工を区別できるので、問題には感じにくい。しかし、より特殊化していない形の両面調整石器では、石核としての剥片剥離かトゥールとしての二次加工かの区分は、原理的に不可能である（註4）。そもそも核や剥片といった概念は、実体ではなく関係論的なものである。石刃素材の石器などのように、石核－目的剥片－二次加工－製品の連鎖モデルが成立する場合には、核／剥片の区分が実体であるかに錯覚できる。しかし両面調整石器を少し深く考えてみると、核／剥片の区分が関係論であることがわかる。先のケリーによる定義1でも、素材が核なのか剥片なのかはあいまいにぼかされている。

逆に、両面調整石器を覆うネガティブな剥離面の全てが二次加工であるとの前提を採用すれば、この問題は浮上しない。その典型例が両面調整石器＝石槍説で、不定形な場合には「未製品」や「母形」とみなす。しかしこれでは、石核としての利用可能性は覆い隠されてしまう。石核でもある、という両面調整石器の重要な特徴の一つを見えにくくする効果は、一般論であるべき第1の階層の議論にはふさわしくない。

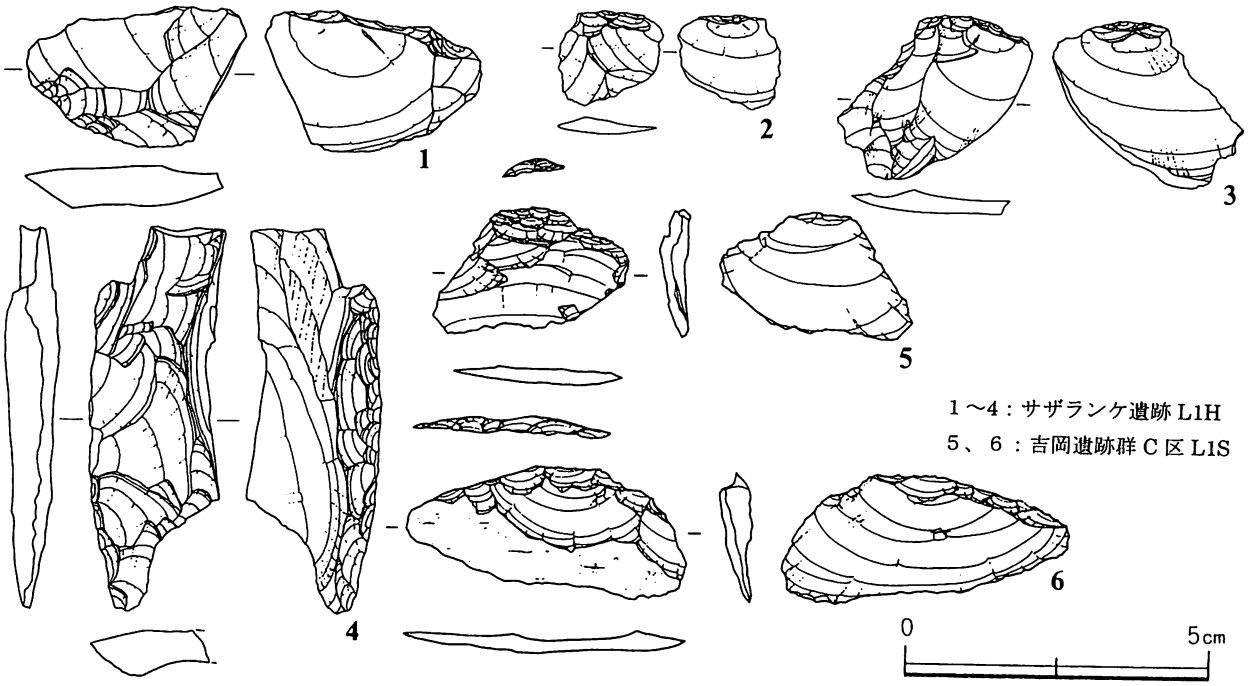
このように石核を兼ねる両面調整石器という理解は、むずかしい問題をはらむ。この問題を「核／剥片問題」として名指ししておく。石核を兼ねるとの理解が誤りであるために難しいのではない。むしろ現行の石器理解の準拠枠が、①核／剥片の分節と②先行剥離面／二次加工剥離面の分節、この2点を前提とするために、分析対象（両面調整石器）の特性と分析概念の相性が悪いのであろう。より分析対象に即した適切な説明のためには、これまでとは異なる準拠枠を新しく創作する必要がある。この新しい準拠枠は現在試行中で、ここでは提示できない。ただしこれまでの議論を踏まえるなら、両面調整石器をはじめから両義的存在として固定する方向が望ましい。チョッパーやチョッピングトゥールも同じ問題を抱えている。これらも本体が核石器であると同時に、剥片を供給する石核でもあるとの両義性をもつ。これら両義的な石器を、そのままそういうものとして扱っていけるような、「核／剥片問題」を無効化するような、新しい枠組みや分類が求められる。

また小形の尖頭器や石鏃など小さい両面調整石器は石核を兼ねるとは考えにくいが、具体的に「何cm以下は石核を兼ねない」などと定義することはむずかしい。それでも仮に、小さな両面調整石器は石核を兼ねないと認めたとする。すると今度は、はじめから小形の素材剥片を選択して小さいこと自体が目的に作られたものと、はじめは大きくあったものがリダクションの結果として小形化したものとの識別が必要になる。この識別も原理的にはむずかしい。

②頑丈で再生可能な刃部をもつ利器としての両面調整石器

ケリーはまた、両面調整石器の刃部は、二次加工を加えていない剥片に比べて鋭さでは劣るが、耐久性と刃部再生可能性に優ると論じた。しかし耐久性の追及は後述の「特定の形状を求めた結果としての両面調整石器」にむしろ近いと思われる。より特徴的なのは刃部再生可能性であろう。刃部再生が行われることを前提とした石器は、変形を前提とした石器（変形指向石器）であり、特定の形を求めた石器とは性格が異なる。またはある程度は特定の形を求めてはいても、その許容範囲が広い。両面調整石器の調整剥片の中には、打面と背面とが交わる角（稜）として、あるいは剥片の末端部の一部に、かつての両面調整石器の縁辺（＝利器としての刃部）の一部を、取り込んでいる剥片がある。第2図にはその一例を示した。こういった剥片のかつての両面調整石器の利器としての刃部の周囲を顕微鏡で観察し、使用痕跡の有無を確認することで、利器的な使用や刃部再生可能性については検証できるはずである。

ところが削器・掻器・彫器など、素材剥片の片面のみに二次加工を加えた石器にも、刃部再生は頻繁に認められる。刃部再生可能性だけならば、両面調整でなくても良いわけである。では両面調整石器の刃部再生ならではの特徴とは何か。これは先述①の石核としての利用に関連しそうである。削器・掻器・彫器といった非両面調整の石器は、それらの刃部再生剥片を他の器種の素材として利用する例が認め難いことと、対照的である。素材供給を兼ねた刃部再生可能性こそが、両面調整石器ならではの特徴と考えて良いかもしれない。



第２図　両面調整石器の縁辺をとり込んだ調整剥片の例（各報告書より）

③結果としての両面調整石器

ケリーはさらに、着柄の都合やスタイル的な要求などから、特定の形を実現するために両面調整による整形がなされるとも述べている。これが結果としての両面調整石器である。石器の断面形を対照的な凸レンズ形に整えるとか、刃部の立体角度を一定範囲の中に規定するなどは、両面調整の技術によって可能になる。また押圧剥離による平坦整形（魚鱗状）では、生じる剥片類は他器種の素材として利用するには薄すぎるため、石核を兼ねているとは考え難い。そこで押圧剥離は「特定の形状を作り出す手段としての両面調整」に相当する場合が多いと考えてよいかもしれない。

この結果としての両面調整石器という考え方は、両面調整石器のすべてが、石核としての作用や刃部再生可能性を追求したとは断言できないことを意味する。しかし、石核や刃部再生を狙ったものと、そうでなく形を純粋に求めたものとの一義的な識別は難しい。そこで整形＝刃部再生＝素材供給の三位一体を前提として、そのうちの特殊な部分には、石核としての利用や刃部再生可能性を求めない例も含み得る、と考えるべきであろう。この「特殊な部分」をどうしても識別したい場合には、先述の「大きさ」や「押圧剥離」などが手がかりの一案となり得る、と考えておきたい。

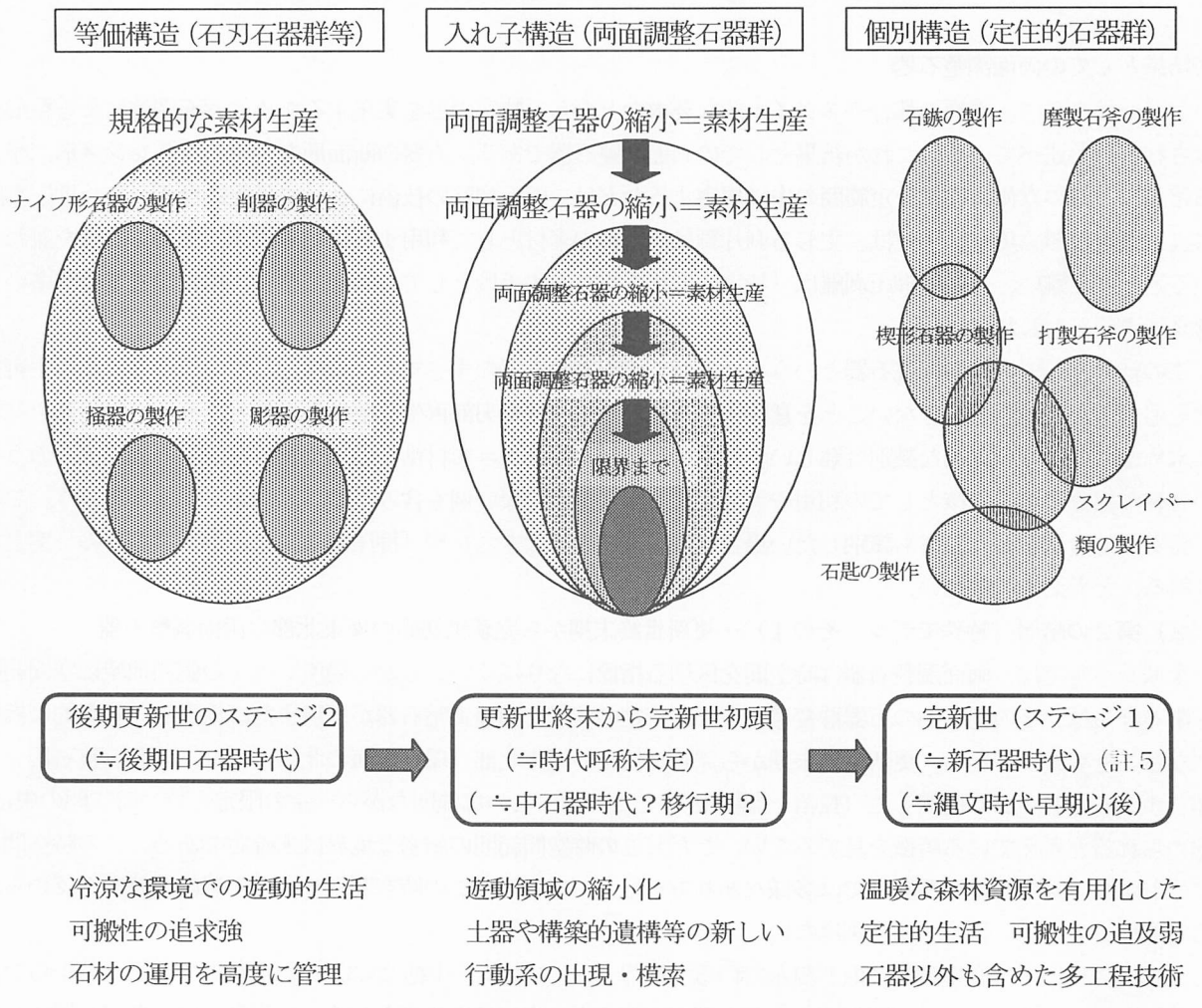
（２）第２の階層（特殊モデル：その１）―更新世終末期から完新世初頭の極東北部の両面調整石器

全域レベルでは、両面調整石器は時空間を区切る指標になりにくい。しかし局所レベルの個別地域に空間範囲を限るならば、その地域内の石器群変遷の中では特定の時点で両面調整石器が出現または消失し、時期的な指標になることも確かである。更新世終末期から完新世初頭の極東北部（環日本海の北半）には、両面調整石器を主体とする石器群が広く展開した（長沼　印刷中）。ここでは、この広範囲ながら一定の限定を持つ時空間の中に、認められると考えている特徴を見てみたい。ただしこの時空間範囲の厳密な境界は未確定である。この時空間の中でもよりミクロな地域や時期では多様なあり方を呈しているし、この時空間以外にも下記の諸特徴が認められる可能性までをも、否定する意図はない。

大陸側については発掘調査に取り組んでいる（長沼・シェフコムード他 2003）が、現時点ではよく分からない部分が大きい。そこでこの空間範囲の中でも調査事例の多い本州島を代表させる。本州島では後期旧石器時代を通じて、コントロールされた石核から規格的な形や大きさの剥片を量産し、これらを素材として各種の二次加工

石器を製作するといった、石器製作の全体を素材生産の時点で統一するしくみが認められる。かつて稲田孝司氏が「統一的構造」と述べた（稲田 1996）あり方である。これを等価構造とよぶ（第３図　左）。この中でパターンを識別しやすい一部は、米ヶ森技法、瀬戸内技法、各種の石刃技法などとして把握されてきた。また識別しにくい部分も、二極構造や二項モードなどの概念で説明が試みられている。その背景には、後期更新世の中でも$\delta^{18}O$ステージ２という冷涼な環境の下で、居住地の移動を繰り返す遊動生活を想定できる。道具の可搬性(重さや大きさ)への縛りが、この等価構造に現れていると説明したい。先述の斧形石器は両面調整による石材の管理・運用ではあるが、ナイフ形石器・台形様石器・掻器・削器などの剥片石器類とは素材供給関係が独立していることが多く、この意味では構造外的性格が強い。排他的な石材選択（ホルンフェルス・粘板岩・蛇紋岩など各地の石材環境に応じて多様だが、剥片石器類とは異なる石材を選択する点で同型）も傍証となろう。

一方でいわゆる「縄文早期～前期」以後では、素材供給の点で石器製作技術の全体を統一するしくみは認めにくい（山田 1985 など）。石鏃なら石鏃、打製石斧なら打製石斧などと、個別の器種ごとに石材が運用される。先述の斧形石器のような構造外的な性格が全体に広がり、各器種は相互に構造外的とさえ言える。かつて稲田孝司氏が「縄文文化の一遺跡におけるそれぞれの石器器種は、非常に分化しており、一定の統一的な石器製作技術の要素で一つの石器群として全体を結びつけることはきわめて困難なように思われる。それは、労働形態の多様化と個別化の進展の結果であるにちがいない」と解釈した（稲田 1969、15 頁、上段 24 行　～下段２行）あり方である。これを個別構造と呼ぶ（第３図　右）。剥片石器製作の石核や接合資料を観察すると、まるで無作為に打



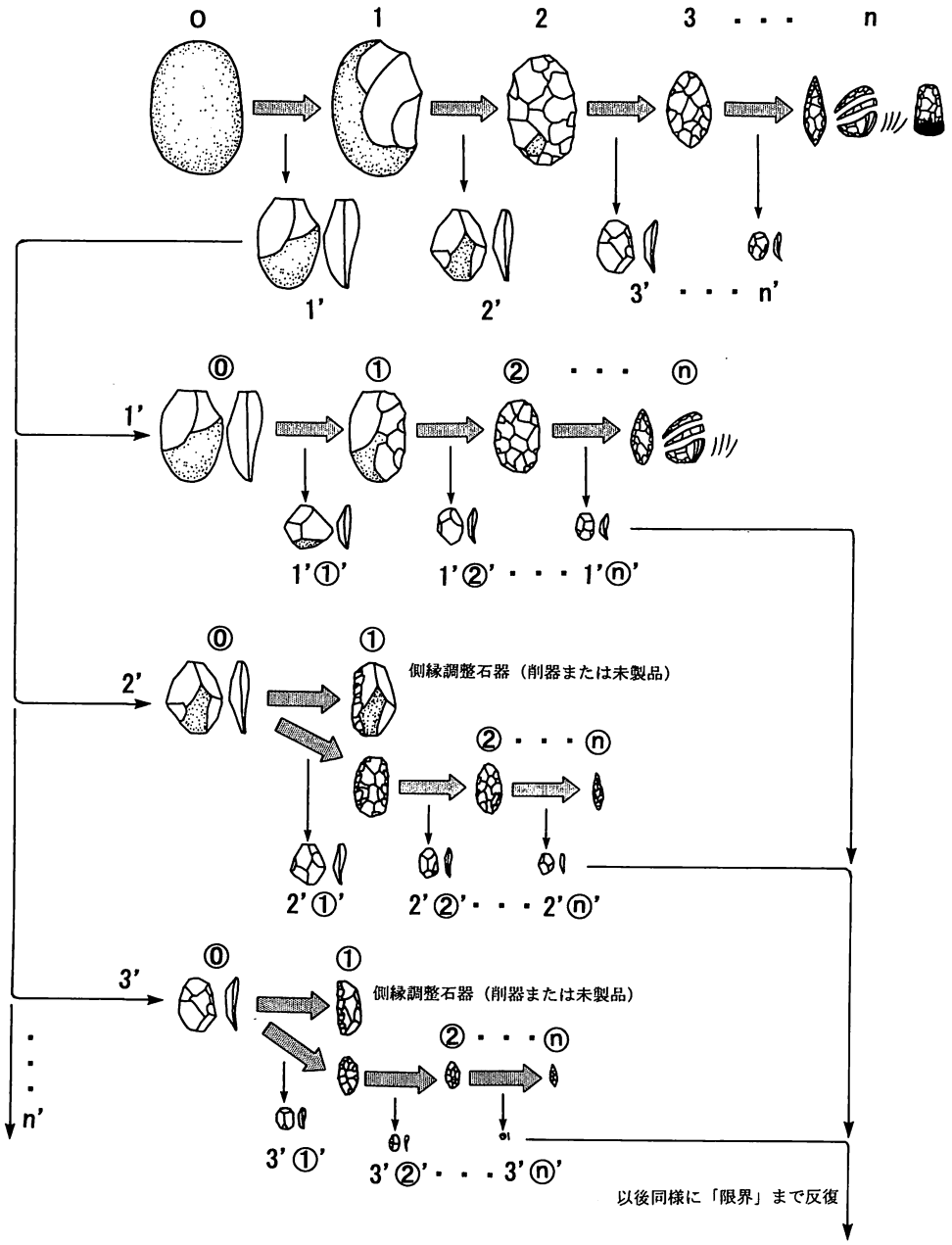
第３図　石器製作のしくみの変遷モデル

ち割っているように見える。石鏃と楔形石器のように製作工程や素材供給が器種間で一部共通する場合もあるが、この場合も規格的な素材量産とはみなしがたい（註６）。また両面調整技術は石斧や石篦、押圧剥離による尖頭器・石匙・石鏃などの製作に多用されるが、後述する両面調整石器群のような、素材供給を含む石器製作技術の全体を覆うあり方ではない（先述のケリーモデルの③）。この背景には、完新世（ステージ１）の温暖・湿潤な環境下で、土地を定着的に利用し森林の多様な植物資源を有用化するために、生活の諸技術が多工程化・多種類化（山田 1996）する事情を想定できる。定着的・定住的な生活では道具や道具素材への可搬性の要求が低下し、多工程化した技術は必要に応じて、より大きな道具、より多量の道具、より多種類の道具、より様々な材質の道具、より複数の部品や材質から構成される道具を、作る。この生活技術系全体の変化が、石器部門の平面へ写像しているあり方として、それぞれの器種を別々に製作する個別構造が出現したと解釈したい。

これらの等価構造から個別構造へと移り変わる時間的な中間に、両面調整石器群が展開する（**第３図　中央**）。本州島の編年では、細石刃出現より古い小形尖頭器石器群から、およそ「縄文草創期」前半の石器群までと予察する（草創期後半がどこまで含まれるかは不確定である）。両面調整石器の製作＝縮小時に生じる調整剥片を、他の器種の素材剥片として利用する。言い換えると両面調整石器が石核として作用する（先述のケリーモデルの①）。すなわち、石材を利器と石核の両機能を兼ねる両面調整石器の形で管理する。またその調整剥片を素材として「製作」された二次的な両面調整石器も、同じく石核として作用し得る。このしくみを、**第４図**に模式的に示した。**第４図**では、両面調整石器の石核としての拡張性は、ヨコの段（左→右へ進むリダクション：一つの両面調整石器の縮小過程）と、タテの段（上→下へ進む繰り下げ：剥片／石核関係の交替過程）との両方向に、ともに開かれており、理論上はこの関係を無限に拡張できる。これを入れ子構造と呼ぶ。言うまでもないが**第４図**は数列の形をかりて表現したモデルであり、過去の事実の復元ではない。全ての遺跡の全ての石器がこの通りに実際にあったなどと主張する意図はない。実際の遺跡の事例では、最初の時点での両面調整石器の大きさに縛られたり、必要な作業の違いによって求められる石器の大きさが変わったりすることで、ある程度よりも小さくなった両面調整石器は石核として作用しなくなり、実施されたリダクションとしては拡張回数が少ないことも多いと思われる。ただし潜在的には無限に拡張できるしくみの中で、実際の限界を適宜決定できる点は強調したい。

これと一見よく似たあり方（石核から剥離された剥片が再び石核として作用する「入れ子」の素材生産）は、等価構造の石器群の中にもある。規格性の高い例として米ヶ森技法や瀬戸内技法、低い例として武蔵野台地のⅨ層段階前後やⅤ上～Ⅳ層下部段階の、剥片素材の石核などがある。しかしこれらは入れ子関係の拡張範囲が狭く（**第４図**の下方向への段の繰り下げ回数が１回限り／または少ない回数となる）、核自体が特定の形に整形されることも少ない（註７）。これに対して両面調整石器群ならではの特徴は、①**第４図**のタテ方向も含めた入れ子関係の大きな拡張可能性を持つ点、②核自体も目的の形に整形される点にある。この「入れ子関係の拡張範囲」の広さは、石材の獲得地点と、実際に石器を利用する場所との時間的・空間的なズレを自在に調節することに、関連していると解釈している（現象としては石材獲得地での集約的製作と、両面調整石器の状態での他遺跡への搬出・運搬・搬入という、すでに先学諸氏によって繰り返し指摘されてきた形で現れている）。

このような両面調整石器群の特徴は、冒頭でふれた「狩猟具発展史観」と土器の有無による「旧石器・縄文二分論」の中では見えがたかった。「狩猟具発展史観」では、先述のように両面調整石器は石槍などとされ、石核でもあるとの着目点は生まれにくい。一方で、両面調整石器群のしくみは土器の出現を前後しても連続的で、石器群の画期はむしろ土器出現よりも古い時点と新しい時点とに認められそうである（くりかえすが厳密な線引きは将来の課題である）。しかし土器の有無を基準とする「旧石器・縄文二分論」は、時代区分論という階層の異なる論点も巻き込みつつ、この石器群の画期の把握を見えにくくする。石器の編年研究も、漸移的・連続的な変化を暗黙の前提に、単に現象の上っ面をなぞるだけの作業を実証的研究と錯視してきた感がある。このために複数の石器器種がめまぐるしく変遷するとか、遺跡ごとの形態組成や器種組成の変異が複雑であるなどとして（現象の表面のみに着目する限りこれらは当然の帰結である）、クリアな見通しが得られることはなかった。こういった学史的に醸し出された先入観を振り払い、両面調整石器群の仕組みを正面から把握することが、急を要する課題で



第４図　両面調整石器群の入れ子構造

あると確信している。

（３）第３の階層（特殊モデル：その２）―個別の各小地域における多様性

よりミクロな階層での特殊モデルである。集団の日常的な遊動範囲にゆるやかに対応すると考えている。その領域内に固有な環境に応じて多様なあり方で技術が駆使され、遺跡群が形成される。個別遺跡の詳細な分析が有効・必要であり、遺跡間連鎖や移動・居住形態の具体的な解釈に結びつく。南関東など土層堆積が厚く調査精度が高い地域では、この局所レベルを時空間的に細かく把握できる。第２の階層の議論は、第１の階層ほどではないが多少とも抽象化・単純化したものであり、具体的な個別地域や個別遺跡の事例とは、必ずしも調和的ではない。これに対し、実際の遺跡の事例が存在するのは、すべてこの第３の階層である。実際の遺跡事例では個別事情の特殊性が敏感に反映されるためか、両面調整石器による石材の運用に加えて、規格的な石刃や、礫器または不定形剥片による素材供給も共に現れている。時には一遺跡の表現型では両面調整石器によらない石材運用や素

材管理が、主体となることさえある。両面調整石器による石材運用の中でも、非在地の特別な石材を用いる場合も、在地の多様な石材を用いる場合もある。はじめに大きな両面調整石器を用意して遺跡間で順次リダクションが連鎖する場合もあれば、はじめから小さな両面調整石器を多量に製作する場合もある。それらは各地の個別の環境や、各遺跡が形成された時点の個別な・特殊な事情に強く規定されて多様であろう。この階層においてはモデル的に考える場合にも、各小地域や小時期幅の歴史的固有性に合わせた形で、多数・無数のモデルが組み立てられる必要があろう。

しかし、当時の移動距離や遊動範囲の評価がむずかしいことが、この階層の議論の実践を阻む。現行の行政区分を前提とした地域設定は論外として、人工遺物の何らかの特徴の分布圏を地図上で押さえても、それが何を意味するのかはわからない。集団を表象する可能性のある型式学的な特徴にしても、その分布圏が、はたして一つの集団の広域な日常的遊動範囲を示すのか、型式を共有する複数の下位集団群が、なんらの境界なしに自在に遊動していたのか、または下位集団群のより狭い日常的遊動範囲が、複数合体した姿なのか（小野 1988 の階層モデルはこれに近い）。また後者の場合には、個々の集団に一対一で対応する排他的な縄張りが生じていたのか、それとも各集団の遊動範囲はおおむね固定的ながら、それらが一部入り合うあり方なのか、これらの問いに答えることはむずかしい。しかし遺跡間連鎖や石器群間変異を、第３の階層のレベルで具体的に議論するには、分析の対象地域を区切らねばならない。その際には、この問題について何らかの前提を選ぶ必要がある。

遊動範囲の広がりや移動・居住形態は、衣食住全ての財を供給する動物資源＝狩猟対象獣に規定される可能性を、まず考える必要があろう（加藤 1996b など）。しかし動物遺存体を欠く地域では議論ができない。また人口密度（仲田 2002）も重要である。人口密度が低ければ、各集団による広域の領有や異集団間で入り合う土地利用が可能だが、高ければ排他的な縄張りが形成されやすくなろう。だが人口推定の議論は狩猟対象獣以上に困難である。一方で、岩種毎の産出地に加えて、産状（入手しやすさ・大きさ・石器石材としての質の評価とつながる）も含む石材資源は、当時と現在とで地形（供給メカニズム）に大きな変化がないとの前提に立つ限り、手がかりが得やすい。田村隆氏は「地理的な分析単位を確定するためには、まず広域的に石器石材を調査し、次いで特定岩帯との対応関係が検討されねばならない」（田村 2003、47 頁 26～28 行目）と述べ、遺跡出土の岩種から遊動範囲を推し量ることで、上記の問題へ実践的な解決を狙う（田村・国武他 2003）。田村氏の議論は、石材の獲得が主に埋め込み戦略によるとの前提で成立している。ところが岩石の産状は純粋に地形学的・地質学的なメカニズムのみに規定されており、動物資源や人口密度との間に対応関係はない。石材環境は、集団の移動距離や遊動範囲を直接に規定するというよりは、むしろ動物資源の配置や人口密度など他の事情に規定された遊動範囲や移動・居住形態の中で、臨機応変的に調整（Kelly 前掲 1998）される方の側にすぎず、この調整の中には、埋め込み戦略以外の石材獲得も含まれていた可能性を完全には排除できない。これらの問題の完全な解決はむずかしいが、石器分析の精度を高めた個別小地域の検討であればこそ、地域を区切る際に何らかの対応案や前提を用意しない限り、一定の限界を内包した議論に終始せざるを得ない。

３：類似の先行研究との相違

研究史の大枠については前掲の拙稿（長沼 2002）で概略を述べたので省略する。以下では、両面調整石器群の認識の出発点である稲田孝司氏、近年活発に両面調整石器を論じている国武貞克氏と田村隆氏にしぼって、各氏と筆者との違いを明らかにしたい。誤読・誤解は筆者の力量不足である。

（１）構造の生成要因を説く－稲田孝司氏の「旧石器的石器製作の解体論」

稲田孝司氏は石器製作を構造的に把握し、尖頭器石器群の出現を「旧石器的石器製作」の解体と理解した（稲田 1969）。筆者の議論はこの延長線上にある。しかし稲田氏は尖頭器石器群に「統一的構造の崩壊」をみたが、筆者は、両面調整石器を中心とした石材の運用という点で、統一的な構造は、石刃石器群（＝等価構造）とは大きく異なる形ながら尖頭器石器群や細石刃石器群にも確固として存在すると理解し、稲田氏の意味での統一的構造が崩壊するのは、個別構造の定住的石器群においてであると考える（第３図参照）。稲田氏が論考を発表され

た当時は、石器群間変異、石器製作や石材消費の遺跡間連鎖、移動・居住形態、遺跡形成といった行動論的な議論が本格化的に開まる前であり、また利器が石核を兼ねる両面調整石器の両義性も明らかにされていない。これらの点は、加藤晋平氏に始まる石器群間変異、砂川遺跡に始まる遺跡間連鎖、削片系細石刃石器群の技術論的研究、北米プロセス考古学の技術組織論などに関する一連の議論が積み重ねられた後に研究を開始した筆者との、世代的な差といえる。こういった研究の蓄積の中で、稲田氏の時点では見えていなかった、両面調整石器群に独特の「統一的構造」＝「入れ子構造」が見えてきたわけである。

しかしより大きな相違は以下である。稲田氏は、尖頭器の出現の背後に新しい労働形態（小型獣狩猟→大形獣狩猟、集団内の閉鎖的で未分化な労働→分化した特定労働の集団間協業）の萌芽を読み取り、この特化した狩猟のための尖頭器の製作が、旧来の石器製作構造の中での矛盾となって構造の変化が生じたと論じた。弁証法的な唯物史観の論法、洗練された形の「狩猟具発展史観」で、構造の成り立ちを説いたのである。また近年では国武貞克氏も「両面体調整石器群」の生成を論じている。国武氏は、相模野台地・武蔵野台地・下総台地の石器群を石材に着目して検討し、量依存型（一括搬入型）＝石材の供給頻度が低い状況への対応が、「両面体調整石器群」の出現契機となったと論じた（国武 2002、2003）。

これらに対し、筆者は「構造」（しくみ、ルール、文法）の把握と提示を主目的としており、「構造」の生成要因の解明や生成過程の詳細な追跡は、現時点では中心的な関心ではない。「構造」を把握する目的は、大陸部を含めた広域に共通する枠組みへの希求にある。この意味で、もとより空間的な思考（註８）であり、稲田氏や国武氏のように時間軸上に由来を問う研究とは性格が異なる。また北米プロセス考古学の強い影響下にある議論のように、両面調整石器を利用する意味（機能）を、不安定な遊動生活や長距離移動と結びつける解釈（佐藤 1995、加藤 1996a など）にも、筆者は賛同しない。不安定な遊動生活や長距離移動は、石刃石器群のような等価構造でも解決可能に思われるためである。その由来や機能はあえて問わず（註９）、端的に「構造」があったのだとの前提で、その内容自体と範囲を考えてゆく。このような筆者の姿勢は、構造の生成や機能を説く研究と対立するというよりも相互補完的な位置づけにあり、言い換えれば研究戦略上の役割分担と考えている。

（２）石器群の複雑な実体の解析－田村隆氏の「デザイン戦略分析」

田村隆氏は「尖頭器の石材消費（バイフェ―ス・リダクション）」を「第３項」ととらえ、その出現によって「二項性」として把握できた後期旧石器的な「石材消費戦略」の「構造が大きく変換する」（田村 2002、58 頁 37 行～61 頁３行）と述べた。これは一面では稲田氏や筆者に近い考え方であると受けとめたい。しかし田村氏の特徴は、両面調整石器による石材消費戦略を、あくまでも他の互換的な一連の戦略束の中の一つとして把握する点にある。これは石器群全体を規定する構造として両面調整石器を評価する筆者とは、異なる視点である。田村氏は「デザイン戦略」の互換的な束が、様々な組み合わせで石器群に現象する様子を把握することで、石刃技術や石刃技術によらないブロック・コア・リダクションの剥片供給などが、両面調整石器に複雑に絡み合う実体を解析している（田村 1998、前掲 2003）。繰り返すが、筆者が両面調整石器群の概念を用意する目的は、大陸部を含めた広域な理解の枠組みを求めることにある。そこで各地の実体の多様性は承知の上で捨象し、あえて両面調整による石材管理を主体的なものとみなし、他を補助的なものと仮定する。この点で、特定小地域の複雑な実資料の分析を手がける田村氏とは目的が異なる。田村氏の研究は、小稿でいう第３の階層をあつかう、優れた研究であると評価したい。また田村氏は「各石器群には新旧の関係があると考えられるが、いうまでもなく、それは継起的な、また単線的な時系列におかれるものではなく、時に複線化し、交叉し、逆行し、相互変容する等々といった動態性をもっている」（田村前掲 2002、 51 頁 11～13 行）との理解から、段階論的な把握を強く批判する。しかし筆者の狙う第２の階層では、段階論的な把握が有効であると考える。ここには方法上の相違がある。先に「等価構造」→「入れ子構造」→「個別構造」の３段階を想定したが、これらそれぞれの内部では（よりミクロな階層では）、田村氏の言う「単線的な時系列におかれるものではなく、時に複線化し、交叉し、逆行し、相互変容する等々といった動態性」としての把握が必要な部分もあろう。

なお田村隆氏は尖頭器（石槍）の「割り出し」と「割り取り」を区別した（田村 2001）。これは重要な論点で

ある。尖頭器（石槍）という分節だけを用いる限り、核を兼ねる両面調整であろうと剥片素材の周辺調整であろうと、同じものとされてしまう。しかし素材供給・石材運用の点では両者は大きく異なる。筆者の議論に即すると、「割り取り」は石核から量産された素材剥片から製作される点で、むしろナイフ形石器などと同型の等価構造を含む。一方の「割り出し」は石核を兼ねる両面調整石器による入れ子構造の石材運用を含む（註10）。尖頭器という分節や同一性は器種分類を狙うものだが、石材運用の把握を狙う上では、「割り出し／割り取り」や両面調整石器などの分節がむしろ有効である。

4：実例の例示

以下で資料の例示を行う。ただし筆者の思考過程には、未報告資料の観察や他分野からの着想なども含むため、以下に示す資料のみを、これまでの全ての議論の直接の根拠にしているわけではない。

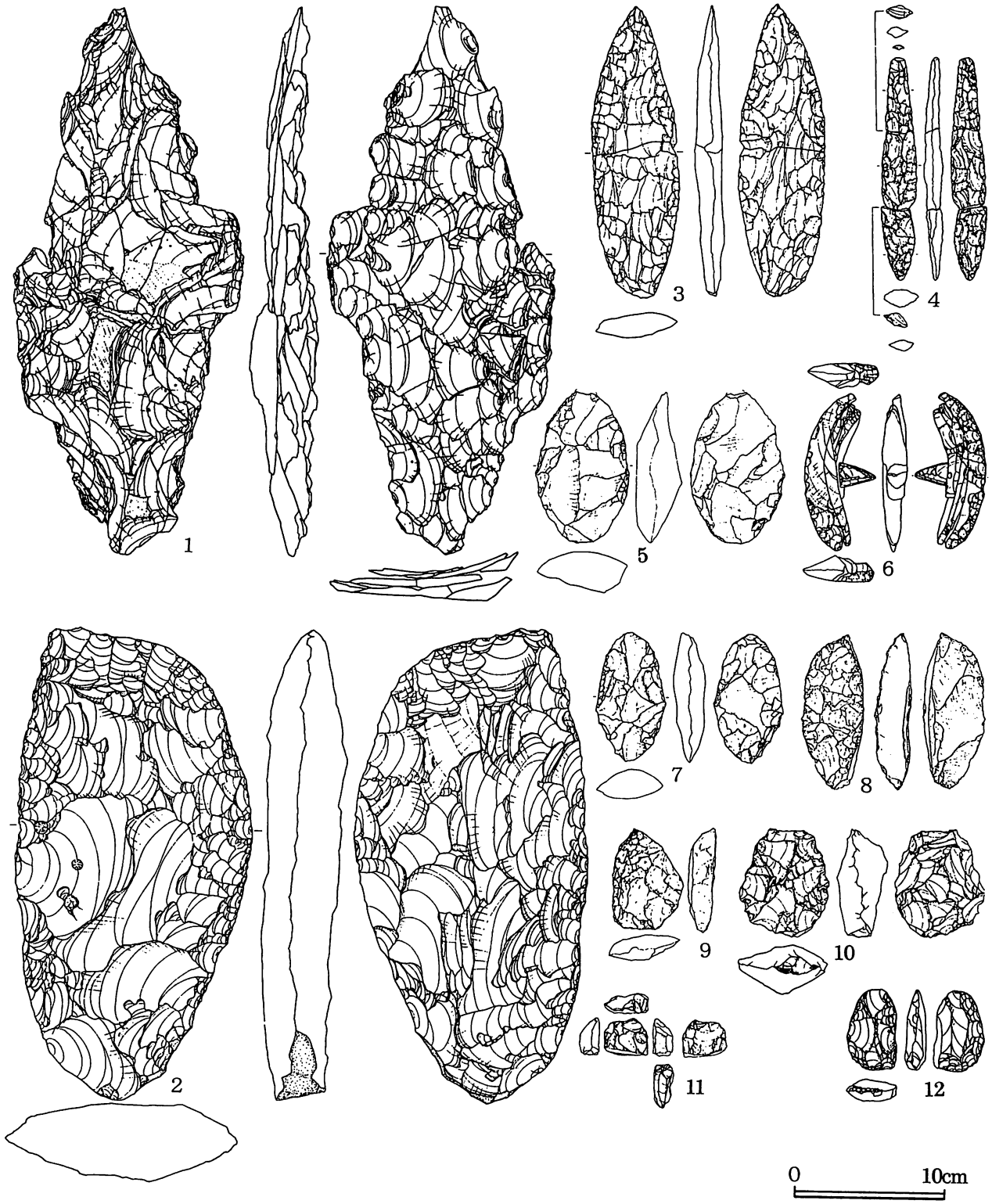
（1）原石の大きさと両面調整石器

両面調整石器の大きさの上限（大きい方への拡張範囲）は、原石の大きさに規定される可能性が高い。岩体の露頭付近など大形の岩屑を自由に獲得・利用できる条件下では、人間の身体能力の限界まで、いくらでも巨大な両面調整石器を製作できる。**第5図**は実見する機会のあった資料を中心に選択したもので網羅的ではないが、両面調整石器の大きさの変異幅をくみたてた。**第5図**で1の下茂内遺跡第Ⅰ文化層は両面調整石器の本体を含まない調整剥片のみの接合資料だが、黒色緻密安山岩の露頭に、2の遠間コレクションは採集資料ではあるがおそらく黒曜石の露頭に、それぞれ近接して大形の原石を入手し得た立地にある。11や12のような関東で出土した削片系細石刃核やその母型と比較すると、圧倒的な大きさである。しかし、すべての両面調整石器が、はじめは**第5図**の1や2と同程度に大きくて、運搬や使用の中で順次縮小して**第5図**の11や12になる、と考える訳にはいかない。**第5図**の1や2は可搬性という点でも問題があり、むしろ特異な例である可能性もある。

もともとあまり大きくはない原石から両面調整石器が製作されたことが、礫面の状態や接合資料例から読み取れる場合もある。**第6図**は、接合状態から原石の大きさを推定可能な接合例である。一般に、両面調整石器では、一遺跡の中での接合が原石にまで復元される例は多くはない。これは両面調整石器のリダクションの進行が複数遺跡間に連鎖するためであろう。**第6図**1の真人原遺跡C地点の接合例は、芯の両面調整石器本体が搬出されずに、また礫皮面の除去工程を含む一連のリダクション（＝剥片剥離）が、一遺跡の中でおそらく短いタイミングで連続的に行われた稀有な例である。両面調整石器を中心とする85点の接合によって、径約13cmm程度の水磨の進んだ扁平な円礫が復元されている。**第6図**の**2**、**3**の上ノ平C遺跡では、灰褐色の珪質頁岩の両面調整石器の本体は検出されておらず、礫面を広く残す調整剥片のみの接合資料である。径約25cm程度の、真人原遺跡C地点と同様に水磨の進んだ扁平な円礫を素材にしている。これらの場合、獲得できる原石の大きさを上回る両面調整石器を製作することは物理的に不可能である。したがって初期段階の両面調整石器は、**第5図**の**1**や**2**よりも大幅に小形であったはずである。

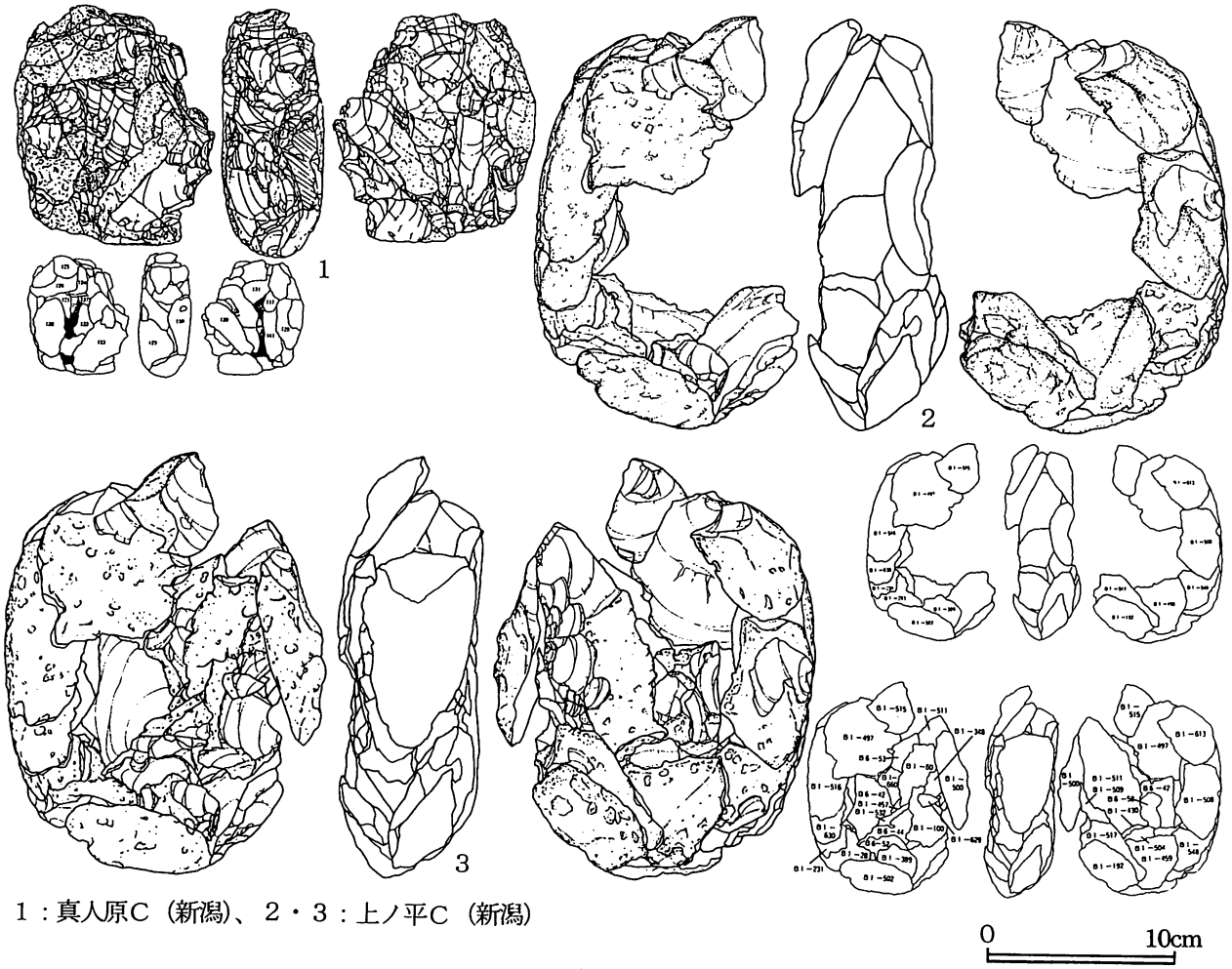
両面調整石器の大きさの下限は、両面調整石器やその調整剥片を、何らかの道具またはその一部として利用する場合の、利用目的や作業の終了などによって臨機的に変異するものと見られる。しかし「石器製作が入手可能な原石の大きさに規定される」との理解は単純ではない。大きな原石から小さな石器を作ることは可能だが、逆に小さな原石から大きな石器を作ることは不可能である。大きな原石を入手できる場合には、文化的・社会的規定を含めた製作者の裁量に、石器のサイズが完全に任されると考えてよい。しかし遊動領域内では小さな原石しか入手できない条件下では、これに対する複数の対応策がありえよう。以下に列挙すると、①原石の大きさに規定された小さな石器を製作する（遊動領域内で獲得できる点と、その特定岩種で石器を作る点に強いこだわりがあり、石器のサイズへのこだわりは弱い）、②石器製作への適性では劣るが遊動領域内でも大きな原石を獲得できる、別の岩種を用いて大きな石器を作る（遊動領域内で獲得できる点、大きな石器との点にこだわりがあり、岩種へのこだわりは弱い）、③遊動領域外から大形の原石を調達する（隣接他集団との友好関係、産地の存在など可能な条件が整っている上で、そういった石材利用が選択可能）などの対応策を、理論上は想定できる。しかし実際の遺跡出土資料には、これらが様々な割合で混在している可能性があり、個別の一事例・一資料のレベルで事

情を同定してゆくことには一定の限界がある。



1：下茂内（長野）、2：幌加沢遺跡遠間地点（北海道）、3：大刈野（新潟）、4：吉岡C（神奈川）、5・7：正面中島（新潟）、6：樽口（新潟）、8：中土（新潟）、9・11：東峰御幸畑西（千葉）、10：真人原A（新潟）、12：中原（茨城）

第５図　両面調整石器の大きさの変異（各報告書等より）



1：真人原C（新潟）、2・3：上ノ平C（新潟）

第６図　原石の大きさを推定可能な接合例（各報告書より）

（2）石材獲得地からの距離と両面調整石器の大きさ

本州島の東北地方から関東・中部地方における、削片系細石刃石器群の両面調整石器（細石刃核）の大きさの変異は、両面調整石器の大きさが原産地からの距離とおおむね対応する好例である（加藤 1996a、絹川 1996 など）。第７図は絹川 1996 の fig.111 を引用し、これに遺跡分布図を添付した。すなわち東北日本海側の想定石材産地に近いほど両面調整石器（細石刃核）が大きく、逆に太平洋側や中国地方など遠くなるほど小さい。この傾向は、関東地方で新資料の蓄積が進んでいる今日でも、大きな変更の必要はない。第７図で８の後野Ｂの例は一見すると大形だが、実見によると削片を転用した細石刃核であり、両面調整石器の本体ではない。周知のようにこの石器群は硬質頁岩のみを遺跡に残し、礫器関係以外には在地の多様な石材を残さない、排他的・選択的な単一石材の使用に特徴がある（恩原２遺跡では瑪瑙・玉髄が多く残されているという）。

この現象は先学諸氏によって繰り返し論じられてきたように、頁岩地帯への回帰を前提とした移動・居住形態と遺跡形成によって、うみだされたものであろう。より抽象度を高めて述べるなら、単一の石材産地での機会限定的な石材獲得の結果であろう。はじめは比較的大形に用意された両面調整石器が、複数遺跡間を持ち運ばれる中で順次、縮小してゆくという説明が可能な典型例といえる。さらにこの石器群の両面調整石器には、削片を剥離した後に、削片の剥離面を打面として器体の側面に大きな剥離を加えることもある（長沼・佐野 2003 など）。これは従来言われてきたような、細石刃核の側面調整だけとしては理解し難い。むしろ素材剥片の獲得を狙った剥片剥離（削片を剥離した両面調整石器を、剥片を獲得するための石核として利用している）と理解したい。後野Ｂに見られた削片の細石刃核への転用、東峰御幸畑西（空港 No.61）遺跡（宮ほか 2000）に例のある削片の彫

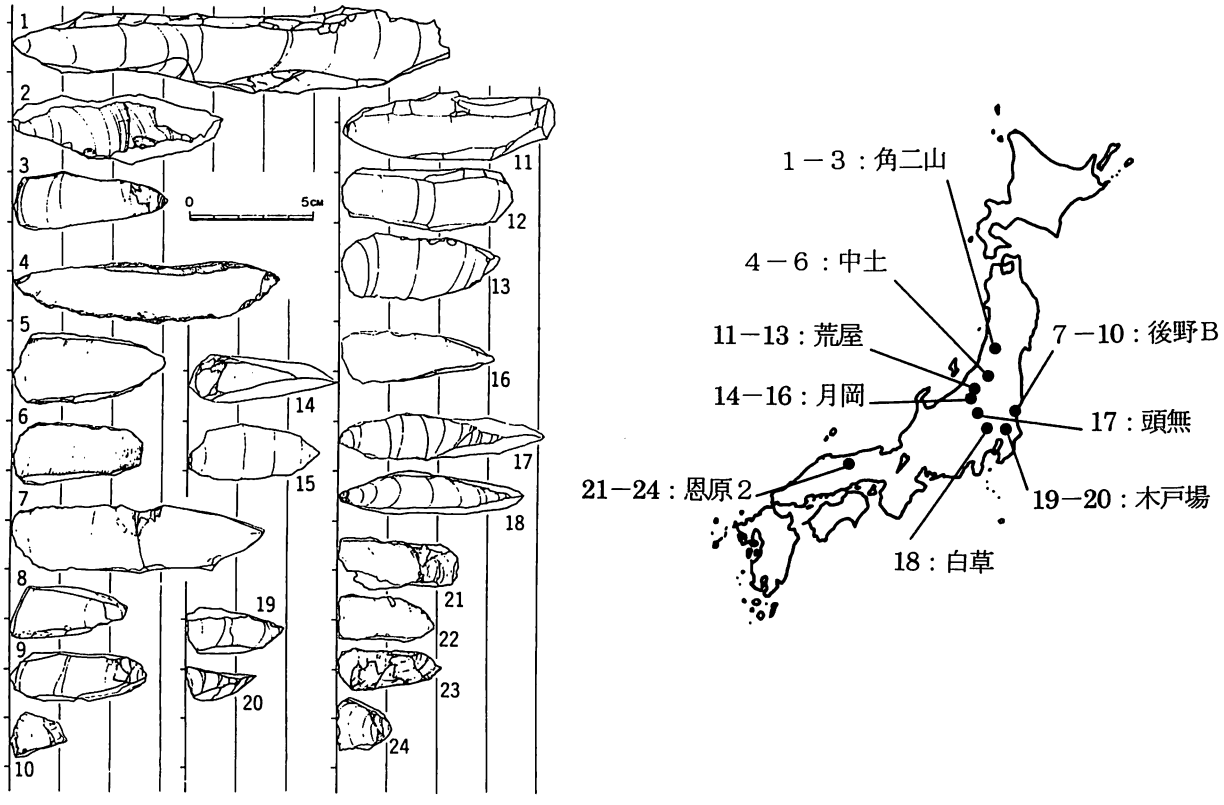
器への転用、柏原遺跡（菱沼 1999）に見られる細石刃の剥離が進行した後の細石刃核の削器への転用など、節約的な石材利用もこの石器群の特徴である。この節約性は、単一の石材産地での機会限定的な獲得との解釈に親和的である。

一方で相模野台地のＬ１Ｓ層では、多様な岩種と大きさの両面調整石器が一遺跡内に混在するありかたが一般的である。第８図には綾瀬市吉岡遺跡群Ａ区のL1S層の石器群（砂田・三瓶 1998）を例示した。９種 77 母岩に分類されているほど、多様な岩種が残されている。いずれも当該地域の石器石材として通時的に多用される岩種で、ガラス質黒色安山岩と黒曜石以外は相模川で採取可能と考えられる。一遺跡の中において、石材を違えて複数の両面調整石器が存在し、それらが大きさの変異に富む点も特徴的である。もちろん用途・機能ごとの岩種の選択や作り分けの可能性もあり、小形品の中には剥片素材で当初より「石核は兼ねない」前提で製作されたものも含まれるであろうが、このような一遺跡の中で多種の石材を用いて大きさの広い変異幅を見せる両面調整石器というあり方は、先述の削片系細石刃石器群の事例と対照的である。すなわち、相対的により複数の獲得地からの常時的な獲得機会を表していると考えられる。

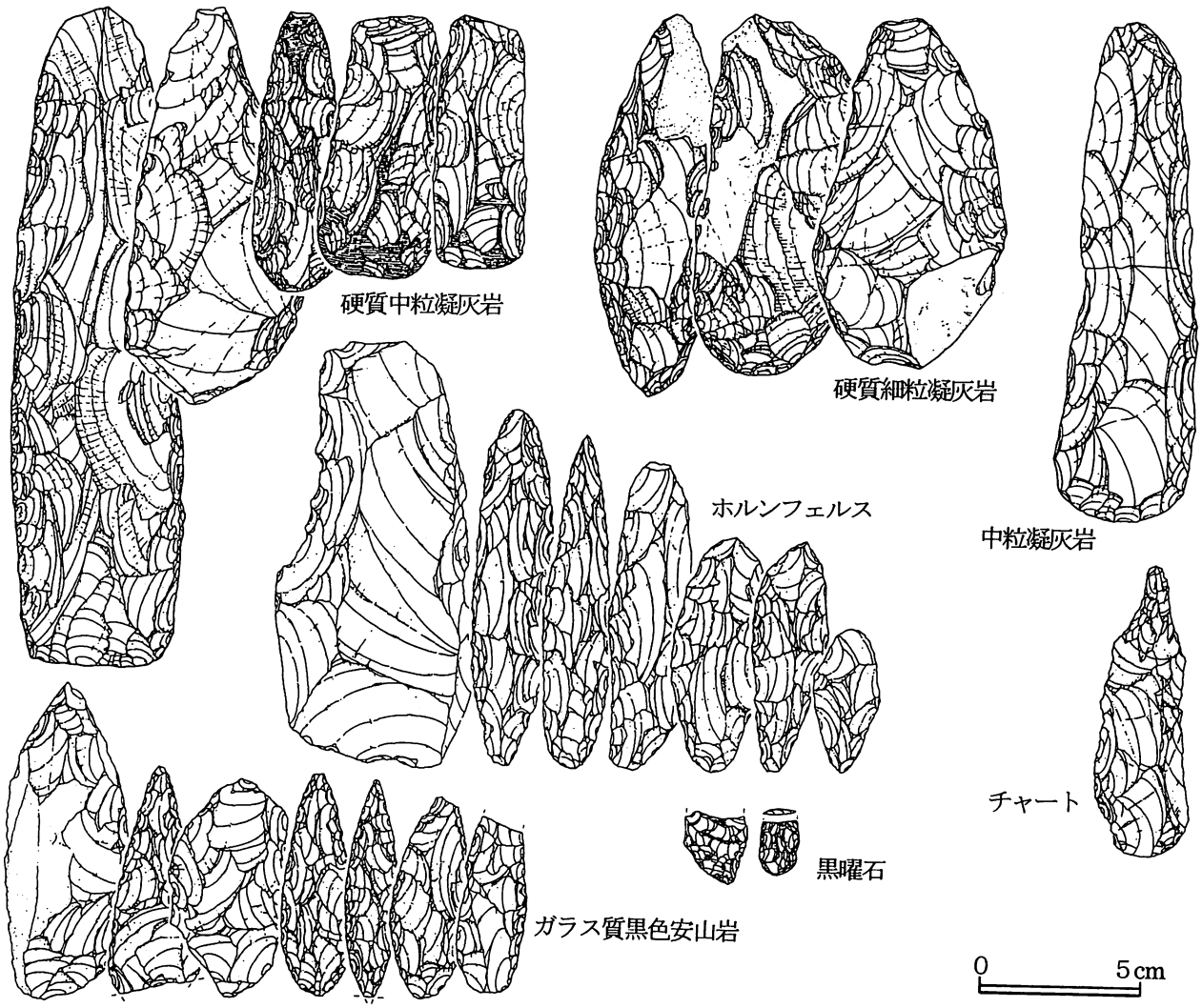
こういったあり方は、ここに示した以外にも吉岡遺跡群Ｃ区L1S、月見野上野第１遺跡、寺尾遺跡など相模野台地の他遺跡にも広く認められる。先の削片系細石刃石器群と比較した場合に、相対的に狭い遊動範囲を示唆すると考えている。

（３）石核としての両面調整石器利用を示す接合例

両面調整石器をとり込んだ接合資料の中に、二次加工の加えられた他の石器器種が含まれ、石核としての両面調整石器利用を示す接合資料は、各地で多数確認されている。ここでは、筆者が報告書作成に参加し身近にじっくりと検討する機会のあった、神奈川県藤沢市の用田鳥居前遺跡第Ⅴ文化層（栗原ほか 2002）、新潟県小千谷市の真人原遺跡Ｃ地点（小野編 1997）の例を取り上げる。



第７図　削片系細石刃核の大きさの変異（絹川 1996 fig.111 引用）

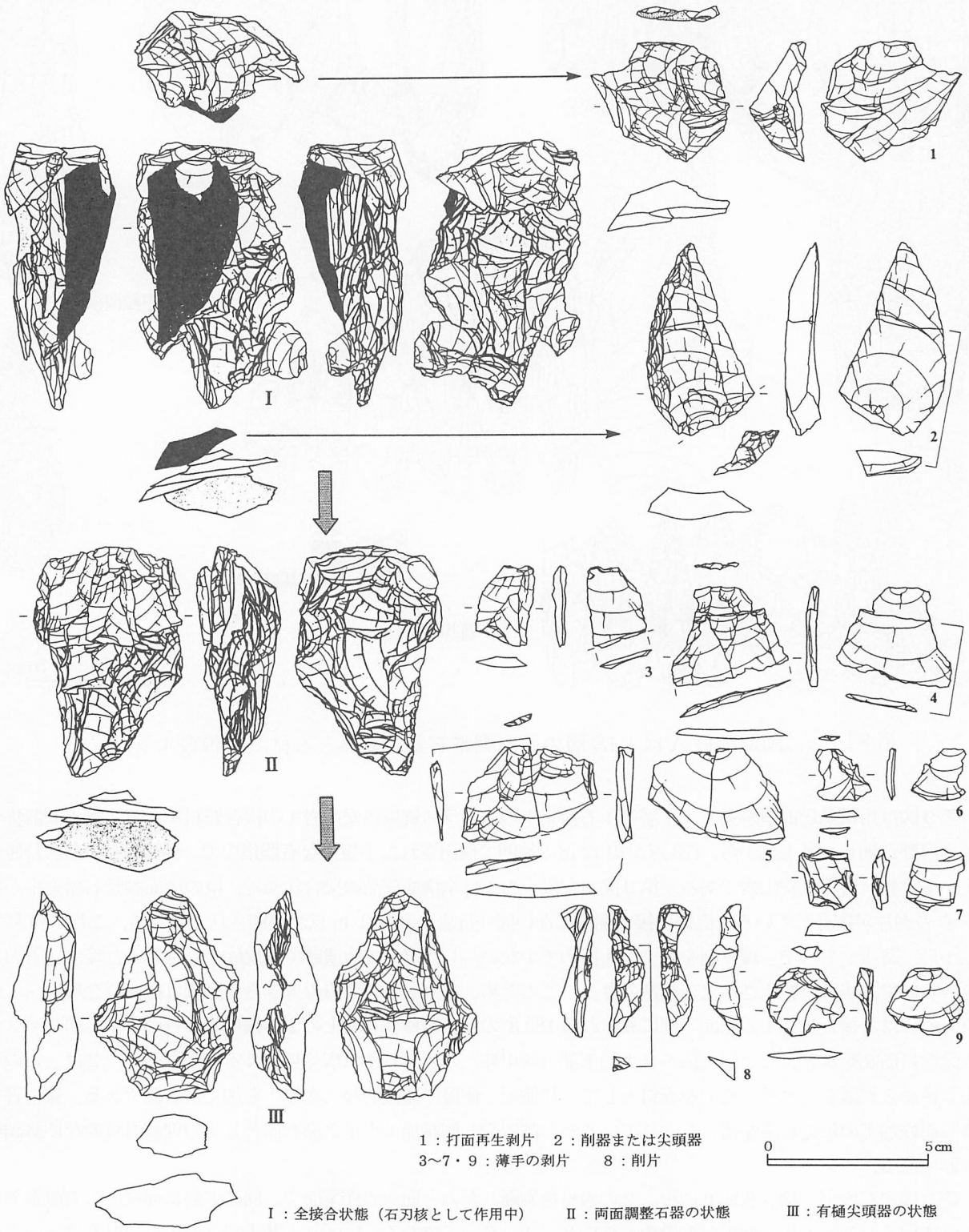


第８図　吉岡遺跡群Ａ区 L1S 層の両面調整石器の変異と石材（報告書より）

第９図は用田鳥居前遺跡第Ⅴ文化層第１石器集中の、ガラス質黒色安山岩１の接合資料である。第１石器集中は相模野台地Ｌ２層上部から、123 点が約 12 ㎡の範囲で検出された小規模な石器集中で、流紋岩を２点含む他はすべてガラス質黒色安山岩である。**第９図**で左段上のⅠは全構成部品の接合状態で、核の両面調整石器を中心に 18 点の剥片が接合している。直接の接合関係にない同一母岩の剥片は 46 点が識別されているが、これらの大半は小形・薄手のもので、礫皮面を残す例も極めて少ない。したがって他遺跡で礫皮除去が行われた後に、石刃石核の状態で本遺跡に搬入されたと判断できる。このため、もともとの原石の大きさや形状は把握できない。この石刃石核は、接合状態Ⅰの正面下部に見られる 180 度の打面転移、右段上の１の輪切りの打面再生、同じく２の入念な打面調整など、Ｌ２層上部～Ｂ１層下部（砂川期）の石刃石核に広く見られる特徴をもつ。２は、この石刃石核から剥離した厚手の石刃を素材として、片側の一側縁に連続的な二次加工を加えた石器である。報告書では「周縁加工の槍先形尖頭器」とされているが、削器や一側縁加工ナイフ形石器としての理解も可能な側縁調整石器である。

第９図で左段中の接合状態Ⅱの後、２の素材を剥離したのと同一の作業面で、同じ方向に連続的な剥離が加えられている。ここで生じたのが右段中～下の３、４、５、７である。いずれも薄手で２のような厚みはないことから、素材剥片としての石刃を獲得する意図は弱いように思われる。この推測が正しければ、接合状態Ⅱの時点で石刃石核としての役割は一度停止している可能性がある。薄手になった核は尖頭状に整えられる。接合状態Ⅰ

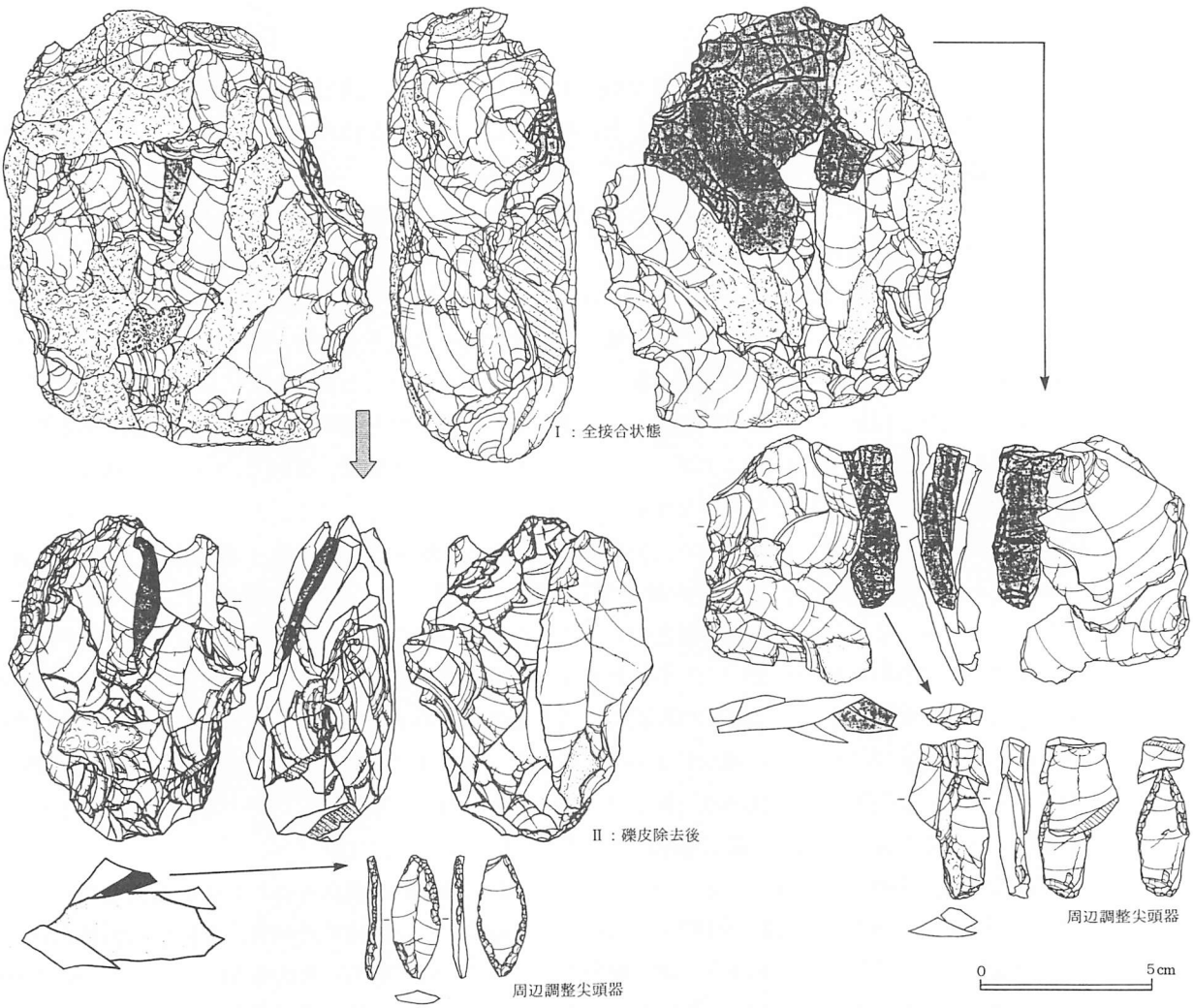
の周辺部に突出するように接合する剥片の存在から、幅広な平面形から尖頭状の平面形に整える作業が本遺跡内で行われた可能性を指摘できる。しかし本来あるはずの接合剥片の不在は、この平面形を整える過程で生じた剥片が、遺跡外に搬出されていることを示している。ただし平面形を尖頭状に整える作業と、２の石刃の剥離との前後関係は厳密には確定できない。やがて８の削片を剥離して、左段下Ⅲの不整形な「有樋尖頭器」にいたる。



第９図　石核としての両面調整石器①－用田鳥居前遺跡 L2 層
（報告書より、ただし報告書掲載図も原図は筆者による）

この接合資料は、報告書では「縦長剥片を目的的剥片とする剥片剥離技術と槍先形尖頭器の製作工程とが同一工程上に認められる」（栗原ほか2002、455頁、2～3行）と記載されている。私見では、当初より第一に「有樋尖頭器」の「製作」を念頭に置いた上で、あくまでもその一部として石刃生産を「組み込んで」いたものなのか、それとも当初は単なる普通の石刃石核であったものを、リダクションの進行に応じてアフォーダンス的に尖頭器素材として転用したのかは、明らかではない。リダクションの前段階で1の輪切りの打面再生が行われていることは、打面と作業面の関係を一時的に固定した、砂川的な石刃石核を念頭においていた時点が存在することを示す。しかし一方で、全接合状態であるIの裏面に求芯的な剥離面が並んでいることは、この石刃核を扁平な形にもっていこうとしている意図も読み取ることができるのである。

第10図は真人原遺跡C地点である。第6図の1と同一の資料で、黒色の珪質頁岩である。真人原遺跡C地点では、単一の石器集中のみが検出された。この石器集中は中心から北半を送電線鉄塔により破壊されていたため、分布の限界を把握できていないにもかかわらず、148㎡の調査範囲から2873点の石器（縄文石器も含む）を検出しており、相対的に大規模といえる石器集中である。石材は無斑晶質安山岩、珪質頁岩、珪質頁岩の3種を主体に、少量の黒曜石や玉髄など11種を組成する。第10図で上段のIは全構成部品の接合状態で、礫皮面を広く残す大形の剥片が多数接合している。あるべき剥片の不在は認められるものの、扁平な円礫の原石形状が把握可能である。円礫の状態で搬入され、比較的短い時間内に一気に割りつくし、一部の剥片は搬出の可能性もあるが、芯の両面調整石器を含む大半の生産物をその場に残したものと判断できる。これら礫皮面を残す剥片のうち、小



第10図　石核としての両面調整石器②－真人原遺跡C地点（報告書より、一部原図筆者）

形で縦長の剥片が、打面を含む一端を折り取られる形で周辺調整尖頭器に加工されている（下段右）。第10図下段左の接合状態のⅡは、礫皮面を広く残す剥片を取り去った段階である。Ⅱの正面で、図中で上方向からの剥離で生じた、やはり小形の縦長剥片を利用して、周辺調整の尖頭器が製作されている。これらの周辺調整尖頭器に用いられている素材剥片は、必ずしも大形のものでも厚手のものでもない点は興味深い。

この接合資料では、１つの原石が１つの両面調整石器（第10図下段左の淡い網がけ部分）にリダクションしていることから、第３図のタテ方向への拡張は行われていない。これは原石がすでに小さいためであろう。また先に見た用田鳥居前例のような輪切りの打面再生は行われておらず、リダクションの当初より最終段階にいたるまで一貫して求芯的な剥離によっている。この過程の中で、第10図下段のⅡの裏面に接合している大形の縦長剥片も生じている。この縦長剥片には現時点では二次加工が加えられていないが、真人原遺跡Ｃ地点と接合関係のある真人原遺跡Ａ地点では、このような大形の縦長剥片に二次加工を加えて、削器または尖頭器の未製品に加工している例が多数存在する（小野編 2002）。このような縦長剥片が両面調整石器に直接接合することは、必ずしも石刃石核から剥離されたものではない可能性を示す上で興味ぶかい。

これら２遺跡は編年的には、用田鳥居前遺跡第Ⅴ文化層は砂川期あるいは砂川期直前に、真人原遺跡Ｃ地点はナイフ形石器群以後で細石刃石器群が出現する以前の尖頭器石器群に、それぞれ位置づけられている。とくに前者はナイフ形石器群の等価構造が全盛の時期に相当する。両面調整石器を中心とする石材利用の中でも、相対的に古い時期のものである。こういった個別の接合資料の観察も、第１の階層や第２の階層の議論と同程度に必要である。

５：おわりに

小稿では、前半の２で理論的な検討、中間の３で類似する他学説の検討、後半の４で実資料の提示を試みた。小稿の全体を起承転結的な構成にしていないため、まとめを最後に置くことはふさわしくない。そこで唐突ではあるが、細石刃石器群との関係について簡潔にふれて、結びに代えたい。

中央シベリアでの最新の研究によると、後期旧石器の初頭から、すでに細石刃技術・石刃技術・両面調整技術の３者がでそろっている可能性が高いという（註 11）。供伴人骨が不明であることや年代観の問題など、現時点では評価の定まらない部分も少なくないとはいうが、後期旧石器の人類は当初よりこれら３技術を自在に駆使し得たことになり、これら３者は時と場合に応じて、様々な割合や組み合わせで出現し得ることになろう。この見解が仮に適切であれば、ナイフ形石器→尖頭器→細石刃といった本州島の「石器文化」による編年なるものは、各地の個別小地域（第２の階層以下）に視点を限定した場合に、生態系など個別の事情から、一見すると偏った技術の発現として現れている、その一部にすぎないことになろう。この理解は、冒頭でのべた「一国史内の狩猟具発展史観」に替わる新たな枠組みの、有力な候補になり得る可能性に満ちている。

細石刃技術の本州島での自生説か渡来説かの二択を迫る、学史的に醸成されてきた一国史的な言説配置に絡めとられてしまうならば、小稿の議論は、本州島の細石刃石器群との関連では、系統論に回収されるおそれがある。細石刃石器群以前の段階にすでに両面調整石器を中心とする石材利用が存在したことは、一見すると島内自生説にとって有利な情報と読み取られかねない。しかし筆者は、広域では同じようなしくみが更新世終末期から完新世初頭の極東北部に広く存在したこと（第２の階層）、この共通のしくみを土台にして、ミクロな小地域では個別の多様性があること（第３の階層）、この論法によって、一国史＝日本史の古い時代という前提による各種の「起源論」を支配してきた、自生説か渡来説かの二択という問い方そのものを無効化したいと考えている。これは細石刃の起源論だけでなく、完新世適応＝新石器化についても同様である（註 12）

帰納法的な論法では、枠組みの議論はできない。そこで意図的に演繹的な論法を採用している。したがって論点の細部を詰める研究、両面調整石器群の時間・空間両面での範囲を厳密に定める研究、逆に両面調整石器群の内部で個別小地域を限定してその中の実体を詳細に解明する研究は、いずれも今後の課題である。大陸側の資料の検討に大きな制約があることはいうまでもないが、本州島に限定しても、特に両面調整石器を持たない稜柱形細石刃核（野岳・休場型、矢出川技法など）の石器群の理解、またいわゆる「縄文草創期」の石器群が個別構造

石器群に変換する過程について等、十分に整理できていない。細石刃石器群のシンポジウムでありながら、細石刃とは直接かかわりの薄い内容となってしまったことをお詫びすると同時に、末筆ではありますが、本稿執筆の機会を与えていただいた堤　隆氏、真人原遺跡C地点の資料の再実測と公表を快諾いただいた小野　昭先生、日頃よりご指導いただいている加藤博文先生に、心より感謝申し上げます。

註

註1　自然科学や大陸との比較は古くから活発に論じられてきた。しかし近年事情が変わったのは、①グリーンランドの氷床ボーリングコアの年縞から復元された寒暖サイクルに、^{14}Cの暦年較正年代が与えられたこと、②アムール流域で「日本の縄文草創期」と酷似する石器に土器を伴い、10,000年前を遡る^{14}C測定値をもつ遺跡が複数紹介されたことである。①により古環境との対比には^{14}Cの暦年較正年代が共通言語として必須となり、②により伝播系統論の是非を問う以前に、「日本史」を前提とする空間範囲の区切り方そのものに懐疑が生じた。これらは90年代以後に生じた、今日的に固有な学的事情である。

註2　階層は時間・空間の両方に関するものである（小野2001）。

註3　捏造の可能性があるガジリまみれの石器を用いて、刃部の角度を測って細かく分析するなどの研究が行われたこと（春成2003、597頁）は、枠組みの議論を棚上げにした素朴実証主義の危険性を、あますことなく示している。もちろん分析を担当した研究者個人への中傷を意図するものではないし、実資料の詳細な分析は一切不要と考えているわけでもない。目的に応じた議論の階層があると述べたい（大橋編 1979、pp133－135）だけである。だが仮に、若い研究者には枠組みの議論を禁止する教育システムがあるならば、それこそまさに考古学教育の深刻な問題であり、指導者の方針が問われよう（会田2003）。

註4　先述のルロワ＝グーランは、単位重量あたりの有効刃部長を指標に、石器製作技術の変化と人類の進化を対応させたが（Leroi - Gourhan 1964[荒木訳 1973]）、ハンドアックスの有効刃部として核の本体のみを扱い、整形時に生じる調整剥片の縁辺は刃部としてカウントしていない。

註5　完新世適応の具体相は、小地域毎の個別生態系に応じて異なろう。農耕・牧畜など生業による基準や、磨製石器・土器など人工遺物の要素的特徴で「旧石器時代」と「新石器時代」を分ける議論は、全域的には成立し得ない。局所的には成立するが、小地域ごとに定義が異なるなら同じ用語を用いるべきではない。とはいえヨーロッパの基準を全世界に当てはめたり、逆に個別地域論に埋没して全域的な定義を退けたりといった思考も、同じく不毛と考える。最大公約数的な部分には共通の用語を用いたい。人間活動の変化の最大公約数的な部分とは、あえて言えば完新世適応であろう。旧石器時代・新石器時代の区分と用語は、更新世から完新世への移行に大きな気候変動をともなった中～高緯度地域では残したい。暫定的に、旧石器時代を「更新世に適応した石器時代」、新石器時代を「完新世に適応した石器時代」と定義し、さらに必要な地域では両者間の移行期を「中石器時代」としたらどうか（単に「移行期」でもよい）。人工遺物の特徴に基づいて時代を区分するべきとの立場からの批判は予想されるが、人工遺物の特徴は各地ごとに異なるであろうので、全域的な定義には適さない。

註6　ミクロに第3の階層のレベルで見るならば、東北や北海道島の一部、アムール流域などには、規格的な素材剥片の量産や、両面調整石器による素材剥片供給が引き続き行われる地域・時期もある。

註7　角錐状石器や舟形石器の一部には、石核を兼ねたかに見えるものがある。なお田村隆氏は東関東の舟底形細石刃核を「舟形両面体」という語で呼んだ（田村2003）。舟底形細石刃核は、定義1の意味では両面調整整石器ではないが、リダクション過程の中で石核・利器・細石刃核を兼ねてゆく可能性がある点で、両面調整石器と構造的に同型との評価では、と忖度する。しかし一方で寺崎康史氏は、北海道島の美利河技法を湧別技法から分離する議論の中で、舟底形に整形された石器は、両面調整石器とは根本的に異なると説いている（寺崎1998）。

註8　大陸側資料の問題は、筆者にとっては空間範囲の区切り方の問題として存在している。これは現行の日本

国の領土を所与とした一国史的な前提と、その入れ子として現行の県郡市町村といった行政区分を所与とする小地域史的な前提への懐疑である。かつて国外との比較は系統論と同義で（大井1968など）、細石刃石器群など系統関係の議論が活発に行われた学史的経緯がある。しかし系統を国外（または他地域）に求めるという、その発想自体が、現状の国境を所与として内外に分ける一国史（またはその入れ子としての小地域史）的な前提に立っており、みとめがたい。

註9　問われた場合の返答として、植生環境の変化＝森林景観の増加による遊動領域の縮小化によって生成したとの見通しを、一応は用意している。国武氏の説と矛盾するものではないが、現時点では古環境データの蓄積による検証を待つべきものである。

註10　ただし「割り取り」の中には、剥片を素材としながらも両面調整に仕上げられた小形のものや、周辺調整・部分調整・両面調整を問わず、両面調整石器由来の剥片を素材とするものが存在し得る。

註11　加藤博文先生のご教示による。

註12　筆者は「縄文文化の起源をさぐる」「縄文文化起源論」といった問題の立て方をしない。

参考文献

会田容弘2003「旧石器時代(東北)」『考古学ジャーナル』No.502、ニューサイエンス社、9-12頁。

稲田孝司1969「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』第15巻第3号、3-18頁。

大井晴男1968「日本の先土器時代石器群の系統について」『北方文化研究』3、北海道大学文学部、45-93頁。

大橋保夫編1979『構造・神話・労働―クロード・レヴィ＝ストロース日本講演集―』、みすず書房。

小野　昭1988「遺跡分布からみた後期旧石器時代の社会―ナイフ形石器群を例とした分布の現象と実体―」『第四紀研究』第26巻第3号、305-315頁。

小野　昭編1997『真人原遺跡Ⅱ』真人原遺跡発掘調査団

小野　昭1998「新たな人類史のはじまり」『科学』第68巻第4号　岩波書店　285-293頁。

小野　昭2001「文化の広がりの重層性と比較の方法」『打製骨器論―旧石器時代の探求―』東京大学出版会、11-19頁。

小野　昭編2002『真人原遺跡Ⅲ』真人原遺跡発掘調査団。

加藤博文1996a「モービル・トゥールとしての両面調整石器―縄文化にむかう技術組織の変動―」『考古学雑渉　西野元先生退官記念論文集』、西野元先生退官記念会、26-44頁。

加藤博文1996b「細石刃石器群における生業活動の検討―シベリアからの視点―（上）（下）」『古代文化』第48巻第3号28－36頁、第48巻第4号19-28頁。

絹川一徳1996「M文化層の石器組成と石器装備の維持・補給について」稲田孝司編『恩原2遺跡』岡山大学文学部考古学研究室、145-154頁。

国武貞克2002「旧石器時代の領域分析―特定共時における‘戦略束’―」東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室　紀要』第17号、1-68頁。

国武貞克2003「両面体調整石器群の由来―関東地方Ⅴ層・Ⅳ層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性―」『考古学』Ⅰ、安斎正人編、52-77頁。

栗島義明1986「槍先形尖頭器石器群の研究所説―中部日本における地域的様相の把握―」『考古学研究』第32巻第4号、10-41頁。

栗原伸好ほか2002『用田鳥居前遺跡』(財) かながわ考古学財団。

近藤尚義ほか1992『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1―佐久市内その1―下茂内遺跡』(財) 長野県埋蔵文化財センター

佐藤雅一ほか1988『大刈野遺跡』新潟県湯沢町教育委員会。

佐藤雅一・佐野勝宏2002『正面中島遺跡』新潟県津南町教育委員会。

澤田　敦 1996『磐越自動車道関係発掘調査報告書　上ノ平C遺跡』(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団。
白石浩之・笠井洋祐 1999『吉岡遺跡群Ⅷ　縄文時代３　草創期の石器文化』(財) かながわ考古学財団。
鈴木次郎・恩田　勇 1996『宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ　サザランケ (No.12) 遺跡』(財) かながわ考古学財団。
砂田佳弘・三瓶裕司 1998『吉岡遺跡群Ⅴ　旧石器時代３　Ｂ１層～Ｌ１Ｓ層の石器文化　縄文時代２　草創期』(財) かながわ考古学財団。
竹岡俊樹 1979「石器製作工程〈下位構造〉の分析」『物質文化』No.32、１－９頁。
田村　隆 1998「遺構の論理―石器群のデザイン分析と文化＝社会理論―」『先史考古学論集』第７集、1-48頁。
田村　隆 2001「尖頭器石器群の石材消費戦略」『(財) 千葉県文化財センター　研究紀要』22、49-63頁。
田村　隆・国武貞克・吉野真如 2003「下野－北総回廊外縁部の石器石材（第１報）―特に珪質頁岩の分布と産状について―」『千葉県史研究』11、千葉県史編纂委員会、153-143（１-11）頁。
田村　隆 2003「林小原子台再訪―東部関東における長者久保―神子柴石器群―」『考古学』Ⅰ、１-51頁。
立木宏明ほか 1996『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ　樽口遺跡』新潟県朝日村教育委員会。
筑波大学歴史人類学系遠間資料研究グループ 1990『湧別川―遠間英治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録―』北海道紋別郡遠軽町教育委員会。
寺崎康史 1999「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』第８集、71-88頁。
仲田大人 2002「後期旧石器時代の人口推定―居住形態にもとづくシミュレーション―」『MICRO BLADE』第２号、1-20 頁。
長沼正樹 2002「両面調整石器群研究序説―更新世終末期石器群理解の枠組み構築に向けて―」『考古学研究』第49巻第３号、65-84頁。
長沼正樹・Ｉ.Ya.シェフコム―ド・工藤雄一郎・S.F.コスチナ・松本拓・M.V.ガルシコフ・橘詰潤 2003「ゴンチャルカ１遺跡2001年発掘調査の概要とその諸問題」『旧石器考古学』64、73-82頁。
長沼正樹・佐野勝宏 2003「川口町荒屋遺跡採集の両面調整石器」『越佐補遺些』第８号、９-11頁。
長沼正樹（印刷中）「更新世終末から完新世初頭の極東北部における両面調整石器群」『古代文化』第55巻第10号。
中村孝三郎 1965『中土遺跡』長岡市立科学博物館考古学研究室。
成島一也・宮田和男 2000『中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ―中原遺跡２―』(財) 茨城県教育財団。
春成秀爾 2003「前・中期旧石器問題の解析」『前・中期旧石器問題の検証』日本考古学協会、593-600頁。
菱沼良幸 1999『取手郡市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　東原遺跡・前畑遺跡・柏原遺跡』(財) 茨城県教育財団。
宮　重行・麻生正信・永塚俊司 2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ―東峰御幸畑西遺跡（空港No.61遺跡）―』(財) 千葉県文化財センター。
山田昌久 1985「縄文時代における石器研究序説―剥片剥離技術と剥片石器をめぐって―」『論集　日本原史』、吉川弘文館、219 - 252頁。
山田昌久 1996「時間知変化・多工程技術・空間知変化―定住人類の資源関与に注目して―」『季刊考古学』第55号、雄山閣、27 - 32頁。
Kelly, R.L. 1988 The Three Sides of a Biface *American Antiquity,* 53―4、pp717 - 734.
Leroi - Gourhan, A. 1964 Le Geste et la Parole, 2vol. albino Michel, Paris.（A. ルロワ＝グーラン著　荒木　亨　訳 1973『身ぶりと言葉』、新潮社。）
Е.В.Акимова、И.В.Стасюк、Е.А.Томилова、С.А.Лаухин 2000 Новые данные по археологи позднепалеолитического местонахождения Дербина Ⅴ. *Проблемы археологи、этнографии、антропологии сибири и сопредельных территорий、* томⅥ、 Института археологии и этнографии СО РАН、с.24－27.

北方系細石刃石器群の移動形態

佐野　勝宏

はじめに

ここでは，①石器石材組成，②石器の搬入状態，から細石刃石器群の特性を認識し，その特性から細石刃石器群を残した人類の移動形態について若干の考察をおこなう．特性の認識にあたっては，より新しい段階にあたる大型尖頭器石器群との比較検討に基づき，両者間での相対的特性として議論する．

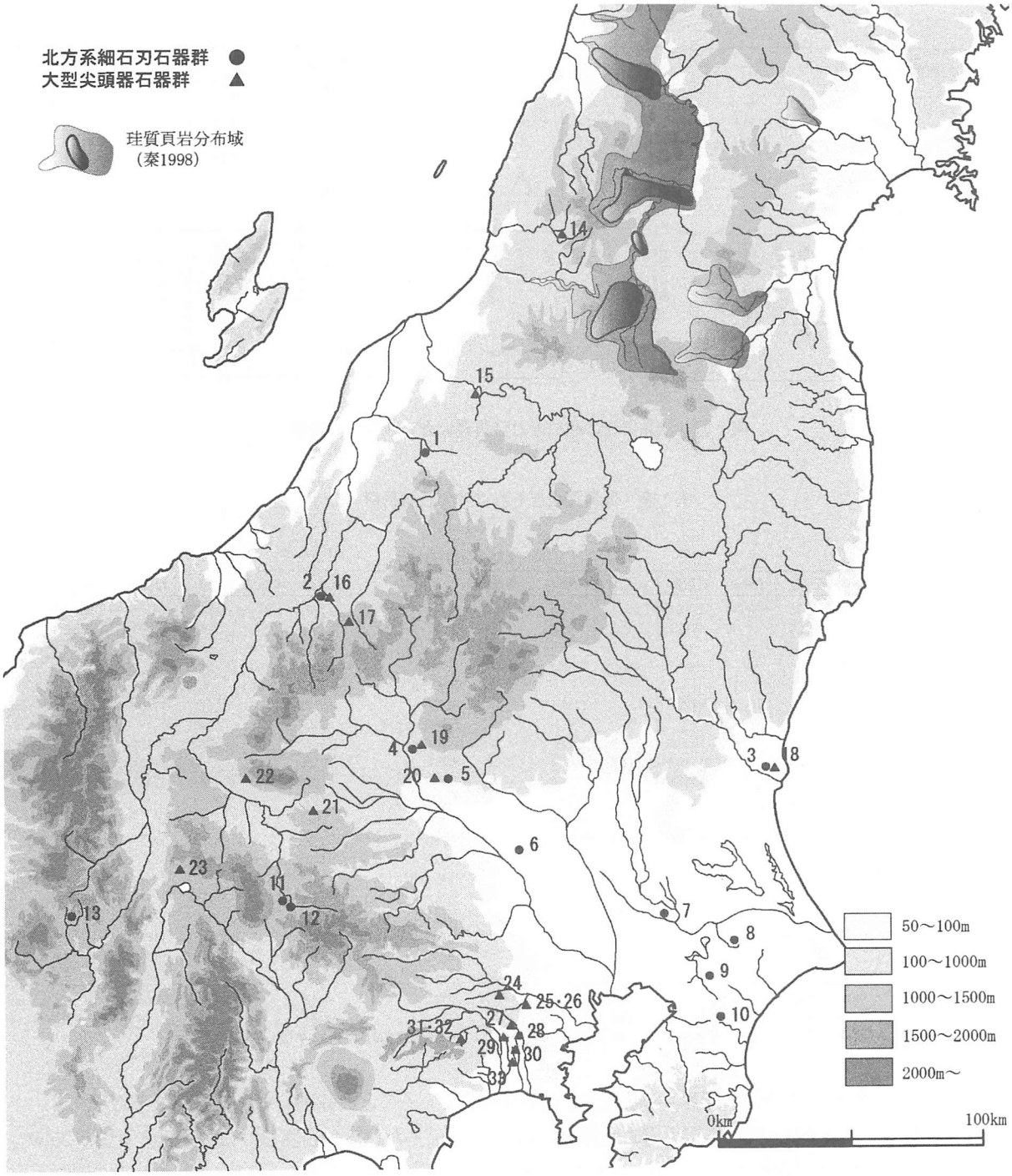
対象とする細石刃石器群は中部以東の北方系細石刃石器群とし，上記①，②の検討が報告書で可能であることを条件とした[1]．細石刃および細石刃核を共半する大型尖頭器石器群に関しては，石器群の性質から大型尖頭器石器群に含める．比較対象とした大型尖頭器石器群は，対象となる細石刃石器群と同一地理空間で確認された遺跡とした（第1図）．

1．石器石材組成

北方系細石刃石器群は，東北地方で採取できる珪質頁岩を単一的に利用することが指摘されている（佐藤 1992，永塚 1997，佐野 2002）．ここでは，珪質頁岩[2]の組成率と珪質頁岩分布域から各遺跡までの距離との関係[3]，石器石材種の数について検討する．

珪質頁岩とそれ以外の石器石材の組成率と珪質頁岩分布域から各遺跡までの距離との関係は，第2図のようになる．北方系細石刃石器群では，中土遺跡，正面中島遺跡(M)，後野遺跡B地点，上原遺跡，頭無遺跡，白草遺跡，柏原遺跡，東峰御幸畑西遺跡，木戸場遺跡、大網山田台遺跡群No.8地点，で珪質頁岩の組成率が70%以上である．これらの遺跡は，珪質頁岩の分布域からの距離が100kmから200kmを超えてなお珪質頁岩の組成率が高い．一方，対象遺跡の中で珪質頁岩の分布域からの距離が最も遠い中ッ原第5遺跡B地点，中ッ原第1遺跡G地点，柳又遺跡A地点は，珪質頁岩の組成率がいずれも5%未満である．このように，北方系細石刃石器群の中でも珪質頁岩の組成率に大きな違いみられる．ここでは，珪質頁岩の組成率が高い石器群をM1（中土遺跡，正面中島遺跡(M)，後野遺跡B地点，上原遺跡，頭無遺跡，白草遺跡，柏原遺跡，東峰御幸畑西遺跡，木戸場遺跡、大網山田台遺跡群No.8地点），珪質頁岩の組成率が低い石器群をM2（中ッ原第5遺跡B地点，中ッ原第1遺跡G地点，柳又遺跡A地点）と呼称する[4]．これに対し，大型尖頭器石器群は，100km未満の遺跡でも珪質頁岩の組成率が10~30%代で，100kmを超える遺跡では，後野遺跡A地区と唐沢B遺跡を除いてはほぼ0%である．剥片にいたる全ての石器石材の組成が確認できないために対象から外したが，珪質頁岩分布域にあたる八森遺跡桑園地区では，回収されたトゥールの大部分が珪質頁岩である（佐藤・大川 2003）．同じく珪質頁岩分布域にある月山沢J遺跡でも同様の傾向が確認できる（鈴木 1998）．よって，大型尖頭器石器群では，珪質頁岩分布域近郊においてのみ珪質頁岩の組成率が高く，そこから外れるごとに急激に珪質頁岩の組成率が落ちるものと考えられる．また，利用される石器石材は，黒曜石以外は主に近郊で採取することが可能である．

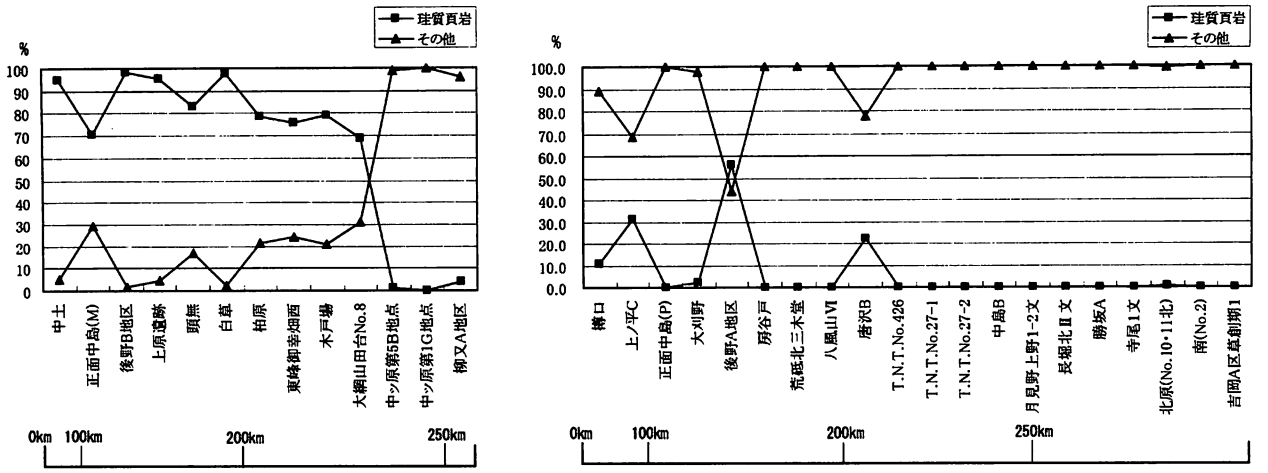
次に珪質頁岩とそれ以外の石器石材の組成を重量で検討する（第1表）．細石刃石器群のM1では，珪質頁岩の平均が696g，それ以外の石器石材平均が909g，M2は珪質頁岩の平均が69g，それ以外の石器石材の平均が12640gである．　M1に関しては，珪質頁岩の分布域からの距離が100kmや200kmを超える遺跡でも，総重量に大きな変化は見られない．また，各遺跡での珪質頁岩の総重量は極めて軽量である．珪質頁岩以外の石器石材は数では少ないが，重量では珪質頁岩と同程度の量が残されている．これら珪質頁岩以外の石器石材は，基本的に近郊で採取することが可能である．このことは，珪質頁岩を遠隔地まで持ち運ぶと同時に，近郊で採取できる珪質頁岩



北方系細石刃石器群；1. 中土遺跡，2. 正面中島遺跡(M)，3. 後野遺跡B地区，4. 箱田遺跡群上原遺跡，5. 頭無遺跡，6. 白草遺跡，7. 柏原遺跡，8. 東峰御幸畑西遺跡，9. 木戸場遺跡，10. 大網山田台遺跡群No.8地点，11. 中ッ原第5遺跡B地点，12. 中ッ原第1遺跡G地点，13. 柳又遺跡A地点，

大型尖頭器石器群；14. 樽口遺跡，15. 上ノ平遺跡C地点，16. 正面中島遺跡(P)，17. 大刈野遺跡，18. 後野遺跡A地区，19. 房谷戸遺跡，20. 荒砥北三木堂遺跡，21. 八風山VI遺跡，22. 唐沢遺跡B地点，23. 中島B遺跡，24. 多摩ニュータウン遺跡No.426，25・26. 多摩ニュータウン遺跡No.27第1・2地点，27. 月見野遺跡群上野遺跡第1地点第2文化層，28. 長堀北遺跡第II文化層，29. 勝坂遺跡A地点，30. 寺尾遺跡第1文化層，31. 宮ヶ瀬遺跡群北原遺(No.10・11北)遺跡，32. 宮ヶ瀬遺跡群南(No.2)遺跡，33. 吉岡遺跡群A区草創期1

第1図　対象遺跡の分布



第2図　珪質頁岩の組成率と珪質頁岩分布域からの距離

第1表　珪質頁岩とそれ以外の石器石材

北方系細石刃石器群

距離(km)	遺跡	総点数	ssh(n)	その他(n)	総重量	ssh(g)	その他(g)
80	中土	79	75	4	1952.8	1121.2	831.6
140	正面中島(M)	156	110	46	1682.8	719.0	963.8
150	後野B地区	746	733	13	-	-	-
166	上原遺跡	173	165	8	591.1	435.6	155.5
170	頭無	425	354	71	-	-	-
188	白草	1807	1769	38	2412.3	1154.8	1257.5
204	柏原	201	158	43	-	-	-
216	東峰御幸畑西	220	166	54	2025.6	498.7	1527.0
230	木戸場	100	79	21	1139.3	284.5	854.8
240	大網山田台No. 8	175	121	54	1431.6	660.3	771.3
240	中ッ原第5B	1054	11	1043	6143.0	23.3	6119.7
240	中ッ原第1G	1616	0	1616	3548.0	0.0	3548.0
294	柳又A地区	3774	141	3633	28436.0	183.3	28252.7
	平均(全体)	810	299	511	4936	508	4428
	M1平均	408	373	35	1605	696	909
	M2平均	2148	51	2097	12709	69	12640

大型尖頭器石器群

距離(km)	遺跡	総点数	ssh(n)	その他(n)	総重量	ssh(g)	その他(g)
18	樽口	1995	220	1775	4706.9	1637.6	3069.3
50	上ノ平C	922	292	630	11403.1	1995.4	9407.7
140	正面中島	1467	0	1467	24353.9	0.0	24353.9
144	大刈野	2678	68	2610	-	-	-
144	後野A地区	89	50	39	-	-	-
164	房谷戸	8173	0	8173	14502.7	0.0	14502.7
172	荒砥北三木堂	2107	0	2107	-	-	-
208	八風山VI	50646	0	48549	99125.8	0.0	99125.8
212	唐沢B	36	8	28	11004.7	574.4	10430.3
240	T.N.T.No.426	960	0	960	7465.3	0.0	7465.3
244	T.N.T.No.27-1	195	0	195	-	-	-
244	T.N.T.No.27-2	2084	0	2084	-	-	-
248	中島B	4698	0	4698	-	-	-
252	月見野上野1-2文	1733	0	1733	-	-	-
256	長堀北Ⅱ文	872	0	872	-	-	-
258	勝坂A	594	0	594	-	-	-
260	寺尾1文	1186	0	1186	-	-	-
260	北原(No.10・11北)	898	7	891	11509.3	0.9	11508.4
260	南(No.2)	172	0	172	14305.3	0.0	14305.3
264	吉岡A区草創期1	862	0	862	15660.1	0.0	15660.1
	平均	4118	32	3981	21404	421	20983
	平均＊	1484	21	1463	12490	319	11920

＊.八風山VI遺跡をのぞいた平均

以外の石器石材を粗割あるいは大型剥片の状態で一定量補給していることに起因しているものと考えられる．一方，大型尖頭器石器群に関しては，珪質頁岩の総重量の平均が421g，それ以外の石器石材の総重量の平均が20983gである．ただし，珪質頁岩の総重量は，そのほとんどが珪質頁岩の分布域から100km以内の距離にある遺跡の出土量が反映されたものである．100km以内にある遺跡での珪質頁岩の総重量が1000g以上であるのに対し，それよりも離れる遺跡では唐沢B遺跡で574gである他はいずれも1g未満である．大型尖頭器石器群では，珪質頁岩の分布域近郊では多量の珪質頁岩が残されているのに対し，100km以上離れた地ではほとんど残されていないことになる．逆に珪質頁岩以外の石器石材は，いずれの遺跡でも多量に残されている．利用石器石材が多量に採取できる地での石器製作に特化した活動痕跡を示す八風山VI遺跡を抜かした平均でも11920gと，M1の出土石器総重量の約7倍にあたる．したがって，大型尖頭器石器群は，M1に比べ多くの石器を遺跡に残していることがわかる．また，M2に関しては珪質頁岩以外の石器石材の出土量の平均が12640gと大型尖頭器石器群に近似した量の石器を残している．

最後に，石器石材種の数について検討する（第2表）．北方系細石刃石器群が平均5.9，大型尖頭器石器群は7.3

第2表　石器石材の種類

北方系細石刃石器群		大型尖頭器石器群	
遺跡	石器石材種	遺跡	石器石材種
中土	3	樽口	4
正面中島(M)	4	上ノ平C	12
後野B地区	2	正面中島(P)	8
上原遺跡	3	大刈野	6
頭無	7	後野A地区	5
白草	4	房谷戸	3
柏原	7	荒砥北三木堂	13
東峰御幸畑西	6	八風山VI	1
木戸場	4	唐沢B	11
大網山田台No. 8	8	T.N.T.No.426	8
中ッ原第5B	8	T.N.T.No.27-1	8
中ッ原第1G	5	T.N.T.No.27-2	11
柳又A地区	16	中島B	6
		月見野上野1-2文	7
		長堀北II文	7
		勝坂A	3
		寺尾1文	7
		北原(No.10・11北)	15
		南(No.2)	3
		吉岡A区草創期1	7
平均(全体)	5.9	平均	7.3
M1平均	4.8		
M2平均	9.7		

第3表　母岩単位での器種組成

	母岩	MB	MC(Co)+MCSp	tools	flakes	tools/(tools+flakes)
中土	M1	7	0	0	0	-
	M2	3	0	0	0	-
	M3	3	0	0	0	
	M4	0	0	4	0	1.000
正面中島(M)	101	9	1	24	5	0.828
	102	6	1	9	17	0.346
	103	1	0	1	2	0.333
	104	0	0	1	0	1.000
	105	0	0	1	0	1.000
	106	0	0	1	0	1.000
	107	2	0	8	4	0.667
	108	1	0	0	12	0.000
後野B地区	1	90	1	5	277	0.018
	2	38	2	1	168	0.006
	3	0	0	4	37	0.098
	4	37	1	1	67	0.015
	6	1	0	0	0	-
	7	0	0	0	2	0.000
	8	0	0	1	0	1.000
	9	0	1	0	0	-
	10	1	0	0	0	-
上原	1	14	0	0	24	0.000
	2	27	2	4	65	0.058
	3	0	0	1	5	0.167
東峰御幸畑西	A1	0	3	0	0	-
	A2	1	1	1	5	0.167
	A3	0	1	0	0	-
	A4	0	0	2	0	1.000
	A5	0	0	2	0	1.000
	A6	0	0	0	2	0.000
	A7	0	0	1	0	1.000
	A8	0	0	1	0	1.000
	A9	0	0	1	0	1.000
	A10	0	0	0	1	0.000
	Aa	1	0	6	2	0.750
	Ab	2	0	19	24	0.442
	Ac	5	1	16	16	0.500
	Ad	2	1	7	16	0.304
	Ae	4	0	2	8	0.200
	Af	0	0	3	11	0.214

と1.4種分大型尖頭器石器群が多いこととなる．ただし，北方系細石刃石器群のM1では平均4.8，M2では平均9.7となる．したがって，大型尖頭器石器群とM1との差は2.5となり，M1の利用石材種は大型尖頭器石器群に比べ若干少ない傾向にある．

以上の点から，北方系細石刃石器群と大型尖頭器石器群の石器石材組成の相対的特性は以下のとおりである．

北方系細石刃石器群

(1)　珪質頁岩の組成率が高い一群（M1）と，珪質頁岩の組成率が低い一群（M2）が存在する．

(2)　M1は，100kmから200kmを超えて出土点数の70%以上が珪質頁岩である．

(3)　M1は，珪質頁岩の総重量は100kmから200kmを超えても急激な減少はしない．

(4)　M1は，点数で組成の70%以上を占める珪質頁岩の総重量が平均696gと軽量である．

(5)　M1は，重量に関しては，珪質頁岩と同程度珪質頁岩以外の主に近郊で採取できる石器石材が残されている．

(6)　M1は，残された石器石材の種類が少ない．

(7)　M2は，多量の石器が残され，珪質頁岩以外の石器石材の総重量が大型尖頭器石器群のそれと近似している．

(8)　M2は，残された石器石材の種類が多い．

大型尖頭器石器群

(1)　珪質頁岩の出土点数は，珪質頁岩の分布域外では急激に少なくなり，100kmを超えてなお高い組成率

を示すことはない．

(2)　珪質頁岩の総重量も，点数と同様の傾向を示す．

(3)　珪質頁岩以外の石器石材は，主に近郊で採取できるものを多く利用する．

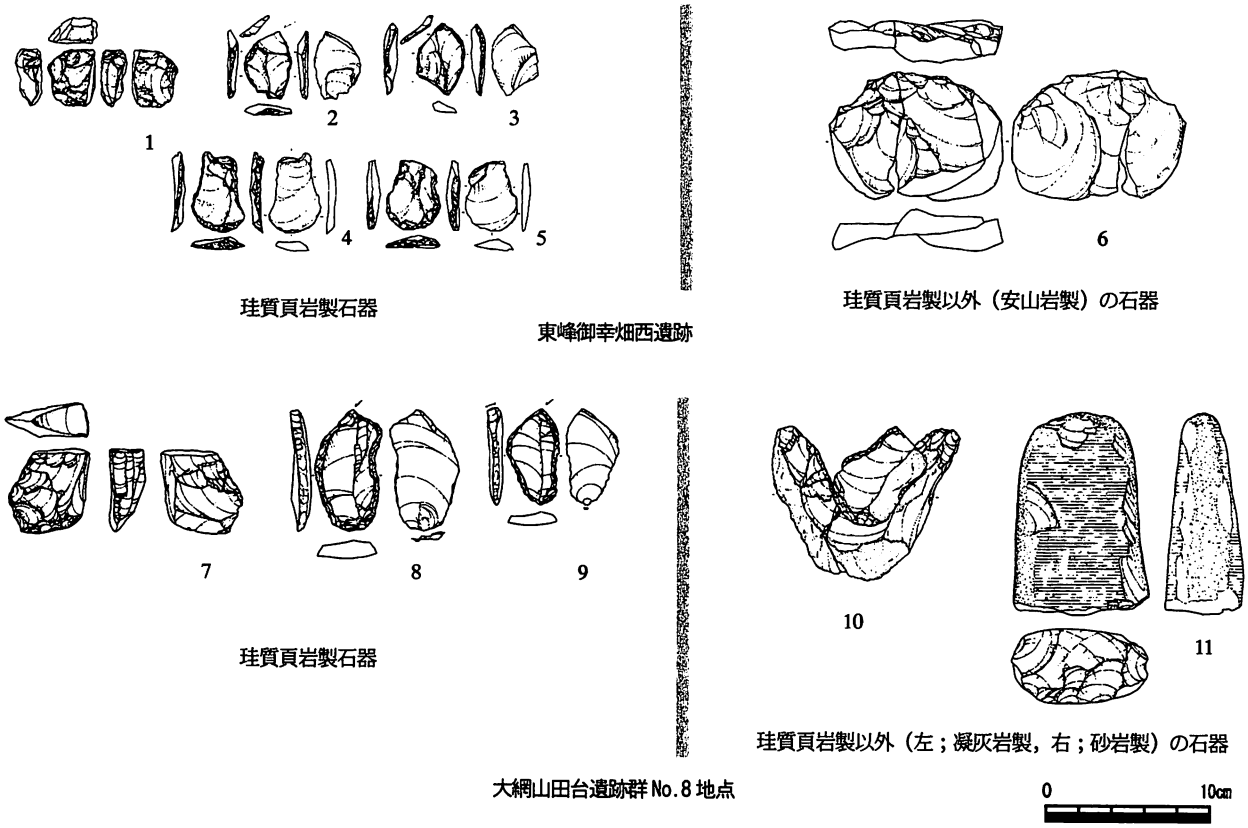
(4)　点数・重量共に多量の石器を残す．

(5)　残された石器石材の種類が多い．

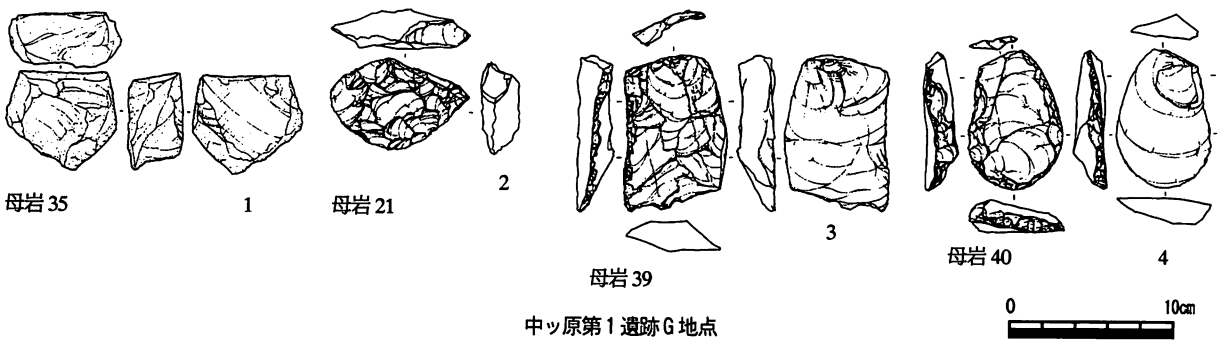
2．石器の搬入状態

北方系細石刃石器群および大型尖頭器石器群の，搬入状態を比較検討する．

M1 で母岩単位での器種組成は第 3 表のとおりである．正面中島遺跡（M）の母岩 108，後野遺跡 B 地区の「母



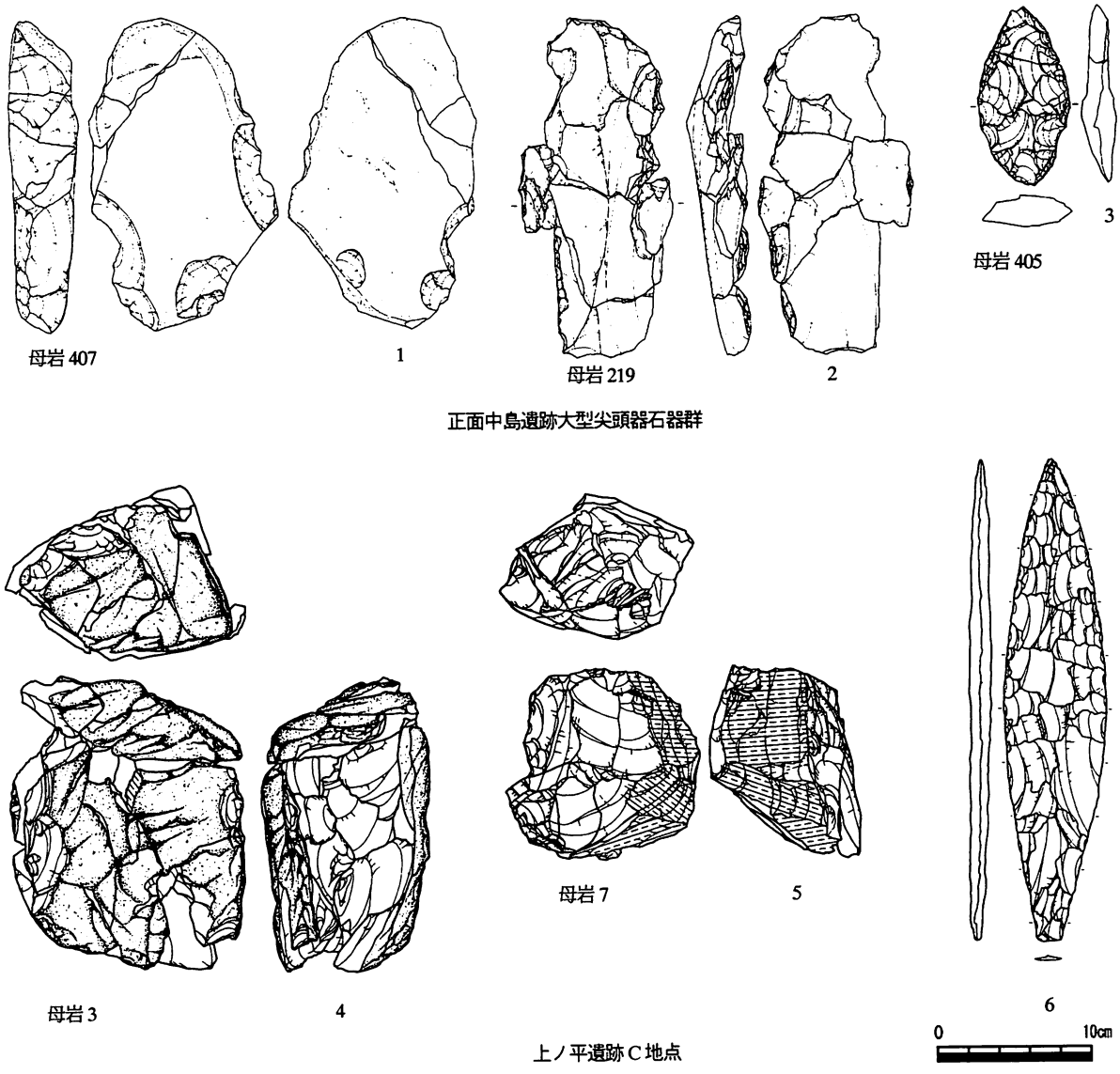
第 3 図　北方系細石刃石器群 M1



第 4 図　北方系細石刃石器群 M2

岩」[5] No.1・2・4以外では，いずれの母岩も剥片に対するトゥールの率が高く，トゥールの率が低い場合でも剥片自体の数は少ない[6]．したがって，遺跡内で素材剥片の製作を初期工程からおこなった可能性は低い．また，M1の珪質頁岩製の剥片は，剥片の礫面残存度が低い．正面中島遺跡の細石刃石器群では，背面の半分以上を礫面が覆う剥片の率は0%，半分未満を礫面が覆う剥片の率は8%，礫面を残さない剥片の率が92%である．他の遺跡に関しても，実見の限り礫面を残す剥片の率は低い．以上の点から，今回対象としたような珪質頁岩の分布域から50km以上離れた北方系細石刃石器群のM1に関しては，原石あるいは粗割直後の状態で搬入された可能性は低い．おそらく，細石刃核[7]，トゥール，素材剥片の状態で搬入したものと考えられる．ただし，そのセット関係や細石刃核およびトゥールのリダクション進行度は各遺跡で異なる．一方，珪質頁岩以外の石器石材に関しては，対照的な搬入状態にある．先述のとおり，これらの石器石材は近郊において採取可能で，点数は珪質頁岩に比べ極めて少ないが重量は同程度出土している．礫面を残す割合が高く，礫面を残した状態で搬入した石核に簡易な剥片剥離で素材剥片を獲得している場合と，既に素材剥片にした状態で搬入している場合とがある（第3図，6・10）．また，礫器等の簡単な加工を加えただけの石器を搬入している場合もある（第3図，11）．

したがって，北方系細石刃石器群のM1は，細石刃核，トゥール，素材剥片の状態で搬入する珪質頁岩と，礫



第5図　大型尖頭器石器群

面を残した石核あるいはそれから剥離された素材剥片，礫器，の状態で搬入する石器石材という大きく2つの搬入方法が採られていたものと考えられる（第3図）．前者は遠隔地から持ち運んだ珪質頁岩であり，後者は遺跡周辺で採取された石器石材である．

一方，M2 に関しては，多量な石器を残しかつ礫面を持つ剥片も少なくない．ただし，その割合は「母岩」単位によって異なる．中ッ原第1遺跡G地点では，「母岩」13，17，18，19，20，21，23，32は原石の状態で搬入され素材剥片製作や細石刃剥離にいたる石器製作が確認されている（第4図，2）．一方，「母岩」35は原石が加工されることなく残され（第4図，1），「母岩」4，14，30，36，37，39はトゥールの状態で搬入されている（第4図，3・4）．同様の傾向が，中ッ原第5遺跡B地点，柳又遺跡A地点でも確認されている（堤1991，笠井1997，後藤・岩越・石川・栗田・小久保・阿部 1997）．したがって，搬入状態は「母岩」単位で大きく異なり，様々な状態で搬入されたものと考えられる．

大型尖頭器石器群は，M2 と同様の傾向が見出される．正面中島遺跡の大型尖頭器石器群では，母岩 407 は原石あるいは礫面を大きく残した石核状態で，母岩219は礫面を除去した状態で，母岩405はトゥールの状態で搬入されている（第5図，1~3）．上ノ平遺跡C地点でも，母岩1，3，4は原石かそれに準ずる状態で，母岩7は石核の状態で，尖頭器3点は製品の状態で搬入されている（第5図，4~6）．このように母岩によって搬入状態が異なる状況は，他の大型尖頭器石器群の遺跡でも確認されている（仲田2001）．

以上の点から，北方系細石刃石器群と大型尖頭器石器群の搬入状態の相対的特性は以下のとおりである．

北方系細石刃石器群

(1)　M1 では，珪質頁岩は細石刃核，トゥール，素材剥片の状態で搬入され，それ以外の近郊で採取可能な石器石材に関しては礫面を残した石核あるいはそれから剥離された素材剥片，または礫器が搬入されている．ただし，細石刃核，トゥールのリダクションの進行度は各遺跡で異なる．

(2)　M2 では，母岩によって搬入状態が異なり，様々な段階で搬入されている．

大型尖頭器石器群

(1)　母岩によって搬入状態が異なり，様々な段階で搬入されている．

3．考察

石器石材組成と石器の搬入状態の検討から，北方系細石刃石器群の M1，M2，そして大型尖頭器石器群に対して，以下のようにその特性をまとめることができる[8]．

① 北方系細石刃石器群 M1；100km から 200km を超える遠隔地まで珪質頁岩を主要な石器素材として利用する．基本的に細石刃核，トゥール，素材剥片の状態で搬入し，その総重量は極めて軽量である．遺跡周辺で採取可能な石器石材を礫面を残した石核あるいは素材剥片，礫器の状態で僅かに搬入するが，全体として利用する石器石材は珪質頁岩が中心で，石器石材の種類は少ない．

② 北方系細石刃石器群 M2；珪質頁岩をほとんど利用せず，それ以外の石器石材を多量に利用する．搬入状態は，母岩単位で異なり，様々な状態で搬入されている．

③ 大型尖頭器石器群；100km から 200km を超える遠隔地まで珪質頁岩を主要な石器素材として利用することはない．搬入状態は，母岩単位で異なり，様々な状態で搬入されている．全体として多量の石器を残し，石器石材の種類が多い．

以上の特性から，それを残した集団の移動形態がいかなる性格のものであったかを考察する．ただし，石器石材の採取にあたっては直接採取であったことを前提として議論を展開する．また，残された石器資料のみに基づいた考察であり，石器資料が介在しない活動の影響は考慮されていない．

まず，M1 に関しては，東北地方に分布する珪質頁岩を遠隔地まで持ち運んでいることから，長距離移動をしていたことを指摘することができる．利用する石器石材の種類が少なく，珪質頁岩以外には遺跡周辺の石器石材に簡単な加工を施したものが僅かに残されるのみである．したがって，遺跡周辺への開発に多く時間を費やした

痕跡は見られない．遺跡周辺には短期的な滞在であった可能性が高いものと考える．よって，M1 を残した集団に関しては，短期間で長距離を移動する移動形態であった可能性がより高い．M1 で確認された軽量な石器装備は運搬効率に優れており（藤本 1997），既に指摘されてきている効率の良い石器素材供給方法（山田・白石 1990，佐藤 1992，加藤 1996，永塚 1997，佐野 2002）は，石器石材の採取を目的とした周辺地域への開発の必要性を軽減する上で有効であろう[9]．

大型尖頭器石器群は，珪質頁岩が遠隔地まで利用されることはない．しかし，樽口遺跡，多摩ニュータウン No.426 遺跡，多摩ニュータウン No.27 遺跡第 2 地点，長堀北遺跡第Ⅱ文化層，宮ヶ瀬遺跡群北原(No.10・11 北)遺跡は，黒曜石が利用されている．これらの遺跡は，樽口遺跡以外はいずれも寡少な出土量ではあるが，遠隔地の黒曜石が数10点から100点前後出土している．したがって，長距離を移動していたことを指摘することができる．一方，利用する石器石材種の数が多く，多量な石器が遺跡に残されている．また，その搬入状態は母岩単位で異なり，様々な状態で搬入されている．この点に関しては，遺跡周辺の数地点で石器石材を補給しながら移動を繰り返した，あるいは遺跡を拠点に数回に渡って石器石材の採取をおこない，その石器石材に応じて異なる状態で持ち帰った，といういずれかに起因しているものと考える．いずれにせよ，遺跡周辺への開発に比較的多くの時間が費やされたことが予想される．よって，大型尖頭器石器群を残した集団に関しては，長距離は移動するものの，M1 に比べ遺跡周辺に長期間滞在する移動形態であった可能性がより高い．

M2 に関しては，石器群の特性としては大型尖頭器石器群と同様である．ただし，今回対象となった遺跡がわずか 3 遺跡であるため，移動形態について考察はもちろん，M1 や大型尖頭器石器群との関係について十分な検討はできない[10]．M1 と同一段階に残されたと解釈した場合，M1 の集団が，珪質頁岩の分布域から大きく離れた他の石器石材が豊富な地域で，異なる石器石材に応じた結果 M2 の遺跡が残された，あるいは M1 とは異なる移動形態を採る集団によって M2 が残された，と解釈されることになる．一方，大型尖頭器石器群と同一段階に残されたと解釈した場合，M1 の段階の後に，製作する石器すなわち細石刃か大型尖頭器かの違いに関わらず，ここで示した大型尖頭器石器群の移動形態が採られるようになったと解釈されることになる．

結論

北方系細石刃石器群の M1 は，大型尖頭器石器群との比較検討によって導き出された石器群の相対的特性に基づき，長距離を比較的短期間で移動する移動形態であったものと解釈した．それに対し，大型尖頭器石器群は，長距離移動はするもののより長期間遺跡周辺に滞在する移動形態であったものと解釈した．

謝辞

小野　昭教授，山岡拓也氏には草稿を読んでいただき，有益な指摘をいただいた。工藤雄一郎，高瀬克範，長沼正樹，橋詰　潤，山田昌久の各氏には議論の中で貴重な意見をいただいている．

脚注

1) 高岡大山遺跡と木戸先遺跡は，細石刃石器群を他の石器群から分離する過程で，珪質頁岩製であることをその条件としている．したがって，①，②の検討が報告書で可能ではあるが，以下に展開する石器石材組成の議論には不適当であるため，ここでは検討対象からはずした．なお，正面中島遺跡の細石刃石器群を正面中島遺跡（M），大型尖頭器石器群を正面中島遺跡（P），多摩ニュータウン遺跡を T.N.T.遺跡と略称する．また，八風山Ⅵ遺跡は A・B・C 地点の石槍石器群，樽口遺跡は A-MH・A-MS 文化層を対象としている．

2) 報告書では頁岩と分類されている場合でも，東北地方に分布するチョコレート色の頁岩である場合は珪質頁岩とした．

3) 実際にどの地点で珪質頁岩を採取したかはわからないため，正確な距離は把握し得ない．ここでは便宜上，秦が報告した珪質頁岩分布域（秦 1998）から遺跡までの最短距離を計測した．

4) M1は佐藤の指摘する3a，白石の指摘するIIA･Bにあたり，M2は佐藤の指摘する3b，白石の指摘するIICに相当する（佐藤1992，白石1993）

5) ここでは，報告書で「個体」と報告されている場合でも，石器石材の肌理，色調，含有物等の均質性からグルーピングされた接合関係のない一群はすべて「母岩」と呼ぶこととする．

6) 白草遺跡のように掘り上げた土を篩いにかけた場合，いずれの遺跡でも剥片の率が高くなるものと考えられる．しかし，そこで回収される剥片はいずれも10mm^{2}未満の細片が大半を占める．したがって，全ての遺跡で篩いを使用した場合でも，原石や粗割状態で搬入された可能性は低いというここでの結論に支障はきたさない．

7) スポール削出以前の両面調整石器の状態を含む．

8) 対象とした遺跡はそれぞれ調査面積が異なるため，回収された遺物の規模もその制約を受けている．しかし，調査面積の平均は，M1が大型尖頭器石器群の約2倍であり，M2はいずれも学術調査であるため極めて小さい．したがって，調査面積の差異は，石器群の規模が小さく石器石材の種類が少ないというここでのM1に対する結論には支障をきたさない．

9) このような機能論的解釈に対する問題点が指摘されている(長沼2002)．軽量な石器装備や効率の良い石器製作が，短期的長距離移動するためあるいはその結果として選択された，という唯一無二の因果関係の主張には問題があろう．ここでは，短期的長距離移動という解釈を設定した場合，軽量な石器装備や効率の良い石器製作はそれを遂行する上でも有効でもあり，両者は有効に機能する関係にあることを指摘するものである．

10) この結果のみで，M2はM1よりも編年上後段に位置付けられ，大型尖頭器石器群と同時期になると結論することはできない．ただし，前論（佐野 2002）では，大型尖頭器が共伴する細石刃石器群が，As-YP（13,000~14,000yrB.P.，辻 2000）との関係からM1よりも後段に位置付けられ，ここでいうM2は大型尖頭器が共伴する細石刃石器群と同質かより大型尖頭器石器群の石器製作上の特性に近いこと，さらに荒屋型彫刻刀形石器の組成比がM1から大型尖頭器が共伴する細石刃石器群やM2にかけて減少することから，M2に関してもM1の後段に位置付けた．しかし，M2と大型尖頭器石器群との石器製作上の近似性が，石器石材に応じた変異の結果であり，M1とM2は同一の段階に残されたとの解釈が可能であることに変わりはない．よって，ここでは石器群の編年的位置付けは保留とした．

＜引用・参考文献＞

相田　薫編 1986『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市教育委員会

青木　豊・内川隆志・高橋真実編 1993『勝坂遺跡第45次調査』相模原市教育委員会

岩崎秦一 1992『荒砥北三木堂遺跡II』(財)群馬県埋蔵文化財センター

(財)印旛郡市文化財センター編 1993『高岡遺跡群II』

後野遺跡調査団編 1976『後野遺跡ー関東ローム層における石器と土器の文化ー』勝田市教育委員会

大竹憲昭・原　明芳・百瀬長秀 1987「中島B遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』(財)長野県埋蔵文化財センター，pp.352-436

笠井洋祐 1997「第Ⅴ文化層　石器」『柳又遺跡A地点　第7次調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室，pp.34-39

加藤博文 1996「モービル・トゥールとしての両面調整石器ー縄文化に向かう技術組織の変動ー」『考古学雑渉ー西野元先生退官記念論文集ー』，pp.26-44

川口　潤編 1993『白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

國學院大學文学部考古学研究室編 1997『柳又遺跡A地点　第7次調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室

後藤希久子・岩越宏典・石川季彦・栗田一生・小久保拓也・阿部奈緒美 1997「第Ⅴ文化層　母岩別資料と剥片剥離」『柳又遺跡A地点　第7次調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室，pp.52-96

桜井美枝 2001「箱田遺跡群補遺　旧石器時代」『銭神遺跡・箱田遺跡群補遺』北橘村教育委員会，pp.27-55

佐藤貞弘・大川貴弘編 2003『八森遺跡　先史編』八幡町教育委員会

佐藤宏之 1992「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学　大学院紀要』第29号，pp.55-83

佐藤宏之編 1989『多摩ニュータウン遺跡　昭和62年度』東京都埋蔵文化財センター

佐藤雅一編 1988『大刈野遺跡』湯沢町教育委員会
佐藤雅一・佐野勝宏編 2002『正面中島遺跡』津南町教育委員会
佐野勝宏 2002「北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態」『考古学研究』第 49 巻第 1 号，pp.38-58
沢田　敦編 1996『磐越自動車道関係発掘調査報告書　上ノ平遺跡 C 地点』(財)新潟県埋蔵文化財センター
白石典之 1993「北東アジアの細石刃石器群－技術より見た時間・空間的変遷とその背景－」『筑波大学先史学・考古学研究』第 4 号，pp.1-29
鈴木次郎・白石浩之 1980『寺尾遺跡』神奈川県教育委員会
鈴木　隆 1998「月山沢 J 遺跡出土石器群の分析」『山形考古』第 6 巻第 2 号，pp.10-42
須藤隆司編 1999『八風山遺跡群』佐久市教育委員会
砂田佳弘 1996「縄文時代初頭第 1 文化層」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ南(No.2)遺跡・馬場(No.5)遺跡』(財)かながわ考古学財団，pp.349-369
砂田佳弘・三瓶裕司編 1998『吉岡遺跡群Ⅴ』(財)かながわ考古学財団
滝沢　亮・小池　聡 1991『長堀北遺跡』大和市教育委員会
舘野　孝編 1998『多摩ニュータウン遺跡－No.27 遺跡－』東京都埋蔵文化財センター
谷藤保彦編 1992『房谷戸遺跡Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財センター
田村　隆ほか編 1994『大網山田台遺跡群Ⅰ－旧石器編－』
田村　隆 1998「移行の理論－石器群のデザイン分析と文化＝社会理論－」『先史学考古学論集』第 7 集，pp.1-48
(財)千葉県文化財センター編 1987『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』
立木宏明編 1996『樽口遺跡』 朝日村教育委員会
辻誠一郎 2000「テフラの放射性炭素年代」『日本先史時代の ^{14}C 年代』，pp.41-58
堤　隆 1991「個体別資料」『中ッ原第 5 遺跡 B 地点の研究』，pp.86-92
堤　隆 1997「個体別資料」『中ッ原第 1 遺跡 G 地点の研究』Ⅱ，pp.77-92
仲田大人 2001「南関東における縄文時代草創期前半の居住形態－最適化モデルによる予備的検討－」『先史考古学論集』第 10 集，pp.73-116
永塚俊司 1997「荒屋系細石刃石器群における一つの定点」『人間・遺跡・遺物』3，pp.90-117
永塚俊司 2000「旧石器時代」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ－東峰御幸畑西遺跡（空港 No.61 遺跡）－』(財)千葉県文化財センター，pp.23-373
長沼正樹 2002「両面調整石器群研究序説－更新世終末期石器群理解の枠組み構築にむけて－」『考古学研究』第 49 巻第 3 号，pp.65-84
新潟石器研究会編 1996「新潟県中土遺跡出土遺物の再検討」『長岡県立科学博物館研究報告』第 31 号，pp.123-158
秦　昭繁 1998「珪質頁岩とその分布」『考古学ジャーナル』432，pp.31-35
菱沼良幸編 1999『東原遺跡・前畑遺跡・柏原遺跡』(財)茨城県教育財団
藤本　強 1997「細石器(Ⅵ)－細石器の果たした役割－」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 15 号，pp.137-156
前原　豊・関根吉晴 1988「柳久保遺跡群頭無遺跡」『第２回　東北日本の旧石器文化を語る会』，pp.33-37
森嶋　稔・笹沢　浩・川上　元・矢口忠良・矢島宏雄・佐藤信之・堤　隆編 1998『唐沢 B 遺跡』千曲川水系古代文化研究所
八ヶ岳旧石器研究グループ編 1991『中ッ原第 5 遺跡 B 地点の研究』
八ヶ岳旧石器研究グループ編 1995『中ッ原第 1 遺跡 G 地点の研究』Ⅰ
八ヶ岳旧石器研究グループ編 1996『中ッ原第 1 遺跡 G 地点の研究』Ⅱ
山田昌久・白石典之 1990「幌加沢遠間地点石器製作技術系の摘出と『細石刃文化期』石器製作技術大系への構図」『湧別川－遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録－』 北海道紋別郡遠軽町教育委員会，pp.215-224
吉田政行 1998「縄文時代初頭第 1 文化層」『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅤ北原(No.10・11 北)遺跡』(財)かながわ考古学財団，pp.255-333

北海道の更新世末における石材消費形態からみた遺跡間変異の検討

― 北海道東部、十勝平野の石器群を検討対象とした予察 ―

北海道大学埋蔵文化財調査室
髙倉　純

Ⅰ．はじめに

本稿では、北海道東部、十勝平野における更新世末の石器群を対象として、石材消費形態の検討をおこなう。石材消費形態の検討を通じて遺跡間変異に関する若干の考察をおこない、移動・居住形態の復元に関する見通しを示していくことにする。

最初に、本研究における議論の方向性について、北海道の後期旧石器時代石器群研究の脈絡のなかに位置づけてみたい。

北海道の後期旧石器時代石器群を対象とした比較・解釈研究において、これまで採用されてきた議論の操作過程上の枠組みを、個々の研究事例での部分的脱落・非明示にとらわれず単純化して把握するならば、以下のようになる。1）石器群を組成・製作工程の特徴にもとづいて復元し、2）「類型」設定を経たのち、3）層位的出土事例、技術的特徴の変化方向の推定、周辺地域の研究成果や自然科学的年代測定法（放射性炭素年代測定法や黒曜石水和層年代測定法など）の計測結果などに依拠することで、4）類型間に反映される石器群の差異を時間差に還元し、それらを時系列に配置（段階編年）する。

こうした議論の枠組みの一方で、道内各地での調査研究の進展、とりわけ1960～70年代にかけて集中的に実施された常呂川や湧別川流域などでの調査研究によって、トゥールや石器製作工程が石器群によって複雑な組み合わさりを示す実態が明らかにされてきた。組成・製作工程上の諸特徴によって設定される石器群の「類型」を、単線的に縦並び（「単線的段階編年」）するのではなく、複線的に配置（「複線的段階編年」）する一部の段階編年案は、そうした複雑な組み合わせを評価しようとする現れの一例でもあった。ただし、何を明らかにするために「類型」を設定するのか、といった問いに対しては充分な吟味がなされることなく、1）石器群を時系列に配置することを議論の目標にすえる、2）「類型」は、時系列上の差異を反映するものとして設定されるのがより望ましい、3）「段階」どうしは時間的に重複することはない、といった考え方が、明示されない議論の前提として温存されてきた可能性が指摘できる。

上述のような議論の枠組みに対する批判的見解が、ときに明示的、あるいは暗示的に提示されることはあった（加藤・桑原1969、加藤1970など）。しかし、異なる観点からの具体的なアプローチが、本格的に議論・展開されてきたとはいいがたい。そうしたなかで、加藤他（1971）などに認められる、石器群における石材消費形態とその比較に対する着目は、石器群の位置づけとその相互間の関係性を把握していくうえで、重要な意義をもつものといえる。石材消費形態の検討とは、より包括的かつ一般的にいえば、ライフ・ヒストリーの観点から、遺跡内に1）どこで採集された、どのような石器石材が、2）いかなる石器製作工程上の段階として持ち込まれ、3）そこでどのような石器製作作業がおこなわれ、4）どのような石器が遺跡外に搬出されていったのかについて、結果的に残された石器群の構成から推論していくこと、である[1)]。

石材消費形態とその比較に対する着目の意義は、その後の研究の展開も含めて最大限に評価するならば、1-a）所与の一石器群を、ライフ・ヒストリーという観点から記載・検討しようとする試みが提示されたこと、1-b）複数の石器群間をライフ・ヒストリーという視点から比較・検討し、その関係性を解釈することを可能にしたこと、2）所与の石器群における石器製作工程とその石器群間での変異について、製作工程とは独立した観点（＝石器石材とその消費形態）から解釈することを可能にしたこと、に集約できる。方法論的にいって、石材消費形態の

検討から移動・居住形態の復元をおこなうためには、その間になお欠かせない研究のステップがあることは確かである（髙倉 1999）。しかしながら、上記した諸点からみて、石材消費形態は、石器群間における形態的変異とその形成過程を理解していくうえで、最も基礎的な検討項目の一つといってよかろう。

北海道での石材消費形態に関する先行研究（木村 1995、島田・山科 1998、長沼他編 2002 など）の多くは、白滝遺跡群などに代表される、黒曜石の産出地近傍の特定遺跡ないしは遺跡群から検出された石器群の検討を主眼としたものであった。主要石器石材の産出地近傍から同一水系内でも距離が相対的に離れた区域、もしくは別の流域に所在している石器群に関しては、特定の資料を対象とした限定的な考察がなされているにすぎない。結果的に、「原産地」状況と対比させるかたちで、それらの区域・地域においては、典型的な「消費地」状況が成立していることが描き出されることとなった。

1980 年代以降、本稿で検討対象とする十勝平野、あるいは上川盆地や石狩低地帯などでは、更新世末に属する石器群が複数発見・調査され、報告されてきた。これらの地域で蓄積された成果を再度検討し、石材消費形態の観点から整理しておくことは、より広範な地理的範囲を移動していたと想定される当該期の移動・居住形態を考えていくうえで、主要石器石材の産出地近傍の遺跡群を対象とした研究とともに、きわめて重要な意味をもつことであろう。「原産地」—「消費地」という一般的な傾向性をマクロなレヴェルから抽出するだけでなく、よりローカルなレヴェルから石材消費形態を検討してみることも必要である。まず手始めに、十勝平野の石器群を検討することで、こうした課題に沿った研究の第一報を提示していくことにしたい。

なお紙数の制約から、細かな定量的分析データを提示し検討することはできないため、定性的な記述を中心に議論を進めていきたい。また、石器群間での石器製作技術の比較に関しても、なお研究の途上にある。そのため、推論をより具体化し検証する作業は今後の課題に委ね、ここでの議論では、大まかな見通しを示すことに焦点をあわせたい。

Ⅱ．対象設定

本章では、第一に検討対象とする資料体を措定し、第二に検討方法ならびに記述にあたって必要とする諸概念について説明を加えておく。

筆者がこれまで継続的に資料観察を実施してきた北海道東・北部のなかで、比較的近年、域内の多くの遺跡において発掘調査が実施され、複数の石器群における石材消費形態の把握・比較が可能な地域（一定の地理的単位）として、ここではとくに十勝平野を取り上げる。他地域の石器群に関しては、対比・位置づけの項目において必要な場合にのみ言及するにとどめ、主たる検討対象地域からは外すこととした。詳しい検討は別機会に譲る。

検討対象とする石器群は、上記の検討対象地域内に分布する、更新世末（晩氷期にほぼ相当するとみなす）に帰属するものである。当該期に属すると予測される石器群のなかで、同一層準から採取された試料を用いて放射性炭素年代測定法による年代測定が実施されている遺跡には、本稿で検討対象とする別府１遺跡（北沢・笹島編 2001、スポットと空間的・垂直的に重なる炭化物集中箇所から採取された二つの炭化物を試料として、AMS で 13,460±70yBP と 3,730±40yBP という未較正の計測値が得られている）、関連資料として取り上げる川西３遺跡スポット 17（北沢編 2000、スポット内の礫群に伴う炭化物を試料として、AMS で 13,040±40yBP という未較正の計測値が得られている）がある。ここでは、石器群が有する組成・製作工程上の諸特徴から、対象石器群の措定をおこなっていく。

十勝平野以外の北海道内諸地域での石器群の組成・製作工程上の諸特徴および放射性炭素年代測定値を勘案すれば[2]、更新世末に帰属する石器群は、基本的に以下のような特徴を有している。第一に、忍路子型や広郷型細石刃核を伴う細石刃剥離技術が認められるもの[3]、第二に、有茎尖頭器や石斧、中・小形の舟底形石器の組成およびその製作の痕跡を示す特徴的な剥片が認められるもの、第三に、石刃の頭部に特徴的な石核調整痕（打面から背面上縁にかけて敲打もしくは磨きによる調整痕）が認められるもの、である。これらの諸特徴が有効な指標となることについては、現時点での「再現性」という「経験的な妥当性」に依拠している。なお、とくに前二点

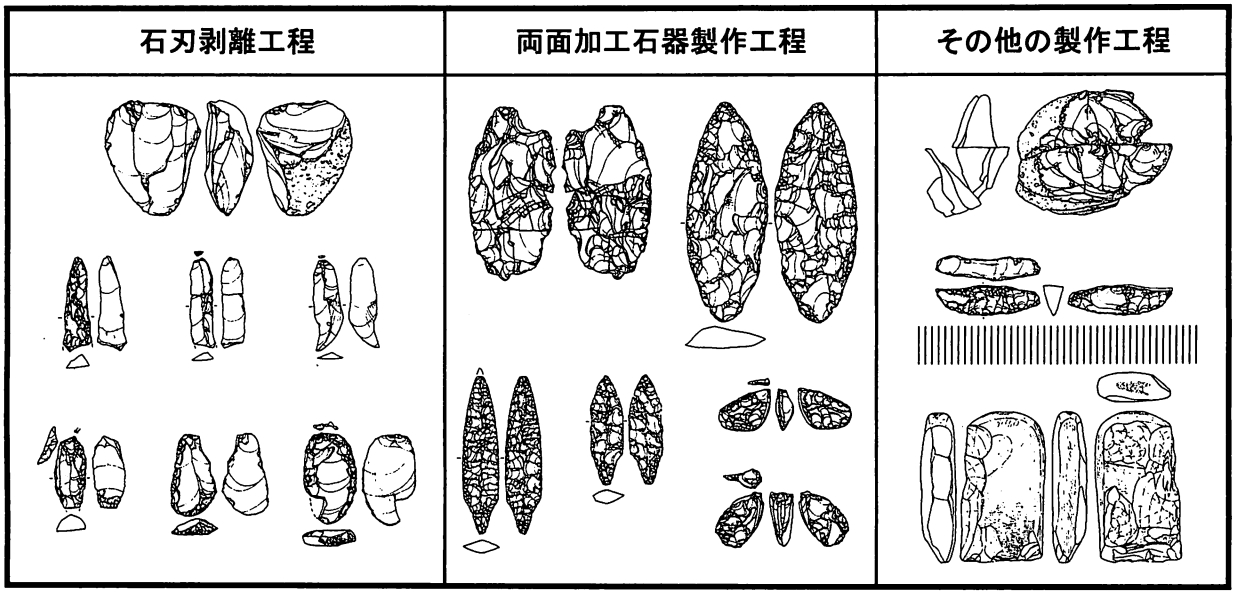


図１　石器群を構成する石器製作工程（石器のスケール 25%）

が更新世末への時間的帰属を示す大まかな指標となることについては、すでに山原(1998)、寺崎・山原(1999)、髙倉・中沢（1999)、髙倉（2000）などにおいて指摘されている。

注意を要するのは、細石刃および細石刃核の石器群への組成をもって「細石刃石器群」の認定条件とするならば、ここでの検討対象には、細石刃石器群だけでなく、従来「有茎尖頭器石器群」ないしは「有舌尖頭器石器群」と呼称されてきた石器群やそれ以外のものも含まれることである。「細石刃石器群」といわゆる「有茎尖頭器石器群」との関係については、すでにいくつかの議論がある（千葉 1985、杉浦 1994、山原 1998、横山 1998、髙倉・中沢 1999、長沼 2003 など)。ここで改めてそこでの論点について取り上げることはしない。「段階編年論」とは別の観点から議論を進めなければならないと考える限り、いわゆる「細石刃石器群」だけに対象を限定させて検討を進めていくことはできないであろう[4)]。

次に検討方法について述べていく。

本稿で検討対象とする石器群には、原石からトゥールの製作・再生に至るまでの過程において、相互に区分できるいくつかの線条的な「製作工程」（＝剥離相互の手順）の系列が認められる。石材消費形態の検討にあたっては、各石器群での諸製作工程の有無および工程ごとの作業内容の把握をおこないたい。製作工程としてここでは、「石刃剥離工程」、「両面加工石器製作工程」、「その他の製作工程」を設定する（図１)。製作工程の相互は、例外はあるが、基本的には異なる系列をなしている（白石 1993、山原編 2002)。

当該石器群においては、多くの石器（彫器、掻器、削器、揉錐器などに加えて、広郷型細石刃核も含む）の素材が「石刃剥離工程」によって作出されている。一方、多くの石器群においては、「両面加工石器製作工程」の存在も確認できる。両面加工石器製作工程は、原石そのもの、あるいは原石から剥離された分厚い剥片を素材として、面的な加工が施されることで器体の整形がなされたのち、楕円形・木葉形・柳葉形・半月形の両面加工石器、有茎尖頭器、忍路子型細石刃核が作出されていく系列である。この製作工程で生じる剥片は、二次加工がほとんど施されることなく放棄されており、それらが剥片石器の素材供給において一定の役割をはたしていた可能性は、それほど認められない。製作工程として設定できるもののなかには、原石の段階から相互に区分可能な場合があるが、なかには石器製作の進行過程で、ある系から別の系に素材が供給される場合もある。両面加工石器の素材の一部に石刃剥離工程から供給される場合があるが、これはそうした例に該当するものといえる。

「その他の製作工程」としては、石斧、舟底形石器などの製作に伴う系列があげられる。石斧の製作に伴う製作工程は、石刃剥離工程や両面加工石器製作工程とは原石の段階から異なっている場合が多い。舟底形石器の製

作に伴う製作工程には、岩屑・転礫からフリー・フレイキングによって剥離された分厚い不定形剥片を素材としているものの他に、転礫を利用して、両極打撃法によって剥離された分割剥片が素材となっている場合もしばしば観察される。石刃核からの「転用」によって舟底形石器が作出される場合もあるが、基本的には石刃剥離工程と舟底形石器製作工程は、別個の系列をなしていたと考えられる（山原 2002c）。

現段階では、母岩単位で作業内容の把握をおこなっていくことは、僅かな事例を除き至難である。そのため、各工程と石器石材、石質との関係に注意しながら、工程ごとの傾向性を把握するというレヴェルで、各石器群の石材消費形態に関する検討をおこなっていくことにしたい。

III. 石器群の検討

III—1. 対象石器群

十勝平野は、北海道の東部に位置し、西を日高山脈、北を石狩山地、東を阿寒山地～白糠丘陵、南は豊頃丘陵をへだてて太平洋に面している。十勝平野内を流下する主要河川に十勝川、音更川、札内川があるが、これらの河川は日高山脈や大雪山地を水源としている。これらの河川は、十勝平野の中心部にあたる帯広市付近で合流する。平野内には、更新世になって形成された段丘や台地が面的に広がっている（平川・小野 1974、十勝団体研究会編 1978）。

十勝平野で検出されている更新世末に帰属すると考えられる石器群のなかから、第一に、ここで実施しようとする比較研究のレヴェルに相応した資料の一括性が確認できること[5]、第二に、資料そのものを筆者自身が実見可能であったか、もしくはすでに基礎的なデータが報告されていること、に留意して資料体とする石器群を選定した。ここで検討対象とするのは、居辺 17 遺跡（大矢編 2001）、稲田 1 遺跡第 1 地点（北沢・山原編 1997）、大空遺跡（北沢編 1993）、別府 1 遺跡スポット 1（北沢・笹島編 2001）、南町 1 遺跡スポット 1（北沢・山原編 1995、山原 2002c）、落合遺跡（北沢編 1992、山原編 1999）、上似平遺跡スポット 2～5（佐藤・北沢編 1987）、札内N遺跡スポット 4～10（大矢編 2000）から出土した石器群である[6]。図 2 に遺跡の所在を示す。

遺跡の多くは、十勝川の支流である中小河川沿いの段丘上に立地している。石器群は、恵庭 a 降下火山灰（En-a、16～19kyBP）より上位の、いわゆるローム層から検出されている。比較的近年に行政調査された遺跡が多いため、調査面積も比較的広く、石器群の空間的広がりがおおよそ把握できる事例もある。また調査方法、遺物の取り上げ・記録化に関しても、石器群どうしで著しい不均衡はないと考えてよい。微細遺物の有無およびその数量にもとづいた石器群の解釈に関しては、いずれの石器群に関しても一定の留保が必要である。

III—2. 石器石材

十勝平野の遺跡では、報告書の記載および筆者自身の観察結果によれば、剥片石器には黒曜石、安山岩、流紋岩、硬質頁岩、メノウ、珪藻岩、チャート、砂岩などが、石斧には緑色泥岩、礫石器には安山岩、閃緑岩、花崗岩、砂岩などが利用されている。剥片石器のなかで最も高い比率で利用されているのは黒曜石であり、その他の石材はごく僅かが確認できるにすぎない。ただし、居辺 17 遺跡では珪藻岩と分類された石材が比較的多く利用されている。

十勝平野内では、十勝三股の十三の沢付近に黒曜石の大規模な産出地があり、音更川、十勝川の中流域まで河原で転礫の採集が可能といわれている。自然科学的な産地推定分析の結果では、当該期の石器群では、十勝三股産の黒曜石が多量に用いられていることがわかっているが、それ以外の産地、例えば置戸や白滝からも流域内の遺跡へ黒曜石が持ち込まれていたようである（山原 2002a）。

硬質頁岩に関しては、続成作用の発達による珪化の進行の度合いに応じて、肉眼的に石質の異なるいくつかのグループが認められる。これが産出地の違いを反映したものであるのかどうかを把握するためには、北海道内での硬質頁岩の分布および産状について、より一層詳しい検討が必要である。比較的近隣で石器に使用可能な硬質

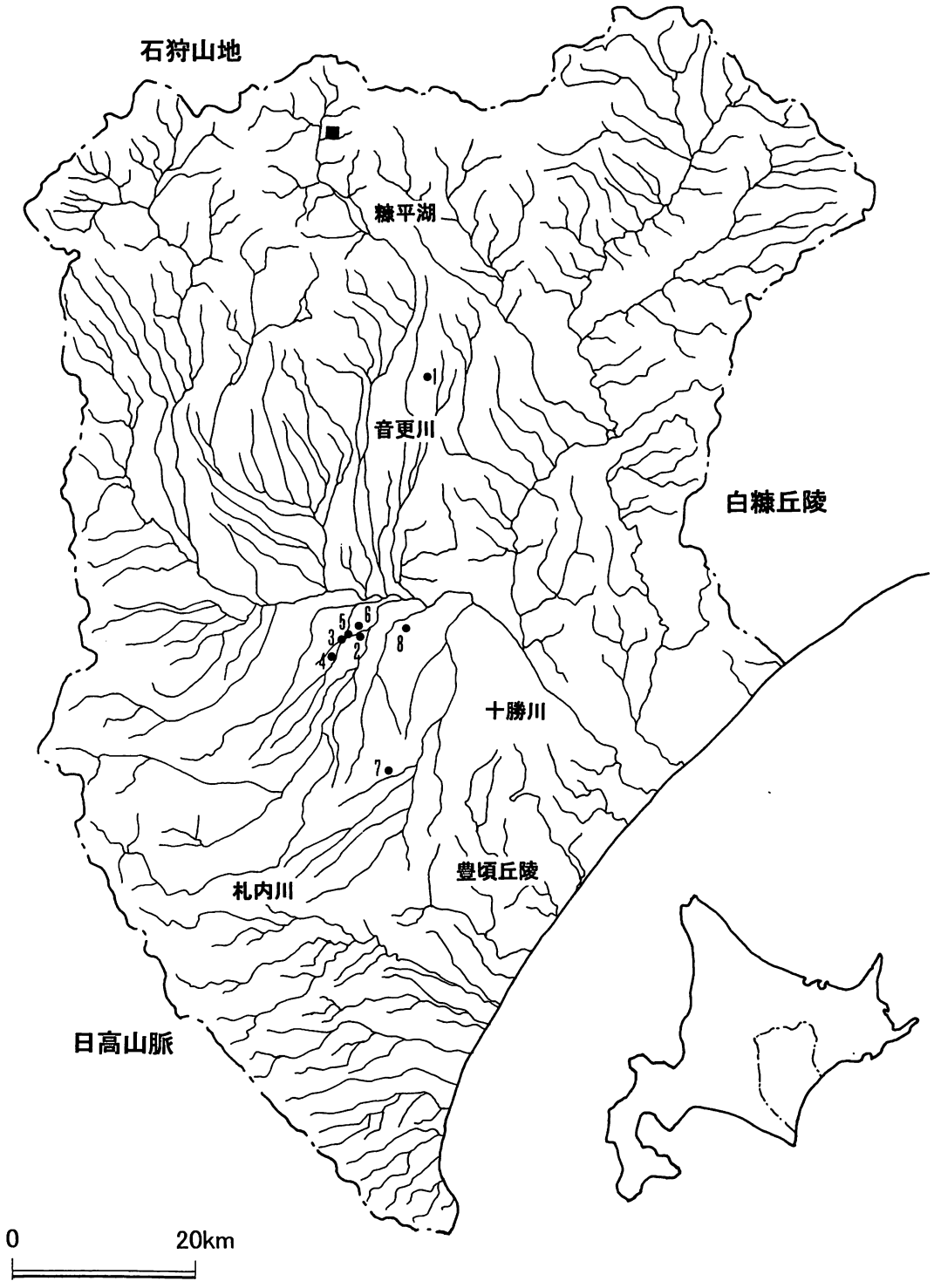


図２　検討対象の遺跡

１：居辺 17 遺跡、２：稲田１遺跡、３：大空遺跡、４：別府１遺跡、５：南町１遺跡、６：落合遺跡、７：上似平遺跡、８：札内Ｎ遺跡、■：十勝三股

頁岩が産出される地域としては、白糠丘陵南西縁部および南東縁部の厚内層群（漸新～下部中新統の時和層、第三系のオコッペ沢層および直別層）が可能性としてあげられる（多田・飯島 1986）。厚内層群に関しては、居辺17遺跡で珪藻岩とされたものの産出地である可能性も指摘できる。

安山岩やチャートは、十勝平野のなかでもより南側に位置する遺跡（稲田1、上似平、札内Nなど）から検出されている。流域およびその周辺では、糠平湖周辺に分布する新第三系の十勝幌加層に貫入する産状を示す岩体で（山岸・松波 1976）、あるいは同じく新第三系で本別～足寄地域に分布する十勝層群に属する足寄層（三谷・小山内・橋本 1958、三谷・松沢・高橋 1976）などで、黒色の緻密な安山岩が産出することが確認できる。チャートの産出が認められるのは、常呂帯の南方延長と考えられている豊頃丘陵の中生界の豊頃層（Yamaguchi 1982）、さきにあげた厚内層群などである。

十勝平野において石器石材に利用されている岩石の分布および産状については、なお調査が充分に及んではいないため、今後のさらなる検討が必要であることを指摘しておく。

III—3．石材消費形態の検討

a．居辺17遺跡（図3）

報告によれば、剥片石器に用いられている石器石材は、黒曜石（Ob）、珪藻岩（Di）、硬質頁岩（H-sh）、安山岩（An）、メノウ（Ag）である。石斧には珪藻岩や硬質頁岩が、台石や敲石などの礫石器には安山岩が用いられている。本石器群は、彫器（ob 70点、Di 5点、H-sh 39点、Ag 3点）、彫器削片（Ob 50点、H-sh 13点）、掻器（Ob 266点、Di 44点、An 1点、H-sh 6点、石材不明1点）、削器（Ob 39点、Di 54点、H-sh 5点、An 3点）、揉錐器（Ob 25点、Di 4点、Ag 3点）、両面加工石器（Di 20点）、細石刃（Ob 126点、Di 39点）、細石刃核（Ob 12点、Di 22点、H-sh 1点）、細石刃核原形（Ob 35点、Di 15点、H-sh 1点）、細部加工剥片（Ob 40点、Di 2点、H-sh 1点、Ag 1点）、石刃（Ob 108点、Di 76点、An 48点、H-sh 16点、Ag 6点、石材不明1点）、石刃核（Ob 17点、Di 2点、An 1点、H-sh 1点）、石核（Ob 17点、Di 1点、H-sh 1点）、石斧（Di 2点、H-sh 3点、石材不明1点）、台石4点、敲石1点、黒曜石原石5点、剥片・砕片14,125点、顔料原材65点、礫738点によって構成されている。

黒曜石の石質には、漆黒のものが最も多く、漆黒で白～灰色の流理構造が縞状に認められるもの、漆黒のなかに灰色部分がまだらに混じっているもの、なども認められる。いずれも光沢が強く球顆をほとんど含まない、均質な石質である。自然科学的な産地推定分析では、剥片を試料とした結果、十勝三股産のものが多いことが明らかにされている（吉谷・水舟 2001）。自然面形態は、石刃剥離工程、両面加工石器製作工程ともに多くは転礫面であった。

石刃核や石刃そのものが多く検出されていること、また石刃核の石核調整（打面調整・再生、稜形成調整）にかかわる剥片が多く検出されていることからみて、遺跡内で石刃剥離工程にかかわる剥離作業が量的にまとまって実施されていたことはまちがいなかろう。とりわけ、比較的大きな自然面を残置した石刃核や剥片・砕片の量的比率が高いことは、石刃剥離工程のなかでも相対的に初期段階に相当する剥離作業がおこなわれていたと推定される（山原 2003a）。トゥールのなかでは黒曜石製の掻器が圧倒的に多く確認されているが、「切断形刃部再生手法」（高倉 2003）の結果生じる残滓がほとんど検出されていないことは注目される。両面加工石器製作工程に関しても、細石刃核の原形と分類された楕円形でやや厚手の両面加工石器が多く検出され、なおかつそれらには自然面が残置しているものが含まれていること、自然面が残置しているいわゆるポイント・フレイクがまとまって確認されていることからみて、初期整形以降の剥離作業が実施されていると考えられる。本石器群の忍路子型細石刃核は、原形の作出→細石刃の剥離に至る剥離作業が遺跡内で実施されていたと推定される。ちなみに、掻器や削器、揉錐器のなかには剥片素材のものが認められるが、これらは石刃核の作出過程で剥離された剥片を素材としている可能性が高い。

珪藻岩と分類されているものは、表面が黄灰色に強く風化しているもので、石刃剥離工程および両面加工石器

製作工程の両者で利用されている。黒曜石と比較して、量的には相対的に少ないがほぼ同様な段階の剥離作業がおこなわれていたと考えられる。石斧にも利用されている。

硬質頁岩は、白～灰色の色調を呈するものと緑灰色を呈するものとがある。どちらも珪化はそれほど進行していない。もっぱら石刃剥離工程、とりわけ彫器に用いられているのが特徴的である。黒色緻密な安山岩も、石刃剥離工程で用いられている。硬質頁岩と安山岩はともに、黒曜石や珪藻岩と比較すると僅かな数の石刃核が遺跡内に持ち込まれ、石刃の剥離作業、トゥールの二次加工、刃部再生・修正にかかわる剥離作業がおこなわれていたと考えられる。

b．稲田1遺跡（図3）

剥片石器に用いられているのは、黒曜石、硬質頁岩、安山岩、メノウ[7]である。敲石、磨石などの礫石器には砂岩、花崗岩、閃緑岩などが用いられている。石斧の破片は緑色泥岩製であった。石器群の主体を構成しているのは黒曜石であり、その他の石器石材としては、剥片に特徴的に利用されていた安山岩が若干多く検出されているのみである。報告書の記載および筆者自身の観察によれば、黒曜石14,669点、安山岩1,379点、硬質頁岩149点、メノウ27点、緑色泥岩4点、砂岩57点、花崗岩3点、閃緑岩10点、アプライト1点、という石材構成となっている。接合後のトゥールの組成は、彫器47点、掻器81点、削器7点、両面加工石器27点、細石刃28点、石刃120点、敲石6点、磨石3点、礫器2点、となっている。黒曜石製以外のトゥールで顕著なのは、メノウ製の細石刃16点、安山岩製の両面加工石器4点、硬質頁岩製の彫器9点である。

漆黒のもの、透明で黒色の流理構造が縞状に認められるもの、若干黒みをおびた透明なもの、が石器群の主体を構成する黒曜石の石質である。球顆は含まれておらず、均質な石質が多い。僅かに、赤色のなかに黒色部分がまだらに認められるもの、全体的に灰色がかったもの、いわゆる梨肌と呼ばれるもので約1mm前後の球顆が疎らに含まれているもの、なども認められる。原材の自然面形態をみてみると、石刃剥離工程には転礫面が多く認められる一方で、両面加工石器の製作工程には転礫面と岩屑面の両者が認められる。

石刃や剥片に残置している自然面や背面の剥離面構成からみて、原石からある程度剥離が進行した状態で石刃核、両面加工石器ともに遺跡内に持ち込まれ、石器製作作業が始められていると想定される。接合資料をみてみると、遺跡内では数母岩で石刃剥離がなされていたようであるが、石刃が数多く剥離されていたという痕跡は認められない。石刃核の剥離作業の進行に伴って剥離される特徴的な打面再生剥片、打面調整剥片、稜形成調整剥片は、ほとんど確認できなかった。石刃素材のトゥール（掻器、彫器など）は、多くは遺跡外から素材もしくは二次加工が施された状態で持ち込まれたと考えられる（高倉2003）。両面加工石器にかかわる細部整形が遺跡内で実施されていたことは、最大長が2～6cmで、最大厚が相対的に薄く、打面が線状もしくは横方向に細長い複剥離面打面で、縦方向にしの字状に反る、いわゆるポイント・フレイクが多く検出されていることからもわかる。掻器や彫器に関しては、遺跡内で刃部修正・再生作業がおこなわれていたとみられる（高倉　前掲）。

硬質頁岩は、緑灰色の色調を呈するものと白色の色調を示すものとが認められる。両者ともに、続成作用は比較的均質に発達しており、緻密で珪化が進んでいる。自然面形態については確認できなかった。トゥールのなかで彫器に特徴的に利用されている。遺跡内からは、彫器および彫器削片、砕片が僅かに検出されているのみであり、二次加工が施された状態で遺跡内に持ち込まれたのち、部分的に二次加工ないしは刃部再生がなされていたと想定される。

メノウ製のものは、ほぼ細石刃だけに限られており、細石刃核の製作にかかわる剥離作業がおこなわれていた痕跡は認められない。

安山岩を原材としているトゥールには、両面加工石器と彫器がある。遺跡内からは、安山岩製の剥片が多く検出されており、それらのほとんどはいわゆるポイント・フレイクと考えられる（北沢・山原編1997）。安山岩を用いた両面加工石器製作工程の細部整形にかかわる一定の剥離作業も実施されていたとみられる。

c．大空遺跡（図3）

剥片石器に用いられている石器石材は、黒曜石、硬質頁岩、メノウである。敲石や台石などの礫石器に用いら

れている石器石材は、砂岩、花崗岩、玄武岩、頁岩である。黒曜石製石器が8,494点、硬質頁岩製石器が66点、メノウ製石器が63点出土している。総計が8,674点で、このうち8,261点が剥片・砕片、367点がトゥールに属する。彫器が8点、掻器が27点、削器が19点、両面加工石器が9点、細石刃が248点、敲石が4点、台石が8点、細石刃核（忍路子型に帰属）が7点、石刃が44点、彫器削片が11点検出されている。

黒曜石の石質には、若干青みがかった漆黒で光沢がやや弱いもの、透明で灰色部分がまだらに混じるもの、漆黒で細かい球顆が多量に混じるもの、漆黒のなかに濃い赤色部分がまだらに混じっているもの、などがある。自然科学的産地推定法により忍路子型細石刃核を直接分析した結果では、十勝三股・置戸・白滝・赤井川産のものが利用されているという（東村・藁科1995）。石器群全体をみる限り、十勝三股産が多く、一部で置戸産や白滝産が利用されているのではないかと想定される。自然面形態は、転礫面が多く認められた。

黒曜石製の剥片・砕片には、最大厚が薄く、縦方向にしの字状に反り、剥離角が90度以上を示す、いわゆるポイント・フレイクが多く含まれている。自然面が残置しているものはほとんど認められないため、原石に剥離が加えられ、初期整形がなされた状態の両面加工石器が持ち込まれ、両面加工石器製作工程にかかわる細部整形が実施されていたと想定される。ポイント・フレイクのサイズからみて、幅5～7cmのやや大形の両面加工石器も持ち込まれ、加工されていたとみられる。石刃製作工程に関しては、石刃の剥離作業の痕跡が僅かにしか認められないことから（石刃核の作業面調整剥片が数点出土しているので、ごく少ない石刃核が遺跡に持ち込まれ、数点の石刃を剥離するような作業が実施されていたことは想定できる）、トゥールのほとんどは素材の石刃もしくは二次加工が施された状態で遺跡に持ち込まれていたと想定される。

硬質頁岩の石質には、茶褐色もしくは薄い灰色の色調を示し、緻密で珪化が進行しているものが認められる。自然面形態は観察できなかった。硬質頁岩に関しては、彫器本体や砕片が僅かに出土しているだけである。彫器に対する二次加工が、遺跡内で僅かに実施されていたとみられる。

メノウには、白色の色調で、光沢が強く、茶色の筋が認められる石質のものが認められる。

d．別府1遺跡（図3）

剥片石器に用いられている石器石材は、黒曜石と硬質頁岩である。黒曜石製石器が2,749点、硬質頁岩製石器が21点検出されている。トゥールは、彫器が1点、掻器が8点、揉錐器が1点である。他に石核が1点、彫器削片が6点出土している。彫器、揉錐器、彫器削片、石刃に硬質頁岩が僅かに認められる他は、いずれも黒曜石が利用されている。

黒曜石の石質には、漆黒で白色の流理構造が縞状に認められるもの（石刃どうしの接合資料はこの石質に属する）、透明で黒色部分がまだらに含まれるもの、透明で黒色部分をほとんど含まないもの、漆黒のもの、赤色のなかに黒色部分がまだらに含まれているもの、が認められる。いずれも球顆をほとんど含まず、均質な石質を示している。白色の流理構造が認められたものは、残置されている自然面形態が岩屑面であった。その他の石刃や剥片に観察される自然面は、ほとんどが転礫面である。

数点の石刃が接合している接合資料が本石器群で検出されている。石刃核そのものは、石刃を剥離後、搬出されていったと考えられる。また、接合資料とは異なる石質の剥片のなかに、背面に石刃剥離作業面の一部が取り込まれているもの、石刃核の打面と作業面が接する部分で特徴的に施される調整痕が背面の頭部付近で認められるもの、などがある。したがって、接合資料で把握された以外にも、石刃剥離作業は実施されていた可能性が高い。ただし、自然面を有する剥片がきわめて少ないこと、剥片のほとんどが最大長5cm以下の小形のものであることから、ある程度剥離の進行した状態の石刃核が遺跡に持ち込まれ、数母岩で一定数の石刃が剥離されたのち、石刃核は遺跡外へ搬出されたと考えられる[8)]。石質の差違からみて、検出されている石刃素材のトゥールのほとんどは、遺跡外から二次加工が施された状態で持ち込まれたと想定される。

本石器群では両面加工石器は検出されていない。また、稲田1や大空で確認された、最大厚が薄く、縦方向にしの字状に反り、剥離角が90度以上を示す、いわゆるポイント・フレイクが、本石器群ではほとんど認められなかった。したがって、両面加工石器製作工程にかかわる剥離作業は、本石器群では実施されていなかったとみ

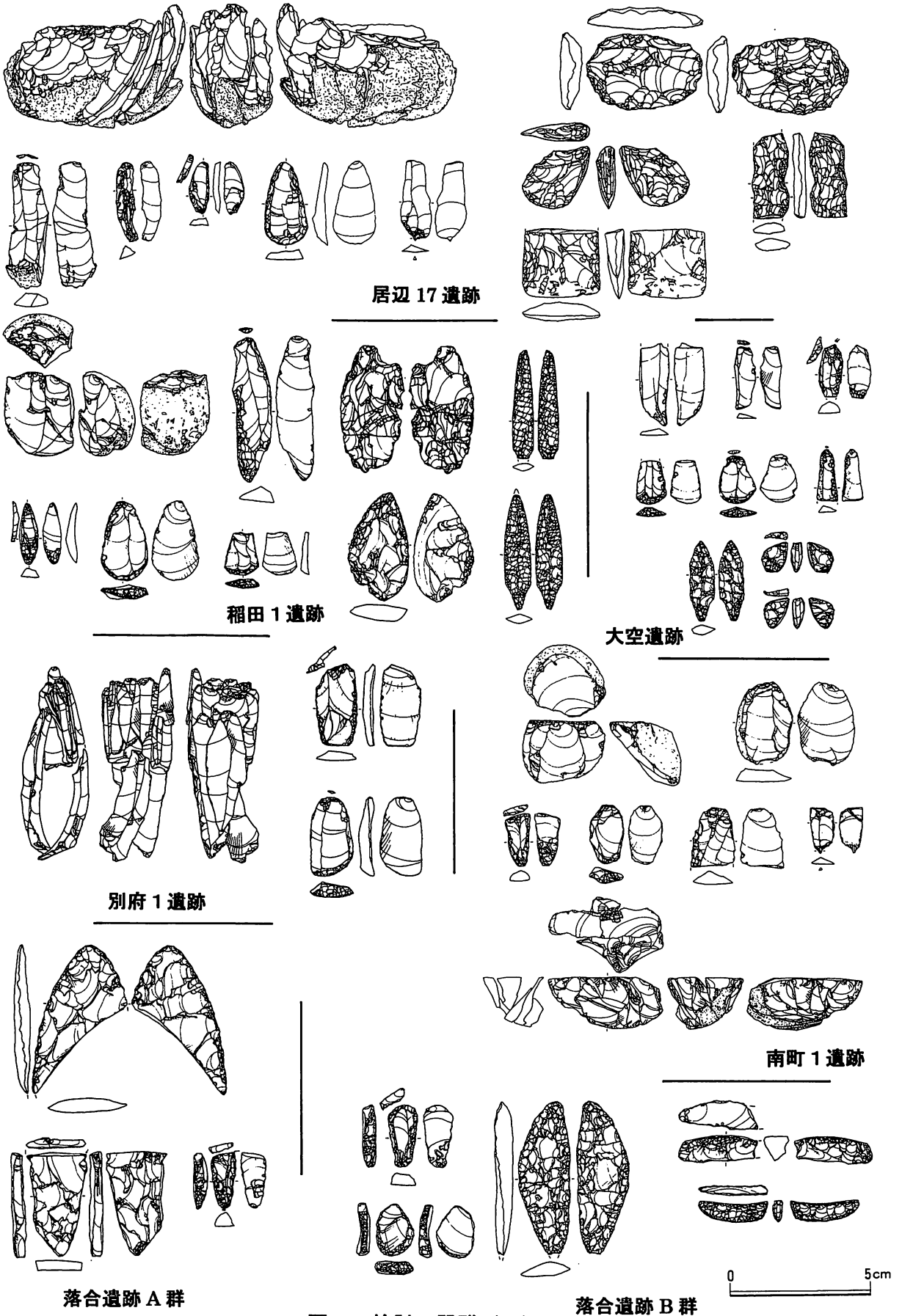


図3　検討石器群（1）

られる。

硬質頁岩は、白～灰色、茶褐色の色調を示すものが認められる。両者ともに、緻密で比較的均質に珪化が進行している。トゥールとしては、彫器および揉錐器で利用されている。硬質頁岩の砕片は数点だけ検出されている。したがって、素材となる石刃の剥離および二次加工にかかわる作業は、本遺跡では実施されていなかったとみてよい。彫器の削片は一定数出土しており、また削片相互の接合資料も得られていることから、遺跡内で彫器の刃部再生作業が小規模ながらおこなわれていたとみられる。

e．南町1遺跡（図3）

剥片石器に利用されている石器石材は、黒曜石および硬質頁岩である。敲石のような礫石器には砂岩、安山岩、閃緑岩が、石斧には泥岩が用いられている。19点の礫を含む、総計30,227点の石器が検出されている。硬質頁岩は、1点の揉錐器、24点の剥片・砕片が検出されているのみで、それ以外の剥片石器はすべて黒曜石製である。舟底形石器も全て黒曜石製である。石器群の構成は、彫器65点、掻器23点、削器17点、揉錐器2点、両面加工石器9点、舟底形石器54点、石斧1点、石刃55点、石核20点、敲石6点、となっている。

石器群には、漆黒で球顆を含まない均質な石質のものが最も多く用いられている。加えて、黒色のなかに赤色部分がまだらに混じる石質のものも一定数認められる。肉眼的に観察しても、また自然科学的な産地推定法の分析結果をみても（藁科・東村 1995、藁科 1997、2002）、利用黒曜石の主体は十勝三股産と考えられる。石刃剥離工程にかかわるもののなかには、一部で岩屑が用いられているが、石刃剥離工程、両面加工石器製作工程、その他の製作工程で用いられている黒曜石の主体は転礫である。

彫器、掻器、削器、揉錐器といった剥片石器の素材は、多くは石刃を素材としている。一部に削器で剥片素材のものも認められるが、石刃核の調整剥片が利用されている可能性が高い。石刃剥離工程は、大きく自然面が残置している石刃核とその接合資料がややまとまって得られていることからみて、遺跡内で石刃剥離工程の初期段階およびそれ以降の剥離作業が実施されていたことが想定される。厚手で、自然面が大きく残置している剥片、あるいは石刃核の打面と作業面が接する部分の調整痕を一部に取り込んでいる剥片などが多数検出されていることは、こうした想定を直接裏付けるものであろう。彫器の削片が一定数まとまって検出されていることから、彫器に関しては製作と刃部修正・再生に至るまでの作業過程が実施されていたとみられる。

本石器群では、両面加工石器が検出されており、またいわゆるポイント・フレイクも一定数認められる。したがって、両面加工石器製作工程にかかわる細部整形が実施されていたことは確かである。しかし、それ以上にまとまって実施されているのが、舟底形石器の初期整形にかかわる剥離作業である。本石器群では、転礫を原材とし、分割（打面と腹面が接する部分の潰れおよび平坦打瘤をもつ産物によって特徴づけられる両極打撃法の適用）によって得られた厚手の剥片を素材として、舟底形石器が多量に作出されている。この工程にかかわると想定される剥片には、自然面が残置しているものが多く認められることから、原石もしくはそれに近い状態で原材が遺跡内に持ち込まれ、そこから剥離作業が始められていたことが想定できる（北沢・山原編 1995）。

硬質頁岩としては、白～灰色を呈する、緻密で珪化が均質に進行した石質のものが揉錐器で用いられている。他に剥片・砕片が出土しているが、揉錐器に用いられている石質とは珪化の発達度合いで異なっているものが含まれている。

f．落合遺跡（図3）

一次調査（北沢編 1992）によって検出されたスポット1～2の石器群を落合A群、二次調査（山原編 1999）によって検出されたスポット3～5の石器群を落合B群と仮称する。

落合A群は、彫器（Ob 5点、H-sh 2点）、掻器（Ob 1点）、削器（Ob 4点、Sa 1点）、揉錐器（Ob 1点）、細部加工剥片（Ob 7点、Ag 1点）、両面加工石器（Ob 4点）、敲石（Gra 1点）、台石（Sa 1点、Mig 2点）、剥片・砕片（Ob 1771点、H-sh 14点）によって構成されている。このうち彫器や掻器、削器などは石刃剥離工程によって、両面加工石器は両面加工石器製作工程によって作出されている。

黒曜石の石質には、赤に黒色部分がまだらに混じるもの、漆黒のもの、が認められる。自然科学的な産地推定

分析の結果では、白滝産が多いことが明らかにされている（藁科 1993、東村・藁科 1995）。自然面形態には、転礫面と岩屑面の両者が認められる。検出されている剥片・砕片には、小形のいわゆるポイント・フレイクと呼ばれるものが多く含まれており、遺跡内で両面加工石器製作工程の細部整形にかかわる剥離作業が実施されていたことはまちがいない。石刃剥離工程に関しては、石刃核の調整剥片がほとんど検出されていないことからみて、石刃を剥離する作業はおこなわれておらず、石刃素材のトゥールは、素材もしくは二次加工が施された状態で遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。舟底形石器の製作工程に関しては、石刃核からの「転用」と考えられるものが接合資料によって確認されているが（山原 2002b）、石器群全体のなかで占める構成の比率はきわめて低い。

落合B群は、彫器（ob 36 点、H-sh 5 点、Ch 1 点）、掻器（Ob 6 点）、削器（Ob 10 点）、揉錐器（Ob 8 点）、石刃（Ob 5 点）、微少石刃（Ob 81 点）、石核（Ob 2 点、H-sh 2 点）、彫器削片（Ob 228 点、H-sh 22 点）、微少剥離痕を有する剥片（Ob 35 点、H-sh 1 点）、両面加工石器（Ob 1 点）、舟底形石器（Ob 23 点）、石斧（Mu 3 点）、礫器（Sa 1 点）、敲石（Sa 5 点、Gra 2 点）、台石（Gra 1 点）、剥片・砕片（Ob 4682 点、H-sh 92 点、Mu 11 点、Sa 327 点）によって構成されている。

黒曜石の石質には、漆黒のもの、漆黒に白～灰色部分がまだらに混じるもの、光沢がやや弱い青灰色を呈するもの、が認められる。自然科学的な産地推定分析の結果では、十勝三股産が多いことが明らかにされている（藁科 1999、2002）。自然面形態のほとんどは転礫面である。黒曜石製の剥片・砕片の多くは2～3cm 以下のサイズが小さいものであり、トゥールの二次加工、刃部修正・再生、細部整形にかかわって剥離されたものと考えられる。石刃素材のトゥールは、素材もしくは二次加工された状態で遺跡内に持ち込まれたものと想定される。彫器の刃部再生が頻繁になされている。一方、両面加工石器および舟底形石器の製作工程に関しては、いわゆるポイント・フレイクや舟底形石器の細部整形によって特徴的に剥離される剥片・砕片（単剥離面打面で、打面は直線的、かつ打面厚が厚いもの）の多数の存在から、細部整形の剥離作業が実施されていたことがわかる。しかし、南町1遺跡でのように、初期整形からの剥離作業はおこなわれておらず、一定の整形がなされたものが遺跡内に持ち込まれていたと想定される（山原編 1999）。石刃核からの「転用」で舟底形石器が作出されている例もある。

硬質頁岩に関しては、彫器および彫器削片の検出が顕著に認められる。彫器への二次加工および刃部再生が主になされていたとみられる。他に、泥岩を用いた石斧とその調整剥片も本石器群では認められる。

g．　上似平遺跡（図4）

剥片石器に用いられている石器石材は、黒曜石、硬質頁岩、安山岩、チャート、メノウ[9]である。彫器（Ob 9 点、H-sh 2 点）、掻器（Ob 14 点）、削器（Ob 26 点、Ch 1 点）、有茎尖頭器（Ob 4 点）、両面加工石器（Ob 2 点、Ch 1 点）、細石刃（Ob 13 点、An 9 点、H-sh 4 点）、石核（H-sh 2 点）、石刃（Ob 9 点、An 1 点、H-sh 2 点）、剥片・砕片（1,739 点、彫器削片含む）、らによって石器群が構成されている。剥片・砕片のなかで黒曜石製のものは9割以上をしめる。

黒曜石の石質には、漆黒で赤色部分がまだらに混じっているもの、漆黒でほとんど球顆を含まないもの、漆黒で径 1mm 前後の球顆が含まれているもの、やや灰色に近い色調を呈し光沢が強くないもの、が認められる。確認できた自然面形態は転礫面であった。

本石器群では、黒曜石製の細かな砕片が多く検出されている一方で、サイズの大きな剥片はほとんど検出されていない。石刃核の調整剥片も確認されていない。彫器や掻器といった石刃を素材としているトゥールは、素材もしくは二次加工が施された状態で遺跡内に持ち込まれていたと考えられる。両面加工石器の製作工程にかかわる細部整形も、いわゆるポイント・フレイクが僅かに確認できるのみであるため、きわめて限定された作業量であったとみられる。

硬質頁岩には、白～灰色のもの、暗褐色の筋が混じる乳白色を呈する石質のものが認められた。両者ともに珪化はそれほど進行していない。確認された自然面形態は岩屑面である。硬質頁岩に関しては、スポット2で石刃剥離工程および両面加工石器製作工程にかかわる剥離作業がおこなわれていたようである。スポット2からは、

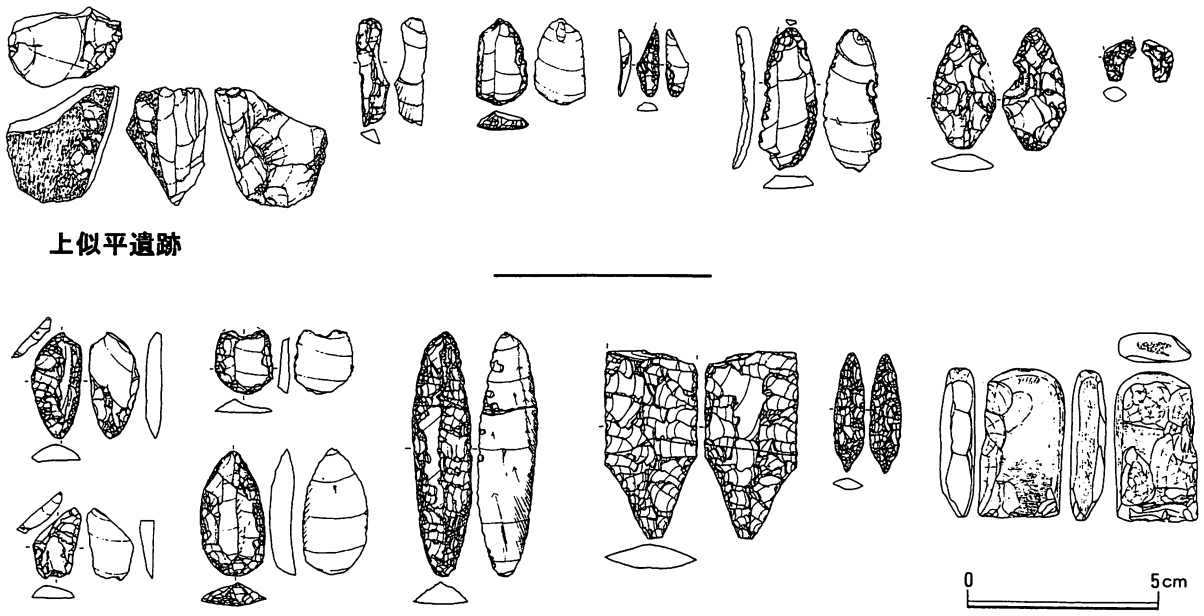


図４　検討石器群（２）

自然面を一部に残置した、両面加工石器の整形に伴うポイント・フレイクが検出されている。剥片のサイズからみて、幅５～６cm 前後のやや大形の両面加工石器が製作されていたと推定されるが、製作されていた両面加工石器の数自体はそれほど多くはなかったとみられる。原材に近い状態で遺跡に持ち込まれ、初期整形・細部整形がおこなわれていることは注意されてよい。また、石刃核に関しても、検出された接合資料および剥片・砕片資料をみる限り、母岩数はそれほど多くはないと考えられるが、石刃剥離が進んでいない原材に近い状態で遺跡内に持ち込まれたのち、石刃が剥離されているものがある。

他に黒色で緻密な安山岩、白い筋が混じる乳白色を呈するチャートがある。安山岩はこれまで他の石器群で確認されてきた石質と類似している。安山岩とチャートは、安山岩は石刃、細石刃が単体で、チャートは有茎尖頭器や削器、砕片が数点検出されているのみである。両者ともに、トゥールや石刃の状態で遺跡に持ち込まれ、ほとんど二次加工が施されることもなく放棄されたものと推定される。

ｈ．　札内Ｎ遺跡（図４）

剥片石器に用いられている石器石材は、黒曜石、硬質頁岩、チャートである。敲石や台石など礫石器に用いられている石器石材は、花崗岩、砂岩、粘板岩である。石斧には緑泥岩、泥岩が用いられている。報告に従えば本石器群は、彫器 25 点、掻器 197 点、削器 182 点、揉錐器 6 点、有茎尖頭器・両面加工石器 186 点、両面石器 14 点、細部加工剥片 27 点、削片 13 点、異形石器 2 点、石斧とその破片 91 点、石核 1 点、石刃 21 点、礫器 5 点、敲石 1 点、台石 15 点、原石 14 点、剥片 49,546 点によって構成されている。

黒曜石の石質には、漆黒のもの、漆黒で白～灰色の流理構造が縞状に認められるもの、透明で黒～乳白色部分がまだらに認められるもの、全体的に青灰色を呈し表面の光沢が相対的に弱いもの、がある。僅かに、赤色のなかに黒色部分がまだらに認められるものもある。いずれも球顆はほとんど含まれていない。残置されている自然面形態には岩屑面と転礫面の両者が認められる。自然科学的な産地推定法の分析結果では、置戸産および十勝三股産が多いことが指摘されている（近堂・藁科 2000）。

遺跡内では多数のいわゆるポイント・フレイクが検出されていることからみて、両面加工石器にかかわる細部整形が活発に実施されていたことはまちがいない。両面加工石器は、石刃および大形で厚手の剥片を素材としていたようであり、多くは岩屑を原材としている。両面加工石器の初期整形の痕跡はほとんど残されていない。一方、多くの剥片石器の素材となっている石刃も、石刃核にかかわる調整剥片がほとんど出土しておらず、石刃核

から剥離されると考えられる厚手の剥片も検出されていないことから、多数のトゥールは素材もしくは二次加工が施された状態で遺跡に持ち込まれていたと推定される。石刃剥離工程にかかわる原材には岩屑が多く利用されているが、一部に転礫の利用も認められる。

硬質頁岩の石質には、白～灰色を呈するもの、茶褐色を呈するものがあり、両者ともに続成作用は比較的均質に発達しており、緻密で珪化が進行している。それらに加えて、やや暗い灰色を呈する、珪化がそれほど進行していないものも少数認められる。彫器や彫器削片、有茎尖頭器、砕片に硬質頁岩製のものが僅かに認められる。硬質頁岩製のトゥールは、二次加工が施された状態で遺跡内に持ち込まれたと考えられる。

チャートは、黒色の筋が混じる白色の色調を呈するもので、表面の光沢はやや強い。有茎尖頭器や剥片・砕片に、チャート製のものが僅かに認められる。チャート製のトゥールも硬質頁岩と同様に、二次加工が施された状態で遺跡内に持ち込まれたと想定される。

Ⅲ—4．類型設定

各石器群における石材消費形態について個別的に記載をおこなってきた。以下では、主要石器石材である黒曜石の消費形態に認められた差違と共通点にとくに着目して、類型設定を進めていきたい。

類型Ⅰ：石刃剥離工程の初期段階およびそれ以降、両面加工石器製作工程の初期整形・細部整形にかかわる剥離作業がおこなわれていた石器群。居辺17遺跡が帰属する。転礫が多く利用されている。

類型Ⅱ：遺跡内では、石刃剥離工程の初期段階にかかわる剥離作業はおこなわれておらず、初期段階以降の剥離作業がごく僅かに実施されている石器群。石刃素材のトゥールの多くは、素材もしくは二次加工された状態で遺跡内に持ち込まれたと考えられる。一方、両面加工石器の細部整形にかかわる剥離作業は、一定量実施されている。稲田１遺跡、大空遺跡、上似平遺跡、札内N遺跡が帰属する。札内N遺跡以外では転礫が多く利用されている。札内Nでは岩屑・転礫の両者が用いられている。

類型Ⅲ：両面加工石器製作工程にかかわる剥離作業はほとんどおこなわれていなかった一方で、ある程度剥離が進行した石刃核がいくつか遺跡内に持ち込まれ、そこから石刃剥離作業が実施されている石器群。別府１遺跡が帰属する。一部に岩屑がみられるが、多くは転礫が用いられている。

類型Ⅳ：舟底形石器の製作工程にかかわる剥離作業が主に実施されている石器群。石刃剥離工程や両面加工石器製作工程にかかわる作業量の比率は相対的に低い。舟底形石器の製作工程にかかわる初期整形・細部整形がおこなわれている石器群（南町１遺跡）を類型Ⅳａ、細部整形を主とする石器群（落合遺跡Ｂ群）を類型Ⅳｂとする。転礫が多く利用されている。

類型Ⅴ：両面加工石器製作工程にかかわる細部整形の剥離作業が主に実施されている石器群。石刃剥離工程や舟底形石器にかかわる製作工程の作業量の比率は相対的に低い。落合遺跡Ａ群が帰属する。岩屑と転礫の両者が利用されている。

類型Ⅱには複数の石器群が帰属している一方で、それ以外の類型には単一の石器群のみが帰属しており、ここでの類型設定に量的な裏づけが充分に得られていないことは明らかである。十勝平野は、比較的近年になって資料の蓄積がなされてきた地域であり、今後の調査研究の進展によって、各類型に帰属する石器群の事例が追加される、あるいは新たな傾向性を示す石器群が検出される、といった可能性は充分に予測できる。議論を進めていくのにあたっては、この点に関する留意が必要である。

以上の問題点をふまえたうえで、各類型にそれぞれ帰属する遺跡の分布をみてみる。Ⅰ類に帰属する居辺17遺跡は、十勝平野のなかでもより河川の上流域に所在している。Ⅱ類からⅤ類までの遺跡は、帯広市から幕別町といった、十勝平野のなかでも河川の中流域に混在するかたちで分布している。十勝平野において黒曜石は、前述のように、上流域に位置する十勝三股に産地があり、中流域までは転礫というかたちで採集が可能とされている。Ⅰ類として確認できた遺跡が居辺17遺跡だけに限られるため、Ⅰ類遺跡の分布が上流域（＝黒曜石の産地により近い）のみに限定されるのかどうかは、今後の資料の蓄積を待たなければならない。一方で、ⅡからⅤ

類までの諸遺跡が、中流域で混在するように分布しているというあり方は、一定の有意な傾向性を示しているとみなすことができる。Ⅱ類からⅤ類までの変異は、遺跡の空間的位置という条件からは独立した要因によって形成されたものと考えられる。

ここまで検討を加えた遺跡以外では、黒曜石を用いた舟底形石器の細部整形にかかわる剥離作業がまとまって実施されている上士幌町居辺遺跡7・8層出土石器群（辻編 1985）、帯広市川西C遺跡スポット17（北沢編 2000）は、類型Ⅳbに含められる可能性がある。

Ⅲ—5．組成・製作工程にもとづいた類型設定

次に、組成および製作工程上の特徴にもとづいて区分できる当該石器群の類型について説明を加えておきたい。ここでの類型設定にあたっては、山原編（2002）、山原（2003a）における議論を参照した。

石器群A：石刃剥離工程に関しては、転礫を主な原材とし、打面調整・稜形成調整・頭部調整が施された石刃核から中・小形の石刃が剥離され、それらを素材とした剥片石器が製作されている石器群。転礫を原材とした両面加工石器製作工程も認められ、両面加工石器・有茎尖頭器・忍路子型細石刃核が組成するが、石器群によってはそれらが欠如する場合もある。居辺17遺跡、稲田1遺跡、大空遺跡、別府1遺跡、上似平遺跡らが帰属する。

石器群B：大形の石刃を含む、大小様々なサイズの石刃を素材として剥片石器が製作されている石器群。両面加工石器製作工程も認められ、器厚がやや厚い木葉形の両面加工石器、有茎尖頭器が組成する。原材には岩屑と転礫の両者の利用が認められる。札内N遺跡が帰属する。

石器群C：器厚が薄い楕円形・木葉形・柳葉形・半月形の両面加工石器、中・小形の舟底形石器の組成を特徴とする石器群。忍路子型細石刃核の組成は認められない。伴う石刃剥離工程には、転礫を主な原材とし、頭部調整以外の石核調整が施されずに、中・小形の石刃が剥離されるという特徴が認められる。南町1遺跡、落合遺跡A群、同B群が帰属する。このうち南町1遺跡と落合遺跡B群は舟底形石器の組成を主とし、落合遺跡A群は両面加工石器の組成を主とする。しかし、両者に伴う両面加工石器や舟底形積、彫器、石刃の形態と製作工程上の諸特徴からみて、上記の三石器群は同一類型に含められるべきものと考えられる。

比較過程についての詳しい記述は省くが、十勝平野以外の地域において、石器群AからCまでと組成および製作工程上の諸特徴において共通する石器群に、どのようなものがあるのかを最初に概観しておく。石器群Aは、彫器や掻器、有茎尖頭器、石斧、細石刃核および石刃剥離工程の諸特徴に関して、忍路子型細石刃核を伴う石器群との間で多くの共通点を有している。類例として具体的には、北見市吉井沢遺跡B地点（大場他 1983、髙倉 2000）、端野町吉田遺跡（加藤他 1970）、美幌町豊岡7遺跡（小野編 2002）などがあげられる。石器群Bは、彫器や掻器、削器、有茎尖頭器、石斧および石刃剥離工程の諸特徴に関して、広郷型細石刃核を伴う石器群との間で多くの共通点を有している。類例として、北見市中本遺跡（日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会編 1999）、美幌町元町2遺跡（前掲）などがあげられる。石器群Cは、白滝町上白滝2遺跡 Sb-11・12・15（長沼他編 2001）などとの間で、両面加工石器や舟底形石器の形態とその製作工程に関して共通点が認められる。

次に、石材消費形態に関して設定した類型と、石器群の組成・製作工程上の諸特徴にもとづいて設定した類型との間の対応関係を整理してみたい。

石器群Aには、消費形態類型Ⅰから類型Ⅲまでが認められる。異なる消費形態を示す石器群が含まれていることになる。石刃剥離工程と両面加工石器製作工程の両者に関しては、類型Ⅰがその初期段階の剥離作業を含む石器群であったが、類型Ⅱおよび類型Ⅲは、初期段階の剥離作業の痕跡をほとんど欠如した石器群であった。線条的に展開される石器製作工程の性質を鑑みれば、類型Ⅰと類型Ⅱ・Ⅲは補完的な関係にあるといえる。

石器群Aにおける類型Ⅰの石器群は、今のところ相対的に上流域に属する居辺17遺跡でしか確認されておらず、中流域に属する帯広市域の類型Ⅱ・Ⅲの石器群との分布上の差異を重視するならば、黒曜石の産地からの距

表１　利用黒曜石に関する産地推定分析の結果　山原（2002a）をもとに作成

遺跡名	遺物集中部名	類型	石器群	分析試料数	分析結果（測定結果）						試料内容	文献
					十勝三股	十勝美蔓	置戸	白滝	赤井川	測定不能		
居辺17遺跡		Ⅰ	A	12	12						剥片	吉谷・水船2001
大空遺跡	sp1～6	Ⅱ	A	5	2		1	1	1		細石刃核	東村・藁科1995
南町1遺跡	sp1	Ⅳa	C	14	11		1			2	掻器、彫器、船底、剥片	藁科・東村1995、藁科97、02
落合遺跡A群	sp1～2	Ⅴ	C	7	1			6			両面、掻器、剥片	藁科1993、東村・藁科1995
落合遺跡B群	sp3～5	Ⅳb	C	15	15						両面、彫器、剥片	藁科1999、2002
札内N遺跡	sp4～8	Ⅱ	B	10	2		8				剥片	近堂・藁科2000

離が、類型Ⅰと類型Ⅱ・Ⅲとの差違を発現させた条件であると解釈することも可能である。しかしながら、居辺 17 遺跡において黒曜石と同様な剥離作業が実施されている珪藻岩の産地が、前述のように、十勝平野の東側に位置する白糠丘陵南西縁部および南東縁部に求められる可能性を考慮するならば、石器石材産地からの距離は必ずしも重要な条件ではないことがわかる。今後の調査研究の進展によっては、帯広市域を中心とした中流域においても、類型Ⅰの石器群が検出される可能性は充分に予測できる。

両面加工石器製作工程の有無によって区分される類型Ⅱと Ⅲの変異が、どのような要因によって形成されたものであるのか、現段階で詳細な議論をおこなうことはできない。この変異は、石器群全体の規模、トゥールの出土点数・組成の変異とも相関するようであり、他地域の資料も含めて別機会に検討してみたい。

石器群Ｂには類型Ⅱのみが認められる。類例の少なさが問題であるが、異なる消費形態を示す石器群は含まれていないことになる。

石器群Ｃには類型Ⅳａ・Ⅳｂおよび類型Ⅴが認められる。石器群Ｃのうち、舟底形石器の製作工程によって特徴づけられる類型Ⅳａと類型Ⅳｂとの間も、前者では舟底形石器の初期整形と細部整形がおこなわれ、後者では細部整形のみがおこなわれているという点で、石器群Ａの場合と同様に補完的な関係にあるといえる。補完的な関係を示す石器群どうしがきわめて近接した位置に所在する遺跡から検出されている、という点が重要である。類型Ⅴに位置づけられる石器群については、組成・製作工程上の諸特徴から石器群Ｃに含められることを指摘したが、類型Ⅴの石器群で主に認められた製作工程を補完するような石器製作作業が実施されている石器群は、十勝平野内では現時点では認められなかった。

最後に、利用黒曜石に関する自然科学的な産地推定分析の結果をまとめたものを表１に示す[10]。これによれば、石器群Ａおよび石器群Ｃの類型Ⅳに帰属する石器群では、十勝三股産の黒曜石を主とし、置戸産・白滝産がそれに加わるという構成をなしているのに対し、石器群Ｂおよび石器群Ｃの類型Ⅴに帰属する石器群は、置戸産もしくは白滝産を主としていることがわかる。帯広市域の石器群Ａに関しては、まだ黒曜石の産地推定分析結果のデータがきわめて限られているが、分析試料およびそれに伴う石器群に対する石質の肉眼観察からは、概ね上述の傾向は支持されよう。結果的に、十勝平野内で石器製作工程に関する補完的な関係が成立している石器群と、それが成立していない石器群とでは、黒曜石の産地構成に対照的な差違が認められたことになる。すなわち、前者の石器群では十勝三股産が主となっているのに対して、後者の石器群では置戸産もしくは白滝産が主となって利用されていたと考えられるのである。両面加工石器製作工程や舟底形石器の製作工程の初期整形にかかわる剥離作業が実施されている上白滝遺跡 Sb-11・12・15 が、類型Ⅴの石器群を補完する石器群であるという指摘（山原編 2002）は、こうした産地構成の対照的な差違をふまえる限り、一定の蓋然性があることになろう。

Ⅲ―６．　黒曜石以外の石器石材の消費形態

剥片石器に用いられている黒曜石以外の石器石材の消費形態について触れておきたい。検討対象とした石器群

においては、硬質頁岩、珪藻岩、安山岩、チャートなど各種の石器石材が利用されているが、いずれも遺跡内ではトゥールに対する限定的な二次加工、刃部修正・再生作業のみがなされている場合が多い。石刃剥離工程に関しては、居辺 17 遺跡（珪藻岩）と上似平遺跡（硬質頁岩）のみで、遺跡内において初期段階およびそれ以降の剥離作業が実施されている。居辺 17 遺跡では、珪藻岩を用いた石刃剥離作業がまとまって実施されているのが注目される。両面加工石器製作工程に関しては、稲田１遺跡（安山岩）や上似平遺跡（硬質頁岩）において、初期整形・細部整形にかかわる剥離作業がややまとまって実施されていることが把握された。

石器群を構成する僅少な石器石材に、硬質頁岩以外に安山岩やチャート、砂岩などが含まれていることは注目すべきである。安山岩やチャートらは、前章で指摘したように、十勝平野周辺に産地があった可能性が指摘できるものである。これらの岩石の採集域がどのように広がっていたのかは、現時点では不明である。しかしながら、十勝平野およびその周辺を含めた地理的範囲内で採集された石器石材であると考えるならば、ほぼ同様の石材消費形態が推定された硬質頁岩もまた、同じような地理的範囲内で採集されたものである可能性が想定できることになる。十勝平野内の石器群において利用されている硬質頁岩の石質に、珪化の発達の差違による変異が認められるため、すべてが同一の産地に由来するものとはいいがたいが、これらのことはまた、単純にすべてが遠隔地（例えば道南の渡島半島域）から招来されてきたものではない可能性をも強く示唆している。

Ⅳ. まとめと展望

前章までの検討によって明らかにされた傾向性について整理しておく。

①石器群 A では、類型Ⅰに帰属する石器群において、石器群を構成する主要なトゥールとその素材が製作され、類型Ⅱ・Ⅲの石器群では、持ち込まれたトゥールとその素材に対する二次加工や刃部修正・再生、細部整形にかかわる剥離作業が実施されていたとみられる。結果的に、ａ）石刃剥離工程に関しては、石器群間で石刃核が持ち運ばれ、移動した各地点で石刃剥離がなされ、トゥールの素材が補充されていくのではなく、ある特定の地点（α）でほとんどの石刃素材のトゥールとその素材が用意され、分散化した複数の地点（β）にそれらが持ち込まれる、というあり方が想定でき、また、ｂ）両面加工石器製作工程に関しては、ある特定の地点（α）で初期整形および細部整形がなされ、そこから持ち出された両面加工石器の細部整形が、複数の地点（β）で実施されていたと考えられる。石器群Ａで利用されている黒曜石は十勝三股産の転礫を主とし、それに置戸産・白滝産が加わる構成をなしていた。

②石器群 B に関しては、現時点のところ十勝平野内では消費形態類型Ⅱに属する石器群しか検出されていない。利用されている黒曜石は置戸産を主とし、十勝三股産がそれに加わるという構成をなしている。岩屑と転礫の両者が用いられている。

③石器群Ｃでは、舟底形石器の製作工程にかかわる初期整形・細部整形や、石刃剥離工程の初期段階にかかわる剥離作業が類型Ⅳａにおいてなされ（地点α）、類型Ⅳｂでは、持ち込まれたトゥールとその素材に対する二次加工や刃部修正・再生、細部整形にかかわる剥離作業が実施されていたとみられる（地点β）。利用されている黒曜石は、十勝三股産の転礫を主としていた。一方、両面加工石器製作工程の細部整形にかかわる剥離作業が主に実施されていた類型Ⅴの石器群に関しては、その製作工程を補完するような石器製作作業がおこなわれている石器群は、現時点では域内において認められてはいない。利用されている黒曜石は白滝産を主とし、十勝三股産がそれに加わる構成をなしていた。岩屑と転礫の両者が用いられている。

④石器群Ａ～Ｃともに、僅かな例外を除き、硬質頁岩・珪藻岩・メノウ・チャート・安山岩・砂岩などの石器石材が、石刃剥離工程や両面加工石器製作工程において少量利用されている。多くの場合、遺跡内ではトゥールへの二次加工、刃部修正・再生、細部整形にかかわる限定的な剥離作業が実施されているのみである。

以上の整理により、十勝平野内の更新世末の石器群においては、域内の十勝三股産黒曜石を主に用いた石器製作作業、および域外の置戸産・白滝産黒曜石を主に用いた石器製作作業が、石器群を別にして展開されており、前者の場合、ある特定の地点（α）に持ち込まれた転礫を主な原材として、石器群を構成する主要なトゥールと

その素材がほとんど用意され、分散化した複数の地点（β）では、持ち込まれたトゥールあるいは素材への二次加工、刃部修正・再生、細部整形が主に実施されている、という関係が明らかにされた。地点（α）と地点（β）は、空間的に分離したかたちで分布しているのではなく、一定空間内で混在するように分布していることが予測できるため、域内を周回的に移動しつつも、石器石材の入手・補給、トゥールとその素材の作出・補充は、限られたある特定の地点でおこなわれるというプロセスが、ここからは少なくとも想定される。

こうした「域内移動」とともに、さきに示したような域外の置戸産・白滝産黒曜石によって主に構成されている石器群の存在は、分水界を越えた「地域間移動」が実施されていたことも示している。問題は、「域内移動」を示す石器群と「地域間移動」を示すと考えられる石器群との間の関係である。消費形態類型Ⅳと類型Ⅴは、それぞれの石器群において実施されている主たる石器製作工程が、前者は舟底形石器の製作工程、後者は両面加工石器製作工程、というように差違が認められるが、両者に組成する彫器・石刃・両面加工石器・舟底形石器の形態と製作工程上の諸特徴には、多くの共通点が認められる（山原編 2002）。このことから、ここまでは両者を同じ石器群Ｃに含め理解してきた。石器群Ｃという類型設定が妥当であるならば、「域内移動」および「地域間移動」は別個のものとしてではなく、両者が相互に組み合わさって当該期の移動・居住形態が構成されていたのではないかという推定が可能となる。石器群Ｃのなかでの石器群間の変異は、製作工程上の諸特徴を共有しつつも、主たる製作工程の実施に互換的な選択が働いた結果によるものと考えられる。

一方、同じように域外の黒曜石を主に利用している石器群Ｂは、十勝平野内で製作工程上補完するような石器群が現時点のところ検出されておらず、落合Ａ群の場合と同様に、域外、とりわけ常呂川流域の石器群との補完的な関係を考慮する必要があるものである。事例が一遺跡に限られるため、今後の資料の蓄積によって検証していかねばならないことは確かであるが、石器群Ｃにおける類型ⅣａとⅣｂの関係をふまえるならば、石器群Ａとの関係を視野におさめた検討が必要になろう。石器群Ａと石器群Ｂとの間には、利用されている主な原材が一方は転礫（Ａ）、他方は岩屑＋転礫（Ｂ）というように差異がみられるため、結果的に石器製作工程上の諸特徴にも様々な差異が見いだせることになる。石器石材の形態に拘束された石器製作工程そのものの変異がここでは問題となる[11]。

Ⅴ．おわりに

本稿では、十勝平野の石器群を対象として石材消費形態の検討をおこない、石器群間の関係について見通しを示してきた。結果的に、組成・製作工程上の諸特徴にもとづいて設定される石器群の類型の「意味」についても、若干の吟味を試みることとなった。

ただし、ここまでの検討によって得られた傾向性によって、単純に移動・居住形態を復元していくことには問題がある。置戸あるいは白滝との間を往還する「地域間移動」を、移動・居住形態の一構成要素として想定したが、これは黒曜石の産地があるからこそ推定できたことであり、地域間の移動がそれだけにとどまるものであるかどうかは、まったく別の問題である。したがって、本稿で示すことができた成果は、当該期の移動・居住形態を理解していくうえでの端緒を得たにとどまるといわざるをえない。

本稿での検討過程にはいくつかの課題が残されているが[12]、それらについては個別的な石器群研究の実践のなかで解決をはたしていくことにしたい。

謝辞

本稿は、十勝平野での遺跡調査に携わってこられた多数の方々の調査研究の成果に依拠している。日頃から様々な御教示・御配慮を賜っている北沢　実・山原敏朗両氏をはじめとして、大矢義明・川辺百樹・須田　修の諸氏には、資料見学に際して多大な御助力を賜った。また、堤　隆氏からは本稿執筆の機会を与えていただいた。上記の方々には厚く御礼申し上げたい。

註

1）北海道外の地域における後期旧石器時代石器群の石材消費形態に関しては、近年、田村隆（2001、2003など）らによる一連の研究がある。

2）放射性炭素年代測定値については、測定手法、対象試料の種類も含めて、Ono *et al.*（2002）がデータの集成をおこなっている。

3）白滝型細石刃核を伴う細石刃剥離技術についても当該期に属するものである可能性が高い。この点については未報告の関連資料が提示された段階で議論したい。十勝平野内では、現時点のところ関連資料は検出されていない。

4）北海道では、遺跡間変異の観点から対象にアプローチしようとする限り（髙倉 1999）、本州以南の「細石刃石器群」研究とは異なる観点から対象措定をおこなっていかねばならない。ロシア極東地域や韓半島南部など、北東アジアの他地域においても、当該期の研究を同様の観点から進めていくうえでは、類似した問題が発生すると考えている。

5）接合資料の存在が構成要件の一つになるような同時間性が石器集中部間で認められなかったとしても、ここで議論すべき目的・方法からいって、検討対象の資料体から外す理由にはならない。石器群は、ミクロな視点でみれば、その放棄過程および埋没前後の変形作用の影響をうけている。石器群のミクロなレヴェルでの形成過程と石器群間の比較研究との関係については、別稿での主題としたい。

6）石器集中部に対する呼称については、基本的に報告書での記載に従う。

7）稲田1遺跡および大空遺跡の報告書でメノウとされているものは、チャートに区分できる可能性がある。

8）試掘調査の結果も総合すると、近接した空間に同時期の石器集中部があった可能性は低いことが指摘されている（北沢・笹島編 2002）。

9）報告書で流紋岩・珪岩とされているものは硬質頁岩、メノウ質とされているものはチャートに、それぞれ暫定的に区分した。

10）自然科学的な黒曜石産地推定分析の結果を利用して議論をおこなう場合には、分析試料がどのようにして選定されているのか、という点が重要な意味をもつ（鶴丸 2001）。表1に示した黒曜石産地推定分析の試料は、石質の差違に対応するように選定されている場合や、石質の差違に関係なく特定器種が選定されている場合もあり、その選定基準に統一性は認められない。そのため、このデータは、石器群における産地ごとの利用黒曜石の比率を比較していくうえで充分なものとはいいがたい。しかしながら、接合率の高い石器群における石質の肉眼観察の結果にもとづくと、居辺17遺跡、南町1遺跡、落合遺跡などでは、ここで示した分析結果が利用黒曜石の産地比率と大まかに対応しているであろうことが指摘されている（山原 2002a）。大まかな傾向性が読みとれるものとの前提で、本稿では使用した。

11）山原（2003a）は、石器群間の時間的関係について、石器群A→Cという順序を想定している。石器群Bの位置づけについては明言していない。

12）分析の定量化にかかわる課題がとりわけ重要である。定性的な記述をもとに議論を進めてきたが、今後、定量化されたデータを蓄積し、それにもとづいた検証が実施されねばならない。これに関連して、製作工程の識別および工程ごとの作業量の把握をおこなううえで、遺跡から検出される剥片・砕片の属性分析は不可避な課題といえる。接合資料を対象とした分析から、剥片・砕片が有する様々な属性と製作工程との対応関係を把握し、それをもとに剥片・砕片の意味づけをおこなっていくことが必要であろう。

引用文献

大場利夫・近堂祐弘・久保勝範・宮　宏明　1983「吉井沢遺跡発掘調査報告」『北見郷土博物館紀要』13、2-37頁.

大矢義明編　2000『札内N遺跡』幕別町教育委員会.

大矢義明編　2001『居辺17遺跡』上士幌町教育委員会.

Ono, A., Sato, H., Tsutsumi, T. and Kudo, Y. 2002. Radiocarbon Dates and Archaeology of the Late Pleistocene in the Japanese Islands. *Radiocarbon*, 44, pp.477-494.

小野　基編　2002『豊岡７遺跡』美幌町教育委員会.
加藤晋平　1970「先土器時代の歴史性と地域性」『郷土史研究講座　1』朝倉書店、58-92頁.
加藤晋平・桑原　護　1969『中本遺跡』永立出版.
加藤晋平・鶴丸俊明・水村孝行　1971「多面体彫器の諸問題」『考古学ジャーナル』57、10-22頁.
加藤晋平・畑　宏明・鶴丸俊明　1970「エンド・スクレィパーについて」『考古学雑誌』55-3、44-74頁.
北沢　実編　1992『帯広・落合遺跡』帯広市教育委員会.
北沢　実編　1993『帯広・大空遺跡』帯広市教育委員会.
北沢　実編　2000『帯広・川西Ｃ遺跡2』帯広市教育委員会.
北沢　実・笹島香織編　2001『帯広・別府１遺跡』帯広市教育委員会.
北沢　実・山原敏朗編　1995『帯広・南町遺跡』帯広市教育委員会.
北沢　実・山原敏朗編　1997『帯広・稲田１遺跡』帯広市教育委員会.
木村英明　1995「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学』31、3-64頁.
近堂祐弘・藁科哲男　2000「幕別町札内Ｎ遺跡出土の黒曜石剥片の原材産地分析と水和層年代（平成９年度分および平成10年度分)」大矢義明編『札内Ｎ遺跡』幕別町教育委員会、362-373頁.
佐藤訓敏・北沢　実編　1987『帯広・上似平遺跡２』帯広市教育委員会.
島田和高・山科　哲　1998「明治大学考古学博物館収蔵資料（旧石器時代）の再検討・再評価」『明治大学博物館研究報告』3、23-67頁.
白石典之　1993「北海道における細石刃石器群の展開」『物質文化』56、1-22頁.
杉浦重信　1994「北海道北東部における縄紋時代のはじまりに関する諸問題」『シンポジウム　北海道における縄文時代のはじまりに関する土器の諸様相　資料集』.
髙倉　純　1999「遺跡間変異と移動・居住形態復元の諸問題」『日本考古学』7、75-94頁.
髙倉　純　2000「北海道北見市吉井沢遺跡Ｂ地点出土細石刃石器群の再検討」『北海道旧石器文化研究』5、1-34頁.
髙倉　純　2003「掻器の形態的変異とその形成過程」『旧石器考古学』65（印刷中）.
髙倉　純・中沢祐一　1999「北海道―旧石器時代石器群研究の課題―」『石器文化研究』7、1-10頁.
多田隆治・飯島　東　1986「北海道東南部厚内―浦幌地域新第三系の地質と層序」『地質学雑誌』92、31-45頁.
田村　隆　2001「尖頭器石器群の石材消費戦略」『千葉県文化財センター紀要』22、49-64頁.
田村　隆　2003「林小原子台再訪」『考古学』Ⅰ、1-51頁.
田村俊之編　1983『メボシ川２遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会.
田村俊之編　1994『丸子山遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会.
千葉英一　1985「日本の旧石器―北海道(1)(2)(3)―」『考古学ジャーナル』245、20-25頁、248、20-26頁、249、28-31頁.
辻　秀子編　1985『居辺遺跡』上士幌町教育委員会.
寺崎康史・山原敏朗　1999「北海道地方」『旧石器考古学』58、3-10頁.
鶴丸俊明　2001「北海道旧石器考古学の論点―今日的焦点と展望―」『北海道考古学』37、3-22頁.
十勝団体研究会編　『専報22　十勝平野』地学団体研究会.
長沼　孝　2003「北海道島の様相」『季刊考古学』83、65-69頁.
長沼　孝・鈴木宏行編　2001『白滝遺跡群　Ⅱ』財団法人北海道埋蔵文化財センター.
長沼　孝・直江康雄・鈴木宏行編　2002『白滝遺跡群　Ⅲ』財団法人北海道埋蔵文化財センター.
日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会編　1999『シンポジウム海峡と北の考古学　資料集Ⅰ』.
平川一臣・小野有五　1974「十勝平野の地形発達史」『地理学評論』47、632-667頁.
東村武信・藁科哲男　1995「帯広市宮本遺跡他出土の黒曜石製遺物の原材産地分析」北沢　実編『帯広・宮本遺跡２』帯広市教育委員会、65-74頁.
三谷勝利・小山内熙・橋本　亘　1958『５万分の１地質図幅　足寄太および同説明書』北海道立地下資源調査所.

三谷勝利・松澤逸巳・高橋功二　1976『５万分の１地質図幅　上士幌および同説明書』北海道立地下資源調査所.

山岸宏光・松波武雄　1976『5 万分の 1 地質図幅　糠平および同説明書』北海道立地下資源調査所.

Yamaguchi, S. 1982. Stratigraphy of the Toyokoro Hill, Eastern Hokkaido. *Bulletin of the Geological Survey of Japan*, 33, pp. 541-560.

山原敏朗　1998「北海道の旧石器時代終末期についての覚書」『北海道考古学』34、77-92 頁.

山原敏朗　2002a「理化学的分析結果からみた十勝平野における黒曜石製旧石器時代遺物の原材産地について」山原敏朗編『落合遺跡３』帯広市教育委員会、35-38 頁.

山原敏朗　2002b「落合遺跡スポット１の接合資料」山原敏朗編『落合遺跡３』帯広市教育委員会、39-41 頁.

山原敏朗　2002c「南町１遺跡スポット１とその周辺出土資料の検討」山原敏朗編『落合遺跡３』帯広市教育委員会、42-54 頁.

山原敏朗　2003a「石器変形論からみた周縁加工左刃彫器群の形態認識について」『古代文化』55-4、32-45 頁.

山原敏朗　2003b「帯広市大空遺跡の第二次発掘調査報告」『帯広百年記念館紀要』21、29-35 頁.

山原敏朗編　1999『帯広・落合遺跡２』帯広市教育委員会.

山原敏朗編　2002『帯広・落合遺跡３』帯広市教育委員会.

横山英介　1998「北海道における縄文文化の形成」野村崇先生還暦記念論集刊行会編『北方の考古学』、29-65 頁.

吉谷昭彦・水舟一郎　2001「居辺 17 遺跡から出土した黒曜岩の原産地の推定について」大矢義明編『居辺 17 遺跡』上士幌町教育委員会、82-97 頁.

藁科哲男　1993「帯広市落合、上似平、暁、空港南Ａ遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地分析」『帯広百年記念館紀要』11、7-16 頁.

藁科哲男　1997「帯広市稲田１遺跡他出土の黒曜石製遺物の原材産地分析」北沢　実・山原敏朗編『帯広・稲田１遺跡』帯広市教育委員会、81-89 頁.

藁科哲男　1999「落合遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地分析」山原敏朗編『帯広・落合遺跡２』帯広市教育委員会、63-70 頁.

藁科哲男　2002「落合遺跡および関連遺跡出土の黒曜石製石器、石片の原材産地分析」山原敏朗編『帯広・落合遺跡３』帯広市教育委員会、25-34 頁.

藁科哲男・東村武信　1995「帯広市南町１、２遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地分析」北沢　実・山原敏朗編『帯広・南町遺跡』帯広市教育委員会、97-104 頁.

細石刃石器群の石材需給とセトルメントシステム

― 中部・関東地方を中心とした一考察 ―

堤　　隆

1　はじめに

後期旧石器時代は、同様な狩猟採集経済であっても縄文にみる定住生活型社会には今だ辿り着かずに、その段階の差こそあれ基本的には遊動生活型社会であるということは定説となっている。例えば堅牢な構造をみせる竪穴住居などがほとんど確認されないのはその大きな証左であろう。しかし遊動の実態はというと、いまだその解明の道は遠いといわざるを得ない。遊動を基本とする後期旧石器時代の社会集団の構造やセトルメントシステムのあり方、あるいはその領域性はきわめて不可視的であり、われわれの目の前に残された遺跡構造や型式・技法の分布要素など僅かな手がかりのみをもってしては、その把握が困難な現状がある。

近年の石材原産地同定の成果によると、中部関東地方の細石刃文化において100 ～200km という広大なゾーンを黒曜石が動くという現象が把握されているが（例えば堤1998）、その動態は、型式や技術・技法などの分布で括られるある意味では認識論上にある理解とは異なった科学的保証において、需給ゾーンという異なった枠組みによって領域性の理解を可能としている。その領域性の背景には、どのような人間行動が隠されているのだろうか。石器石材の動きの背景にあるセトルメントシステムやコミュニケーション・ネットワーク、あるいはモノを動かす社会システムの解明は、きわめて今日的な考古学的課題といえる。

本論においては、野辺山高原や相模野台地あるいは南関東における黒曜石の原産地同定の成果を手掛かりに（八ケ岳旧石器研究グループ1996、望月・堤1997など）、黒曜石の流れを追い、その需給ゾーンや、供給のベクトルを描き出してみる。一方で、中部・関東における細石刃石器群段階、とくに黒曜石の稜柱形細石刃石器群のセトルメントシステムと石材需給ゾーンとの整合性を考慮するなかで、集団の年間活動領域や遊動形態、石材獲得戦略の問題についての考察をおこなうことにしたい。

2　黒曜石資源と石材需給領域

（1）　黒曜石原産地の資源構造

細石刃製作における黒曜石指向についてはかつて述べたが（八ケ岳旧石器研究グループ1996）、ここでは中部関東地域における黒曜石原産地の資源構造を概観したうえで、細石刃石器群段階の消費地遺跡での原産地同定に基き、その需給状況を描き出したい。

本論の主題とする中部関東地方には、よく知られているようにいくつかの黒曜石原産地が存在している。まず、中央高地では、信州において和田峠・星ケ塔・霧ケ峰・男女倉といった和田峠周辺、麦草峠・双子池・冷山の蓼科八ケ岳周辺に黒曜石原産地が存在する。また、NKとされる所在不明の黒曜石原産地（堤1996）も和田峠・八ケ岳周辺に存在する可能性がある。やや離れた内陸部には栃木に高原山黒曜石原産地がある。伊豆箱根地域では、畑宿や柏峠などの黒曜石原産地があり、神津島に恩馳島原産地が存在している。分布の地理的特徴としては、信州の黒曜石原産地は、和田峠周辺で星ケ塔1500m・東餅屋1500m・星糞峠1500m・男女倉1200m、八ケ岳周辺の原産地で、麦草峠2000m・双子池1500m・冷山1800mの高標高地帯にある。高原山黒曜石原産地も標高1000～1200mの山地にある。伊豆・箱根原産地は太平洋沿岸の伊豆半島部にあり、箱根畑宿で標高500m、伊豆柏峠で標高450mである。神津島恩馳島原産地は、海浜および海底に存在する原産地である。黒曜石の資源構造上の特性としては、火成岩としてよりピンポイント的に原石を産出する点にある。これは東北地方の硬質頁岩

など、生成層が広いため河川流域に広域に分布する堆積岩などとは産状を異にする点であろう。

筆者は中部高地をフィールドとする関係上、和田峠原産地群および八ケ岳原産地の調査に参画し（和田村教育委員会 1993、八ケ岳旧石器研究グループ 1996）、伊豆箱根・神津島・高原山黒曜石原産地の調査も試みている。それらの調査に基づいて、信州を中心に中部関東における黒曜石原産地の資源構造についてふれておきたい。

まず、これら原産地における黒曜石の産状には、基本的につぎのようなものがある（註 1）。①火道や岩脈などの貫入岩、②溶岩流、③火砕流の圧密と強い溶結で生じたレンズ、④降下火山噴出物に混じるもの、⑤土石流など二次的堆積物に混じるものなどがあり、①～③が一次的生成、④⑤が二次的な分布状況を示すものである。

例えば、和田峠では東餅屋には火道の貫入岩としての黒曜石露頭がみられるが、これ以外に一次的生成をみせる露頭はきわめて少なく、黒曜石は一般に二次的堆積物に混じるものとして分布する。例えば、著名な星ケ塔はその名称からすれば、巨大な塔のような黒曜石露頭の印象を受けるが、実際は火道等から転移した夥しい黒曜石原石が二次的に地層中に混入している状況にある。一方、八ケ岳では冷山において溶岩流中に黒曜石を含む大露頭があり、麦草峠においても溶岩流中に黒曜石を含む露頭がみられ、和田峠周辺に比較して露頭の存在がよく知られている。あわせて二次的堆積物中の黒曜石分布も広く確認されるところである。石器石材として問題となるのはその質だが、一般に一次的生成をみせる露頭の黒曜石には黒曜石と流紋岩が相互に嵌入して脈状をなし、良質な部分の見極めに困難を伴う。これに対し沢や崖錐に堆積する二次的な黒曜石原石は、一次生成地からの移動に伴って不純物が淘汰され、良質なものが多い。むしろ不純物の淘汰された転石にその資源価値が高いものと考えられる。和田峠周辺の黒曜石の産状調査では、標高 1200m前後の和田川周辺には拳大程度の転石が多く（図１）、さらにこれらは河川や土砂の運搬によって不純な部分や脆い部分が剥落して良質であり、基本的にはこうした転石が旧石器に利用されたとされ、この両岸の河岸段丘上に男女倉遺跡群が形成されていることから、原石採取に最適な位置に遺跡が形成されたとみられる（酒井 1993）。大規模な露頭がみられる八ケ岳黒曜石原産地においても、露頭から一旦離れた転石利用が一般的であったものと考えられる。神津島においては、現状では恩馳島周辺の海岸および海中部において良質な転石を得ることができ、氷期による海面低下によって増幅した海岸部での転石採取が可能だったものと考えられる。

ここで黒曜石の質と量についてふれておくが、八ケ岳周辺の黒曜石は気泡が脈状に入っているのが特徴であり、和田峠周辺産の黒曜石は八ケ岳周辺のものにくらべ一般に気泡が少なく良質でその産出量も圧倒的に多い。これが後期旧石器時代全般を通じての消費地遺跡における和田峠系と八ケ岳系の供給量の差異につながっているものと考えられる。同様に神津島産に比べ伊豆箱根産の黒曜石も量・質ともに劣る傾向にある。

近年、和田峠周辺では、いわゆる星糞峠黒曜石鉱山や星ケ塔・星ケ台にみるように、おびただしい黒曜石採掘坑の発見がなされているが、これらはすべて縄文時代に属するものであり、旧石器時代に遡る採掘坑の存在は知られていない。時間的ロスとエネルギー効率といった点からの最適化において、転石利用がもっとも効率のよい原石採取戦略であったものと考えられる。また、旧石器時代においては、採掘という集団協業的な行為を行いうる社会組織・労働編成が備わっていなかったものと考えられ、その供給量も採掘で得られる容量までを必要としなかったものとみられる。

和田峠黒曜石原産地周辺においては男女倉遺跡群、八ケ岳黒曜石原産地周辺においては池の平遺跡群にみるように、原産地周辺において数多くの尖頭器石器群の遺跡が形成されるが、細石刃石器群は認めがたい状況にある。しかしこの差異は、おそらく見かけ上のもので、原材料の伴出形態の差に起因するものと考えられ、本来的にはこれらの原産地においても細石刃石器群の集団が滞在したものと考えられる。尖頭器は加工途中での折損が多いため、原産地で一定の形状に整えられ、消費地へともたらされる。したがって原産地での製作途中に折損したものなどが残され、該期の遺跡の判別が容易である。これに対し、細石刃原材は原石がそのまま持ち出されるなどするため、細石刃文化遺跡としての痕跡が残りにくいものとみられる。

例えば埼玉県横田遺跡の細石刃石器群（田中 1995）においては、霧ケ峰や和田峠など信州産と同定された（望月 1997）原石まで戻るきわめて良好な接合資料が得られている。これは棒状のいわゆるズリと呼ばれるような原

石であり、河川で円摩された原石とは異なり角張っており、露頭からそう遠くない転石が用いられ、原石搬入のあり方をみることができる。

（2） 原産地同定にみる地域別黒曜石供給

現在、日本列島においては北海道白滝から鹿児島三船に至るまで数多くの黒曜石原産地の存在が知られており、中性子放射化分析あるいは蛍光X線分析によって原産地黒曜石の元素組成比が把握されてきた。それらは例えば蛍光X線分析による元素組成比によるなら 100 組成群以上に分別が可能だという（註２）。一方では消費地遺跡における黒曜石製石器の原産地同定が実施され、原産地と消費地を結ぶ黒曜石の供給状況が描き出されつつある。本稿では、黒曜石の原産地同定を精力的に試みている鈴木正男・二宮修二・藁科哲男・望月明彦らの分析化学者による中部関東地方における消費地遺跡の産地同定の結果をもとに、細石刃石器群における黒曜石利用について垣間見ることにしよう。

野辺山地域（表１・表２）

矢出川第Ⅰ遺跡では細石刃関係の遺物に、藁科による分析の結果、双子池６点・和田峠２点・霧ケ峰５点・NK４点・神津島５点という産地構成となった（藁科 1996、堤・由井 1999）。20～40km の距離内に存在する和田峠・八ケ岳側からの一定の供給ベクトルのみならず、200km の距離をおく神津島産黒曜石の供給ベクトルがみられる点が注意された。また、黒曜石ではないが１点の下呂石産細石刃石核も含まれていた点も注意される。

2002 年、由井茂也・堤隆・土屋忠芳の採集による矢出川第Ⅰ遺跡細石刃石核 206 点および細石刃石核再生剥片 23 点の計 229 点について、新たに望月明彦により原産地同定がおこなわれ、まとまった結果が得られた（表２）。詳しい報告は別に譲るとして、信州系の諏訪星ケ台 46 点（約 20％）、蓼科冷山 66 点（約 28％）、NK28 点（約 12％）がみられたほか、神津島恩馳島 78 点（34％）がみられた。分析点数のうちおよそ 1/3 が神津島恩馳島で構成される点は、その需給の実体についてきわめて大きな問題を投げかけているといえる。

一方、中ッ原では 5B 地点では、麦草峠双子池６点・和田峠１点・男女倉１点・霧ケ峰６点・NK９点という石材構成となり、２点の下呂石産細石刃が含まれていた。近接する 1G 地点では、麦草峠双子池 26 点・霧ケ峰１点・NK９点という石材構成となった（藁科 1995・藁科 1996）。これに母岩別分類の結果をふまえると両地点では、NK および八ケ岳の麦草峠・双子池産の黒曜石が多用されているのに対し、霧ケ峰・和田峠・男女倉産の黒曜石の利用率がきわめて低いことがうかがえる。

開田高原地域（表１）

木曽郡開田村柳又遺跡においては、剥片のため細石刃石器群かどうかの性格がはっきりしないが、10 点のうち６点が和田峠産４点が星ケ塔産の黒曜石であった（鈴木・戸村・金山 1991）。

同じ開田村の越遺跡（松原 1997）では矢出川技法による細石刃石器群が検出されており、分析の結果（望月 1997）和田峠系 44 点・霧ケ峰系 36 点で、これに男鹿産１点（細石刃）がみられている。神津島・伊豆箱根系の黒曜石は見うけられない。

群馬地域（表１）

市之関前田遺跡（細野 1991）の矢出川技法による細石刃石器群の藁科による分析（未公表）では、分析 19 点中 19 点が和田峠系の黒曜石であった。これは前田遺跡の細石刃石器群の各母岩を代表させた試料なので、あくまで予測であるが本石器群の黒曜石はいずれも和田峠系で構成されるものと考えられる。

武蔵野地域（表１）

横田遺跡（田中 1995）では矢出川技法による細石刃石器群が検出されており、分析の結果（望月 1997）和田峠系 92 点・霧ケ峰系 46 点・蓼科２点となっている。神津島・伊豆箱根系の黒曜石は見うけられない。

多摩蘭坂遺跡（中山・米田 2001）では矢出川技法による細石刃石器群が検出されており、分析の結果（望月 1997）和田峠系 152 点・霧ケ峰系２点・神津島系１点となっており、伊豆箱根系の黒曜石は見うけられない。また、神津島系とされる黒曜石は細石刃石器群の分布を外れており、その共伴については問題が残る。したがって、和田

峠系を中心とした黒曜石で構成されるものとみておきたい。

愛鷹・箱根山麓地域（表１）

沼津市中見代Ⅲでは139点の神津島系黒曜石に対し、伊豆箱根系の柏峠２点・畑宿１点、信州系の和田峠１点・蓼科１点という構成で、神津島主体の黒曜石利用がうかがえる（望月1997）。函南町の上原Ⅰでも神津島系が616点と主体をなし、これに4点の伊豆箱根系および20点の信州系が加わる状況がうかがえる（望月2001）。これに対し、山中城三の丸では神津島系36点と信州系29点が存在し、これに7点の伊豆箱根系が加わる状況がうかがえる（望月1995）。函南町の大奴田場ＡⅠでは信州系が40点と主体となり、若干伊豆箱根系および神津島系が加わる状況がうかがえる（二宮1989）。

相模野地域（表３）

相模野台地については、望月との共同研究によって10遺跡の産地分析を行った経過がある（堤・望月1997）。詳細はそちらに譲るが、石器群ごとの黒曜石産地構成については表２に示してある。産地構成は、Ａ信州系、Ｂ伊豆箱根系、Ｃ神津島系いずれかの単独構成、Ｄ信州系＋伊豆箱根系、Ｅ神津島系＋伊豆箱根系の複数構成が認められる。例えば信州系のみの単独構成をとるＡに上草柳第3中央Ⅰや上和田城山Ⅱ、伊豆箱根系単独構成をとるＢに吉岡Ｂ、神津島系のほぼ単独構成をとるＣに柏ケ谷長ヲサⅣやかしわ台駅前Ⅱ・かしわ台駅前Ⅲがある。また、Ｄ信州系＋伊豆箱根系のあり方は台山Ⅱに、Ｅ神津島系＋伊豆箱根系のあり方は上草柳第１Ⅰにみられる。なお、相模野では、神津島系と信州系の黒曜石が共存する事例がない点が注意される。

下総台地

下総台地においては細石刃石器群の原産地分析例が少ないが、向原遺跡において信州系３点、箱根系７点の検出事例がある（千葉県文化財センター1987）。また、草刈場北遺跡においては、高原山系黒曜石の利用がみられるようである（橋本1998）。今後、下総台地でのまとまった原産地同定が望まれる。

（３）　黒曜石需給ゾーンと径路

中部関東の諸遺跡における黒曜石原産地同定の成果に基いて、図２には黒曜石原産地と消費地遺跡における黒曜石の動きを示し、全黒曜石中50～100％の割合で各産地の黒曜石利用が確認される地域を需給ゾーンとして認識した（堤1998）。

需給ゾーンW：和田峠や霧ケ峰など和田峠周辺の産地の黒曜石の動きをみると、野辺山高原・木曽開田高原・赤城山麓・武蔵野台地・相模野台地・愛鷹箱根山麓の各細石刃石器群では、全黒曜石中50～100％の割合で和田峠周辺の黒曜石利用が確認される遺跡がある。残念ながら野尻湖周辺や下総台地での状況が明らかではないが、この150～200㎞圏内がその黒曜石の主体的供給域（供給ゾーンW）で、東西南北の多方向の供給ベクトルをもっている。なお、300㎞近い遠隔地の新潟県樽口遺跡でも数点ではあるがその利用が確認されている。

需給ゾーンK：相模湾沖の神津島産の黒曜石は相模野台地や愛鷹箱根山麓など100数十㎞離れた沿岸部を中心に利用され、この圏内が主体的供給ゾーンとなっている。さらに内陸の遠隔地ではおよそ200㎞離れた長野県野辺山高原の矢出川遺跡でもその利用が一定数確認されている。

需給ゾーンＹ・Ｈ・Ｉ：高原山、和田峠周辺や神津島産黒曜石は遠距離を動く黒曜石であるが、これに対し八ケ岳周辺の黒曜石の主体的供給は野辺山や相模野などに限定され（供給ゾーンＹ）、伊豆柏峠や箱根畑宿の黒曜石も相模野・武蔵野や愛鷹山麓など100㎞未満の地域で利用される（供給ゾーンＨ・Ｉ）。これらの黒曜石は和田峠周辺や神津島産黒曜石と比べると量的・質的な制約があってその利用ゾーンや利用総量は限られ、和田峠や神津島の黒曜石供給を補うかたちでの利用もみられる。なお、栃木高原山の黒曜石の利用は、原産地同定の網には現状では掛かっていないが、下総台地を中心とした利用が予想される（註３）。

需給ゾーン重複地帯：相模野台地や愛鷹箱根山麓は、信州系（Ｗ・Ｙ）、伊豆箱根系（Ｉ・Ｈ）、神津島系（Ｋ）黒曜石の供給ゾーンの接点にあたり多様な利用状況がみられる。望月と堤がおこなった神奈川県相模野台地の９遺跡における細石刃石器群の黒曜石2737点の産地同定の結果では、信州系が1094点、伊豆・箱根系が450点、

神津島系が 609 点という内訳となった 。これを遺跡ごとにみると、その利用状況に違いがあり、①信州系、②伊豆・箱根系、③神津島系のいずれか一系統の黒曜石を主に用いる遺跡、④信州系と伊豆・箱根系の両方を用いる遺跡、⑤神津島系と伊豆・箱根系の両方を用いる遺跡などのパターンがあった。一方では、信州系と神津島系の黒曜石が共存する遺跡は認められなかった（望月・堤 1997）。

黒曜石の補給経路

黒曜石の需給問題については、小野昭がその運搬経路を概念図化しているが（小野 1978）、信州と南関東の黒曜石補給にあっては、遺跡分布と山岳地帯や峠路・河川などの自然地形、あるいは台地内一般にみられる河川流域沿いの移動習性を考慮し、以下のルートなどを想定できようか。

1　信州産黒曜石の愛鷹･箱根地域への供給に関しては、八ケ岳沿いに甲府盆地に下り富士川流域を下って、沿岸部の愛鷹･箱根へと搬出されるルート。
2　信州産黒曜石の相模野への供給に関しては、八ケ岳沿いに甲府盆地に下り富士川流域を下って沿岸部の愛鷹･箱根に出、さらに箱根から相模野へと搬出されるルート。
3　信州産黒曜石の相模野への供給に関しては、八ケ岳沿いに甲府盆地に下り丹沢山系を抜けて、相模川流域の相模野台地に搬出されるルート。
4　信州産黒曜石の赤城山麓・大宮台地・武蔵野台地への供給に関しては、千曲川を横断して浅間山麓を抜け群馬・埼玉へと下り、大宮台地・武蔵野台地に搬出されるルート。
5　神津島産黒曜石の供給に関しては、伊豆半島から神津島へと渡り、ふたたび伊豆半島をへて、愛鷹･箱根あるいは相模野台地、武蔵野台地へと搬出されるルート。
6　伊豆・箱根産黒曜石は、足柄峠を越し、相模野台地・武蔵野台地へと搬出されるルート。

（4）黒曜石需給の構図

原産地における黒曜石の産状については前述したが、その信州黒曜石原産地にあってはその高標高山岳地帯という地理的条件から、氷期の黒曜石獲得には季節的限定が伴ったものと想定される。すなわち原石獲得のシーズナリティーである。和田峠周辺は標高 1200～1500m、八ケ岳麦草峠は標高 2000m前後を測る。当時この地域は、亜寒帯針葉樹林の森林限界に近い周氷河地域であったとみられる。これらの地域では、氷期の乾燥化気候で降雪量が減少していたとはいえ、氷雪や凍結現象により冬季から早春にかけての原石獲得は困難をきわめたことが予測され、夏を中心とした石材採取の可能性が考えられる。また、ステージ２においても特に亜氷期においては、夏季といえども原産地への立ち入りが容易に為し得ない状況にあったことは、Ⅳ下・Ⅴ層段階において信州産黒曜石が相模野台地等にほとんどもたらされない現象が物語っており、その補給が一時中断されたことが考えられよう。

一方、神津島地域は、現在深さ 400m 以上の海で隔てられ、氷期に海面が 100m 低下したとしても本土とは陸続きにならない。当然、舟によるという航海手段がない限り黒曜石原石の採取は不可能である。理化学分析による黒曜石の動きが考古学的にはみえない旧石器時代の舟の存在をクローズアップしたことになる。現状では神津島には旧石器時代の遺跡が確認されておらず、神津島の集団が原石を携えて本土にきたとは考え難く、本土の集団が神津島に渡航したとみるのが妥当である。その際海流や時化などの状況を熟知し、渡航というリスクおかしながらも採取に赴いたものと考えられる。関東の細石刃石器群での石斧などの本格的な木工具の不在から考えると、使用されたのは礫器などで作られた簡単な丸木舟であったのだろうか。

相模野の細石刃遺跡にみられる信州系・伊豆箱根系・神津島系という多様な黒曜石産地構成を、遺跡の段階差の表れととらえる見方もあるが、問題はそう単純には片づきそうにない。あるいは同一集団にあっても信州系と神津島系の黒曜石、つまり山の石と島の石とでは入手シーズンが異なった可能性もあるだろう。さきにみた資源構造をふまえその補給のあり方を考えてみると、神津島系と信州系の黒曜石が相容れない状況を相互補完的な石材補給状況とみてとることも可能である。石材補給において季節性があったものと考えるなら、信州系の黒曜石

は冬季の補給が困難であって夏を中心とした季節に、神津島系はそれ以外の季節に補給されたことになる。

さて、前述した産地同定によって得られた結果は、その獲得プロセスまでもは自ら語らないので、獲得に関するモデルの設定とその社会経済的解釈が考古学的課題となる。産地同定から導き出される物資の動きは、現代考古学の命題ともいえる交換理論を視座としてまず問題化されてきた（常木 1990）。60 年代前半、コリン・レンフリューらは地中海および中近東の黒曜石の産地同定にいち早く着手し（Cann and Renfrew 1964）、フォール・オフ・モデルと呼ばれる黒曜石の離心減少パターンによってその供給システムを考察した。さらにレンフリューは経済人類学者のカール・ポランニーによって体系化された交換理論のもと、直接採取・互酬（交換）・中心地再分配・仲介者交易などの交換モードを概念化し、初期文明や初期国家形成など社会発展論にまで論及した（Renfrew1975）。レンフリューのフォール・オフ・モデルは、その後イアン・ホダーやレイモンド・シドリス、ジョナソン・エリクソンらによって批判的検討が加えられたが（Hodder1974、Sidrys1976、Ericson1977）、産地同定を礎に交換理論を適用し社会経済動態までもを論じたレンフリューの「跳躍」は、現代考古学の新しい方向性を切り開いた点で高く評価される。

日本において黒曜石産地同定が軌道に乗り始めた 70 年代、小野昭は「石材運搬論」を展開し、旧石器時代の社会経済を考えた場合、黒曜石の獲得は交換よりもむしろ直接採取という特殊労働であるとの問題提起をおこなった（小野 1975）。これに対し稲田孝司は、武蔵野台地の黒曜石利用を検討する中で、およそ２万年前までには黒曜石入手システムが整えられ、入手された黒曜石は部族的集団内で再分配がなされていたと推論する（稲田 1984）。北海道の後期旧石器時代において木村英明は、その中頃には白滝の黒曜石露頭が開発され、集団における石器製作の分業化と交換ネットワークが形成されたと考えている（木村 1995）。

田村隆らは、下総台地の旧石器石材産地同定の実施と関東周辺の石材産状の総合的調査によって石材研究のエポックを築いた（田村ほか 1987）。田村によれば南関東には、下総群・相模野群・武蔵野群の三者の石材利用パターンが認められ、後二者がいわゆる在地系石材に依存するのに対し、在地石材のない下総は栃木や茨城など北部関東に石材を求めたという。そして下総への北部関東からの石材供給の背景には、女性交換に基いた互恵的関係が働いていたと推測する。従来、石材獲得のモデルとしては、直接採取か交換かといった点で単純に二分するきらいがあったが、田村はビンフォードがヌナミウトの民族誌から提示した埋め込み戦略（Binford1979）－石材獲得を非日常的な直接採取行動としてではなく一定の行動スケジュールの中に組み込んだ戦略－を新しい解釈概念として披露し、社会生態学的視座から石材獲得のダイナミクスを論じた（田村 1992）。従来、在地石材の乏しい下総台地の石材有効利用において、リダクション戦略が発達したとするのは、技術的組織論に立脚した佐藤宏之の言及であり（佐藤 1995）、石材獲得にあたってはリスク低減戦略（Wiessner1982）も機能していたものと考えられる。

このようなモデル化がなされる今日、いかなる石材獲得戦略が展開していたのか。およそ明らかなのは、神津島産黒曜石の獲得における、少なくとも島嶼部－本土間の渡航による目的的な直接採取の構図であろう。一方で、信州の野尻湖遺跡群や木曾越遺跡などに秋田男鹿産の黒曜石製細石刃石核が搬入されていたり（望月 1997、長野県埋蔵文化財センター2000）、新潟県樽口遺跡に和田峠産の黒曜石製細石刃が搬入される（立木 1996）という直線距離 250～400km にもおよぶ搬入事例は、直接採取や埋め込み戦略による入手を想定しがたく、地域間相互のコミュニケーション・ネットワークを背景とした交換が成立していた可能性を示そう。黒曜石など特定石材にあっては、後期旧石器時代の後半においては一定の交換システムが整えられていた可能性が高い。他方、例えば相模野台地などにおける凝灰岩利用などに関しては、いわゆる在地系石材として台地内で調達可能なことから、日常の生業活動における埋め込み的な獲得の蓋然性が最も高いものと考えられよう。

いずれにせよ、黒曜石など特定石材資源の開発成立当初にあたる後期旧石器時代初頭においては直接採取など比較的単純なモデルでその獲得戦略が理解可能かもしれないが、とくに社会システムが整えられてゆく後期旧石器時代後半には、直接採取・埋め込み・交換の三者に代表される獲得モデルから択一的に戦略をあてはめるのには無理が残ろう。おそらくは、①遊動領域と石材産地との地理的関係、②資源構造による獲得の難易度、③石材

品質という資源価値、④集団関係などの諸条件が作用し、石材種によって実行する獲得戦略の選択がなされていたものと考えられる。

なお、資源所有やなわばり制の存在は、資源獲得戦略に大きな影響を与え、直接採取などの際の立ち入り拒むことになる。しかし、石材資源に対する明確な所有制やなわばり制が生じるのは、黒曜石原産地において本格的な黒曜石資源の採掘がなされ、集落間に介在する石材再分配システムの整えられる縄文時代前期以降のことと考えられる。したがって、後期旧石器時代後半における黒曜石原産地は、資源共有の意識のもといわば入会地的な状況を呈し、その立ち入りの規制はゆるやかであったのであろう。そうした資源所有をめぐる段階性を想起するなら、仮に後期旧石器時代に黒曜石の交換が成立していたとしても、その意味は返礼の曖昧な一般的互酬制を示し、交換物相互の等価性のとれた平衡的互酬制（サーリンズ・山内訳 1984）には至っていないものと考えられる。

3　中部関東における細石刃集団の遊動領域とセトルメントシステム

（1）　遺跡の立地的特性

前項においては、黒曜石の流れが示す消費経済圏を描いてみた。この黒曜石の需給ゾーンにおいて、どのような集団が存在し、どのようなセトルメントシステムと活動領域をもち、モノが流れていったのか。この問題を考えるために、ここでふたたびゾーン内における遺跡の分布と立地的特性についてみておこう。

中央高地から関東にかけての細石刃遺跡分布域においては、93 年の集計において国内 1013 遺跡を数えた細石刃石器群は、中部・関東地域では関東 139 遺跡・東海 78 遺跡・中部高地 31 遺跡であり（八ケ岳旧石器研究グループ 1993）、その後の詳細は、下総台地 24 遺跡・武蔵野台地 30 遺跡・大宮台地 17 遺跡・櫛引台地 6 遺跡・多摩丘陵 5 遺跡、相模野台地 40 遺跡、箱根・愛鷹山麓 24 遺跡、野辺山高原 21 遺跡・和田峠周辺 5 遺跡・鷹山周辺 3 遺跡・開田高原周辺 3 遺跡となる。また、隣接する北関東赤城山麓においては 11 遺跡を数える。

これら中部南半から関東にかけて分布する細石刃石器群の地形環境を概観すると、中部高地の黒曜石原産地の南に隣接して標高 2500mを越す八ケ岳連峰があり、千曲川水系を挟み関東平野に臨んで上州・信州境の浅間山（2568m）から甲州・武蔵・信州の接点に位置する甲武信ヶ岳（2475m）までの関東山地が連なっている。関東山地は浅間山南東では碓氷峠を頂点に急勾配で傾斜し、関東平野へと至り、大きく利根川が平野部を南北に分断し、太平洋へと連なる。一方、八ケ岳は南部において甲府盆地へと下り、甲府盆地を流れる釜無川と笛吹川が合流して富士川となり身延山地と天子山地とに挟まれた渓谷を下り駿河湾へと注ぐ。甲府盆地東の丹沢山地の脇には相模川が流れ相模湾へと注ぎ、太平洋沖には神津島等伊豆 7 島が存在する。

鈴木忠司は、日本細石刃文化の地理的背景について考察するなかで、482 個所の遺跡において、100m以内の地域に 245 遺跡（51％）が、200m以内になると 372 遺跡（77％）があり、圧倒的多数が 200m以下の低標高地域に集中することを指摘している（表４）。一方、1000m 以上の高標高地域に遺跡が集中するのは、長野県のみで 23 遺跡がそれに該当、国内の遺跡数全体の５％に満たない数だという。日本細石刃文化の生活空間（領域）・土地利用形態を「低地・平坦地（平野）型＝平原型」を原則とすると結論付けている（鈴木 1983）。中央高地にみられる「高地・平坦地型＝高原型」の立地はきわめて特殊な例ということが注意されよう（図３）。

（2）　セトルメントシステムをめぐって

中央高地から南関東を取り巻く地域の後期旧石器時代のセトルメントシステムをめぐっては、いくつかの仮説が提示されている。

安蒜政雄は、後期旧石器時代初頭のいわゆる環状ブロック群の登場から消滅、後半の流域遺跡群の展開を射程に入れたうえで、人々は「二万年前前後を境にして集合して居住し、環状のムラをかまえる様式から、分散して居住し川辺のムラをかまえる様式へと、その基本的な移動生活の枠組みを改めたのである」。環状集落を形成した「単位共同体は、一団となって集合・居住し、山地部と平野部を結ぶ広大な領域の、対原料産出地間往復移動を

行っていた」「やがて二万年前以降になると、平野部での原料の在地化がはかられ、単位共同体は、もはや一団となって集合し、対原料産出地間を往復移動する必要はなくなった。平野部と山地部の双方で、単位共同体が、それぞれ河川の流域に分散・居住して、より狭い領域の地区周回移動へと移行したのである。こうして、川辺のムラが出現する」といい、「遺跡群出現以前の移動生活をより集合的な集団による相対的に不明瞭で緩慢な周期をもった径路周回的な状態であったとすると、遺跡群の出現後は、より分散的な集団を中心とする比較的短い規則的な周期をもった頻繁な移動が予測される」さらにそうした移動生活は細石刃期にむけより定着化した方向へと向うものととらえられている（安蒜1990）。砂川期における中部日本南部の地域社会について島田和高は、中部高地・相模野・武蔵野という代表的な各地区にそれぞれを生活領域とする固有の地区集団の存在を想定し、相互のゆるやかな対外関係を想定している（島田1998）。

角張淳一は黒曜石原産地遺跡と消費地遺跡のダイナミズムについて行動論的な理解を進めるなかで、武蔵野Ⅸ・X層段階＝地域循環単位型、Ⅷ層段階＝広域循環放射型、Ⅵ層段階＝広域循環放射型、Ⅳ下・Ⅴ層段階＝広域循環単位型、Ⅳ中層段階（砂川期）＝地域循環放射型というセトルメントシステムのモデルを示した（角張1991）。たとえばⅥ層段階＝広域循環放射型では、信州と南関東の遺跡は同一集団によって残されたもので、信州の黒曜石原産地と武蔵野台地・相模野台地・下総台地の一部のエリアを広域に移動し放射型に遺跡を残すシステムがあったとする。これに対し地域循環型は固有の石材原産地を取りこんだ地域的エリアにおいて移動をおこなうシステムであるという。

細石刃石器群のセトルメントシステムについては、田村は「関東地方及びその周辺地域の晩氷期の狩猟・採集民は、前後の時期と比較して、むしろ居住地移動の頻繁な広域捕食の戦略に準拠していたことになる。この仮説は、関東地方における遺跡の小規模分散化傾向とも調和し、保守性重視の狩猟具への傾斜という技術的特徴とも調和的である」とする。一方で、荒屋系細石刃石器群の関東方面への波及については、晩氷期の多雪化により積雪地居住集団の一時的な退避によるものとの理解が示されている（田村1993）。同様な問題をめぐって加藤博文は、細石刃石器群の狩猟対象となったと思われるシカ類の雪に対する退避行動などから、日本海側から関東方面への荒屋系細石刃石器群の波及を想定している（加藤1996）。

また、佐藤宏之は「野岳・休場系統の細石刃石器群と北方系削片系細石刃石器群とに認められる細石刃生産技術の差異の他に、行動論上では両石器群では大きな差異があるといえよう。恐らく、前者は、基本的に直前段階の行動類型を反映して複合的な石器群構造の一部を代置するかのような位置を占めていた（一定地域内の頻繁な回帰的移動戦略の一端を担っていたのであろう）可能性が高いのに対して、後者は長距離移動と特定生業（例えば内水面漁労<佐藤1992>）にきわめて特殊化した行動上の機能価を有していたと推測される。よって次の段階である長堀北遺跡や上野遺跡等の大型尖頭器や各種削器・石斧等をもつ石器群と共伴する段階には、こうした行動論上の特性（有利性）を失い、急速に衰退するのであろう」とした（佐藤1993）。

岡山県恩原2遺跡の調査成果に基いて稲田孝司は、旧石器時代の人間集団は移動様式からみると、基本的に回帰遊動集団と植民集団とに大別できるという仮説を提示しつつ、硬質頁岩分布地域以外の地域における湧別技法細石刃石器群には、回帰遊動集団と植民集団の両者が残したものがあり、在地系石材を主体とする岡山県恩原2遺跡M文化層を残した集団は東北日本から南下してきた植民集団にほかならず、同じく在地系石材主体の長野県中ッ原5B・1Gや柳又も植民集団によって残された石器群と理解している。一方、後野・木戸場・白草・頭無など硬質頁岩利用の細石刃石器群は東北地方との回帰遊動によって残されたものと想定している（稲田1996）。

北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態について佐野勝宏は、細石刃の分析から遺跡間のグルーピングを行い、東北日本においては、短期間に長距離移動を行う行動形態から、近郊の石材を獲得しながら遺跡周囲の狭い範囲を一定期間占拠する行動形態へと変化する状況を述べた（佐野2002）。

（3） 季節的標高移動と石材補給の構図

後期旧石器時代における集団の遊動領域と遊動モデルの代表的な仮説についていくつかを示してみた。後期旧

石器時代後半においては南関東では台地単位あるいは隣接台地間を含む年間遊動領域をもつ集団と、中部高地を年間領域にもつ集団の存在が対峙され、その集団間を交換によって黒曜石が動くという構図は、このなかで比較的多くみられるものである。一方、その両地域を含むのが年間遊動領域で、その両域を周回するように遊動する集団によって黒曜石が南関東にもたらされたとする仮説もある。

このように多様なモデルが成立し得るのは、当然のことながら過去の集団における遊動の実態がきわめて不可視的なものであるからであり、一定の理論的前提に基づいたより説得力のあるモデル提示が必要となるところであろう。筆者自身は野辺山高原および相模野台地の細石刃石器群の分析を通じて、以下の諸点を留意して遊動領域モデルを組みたてる必要性を認識している。まず第一点は、信州中央高地の細石刃遺跡における立地的特殊性の問題、第二点として信州黒曜石原産地の冬季閉鎖性の問題、第三点として島嶼部神津島産黒曜石の搬入の問題、第四点として相模野台地などにみる信州系黒曜石と神津島系黒曜石の非共存の関係性である。

まず、第一点として上げた信州中央高地の細石刃遺跡における立地的特性の問題であるが、これについては先の鈴木忠司の指摘にもあるように（鈴木前掲）、日本細石刃文化の生活空間（領域）・土地利用形態は「低地・平坦地（平野）型＝平原型」が原則であり、信州の高標高地帯にみられる「高地・平坦地型＝高原型」の立地が特殊例である点をふまえておかなければならない。また、第二点として信州黒曜石原産地の冬季閉鎖性について述べたが、黒曜石の獲得元である和田峠周辺は標高1200～1500m、八ケ岳麦草峠は標高2000m前後を測り、当時この地域は、亜寒帯針葉樹林の森林限界に近い周氷河地域であったとみられる。これらの地域では氷雪や凍結現象により冬季から早春にかけての原石獲得はおそらく困難で、初夏から秋の可能性が考えられる。あわせて高冷地のベリー類などわずかな植物質食料の採取も、冬季には絶望的とみられる。このように平原部の遺跡形成に対し、高原部の遺跡が特殊例であること、かつ山岳部の石材資源獲得についての冬季＝不適期という季節性を考慮した場合、信州黒曜石原産地周辺の高原型の遺跡は、冬季以外の季節に設けられたシーズナルキャンプである可能性を見せているものと考えられる。冬季の寒冷環境への適応戦略として、低標高地帯への季節的な移動が行われていたものと想定したい。こうした高原地帯に隣接する内陸盆地周辺に細石刃石器群の遺跡がみられないことを考え合わせると、遊動先として想定されるのは南関東の諸台地であろう。両地域間は、距離的にしておよそ100km程度、標高差1000m以上を有する。そこで移動事例として想起されるのは、北西ヨーロッパなどにおいてモデル化される季節的な標高移動altitudinal mobilityあるいはトランスヒューマンスtranshumance型と呼ばれるセトルメントシステムであろう（高倉1999）。

一般に狩猟採集民の集落の移動をうながす要因とは食料資源分布の季節的変動であるが、季節的な標高移動についてよく知られるのは、スター・カー遺跡においてグラハムクラークの提示したモデルであろう。クラークは、アカシカが冬季は雪を避けて低地で群れをなし夏季は蚊などのいない高地へ移動するという習性があることから、アカシカを主に狩猟したスター・カー遺跡の集団は、冬季にはスター・カーのような低地に占拠し、夏季はアカシカを追って高地に移動したという仮説である（Clark1972）。また、阿子島はマドレーヌ文化期における適応戦略と遺跡構造分析をおこなう中で、高度に移動的なその居住様式について述べ、スターディによるトナカイの季節的移動を追った片道600kmの長距離移動仮説（Sturdy1975）や、バーンによるピレネー山脈一帯での高低差をカギとする季節的移動（Bahn1977・1983）すなわちトランスヒューマンス型のセトルメントシステムを紹介する（阿子島1995）。ただ、こうした長距離移動やトランスヒューマンス型のセトルメントシステムのあり方をめぐっては、当然のことながらいくつかの批判点もみられるようであるが（例えばLegge and Rowley-Conwy 1988）、依然そのモデルの有効性についての価値は失なわれていない。

ちなみに陸上哺乳類のなかでもっとも長距離の移動をするのはトナカイで、その距離は1000kmにも達するという。夏になるとトナカイは、トナカイゴケを食べるために北上するが、蚊をさけることも移動の重要な移動要素である（高槻1998）。ヨーロッパの場合、移動性の高いトナカイやアカシカを追尾しての移動モデルが組み立てられるが、日本列島の細石刃石器群の場合その捕獲対象獣についてはどうだろうか。列島ではすでに大形獣は絶滅し、シカ類などの中小形獣が捕獲対象獣として想定される。現生態では、日光のニホンジカの場合、夏には

2000m前後の高地で過ごし、冬になって雪が深くなると低地まで降りてくる個体があり、一方では一年中低地にとどまっている個体がいるという（丸山1981）。ニホンジカにとどまらず、歩行を束縛する深雪は哺乳類にとってその移動をうながす大きな要因となる。高冷地においてはそうした生態環境も考慮されよう。

なお、シーズナルキャンプを論証する遺跡形成の季節的判断については、例えば動物遺存体の歯などによる季節査定によるに基くが、日本の後期旧石器時代の開地遺跡では、現状では動物遺存体の出土などはほぼ期待できそうにない。高倉純は、広域に散在する考古学的記録の中に季節的な標高移動を認めようとする場合、複数の遺跡間の関係性と相互補完性を見出す作業が重要であろうとし、例えば遺跡間の組成変異に相互補完性を見出すことが必要であるとする（高倉前掲）。しかし全体として比較的単相な組成をみせる中部関東の細石刃石器群から相互補完性を導きだすのは、現状ではきわめて困難な作業である。

さて、ここで再び南関東の細石刃石器群に立ち戻ろう。さきに第三点として島嶼部神津島産黒曜石の搬入の問題を掲げたが、航海等多大な労力と危険を伴う島嶼部の神津島産黒曜石の獲得作業は、きわめて目的的な直接採取行動として任を負った派遣グループによるものと考えられようか。神津島産黒曜石の獲得にあっては、伊豆半島の突端から直接的に神津島に渡航する最短ルートか、あるいは伊豆半島東の中間付近から大島・新島等を経由して神津島に渡るルートが想定できるが、いずれにせよ伊豆半島を領域にもつ集団が派遣グループを出し、神津島産黒曜石の獲得あたったと想定される。将来的には伊豆半島のどこかで、神津島産黒曜石の補給中継の遺跡が発見される可能性があろう。また、第四点として相模野台地の細石刃石器群における信州系黒曜石と神津島系黒曜石の非共存の関係性について問題視したが、これはむしろ相互補完的な原材供給のあり方としてとらえられないだろうか。つまり信州産原石の獲得の不可能な時期は、神津島産原石が獲得・補給されるという補完的なあり方である。

以上をもとに、集団のセトルメントシステムについては、あくまで仮説としてだが以下のあり方を想定できる。おそらく黒曜石需給ゾーンで示される消費領域内には、いくつかの集団が遊動生活を展開していたものと考えられる。まず、相模野台地や武蔵野台地など南関東の平原部を領域とした集団群内には、拠点分散型のセトルメントシステムがうかがえ、一～数世帯の小規模な単位集団が複数散在したものと考えられた。この点からは、台地内あるいは台地相互において分散した遊動生活を行い、非回帰的な居住地形成を行う集団の姿が想定される。こうしたセトルメントシステム形成の背景には、捕獲予測性の低い分散した資源＝狩猟対象獣に対する捕食戦略の展開があったのであろう（Dyson-hudson and Smith 1978、仲田2001）。

南関東の諸台地に展開する集団の中には、夏季には信州中央高地に遊動し、夏季の高原地帯での狩猟活動とあわせて黒曜石原石の獲得をおこなうシーズナルキャンプを設営するグループがあった。矢出川遺跡の神津島産黒曜石は、高原地帯へと上るこうした遊動の過程で沿岸部からもたらされたものと考えられる。信州中央高地の野辺山高原では、矢出川湿原周辺の3㎢四方程の箱庭的景観の中に細石刃遺跡が群立するが、この水辺の狭いパッチ状環境の中にあっての狩猟対象獣密度とその捕獲予測性は、南関東の諸台地と比較すると相応に高いものと考えられ、したがってこの地が例年のシーズナルキャンプとして選ばれた理由とみられよう。信州中央高地に遊動したグループは、冬季までには原産地の閉鎖とおそらくは狩猟対象獣の移動に伴って高原地帯を下り、平原部の諸台地へと標高移動を行ったものと想定される。その際、原産地から野辺山高原の矢出川遺跡などの補給地点に一旦集積された黒曜石原石あるいは細石刃石核原形などを携え、ふたたび南関東の諸台地に回帰し、他のグループに信州産黒曜石をもたらしたものと考えたい。このグループは、距離にして100ｋｍ、標高にしておよそ1000m差の山岳高原地帯と沿岸部平原地帯という異なる生態環境において、循環遊動をおこなったものと想定される（註4）。他方、愛鷹・箱根から伊豆半島周辺を活動領域に含む集団では、グループの一部から派遣部隊を出して、神津島産黒曜石の獲得がなされていた。海洋島嶼部の黒曜石の獲得は航海というリスクを伴うことから、あくまで信州産黒曜石の消費を補完するように供給されたものと考えておきたい。

註

（1） 黒曜石の産状パターンに関しては、和田峠周辺や蓼科周辺の地質構造の踏査を実施している河内晋平前信州大学大学教授にご教示をいただいた。

（2） 京都大学原子炉実験所藁科哲男氏のご教示によれば、国内の黒曜石は100以上の化学組成群に分離可能であるという。

（3） 南関東における細石刃石器群の黒曜石需給ラインについては橋本勝雄の見解がある。橋本は、信州産の黒曜石の分布北上限界が古鬼怒川ラインにあり、高原山産黒曜石の南下限界が古利根川ラインにあり、伊豆箱根産の黒曜石の北限ラインが相模野-武蔵野台地南半にあるとする（橋本1998）。妥当な予測と思われるが、正確さを規するためにはいずれにしても武蔵野・下総の細石刃石器群においての原産地同定の積み重ねが望まれるところであろう。

（4） こうした高標高地帯と低標高地帯とを対比した標高移動モデルの他、沿岸部と内陸部といった生態地理空間の対比において、「沿岸部－内陸部の相互関係 coast/inland interaction」と呼ばれる（Bang-Andersen1996）居住形態モデルもみられ、例えば高倉純はこのモデルによって北海道における石刃鏃石器群の移動・居住形態の説明を試みる（高倉 1998）。ただ、中部関東における細石刃石器群の段階にあっては、海洋適応に基く生業展開を想定しがたいため、沿岸部－内陸部といった説明概念はあてはまらないものと考えられる。

引用参考文献

阿子島香　1996　「マドレーヌ文化期における適応戦略と遺跡構造分析」『古代』101　pp.1-29　早稲田大学考古学会

安蒜政雄　1979　「日本の細石核」『駿台史学』47 pp.152-183 駿台史学会

安蒜政雄　1990　「先土器時代人の生活空間－先土器時代のムラ」『日本村落史講座　景観 』2　pp.3-22　雄山閣

稲田孝司　1984　「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』30-4　pp17-37 考古学研究会

稲田孝司　1996　『恩原2遺跡』恩原2遺跡発掘調査団

稲田孝司　1996　「恩原に居住した旧石器時代の回帰遊動集団と植民集団」『恩原２遺跡』pp.182-226　恩原2遺跡発掘調査団

小野昭　1975　「先土器時代石材運搬論ノート」『考古学研究』21-4　9-22頁　考古学研究会

角張淳一　1991　「黒曜石原産地遺跡と消費地遺跡のダイナミズム」　『先史考古学論集』pp.25-82

金山喜昭　1992　「先史時代黒曜石研究史」　『法政考古学』17　pp.51-71　法政考古学会

木村英明　1995　「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学』31　pp.3-64　北海道考古学会

木村英明　1997　『シベリアの旧石器文化』　北海道大学図書刊行会

サーリンズ,マーシャル　山内昶訳　1984　『石器時代の経済学』法政大学出版局

酒井潤一　1993　「地質学的調査」『長野県黒耀石原産地遺跡分布調査報告書（和田村・男女倉谷）』Ⅲ　pp.27-39 和田村教育委員会

佐藤宏之　1992　「北方系削片系細石刃石器群と定住化仮説」　『法政大学大学院紀要』29 pp.55-83 法政大学大学院

佐藤宏之　1993　「細石刃石器群の行動論的分析のための視点」　『細石刃文化研究の新たなる展開』　pp.299-307　八ケ岳旧石器研究グループ

佐藤宏之　1995　「技術的組織・変形論・石材受給」『考古学研究』165 pp.27-53　考古学研究会

佐野勝宏　2002　「北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態」　『考古学研究』49-1　pp.38-58

島田和高　1998　「中部日本南部における旧石器地域社会の一様相－砂川期における地区の成り立ちと地域の構造－」『駿台史学』102　pp.1-49　駿台史学会

鈴木忠司1983「日本細石刃文化の地理的背景」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』pp.1-24　古代學協会

鈴木正男ほか　1990　「黒曜石の分析」『柳又遺跡Ａ地点』Ⅰ　pp.185-188　國學院大學考古学研究室

鈴木正男・戸村健児　1991　「中ッ原第５遺跡Ｂ地点の黒曜石の分析」『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』pp.202-206　八ケ岳旧石器研究グループ

高槻成紀1992『北に生きるシカたち』　どうぶつ社

高倉純　1998　「遺跡間変異と移動・居住形態復元の諸問題-北西ヨーロッパと日本における研究動向-」『日本考古学』7 pp.75-94　日本考古学協会

高倉純　1998　「北海道における石刃鏃石器群の研究―移動・居住形態の検討を中心に―」　『考古学研究』44－4　pp.55-78 考古学研究会

田中英司編　1995　『横田遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田村隆編　1987　『研究紀要―先土器時代石材の研究―』11　千葉県文化財センター

田村隆　1992　「石材についての諸問題―特に関東地方の石材採取戦略について―」『考古学ジャーナル』345　pp.2-7　ニューサイエンス社

田村隆　1992　「遠い山・黒い石―武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察―」『先史考古学論集』2　pp.1-46

田村隆 1993「野辺山を視る眼－石器の行動理論構築に向けて－」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅱ　pp. 280－298　八ケ岳旧石器研究グループ

千葉県文化財センター　1987　『研究紀要』11

立木宏明　1996　『樽口遺跡』　朝日村教育委員会

堤　　隆　1996　「ＮＫ－謎の黒曜石原産地－」　『和田村の黒曜石をめぐる課題』 pp.64-70　和田村教育委員会

堤　　隆　1998　「氷期の終末と細石刃文化の出現」　『科学』68-4　pp329-336　岩波書店

常木晃　1991　「考古学における交換研究のための覚書（1）」『東海大学校地内遺跡調査報告』1　pp.191-201 東海大学校地内遺跡調査団

常木晃　1992　「考古学における交換研究のための覚書（2）」『東海大学校地内遺跡調査報告』2　pp.178－191 東海大学校地内遺跡調査団

中山真二・米田　寛　『武蔵国分寺跡調査報告―北西地域（多摩蘭坂遺跡）の調査―』4　府中市教育委員会

仲田大人　2001　「南関東における縄文時代草創期前半の居住形態-最適化モデルによる予備的検討-」『先史考古学論集』10 pp.73-116

長野県埋蔵文化財センター　2000　『星光山荘Ａ・星光山荘Ｂ・西岡Ａ・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平Ｂ・日向林Ａ・日向林Ｂ・七ツ栗・普光田―縄文～近世編―』

二宮修治　1989　「黒曜石石器の原産地推定」　『函南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘報告書（Ⅰ）』pp.537-552 函南町教育委員会

二宮修治・大沢真澄　1988　「月見野遺跡群上野遺跡第１地点出土黒曜石石器の原産地推定」　『大和のあけぼの』Ⅱ pp.137-154　大和市教育委員会

橋本勝雄 1993「日本細石器文化研究の現状と課題」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅱ　pp.103-114 八ケ岳旧石器研究グループ

細野高伯 1991「群馬県芳見沢遺跡の調査」　『第四回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨』pp.29-33　長野県旧石器文化研究交流会

松原和也　1999　『越遺跡』　開田村教育委員会

丸山直樹　1981　「ニホンジカの季節的移動と集合様式に関する研究」『東京農工大学農学部学

望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里　1994　「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について―沼津市土手上遺跡ＢＢⅤ層の原産地推定から―」『静岡県考古学研究』26　pp.64-71　静岡県考古学会

望月明彦　1995　「蛍光Ｘ線分析による出土黒曜石石器群の原産地同定」　『山中城跡三ノ丸第１地点』　三島市教育委員会

望月明彦・堤　隆　1997　「相模野台地の細石刃石器群の黒曜石利用に関する研究」　『大和市史研究』23　　pp.1-36　大和市役所

望月明彦　1998　「中部地方・関東地方における長野県産黒曜石の流通」『長野県旧石器文化研究交流会発表資料』10　pp.94-99 長野県旧石器文化研究交流会

望月明彦　1997　「傾向Ｘ線分析による横田遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『埼玉考古』別冊５pp.182-213　埼玉考古学

会
望月明彦　2000　「黒曜石山地推定報告」　『武蔵国分寺跡調査報告―北西地域（多摩蘭坂遺跡）の調査―』４　pp.163-170　府中市教育委員会
八ケ岳旧石器研究グループ　1991　『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』
八ケ岳旧石器研究グループ　1993　『細石刃文化研究の新たなる展開』
八ケ岳旧石器研究グループ　1996　『中ッ原第１遺跡Ｇ地点の研究』Ⅱ
和田村教育委員会　1993　『長野県黒耀石原産地遺跡分布調査報告書（和田村・男女倉谷）』Ⅲ
藁科哲男　1995　「石器原材の産地分析」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』（全面改訂版）　クバプロ　275-285頁
藁科哲男・東村武信　1995　「中ッ原遺跡群出土石器の石材産地分析」『中ッ原第１遺跡Ｇ地点の研究』Ⅰ　pp.101-110　八ケ岳旧石器研究グループ
藁科哲男　1996「野辺山出土旧石器の石材産地分析」『中ッ原第１遺跡Ｇ地点の研究』　pp.95-106 八ケ岳旧石器研究グループ
Bahn,P.　1977 Seasonal Migration in Southwestern France during the Late Glacial Period. Journal of Anthropological Science. 4　pp.245-257
Bahn,P. 1983 Late Pleistocene Economies of the French Pyrenees.In Hunter-Gatherer Economy in Prehistory:A European Perspective. pp.168-186 Cambridge University Press.
Binford,L.R. 1979 Organization and formation processes,Looking at curated technologies. Journal of Anthropological Research35.pp.255-273
Cann,J.R. and C.Renfrew,　1964　The Characterization of Obsidian and its Application to the Mediterranean Region. PPS.30, pp111-133
Dyson-hudson,R. and E.A.Smith　1978 Human territoriality :An ecological reassesment. American Anthropologist 80-1 .pp.21-40
Ericson, J.E. 1977 Egalitarian Exchange systems in California. A Preliminary View. Exchange systems in Prehistory. pp.109-126
Hodder ,I. 1974 Regression Analysis of Stone Trade and Marketing Pattern. World Archaeology 6.　pp.172-189
Legge, A.J. and Rowley-Conwy,P.A. 1988 Star Carr Revisited:A Re-analysis of the Large Mammals. Center for Extra-Mural Studies,Birkbeck College, University of London.
Renfrew,C.　1975　Trade as Action at a Distance. Questions of Integration and Communication. Ancient Civilization and Trade, pp.3-59
Sidrys, R. 1976　Classic Maya Trade. American Antiquity 41. pp.449-464
Wiessner, P.　1982　Beyond　willow smoke and dog's tails. A comment on Binford's analysis of hunter-gatherer settlement systyms.　American Antiquity 47,pp171-178

※　本稿は、2002年の中四国旧石器文化談話会において「中部関東地方の細石刃石器群の石材需給とセトルメントシステム」として発表したものに、一部加筆した内容となっている。

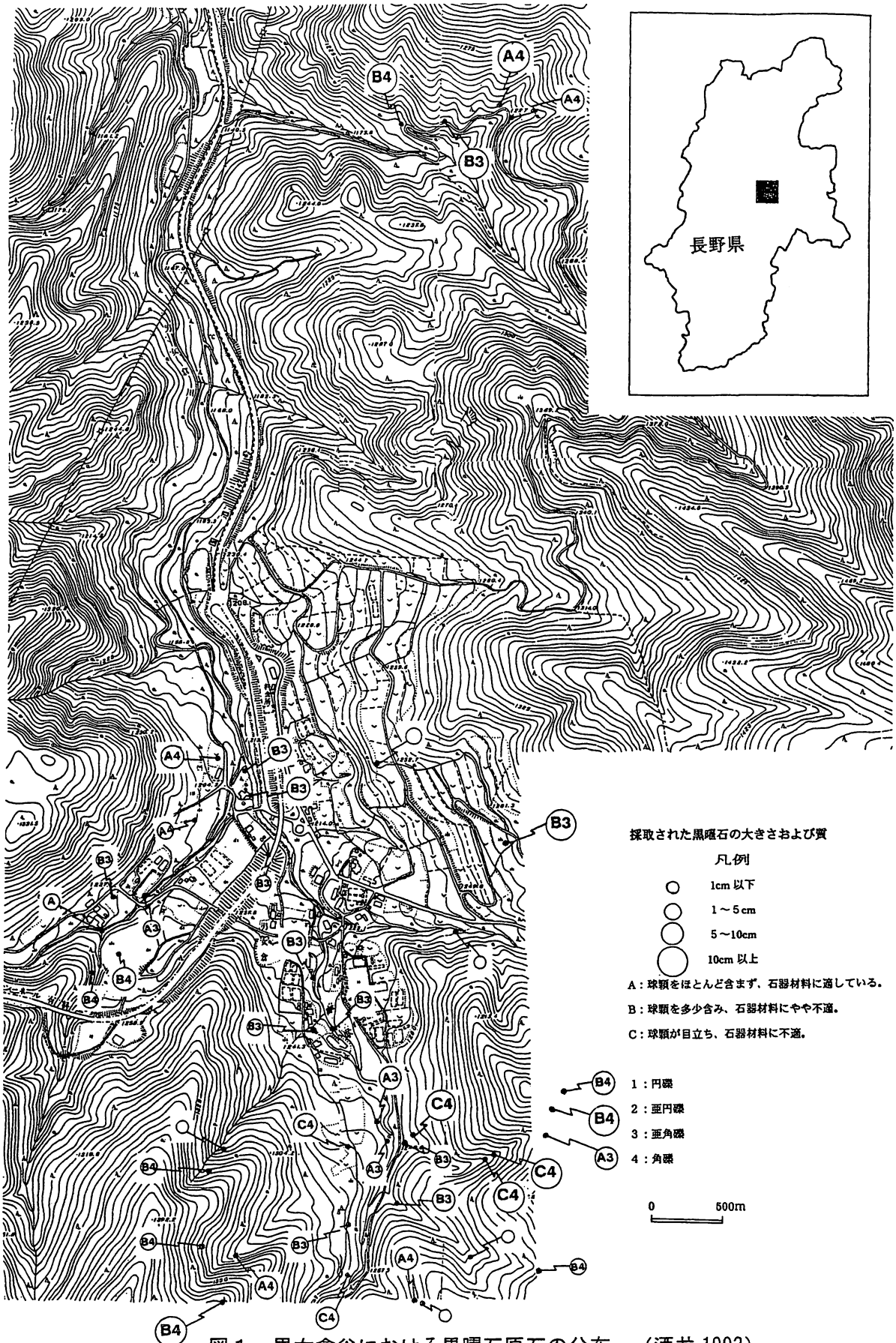


図１　男女倉谷における黒曜石原石の分布　（酒井 1993）

表１　中部関東地方の細石刃石器群における黒曜石の産地別構成

遺跡名	信州系				伊豆箱根系		神津島系	NK系		
	和田峠系	男女倉系	霧ヶ峰系	麦草系	畑宿	柏峠	神津島系	NK系	推定総数	備考
矢出川Ⅰ	2		5	6			5	4	22	
中ッ原5B	1	1	6	6				9	23	
中ッ原1G			1	26				9	36	

（藁科 1995,1996）より作表

遺跡名	信州系				伊豆箱根系		神津島系	男鹿系		
	和田峠系	男女倉系	霧ヶ峰系	蓼科系	畑宿	柏峠	神津島系	男鹿系	推定総数	備考
越	44		36					1	81	

（望月 1999）より作表

遺跡名	信州系				伊豆箱根系		神津島系	男鹿系		
	和田峠		星ケ塔						推定総数	備考
柳又A	6		4						10	剥片10点各時期混じる？

（鈴木 1990）より作表

遺跡名	信州系				伊豆箱根系		神津島系		
	和田峠系	男女倉系	霧ヶ峰系	蓼科系	畑宿	柏峠	神津島系	推定総数	備考
市之関前田	19							19	細石刃関係のみ

（藁科・堤、未発表データ）より作表

遺跡名	信州系				伊豆箱根系		神津島系		
	和田峠系	男女倉系	霧ヶ峰系	蓼科系	畑宿	柏峠	神津島系	推定総数	備考
横田	92		46	2				140	細石刃関係のみ
多摩蘭坂	152		2				1	155	

（望月 1997）より作表

遺跡名	信州系				伊豆箱根系		神津島系	
	和田峠系	男女倉系	霧ヶ峰系	蓼科系	畑宿	柏峠	神津島系	推定総数
中見代Ⅲ	1			1	1	2	139	145
山中城三の丸1	13		12	4	2	5	36	72
上原Ⅰ	3		11	6		4	616	640

（望月 1995）より作表

遺跡名	信州系				伊豆箱根系		神津島系	
	和田峠系	男女倉系	霧ヶ峰系	蓼科系	畑宿	柏峠	神津島系	推定総数
大奴田場A第Ⅰ文化	35		5		1	2	1	45
柳沢C第Ⅱ文化層	1		2		1		2	6
月見野上野1第Ⅲ文化層	4		3	5	1		3	16

（二宮・大沢 1988、二宮 1989）より作表

表２　矢出川第Ⅰ遺跡の細石刃石器群の産地構成

由井茂也 ＋ 堤隆資料　産地推定結果					土屋忠芳資料　産地推定結果					（由井＋堤+土屋＝推定結果）	
エリア	判別群	記号	試料数	%	エリア	判別群	記号	試料数	%	試料数	%
和田(WO)	ブドウ沢	WOBD	0	0	和田(WO)	ブドウ沢	WOBD	0	0	0	0
	牧ヶ沢	WOMS	0	0		牧ヶ沢	WOMS	0	0	0	0
	高松沢	WOTM	0	0		高松沢	WOTM	0	0	0	0
和田(WD)	芙蓉ライト	WDHY	3	2.08	和田(WD)	芙蓉ライト	WDHY	1	1.18	4	1.74
	鷹山	WDTY	2	1.39		鷹山	WDTY	1	1.18	3	1.31
	小深沢	WDKB	0	0		小深沢	WDKB	1	1.18	1	0.43
	土屋橋北	WDTK	0	0		土屋橋北	WDTK	0	0	0	0
	土屋橋西	WDTN	0	0		土屋橋西	WDTN	1	1.18	1	0.43
	土屋橋南	WDTM	1	0.69		土屋橋南	WDTM	0	0	1	0.43
	古峠	WDHT	0	0		古峠	WDHT	0	0	0	0
鷸鈎	星ヶ台	SWHD	26	18.06	鷸鈎	星ヶ台	SWHD	20	23.53	46	20.13
蠍科	冷山	TSTY	41	28.47	蠍科	冷山	TSTY	25	29.41	66	28.82
	双子山	TSHG	0	0		双子山	TSHG	0	0	0	0
	擂鉢山	TSSB	0	0		擂鉢山	TSSB	0	0	0	0
天城	柏峠1	AGKT	0	0	天城	柏峠1	AGKT	0	0	0	0
箱根	畑宿	HNHJ	0	0	箱根	畑宿	HNHJ	0	0	0	0
	鍛冶屋	HNKJ	0	0		鍛冶屋	HNKJ	0	0	0	0
	黒岩橋	HNKI	0	0		黒岩橋	HNKI	0	0	0	0
	上多賀	HNKT	0	0		上多賀	HNKT	0	0	0	0
	芦ノ湯	HNAY	0	0		芦ノ湯	HNAY	0	0	0	0
神津島	恩馳島	KZOB	53	36.81	神津島	恩馳島	KZOB	25	29.41	78	34.06
	砂糠崎	KZSN	0	0		砂糠崎	KZSN	0	0	0	0
高原山	甘湯沢	THAY	0	0	高原山	甘湯沢	THAY	0	0	0	0
	七尋沢	THNH	0	0		七尋沢	THNH	0	0	0	0
新津	金津	NTKT	0	0	新津	金津	NTKT	0	0	0	0
新発田	板山	SBIY	0	0	新発田	板山	SBIY	0	0	0	0
深浦	八森山	HUHM	0	0	深浦	八森山	HUHM	0	0	0	0
木造	出来島	KDDK	0	0	木造	出来島	KDDK	0	0	0	0
男鹿	金ヶ崎	OGKS	0	0	男鹿	金ヶ崎	OGKS	0	0	0	0
	脇本	OGWM	0	0		脇本	OGWM	0	0	0	0
羽黒	月山	HGGS	0	0	羽黒	月山	HGGS	0	0	0	0
	今野川	HGIN	0	0		今野川	HGIN	0	0	0	0
北上川	折居1群	KKO1	0	0	北上川	折居1群	KKO1	0	0	0	0
	折居2群	KKO2	0	0		折居2群	KKO2	0	0	0	0
	折居3群	KKO3	0	0		折居3群	KKO3	0	0	0	0
宮崎	湯ノ倉	MZYK	0	0	宮崎	湯ノ倉	MZYK	0	0	0	0
仙台	秋保1群	SDA1	0	0	仙台	秋保1群	SDA1	0	0	0	0
	秋保2群	SDA2	0	0		秋保2群	SDA2	0	0	0	0
色麻	根岸	SMNG	0	0	色麻	根岸	SMNG	0	0	0	0
塩竈	塩竈港群	SGSG	0	0	塩竈	塩竈港群	SGSG	0	0	0	0
小泊	折腰内	KDOK	0	0	小泊	折腰内	KDOK	0	0	0	0
魚津	草月上野	UTHT	0	0	魚津	草月上野	UTHT	0	0	0	0
高岡	二上山	TOFK	0	0	高岡	二上山	TOFK	0	0	0	0
佐渡	真光寺	SDSK	0	0	佐渡	真光寺	SDSK	0	0	0	0
	金井二ッ坂	SDKH	0	0		金井二ッ坂	SDKH	0	0	0	0
隠岐	久見	OKHM	0	0	隠岐	久見	OKHM	0	0	0	0
	岬地区	OKMT	0	0		岬地区	OKMT	0	0	0	0
	箕浦	OKMU	0	0		箕浦	OKMU	0	0	0	0
白滝	8号沢	STHG	0	0	白滝	8号沢	STHG	0	0	0	0
	黒曜の沢	STKY	0	0		黒曜の沢	STKY	0	0	0	0
	赤石山頂	STSC	0	0		赤石山頂	STSC	0	0	0	0
赤井川	曲川	AIMK	0	0	赤井川	曲川	AIMK	0	0	0	0
豊浦	豊泉	TUTI	0	0	豊浦	豊泉	TUTI	0	0	0	0
置戸	安住	ODAZ	0	0	置戸	安住	ODAZ	0	0	0	0
十勝	三股	TKMM	0	0	十勝	三股	TKMM	0	0	0	0
名寄	布川	NYHA	0	0	名寄	布川	NYHA	0	0	0	0
旭川	高砂台	AKTS	0	0	旭川	高砂台	AKTS	0	0	0	0
	春光台	AKSK	0	0		春光台	AKSK	0	0	0	0
不明産地1	NK	NK	17	11.81	不明産地1	NK	NK	11	12.94	28	12.22
不明産地2	XO	XO	1	0.69	不明産地2	XO	XO	0	0	1	0.43
下呂石		GERO	0	0	下呂石		GERO	0	0	0	0
合計			144	100	合計			85	100.01	229	100

※　由井ほかの試料の内訳は、由井試料 132 点、堤試料 12 点。　（望月・堤、未発表データ）より作表

※　分析試料 229 点中、細石刃石核は 206 点、細石刃石核再生剥片は 23 点。

表３　相模野台地の細石刃石器群の産地構成

	信州系				伊豆箱根系		神津島系		
遺跡名	和田峠系	男女倉系	霧ヶ峰系	蓼科系	畑宿	柏峠	神津島系	推定総数	備考
上草柳第1地点第Ⅰ文化層Aブロック	－	－	－	－	14	－	178	192	
上草柳第1地点第Ⅰ文化層Bブロック	－	－	－	－	38	18	82	138	
上草柳第3地点中央第1地点	138	－	－	－	－	－	－	138	
上草柳第3地点東	2	－	－	－	－	－	－	2	
上草柳第4地点	－	－	－	－	－	－	2	2	
福田札ノ辻第Ⅰ文化層	－	－	－	－	－	－	1	1	
長堀南第Ⅱ文化層	2	－	－	－	－	－	－	2	
台山第Ⅱ文化層1ブロック	6	－	14	25	－	10	－	55	
台山第Ⅱ文化層2ブロック	233	1	84	4	－	370	1	693	
柏ヶ谷長ヲサ第Ⅳ文化層	－	－	－	－	－	－	349	349	
上和田城山第Ⅱ文化層Aブロック	46	－	22	－	－	－	－	68	
上和田城山第Ⅱ文化層Bブロック	23	－	34	－	－	－	－	57	
上和田城山第Ⅱ文化層Cブロック	393	－	1	－	－	－	－	394	
草柳中村第Ⅰ文化層1ブロック	1	－	5	－	－	－	1	7	
草柳中村第Ⅰ文化層2ブロック	－	－	14	58	1	－	－	72	
かしわ台駅前第Ⅰ文化層	－	－	－	－	－	7	273	280	
かしわ台駅前第Ⅱ文化層	－	－	－	－	－	－	97	97	
報恩寺	－	－	－	1	12	－	185	198	

（望月・堤　1997他）より作表

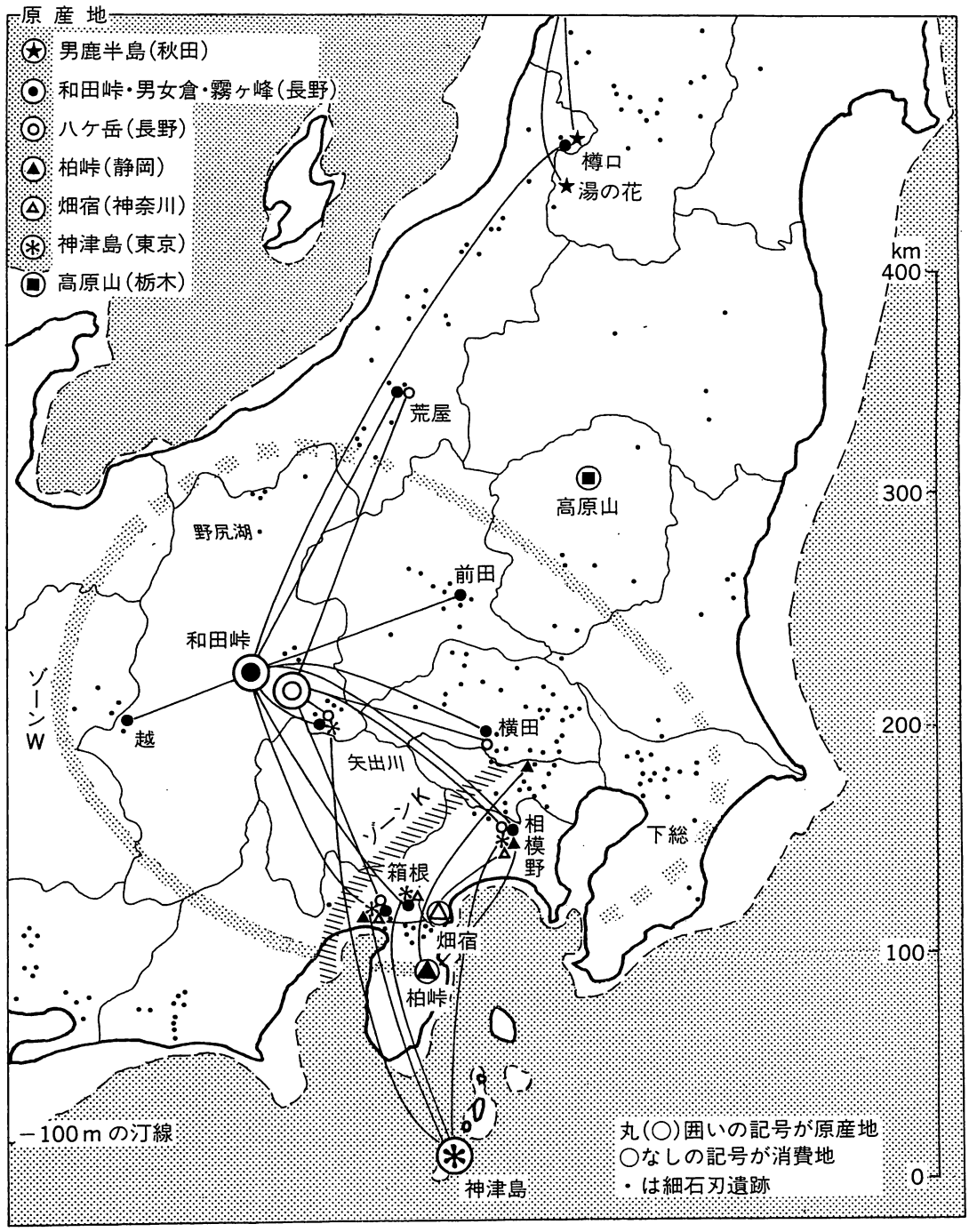


図２　中部・関東地方の細石刃石器群における黒曜石利用の動態

表４　細石刃文化遺跡の標高　（鈴木 1983）

地方名	遺跡数	標　高	～100	～200	～300	～400	～500	～600	～700	～800	～900	～1000	～1100	～1200	～1300	～1400	～1500	平均m
北海道	遺跡数	78	25	38	7	2	5	1										156
	%		32%	49%	9%	3%	6%	1%										
東北	遺跡数	13	5	6	2													130
	%		38%	46%	16%													
関東	遺跡数	64	50	12			2											75
	%		78%	19%			3%											
中部	遺跡数	83	40	10	4	2		2	2					1	7	15		456
	%		48%	12%	5%	2%		2%	2%					1%	8%	18%		
近・中・四	遺跡数	25	24							1								62
	%		96%							4%								
九州	遺跡数	219	101	61	28	7	10	7	4		1							159
	%		46%	28%	13%	3%	5%	3%	1%		1%							
計	遺跡数	482	245	127	41	11	17	10	6	1	1			1	7	15		
	%		51%	26%	8%	2%	3%	2%	1%	1%	1%			1%	1%	3%		

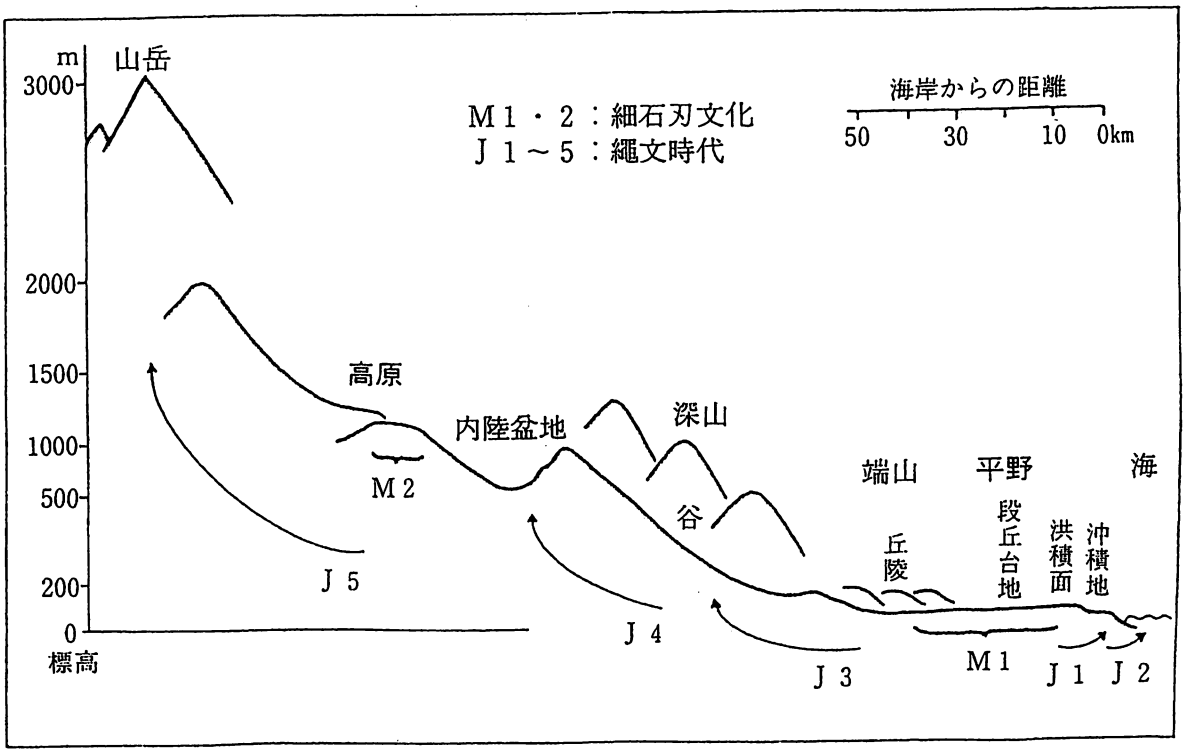


図３　細石刃文化の生活空間　（鈴木 1983）

長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群の関係

― 段階編年論を脱却した移行期研究の現在 ―

谷口 康浩

1．移行期研究の転換点

細石刃石器群の終末から隆起線文土器の段階までの間の石器群の移行過程は単純でない。また、その間には土器出現という画期的な変化も生じている。時代区分論に絡む複雑な問題がそこには含まれており、研究史の蓄積にもかかわらず依然として多くの点で見解が錯綜している現状がある。本論では、長者久保・神子柴石器群[1]と細石刃石器群の関係を中心に、旧石器－縄文移行期[2]の論点を整理する。

長野県神子柴遺跡と青森県長者久保遺跡の発見によって本格的に開始した移行期の研究は、その後の編年研究と隆起線文以前の土器群の発見によって1980年代までに一定の進展を見たが、1990年代に入ると固まりかけた枠組みを再考させるような発見が相次ぎ、新たな段階を迎えたといえる。この状況をカオスと悲観的にみる見方もあるが、筆者はむしろ段階的編年論と膠着した時代区分論を脱却して新たな説明法の模索が始まった点を、研究史の転換点として肯定的に受け止めたい。まず、そのあたりの問題を私自身の認識の推移を通して概観することにする。

（1）柳又遺跡での編年とその後

筆者がこのような問題を考える契機となったのは、1989年から開始した長野県木曾開田高原柳又遺跡の発掘調査であった。指呼の間に隣接するA地点とC地点から、技術的にも石材的にもまったく異なる二種類の細石刃石器群が発見された。A地点のそれは削片系楔形細石刃核を特徴とするものであり、湧別技法との関連性を示す北方系細石刃石器群である。ただし、それは荒屋遺跡や角二山遺跡と同じ技術の直裁の移入ではなく、石材や技術に変容を来たしている点が注意された。一方、C地点のそれは角錐形細石刃核を特徴とするものであり、西南日本に分布する野岳・休場グループに含まれることが明確である。この文字通り対照的な二種類の細石刃石器群の関係が焦点となったが、出土層位の検討から後者が古く前者が新しいことをほぼ明らかにできた。つまり、西南日本的な細石刃石器群から北方系削片系細石刃石器群への変遷が把握されたのである。この変化が示唆する意味は、それに続く土器出現期への動きを知る上でも重大と思われた。そして、中部・南関東地方における細石刃石器群から有舌尖頭器までの石器群の移行過程を、次のような四段階として理解した。現在の認識とは異なるが、当時の用語・概念そのままに引用する（谷口1991）。

段階Ⅰ　西南日本に共通する野岳・休場技法が主流をなし、中部地方北部の北方系細石刃文化と対峙した段階。段階Ⅰ後半には船野型・海老山型細石刃核が広がる。

段階Ⅱ　西南日本的な在来の細石刃文化に代わり、北方系細石刃文化が南漸し、その二次的な分布圏を形成した段階。

段階Ⅲ　北方系の槍先形尖頭器文化である神子柴・長者久保文化が、段階Ⅱの地盤を継承するように出現し、これを契機として類似の槍先形尖頭器を伴う石器群（西之台B地点Ⅲ上層・栗原中丸第Ⅰ文化層・寺尾第Ⅰ文化層など）が派生した段階。

段階Ⅳ　有舌尖頭器が発生し、分布圏を近畿地方から中国・四国地方にまで拡大した段階。隆起線文土器の出現に先行する前半期と以後の後半期に細分される。

このうち段階ⅠⅡを旧石器時代に、段階ⅢⅣを縄文時代草創期前半に位置付けたのは、時代区分原理として土器出現の歴史的評価（近藤1965，小林1974・82など）を踏襲したものである。この四段階区分は徹底的な編年細

分を志向したものではなく、旧石器時代の終末から縄文時代草創期への移行期の基本的な動向を理解するための私なりの枠組みであった。特に、細石刃石器群の後半期に北方系削片系細石刃石器群が南下する動きを見せることは、北方からの情報や人の動きを強く示唆しており、土器の出現や縄文時代への移行にもそれが何らかの役割を果たしたのではないかと予想されたのである。

湧別技法に共通する削片系細石刃技術と荒屋型彫器を組成に含む北方系の細石刃石器群は、東北地方を南下し、信濃川流域ー利根川流域に一つの前線をもって分布していることが知られていた(橋本 1989)。その前線を越境した部分に散在する削片系細石刃石器群については、西海技法との関係も想定され、北方系としての評価は定まっていなかった。南関東の相模野編年においても、角錐形細石刃核が最初に登場し、次いでそれに船野型が加わり、削片系細石刃核は最も後に出現することが層位的に確認されていたが、削片系細石刃核については船野型と同様に九州系の福井型とする見方が強かったようである(堤 1987, 鈴木 1988)。湧別技法との関係を示すやや変容した北方系削片系細石刃石器群は、柳又遺跡とほぼ同時期に調査された長野県中ッ原第5遺跡B地点(堤編 1991)でも見つかり、同報告書の中で諏訪間順(1991)、吉井雅勇(1991)もまた、この新事実を加えて、関東・中部地方における細石刃石器群の段階的変遷を整理した。北方系細石刃文化の南漸の事実がより一層明確となったことで、移行期の研究に一つの新たな基礎事実がもたらされたことは確かである。その限りでは先の枠組みも無意味ではなかったといえる。

ところが、間もなく、このような段階的・系統的な枠組みに整合しない事例が次々と発見されてきた。細石刃石器群と長者久保・神子柴石器群との関係は早くも見直しを余儀なくされた。たとえば、神奈川県勝坂遺跡の石器群は、槍先形尖頭器と削片系細石刃核とが分離しがたい関係をもって共存していることを明らかに示していた(内川・高橋 1993)。先の段階区分に敢えて当てはめれば、段階Ⅱと段階Ⅳ前半の石器群が共伴したことになる。大分県市ノ久保遺跡では船野型細石刃核と神子柴型石斧の共伴が報じられ(綿貫 1993)、長野県上ノ原遺跡でも、角錐形細石刃核を主体とする細石刃石器群とともに神子柴型の局部磨製石斧が出土した(中村 1992)。共伴関係については諸議論があるが、段階Ⅰと段階Ⅲとの関係を疑わせる事例として無視できるものではなかった。

湧別技法に共通する削片系細石刃石器群が、信濃川流域や利根川流域までの一次的な分布圏を超えてさらに南下した事実は確かに指摘できるが、これを契機として北方系石器文化が段階的に波及すると考え、長者久保・神子柴石器群をいわばその第二波として位置付けたことは図式的に過ぎた。長者久保・神子柴石器群を北方系文化とみなしたのも、岡本東三(1979)や稲田孝司(1986)の仮説を仮借したに過ぎず、具体的な検討を欠いていた。

(2) 大平山元Ⅰ遺跡の年代と時代区分の見直し

1998年7月、三宅徹也・川口潤とともに青森県大平山元Ⅰ遺跡の第二次調査に臨んだ。この調査の経験も、移行期に関する自らの認識を大きく転換する機縁となった。1976年に三宅らが行った最初の発掘の際に典型的な長者久保石器群に土器と石鏃が共伴して注目を集め(三宅編 1979)、茨城県後野遺跡A地区(後野遺跡調査団編 1976)とともに、それまで先土器時代終末と考えられてきた長者久保・神子柴文化を縄文時代へと編入する時代区分変更論を惹起したことは周知のとおりである。筆者らが行った第二次調査でも、長者久保石器群のブロックに共伴して、やはり土器と石鏃の存在が再確認された。

問題はその年代の古さであった。出土した土器片の器面には煮炊きに伴うコゲやススが顕著に残されていた。5点の土器片から採取した付着炭化物を試料としてAMSによる ^{14}C年代測定を行ったところ、12,680±140BP～13,780±170BPの測定結果が得られた(中村・辻 1999)。同一個体の破片と推定される試料にしてはバラツキは小さくないが、平均でも13,000BPを超える古さである。それはまた青森県東部において長者久保石器群の包含層の上位に堆積する十和田八戸テフラの ^{14}C年代との整合性からみても妥当な結果であった(谷口・川口 2001)。遺物包含層から採取した木炭片1点からも13,480±70BPの結果が得られていた。11,000BPを超える年代域における ^{14}C年代キャリブレーションは未だ暫定的な段階にあるが、INTCAL98プログラムを用いて暦年較正すると、件の5点の ^{14}C年代値は14,920calBP～16,520calBPに較正される。平均値13,070BPを仮定した場合、較正暦年代は約15,500calBPとなる。これは誤差範囲や較正曲線自体の暫定性を考慮したとしても、晩氷期以前に相当する

古さであり、少なくともベーリング期の温暖期や新ドリアス期の寒冷期などの気候イベントの推定年代を大幅に超えるものであった。

土器出現を縄文時代開始の画期とみる時代区分論を支持してきた者の一人として、この年代測定結果には苦悩せざるを得なかった。縄文土器が縄文時代の最も象徴的な遺物であることは否定しがたい事実であり、また煮炊き用の深鉢が縄文時代の食文化に不可欠であったことが間違いないとしても、土器出現の年代がここまで古くさかのぼることになると、「草創期」の長さを改めて問題にしないわけにいかない。土器出現の時点から完新世に移行して縄文文化がその骨格を確立する早期初頭ないし早期中葉までに、4000年近くの非常に長い模索的な時期が経過したことになるからである(谷口 2001)。土器出現を縄文時代の開始とみると、旧石器時代との区分は確かに付けやすいが、長い模索期を含めた分だけ縄文時代の定義はかえって曖昧となり、縄文時代の最初の三分の一が実はまだ未開花だという奇妙な時代概念とならざるを得ない。

「縄文の起源4500年古く」という新聞報道の見出しによって、さらに^{14}C年代キャリブレーションという技術的な問題に対する無理解が重なって多くの誤解を生んだが、筆者らは縄文土器の起源が世界最古だと主張したつもりはない。むしろ土器出現の古さが惹起する当然の問題として、土器＝新石器時代説が極東には当てはまらないこと、日本の時代区分や縄文時代概念についても枠組みの見直しが必要になったことを指摘したのである(谷口 2000, 谷口・川口 2001)。

「草創期」はもともと山内清男が自らの時代概念と年代観の中で使用した用語である(山内清男 1969)。芹沢長介(1987)・岡本東三(1999)が指摘するように、その年代観に従わない者がそれを仮借し、あまつさえその年代や範囲を次々と拡大解釈して換骨奪胎していくのはおかしい。「縄文草創期」概念に対する異論はこれまでにも多かった。芹沢長介(1972・82)・加藤稔(1992)・稲田孝司(1982) らの晩期旧石器時代・中石器時代説、杉原荘介(1967)の原土器時代説、勅使河原彰(1976・77・98)による旧石器時代・土器起源期説、宮下健司(1980)による土器出現期説など、移行期の独自な位置づけに取り組んできた研究史を改めて回顧する必要がある。これまでの時代概念を支えてきた年代観が大きく揺らいでいる以上、新たな年代観に立って移行期そのものの意味を再論すべき時である。こうした経験をへて筆者もそれまでの考えを改め、撚糸文期などの早期初頭の諸変化を縄文時代開始の画期として位置づけるとともに、「草創期」については旧石器時代とも縄文時代とも異なる「移行期」として暫定的に区分し、その時代的特質を見直していく立場を表明した(谷口 2002b)。

(3) 研究視点の転換

移行期の諸問題がいよいよその複雑さを増す中で、資料増加への期待もさながら、むしろ研究視点そのものの再考が必要になってきた。特に石器群の段階的変遷とか石器文化の伝播系統などの、これまで普通に使われてきた説明法自体が、再吟味されなければならない。より抽象的にいえば、型式・系統的変遷・石器文化などの諸概念の有効性が問われている。旧石器時代から縄文時代への移行過程や土器の起源が追求される中で、移行期にあたる石器群の編年にまず関心が集中したのは当然のことであった。しかし、石器群の変化を段階的変遷として理解し、それを文化の波及的な伝播や影響によって説明するだけでは、移行期の複雑さや多様性はもはや説明しきれないようである。

このような問題を強く意識し移行期石器群の段階編年論や系統論からの脱却を目指したものに、たとえば稲田孝司(1993・2001)と安斎正人(1990・94・96・2002)の論考がある。稲田は長者久保・神子柴石器群と削片系細石刃石器群が共存する事例に注目する。稲田は二つの石器文化がもともと北方系集団の植民とともにもたらされたものと考えているが、それが在来の諸集団に広まっていく過程は均質な波及ではなく、孤立的な植民集団の性格が強い削片系細石刃石器群のグループと、東日本から西日本までの在来集団に急速に受容された長者久保・神子柴石器群のグループが並存し、物資の交換や影響を相互に与える関係があったと考える。また、石器製作のスペシャリストが現れ、分業化が萌芽した可能性も指摘するなど、旧石器時代から縄文時代への移行過程を、具体的な労働としての分業や社会関係に還元して説明しようとする視点を呈示している。安斎の関心は、生業システムの変化が遊動型狩猟採集社会から定住型狩猟採集社会への構造変動を招いた過程にあり、削片系細石刃石器群や

長者久保・神子柴石器群や有舌尖頭器石器群を段階的な石器文化階梯としては捉えず、生業や集団差、地域差などに関係する多様性として見ようとする。長者久保・神子柴石器群についての安斎の見方も知的な刺激に満ちたものであり、大型の石斧や石槍は生活財としてよりも威信財・交換財として受容され、集団関係を円滑に統合するための儀器・祭具として象徴的な意味を最初は持っていたと解釈されている。

一方、年代の見直しは、環境変化やそれに応じた適応過程などのこれまでの移行期の説明に根本的な再構築を迫るものである。たとえば、完新世の環境変化に適応して土器が出現したとか、新ドリアス期相当の寒冷期にシベリア起源の土器文化が伝えられた、という類の説明は、年代的根拠を失った。土器出現の契機は最終氷期の環境下に生じたものであり、完新世における土器の用途論(近藤 1965, 渡辺 1968)をそのまま出現期の土器に当てはめるわけにはいかない。土器の最初の機能やそれがもたらした効果の具体的解明がなされないかぎり、それを時代区分の画期として評価することはできないはずである。土器出現の予想を超える古さと長さを直視すれば、移行期における土器の用途や使用頻度の変遷の検討を経ないまま、土器出現を縄文文化の発現に置換することは飛躍しすぎている。移行期そのものの時代的特質を知った上で時代区分を捉え直す必要があろう。年代の改定は、同時にまた後期旧石器時代の環境と石器群変遷の関係についての従来の枠組みにも当然見直しを迫るものである。本州への細石刃石器群の拡大を晩氷期の環境変化に関連付けて理解してきた通説なども成立困難となった。時代区分を含め全体的な説明の枠組みを再構築する必要に我々は直面しているのである。

2．長者久保・神子柴石器群の多様性と石器のトランスファー

長者久保・神子柴石器群は複数の遺跡を介して製作の場から運用の諸所へと転移している。しかも、その転移は同一集団による内部循環のみならず、製品の贈与交換を通じて複数の集団間にまたがっているらしい。石器群の位相はこうした動きの中の位置によって多様に変化しており、それが単純な理解を拒む一つの理由になっているように思われる。次にこのような問題を概観しながら、当該期の石器群の多様性に接近するための前提的な問題を考えてみたい。

(1) 石器群の多様性を生む諸要因—編年細分論への疑問—

長者久保・神子柴石器群というと、青森県長者久保遺跡や長野県神子柴遺跡・唐沢Ｂ遺跡から出土した典型的な石器群を想起するが、これらの標本資料でさえ器種組成や石器形態が同一でないように実はその内容は多様であって、概念的な外延が必ずしも明確でないことに注意したい。

「神子柴・長者久保文化」(後に「神子柴文化」)の提唱者である岡本東三(1979・94・99)は、神子柴型石斧・槍先形尖頭器の型式と石刃技法の存在を重視してその範囲を限定する。稲田孝司(1986)も同じ見方で「神子柴文化」を限定しており、それが在地集団に吸収されると急速に分解して一部の要素だけが受容されると考える。白石浩之(2003)も典型的な神子柴型石斧や石刃製の加工具類をもつ一群だけに限定して「神子柴・長者久保系石器群」と捉え、有舌尖頭器が発生するまでの大形槍先形尖頭器主体の石器群は「大形木葉形尖頭器石器群」として区別している。しかし、大形の槍先形尖頭器や局部磨製石斧・打製石斧の系統を広く捉えて「神子柴系」と称する場合も多い。森嶋稔(1970)は隆起線文土器に共伴するものを含めて石斧の系統性を重視し、「神子柴系文化」の概念を提起しているが、これは最も範囲を広くとるもう一つの立場である。

当該期の石器群が含み持つ多様性をどのように理解すべきであろうか。

編年的検討を優先する傾向が強かったこれまでの研究史の中では、石斧と槍先形尖頭器の形態分類や石器組成の比較に基づく編年論が数多く提出されてきた。森嶋稔(1970)や加藤稔(1972)によって着手された編年研究は、岡本東三(1979・99・2002)、鈴木忠司(1988)、栗島義明(1988ab・91a)、白石浩之(1992・93・2001)などの精力的な研究に受け継がれ、細分が検討されてきた。しかし、これらの編年は基準が一定ではないために不一致も少なくないのである。たとえば標式資料である長者久保と神子柴の新旧関係について岡本・栗島と白石の見解は逆転

しているし、白草・柳又A・中ッ原5B遺跡などの削片系細石刃石器群と神子柴文化との前後関係でも岡本・栗島と白石は正反対の見方で対立している。神奈川県内の寺尾・勝坂・長堀北遺跡の位置づけなど、細かい齟齬を挙げれば収拾がつかなくなる。こうした錯綜を見るだけでも、移行期石器群の編年に現在なお確実な定点がないことが指摘されるであろう。

多様性の中に年代差として整理すべき部分があることは否定しないが、少なくとも以下のような諸問題が複雑に関係していることを予測すると、編年以前に検討すべき前提的な課題があまりにも多いと言わざるを得ない。

① 石器組成の相違は遺跡間の機能の違いや作業内容の違いに規定されており、集団の行動連鎖の中での遺跡間変異をまず検討すべきであって(加藤1970)、個々の石器群の編年的位置づけの規準とすることは難しいと思える。

② 石器技術は環境や資源特性に応じた生業の戦略に適合したシステムとして選択されているはずであるから、生業や居住形態の地域差が石器群の変異を生む要因として当然無視できない。たとえば、地域的な偏在傾向をみせる石刃や彫器・掻器の有無はむしろその可能性が大きいと見られる。

③ 遺跡周辺における石器石材の分布・種類、入手の見込み、それに基づく維持・管理行動など、その遺跡が置かれていた石材補給の条件によっても、選択される技術や廃棄のあり方が変化し、石器群の多様性を生む要因となる(阿子島1989, 田村1992, 佐藤1995など)。

④ 当該期の主要な器種である石斧は、耐用年数の比較的長い管理的な道具なので、刃部再生などを繰り返してたえず変形していく可能性があり、あまり細かい形態分類は意味をもたないかもしれない(堤 1998a)。また槍先形尖頭器も、遺跡に残されたそれが常に完成品であった訳ではなく、仕上げを控えた原形あるいは製作中の破損品がかなり含まれていると予測される。つまり、最も中核的な器種である石斧や槍先形尖頭器においてさえ、石器の形態差が編年的単位となる型式としての意味をもたないかもしれない。

⑤ 分業論や交換論(稲田1993)を念頭に置くと、熟練製作者による製品とそれ以外の手になる模倣品などの差異が起こり得る。また、威信財・交換財としての製品と生活財としての道具の社会的な位置づけの差(安斎1990)が、石器の形態差や廃棄等の取り扱いの差に反映されるかもしれない。

⑥ 製品の交換が当該期の石器受給に一定の役割を果たしていた可能性があるが、各集団が具体的にどのようなネットワークに接続しているか、その連鎖のどの位置にあるか、いかなる交換レートに従っていたかによって、保有する石器群の内容が変化しうる。

⑦ 土器の有無が旧石器時代と縄文時代とを区分する一般的な規準となっており、なおかつ編年的序列の根拠ともされているが、長者久保・神子柴石器群が二つの時代に分断される事態も起こって、すでに便宜的では済まない問題となっている。土器出現期の遺跡から見つかる土器は1～2個体程度の少数である場合が多く、日常的な調理とか大量の加工処理に使用されたとは考えにくいものであり、より限定した用途が想定される[3)]。土器を保有する遺跡と保有しない遺跡の違いは土器の使用頻度の低さに起因した遺跡間変異であり、土器共伴の有無を編年的位置づけの根拠とすることは疑問である。

ほかにもさまざまな要因が関係しているであろうが、ここに挙げた問題を考慮するだけでも、細別志向の編年論とそれを前提とした系統論が孕む危うさが浮き彫りとなっているのである。

石器群の変異を生むさまざまな要因を考慮しなければ、多様性の本質には接近できない。これは当該期に限った問題ではなく石器研究全体の共通課題であるが、移行期の研究を特に難しくしている諸要因もある。その中から以下本論では、石器の受給システムの質的転換、大型石器の意味、地域性、細石刃と槍先形尖頭器との関係などの問題に注目してみたい。

(2) 転移する石器群の姿—東北地方の場合—

1998年に発掘した青森県大平山元Ⅰ遺跡の石器群は、製作・使用という側面で一つの際立った特徴を示していた。まず注意されるのは、ブロック内で石刃等の剥片剥離や石器の加工を行った形跡があまり見られない点である。石刃用に準備されたと思われる頁岩製の石核がブロック内から出土したが、石刃の剥離をまだほとんど行わ

ない状態で遺棄されていた。若干の剥片剥離は行われているが、ここで行われた石器製作は石鏃などの一部に限られている。別の場所で製作した石刃や加工具類の既製品を持ち込み、若干の使用とメンテナンスを行った程度でまとめて遺棄していた状況が、多くの母岩別資料から窺えた。大きく破損した石器は少なく、多くが完形の姿を保っている。甲高な神子柴型石斧が出土したが、それもまだ肝心の刃付けを行っていない「石斧の原形」であった(谷口編 1999)。

そこで、出土した彫器・掻器などの加工具類 28 点の使用痕分析を畏友堤隆に依頼したところ、掻器 7 点に主に皮革加工と推定される使用痕が認められたが、多くの石器には使用痕がみられないという結果が報告された(堤 1999)。特に彫器には、彫器削片 1 点に使用痕を認めた以外は、製品本体にはいずれも使用痕が残されていなかった。

大平山元Ⅰ遺跡の石器群は、青森県長者久保遺跡の石器群と多くの点で相違しているが、特に注目されるのは石器の消耗度の相違である。長者久保遺跡の場合には、最も数量の多い彫器の大部分に肉眼でも観察できるほどの著しい使用痕が残されている(山内・佐藤 1967)。また、局部磨製石斧も、刃部の裏面側を打ち剥がしながら何度も刃部研磨を繰り返したことが指摘されている。掻器の一部を使用して皮革加工などの作業を行った大平山元Ⅰ遺跡のブロックに対して、長者久保遺跡では彫器をフルに使用した作業を頻繁に行っていた可能性が高い。つまり、二つの遺跡は作業内容や場としての機能が異なるのである。大平山元Ⅰ遺跡の方にだけ土器と石鏃が共伴したのも、土器出現以前・以後という編年的な問題ではなく、こうした作業内容の違いに関係した差異と見るべきである。

山形県八森遺跡桑園地区から出土した石器群も、長者久保・神子柴石器群の典型的な一例であるが、大平山元Ⅰ遺跡や長者久保遺跡とはまた違った内容を示している(佐藤・大川 2003)。槍先形尖頭器と石斧を製作したことが特に顕著であり、多量の調整剥片や未製品・破損品、石斧の刃部を研磨する手持ち砥石など多くの製作関連資料がある。その反面で彫器が稀少という特徴がある。

このように、大平山元Ⅰ遺跡・長者久保遺跡・八森遺跡を比較してみると、石器の製作・使用に関してそれぞれが異なる位相をもつことが分かるが、石刃の製作を行った形跡がない点では共通点を見出せる。大平山元Ⅰ遺跡の第一次調査の出土遺物の中には石核や剥片類も含まれるので、剥片剥離や石器製作をある程度行う別のブロックが近くに存在したかもしれない(三宅編 1979)。しかし長者久保遺跡の場合は、微細で少量のチップ類を除けば、石器製作の痕跡がほとんど無いに等しいのである(福田・古屋敷 2000)。これらの遺跡に残された石刃や掻器・彫器等を製作した場所が別にあるはずである。編年的位置が不明確であるが、岩手県早坂平遺跡(安斎編 1991)などは石刃製作場の実例になるかもしれない。また、國學院大學が調査を継続している北海道今金町美利河遺跡K地点や隣接するC地点の大型石刃製作址との関連性も視野に入れておくべきである。

いずれにせよ、長者久保遺跡や大平山元Ⅰ遺跡のような遺跡が、石刃や石器製作を行う遺跡の存在を前提として存在することは当然認めなければならない。槍先形尖頭器を製作する八森遺跡や石刃を製作する早坂平遺跡を関連づけるならば、石器製作・供給・使用のサイクルとして理解することも不可能ではない。問題はそれが同一集団の行動連鎖の中に納まる規模のものであったかどうかという点にある。硬質頁岩製の石器が一般的な東北地方では、石器の移動の実態を調べることが難しいが、大平山元Ⅰ遺跡に半製品の状態で持ち込まれたホルンフェルス製の石斧原形などは、青森県内ではかなり異質な石材で作られたものであり、同一集団の行動連鎖の範囲(年間遊動領域)を越えた石器の動きがあったことを強く示唆している。

(3) 集中的製作遺跡と消費地との連鎖—関東・中部地方の場合—

槍先形尖頭器を多量に製作していた遺跡が移行期には特徴的に見られるが、特に関東・中部地方に多数が分布する。この種の集中的・専門的な製作遺跡として、長野県下茂内遺跡(近藤 1992)、長野県八風山Ⅵ遺跡(須藤 1999)、新潟県大刈野遺跡(佐藤 1988)、東京都前田耕地遺跡(東京都教育庁生涯学習部文化課 2002)、東京都狭山遺跡(吉田・肥留間 1970, 内野・原川 2003)、群馬県房谷戸遺跡(谷藤・小菅・諸星 1992)などを列挙できる。

そこで製作された製品は、持ち出され分配されて保管や使用の場所に転移していく。神奈川県寺尾遺跡第Ⅰ文

化層の石器群もその一つであり、出土した槍先形尖頭器は他の場所で製作された既製品が搬入されたもので、ここでは細部調整程度の加工しか行われていない(白石 1980)。白石浩之はこれを「細加工場」と捉え、群馬県石山遺跡・千葉県弥三郎第２遺跡等に同じ性格の遺跡が見出せることを指摘した上で、粗割の場から細加工場を経て消費地にいたる石器の流れを論じている(白石 1994)。神奈川県吉岡遺跡Ｃ区(白石・笠井 1999)でも、別の地点である程度成形された槍先形尖頭器の原形を持ち込んで製品に仕上げる作業や折断品を再加工する作業が行われていたことが突き止められている。また、大形の槍先形尖頭器が完形のまま単独で出土する場合も多い(たとえば芹澤 2003)。こうした出土状況は狩猟地に偶然取り残されたと見るよりも、完成された製品が広く持ち運ばれて転移している状況の一場面と考えた方がよい。

一方、石斧の製作遺跡は、神奈川県吉岡遺跡Ａ区(砂田 1998)、東京都多摩ニュータウンNo.796 遺跡(武笠 1999)などで確認されているが、前記の槍先形尖頭器の製作遺跡に比べると遺跡自体が少なく、製作量も少ない。槍先形尖頭器に比べて石斧の耐用年数が長いことが一因であろうか。吉岡遺跡Ａ区では、原石の打ち割りに始まる一貫した製作工程ではなく、ある程度成形が進んだ石斧の原形を持ち込んで製品に仕上げたり、刃部を再加工する工程が主に行われていたらしく、出土した製品以外にここからさらに多数の石斧が持ち出されていたことを示す母岩別資料がある。神子柴遺跡や唐沢Ｂ遺跡の集積状態を念頭に置くと、ある程度専門的に生産する遺跡がほかにも存在していた可能性が強い。

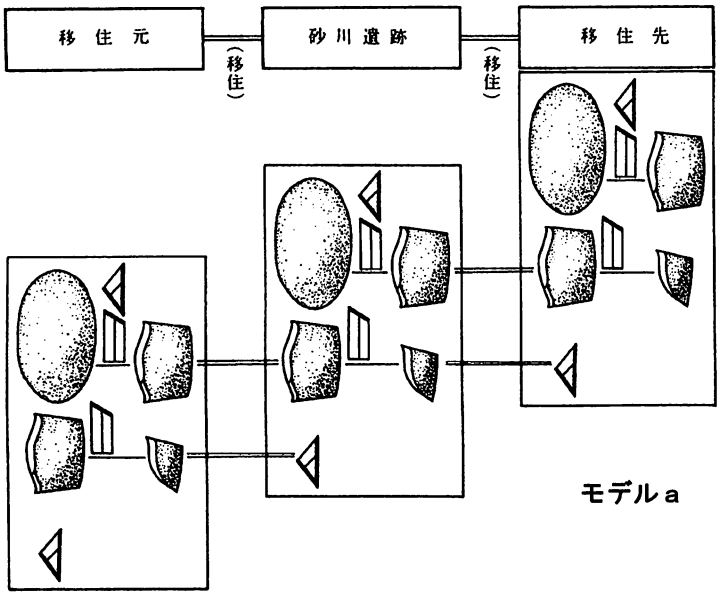
これらの専門的な製作遺跡が単一の集団によって残されたものか、周辺の複数集団が関与したのかは興味あるところであるが、今のところ明確ではない。それでも集中的・専門的な製作遺跡から製品が各集団・各世帯に供給され、運用に回っていたことは間違いない。吉岡遺跡Ａ区・Ｃ区のような中継地の存在が鮮明になってきた意義も大きい。製作遺跡と居住地や種々の消費地とをつなぐ連鎖があり、その中で石器が転移する様子がやはり認められるのである。

（4）石器のトランスファー

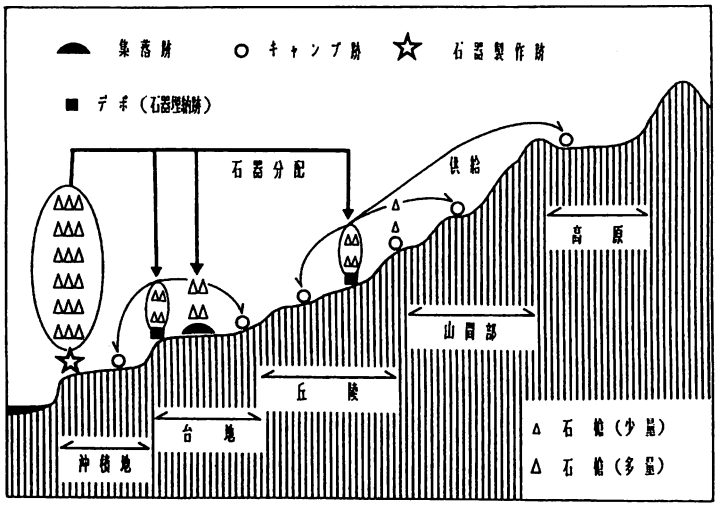
こうしてみると、長者久保・神子柴石器群は製作の場と使用の場を違えているのみならず、さまざまな場の間を動きながら転移していると考えられる。石器受給システムの質的転換としての意義を鮮明にするために、それをやや一般的な形に概念化しておきたい。適切な言葉がなかなか見つからないが、製作地／備蓄地・保管地／中継地／使用地・廃棄地に大別される異なる機能の場の間を石器(特に製品)が転移しながら動くことを「石器のトランスファー」と呼んでおく。

遺跡ごとの石器群の多様性を説明するためのより一般的な概念として「遺跡間変異」「技術的組織」などがある。「遺跡間変異」はある集団の行動連鎖の中で現れる各遺跡での活動内容の違いに注目する概念であり(高倉 1999)、同一集団を念頭に置く循環的な連鎖の意味合いが強い。また、「技術的組織」も石器群の多様性を生む機能・技術・補給・維持・廃棄などの諸条件が有機的に関連していることを強調する概念であり(阿子島 1989)、やはり同一集団の行動の中に組織化された石器群や技術の姿に中心的な関心が置かれている。ここでいう「石器のトランスファー」は、それらの過程とも重複する部分をもつが、むしろ内的循環をはみ出す開放性を特徴としており、分業や集団間での交換システムを示唆する当該期のより開放的な製品の動きに着目する概念として用いたい。分業や交換の歴史の中にこの問題を位置づけるためには、集団の行動や生態を説明するための一般的な概念でなく、当該期の時代性を念頭に置いた概念化が必要と考えた。「石器のトランスファー」は集団間の贈与交換に関係したものと予測しているが、いまそれを単に「交換」や「交易」と呼ばないのは、石器群の遺跡連鎖の具体的な解明が不十分であり集団の行動と集団関係に止揚できる段階にまだないからである。

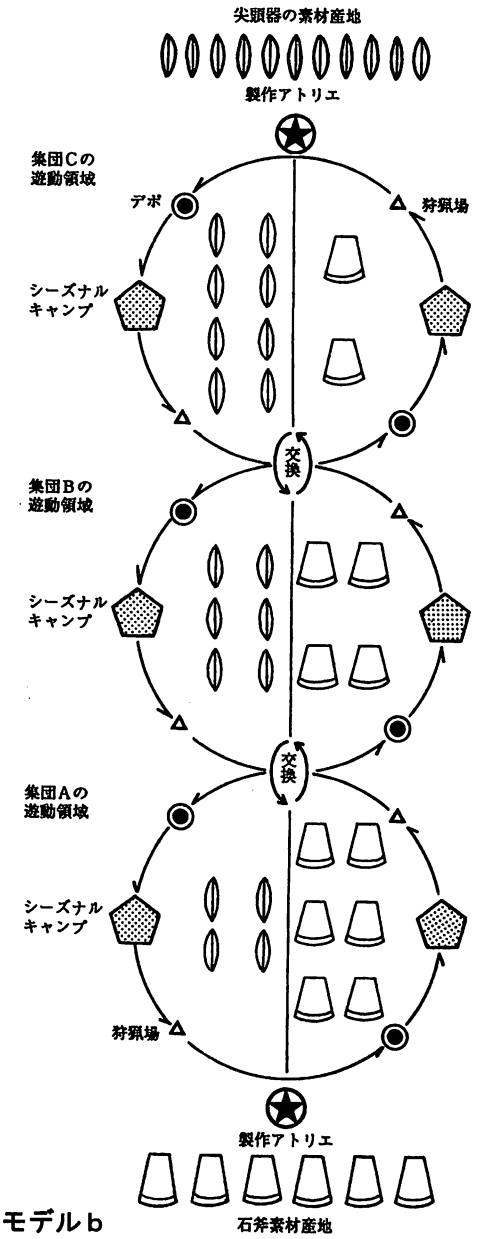
こうした石器の動きとその背後にある石器受給システムに関係した議論は、すでに始まっている。稲田孝司(1993・2001)は、神子柴・長者久保石器群に製作の場と使用の場が分離する特徴があることを指摘し、移動とともに石材補給と消費を繰り返していた旧石器時代の循環的・連鎖的な石器製作との違いをそこに見出している。長者久保・神子柴石器群における石器の受給は、少なくとも砂川期に認められている均質的な石器製作の遺跡連鎖モデル(安蒜 1992；図１ａ，島田 1996)とは異質なものであったことが予測できる。



モデルａ



モデルｃ



モデルｂ

図１　砂川期の内部循環的な石器製作と長者久保・神子柴期の開放的な石器のトランスファー

ａ：均質的な石器製作と石材補給が集団の移動過程で内部循環的に連鎖していく砂川期のモデル（安蒜1992）
ｂ：製作アトリエからの製品供給と交換を通じて各集団の石器運用が外部と連結している長者久保・神子柴期のモデル（堤1998）
ｃ：複数集団による集中的・協同的な石器製作と分配による石器の流れを描いた長者久保・神子柴期のモデル（栗島1995）

堤隆（1998）が描くモデルは現在最も説明的なものであり、細石刃石器群の段階までの素材補給－自己製作の内部循環的な構造に代わって、長者久保・神子柴段階に製品補給の構造が出現したことを的確に論じ、デポの意義を明確にしている。堤のモデルでは、個々の集団によって運用される石器群の内部循環が、製品の交換を通じて外部と連結する「連鎖」形のシステムが想定されている。その連鎖の極に位置付けられているのは石材原産地を擁する専門的製作遺跡であり、製品の発信源からの距離に比例して各遺跡が保有する製品の量が距離逓減すると考えられている（図１ｂ）。なぜこのような新たなシステムが登場するのかが問われるが、堤はその主要因として定住化によって各集団の領域が限定化・固定化してきたことを挙げている。一方、栗島義明（1995）も当該期の石器受給モデルの復元を試みているが、専門的な製作遺跡を複数集団からの派遣と協働によって説明し、各集団への分配がなされたと考える点で、堤のモデルとは異なる（図１ｃ）。専門性をもった製作者の存在と分業化の意義に言及しながらも、石器製作における個々の集団の個別的関与を認めている訳である。

旧石器時代の石器製作システムとは異質な石器の受給システムが当該期に出現することは、以上の諸研究が等しく認めている点であるが、具体的なシステムの復元にはまだ課題もあり、何よりも新たなシステムが出現した理由が重要な論点となってくる。

長者久保・神子柴石器群の出現とともに、石器のトランスファーが特に顕著に表れたのにはそれなりの理由があったはずである。大形槍先形尖頭器の大量製作を行える場所が限定されていたことが一つの要因になっていたと思われるし、またその製作活動が特定の季節・時期に集中していたことも予想される。また、栗島や稲田が説くように専門的な熟練製作者が出現したことも要因の一つかもしれない。しかし、石器のトランスファーを一気に拡大する開放的な構造が現れた理由は、むしろ別のところにあったと思われるのである。

（5）デポの意味をめぐって

大形で優美な槍先形尖頭器や石斧などが多数集積された神子柴遺跡の特異な遺物出土状態をめぐって、墳墓・住居址・デポなどのさまざまな性格論が当初からあった。同様の製品集積状態は唐沢Ｂ遺跡や横倉遺跡でも確認され、類例が増加した今日では長者久保・神子柴石器群に伴う顕著な特徴の一つとして認識されている。デポとしての解釈を呈示した山内清男(1969)は、その背後に製作・運搬・交易の存在を示唆し、無土器新石器時代説の根拠の一つとした。山内の年代観は今日では受け入れがたいものであるが、交換論や分業論は石器のトランスファーが同一集団の内部循環でないことを示唆する点で今なお新鮮な意義を有している。

田中英司(1982)は、神子柴遺跡における遺物の出土状態を原位置論的に検討し、石斧や槍先形尖頭器が着柄された状態で配置ないし集積されていた状態を推定復元した。多数の人間による使用を予定した保管・備蓄の場としての性格が、一層具体性をもって示唆されたのである。

デポの意味について一歩踏み込んだ解釈を示したのは栗島義明(1990)である。栗島は当該期のデポの背景に石器製作のスペシャリストによる集中的な石器製作を想定し、そこから各集団へと製品を供給するシステムが成立していたと見る。斉一性の強い同一器種の石器が集積されたデポⅠ類は、集中的に製作された製品が集団内で分配されたり集団間で交換されていく過程を示す一静止状態として説明されている。神子柴遺跡も複数の集団からスペシャリストが集い互いの製品を交換する場であったが、何らかの理由で交換が不成立となり一部の製品を破壊して遺棄したという。神子柴遺跡の説明は苦しいものだが、製作遺跡と消費地遺跡とがデポ遺跡を介して連鎖していることに触れ、そこに旧石器時代の石器製作との質的な違いを見抜いた点はさすがである。

唐沢Ｂ遺跡出土の石器群の使用痕を分析した堤隆は、使用痕を留める石器が含まれていないことを突き止め、未使用の可能性があることを指摘している(堤 1998a)。これは未使用のまま製品を保管していたことを示す有力な状況証拠となる。交換を目的としたものか、近い将来の使用を予定しての一時的保管・備蓄であるのか、その見極めが課題になるが、堤は石斧の数が世帯装備の通常数を超えていると見て、外部との交換を前提としたデポまたはキャッシュの可能性を指摘している。

稲田孝司(2002)の解釈はデポ説とは異なり、生活址の中にこのような製品の保管の場面を想定するものである。稲田は唐沢Ｂ遺跡や神子柴遺跡の製品の分布状態に円形または楕円形の規則性を見出し、それらがテント内に保管されていたものと推定する。唐沢Ｂ遺跡にある炉址や土坑も生活址としての性格を示すものとして重視している。刃付けをまだ完了していない石斧とともに、胡瓜形の砥石が残されていたことも、回帰の後に仕上げの製作をする予定があったことを示唆している。とすれば、隠匿・埋蔵という可能性は薄れ、近い将来の回帰と使用または持ち出しを予定した一時保管の可能性が強くなる。

交換を視野に入れた製品の動きは今日のデポ論の共通認識となってきたが、その広がりや頻度についての見方は微妙に異なっているようである。

（6）内部循環からの開放—交換の象徴的意味作用—

当該期に拡大する石器のトランスファーは、同一集団による循環的な行動連鎖の中に完結するものではなく、複数の集団の間に広がり、地域を横断する規模をもっていたと筆者は予測している。

大平山元Ⅰ遺跡で出土した石斧は、前述のとおりまだ刃付けを行っていない原形の状態でブロック内の一角に

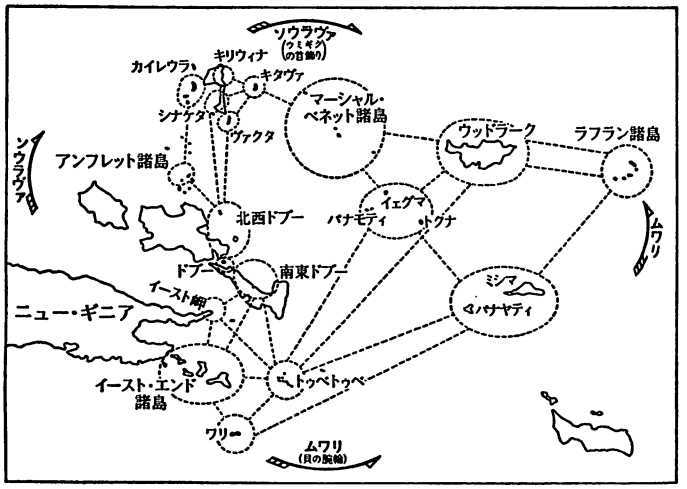


図２　東ニューギニア諸島民によるクラ交換の環
（マリノフスキー1967より転載）

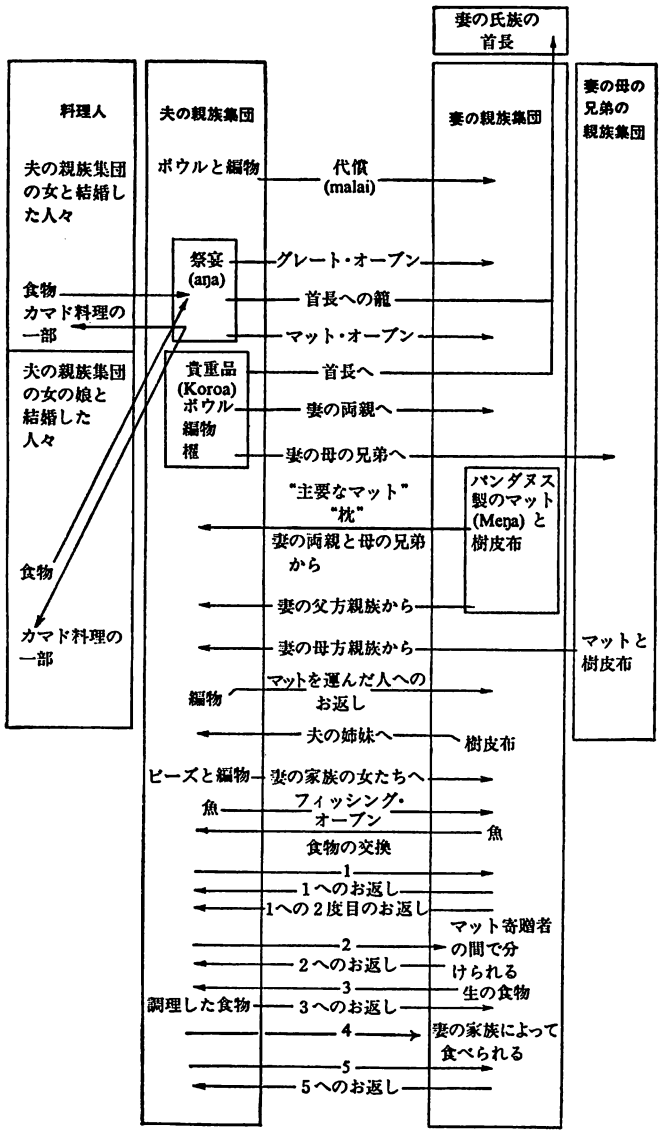


図３　ポリネシアの結婚に伴う贈与交換の応酬
（レヴィ=ストロース1977より転載）

置かれていたものである。この石器だけがホルンフェルス製であり、石材が明らかに他と異質である。製作の痕跡も一切認められない。ホルンフェルスは、グリーンタフ時代の新第三系が支配的な青森県内にはほとんど産出しない岩石である。遠隔地からのさまざまな物資の集積で知られる縄文前・中期の三内丸山遺跡においてさえ、石器石材としてのそれは稀少であり、青森県内出土の石器石材としては異質な傾向にあるといえる。厳密な産地同定は不可能だが、比較的近い産地としても岩手県の北上山地などが候補地となろう。いずれにしても遠隔地から半製品の状態でもたらされた可能性が強いものである（谷口編 1999）。唐沢Ｂ遺跡の出土品の場合も使用された石材が 11 種もあり、50ｋｍ圏内で獲得可能な石材もある半面、東北地方産の可能性が強い硬質頁岩や新潟・群馬方面に産出する黒色頁岩で作られた製品が特徴的に含まれている（堤 1998a）。神子柴遺跡出土品にも東北地方産とおぼしき硬質頁岩製品が 10 点ほど含まれている（藤沢・林 1961）。同一個体のペアが少ない点からみても、唐沢Ｂ遺跡や神子柴遺跡には、複数の遠隔地の製作遺跡で作られた製品が集められた可能性が大きいと見られる。

これらの例が示唆するように、大形尖頭器や石斧の中には、自給自足的な石器製作でなく、専門的な生産遺跡と広い地域にまたがる交換の存在を推定させるものがある。しかもその中には、非実用的としか言いようのない異常な大きさの製品がしばしば特徴的に含まれているのである。そうなると、必要なものを必要なだけ入手するという補給の意味を超えて、交換財としての意味や価値が無視できない。安斎正人（1990）は入念に形作られた石斧や大形の石槍は生活財としてよりも威信財・交換財として受容されたのではないかという着想をいち早く披瀝している。移行期の不安定な集団関係の中で、同属意識の再確認と社会的統合のために集会が持たれ、祭儀用具としてのそれらが集会後に埋納されたのがデポであったが、その後社会の安定と共に象徴的なものから現実的・実用的なものに転化したのではないかと安斎は解釈するのである。当初は特大でデポの中に特徴的にみられた神子柴系石斧が、その後隆起線文土器段

階まで継承される中で、萎縮するように変容されて石器組成の一部になるまでの過程を説明できる、今のところ唯一の仮説ではなかろうか。

長者久保・神子柴石器群に特徴的に見られる超大型石器やデポの意義、それに製品のトランスファーは、東ニューギニア諸島民が行ったクラのような象徴的な贈与交換を念頭に置くと理解しやすいであろう。クラ交換では、島々の諸部族の相手同士が儀式用の特別な財宝や貴重品をリレーのごとく循環的に贈与し続けていく。ソウラヴァと呼ばれる赤い貝製の首飾りと、ムワリと呼ばれる白い貝製の腕輪が最も重要な交換財であり、前者は時計回りに、後者は逆時計回りに循環していく(図2)。ほかにも交換財となる儀式用の財宝がある。それらの中には、大きくなりすぎて、それを作るのに費やされた労働量と材料の貴重さとによって経済的価値が凝縮され貯蔵されたにすぎない誇示用品が少なくない。ベクと呼ばれる大型の磨製石斧の刃もその一つであり、実用には絶対に使われないという。このクラ交換においては、入手した財宝を独り占めにすることはもちろん長く手元に置くことすら許されていない。それはまさしく贈与交換の環であって、贈与された財宝は速やかに次の相手に贈与しなければならない。それは純粋に経済的な交易ではなく、参加者を結びつける社会関係の維持装置としての意味をもつのである(マリノフスキー1967)。

また、親族組織が社会統合の枠組みとして機能している未開社会では、特に結婚に際して双方の親族間で遣り取りされる儀礼的贈答が特徴的に見られ、婚資として貴重品が妻方親族に給付される事例が数多く知られている(ヴァレリ1983, 上杉1999など)。唐沢B遺跡や神子柴遺跡に残された特大かつ美麗な石斧や槍先形尖頭器なども、まさに婚資に相応しい象徴的な贈答品として特別に誂えられたという予感を強く抱かせるものである。未開社会の贈与交換においては、惜しみなく与えること、気前よく浪費することが名誉であり、贈られた側にはまた相応の返礼の義務が生じて、それが社会関係の維持増進に大いに役立っている場合が多いのである。互酬性の概念を3タイプに整理したサーリンズ(1984)が「均衡的互酬性」と呼んで重視する未開社会に特有の社会過程である。レヴィ=ストロース(1977)によって紹介されたポリネシアの結婚に伴う贈与交換を一例として図示するが、そこに見られる贈与交換行為は執拗な義務の応酬ともいえるものであり、あくまでも双方の親族集団を結び付ける働きをしているのである(図3)。単なる道具の交換や物資の補給としてこれを見ると、本質を見誤ってしまう。

贈与の義務・受け取る義務・返礼の義務に貫かれた未開社会の贈与交換の論理(モース1973)とその象徴的意味作用に照らして考えると、当該期の石器のトランスファーも単に道具の交換とか補給ではなく、我々の予測を超越した意味や地理的広がりをもつかもしれない。神子柴系の石斧や槍先形尖頭器が九州にまで広く点々と分布している事実(横田1981・90・92, 永野2000など)はその意味で興味深いのである。北海道の細石刃石器群終末期に神子柴系に類似する局部磨製石斧が受容されたり超大型の尖頭器が出現したりする現象もまた同様である(寺崎1996, 山原1998)。それは道具としての受容でもあると同時に、彼地の細石刃石器群の諸集団がそうした贈与交換体系へ参加し、本州の諸社会と積極的に接続、関係しようとしていたことを意味しているように思われる。

石斧や槍先形尖頭器の受容を森林環境への適応や狩猟法の変化に関連させて説明する向きもあるが、本質は別にある気がしてならない。旧石器時代から長者久保・神子柴段階への石器受給システムの質的な転換は、おそらく純粋な経済的変化としては捉えられず、移行期特有の集団関係に深く根ざしていたという予測をもつが、現時点では想像の域を出ない。いずれにしても旧石器的な内部循環から石器を開放させる何らかの動機や理由があったと見るべきである。デポや搬入品はこのような脈絡の中に位置づけなければならない。

3. 長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群の関係

長者久保・神子柴石器群の登場とともに石器の受給システムの質的な変化が起こり、旧石器時代の内部循環的な石器製作に代わって、製品のトランスファーを特徴とする開放的なシステムが顕在化することを前節では論じた。長者久保・神子柴石器群が、地域によって、遺跡によって、多様な様相をもつのは、その伝わり方が構造全

体の移入ではなく、このような開放的なシステムを介して、在来の石器組成に石斧や槍先形尖頭器が付加されたり、要素の選択的な受容や自らの構造に適合した融合が可能であったことによるものと考えられる。また、それが純粋に機能的・経済的な要求に基づく道具の変革ではなく、むしろ集団関係の再編成とともに開始した均衡的互酬性に基づく贈与交換体系の拡大としての側面が見逃せないことを指摘した。

以上の諸議論を踏まえた上で、長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群との関係を考えてみたい。細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群の関係を追求しようとした研究には、大きく二つの流れがある。その潮流を導いた鈴木次郎と稲田孝司の研究を軸に論点を整理する。

（1）相模野Ⅴ期における細石刃と槍先形尖頭器の関係

相模野編年の骨格を成した鈴木次郎は、関東地方に細石刃石器群が出現して以後も槍先形尖頭器が存続していたことを指摘し、二つの石器群の並存関係を早くから積極的に論じてきた(鈴木 1989ab)。

鈴木の考えでは、相模野Ⅴ期前半に著しい発達を遂げた槍先形尖頭器は、細石刃が主体となるⅤ期後半においても数量を減じながら存続しており、さらにその槍先形尖頭器の系統が細石刃以後の「縄文草創期」段階にまで連続したとされる。Ⅴ期直後の石器群について、長者久保・神子柴石器群の要素を認めつつも、外来文化がそのまま移入されて石器文化が交代したとは見なさないのが鈴木の独自なところであり、伝統的な槍先形尖頭器の系統の中から改良が加えられて出現したものこそが、相模野の「長者久保・神子柴石器群」の実態と捉えていた。長者久保・神子柴石器群を在来の槍先形尖頭器石器群の内的発展を介して説明しようとした点は今なお新鮮であり、長者久保・神子柴石器群の起源論としてもきわめて重要な意味をもつ。栗原中丸遺跡第Ⅲ文化層を長者久保・神子柴石器群の萌芽とみなす見解を認めれば、それはB0層段階にまでさかのぼることになる。

鈴木の観点は、神奈川県長堀北遺跡と勝坂遺跡で削片系細石刃石器群と槍先形尖頭器との共存関係が確認されたことによって、さらに重要性を増したといえる。細石刃石器群と槍先形尖頭器との関係が相模野Ⅴ期後半にとどまらず、むしろL1S層段階でより鮮明な形で現れたと考えられるからである。鈴木が当初考えた範囲をさらに越えて、細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群はつかず離れずの関係を続けていた、とも見られるのである。

細石刃と槍先形尖頭器が並存することの意味について鈴木は慎重であるが、両者が多量に共伴する事例がなく少数の槍先形尖頭器が細石刃と地点を違えて出土する状況や、同一層位の中で両者が別々に残されていること、両者の石材が異なることなどに触れ、機能的な違いや季節的な差異、異系統の石器群を携えた集団の差との考え方を後に示している(旧石器プロジェクトチーム 1995)。

しかし、鈴木説に対しては批判も少なくない。伊藤恒彦(1988・89)と諏訪間順(1989)は、細石刃文化の出現によって尖頭器石器群は分断されたとみており、外来的な細石刃石器群や長者久保・神子柴石器群の登場によって石器群が段階的に交代したと考えている。細石刃文化の前後にある二つの槍先形尖頭器石器群は、技術的にも大きさ・形態なども異なり、連続性はないという反論である。共伴の事実そのものにも疑義が向けられている。長者久保・神子柴石器群が本州で成立したと見る安斎正人(1996)も、鈴木説に一定の評価を置きながら槍先形尖頭器の直線的進化論そのものには反対である。この見解の対立は長者久保・神子柴石器群の理解を二分するものでもあることに注意したい。

この議論が速やかに決着するとは思えないが、長者久保・神子柴段階の関東地方が典型的な「神子柴石器群」や「長者久保石器群」でなく、独自の様相をもつ槍先形尖頭器石器群を生み出したこと、そしてそれが細石刃石器群と少なからず接点を持っていたことの意味を見極めていくためにも、鈴木の見方をさらに深化させたいところである。

鈴木と同じく細石刃段階を跨いだ槍先形尖頭器の発展過程に注目するものとして比田井民子(1985)・白石浩之(1989)・島立桂(1993ab)・藤野次史(1993)らの論考がある。藤野は細石刃石器群を挟む前後の時期の槍先形尖頭器に技術的な連続性があることを強調している。島立は石器技術の集団差とみて、東北南部から関東・中部地方では細石刃文化集団と槍先形尖頭器集団がモザイク状に並存していたものと考える。しかし、細石刃と槍先形尖頭器という異質な石器がなぜ並存したのか、いかに使い分けられていたのかという肝心の説明は、依然残されて

いる。田村隆(1993)は二つの石器群の関係を技術的組織の違いとして説明する視点をはじめて呈示し、この議論を社会生態学的な解釈に止揚することを試みている。田村は、この技術の選択が狩猟対象獣の棲息場所や棲息時期についての予測の度合いに関係すると見ており、槍先形尖頭器と細石刃の構造的な違いを「信頼性を重視するシステム」と「保守性を重視するシステム」として対比した上で、細石刃が狩猟装備に組み込まれたのは狩猟対象の予見性が困難となったことに対する適応行動であったという見通しを示している。その集団が置かれた生態的条件によって選択されるオプションとして二つの石器群が対置されたことによって、文化伝播とか石器文化階梯という見方を脱却した二つの石器群の関係の議論が可能となったが、同一地域あるいは同一集団のレベルで二つの技術的オプションがどのように使い分けられていたのかという点に論点が絞られてくる。

ナイフ形石器終末期におけるナイフ形石器と槍先形尖頭器との関係を扱った国武貞克(1999)の論考も、異質な石器群の並存関係について一定の示唆を与える。遺跡によって石器群の内容が非常に多様であることが当該期の特徴であるが、槍先形尖頭器が組成される遺跡の石器群には或る共通した傾向が認められる。すなわち、残核が残されない石材消費量の少ない遺跡に、槍先形尖頭器が搬入品として存在する場合が多いという。槍先形尖頭器の使用が或る一定の状況や場面に偏っていたことがそこから窺える。槍先形尖頭器を携行使用する機会が全体的な遺跡連鎖の一部に偏っていたとすれば、次の時期に細石刃と槍先形尖頭器が或る機能差をもって使い分けられていたとする類推も成り立つのではないか。

いずれにしても、細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群との関係を理解するには、生業や居住を含むトータルな人間行動の中に石器群の諸変異を位置づける視点が欠かせない。

(2) 稲田孝司による異文化接触論

長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群とのもう一つの関係論として稲田孝司の論考がある(稲田 1993・96・2001)。稲田は細石刃文化の最終段階にシベリア起源の神子柴文化が伝播して石器文化が交代したという見方(栗島 1999 など)を否定しており、湧別技法を持つ細石刃文化と神子柴文化がかなり早い段階から共存していたと考える。段階編年論を棄却し、異なる石器文化が別々の集団によって保持されながら並存していたという見方で移行期の社会状況を描き出そうとした刺激的な試みであり、移行期の研究を大きく転換させるものといえる。

稲田は、長者久保・神子柴石器群と湧別技法細石刃石器群がもともと北方系の石器文化であることを認めており、北方系集団の植民によって前後して本州にもたらされたものと考える。これらの石器文化を受容したのは基本的に異なる集団であったが、両者は無関係に並存するのではなく、製品の交換や要素の受容などの形で影響しあう、一定の相互関係をもっていたと考えられている。

このように、集団、生業、植民、分業、交換、受容などの概念を導入して、二つの石器群の関係を移行期特有の社会状況として説明するのが稲田論文の特長である。そこにもやはり石器群の多様性を集団の行動パターンに関連付けて説明する視点が見出せる。特に注目されるのは、この二つの石器文化が在地集団に受容されていく過程が一様な波及ではなく、孤立的な性格をもつ湧別技法植民集団と、在地集団に急速に受容されていく神子柴集団との違いが対比して描かれている部分である。長者久保・神子柴石器群の要素の西日本への広がりは注目すべきものである。しかもそれがセットそのままの直接的な移入でなく、在地系石器文化への石斧等の一部要素の受容という形をとって進行したのは、神子柴集団における専門的な石器生産と製品の交換システムに起因すると考えられている。

(3) 長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群との共伴事例

湧別技法細石刃文化と神子柴文化との共存の根拠として稲田が指摘した事例は次のものである。

1) 長野県神子柴遺跡の石器群に含まれる断面三角形の削片1点(藤沢・林 1961)
2) 青森県大平山元Ⅱ遺跡の湧別技法細石刃石器群文化層に共伴した神子柴型石斧の原形2点(横山 1992)
3) 茨城県後野遺跡A地点とB地点に共有された同一母岩の細石刃4点(後野遺跡調査団編 1976)
4) 新潟県大刈野遺跡第4層の槍先形尖頭器製作址に伴う細石刃3点(佐藤 1988)
5) 山形県月山沢遺跡の大形槍先形尖頭器に伴った細石刃と湧別技法の断面三角形削片(佐藤・大類 1980)

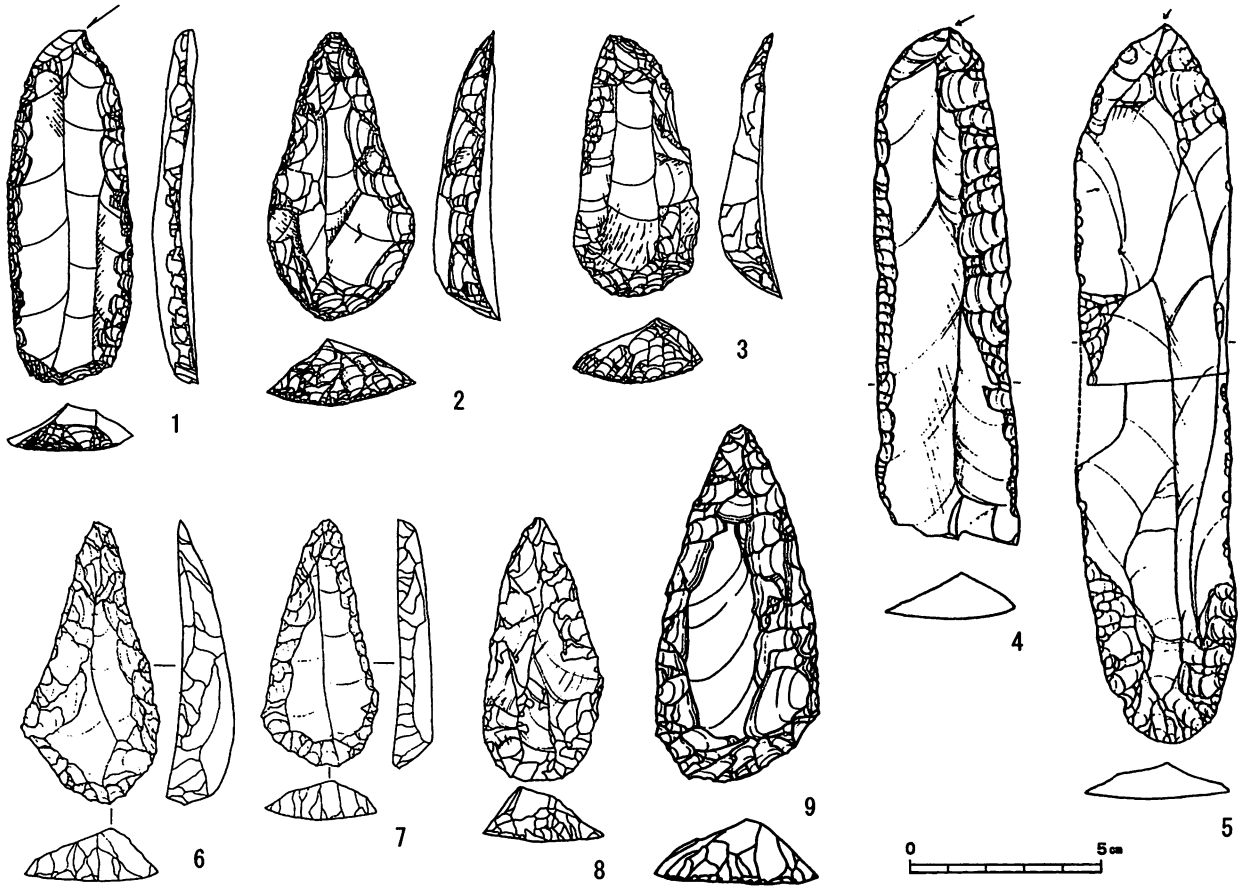


図４　大平山元Ⅰ遺跡の石器群に含まれる北海道細石刃石器群との共通要素
1～3：大平山元Ⅰ遺跡　4・5：中本遺跡　6・7：水口遺跡　8：メボシ川２遺跡　9：東麓郷１遺跡

6)　新潟県樽口遺跡 A-MS 文化層の白滝型細石刃核に伴った大形槍先形尖頭器８点(立木 1996)

7)　岐阜県宮ノ前遺跡の白滝型細石刃核と神子柴型石斧・槍先形尖頭器(林 1996)

湧別技法細石刃文化と神子柴文化が付かず離れずの関係にあったことを示す接点として、稲田はこれらを重視する。さらに 8)神奈川県上野遺跡第１地点第Ⅱ文化層(相田・小池 1986)、9)神奈川県長堀北遺跡第Ⅱ文化層(小池 1991)、10)神奈川県勝坂遺跡(内川・高橋 1993)、11)神奈川県寺尾遺跡第Ⅰ文化層(白石 1980)などの関東の諸事例に触れ、湧別技法細石刃文化と神子柴文化とがより深く結びついて融合したものと理解した。神子柴文化はさらに西側の野岳・休場グループの細石刃文化や、船野型細石刃核のグループの細石刃文化とも関係し、石斧・槍先形尖頭器の要素が受容されたとみる。その根拠として 12)長野県上ノ原遺跡(中村 1992)、13)大分県市ノ久保遺跡(綿貫 1993)、14)鹿児島県帖地遺跡(永野 2000)の事例を挙げている。

そのほかにも二つの石器群の並存関係を示唆する事例が散見されるので、追加して挙げておく。

15)　青森県大平山元Ⅰ遺跡出土の彫器のうちの１点(図４－１)は、ホロカ型彫器に比定してよいものであることを畑宏明が指摘している(畑 2001)。さらに、基部が尖る特徴的な形態の掻器２点(図４－２・３)が、忍路子型細石刃核石器群(Ｅ群１類；寺崎 1999)に伴う同形態のそれに酷似しているとの指摘を、寺崎康史から受けた。後者の掻器は基部が尖頭器状に加工された特徴的なものであり、北海道常呂郡端野町水口遺跡(畑・田原 1975)や千歳市メボシ川２遺跡(田村 1983)、富良野市東麓郷１遺跡(杉浦 1987)などに同一形態の例を見出せる。忍路子型細石刃核石器群Ｅ群１類には、局部磨製石斧や有舌尖頭器が共伴することが知られており、長者久保・神子柴石器群との関連性が指摘されていたが、大平山元Ⅰ遺跡に忍路子型細石刃核石器群Ｅ群１類の要素が含まれていたことで、両者の関係が双方向的なものであった可能性が一層強まった。湧別技法グループではないものの、長者久保石器群と北海道細石刃石器群のとの相互的な関連性が示唆されている(谷口編 1999)。

16) 山形県八森遺跡桑園地区出土の典型的な長者久保・神子柴石器群に伴って２点の荒屋型彫器が出土している(佐藤・大川2003)。

17) 長野県柳又遺跡Ａ地点の削片系細石刃石器群は、石器組成の中に両面調整の槍先形尖頭器を少なからず含んでいる(小林・谷口編1992, 永峯・谷口編1993)。

18) 東京都狭山遺跡(吉田・肥留間 1970)では、大形槍先形尖頭器石器群と野岳・休場型・船底型・削片系を含む細石刃石器群が混然として出土しており、層位・出土地点による分離は困難である。2002年度に行われた発掘調査でも、最も密集度の高い「第３集中地点」において、槍先形尖頭器・細石刃・細石刃核・土器の共伴を示唆する出土状況があった(内野・原川2003)。

19) 新潟県小瀬が沢洞窟出土の石器群の中に大小の船底形石器が含まれている(小熊ほか 1994)。それらは細石刃核・同原形ではないが、北海道細石刃石器群終末期に特徴的に伴う船底型石器との関連性を窺わせる。

（４）地域性の実態

段階的な変遷論を堅持し型式編年の秩序を重んじる立場の岡本東三(1999・2002)は、こうした共伴関係を疑問視する批判論を提起している。岡本の編年では細石刃文化が野岳・休場型→船野型・ホロカ型→削片系の三段階に変遷し、その後に神子柴文化が続くとされているから、以上のような共伴関係に懐疑的になるのも無理はない。たとえば後野遺跡Ａ地点・Ｂ地点の同時性は層位差によって否定されている。市ノ久保遺跡で指摘された船野型細石刃核と神子柴系石斧の共伴関係については、野岳型や岩土原型の存在を理由に混在の可能性を指摘する。帖地遺跡についても同様の混在説で一蹴する。傾聴すべき指摘ではあるが、しかしこうした事例をすべて否定し去ることができるであろうか。

岡本は稲田のこのような見方を「編年が成り立たなくなる」として批判するが、岡本の編年にも自らの規準からの逸脱がある。石刃技法の存在を最も重視して「神子柴文化」を限定しておきながら、石刃を含まない長堀北遺跡や房谷戸遺跡や下茂内遺跡を編年表に掲げるのは定義に反しないのか。石刃を含まない勝坂遺跡や長堀北遺跡を神子柴文化の古期に位置づけておいて、石刃製の石器を含む寺尾遺跡第Ⅰ文化層を神子柴文化の後に位置付ける、こうした逸脱の理由も説明してほしい。また、神子柴文化に併行する中部地方以西の編年表の空白もどう理解すればよいのか。

岡本編年に代表されるように、「神子柴・長者久保文化」を石刃技法の伴う一群に限定し、石刃や彫器を欠落する一群を、真正の「神子柴・長者久保文化」が崩れた新しい段階の所産と見る変遷観が支持されている。そのような見方をすると、関東地方の神子柴・長者久保石器群は、大部分が純粋な特徴をとどめない新しい一群ということになってしまうが、はたしてそうだろうか。移行期研究の困難な時代を切り開いてきたパイオニアに対して心苦しいが、先のような逸脱が起こらざるを得ないのは、統一的な「石器文化」を重視するあまりの瑕瑾とは言えまいか。「石器文化」「技法」「型式」と呼びうる共通性が地域横断的に広がる現象は確かにあるが、いかなる石器群もその地域の石材環境や集団の生態に規定されている以上、地域ごとに独自の選択や変容が起こるのは当然である。西からの動きや北からの動きが交錯する南関東では、少なくとも細石刃石器群の時期以後、こうした傾向が際立ったものとなってくる。

織笠昭(1992)は、相模野・武蔵野地域の細石刃石器群の中に、九州西北部の西海技法に共通する技術が存在することを卓抜した観察によって論証し、野岳・休場系、船野系とともに西南日本系細石刃文化の広がりを示すものと捉え、この地域をその東限として位置付けた。そして、利根川流域に分布する削片系細石刃石器群と対比し、日本の細石刃文化を二分する大きな地域性の縮図を関東の地域性の中に見出している。しかし、最も傾聴すべき指摘は、受容された西海技法が純粋な形を留めず、技術的に変容して南関東独自のものに変化していくという結論であった。長堀北遺跡に見られるように、この地域には湧別技法に共通する北方系の細石刃文化も進入したが、それもまた変容の著しいもので、石器装備のセットがそのまま移入された純粋なあり方ではない。さらに、この地域において長者久保・神子柴系石器群といわれるものも、岡本による「神子柴文化」の定義には当てはまらないものばかりであり、石刃や彫器が欠落するなどの変容が顕著に認められるのである。つまり、織笠が指摘した

地域的変容は常に存在しており、南関東の地域性は一貫して変わらないともいえる。細石刃と槍先形尖頭器との不即不離の並存や融合的な関係も、南関東の生業・居住形態や石材環境、技術的組織に適合した地域性の実態と見るべきではなかろうか。

長者久保・神子柴石器群や有舌尖頭器とアムール川流域のオシポフカ文化との系統関係が議論の的となっており、土器出現の問題に絡んだ縄文文化源流論が盛んであるが(栗島 1991bc・99 など)、「神子柴・長者久保文化」そのものの概念的な曖昧さが指摘されれば足元が覚束ない(安斎 2002)。北海道の研究者たちに「神子柴・長者久保文化」に対する慎重論・否定論があることも重く受け止めねばならない(寺崎 1996, 山原 1998, 長沼 2003)。忍路子型細石刃核石器群にしばしば共伴する局部磨製石斧を長者久保・神子柴石器群との共通要素と見ることはできるが、本州の長者久保石器群・神子柴石器群と一致する石器群は見当たらず、北海道を経由して直截に外来文化が伝播したとは考えにくい。北海道の局部磨製石斧を本州からもたらされた要素と見る逆の見解にむしろ蓋然性がある(安斎 2002)。つまり、南関東と同様に北海道においても、長者久保・神子柴石器群との共通要素を含みながら、在地の石器群の中に融け込んで独自の地域性を顕にしているのである。起源や系統を論ずる前に、各地域の石器群の多様な実態を知る必要がある。

地域性や集団差を念頭に置けば、二者の石器群の共存や融合の事実が「秩序」から逸脱したものとは映らず、そこにむしろ主体的な適応行動としての意味を見出せるはずである。

4．展望

移行期石器群の複雑な様相を整理するには、冒頭の自己批判で触れたように段階変遷論の発想を転換することが必要である。それに代わる研究視点として欠かせないのは「石器群の多様性」を生み出す諸要因の具体的究明であり、それを行動連鎖の中に整理することによって集団自身の生態や集団関係に止揚していくまでの理論的展望である。デポの意味を編年論で理解することができないように、移行期の石器群の多様性は社会や集団関係を抜きにしては理解しがたいものである。稲田・安斎・堤らの研究はそうした方向を強く意識したものであり、研究方向の転換に我々を導くものであった。段階編年論を抜け出たばかりの移行期研究はまだ模索段階にあるが、重要な視点がこれまでの関係論の中にすでに示されていたと思う。移行期の理解にとって一つの重要な鍵となるのは、削片系細石刃石器群と長者久保・神子柴石器群の関係である。特に二つの石器群がもつ次の対照的な性格に着目して、論点を集約してみたい。

構造的かつ特殊化した削片系細石刃石器群

湧別技法を携えた削片系細石刃石器群が本州に南下した事実がある。この事実をめぐってさまざまな解釈が提出されてきたことは周知のとおりである。加藤晋平・松本美枝子(1984)は削片系細石刃石器群とサケ・マス資源との生態的関係を指摘し、シベリア内陸部に発生した削片系楔形細石刃核が日本を含む東北アジア地域に広く拡散した大きな動きを北太平洋沿岸の豊富なサケ・マス資源に関連付けて説明する遠大な仮説を提起した。佐藤宏之も削片系細石刃石器群が本州を南下した背景に、サケ・マス漁を中軸とする特殊化した生業形態の受容を予測した(佐藤 1992ab)。利根川・荒川水系や信濃川水系を前線とするその分布の限定性(橘本 1989)は、たしかにその可能性を示している。削片系細石刃石器群の南下現象とサケ・マス漁との生態的関係が一つの論点となっているが、これについて慎重な見方もある。加藤博文(1996b)は削片系細石刃石器群の技術組織はシカの生態に適合したものと理解しており、副次的な漁労が石器群の技術的組織の規定的要因になったとは見ていない。サケ・マスなのかシカなのか、今後の検証を待たねばならないが、いずれにしても北方に共通するやや特殊化した生業形態がこのグループの石器群の背景にあるという点では、一定の共通認識があるといえよう。稲田孝司(2002)はさらに一歩踏み込んで北方系集団の植民と遠征によって説明する。東北日本に偏るはっきりとした地域性はこの石器群の荷担者集団の北方的性格を強く示唆しており、稲田が描写する植民集団の姿はまさしく北方文化の最前線と形

容するに相応しいものである。日本海側の多雪化に伴って積雪地帯の居住集団が越冬対策の一環として長距離移動したと推定する田村隆(1993)の見解も、その動機を説明する一つの仮説として説得力がある。

長距離の移動や遠征を伴う行動様式は、よほど完結性のあるシステマティックな技術体系がなければ果たしえない。これに関して小林達雄(1970)は、湧別技法を含むシステムAが細石刃の製作のみならずスポールなどの石器製作を同時に行う構造をもち、なおかつ多様なサブ・システムを生み出す可変性をもつことをいち早く指摘していた。佐藤宏之(1992b)・加藤博文(1996a)らも、石核や石器への可変性に富む両面調整石器の技術がそれを可能にしたと考えている。ここでもそれらの評価を踏襲しておきたい。削片系細石刃石器群がもつシステム的な石器製作技術は、おそらくそのような固定的な行動様式に適合するように設計されたものであり、特に長距離の遠征・移動に適合していたものと考えられる。しかし、半面では特殊化している分だけ多様な変化には対応できない閉鎖性を併せ持っていたとも考えられるのである。その北方的生業形態がもし破綻して、労働形態をより多様なものに変換させるべき状況が生じると、完結的な石器製作はかえって柔軟な変化を阻害することにならないだろうか。分布の前線にあたる南関東や中部高地で比較的短期間のうちに姿を消したことから見ても、そうした事情が窺えるのである。

開放的かつ脱構造的な長者久保・神子柴石器群

移行期を迎え次第に幅広い労働形態が模索されるようになると、特殊化した細石刃技術に代わって、より柔軟な石器システムが必要になったのではないか。長者久保・神子柴石器群には何らかの点でそのポテンシャルがあったと考えられるのである。

長者久保・神子柴石器群が削片系細石刃石器群と大きく異なるのは、広い範囲に広がる浸透力をもち、なおかつ地域的な変容や他の技術との融合が顕著に認められる点である。製品が広い範囲を転移する様子(石器のトランスファー)は、旧石器的な内部循環的石器製作からの脱却を明らかに示していた。他の技術系と容易な融合をしなかった湧別技法細石刃石器群の閉鎖的な構造に対して、長者久保・神子柴石器群は流布しやすい開放的なシステムを備えているのである。特に個々の製品がもつ汎用性や交換財としての価値が、後者の開放的な交換システムと急速かつ幅広い受容を実現したポテンシャルになったものと考えられる。

石器のトランスファーに関連して、旧石器的な内部循環から石器を開放させる何らかの動機や理由があったことを前節で強調した。長者久保・神子柴石器群に付随する二つの不思議をここで改めて想起したい。槍先形尖頭器や石斧の一部が異常なまでに大型化し特殊化したこと、そしてそれらの製品が集団間を広く転移したり受容されたことである。この二つの不思議さは、石器の遣り取りを道具の交換や補給としてではなく社会関係の生成を目的とした象徴的意味作用の強い贈与交換と理解することによってはじめて氷解するのであり、合理的に説明できる。おそらく集団関係の再編成とともに始まったこのような贈与交換体系の広がりが、多様な技術をもつ広範囲の集団の接触を可能としたのである。それが多様な労働形態を模索しはじめていた当時の社会状況にとって有利に作用したのではないか。槍先形尖頭器石器群と細石刃石器群の接触や融合も、こうした広域的かつ横断的な社会関係の再編成とともに出現した現象の一つと予測したい。

二つの石器群が一期間にせよ並存して接点を残したのは、異なる生産形態と行動様式をもつ集団がまだモザイク状に並存していたことを意味しよう。結果的に細石刃石器群が終息し、神子柴系石斧や槍先形尖頭器が主流となっていった過程は、特殊化した生業形態からの退却とそれに代わるより多様な生産形態への模索が始まった、移行期の実態を描き出しているように思われる。地域差や集団差を念頭に置いてその適応過程を研究することが、移行期研究の進むべき方向になる。

故織笠昭先生のご霊前に小論を捧げる。多少なりとも織笠先生の謦咳に接して忘れ得ぬ印象は、やはり個々の石器を手に取りじっくりと観察するお姿である。一点たりとも見逃さない徹底した観察があってこそ、石器の技法・型式・文化などの見方について揺るぎない見解を持てたのだと思う。石器研究が今後どのように変わろうとも、石器群の同質性や多様性を摘出する目は厳格な観察と定義以外になく、この基本だけは変わらない。せめてそのような精神を受け継ぐ一人でありたい。

このたびの有意義な討論に参加できたことをコーディネーターの堤隆氏に感謝する。また、寺崎康史氏・川口　潤氏・畑　宏明氏・比田井民子氏・原川雄二氏・竹尾　進氏のご教示ご配慮に感謝する。

注

1) 長者久保・神子柴石器群の概念・範囲・用語には、編年観や研究方向の相違を反映して不統一が生じている現状がある。神子柴型石斧と石刃技法を特徴とする神子柴遺跡・唐沢Ｂ遺跡・長者久保遺跡等の典型的な一群に限定すべきという意見にも一理あるが、本論では細石刃石器群との関係を含めた、この石器群に特有の多様性や開放的な交換システムに焦点を当てるので、その範囲は典型的なものだけに限定せず、その後の変容過程をも視野に入れて隆起線文土器段階の石器群までを含めた幅広い定義を採用しておきたい。その意味では、ここでの長者久保・神子柴石器群の範囲は、森嶋稔(1970)による「神子柴系文化」に近いものであるが、階梯的な「石器文化」としての認識は一旦棄却し、提唱者の山内清男・佐藤達夫(山内・佐藤1967，佐藤1971)の用語に従って「長者久保・神子柴石器群」の名称を使うことにする。

2) 土器出現を画期として旧石器時代から縄文時代へ移行したとみなす一般的な時代区分をここでは採らず、土器の出現・細石刃石器群の終末・有舌尖頭器の消長・石鏃の出現などの諸変化が生じた「草創期」の範囲を、縄文文化の諸要素が確立するまでの適応過程として重視する視点から、「移行期」として暫定的に捉え、将来の時代区分の見直しに備えたい。土器出現の年代と縄文時代のはじまりをめぐる時代区分論の問題については、別に私見を述べたので併せて参照願いたい(谷口2002b)。

3) 出現期(移行期)の土器の用途と使用頻度については別稿で論点を整理した(谷口 2002a)。青森県大平山元Ⅰ遺跡から出土した土器は、正確な復元はできないが平底の深鉢と推定され、煮沸または煮炊きに使用されたことを示すコゲ状の炭化物が30片に付着していた。内面に水平に付着した例もある(谷口編1999)。同じく茨城県後野遺跡Ａ地区(後野遺跡調査団編1976)、神奈川県寺尾遺跡第Ⅰ文化層(白石1980)、多摩ニュータウンNo.769遺跡(武笠1999)の土器にも、ススの付着や二次的な被熱の痕跡が観察されている。最古の土器が煮炊きまたは煮沸用であったことは明らかである。土器の使用頻度は全体に低調である。大平山元Ⅰ遺跡では、典型的な長者久保石器群の一つのブロック内部から土器片46点が出土したが、それらは１個体の破片と推定され、石器群のブロック内部にスポット状に集中して分布していた。後野遺跡Ａ地区の場合は、２個体程度の土器が石器群のブロックから少し離れてスポット状に分布している。寺尾遺跡第Ⅰ文化層でも数個体の少量の土器がスポット状に分布し、その周囲には石器群が分布していなかったことが注意されている。多摩ニュータウンNo.769遺跡の場合は、打製石斧を埋蔵したとみられる土坑の周辺から土器が集中して出土した。正確な個体数は不明だが、１個体の可能性もある。以上の遺跡は比較的まとまった量の土器を出土した例であるが、状況は似通っており、使用された個体はいずれの場合も１～２個体程度の少数である。土器片にススや炭化物が付着していることもすべての遺跡に共通しており、煮沸・煮炊き・煎合などに使用された証拠があるが、こうした使用頻度からみると日常的な調理とか大量の加工処理に使用されたとは考えにくく、より限定した用途を想定した方が妥当であろう。土器を保有しない遺跡が一方に多数存在することも、限定的な使用法の半面を表す。たとえば多摩ニュータウンNo.769遺跡が位置する多摩ニュータウン地域では、槍先形尖頭器を出土する遺跡が約90箇所分布するが、土器を保有しない遺跡の方が圧倒的に多い。それらの多くは、旧石器時代終末期と縄文時代草創期との間で位置づけが曖昧なままであるが、こうした遺跡間変異も長者久保・神子柴期の特徴の一部である。

引用文献

相田　薫・小池　聡　1986「第Ⅱ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第１地点』pp. 90－178，大和市教育委員会

阿子島　香　1989『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社

安斎正人　1990『無文字社会の考古学』六興出版

安斎正人編　1991『早坂平遺跡―原石産地遺跡の研究―』岩手県山形村教育委員会

安斎正人　1994「縄紋文化の発現―日本旧石器時代構造変動論(３)―」先史考古学論集，3，pp. 43－82

安斎正人　1996『現代考古学』同成社

安斎正人　2002「「神子柴・長者久保文化」の大陸渡来説批判―伝播系統論から形成過程論へ―」物質文化，72，pp. 1－20
安蒜政雄　1992「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」駿台史学，86，pp. 101－128
伊藤恒彦　1988「相模野台地の２種類の尖頭器石器群」『大和のあけぼのⅡ』pp. 93－113，大和市教育委員会
伊藤恒彦　1989「細石刃石器群の成立と尖頭器石器群の関連について―相模野台地の場合―」『中部高地の尖頭器文化』pp. 292－296，長野県考古学会
稲田孝司　1982『旧石器時代』至文堂
稲田孝司　1986「縄文文化の形成」『日本考古学６　変化と画期』pp. 65-117，岩波書店
稲田孝司　1993「細石刃文化と神子柴文化の接点―縄文時代初頭の集団と分業・予察―」考古学研究，40(2)，pp. 21－46
稲田孝司編　1996『恩原２遺跡』恩原遺跡発掘調査団
稲田孝司　2001『遊動する旧石器人』岩波書店
ヴァレリ，Ｖ．（冨尾賢太郎・上野千鶴子訳）　1983「交換の象徴的意味作用―セラム島フアウルにおける婚姻給付の意味―」現代思想，11(4)，pp. 96－109
上杉富之　1999『贈与交換の民族誌―ボルネオ・ムルット社会の親族と祭宴関係のネットワーク―』国立民族学博物館
後野遺跡調査団編　1976『後野遺跡』勝田市教育委員会
内川隆志・高橋真実　1993「縄文時代草創期」『勝坂遺跡第 45 次調査』pp. 16－50，相模原市教育委員会
内野　正・原川雄二　2003『狭山遺跡』東京都埋蔵文化財センター
岡本東三　1979「神子柴・長者久保文化について」『研究論集Ⅴ』pp. 1－57，奈良国立文化財研究所
岡本東三　1994「縄紋文化移行期石器群の諸問題」『環日本海地域の土器出現期の様相』pp. 59－75，雄山閣
岡本東三　1999「神子柴文化をめぐる 40 年の軌跡―移行期をめぐるカオス―」先史考古学研究，7，pp. 1－22
岡本東三　2002「九州島の細石器文化と神子柴文化」『泉福寺洞穴研究編』pp. 155－170，発掘者談話会
小熊博史・鈴木俊成・北村　亮・丑野　毅・土橋由理子・立木宏明・菅沼　亘・吉井雅勇・沢田　敦・前山精明・小野　昭　1994「新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『環日本海地域の土器出現期の様相』pp. 77－173，雄山閣
織笠　昭　1992「南関東における西海技法の受容と変容」『人間・遺跡・遺物』pp. 75－92，発掘者談話会
加藤晋平　1970「先土器時代の歴史性と地域性」『郷土史研究と考古学』pp. 58－92，朝倉書店
加藤晋平・松本美枝子　1984「日本細石刃文化の源流」史艸，25，pp. 39－82
加藤博文　1996a「モービル・トゥールとしての両面調整石器―縄文化に向かう技術組織の変動―」『考古学雑渉』pp. 26－44，西野元先生退官記念会
加藤博文　1996b「細石刃石器群における生業活動の検討―シベリアからの視点―」古代文化，48(3)，pp. 28－36，48(4)，pp. 19－28
加藤　稔　1972「考察」『上屋地遺跡』pp. 21－63，山形県立博物館
加藤　稔　1992『東北日本の旧石器文化』雄山閣
旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム　1995「旧石器時代終末における石器群の諸問題(続)―FB 層下部から L1H 層の石器群の様相―」『神奈川の考古学の諸問題(Ⅱ)』pp. 1－24，神奈川県立埋蔵文化財センター
国武貞克　1999「石材消費と石器製作，廃棄による遺跡の類別―行動論的理解に向けた分析法の試み―」考古学研究，46(3)，pp. 35－55
栗島義明　1988a「隆起線文土器以前―神子柴文化と隆起線文土器文化の間―」考古学研究，35(3)，pp. 69－79
栗島義明　1988b「神子柴文化をめぐる諸問題―先土器・縄文の画期をめぐる問題(一)―」埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要，４，pp. 1－92
栗島義明　1990「デポの意義―縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖―」埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要，７，pp. 1－44
栗島義明　1991a「本ノ木論争―その学史的背景と今日的意義―」日本考古学協会第 57 回総会研究発表要旨，pp. 16－20
栗島義明　1991b「有茎尖頭器の起源」利根川，12，pp. 6－12

栗島義明　1991c「北からの新石器革命」考古学ジャーナル，341，pp. 8－13
栗島義明　1995「日本列島に於ける移行期の文化―神子柴文化が移行期に果たした役割―」『東アジア・極東の土器の起源―縄文文化の源流を探る―』pp. 117－128，東北福祉大学
栗島義明　1999「神子柴文化の系統問題―ニーナ論文に寄せて―」土曜考古，23，pp. 157－170
小池　聡　1991『長堀北遺跡―本文編―』大和市教育委員会
小林達雄　1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」物質文化，10，pp. 1－10
小林達雄　1974「縄文土器の起源」考古学ジャーナル，100，pp. 26－30
小林達雄　1982「総論」『縄文文化の研究３』pp. 3－14，雄山閣
小林達雄・谷口康浩編　1992『柳又遺跡Ａ地点―第２次発掘調査報告書―』國學院大學文学部考古学研究室
近藤尚義　1992『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書１―佐久市内その１―下茂内遺跡』長野県埋蔵文化財センター
近藤義郎　1965「後氷期における技術的革新の評価について」考古学研究，12(1)，pp. 10-15
佐藤禎宏・大川貴弘　2003『八森遺跡先史編』八幡町教育委員会
佐藤達夫　1971「無土器文化の石器」日本歴史，276，pp. 111－123
佐藤宏之　1992a「北方系削片系細石刃石器群と定住化仮説―関東地方を中心に―」法政大学大学院紀要，29，pp. 55－83
佐藤宏之　1992b『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
佐藤宏之　1995「技術的組織・変形論・石材受給―下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察―」考古学研究，42(1)，pp. 27－53
佐藤雅一　1988『大刈野遺跡』湯沢町教育委員会
佐藤正俊・大類　誠　1980『月山沢遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会
サーリンズ，M.（山内　昶訳）　1984『石器時代の経済学』法政大学出版局
島田和高　1996「移動生活のなかの石器作りの営み―砂川型刃器技法の再検討―」駿台史学，98，pp. 47－75
島立　桂　1993a「相模野台地における槍先形尖頭器と細石刃の展開」『考古論集』pp. 61－76，潮見浩先生退官記念事業会
島立　桂　1993b「細石刃と槍先形尖頭器の併存とその意味」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ』pp. 64－66，八ヶ岳旧石器研究グループ・佐久考古学会
白石浩之　1980「第Ⅰ文化層」『寺尾遺跡』pp. 10－87，神奈川県教育委員会
白石浩之　1989『旧石器時代の石槍』東京大学出版会
白石浩之　1992「旧石器時代終末から縄文時代初頭の石斧の研究」『東北文化論のための先史学歴史学論集』pp. 463－491，加藤稔先生還暦記念会
白石浩之　1993「細石器石器群の終末と神子柴・長者久保系石器群の関連性について」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ』pp. 75－87，八ヶ岳旧石器研究グループ・佐久考古学会
白石浩之　1994「縄文時代草創期の集団構造への接近」縄文時代，5，pp. 1－27
白石浩之　2001『石槍の研究―旧石器時代から縄文時代初頭期にかけて―』ミュゼ
白石浩之　2003「石器と土器の出会いの世界―移行期の様相―」季刊考古学，83，pp. 18－22
白石浩之・笠井洋祐　1999『吉岡遺跡群Ⅷ　縄文時代３　縄文時代草創期』かながわ考古学財団
杉浦重信　1987『東麓郷１・２遺跡』富良野市教育委員会
杉原荘介　1967「日本先土器時代の新編年に関する試案」信濃，19(4)，pp. 1－4
鈴木次郎　1989a「相模野台地における槍先形尖頭器石器群」神奈川考古，25，pp. 27－55
鈴木次郎　1989b「槍先形尖頭器石器群と細石刃石器群の時間的関係」『中部高地の尖頭器文化』pp. 289－291，長野県考古学会
鈴木忠司　1988「上野Ⅱ文化層の位置づけをめぐって」『大和のあけぼのⅡ』pp. 115－136，大和市教育委員会
須藤隆司　1999『八風山遺跡群』佐久市教育委員会
砂田佳弘　1998『吉岡遺跡群Ⅴ　旧石器時代３　B1層～L1S層の石器文化　縄文時代２　草創期』かながわ考古学財団
諏訪間　順　1989「相模野台地における尖頭器の様相」『中部高地の尖頭器文化』pp. 213－231，長野県考古学会

諏訪間　順　1991「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察―相模野台地の層位的出土例と中部高地との対比から―」『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』pp. 183－192，八ヶ岳旧石器研究グループ
芹澤清八　2003「大曲北遺跡出土尖頭器の再評価」栃木県考古学会誌，24，pp. 5－20
芹沢長介　1972「縄文土器の起源」サイエンス，1972-5，pp. 19－35
芹沢長介　1982『日本旧石器時代』岩波新書
芹沢長介　1987「土器の発現と縄文人の生活」『世界考古学大系日本編補遺』pp. 28－37，天山舎
高倉　純　1999「遺跡間変異と移動・居住形態復元の諸問題―北西ヨーロッパと日本における研究動向―」日本考古学，7，pp. 75－94
田中英司　1982「神子柴遺跡におけるデポの認識」考古学研究，29(3)，pp. 56－78
谷口康浩　1991「木曽開田高原柳又遺跡における細石刃文化」國學院雑誌，92(2)，pp. 21－51
谷口康浩編　1999『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査―旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の探求―』大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団
谷口康浩　2000「日本列島東北部における土器出現の ^{14}Ｃ年代・暦年代と時代区分の問題」日本第四紀学会講演要旨集，30，pp. 186－189
谷口康浩　2001「縄文時代遺跡の年代」季刊考古学，77，pp. 17－21
谷口康浩・川口　潤　2001「長者久保・神子柴文化期における土器出現の ^{14}Ｃ年代・較正暦年代」第四紀研究，40(6)，pp. 485－498
谷口康浩　2002a「日本および極東における土器出現の年代」國學院大學考古学資料館紀要，18，pp. 45－67
谷口康浩　2002b「縄文早期のはじまる頃」異貌，20，pp. 2－36
谷藤保彦・小菅将夫・諸星良一　1992『房谷戸遺跡Ⅱ』群馬県教育委員会
田村　隆　1992「遠い山・黒い石―武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察―」先史考古学論集，2，pp. 1－46
田村　隆　1993「野辺山を視る目―石器の行動理論構築に向けて―」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ』pp. 280－298，八ヶ岳旧石器研究グループ・佐久考古学会
田村俊之　1983『メボシ川２遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会
立木宏明　1996『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ　樽口遺跡』朝日村教育委員会
堤　隆　1987「相模野台地の細石刃石核」大和市史研究，13，pp. 1－43
堤　隆編　1991『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ
堤　隆　1998a「唐沢Ｂ遺跡の様相」『唐沢Ｂ遺跡―後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての移行期の石器群―』pp. 57－72，千曲川水系古代文化研究所
堤　隆　1998b「日本列島の氷期の終末と人類の適応システム」『シンポジウム：更新世－完新世移行期の比較考古学』pp. 35－53，国立歴史民俗博物館春成秀爾研究室
堤　隆　1999「大平山元Ⅰ遺跡出土石器の使用痕分析」『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』pp. 120－125，大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団
勅使河原彰　1976・77「縄文式土器時代の時期区分について(試論)」古代学研究，81，pp. 1－19，82，pp. 1－19
勅使河原彰　1998『縄文文化』新日本新書
寺崎康史　1996「北海道地方における大形尖頭器について」北海道旧石器文化研究，1，pp. 1－10
寺崎康史　1999「細石刃石器群の変遷と終末」『海峡と北の考古学　シンポジウム・テーマ１資料集Ⅰ』pp. 45－56，日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会
東京都教育庁生涯学習部文化課　2002『前田耕地遺跡―縄文時代草創期資料集―』東京都教育庁生涯学習部文化課
長沼　孝　2003「北海道島の様相―細石刃石器群と尖頭器石器群―」季刊考古学，83，pp. 65－69
永野達郎　2000『帖地遺跡(旧石器編)』喜入町教育委員会
永峯光一・谷口康浩編　1993『柳又遺跡Ａ地点―第３次発掘調査報告書―』國學院大學文学部考古学研究室

中村俊夫・辻 誠一郎　1999「青森県東津軽郡蟹田町大平山元Ⅰ遺跡出土の土器破片表面に付着した微量炭化物の加速器^{14}C年代」『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』pp. 107－111，大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団

中村由克　1992「長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構」考古学ジャーナル，342，pp. 42－44，344，pp. 33－36

橋本勝雄　1989「東日本の細石器文化―東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究の動向―」考古学ジャーナル，306，pp. 12－21

畑　宏明・田原良信　1975「水口遺跡」『日本の旧石器文化』pp. 42－56，雄山閣

畑　宏明　2001「旧石器文化」『旧石器・縄文文化』pp. 24－59，北海道新聞社

林　直樹　1996「岐阜県宮川村宮ノ前遺跡の調査―旧石器終末～縄文草創期・早期文化層の調査に関する略報―」考古学ジャーナル，400，pp. 42－45

比田井民子　1985「先土器時代終末期における複合石器文化―関東地方を中心として―」考古学雑誌，70(3)，pp. 33－51

福田友之・古屋敷則雄　2000「東北町長者久保遺跡」『東北町長者久保遺跡・木造町丸山遺跡』pp. 1－33，青森県立郷土館

藤沢宗平・林　茂樹　1961「神子柴遺跡―第一次発掘調査概報―」古代学，9(3)，pp. 142－158

藤野次史　1993「発達期槍先形尖頭器の製作技術」『考古論集』pp. 45－60，潮見浩先生退官記念事業会

マリノフスキー，B. K.（寺田和夫・増田義郎訳）　1967『西太平洋の遠洋航海者』（世界の名著59所収）　中央公論社

三宅徹也編　1979『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　青森県立郷土館

宮下健司　1980「土器の出現と縄文文化の起源(試論)―自然環境の復元と土器の機能を中心にして―」信濃，32(4)，pp. 119－155

武笠多恵子　1999「縄文時代草創期」『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796遺跡―(1)』pp. 105－248，東京都埋蔵文化財センター

モース，M.（有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳）　1973「贈与論」『社会学と人類学Ⅰ』pp. 219－400，弘文堂

森嶋　稔　1970「神子柴型石斧をめぐっての再論―その神子柴系文化の系譜について―」信濃，22(10)，pp. 156－172

山内清男　1969「縄紋草創期の諸問題」Museum，224，pp. 4－22

山内清男・佐藤達夫　1967「下北の無土器文化―青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告―」『下北―自然・文化・社会―』pp. 98－109，平凡社

山原敏朗　1998「北海道の旧石器時代終末期についての覚書」北海道考古学，34，pp. 77－92

横田義章　1981「いわゆる「神子柴型石斧」の資料」九州歴史資料館研究論集，7，pp. 51－58

横田義章　1990「いわゆる「神子柴型石斧」の資料(二)」九州歴史資料館研究論集，15，pp. 49－62

横田義章　1992「いわゆる神子柴型石斧の資料(三)」九州歴史資料館研究論集，17，pp. 81－89

横山裕平　1992『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』蟹田町教育委員会

吉井雅勇　1991「中ッ原第５遺跡Ｂ地点における細石刃剥離技術について」『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』pp. 127－138，八ヶ岳旧石器研究グループ

吉田　格・肥留間博　1970『狭山・六道山・浅間谷』瑞穂町

レヴィ=ストロース，C.（馬渕東一・田島節夫監訳）　1977『親族の基本構造』（上）　番町書房

渡辺　誠　1968「日本列島における土器出現の背景をめぐって」古代文化，20(8・9)，pp. 171-177

綿貫俊一　1993「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」古文化談叢，27，pp. 1－33

細石刃石器群の年代に関する諸問題

工藤　雄一郎

1. はじめに

近年，更新世終末期におけるグローバルな気候変動の高精度編年が確立しつつあり，また，その地域的様相についても詳細な分析結果が提示されるようになってきた（福沢 1995, 1998, 1999, 2000; Fukusawa et al 2001; 福沢ほか 2003; Nakagawa et al 2002 など）。これに加え，放射性炭素年代の高精度化と暦年較正の一般化（中村 2001 など）により，更新世終末から完新世初頭における考古学的編年とこれらの環境データとの対比が可能となり，ヨーロッパでは環境が人類に与えた影響や環境への適応などについても議論が進展しつつある（Balles and Street, 1998; Eriksen, 1996, 2002 など）。また，当該期における日本列島の考古学研究においても，環境変動と人類行動との相関関係に関する議論が高まりつつある（谷口・川口 2001; 春成 2001; 堤 2000, 2003 など）。当該期の環境変動と人類の適応行動との相関関係の問題を具体的に進めていく上で，大まかな枠組みとして，環境変遷史に対する考古学的相対編年の年代的位置づけを明確にする必要が生じる（工藤 2003）。

筆者に与えられたテーマは「細石刃文化の年代とその環境」であり，細石刃石器群の年代的位置づけと環境史との対応関係の把握を主眼においたものであった。当該期の考古学的遺跡の年代を測定する理化学的分析方法はいくつか存在するが，遺跡から出土する測定可能な試料の性質や，氷床コア年代や年縞堆積物年代との対比を念頭に置くならば，暦年較正を行うことでほぼ同一タイムスケールで比較できる放射性炭素年代を用いる以外に有効な手段はない。しかし，以下に述べるように，放射性炭素年代値の測定事例の絶対的不足や石器群と測定試料との共伴関係の問題，測定結果の報告上の問題，放射性炭素年代の暦年較正に関する方法論的な問題などが非常に多く，現状ではこれまでに測定された放射性炭素年代値を用いて環境史と細石刃石器群の遺跡の年代に関する詳細な議論が可能な段階までには程遠い感がある。そこで本稿では，細石刃石器群の年代について，年代値を利用するユーザーの立場からいくつかの問題点を指摘した上で，細石刃石器群の段階から土器出現期までを概観するかたちで，本州島・北海道島を中心とした細石刃石器群の放射性炭素年代測定事例と，環境史との関係について記述することにする。なお，筆者の力量不足もあり，九州島の様相については議論の対象から除外していることを最初に断っておきたい。

2. 当該期の放射性炭素年代の問題点

放射性炭素年代を当該期の編年体系の基準として採用することにはいくつかの利点がある。第1に，石器や土器などの型式学的編年から独立した時間的尺度であり，考古学的相対編年にこれとは全く別の系から先後関係の根拠を与えることが可能なことである。これにより，既存の考古学的編年（主に石器型式編年）のクロスチェックを行うことも可能となる。細石刃石器群の従来の編年観に大きな修正を迫った北海道島の柏台1遺跡における調査成果は記憶に新しい（福井・越田編 1999）。また第2に，層位や石器型式で対比できない地域間の年代的比較が可能になることである。例えば環日本海地域において，ロシア極東と日本列島との土器出現期の放射性炭素年代の比較なども進展しつつある（長沼正 ほか 2002 など）。第3に，近年明らかにされてきた環境イベントと考古学的相対編年との時間的対応関係を明確化することが可能であり，環境と人類活動との相互作用を検討するための基礎データとなることである。

最近では微量のサンプルで測定可能な AMS 法の開発とその一般化により，更新世終末期の土器付着炭化物の

年代測定が盛んに行われるようになってきた。これらの資料をもとに更新世終末から完新世初頭における急激な気候変動と考古学的相対編年との対比が行われ，環境変動に対する人類の適応行動のあり方，その変化のプロセスを議論する素地が整いつつある（工藤 2003）。

日本列島の更新世の遺跡での放射性炭素年代測定例は比較的多い。1950 年代に初めて放射性炭素年代測定が実施されて以降，管見に触れた範囲で現在までに約 90 遺跡以上で実施され，測定例は 400 件以上に及ぶ（Ono et al, 2002）。しかし，現状では，年代測定結果と既存の考古学的相対編年から予想される年代値との間に齟齬が多く，使用可能なデータは非常に限られてしまう。その最も重大な問題は，考古学的遺物（特に石器資料）と測定とした試料との間の共伴関係が明確な遺跡が極めて少ないことである。

土器付着炭化物の最も大きな利点は，上記の共伴関係が非常に明確な点にある。この利点を生かし，大平山元Ⅰ遺跡（谷口編 1999），星光山荘 B 遺跡（中島編 2000），久保寺南遺跡や卯ノ木南遺跡（佐藤 2001）などで土器付着炭化物の測定結果が次々と得られており，土器出現期以降の年代的位置づけの把握は急速に進んでいるといえる（谷口 2001, 2002; 工藤 2003 など）。また，近年北西ヨーロッパにおいても放射性炭素年代値の再測定が大規模に実施され，氷河の後退に伴う北ヨーロッパへの再居住のプロセスについての議論がなされている（小野 2000; 小野 2001）。これは，過去の放射性炭素年代値の再評価と AMS 法による再測定の成果によるものである。北西ヨーロッパでは人工遺物である骨角製品が豊富にあり，測定試料の素性がはっきりしているため，上記の共伴関係については問題が少なく，遺跡の年代の再評価が可能となっている。

これに対し，日本列島の土器出現以前の遺跡では，有機質遺物が残存する確率は極めて低く，放射性炭素年代の測定試料も多くは燃料材等に利用されたと推測される炭化した木材の破片が大半を占める。このような試料の場合，石器群と測定試料との共伴関係が把握しにくいという，極めて重大な難点がある。

しかしそれ以前に，調査報告の提示方法にも問題がある場合が多い。例えば神奈川県の吉岡遺跡群の年代測定例を見ると，細石刃石器群が出土している B 区の L1H 層（第Ⅳ文化層）の測定試料が 4 点ある（12,960±120 ^{14}C yrs BP（NUTA-3035），14,600±1,400 ^{14}C yrs BP(Gak-18660)，16,460±250 ^{14}C yrs BP(Tka-11613), 16,860±160 ^{14}C yrs BP(Tka-11599)）。試料の出土層位が記載してあるものの，遺物との平面的・垂直的位置関係などが全く記載されておらず（砂田・三瓶編 1998; 加藤ほか編 1999），どの石器集中に伴ってどのような状況で出土した試料なのか不明である。したがって，第三者である我々ユーザーの側は年代値が著しく異なるこれらの試料が，正確に石器群の年代を反映しているかどうかを評価する術がない。吉岡遺跡群の考察編では細石刃石器群の較正年代がこれらの年代値を用いて議論されているが（砂田 1999），石器群と測定試料との共伴関係が明確でない限り，このような議論にどれほどの意味があるのか疑問である（ここではそもそも黒曜石水和層年代を Oxcal を用いて暦年較正するという，較正年代に対する方法の誤りも見受けられる。同様の誤りは熱ルミネッセンス年代を較正している仲田（2001）にも見られる）。石器群が包含される層位には，当然のことながら遺跡での活動時間とは比較にならない大きな時間幅があり，層位の年代を較正曲線の交点の年代で議論すべきではない。また，層位の年代と放射性炭素年代値から推定された遺跡（石器群）の年代を混同すべきではないし，交点法で得られた複数の年代値の平均値を取ったところで，議論として不適切であることは言うまでもない。

田名向原遺跡のように石器群に伴って明確な遺構が検出され，そこから採取した試料であるという場合のように，石器群と年代測定に用いた試料との共伴関係が明白な場合を除き，「文化層中の炭化物」や「石器群の出土層位と同一平面から検出された炭化物」といった試料では，共伴関係の不確実性が非常に大きいので，本来的には年代値の比較のための試料としてあまり適当ではない。ただし注意しておきたいのは，土器付着炭化物と異なり，人工遺物そのものに付着した炭化物を測定しているわけではないので，石器群と試料となった炭化物との平面的・垂直的位置関係が記載され，なおかつ調査者の所見として両者の共伴関係に問題がなかったとしても，その測定試料自体が石器群の残された時期と全く関係ない時期のものである可能性は排除できないということである。

細石刃石器群の遺跡で放射性炭素年代測定が実施されている例は極めて少ない。しかし問題は年代測定の技術や試料の処理にあるのではなく，それ以前に，試料の選定と報告の仕方にあるように思える。AMS 法の開発に

よって，微量の炭化物試料でも測定できるようになったことにより，より現代炭素の汚染が少ない部分を測定試料として選定することが可能となった。しかし，遺跡を発掘する考古学者が試料に対しより深い注意を払い，試料と石器群との共伴関係を検討できるような報告体制を整えない限り，今後も有効な年代測定事例が蓄積されていくことは望めないだろう。年代測定結果の報告の際には，最低限，試料と石器群との平面的・垂直的位置関係を調査者の所見とともに記載するべきである。また，予想された年代と全く異なる年代値が得られた場合，報告すらされないこともある。現代炭素による汚染の可能性，測定上の問題，あるいは上記の共伴関係など，何処に問題点があったのかを検討した上で報告すべきであろう。これは年代値を較正をするしないという以前の問題である。今後，細石刃石器群を出土する多くの遺跡で放射性炭素年代測定が実施されることを期待するが，このような問題についてもより一層の注意が払われるべきである。

3．放射性炭素年代値の較正曲線の問題

INTCAL98（Stuiver et al, 1998）の較正曲線は約 24,000 cal BP（20,265 ^{14}C yrs BP）まで利用可能である。しかし年輪年代学に基づく較正曲線は，現在約 11,980 cal BP までしか利用できない。樹木年輪で較正された年代値より古い年代，すなわち 11,980 cal BP 以前についてはあくまで暫定的な較正曲線であり，とくに 14,500 cal BP 以前は 24,000 cal BP まで数点の測定試料しかない上，相対的にかなり大きい統計誤差が存在する（図 1 右）。比較的多くの試料が得られている 14,500 cal BP 前後までででも，15,000～14,500 cal BP 付近では誤差範囲が非常に大きくなり，較正年代値によって必ずしも正確な年代値を把握できるわけではない。この年代域は，細石刃石器群の終末から土器出現の時期に近い（工藤 2003）。

一方，福井県三方町の水月湖の年縞堆積物の放射性炭素年代値を用いて，約 45,000 年前までの較正曲線が得られている（Kitagawa et al, 1995）。これは，樹木年輪の較正曲線が届かない範囲の年代値を較正するのに非常に有効なデータではあるが，INTCAL98 を公開した段階では水月湖以外に比較資料がなく，INTCAL98 に組み込むことが見送られた経緯がある。水月湖のデータなどが組み込まれている較正曲線である calpal 2003（Weninger et al, 2003）と INTCAL98 を比較すると，両者には大きいところで 500 年以上のズレが見られる（図 1）。年代値の比較を容易にするために，現在は一般的に INTCAL98 を用いることが推奨されている（Lowe et al 2001）。したがって，細石刃石器群や土器出現の年代（13,000 ^{14}C yrs BP 前後）を氷床コアや年縞堆積物の年代と対比する上で，INTCAL98 の較正曲線では較正した年代の誤差範囲がかなり大きいため（図 1），交点法で得られた較正年代値ではなく，誤差範囲を含めた最大時間幅で議論する必要があるが（工藤 2003），統計誤差 1σ で議論するか，より確実な 2σ で議論するかによっても，年代の捉え方や解釈は大きく異なる（小野 2001）。ま

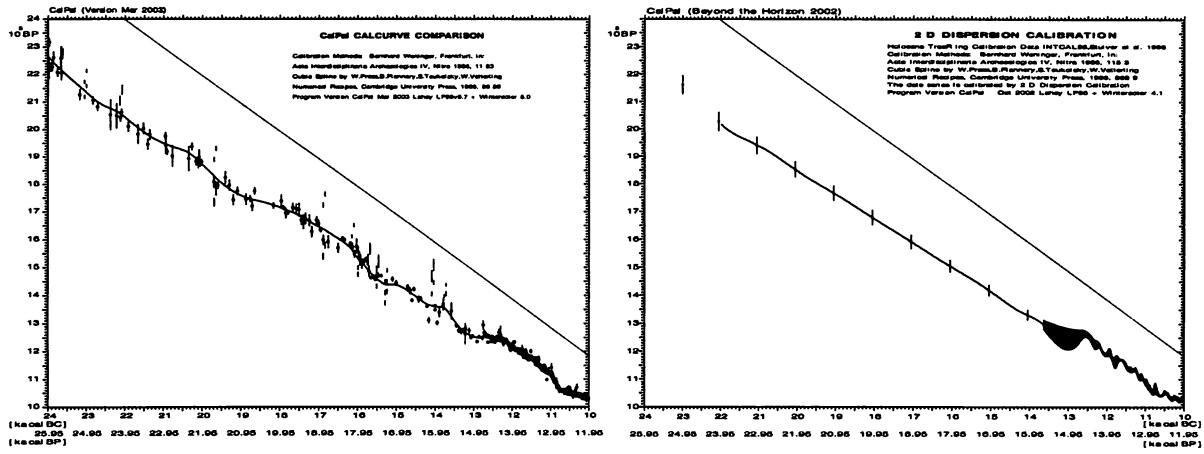


図 1　較正曲線の比較

左：calpal2003（Weninger et al, 2003），右：INTCAL98（Stuiver et al, 1998），図中の直線は理論値。

た，後述するように細石刃石器群の放射性炭素年代値は 21,000 ^{14}C yrs BP まで遡る。較正を行ったとしても，年代値が近似する遺跡の先後関係まで読み取ることは現時点では不可能である。1000 年単位(あるいはそれ以上)のレベルでの同時性・先後関係の議論しかできないことを断っておきたい。

そもそも，複数の石器群の先後関係を放射性炭素年代値で比較するならば，必ずしも較正を行う必要はない。あくまで環境史と対比する上で，細石刃石器群の大まかな年代的位置づけを把握するという目的で，較正年代を使用することを断っておきたい。なお，年代の表記は以下の規準で示した。未較正の放射性炭素年代：^{14}C yrs BP あるいは ^{14}C kyr BP，放射性炭素年代の較正年代：cal BP，年縞堆積物による年代：vy BP(varve years BP)，氷床コアの年代：ice-core yrs BP。

4. 氷床コアおよび年縞堆積物による気候復元の概要

北半球ではグリーンランド氷床から 5 本のコアが得られ，最終間氷期にまでさかのぼる気候変動の記録が供給されている。これらのコアによる気候の記録は，積雪比率，ダスト含有量，酸素同位体のプロフィールなどを含んでいるが，酸素同位体変動はグリーンランドの気候記録と大西洋の深海底コアや北西ヨーロッパの陸域の堆積物などとの比較という意味で，急激な気候変動の指標として有効であり，また，北大西洋地域の広い範囲内での相関関係の基礎としての潜在性を有している（Björck et al, 1998)。

更新世終末から完新世移行期いわゆる晩氷期は，北ヨーロッパでは主に花粉帯に基づきオールデスト・ドリアス期，ベーリング期，オールダー・ドリアス期，アレレード期，ヤンガー・ドリアス期のように区分され，寒冷期と温暖期が交互に繰り返す，短期間かつ急激な気候変動・植生変化が確認されている。1970 年代に北欧では，これらをクロノゾーンとして，それぞれの境界を放射性炭素年代で規定した編年体系が提案された(Mangerud et al, 1974)。現在ではこの体系の境界の放射性炭素年代を較正することで，グリーンランド（GISP2）のδ^{18}O 変動比から復元された気候変動とも対比されている（Stuiver et al, 1995）（図 2)。

グリーンランド氷床コアのデータによれば，最終氷期最寒冷期から続いた寒冷な気候は，GRIP では Greenland Interstadial （グリーンランド亜間氷期：以下 GI）-1e に入り急激に温暖化している（図 3)。この開始年代は GRIP で 14.7 ice-core kyr BP，GISP2 で 14.67 ice-core kyr BP である。その後，GI-1d を経て GI-1c～1a へと移行する。小さな寒冷イベントを含むものの，この亜間氷期（GI-1）はあわせて約 1,800～2,000 年間あり，段階的に寒冷化に向かうものの，かなり長期間温暖な気候が継続していたと考えられている。その後再び寒冷化する Greenland Stadial（グリーンランド亜氷期：以下 GS）- 1 を経て，完新世に移行する。GS-1 の年代は，GRIP で 12.65～11.5 ice-core kyr BP であり，GISP2 で 12.89～11.55 ice-core kyr BP である。

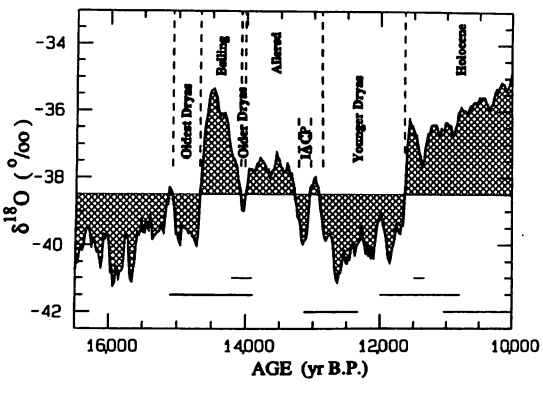


図 2　GISP2 のδ^{18}O 変動比と晩氷期の北欧におけるクロノゾーンとの対比（Stuiver et al, 1995）

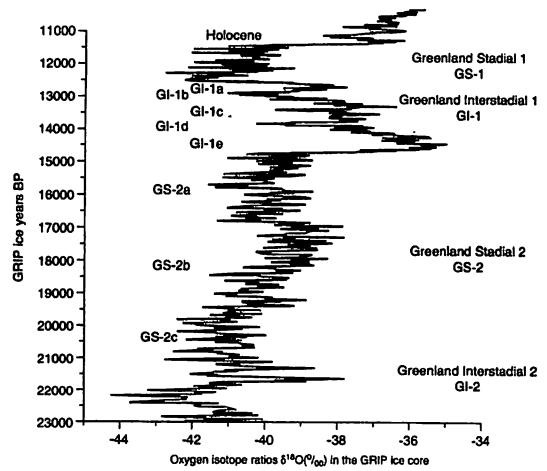


図 3　GRIP のδ^{18}O 変動比および亜氷期と亜間氷期の各イベント（Björck et al, 1998）

なお，これらに先行する長い寒冷なエピソードがGS-2とされ，明瞭な寒冷エピソードであるGS-2a（16.9～14.7 ice-core kyr BP）とGS-2c（21.2～19.5 ice-core kyr BP），これらよりもやや寒冷ではないGS-2b（19.5～16.9 ice-core kyr BP）に区分されている。また短期間の温暖なエピソードであるGI-2（21.8～21.2 ice-core kyr BP）が確認されている（Björck et al, 1998）。ただし，これはGISP2では23.6～23.0 ice-core yrs BPであり，GISP2とGRIPで年代が異なる。

これらの気候変動は高緯度地域だけでなく中緯度地域，低緯度地帯を含むグローバルな変動である。しかし近年，気候変動は地球全体で全く同時間，同一規模で起こっていたのではないことが判明しつつある（福沢ほか2003など）。鳥取県の東郷池では，連続して堆積した年縞が現在から約36,000年前まで採取され，最終氷期末から完新世にかけての降水量の増加と海水準の急激な上昇や，寒暖の変動とモンスーン変動との関係についても明らかにされている。東郷池の年縞堆積物から復元されたこれらの変動は氷床コアの酸素同位体変動と同一の変動形態であり，同時期に生じているというが，GISP2の年代とも正確には一致していないようである（福澤1998）。また，水月湖の年縞堆積物ではすでに15,500vyBP付近から，温暖化の傾向が読み取れるという。時間的にはグリーンランドや北欧よりも1000年ほど温暖化の開始が先行していた可能性が考えられている（Fukusawa et al, 2001; 福澤ほか2003）。

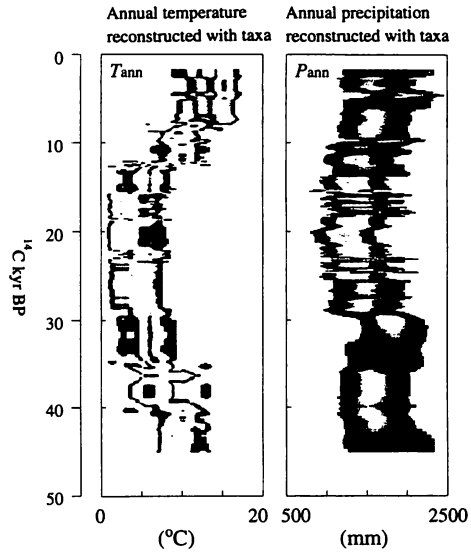


図4　三方湖の堆積物から復元された年平均気温（左）と年間降水量の変動曲線（Nakagawa et al, 2002）

同様のデータは，中川らによる表層花粉データセットを用いた，福井県三方湖の気候復元により示されている（図4）。これによると，最寒冷期以降，放射性炭素年代で約16 ^{14}C kyr BP付近から気温の回復が開始されているが，約13～12 ^{14}C yrs BPを境に急激に気温が上昇している。一方，ヤンガードリアス期に時間的に対比される顕著な寒冷化は確認されず，この間は気温上昇の停滞傾向が見られるという。また，完新世の開始段階においても，現在の気候よりも寒冷であり，年平均気温は10～11℃程度であると推定された。加えて，現在の年平均気温に近い15～16℃まで上昇するのは約8000 ^{14}C yrs BP以後となっている（Nakagawa et al, 2002）。

環境変動と人類イベントの関連を議論する場合，これまで指標とされてきた高緯度地域で観測された気候変動と，対象とする地域での気候変動の規模的・時間的差異は重大な問題である。放射性炭素年代の高精度化と暦年較正によって，人類の活動痕跡である「遺跡」における年代値と，気候変動との時間的対比の検討へと議論が進展しつつあるが，このような検討を行うならば気候変動の地域差の問題は無視できない。日本列島の場合，以上の例からも明らかなように，北欧のベーリング期やアレレード期といった区分とは，異なる変動のあり方を示していると考えられ，これらの用語で日本列島の考古学的現象を説明するのは本来的には不適切であると思われる。そもそもこれらの用語の使用には北欧で19世紀から続く様々な歴史的経緯があり，ヨーロッパ内でさえそれらが指示する時期が異なる場合もある（Street et al, 2002）。例えば花粉帯の定義に従った場合，“ベーリング期”は「カバノキ属の急増が最初に確認される段階」ということであり，この直前は北ドイツの場合，“マイエンドルフ期”とされるため（図5），氷床コア（GISP2）でクロノゾーンとして設定しているベーリング期とは時間的に異なる（Jöris氏の御教示による）。これらの地域的な層位学的用語が指示する範囲，現象が複雑なために混乱も多く，本来北欧の花粉帯編年に使用されてきたこれら用語をヨーロッパ以外の地域に適用することに有効性はないという指摘もある（Björck et al, 1998）。したがって，日本列島の考古学的事例について検討するならばこれらの用語に依拠せず，また氷床コアとの単純な比較だけではなく，それに加え対象とする地域により即したデータを用いて議論する必要があるということには異論はないと思われる。

しかし現時点では，晩氷期の福沢氏による水月湖や東郷池の年縞堆積物による編年（福澤 1995，1998; Fukusawa, 1999）と，花粉から復元した中川氏らによる水月湖の編年（Nakagawa et al 2003）などでは時間的に食い違いもみられる。日本列島周辺域における気候変動の時間的区分については今後も議論が交わされ，一定の見解に落ち着くまでにはまだしばらくの時間がかかりそうである。

筆者は以前に，福沢や中川らのデータをもとに更新世終末から完新世初頭の時間的枠組みに関して，次の5段階を設定した（工藤, 2003）。今回もこの区分を使用するが，あくまで議論を進展させる上での暫定的な時間区分であることを断っておきたい。我々の目的は当該期の気候変動を議論することではなく，あくまで考古学的資料との対比である。従って，例えばある遺跡が時間的に北欧やGISP 2で言うオールデスト・ドリアス期やオールダー・ドリアス期に相当するとしても，対象とする地域の気候や植生と対比できなければ意味がなく，地域的に捉えられない気候区分を考古学的に議論する必要はないと思われる。

段階Ⅰ：LGM以降〜約15,500calBP
段階Ⅱ：約15,500〜約13,200calBP
段階Ⅲ：約13,200〜約11,500calBP
段階Ⅳ：約11,500〜約9000calBP
段階Ⅴ：9,000calBP以降。

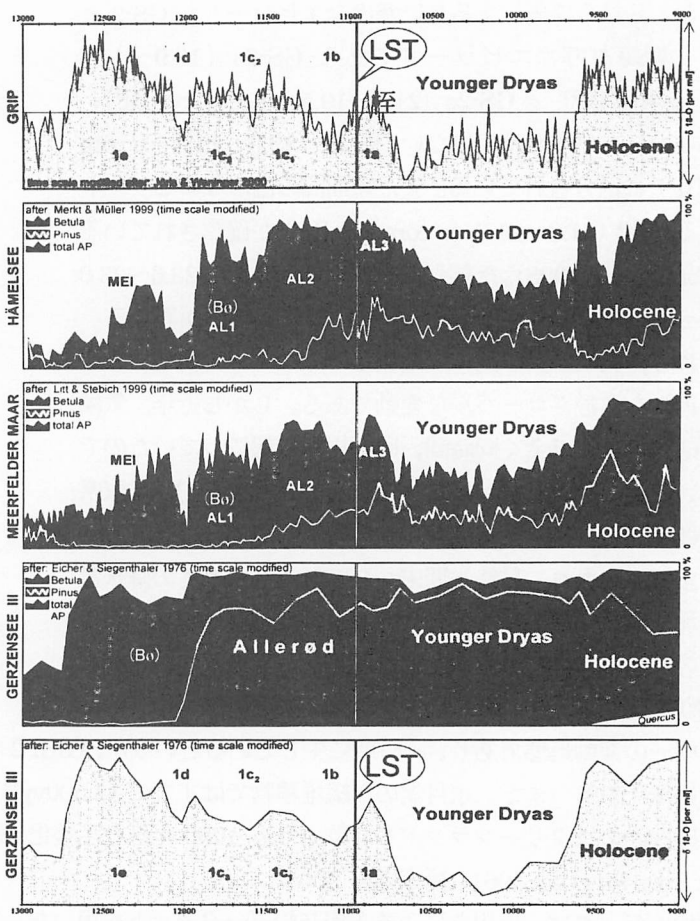


図5　北ヨーロッパにおける晩氷期の植生変遷の対比（Street et al, 2002に一部加筆）
横軸はcalBCで表記してある。最上段がGRIPの酸素同位体変動比，1eがGISP2のベーリング期にあたる。北ドイツのHämeleseeで最初にカバノキ属が増加するAL（Allerød=アレレード）1が花粉帯的にはベーリング（Bølling）期と対比され，それ以前はマイエンドルフ（MEI=Meiendorf）期に相当する。スイスのGerzenseeⅢではカバノキ属の増加がGI-1eとよく一致している。

前稿（工藤2003）では，主に晩氷期の気候温暖化開始以降，完新世初頭までの様相を把握することを念頭においていたため，段階Ⅰについては細分していない。細石刃石器群の考古学的編年の細分化及びその継続時間と環境史との関係や，細石刃石器群以前の様相を考えるならば，将来的には細分が必要であるが，今回はそれをおこなわず，今後の課題としたい。

5．細石刃石器群の年代

北海道島の細石刃石器群の遺跡の年代および本州島の細石刃石器群前後の遺跡の年代を提示した（表1・2）。参考として出土している細石刃核の型式を提示しておいた。北海道島における細石刃石器群の最古の年代は柏台1遺跡である（表1）。ここでは約21〜19 ^{14}C kyr BPの年代が得られた。これにより，北海道島の細石刃石器群の年代値がユーラシア大陸側の年代値とその開始において大きなずれがあるわけではないことが判明した（Ono et al, 2002）。一方，北海道島ではこれ以降1万年前前後までいくつかの遺跡で年代値が得られている。例えば，

美利加1遺跡では柏台1遺跡と同様の20～19^{14}C kyr BP前後の年代が得られており，他の遺跡では18～17 ^{14}C kyr BP前後の年代値が欠けているが，16～10 ^{14}C kyr BPまでいくつかの年代値がある。ただし，美利加1遺跡では14 ^{14}C kyr BP前半の測定結果が新たに得られており（寺崎ほか2001），1984年の報告書に記載された年代と大きく異なる。また表1には，新道4遺跡のように年代値が新すぎるとして混入の可能性が考えられている例も含めた。前述したように，これらの遺跡の年代値が石器群の年代を正確に反映しているかどうかについては，測定試料と石器資料との共伴関係の検討が必要である。実際，これらの年代測定例は既存の編年観との矛盾から年代値が疑問視されているケースが多い。北海道島では土層堆積が薄く，周氷河現象に起因する石器群の上下移動が著しいため，時間的に近接した石器群の先後関係を層位的に捉えることは困難である。遺物の上下移動の問題は測定試料となる炭化物においても同様である（炭化物の上下移動の問題は北海道島に限ったことではない。例えば中ッ原第1遺跡G地点の細石刃石器群の年代測定例のように，2490±60^{14}C yrs BP（Beta-81733）（堤編1996）というかけ離れた年代が得られている場合もある）。現状では石器群と測定試料との関係が明確な遺跡は非常に限られ，共伴関係が不明な試料も表1・表2には含まれている。細石刃核を基軸とした石器型式編年の有効性についても再検討する必要があるが，これらの問題を解決するには今後よりいっそうの年代値の蓄積をまたねばならない。しかし，細石刃石器群を大局的に捉えれば放射性炭素年代で約20～10 ^{14}C kyr BP前後までの時間幅を想定することが可能であると考えられる。

これに対し，本州島では細石刃石器群の年代値は極めて少ない（表2）。やや古いものとしては，岐阜県の宮ノ前遺跡で14～12 ^{14}C kyr BPの試料があるが年代値の開きが大きい。石器と測定試料は近接して出土しているが，水性堆積層中からの出土であるため，石器群との共伴関係に不明な点が多い（河野ほか1998）。吉岡遺跡群B区の試料は16 ^{14}C kyr BPの年代値もあるが，前述のように年代値の開きも大きく，詳細が不明である。そのほか

表1　北海道島における細石刃石器群の放射性炭素年代値

site name	Sample position	Measured ^{14}C age(1σ)	Conventional ^{14}C age(1σ)	Calibration ^{14}C age(1σ)	Lab Code and No.	Material dated	Cultural affiliation	β or AMS	Microblade core	Reference
新道4	文化層	8320±280	—	9550-9000	KSU-1430	炭化物	細石刃石器群	β	峠下・ホロカ・美利加型	大沼ほか1988
帯広・空港南B	Ⅲ層	9150±600	—	11180-9530	KSU-890	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型？	佐藤・北沢編1986
	Ⅲ層	9500±650	—	11900-9920	KSU-891	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型？	佐藤・北沢編1986
オサツ16	PT135覆土	10600±650	—	13170-11260	GaK-19468	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型	大島編1997
	PT76覆土	14590±200	—	17820-17130	GaK-19469	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型	大島編1997
上似平	文化層	11410±440	—	13840-12990	GaK-7076	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型？	赤石・後藤編1978
	文化層	12530±490	—	15700-14080	GaK-7075	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型？	赤石・後藤編1978
上白滝2	Cb-1	11590±60	11610±60	13810-13450	Beta-150430	炭化物	細石刃石器群	AMS	札滑型	長沼ほか編2001
	Cb-1	11610±70	11620±70	13810-13450	Beta-150429	炭化物	細石刃石器群	AMS	札滑型	長沼ほか編2001
	Cb-1	11860±110	11860±110	14060-13640	Beta-101795	炭化物	細石刃石器群	AMS	札滑型	長沼ほか編2001
	Cb-1	13760±170	13750±170	16810-16210	Beta-112884	炭化物	細石刃石器群	AMS	札滑型	長沼ほか編2001
帯広・川西C	スポット17被熱遺物集中	13070±40	13020±40	15880-15340	Beta-126150	炭化物	細石刃石器群	AMS	不明	北沢ほか編2000
帯広・別府1遺跡	スポット1Ⅳb層下部	—	13400±70	16340-15870	Beta-149443	炭化物	細石刃石器群	AMS	不明	北沢・笹島編2001
石川1	Ⅳ層Cb-1	13400±160	—	16390-15810	KSU-1652	炭化物	細石刃石器群	β	美利加型	長沼編1988
帯広・南町	スポット3，土坑2	13790±190	—	16870-16230	GaK-18247	炭化物	細石刃石器群	β	札滑or美利加型	北沢・山原編1995
オルイカ2遺跡	包含層	—	14630±50	17780-17260	Beta-174529	炭化物	細石刃石器群	AMS	札滑型	佐川ほか2003
帯広・暁	スポット8Ⅳ層上部	10900±500	—	13420-12330	KSU-889	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型・札滑型	佐藤・北沢編1987
	第1地点Ⅳ層上部	14700±250	—	17990-17220	KSU-717	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型	佐藤・北沢編1985
	第4地点Ⅳ層上部	14700±130	—	17900-17310	KSU-718	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型	佐藤・北沢編1985
奥白滝1	Cb-1	15570±130	15570±130	18930-18290	Beta-112873	炭化物	細石刃石器群	AMS	紅葉山型	長沼ほか編2002
	Cb-1	15580±190	15570±190	18960-18250	Beta-112874	炭化物	細石刃石器群	AMS	紅葉山型	長沼ほか編2002
	Cb-1	15260±150	15270±150	18580-17940	Beta-112875	炭化物	細石刃石器群	AMS	紅葉山型	長沼ほか編2002
日東	炭化木集中(Cb-2)	16570±120	16560±120	20510-19850	Beta-136455	炭化物	細石刃石器群	AMS	広郷型	長沼ほか編2000
	炭化木集中(Cb-2)	16940±80	16940±80	18210-17640	Beta-136453	炭化物	細石刃石器群	AMS	広郷型	長沼ほか編2000
美利加1	ブロック1	—	14980±90	18210-17640	Beta-151564	炭化物	細石刃石器群	AMS	峠下型	寺崎ほか編2001
	ブロック1	—	14950±90	18170-17610	Beta-151565	炭化物	細石刃石器群	AMS	峠下型	寺崎ほか編2001
	ブロック1	—	14770±80	17950-17410	Beta-151566	炭化物	細石刃石器群	AMS	峠下型	寺崎ほか編2001
	美利加Ⅰ(Cb-5)	20100±335	—	24320-23270	N-4937	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型	長沼編1984
	美利加Ⅰ(Cb-5)	20900±260	—	—	KSU-689	炭化物	細石刃石器群	β	峠下型	長沼編1984
	美利加ⅡB(Fb-4)	19800±380	—	24050-22900	KSU-687	炭化物	細石刃石器群	β	蘭越型	長沼編1984
柏台1	ブロック1 Ⅰ層	20200±120	20180±120	24280-23500	Beta-112919	炭化物	細石刃石器群	AMS	美利加型	福井・越田編1999
	ブロック2 Ⅳ層	20500±160	20510±160	—	Beta-112920	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック2 Ⅳ～Ⅴ層	20500±130	20490±130	—	Beta-112921	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック2Ⅱ～Ⅲ層	20700±210	20680±210	—	Beta-112922	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック3 Ⅳ層	20570±160	20580±160	—	Beta-126167	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック6 炉址	20140±150	20130±150	24250-23430	Beta-126170	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック12 炉址	20600±160	20610±160	—	Beta-126184	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック12 炉址	20790±160	20790±160	—	Beta-126175	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック14 炉址	19850±70	19840±70	23920-23130	Beta-120881	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック14 炉址	20370±70	20370±70	—	Beta-120883	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック15 炉址	18840±150	18830±150	22750-21970	Beta-126177	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999
	ブロック15 炉址	20700±150	20700±150	—	Beta-126176	炭化物	細石刃石器群	AMS	蘭越型	福井・越田編1999

※較正プログラムはCARIB4.3，較正曲線はINTCAL98を使用した。較正年代はMethod Aによる1σの最大時間幅である。

には，初期に測定された年代であるが休場遺跡で 14,300±700 ^{14}C yr BP（Gak-604）という試料がある（杉原・小野 1967）。これは，石囲炉から採取した炭化物試料である。また，荒屋遺跡で 13,200±350^{14}C yrs BP（GaK-948）という年代値がある。月見野上野遺跡第Ⅲ文化層の細石刃石器群に伴う炭化物の測定結果もあるが（相田 1986），年代値の開きが大きく，また複数の炭化物片をひとつの試料として測定されているため，正確な年代を反映しているかどうかは疑問が残る。したがって，本州島の細石刃石器群の年代的位置づけをこれまでに得られている年代値のみから判断するのは難しい。そこで，関東北部のテフラの層位的関係及び相模野台地における層位的出土事例から，細石刃石器群の年代の継続範囲をある程度特定してみたい。

関東平野北部の頭無遺跡，桝形遺跡，柏倉芳美沢遺跡などの細石刃石器群に属する遺跡は，As-YP（約 13.5～13.0 ^{14}C kyr BP）混じりあるいはその下位から確認されている（桜井 1999 など）。これに対し，小島田八日市遺跡（杉山編 1994）や白井北中道遺跡（麻生 1998）では As-YP より上位で，徳丸仲田遺跡では As-YP と As-Sj（約 11.5 ^{14}C kyr BP）との間から，隆起線文土器を伴って大型の尖頭器や有舌尖頭器が出土している。また，新潟県の大刈野遺跡や正面中島遺跡では，As-YP と同一輪廻と考えられる As-K 混じりあるいは前後の層から細石刃石器群が確認されており，樽口遺跡でも As-K 直下から細石刃石器群が確認されている（佐野 2002; 立木 1996）。従って，関東平野北部周辺における細石刃石器群の上限の年代は層位的にみても，放射性炭素年代で約 13.0 ^{14}C kyr BP 前後あるいはそれ以前に位置づけられることはほぼ間違いないだろう。関東平野北部と相模野台地で細石刃石器群に大きな年代差があるとは考えにくいので，前述の月見野上野遺跡（第Ⅲ文化層）の年代値のうち，12000 年代と 11000 年代前半の測定結果は新しく出ている可能性が高い。

表 2　本州島における更新世終末期の主要遺跡の放射性炭素年代値

site name	Sample position	Measured ^{14}C age(1σ)	Conventional ^{14}C age(1σ)	Calibration ^{14}C age(1σ)	Lab Code and No.	Material dated	Cultural affiliation	β or AMS	Microblade core	Reference
夏島貝塚	夏島Ⅱ文化層	9240±500	—	11170-9700	M-770(771)	炭化物	撚糸文土器	β	—	杉原・芹沢1962
池田B	集石遺構No.1	—	9590±50	11112-10751	Beta-127647	炭化物	撚糸文土器	AMS	—	笹原・吉田編2000
	集石遺構No.2	—	9480±50	11041-10601	Beta-127648	炭化物	撚糸文土器	AMS	—	笹原・吉田編2000
卯ノ木南	土器付着炭化物	—	11000±50	13130-12900	Beta-136739	炭化物	爪形文・多縄文土器	AMS	—	佐藤2001
	土器付着炭化物	—	11040±50	13150-12920	Beta-136740	炭化物	爪形文・多縄文土器	AMS	—	佐藤2001
	土器付着炭化物	—	11130±50	13170-13010	Beta-136741	炭化物	爪形文・多縄文土器	AMS	—	佐藤2001
	土器付着炭化物	—	11630±50	13810-13460	Beta-136742	炭化物	爪形文・多縄文土器	AMS	—	佐藤2001
樋引	第4号土坑	—	10030±50	11640-11260	Beta-113349	炭化物	多縄文土器	AMS	—	小田川ほか編1999
滝端	集石遺構	—	10260±40	12310-11770	Beta-138898	炭化物	爪形文土器	AMS	—	森編2000
慶應SFC	第2文化層	11350±160	—	13750-13150	GaK-15904	炭化物	隆起線文土器	β	—	岡本編1993
星光山荘B	土器付着炭化物	—	12000±40	14100-13830	Beta-133848	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	中島編2000
	土器付着炭化物	—	12160±40	15160-14090	Beta-133849	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	中島編2000
	土器付着炭化物	—	12340±50	15310-14150	Beta-133847	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	中島編2000
久保寺南	土器付着炭化物	—	12280±50	15270-14120	Beta-136743	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	佐藤2001
	土器付着炭化物	—	12420±50	15370-14230	Beta-136744	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	佐藤2001
	土器付着炭化物	—	12490±60	15420-14290	Beta-136745	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	佐藤2001
	土器付着炭化物	—	12620±50	15490-14370	Beta-136746	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	佐藤2001
	土器付着炭化物	—	12510±40	15430-14310	Beta-136747	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	佐藤2001
	土器付着炭化物	—	12520±50	15430-14310	Beta-140494	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	佐藤2001
	土器付着炭化物	—	12630±50	15500-14380	Beta-140495	炭化物	隆起線文土器	AMS	—	佐藤2001
中島B	土器集中地点	12460±310	—	15490-14110	I-13767	炭化物	隆起線文土器	β	—	百瀬編1987
官ヶ瀬北原	第Ⅰ文化層	13070±80	13060±80	15940-15410	Beta-105398	炭化物	無文土器	AMS	—	市川ほか編1998
	第Ⅰ文化層	9660±80	9480±80	—	Beta-105399	炭化物	無文土器	AMS	—	市川ほか編1998
	第Ⅰ文化層	13020±80	13050±80	15930-15390	Beta-105400	炭化物	無文土器	AMS	—	市川ほか編1998
	第Ⅰ文化層	13170±100	13060±100	15950-15400	Beta-105401	炭化物	無文土器	AMS	—	市川ほか編1998
	第Ⅰ文化層	13030±80	13020±80	15900-15330	Beta-105402	炭化物	無文土器	AMS	—	市川ほか編1998
	第Ⅰ文化層	13060±80	13050±80	15930-15390	Beta-105403	炭化物	無文土器	AMS	—	市川ほか編1998
大平山元Ⅰ	土器付着炭化物	—	13210±160	16170-15590	NUTA-6515	炭化物	無文土器	AMS	—	谷口編1999
	土器付着炭化物	—	13030±170	15960-15290	NUTA-6507	炭化物	無文土器	AMS	—	谷口編1999
	土器付着炭化物	—	12720±160	15590-14390	NUTA-6509	炭化物	無文土器	AMS	—	谷口編1999
	土器付着炭化物	—	12680±140	15550-14380	NUTA-6506	炭化物	無文土器	AMS	—	谷口編1999
	土器付着炭化物	—	13780±170	16840-16240	NUTA-6510	炭化物	無文土器	AMS	—	谷口編1999
	第Ⅲ層	—	13480±70	16430-15960	Beta-125550	炭化物	無文土器	AMS	—	谷口編1999
月見野上野	第Ⅲ文化層3区25ブロック	11870±330	—	14250-13460	Gak-10542	炭化物	細石刃石器群	β	野岳・休場型	相田編1986
	第Ⅲ文化層3区25ブロック	12230±490	—	15430-13810	Gak-10543	炭化物	細石刃石器群	β	野岳・休場型	相田編1986
	第Ⅲ文化層3区25ブロック	13570±410	—	16820-15770	Gak-10545	炭化物	細石刃石器群	β	野岳・休場型	相田編1986
荒屋	—	13200±350	—	16330-15380	GaK-948	炭化物	細石刃石器群	β	野岳・休場型	東北大学1990
休場	1号炉址	14300±700	—	17980-16300	Gak-604	炭化物	細石刃石器群	β	削片・分割系	東北大学1990
官ノ前	17層	—	12860±160	15760-14830	NUTA-3644	樹木片	細石刃石器群	AMS	野岳・休場型	杉原・小野1967
	17層	—	14550±160	17740-17120	NUTA-3637	トウヒ毬果	細石刃石器群	AMS	野岳・休場型	河野ほか編1998
吉岡B区	L1H	12960±120	—	15850-15180	NUTA-3035	炭化物	細石刃石器群	AMS	野岳・休場型	河野ほか編1998
	L1H	14600±1400	—	19120-15850	Gak-18660	炭化物	細石刃石器群	β	野岳・休場型	加藤ほか編1999
	L1H上部	16490±250	—	20080-19240	Tka-11613	炭化物	細石刃石器群	AMS	野岳・休場型	加藤ほか編1999
	L1H上部	16860±160	—	20450-19720	Tka-11599	炭化物	細石刃石器群	AMS	野岳・休場型	加藤ほか編1999
田名向原	住居状遺構ピット	—	17650±60	21330-20660	Beta-127792	炭化物	尖頭器石器群	AMS	—	辻2000
	住居状遺構ピット	—	17630±50	21300-20640	Beta-127793	炭化物	尖頭器石器群	AMS	—	辻2000
小暮東新山	住居状遺構ピット3	—	17950±60	21680-21010	Beta-121133	炭化物	尖頭器石器群	AMS	—	細野1999

※較正プログラムはCARIB4.3, 較正曲線はINTCAL98を使用した。較正年代はMethod Aによる1σの最大時間幅である。

問題は下限の年代である。関東平野を中心とする本州島中央部では，相模野台地などの層位的出土事例からおおよその相対的編年として，「ナイフ形石器石器群」→「尖頭器石器群」→「細石刃石器群」という変遷が一般的に理解されている（諏訪間 1988 など）。上記の関東平野北部の細石刃石器群は数段階の編年差を想定されているものの（例えば萩谷 1994），As-BP グループ（約 23～19^{14}C kyr BP）よりは確実に上位から出土しており，これより新しいことはほぼ間違いなく，おおよそ細石刃石器群は As-Sr（約 18 ^{14}C kyr BP）より上位であると考えられている（萩谷 1994, 桜井 1999 など）。加えて，尖頭器石器群の小暮東新山遺跡では住居状遺構が，As-Sr 降灰直後，As-Ok1（約 17 ^{14}C kyr BP）の間から発見されている（細野 1999）。一方，相模野台地における細石刃石器群は，主に L1H 上部から L1S までの範囲から出土している。尖頭器石器群は LIH 下部から上部の間で主に出土するが，L1H 中部に中心がある（諏訪間 1988，2001）。相模野台地の石器編年が本州島東部全体に敷衍化できるわけではないが，関東平野周辺域を前提にすれば，ほぼこの関係で問題ないと思われる。尖頭器石器群では田名向原遺跡で放射性炭素年代値が得られている。試料は住居状遺構のピットから得られたものであり，石器群との同時性は高いと考えて問題ないだろう。年代値は 17650±60 ^{14}C yrs BP（Beta-127792）と 17630±50^{14}C yrs BP（Beta-127793）である。また小暮東新山遺跡で 17950±60^{14}C yrs BP（Beta-121133）という年代が得られている（細野 1999）。これらの年代値を参考にすると，尖頭器石器群はおよそ 18～17 ^{14}C kyr BP 前後を中心とした石器群であることが推定される。相模野台地の層位的事例に矛盾がなければ，細石刃石器群の年代はこれより新しいと考えられ，16（あるいは 15）～13 ^{14}C kyr BP を想定することが可能であろう。

6．細石刃石器群の終末から土器出現期以降の年代

筆者は以前，主に本州島東部における細石刃石器群終末から撚糸文土器群までの考古学的相対編年の位置づけを図った（工藤 2003）。ここで，これらの位置づけを再確認しておく。

更新世終末から完新世初頭にかけては，既存の考古学的編年でいえば細石刃石器群の終末段階から撚糸文期までを含み，関東地方から東北地方におけるこの間の変遷を大局的に捉えれば，「細石刃石器群」→「神子柴・長者久保系石器群＋無文土器」→「隆起線文期」→「爪形文・多縄文期」→「撚糸文期」と了解されている。この間は放射性炭素年代で約 4000 年，較正年代で約 5000～6000 年の年代幅を有する。関東地方，中部地方から東北地方における，当該期に該当する遺跡の年代値を表 2 に示した（ただし工藤（2003）で使用したもののうち，文化層出土の試料で遺物との関係が不明確な試料は除いた）。これによると，宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡や大平山元 I 遺跡では，約 13 ^{14}C kyr BP 付近の年代値が多く，隆起線文期の遺跡は 12.5～12.0 ^{14}C kyr BP に集中している。一方，爪形文・多縄文期の遺跡は 11.5～10.0^{14}C kyr BP 前後までやや分散している傾向がある。

7．環境史との対応関係

問題はこれらの年代値と，環境イベントとの時間的関係である。前述したように，放射性炭素年代値は半減期を 5568 年（もしくは 5730 年）とした理論値であり，氷床コアや年縞堆積物などのデータと比較するには較正した年代値で議論する必要がある。しかし，前述のように INTCAL98 の年輪年代を用いた較正曲線は 11,980 cal BP までしか遡れておらず，それ以前の較正曲線はサンゴのウラン系列年代で較正されているが，暫定的な較正曲線である。11,980 cal BP 以前の較正曲線は今後修正されていく可能性が十分あり，当該期の人類イベントとの比較に用いるのは時期尚早であるとの意見もある。だたし，自然科学の分野や欧米の研究では較正年代での議論が基本となってきており，日本の考古学研究もその方向性で今後議論されていくのは間違いないだろう。また，1 遺跡の年代論ではなく，今回のような，環境変遷史に対する考古学的相対編年の位置づけというレベルでは，方法論的に，要求される誤差範囲内で議論が可能であると考えられる（例えば，隆起線文期の星光山荘 B 遺跡と久保寺南遺跡では，久保寺南遺跡の方が古い年代値が得られているが（表 1），両者の先後関係を問題にしているのではなく，あくまで隆起線文期の年代のおおよその位置づけを把握することが目的である）。そこで，本州島のデータについては，CARIB4.3 を用いてすべて較正を行った。

以上をまとめたのが，図６である。本州島の尖頭器石器群の遺跡から撚糸文土器群の遺跡の年代的位置づけを示した。前稿（工藤 2003）と同様に INTCAL98 の較正曲線を使用したものである。図６の左端には気候変動の参考資料として，GRIP と GISP2 の $\delta^{18}O$ 変動比を，その隣には福沢による東郷池の石英フラックス（Fukusawa, 1999）と水月湖の炭酸塩酸素フラックス変動（福澤ほか 2003）を示した。図６の右側には，放射性炭素年代を較正した年代値をバーで示している。補正した年代値は年縞年代や氷床コア年代とほぼ同一のタイムスケールであると推定し，補正年代の縦軸はこれらと合わせている。その間に遺跡の較正年代値をバーで示した。複数の年代値がある場合，最も若い年代値の誤差範囲（1σ）から最も古い年代値の誤差範囲までを含めた年代幅で示した。従って複数の年代値がありそれぞれの年代値に開きが生じている場合はバーの長さも長くなっている。大平山元Ⅰ遺跡がその典型である。実際には遺跡で活動していた時間はこのバーの中のどこかに位置づけられる確率が高い。しかし，複数の年代値からひとつの年代値のみを抽出して議論するのは問題がある。数点測定されている年代値のうち，汚染の影響が少ないという意味で最も古い年代値を採用するか，あるいは平均値を採用するべきかの判断が難しい（中村・辻 1999）。どの年代が最も近似値であるかは現状では不明確であることから，安易にひとつの年代値のみを採用するのは避けるべきであろう。このような理由から，図６には可能性のある最も長い時間幅で示した（ただし同様の意味で，年代値が１点しかない遺跡では，その年代値が遺跡の年代を正確に反映しているかどうかの信頼性に乏しいことにも注意が必要である）。

以上の結果を総合すると，大平山元Ⅰ遺跡や宮ヶ瀬北原遺跡などの土器出現期とされる遺跡は，段階Ⅰの終わりからその直後に位置づけられる。この間は時間的には北欧や GISP2 でいうオールデスト・ドリアス期に時間的に対比できるが（谷口・川口 2001），日本列島周辺ではすでに温暖化がある程度進行しつつある可能性を指摘しておく必要がある（福澤ほか 2003 など）。しかし，その後の隆起線文土器の段階とどのような関係にあるのか

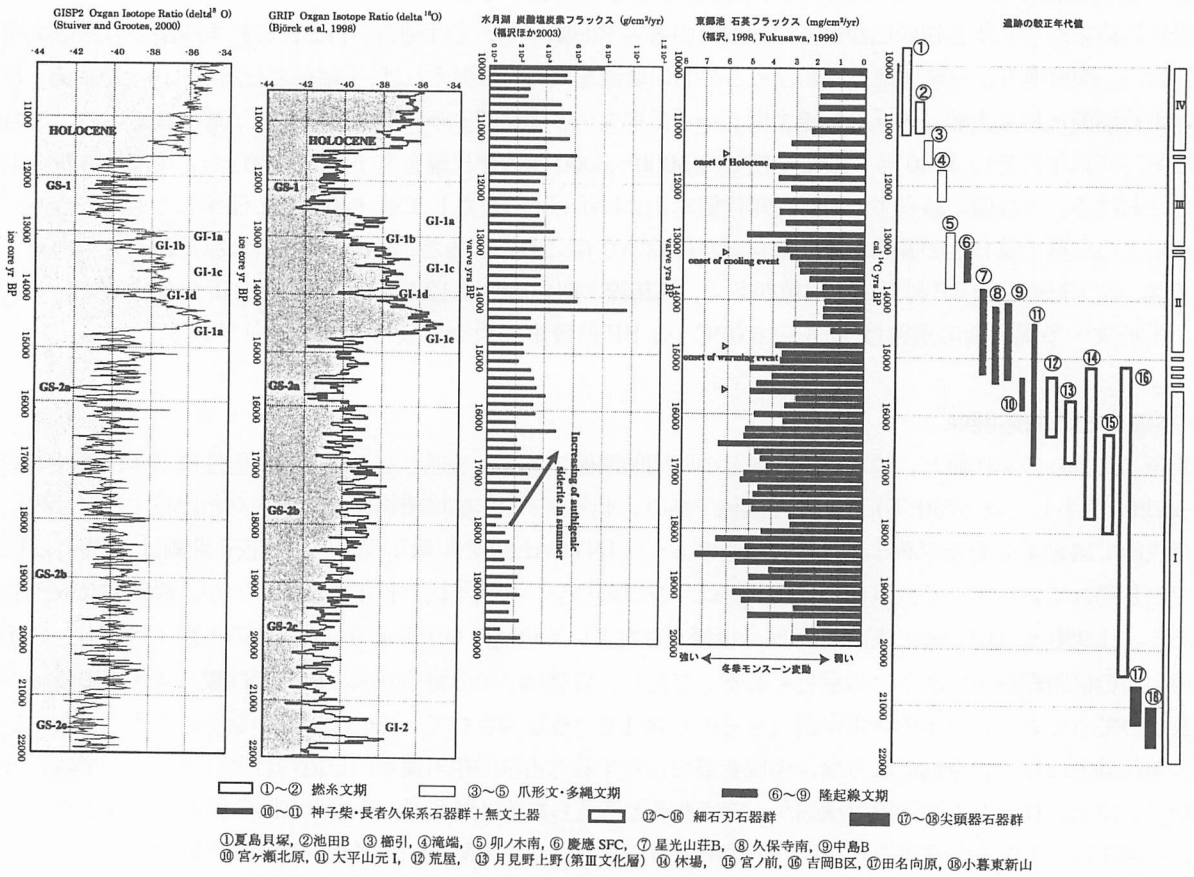


図６　本州島における細石刃石器群前後の主要遺跡の較正年代と環境史との対応関係

は，年代測定例の蓄積を待って改めて判断したい。

一方，隆起線文土器を伴う段階は，段階IIに位置づけられることがほぼ確実であるが，年代値は段階IIの前半に集中している。爪形文・多縄文段階とオーバーラップするのか現時点では不明であるが，13.5～13.0 cal kyr BP前後に転換点があった可能性を指摘しておく。段階IIでは植生の急激な変化が各地で確認されている。花粉分析によると，段階Iから段階IIにかけて，近畿や北陸地方では，ブナ属の拡大が確認されており，温暖化と多雪化が進行したことが指摘されている（宮本ほか 1999）。これに対し，関東地方などの太平洋側では，それまでのトウヒ属やマツ属単維管束亜属などの針葉樹の優占する植生からコナラ亜属が急増したこと確認されており，気温の急激な上昇と対応する（辻ほか 1985; 辻ほか 1989; パリノ・サーヴェイ 1989; パリノ・サーヴェイ 1992 など）。また，野尻湖湖底堆積物の花粉分析では，12310±100 ^{14}C yrs BP（Beta-139892）を境として，トウヒ属・モミ属・ツガ属等の針葉樹を中心とする組成が，コナラ亜属・ブナ属・カバノキ属などの落葉広葉樹を主体とする植生へと移行する（公文ほか 2003）。この年代は野尻湖に近い星光山荘B遺跡の年代と非常に近似した年代である。本州島では温暖化が開始する時期前後に土器の使用開始があるようである。また，年代的に見て本州島で土器の使用がほぼ一般化する隆起線文土器の段階は，本州島中央部以西ではコナラ亜属やブナ属などが拡大した後の，落葉広葉樹が優占する植生環境であったことがうかがえる。ただし断っておくが，落葉広葉樹林の拡大と土器の出現をダイレクトに結びつけているのではない。実際，本州島北端部に目を移すと，大平山元I遺跡が残されたころの植生は，トウヒ属，カラマツ属，モミ属などの亜寒帯性針葉樹で構成されていたと推測され（寺田ほか 1994; 那須ほか 2002），本州島北部における土器の使用開始は落葉広葉樹の拡大に先行する。十和田八戸テフラ（約 13.0～12.5 ^{14}C kyr BP）の上位に隆起線文期の遺跡は位置づけられるが（谷口・川口 2001），例えば北八甲田ではこのテフラの上位で針葉樹の減少とカバノキ属あるいはハンノキ属の増加が確認されている（辻ほか 1983）。コナラ亜属やブナ属の増加はそれに後続する。

爪形文・多縄文期の遺跡の位置づけは，この図からは判断しにくいが，13.0 cal kyr BP 前後から爪形文・多縄文系土器の段階が開始されるとすると，おおよそ段階IIの終わりから段階IIIに相当する年代である。時間的には北欧やGISP 2のヤンガー・ドリアス期に，GRIPのGS-1にほぼ相当する段階IIIにその中心があったと考えられるが，その継続期間は段階IIの終末から，完新世初頭の段階IVに入る可能性も考慮しなければならない。爪形文・多縄文土器期の細分といった考古学的編年上の問題を含めて，明確な位置づけは年代値の蓄積をまって再検討が必要である。この間には気候的には気温の上昇の停滞傾向が見られるようである（Nakagawa et al 2002）。しかし関東平野の花粉分析では植生としても明確な変化は確認できない。北海道の剣淵盆地などの比較的高緯度地域か標高が高い場所では，亜寒帯性針葉樹林の再拡大が確認されているようだが（小野・五十嵐 1991; 辻ほか 1983），本州島平野部などではこの寒冷化は植生に重大な変化を及ぼすほどのものではなかった可能性も考えられる。一方，撚糸文期は完新世初頭の段階IVに位置づけられることは確実である。

8．細石刃石器群の年代的位置づけ

これに対し，細石刃石器群の年代は土器出現期以降と異なり，おおよそ段階IIの気候の温暖化以前，すなわち段階Iに位置づけられる（図6）。吉岡遺跡B区の年代は，どの試料が石器群の年代を正確に反映しているのか不明であるため，バーの長さも長くなっている。年代値の下限を把握するため，参考に尖頭器石器群の田名向原遺跡と小暮東新山遺跡の年代値も提示した。本州島の細石刃石器群の下限の年代を明確化するには，尖頭器石器群も含めて，年代値が欠如する16～15 ^{14}C kyr BP の測定例の蓄積が必要がある。関東平野における当時の植生は，おおよそ最寒冷期から続いた寒冷環境のもとに，トウヒ属やマツ属単維管束亜属やカラマツ属などの亜寒帯～冷温帯性針葉樹林が優占し，カバノキ属やハンノキ属などの落葉広葉樹が伴う森林環境であったと推測できる。ただし，福井県の三方湖のデータによれば，段階IIの急激な温暖化が開始される以前に，約 16.0 ^{14}C kyr BP 前後から気候の回復がみられるようであり（Nakagawa et al 2002），これは段階Iの後半に相当する。水月湖の炭酸塩酸素フラックス（図6）でも，18,000 vy BP から湖水温の上昇が確認されている。また，野尻湖湖底堆積物

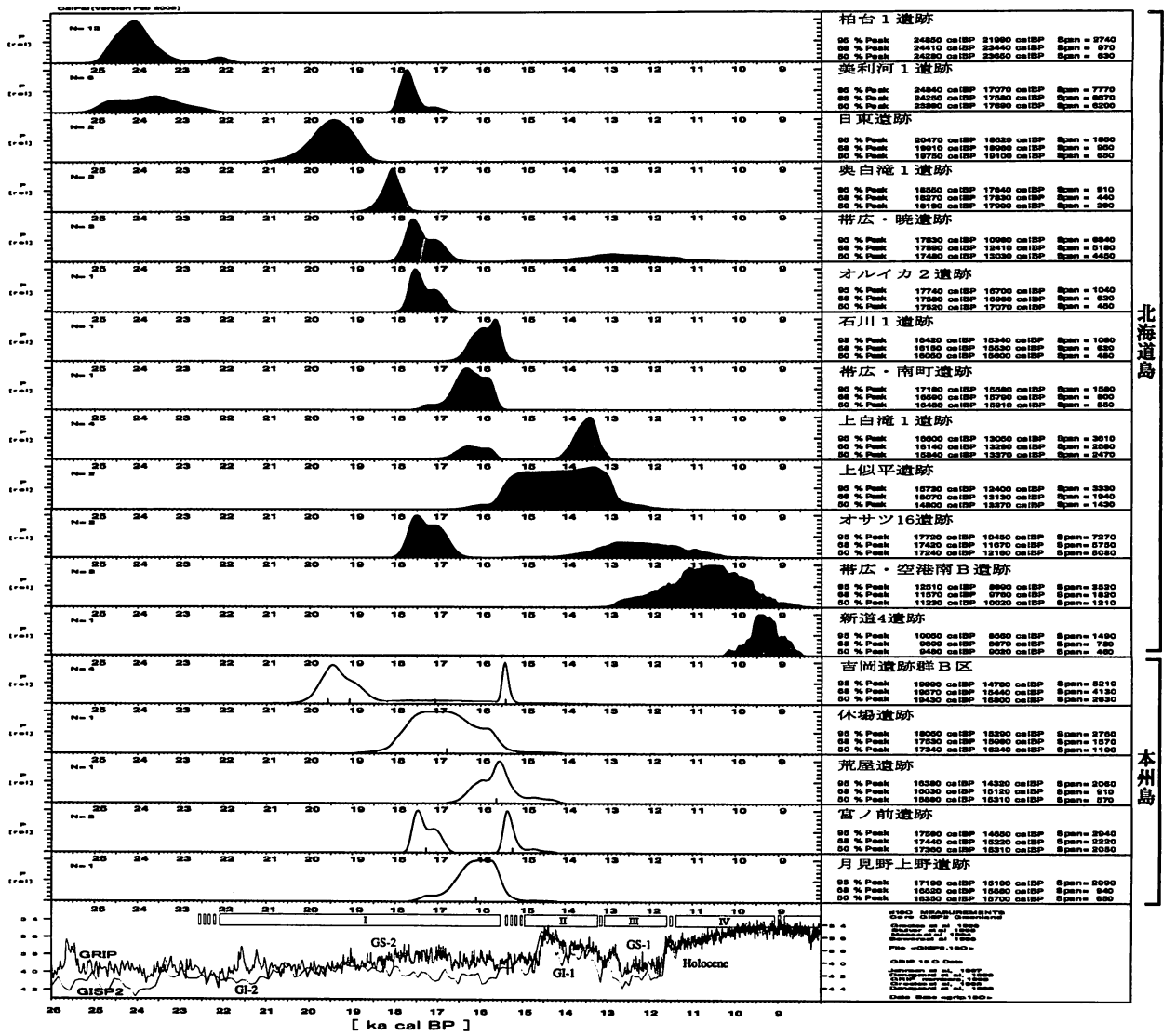


図７　北海道島（図上）および本州島（図下）における細石刃石器群の年代的位置づけ

北海道島の年代は代表的な遺跡のみ提示してある。両図の下の気候変動曲線はGRIPとGISP2の$\delta^{18}O$変動比。

の花粉分析でも，約15^{14}C kyr BP付近からコナラ亜属などの落葉広葉樹の比率が半数近くまで増加している（公文ほか2003）。したがって，本州島の細石刃石器群は最寒冷期以降，晩氷期に向けて徐々に気候が温暖化する時期に位置づけられるようである。

一方，北海道島の細石刃石器群の開始年代に関してはINTCAL98の較正曲線が届かない範囲を含む。そこで，水月湖の年縞堆積物によるデータが組み込まれている較正プログラムCALPAL_A（Weninger et al, 2003）を使用して，細石刃石器群の年代的位置づけを試みた（図７）。図７にはGRIPとGISP2のデータを提示してある。CALPAL_Aのオプションの CalGroup を使用して，年代値は遺跡単位でグループ化して表示した。なお，較正曲線はcalpal2003を使用した。図７の年代値は使用している較正曲線がINTCAL98と異なるため，表１・２の較正年代値とは若干異なることを断っておく。

北海道島の細石刃石器群は最寒冷期あるいはその直後から継続しているようである。最寒冷期における北海道の植生は，北海道東部および中北部の一部においてはグイマツやハイマツが点在した森林ツンドラが発達し（山田1998），石狩平野とそれ以南の地域ではグイマツが優勢で，エゾマツ，アカエゾマツとともに亜寒帯性針葉樹

林を形成していたとされる（星野 1998）。北海道島においても段階Ⅰの温暖化に伴って，森林ツンドラから亜寒帯林に変化し，カバノキ属が増加し始めるなどの植生変化が確認されているが，カバノキ属などの落葉広葉樹が本格的に拡大し始めるのは完新世に入ってからであり，完新世が始まるまで亜寒帯性針葉樹林が継続していたと考えられる（小野・五十嵐 1991）。

北海道島の細石刃石器群の出現および終焉については年代的にも未だ不明な点が多い。本州島の細石刃石器群に時間的に先行する北海道島の細石刃石器群が，本州島の細石刃石器群の出現とどのように関係するのか，また，北海道島における細石刃石器群の終焉はどのような状況であったのか，今後は年代値と環境情報を対比しながら再検討していく必要がある。

9．おわりに

10年ほど前までは，細石刃石器群の年代が晩氷期のヤンガー・ドリアス期と対比され，生業（サケ・マス論など）や定住化との関連が議論されていた（例えば佐藤 1992；加藤 1992）。現在では理論値である放射性炭素年代と実年代とのギャップが当該期では無視できないほどの時間幅があることが判明し，細石刃石器群の年代観や当時の環境条件についても修正されつつある。新しい年代観に基づいて，細石刃石器群の本州島での出現の経緯や，生業・行動論的解釈についても再検討することが必要である。また，南北に長い日本列島内の環境条件は地域に応じて多様であり，環境の変化（特に植生変遷）のプロセスも各地域で大きく異なるため，国民国家を前提とした「日本」という範囲を自明のものとした，考古学諸現象の一般化（例えば細石刃石器群とサケ・マス論や，土器の出現と堅果類利用の開始など）には否定的にならざるをえない。地域的特性に応じて環境変遷を把握し，その上で考古学的事象との対応関係を理解することが，第一に要求される。

本稿では，細石刃石器群の石器型式編年とその年代の問題については扱わなかった。そのような議論を展開するには年代測定例が著しく不足しているためである。また，環境史と対比する以前に，放射性炭素年代の測定試料の選定や報告のあり方，較正曲線の問題等が多い。今後，細石刃石器群の開始の問題，細石刃石器群の生業形態や移動・居住形態などの問題，北海道島と本州島との年代差の要因，本州島での細石刃石器群の出現の背景等を議論するには，細石刃石器群の放射性炭素年代値に関する基礎的なデータの蓄積が必要不可欠である。また，本州島における細石刃石器群の終末と土器出現期の年代的・環境的位置づけをより一層明確化するためにも，年代値の蓄積が望まれる。

引用・参考文献

相田薫（編）1986『月見野上野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告書第21集，大和市教育委員会．

赤石博志・後藤聡明（編）1978『上似平遺跡』帯広市教育委員会

小田川哲彦・新山隆男・平山明寿・坂本真弓・小山浩平（編）1999『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集，青森県埋蔵文化財調査センター．

麻生敏隆 1998「白井遺跡群白井北中道遺跡」『第5回石器文化研究会－発表要旨－』：20～23．

市川正史・鈴木次郎・吉田政行（編）1998『かながわ考古学財団調査報告41　宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅣ　北原（№10・11北）遺跡』（財）かながわ考古学財団．

大島秀俊（編）1997『オサツ16遺跡（2）』北海道文化財保護協会調査報告書 第7集，北海道文化財保護協会．

大沼忠春・千葉英一・遠藤香澄・立川トマス・熊谷仁志・花岡正光（編）1988『新道4遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第52集，（財）北海道埋蔵文化財センター．

岡本孝之（編）1993『湘南藤沢キャンパス内遺跡－第1巻 総論－』慶應義大学考古学研究室．

小野　昭 1998「中部ヨーロッパの更新世－完新世移行期の考古学的様相」『シンポジウム：更新世－完新世移行期の比較考古学』：1～7．東京都立大学考古学研究室．

小野　昭 2000「氷期-後氷期移行期の環境と人類－中部ヨーロッパ南部の編年の諸問題－」『大塚初重先生頌寿記

念考古学論集』：992-1008. 東京堂出版.
小野　昭 2001「中部ヨーロッパにおける最終氷期－後氷期の較正年代と考古学」『第四紀研究』40-6: 527～534.
小野有五・五十嵐八枝子 1991『北海道の自然史－氷期の森林を旅する－』北海道大学図書刊行会.
加藤千恵子・坂本宏児・白石浩之・砂田佳弘・依田良一（編）1999『吉岡遺跡群Ⅸ－考察・自然科学分析編－』かながわ考古学財団調査報告 49,（財）神奈川考古学財団.
北沢　実・山原敏朗（編）1995『帯広・南町遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告 第 14 冊，帯広市教育委員会.
北沢　実・笹島香織・藁科哲男（編）2000『帯広・川西 C 遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告第 18 冊
北沢　実・笹島香織（編）2001『帯広・別府 1 遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告第 21 冊，帯広市教育委員会.
工藤雄一郎 2003「更新世終末から完新世移行期における考古学研究の諸問題－環境変遷史と考古学的時間軸との対応関係－」『古代文化』55-6: 15-27.
公文富士夫・河合小百合・井内美郎 2003「野尻湖湖底堆積物中の有機炭素・全窒素率および花粉分析に基づく約 25,000～6,000 年前の気候変動」『第四紀研究』42-1: 13-26.
河野典夫・立田佳美・小島　功・山田昌久・中村俊夫・鬼頭　剛・鈴木三男・吉井亮一・森　勇一・早川正一・林　直樹 1998『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』宮川村教育委員会.
細野高伯 1999「小暮東新山遺跡」『第 6 回石器文化研究会－発表要旨－』: 1-4, 石器文化研究会，第 6 回石器文化研究交流会，群馬実行委員会.
桜井美枝 1999「Ⅳ期」『第 6 回石器文化研究会－発表要旨－』: 66-67, 石器文化研究会，第 6 回石器文化研究交流会，群馬実行委員会.
笹原千恵子・吉村たまみ（編）2000『池田 B 遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第 122 集，静岡県埋蔵文化財調査研究所.
佐藤訓敏・北沢　実（編）1985『帯広・暁遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告 第 1 冊，帯広市教育委員会.
佐藤訓敏・北沢　実（編）1986『帯広・空港南 B 遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告 第 2 冊，帯広市教育委員会.
佐藤訓敏・北沢　実（編）1987『帯広・暁遺跡 2』帯広市埋蔵文化財調査報告 第 5 冊，帯広市教育委員会.
佐藤雅一 1988『大刈野遺跡』湯沢町教育委員会.
佐藤雅一 2001「信濃川上流域の遺跡と遺物の様相」『長岡市立科学博物館開館 50 周年記念特別展図録 重要文化財考古資料展－火焔土器と小瀬が沢・室谷洞窟出土品－』: 113～126.
佐藤雅一・佐野勝宏（編）2002『正面中島遺跡』津南町文化財調査報告第 37 輯，津南町教育委員会.
佐野勝宏 2002「北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態」『考古学研究』49-1: 38-58.
杉原荘介・小野真一 1965「静岡県休場遺跡における細石刃文化」『考古学集刊』3-2: 1-33.
杉原荘介・芹沢長介 1962『神奈川県夏島における縄文時代初頭の貝塚』
杉山秀宏（編）1994『小島田八日市遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団報告 175 集.
砂田佳弘 1999「相模野細石器の暦年補正年代」『吉岡遺跡群Ⅸ－考察・自然科学分析編－』かながわ考古学財団調査報告 49: 25-30,（財）神奈川考古学財団.
砂田佳弘・三瓶裕司（編）1998『吉岡遺跡群Ⅴ－旧石器時代 3　B1 層～L1S 層の石器文化　縄文時代 2 草創期－』かながわ考古学財団調査報告 38,（財）神奈川考古学財団.
諏訪間　順 1988「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』24: 1～30.
諏訪間　順 2001「相模野旧石器編年の到達点」『平成 12 年度 神奈川県考古学会考古学講座　相模野旧石器編年の到達点』: 1-20，神奈川考古学会.
早田　勉 1994「群馬の指標テフラと自然環境」『第 2 回岩宿フォーラム/シンポジウム　群馬の岩宿時代の変遷と特色 予稿集』: 20～24.
谷口康浩（編）1999『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査－旧石器時代の終末と縄文文化の起源に関する問題の探究－』
谷口康浩 2000「日本列島北部における土器出現の ^{14}C 年代・暦年代と時代区分の問題」『日本第四紀学会講演要

旨集』30: 186～189.
谷口康浩 2002a「縄文時代遺跡の年代」『季刊考古学』77: 17～21.
谷口康浩 2002b「日本および極東における土器出現の年代」『國學院大學考古学資料館紀要』18: 45-67.
谷口康浩 2002c「縄文早期のはじまる頃」『異貌』20: 2-36.
谷口康浩・川口　潤 2001「長者久保・神子柴文化期における土器出現の ^{14}C年代・較正暦年代」『第四紀研究』40-6: 485-498.
立木宏明 1996『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ 樽口遺跡』朝日村文化財報告書 第11集
辻　誠一郎・能城修一・鈴木三男・南木睦彦・小杉正人・鈴木茂・木越邦彦・小山修司 1989「松が丘遺跡の古環境復元」『松が丘遺跡発掘調査報告書』151-234，中野区教育委員会.
辻　誠一郎 1997「縄文時代移行期における陸上生態系」『第四紀研究』36-5: 309～318.
辻　誠一郎 2000「炭素年代から暦年代へー二一世紀の年代観確立が急務ー」『考古学クロニクル 2000』: 162-167. 朝日新聞社.
辻　誠一郎・宮地直道・吉川昌伸 1985「北八甲田における更新世終末期以降の火山灰層序と植生変遷」『第四紀研究』21-4: 301-313.
辻　誠一郎・南木睦彦・鈴木三男 1984「栃木県南部，二宮町における立川期の植物遺体群集」『第四紀研究』23-1: 21-29.
辻　誠一郎・吉川昌伸・吉川純子・能城修一 1985「前橋台地における更新世終末期から完新世初期の植物化石群集と植生」『第四紀研究』23-4: 263-169.
堤　隆（編）1996『中ッ原第1遺跡G地点の研究II』八ヶ岳旧石器研究グループ.
堤　隆 1998「氷期の終末と細石刃の出現」『科学』68-4: 296～304.
堤　隆 2000「掻器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」『考古学研究』47- 2: 66～84.
堤　隆 2003「後期旧石器時代の石器群と寒冷環境への適応戦略」『第四紀研究』42-3: 205-218.
寺崎康史・宮本雅道・藤田征史（編）2001『ピリカ遺跡Ⅰ』今金町文化財調査報告4，今金町教育委員会.
寺田和雄・太田貞明・鈴木三男・能代修一・辻　誠一郎 1994「十和田火山東麓における八戸テフラ直下の埋没林への年輪年代学の適用」『第四紀研究』33-3: 153-164.
東北大学考古学研究室（編）1990『荒屋遺跡ー第2・3次発掘調査概報』
中島英子（編）2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 16ー信濃町内その2ー』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書49.
仲田大人 2001「南関東における縄文時代草創期前半の居住形態ー最適化モデルによる予備的検討ー」『先史考古学論集』10: 73-116.
中村俊夫 2001「放射性炭素年代とその高精度化」『第四紀研究』40- 6: 445～459.春成秀爾 2001「旧石器時代から縄文時代へ」『第四紀研究』40- 6: 517～526.
中村俊夫・辻誠一郎・竹本弘幸・池田晃子 1997「長野県，南軽井沢周辺の更新世終末期の浅間テフラ層の加速器 ^{14}C年代」『地質学雑誌』103: 990-999.
中村俊夫・辻誠一郎 1999「青森県東津軽郡蟹田町大平山元Ⅰ遺跡出土の土器破片表面に付着した微量炭化物の加速 ^{14}C年代」『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』: 107～111.
長沼孝（編）1985『美利加1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第23集，北海道埋蔵文化財センター.
長沼孝（編）1988『石川1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第45集，北海道埋蔵文化財センター.
長沼孝・越田雅司・佐藤剛（編）2000『日東遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第141集，（財）北海道埋蔵文化財センター.
長沼孝・鈴木宏行・直江康雄・越田雅司（編）2001『白滝遺跡群II－上白滝2遺跡・上白滝6遺跡・北支湧別4遺跡－』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第154集，（財）北海道埋蔵文化財センター.

長沼孝・鈴木宏行・直江康雄（編）2002『白滝遺跡群Ⅲ－上白滝5遺跡・奥白滝1遺跡－』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第169集，（財）北海道埋蔵文化財センター.

長沼正樹 2002「両面調整石器群研究序説－更新世終末期石器群理解の枠組み構築にむけて－」『考古学研究』49-3: 65-84.

長沼正樹, シェフコムード, I. Ya., 工藤雄一郎, コスチナ, S.F., 松本拓., ガルシコフ, M.V., 橋詰潤 2002「ゴンチャルカ1遺跡 2001年度発掘調査の概要とその諸問題」『旧石器考古学』64: 73-82.

那須浩郎・百原　新・沖津　進 2002「晩氷期のトウヒ属バラモミ節，トドマツ，グイマツの分布立地」『第四紀研究』41-2: 109-122.

萩谷千明 1994「Ⅳ期－細石器文化－」『第2回岩宿フォーラム/シンポジウム　群馬の岩宿時代の変遷と特色 予稿集』：37～42.

パリノ・サーヴェイ株式会社 1989 「野川中州北遺跡植物化石層の堆積環境と植生」『野川中州北遺跡－自然科学分析編』：69-93, 小金井市遺跡調査会

パリノ・サーヴェイ株式会社 1991「附編　長為遺跡周辺における 12,000 年前以降の古環境変遷」『長為遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第119集 ：21-52, 栃木県教育委員会

パリノ・サーヴェイ株式会社 1992「二之宮千足遺跡の古環境解析」『二之宮千足遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第125集: 61-111, （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

春成秀爾 2001「旧石器時代から縄文時代へ」『第四紀研究』40-6: 517-526.

福井淳一・越田賢一郎（編）1999『柏台1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第138集，（財）北海道埋蔵文化財センター.

福澤仁之 1995「天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼堆積物」『第四紀研究』34-3: 135～149.

福澤仁之 1998「氷河期以降の気候の年々変動を読む」『科学』68-4: 353～360.

福澤仁之 1999「日本の湖沼年縞編年学－高精度編年と環境変動の高分解復元－」『月刊地球』号外 26: 181～191.

福澤仁之 2000「第四紀後期の地球環境変動と湖沼・内湾・レス堆積物」『月刊地球』22-3: 139～145.

福澤仁之・斎藤耕志・藤原　治 2003「日本列島における更新世後期以降の気候変動のトリガーはなにか？－チベット高原と West Pacific Warm Water Pool の役割－」『第四紀研究』42-3: 165-180.

星野フサ 1998「北海道植生史（2）－南北海道－」安田喜憲・三好教夫（編）『図説 日本列島植生史』：51-61.

宮本真二・安田喜憲・北川浩之・竹村恵ニ 1999「福井県蛇ヶ上池湿原における過去14000年間の環境変遷」『日本花粉学会会誌』45-1: 1-12.

百瀬長秀（編）1987『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』長野県埋蔵文化財センター.

森　淳（編）2000『滝端遺跡発掘調査報告書』青森県階上町教育委員会.

山田悟郎 1998「北海道植生史（1）－北北海道－」安田喜憲・三好教夫（編）『図説 日本列島植生史』：39-50

Balles and Street, 1998. Late Palaeolithic Backed Point assemblages in the northern Rhineland: current research and changing views. *Notae Prahistoricae*, 18: 79-92.

Björck, S., Walker, M.L.C., Cweynar, L.C., Johnsen, S., Knudsen, K.L., Lowe, J. J., Wohlfarth, B. and INTIMATE members, 1998. An event stratigraphy for the Last Termination in the North Atlantic region based on the Greenland ice-core record: a proposal by the INTIMATE group. *Journal of Quaternary Science*, 13-4: 283-292.

Dansgaard, W., Johnsen, S.J., Clausen, H.B., Dahl-Jensen, D., Gundestrup, N.S., Hammer, C.U., Hvidberg, C.S., Steffensen, J.P., Sveinbjörnsdottir, A.E., Steffensen J.P. and Bond, G., 1993. Evidence for general instability of past climate from a 250-kyr ice-core record. *Nature*, 364 : 218-220.

Eriksen, B. V. 1996. Resource Exploitation, subsistence Strategies, and Adaptiveness in Late Pleistocene-Early Holocene northwest Europe. In: L. G. Straus., B. V. Eriksen., J. M Erlandson and D. R.

Yenser(eds.): *Humans at the End of the Ice Age : The Archeaology of the Pleistocene -Holocene Transition*, 101-128. New York.

Eriksen, B. V. 2002. Reconsidering the geochronological framework of Lateglacial hunter-gatherer colonization of southern Scandinavia. In: B. V. Eriksen and B. Brutlund.(eds.) *Recent studies in the Final Palaeolithic of the European plain. Proceedings of a U.S.S.I.P. Symposium, Stockholm, 14-17. October 1999.* Jutland Archaeological Society Publications vol. 39: 25-41. Aarfus University press.

Fukusawa, H. 1999. Varved Lacustrine sediments in Japan: Resent Progress. 第四紀研究, 38-3: 237-243

Fukusawa, H., Yamada, K., Zolitschka, B., and Yasuda, Y. 2001. Varve chronology of European maar and Japanese lake sediments since the Last glacial: How many sets of light-dark lamina were formed annually? *Terra Nostra* 2001/3 6th ELDP Workshop, Potsdam.

Greenland Ice-core Project (GRIP) Members, 1993., Climate instability during the last interglacial period recorded in the GRIP ice core. *Nature,* 364: 203-207.

Kitagawa, H., Fukusawa, H., Nakamura, T., Okamura, M., Takemura, K., Hayashida, A and Yasuda, Y., 1995. AMS ^{14}C Dating of Varve Sediments from Lake Suigetsu, Central Japan and Atmospheric ^{14}C Change during the Late Pleistocene. *Radiocarbon*, 37-2: 371-378.

Lowe, J.J., Hoek, W.Z., and INTIMATE group. 2001. Inter-regional correlation of palaeoclimatic records for the Last Glacial-Interglacial Transition: a protocol for improved precision recommended by the INTIMATE project group. *Quaternary Science Reviews*, 20 : 1175-1187.

Mangerud, J., Andersen, S. T., Berglund, B. E and Donner, J. J. 1974. Quaternary stratigraphy of Norden, a proposal for terminology and classification. *Boreas*, 3: 109-128.

Nakagawa, T., Tarasov, P. E., Nishida, K., Gotanda, K., and Yasuda, Y. 2002. Quantitative pollen-based climate reconstruction in central Japan: application to surface and late Quaternary spectra. *Quaternary Science Reviews*, 21: 2099-2113.

Nakagawa, T., Kitagawa, H., Yasuda, Y., Tarasov, P. E., Nishida, K., Gotanda, K., Sawai, Y., Yangtze River Civilization Program Members., 2003. Asynchronous Climate Changes in the North Atlantic and Japan during the Last Termination. *Science,* 299: 688-691.

Ono, A., Sato, H., Tsutsumi, T and Kudo, Y. 2002. Radiocarbon Date and Archaeology of the Late Pleistocene in the Japanese Islands. *Radiocarbon*, 44-2: 477-494.

Street, M., Baales, M., Cziesla, E., Hartz Sönke., Heinen, M., Jöris, O., Koch, I., Pasda, C., Terberger, T. and Vollbrecht Jürgen. 2002. Final Paleolithic and Mesolithic Research in Reunified Germany. *Journal of World Prehistory*, 15-4: 365-453.

Stuiver, M., Grootes, P. M. and Braziunas, T. F. 1995. GISP2 $\delta^{18}O$ Climate Record of the Past 16,500 Years and the Role of the Sun, Ocean, and Volcanos. *Quaternary Research,* 44: 341-354.

Stuiver, M and van der Plicht. 1998. INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0calBP. *Radiocarbon*, 40: 1041-1083.

Stuiver, M and Grootes, P. M. 2000. GISP2 Oxygen Isotope Ratios. *Quaternary Research*, 53: 277-284.

Walker, M.J.C., Björck, S., Lowe, J. J., Cweynar, L.C., Johnsen, S., Knudsen, K.L., Wohlfarth, B. and INTIMATE group, 1999. Isotopic 'event' in the GRIP ice core: a stratotype for Late Pleistocene. *Quaternary Science Reviews,* 18-6: 1143-1150.

Weninger, B., Jöris, O and Danzeglocke, U. 2003. Cologne Radiocarbon Calibration & Paleoclimate Research Pacage. www.calpal.de. Universität zu Köln Institut für Ur- und Frühgeschichte Radiocarbon Laboratory.

（東京都立大学大学院人文科学研究科博士後期課程）

朝鮮半島の細石刃文化

小畑　弘己

はじめに

朝鮮半島の旧石器文化研究を考える際、朝鮮民主主義人民共和国に関しては1970年代以降然したる進展は認められないが、大韓民国（以下韓国）の場合、調査事例の増加に伴い、旧石器学会の成立、報告および研究論文の増加、各種シンポジウムの開催など、近年に至り隆盛を極めつつある。細石刃文化に関するものに限っても資料数の増加は目を見張るものがあり、1992年に李鮮馥が細石刃関連遺跡と石核数を12遺跡230点としたが、その後の10年間に、遺跡数にして2.5倍、遺物数もほぼ1.4倍となった（図1・表1）。その間細石刃文化に関する各種論考が試みられたが、細かな時代・地域相を捉える作業がまだ追いついていないのが現状である。その大きな原因として依然それらを把握できるほどの資料数が十分ではないことが挙げられるが、それとともに後期旧石器時代に相当する堆積層の薄さ、それに伴う多層遺跡の少なさ、年代決定の根拠となる決定的な地学的資料の欠如など、遺跡調査に係わる諸条件も障壁となっている。さらには接合資料や個体別分析による技術型式的研究への取組みは今始まったばかりで、石器製作技術を構造的に捉えた研究成果がまだ明らかにされておらず、いきおい技術的研究は残核形状の個別的分析に終始せざるを得ない状況である。しかもその際比較対象となるのが、日本における細石刃石核の諸型式とその年代観であり、母親が子供の遺伝子を拠り所にするという矛盾が生じている。わが国の細石刃文化の故郷と目される韓国側の資料こそ、独自の分類・編年体系を確立すべきであり、その際、接合資料を基軸にした技術型式学的視点に立った分析が志向されることが望ましいことは言うまでもない。この方法は、時間はかかるであろうが、わが国の研究の歩みからみた反省点に学べば、無駄のない「パルンギル（近道）」であることは疑いを入れない。

しかし、現状の成果の整理と問題点の把握は、研究の将来的展望を明かにする上で欠かせない一里塚でもある。そのような意味で、ここでは少々粗い部分もあるが、現況で把握できうる限りにおいて、本地域の細石刃文化の年代的枠組みと編年を軸にその抱える問題点についてまとめてみることとする。

Ⅰ．研究史と問題点

1．研究史

細石刃文化に関する資料が最初に提示されたのは、1964年の公州石壮里遺跡の調査が嚆矢であろう。後期旧石器時代住居址層からは細石刃石核4点が報告され、黒曜石製彫器が「石刃製石核」、その他の斑岩製の細石刃石核が「舟底形掻器・削器兼石刃石核」や「削器兼石刃石核」と、一応石刃石核の範疇で把握され、スキー状スポールも認識されていた（図5：12～20）（孫寶基1973）。その後、1978年に朝鮮民主主義人民共和国において人骨とともに黒曜石製の細石刃石器群が晩達里洞穴で発見され注目を集めた。正式報告は1985年に刊行されている（科学・百科事典出版社1985）。

1980年代に入ると、南漢江上流域の堤原チャンネ遺跡（朴喜顯1989）や丹陽垂楊介遺跡（李隆助1985）の調査が実施され、垂楊介遺跡においては多量の細石刃石器群が発見され注目を集めることとなった（図4）。1980年代後半には、寶城江・蟾津江流域の住岩ダム建設地域において、和順大田遺跡（図5：8～11）（李隆助・尹用賢1992a・1992b）、昇州竹山遺跡（李鮮馥他1990b）、曲川遺跡（図5：6・7）（李隆助・尹用賢1990）、金坪遺跡（林炳泰・李鮮馥1988）など、南部地域で多数の遺跡が発見される一方、北漢江上流域の平和ダム建設に伴う江原道の楊口上舞龍里遺跡（図5：1～5）（江原道・江原大学校博物館1989）など、韓国全土にわたって細石刃文化

の存在が明らかにされていった。

表1　朝鮮半島における細石刃文化関連遺跡地名表（★は報告書未刊のため挿図や写真で紹介された点数）

地図番号	遺跡名	所在	文化層	細石刃	細石刃石核	その他	炭素年代	文献
1	晩達里洞穴	平壌市勝湖区晩達里	Ⅱ層		5			科学・百科事典出版社 1985
2	長興里	江原道鐵原郡東末邑長興4里10-8	Ⅱ層(第1文化層)	14	5		24,200±600BP（AMS）	江原考古学研究所 2001
3	上舞龍里1里A区	江原道楊口郡楊窟邑上舞龍里1里A地区	2層	2	3			江原道・江原道博物館 1989
3	上舞龍里L地区	江原道楊口郡楊窟邑上舞龍里L地区	採集品		2			江原道・江原道博物館 1989
4	下花渓里	江原道洪川郡北方面下花渓里1里サドン		53	27			江原道 1992
5	民楽洞	京畿道議政府民楽洞		1？	2？			崔夢龍ほか 1996
6	好坪洞★	京畿道南楊州市好坪洞	3層	22	10		22,200±600BP～16,190±50BP（AMS）	洪美瑛・金起兌 2003
7	三里	京畿道廣州市実村面三里山29-9	2層	15		彫器1		畿甸文化財研究院他 2003
8	坪倉里	京畿道龍仁市陽智面坪倉里山106－14番地	表面採集(2層)		1	打面再生剥片2		京畿道博物館・ソウル大学校考古美術史学科 2000
9	チャンネ	忠清北道清原郡忠州市東良面沙器里チャンネ	Ⅱ層			スポール1		朴喜顕 1989
10	垂楊介	忠清北道丹陽郡赤城面艾谷里垂楊介	Ⅰ区Ⅳ層(第2文化層		195		16,400BP, 18630BP	忠北大学校博物館 1985・1998b
11	石壮里（LP2）	忠清南道公州市長岐面壮岩里石壮里	4層（マンガン層）		3			孫宝基 1990b・1993
11	石壮里（LP1）	忠清南道公州市長岐面壮岩里石壮里	5層（第12文化層）		10		20,830BP	孫宝基 1990b・1993
12	セムゴル	忠清北道清原郡文義面文徳邑				スポール1		李隆助 1979b
13	老隠洞★	全羅南道大田広域市儒城区老隠洞山10-2・270街	A地区5層(第3文化層)	4	1		（第2文化層）22,870±110BP（AMS）	韓南大学校博物館 1998，韓昌均 2000
14	新幕	全羅北道益山郡新幕	採集品		1			金恩正 2002
15	チングヌル★	全羅北道鎮安郡程川面慕程里チングヌル	2層（第1文化層）	○			22,850±350BP（AMS）	李起吉 2001
16	ミルトン	全羅南道長城郡ミルトン	採集品		1			金恩正 2002
17	堂下山	全羅南道咸平郡長年里堂下山	3層（第2文化層）		1			木浦大学校博物館 2001
18	玉果(舟山里)	全羅南道谷城郡玉果面舟山里461-10，463	採集品			打面再生剥片1		李鮮馥ほか 1990b
18	玉果(松田里)	全羅南道谷城郡立面松田里	採集品	5	2			李鮮馥ほか 1990b
19	下青丹	全羅南道谷城郡下青丹	採集品		1			金恩正 2002
20	ヨンソ	全羅南道寶城郡ヨンソ			1			金恩正 2002
21	トンゴジ	全羅南道寶城郡トンゴジ			1			金恩正 2002
22	大田（LP2）	全羅南道和順郡南面泗洙里山15番地大田邑	Va層(第3文化層)	53※	1			忠北大学校博物館 1998b
22	大田（LP1）	全羅南道和順郡南面泗洙里山15番地大田邑	Vb層（第2文化層）		3			忠北大学校博物館 1998b
23	竹山	全羅南道昇州郡松光面徳山里竹山邑	4層	5	1			李鮮馥ほか 1990a
24	曲川	全羅南道昇州郡松光面牛山里曲川邑	Ⅲ層（第3文化層）		2	スポール2		忠北大学校博物館 1998
25	月坪	全羅南道順天市外西面月岩面月坪	第1文化層	9	22			朝鮮大学校博物館ほか 2002
26	錦城	全羅南道順天市外西面錦城	採集品		1			金恩正 2002
27	金坪	全羅南道昇州郡松光面新坪里金平邑	B層	1	1			林炳泰・李鮮馥 1988
28	壬佛里	慶尚南道居昌郡南上面壬佛里			3			中山 1989
29	長興里★	慶尚南道晋州市集賢面長興里456番地他		○	○	スポール		
30	海雲台中洞★	釜山広域市海雲台区中洞59番地	Ⅱ層	2	7			河仁秀 1999

※石英製43点、水晶製5点、斑岩製5点の内訳であるので、石英製は含まれない可能性がある。

1990 年代には、洪川下花渓里遺跡（崔福奎他 1992）を始め、議政府民楽洞遺跡（延世大学校博物館編 2001）、龍仁坪倉里遺跡（京畿道博物館・ソウル大学校考古美術史学科 2000）、谷城玉果遺跡（李鮮馥他 1990a）、海雲台中洞遺跡（河仁秀 1999）など、全国各地で新たな遺跡が発見され始め、2000 年代に入ってもその数は増加の一途にある。その中で南部地域でも多数の細石刃石核資料を出した順天月坪遺跡（図 6）（朝鮮大学校博物館 2001・朝鮮大学校・全羅南道・順天市 2002）は、垂楊介遺跡と並ぶ韓国でも屈指の細石刃文化の遺跡である。

このような遺跡発見を背景に、これまで細石刃文化に関する論考が数々出されてきた。研究の方向性は細石刃製作技法の復元や編年、それと細石刃文化出現の文化的意義の 2 者に分かれる。後者には東北アジア的視点から細石刃文化の拡散と受容のプロセスを考察するもの（李憲宗 1997・1998）、および石器の機能と環境的背景との連関を考察したもの（成春澤 2000，チャンホス 1995）などがある。前者に関しては後で詳述するが、技法復元とその年代的位置付け、それにもとづく伝播経路の問題などが扱われている（李鮮馥 1993，李隆助 1989，李隆助・尹用賢 1994，成春澤 1998，金恩正 2002，李起吉 2002，張龍俊 2002）。

2．問題点

韓国における細石刃石器群の評価を困難なものにしている理由として、李鮮馥は、遺物の記録が不充分であること、個別石器の充分な記載がなされていない点、その説明も報告書によって質がまちまちであること、遺跡の堆積後の撹乱作用による明確な層位的集中の発見が困難であること、石器群の組成が 100 点を越えない小規模なものである点などを挙げている（李鮮馥 1993）。ただし、最近では、石器の出土位置や属性表を掲載し、数的処理、個別石器の詳細な記述などに努めた科学的な報告書も出てきており、資料の開示という点では、今日的には課題を克服しつつある。

しかし、依然として、研究を遂行する上で大きな障壁となるのが、以下の 2 点である。

（1）年代決定法の諸問題

後期旧石器時代以降の遺物を包含する堆積層の薄さや年代の決め手になる火山灰層の欠如などは、同一層準から出土する遺物（とくに剥片尖頭器）との共伴関係、さらには細石刃以外の石器との関係などを明確に捉えることを困難にしている。さらに、同一層から得られた炭素年代などの年代資料も確実に細石刃石器群の年代を示すものかについても何ら検討されていない状況である。

（2）資料の制約

細石刃製作技術や技法を復元する際に拠り所となるのが、個別の石核の形態的特徴であり、それらと付随するスポールや再生剥片を合わせることによって技法が復元されている。ここでは個体識別や接合資料に基づいた分析はあまり実施されていない。石器群の一括性を把握しにくい状況の中ではいた仕方ない事柄であるが、垂楊介遺跡では接合資料の一部が公表されており、今後これらの研究の推進が期待される。現状では垂楊介遺跡においても石器群全体が公表されておらず、また、発掘成果が現段階で正式報告として公表されていない重要な遺跡が多数存在する。このため遺物の詳細な検討は将来的な課題であり、これらの成果の公表をまって再度検討されることが望ましい。

Ⅲ．資料の検討

1．細石刃石核の分類と製作技術

（1）細石刃石核の形態分類

大別 8 類細別 11 類に分類した（表 2）。なお、型式として認定できるものは「型」として記述する。

Ⅰ類：クサビ形

体部断面（作業面）がクサビ形を呈するもので、打面の形状には縦方向（a）、側方向（b）、自然面（c）

の3種がある。縦方向剥離の場合、打面形成時の断面3角形もしくは台形の縦長スポールが伴う場合が多い。

Ⅱ類：ホロカ型

剥片素材の主要剥離面もしくは節理面（折面）などを打面として、そこから側辺の調整を行い舟形の体形に仕上げたものである。

Ⅲ類：その他のクサビ形

素材形状や調整方法などがよくわからないものである。張龍俊（2002）分類の長興里技法によるものとほぼ同じもの。

Ⅳ類：広郷型

素材に石刃を用いたもので、右側辺に細石刃剥離痕を留める。

Ⅴ類：半円錐形

素材に砕片や剥片を用いて立方体状の調整を行うものである。

Ⅵ類：円錐形

円錐形の体部をもち、細石刃剥離が周辺におよぶもの。

Ⅶ類：扁平形

直方体の体部の広い1面に作業面をもつもの。

Ⅷ類：板状

直方体の体部の小口面に作業面をもち、側辺が自然面で構成されるもの。

表2　細石刃石核の形態および製作関連資料の構成

地図番号	遺跡名	クサビ形			ホロカ	その他クサビ	広郷	半円錐	円錐	扁平	板状	縦長スポール	打面再生剥片
		縦方向	側方向	自然面									
1	晩達里洞穴	○	○	○									
2	長興里	○				○							
3	上舞龍里1里A区						○						
3	上舞龍里L地区				○			○					
4	下花渓里	○				○		○			○		
5	民楽洞							○?					
6	好坪洞		○		○		△?						
7	三里												
8	坪倉里							○					○
9	チャンネ											○	
10	垂楊介	○	○	○								○	
11	石壮里（LP2）		●										
11	石壮里（LP1）	○	○?			○						○	
12	セムゴル											○	
13	老隠洞		●									○	
14	新幕												
15	チングヌル												
16	ミルトン	○											
17	堂下山					○							
18	玉果(舟山里)												○
18	玉果(松田里)	○											
19	下青丹	○											
20	ヨンソ	○											
21	トンゴジ	○											
22	大田（LP2）		●										
22	大田（LP1）	○											
23	竹山									○			
24	曲川											○	
25	月坪	○	○		○				○	○			○
26	錦城								○				
27	金坪									○			
28	壬佛里	○											
29	長興里											○	
30	海雲台中洞	○										○	

これらの形態は形態間の技術的関連に関しては確実ではないが、Ⅰ類の削片系とそれ以外の非削片系に大きく2群に分離が可能である。削片系の中で、Ⅰb類の打面に残る側方向剥離は、打面形成の際の剥離（打面形成）のものと、縦方向から剥離された打面の歪みを調整する剥離（打面調整）の2者がある。これらを峻別することは数点の残核の観察みでは困難な場合が多いが、Ⅰa類やⅠc類と共伴する場合は、打面調整剥離である可能性が高い。例えば、晩達里洞穴出土の黒曜石製の細石刃石核中には、同一母岩の黒曜石原石が使用された縦方向と側方向という打面形状の異なる2点の細石刃石核が存在しており、これをオヘナムは一つのブランクの半裁による結果と捉えている（オヘナム1999）が、ここで復元された技法の是非は別としても、同じコンプレックス中に2種の打面形状が存在することがこれで証明された。これは素材の形状に応じて柔軟に打面形成手法を選択した結果と解釈でき、同様な状況は垂楊介遺跡でも把握できる。これに対して、石壮里遺跡（LP2）、老隠洞遺跡（LP2）、大田遺跡（LP2）の細石刃石核では、打面形成法がおそらく側方向（打面形成）のみの可能性が高い（表2中●印）。これらは「西海技法」に類する技法であるが、技術的に纏まりのある一群として確立できるまで、一応削片系の側方向打面の部類に入れておく。

Ⅰ類とⅡ類・Ⅳ類、Ⅰ類とⅧ類は共存する場合が多く、一連の生産技術のものとに現われた素材形状の違いによる表現型の違いと考えられる。下花渓里遺跡においてⅠa類・Ⅳ類・Ⅷ類の分布状況を検討した結果、これらの間に明確な分布上の偏りは認められなかった。

また、円錐形とした資料は内蒙古の新石器時代の例や北海道の紅葉山型細石刃石核にみられるような真正な円錐形を呈するものでなく、クサビ形石核の剥離が進行した段階のものと思われる。その根拠としては剥離面が打面全周に至ることなく、背縁と思われる部分には細石刃の剥離が及んでいない点が挙げられる。

（2）編年の基準

編年の基準となる地質学的な根拠としては、ほとんどの開地遺跡の土壌中に認められる土壌クサビ構造がもっとも便利であり、実際本地域の編年の鍵層（構造）として利用されてきた経緯がある。たしかに、この土壌クサビ構造は遺跡や地域によって個数が異なるなど、問題を抱えていることも事実である。しかし、これを基軸に、炭素14年代や火山灰（AT）を加味して検討することが、現在私たちができるもっとも有効な方法であると考える（小畑・絹川2003）。重要なのは遺跡の堆積土壌中に認められるそれぞれの土壌クサビ構造が他遺跡のどのクサビ構造に対比できるのかを決定することである。この点に関しては、韓国南半部の諸遺跡では、土壌クサビ構造と堆積土の色調などからそのユニットが3枚あることを示し、編年の根拠となり得ることを示した（小畑・絹川2003）。この中でもっとも上部にある第3土壌クサビ構造が後期旧石器時代に係わるものである。図2・3に示したとおり、ATや^{14}C年代をもつ遺跡においても土壌クサビ構造とそれらの位置関係はさまざまである。しかし、これらを整理してみると、土壌クサビ構造が第3か第2かという点はほぼ把握が可能である。

ATが検出された遺跡をみると、土壌クサビ構造が入る土層中の上部を中心とした位置に降灰層準が求められ、これらはほぼ第3クサビ構造として間違いないであろう[1)]。これに対し、土壌クサビ構造の上位でATが確認されたものに、鐵原長興里遺跡（江原考古学研究所2001）、月坪遺跡、晋州内村里遺跡（慶尚南道・漢陽大学校博物館・文化人類学科1999）、老隠洞遺跡（韓南大学校博物館1998，韓昌均2000）の4つの遺跡がある[2)]。前3者は下部にある土壌クサビ構造が第2土壌クサビ構造と考えれば、年代的にも矛盾はない。しかし、老隠洞遺跡の場合、土壌クサビ構造の入る第3層中上部において22,870±110BPの^{14}C年代が得られており、ATよりも下位に位置しながら、新しい年代を示してしまう。これはATのガラスが上位に移動した結果と考えられ、第2文化層（LP1）と第3文化層（LP2）に挟まれた土壌クサビ構造は第3土壌クサビ構造と考えられる。

最近、最上位の土壌クサビ構造を覆う上部層の年代が下花渓里遺跡で13,390±60BP（AMS）という値が得られていると言う（韓昌均2002）。この第3クサビ構造の年代観は、通常最終氷期の極寒期である15,000年前もしくは18,000～15,000年前と考えられている。この年代観は若干新しいすぎるきらいはあるが、ほぼATおよび^{14}C年代値と整合的である。

（3）多層遺跡による細石刃石器群の位置と編年

後期旧石器時代もしくは中石器時代とされる文化層が2枚以上検出された遺跡は、南楊州好坪洞遺跡（洪美瑛・金起兌 2003）、大田老隠洞遺跡、公州石壮里遺跡、順天月坪遺跡、和順大田遺跡、昇州曲川遺跡、そして細石刃関連資料は出土していないが、大田龍湖洞遺跡（韓南大学校博物館 2000，韓南大学校中央博物館 2001，韓昌均 2002）の7遺跡がある。その中で、細石刃石器群が2層に分れて出土した遺跡は石壮里遺跡、大田遺跡、月坪遺跡のみである。

好坪洞遺跡の場合、いずれも土壌クサビ構造の入る第3層中に2枚の文化層が確認されているが、現在調査中につき、下部に遺物が多く出土するという以外は細石刃石核と剥片尖頭器などの出土状況は不明である。老隠洞遺跡では細石刃石器群は第3文化層（LP2）から出土しているが、土壌クサビ構造の下部から出土した第2文化層（LP1）の石器組成については説明がない。曲川遺跡の場合は、Ⅲ層中に中石器文化層（LP2）があり、その下部のⅣ層に後期旧石器文化層（LP1）が位置している。後期旧石器時代の遺物はスキー状スポールを伴うクサビ形細石刃石核を主とする石器群であるが、中石器時代の遺物については石英製の小型の組合式道具である彫器、スクレイパー、尖頭器などが多数出土したとの記載はあるものの、写真と挿図数点が紹介されているにすぎない。このわずかな報告から判断しても、細石刃石器群でないことは確かである。同様な石器群は石壮里遺跡や下花渓里トドゥン遺跡（チェスンヨプ 1998）などからも出土しており、細石刃石器群とは異なる石英製の小型石器群である。龍湖洞遺跡の後期旧石器時代初（LP1）と中期旧石器時代末（MP2）の文化層には、いずれも年代的に30,000年前を大幅に遡ると考えられている剥片尖頭器を特徴とする石器群であり、細石刃資料は含まれていない。月坪遺跡は第2次調査において第1文化層（LP4）と第2文化層（LP3）に分離された（朝鮮大学校博物館 2001）。上下層の遺物の集中区はほぼ重なり、第2文化層の出土遺物は700点前後と第1文化層の約6,700点に比較してきわめて少ない。両文化層ともに剥片尖頭器および細石刃石核が出土しているというが、概要報告のためそれぞれの型式的な特徴や個別石器の出土状況は不明である。この遺跡の出土状況をそのまま評価すれば、細石刃石器群と剥片尖頭器は共伴しながら2時期にわたって継続することを意味し、このような遺跡は朝鮮半島でも始めての例[3]であり、層位ごとに石器の型式学的特徴がどのように変化するのか注目される。

同様に層位的に分離された状態で細石刃文化層が2枚にわたって確認され、石器が報告されているのは、公州石壮里遺跡および和順大田遺跡の2遺跡のみである。石壮里遺跡では5層が土壌クサビ構造をもつ第12文化層とその上部の4層にそれぞれ後期旧石器時代（LP1）と中石器時代（LP2）の文化層が存在する。いずれも細石刃石器群であり、第12文化層からは剥片尖頭器も出土している。これらは細石刃石核の型式的変遷を考える上で基準となる資料である。また、大田遺跡においては、Va層が後期旧石器時代（LP1）、Vb層が中石器時代（LP2）の文化層とされ、いずれも細石刃石核を出土している。これも細石刃石核の型式変遷を捉える上で参考となる例である。しかし、細石刃の数など器種構成に偏りがあり、石器群としてそれぞれが安定したものあるかは検討の余地がある。

初めて土壌クサビ構造との細石刃石器群の出土層の上下関係から細石刃石核の年代を追求したのは李隆助・尹用賢である（李隆助・尹用賢 1994）。ただし、土壌クサビ構造は先に示したように、ATや^{14}C年代による補正を経て、第3土壌クサビか第2土壌クサビであるかを見極める必要がある。今回検討した結果、最終的に第3土壌クサビより上位から出土した確実な例は三里遺跡、石壮里遺跡第4層、坪倉里遺跡、金坪遺跡、老隠洞遺跡第3文化層のみで、後は単に第2土壌クサビより上と言えるだけで、その下限年代は明確ではないのである。

（4）既往の研究と細石刃石核製作技術の編年

韓国出土の細石刃核の分類は、技法復元をもとにした李隆助・尹用賢らの研究がある（李隆助・尹用賢 1994）。これは李隆助が行った垂楊介遺跡の細石刃石核の分類（李隆助 1989）を基礎として、全国の細石刃石核を垂楊介遺跡の分類に基づいて検討した。氏らは垂楊介遺跡出土の細石刃石核を大別3型式細別11型式に分類した。基幹

となる分類属性は打面形状であり、Ⅰ型式：自然打面、Ⅱ型式：長軸方向剥離打面、Ⅲ型式：側方剥離打面である。自然面打面がもっとも古く、Ⅰ類からⅢ類への変遷を想定している。垂楊介遺跡ではこれらⅠ類が 40 点（20.5％）、Ⅱ類が 96 点（49.2％）、Ⅲ類が 19 点（9.8％）であるという。残り（その他）の 40 点（20.5％）がどのような形態であるのか不明なため、確実ではないが、これらⅠ～Ⅲ類は両面加工もしくは片面加工のブランクを形成し、Ⅰa 類以外はすべて縦方向からスポールを剥出しており、一つの技術コンプレックスとして把握すべきであろう。

李鮮馥はブランク形成段階、打面形成段階、細石刃剥離段階の 3 段階の記述を行っているが、これらの属性をなんら評価してはいない（李鮮馥 1993）。

成春澤は細石刃石核のブランクの形成段階を重視し、Ⅰ類：両面加工素材、Ⅱ類：単面加工もしくは最小限の 2 次加工を施した素材、Ⅲ類：長めの形態の素材の 3 類に分類し、Ⅰ類が垂楊介をはじめとする中南部の遺跡、Ⅱ類が南部地方の遺跡、Ⅲ類が北部と中部地方の遺跡に多いとした（成春澤 1998）。これに関しては地域差と考えるよりは時期差の可能性が高い。

金恩正は李鮮馥と同じようにブランク形成段階、打面形成段階、細石刃剥離段階の 3 段階に分け、その属性を分析した（金恩正 2002）。氏が分析した全南地方の諸遺跡の細石刃石核（22 点）はブランク形成段階の属性 3 種（Ⅰ型式：両面加工・Ⅱ型式：片面加工・Ⅲ型式：石刃素材）を除くと、諸属性の組み合せから 10 類の形態として分類できる。氏は垂楊介遺跡との比較を行っており、共通点として、細石刃石核の大きさはほぼ同じ、Ⅱ型式がⅠ型式に対して幅が狭い、Ⅰ類とⅡ類の比率が同じ、Ⅱ型式ではブランク調整の後打面を形成する点、打面形成の方向が主に縦方向からであること、細石刃剥離核が 76～90 度と直角に近いことなどを挙げている。そして、両遺跡の大きな違いはⅠ型式において具現しており、月坪遺跡ではスポール剥出後に打面から側辺調整を行うものが多いのに対して、垂楊介遺跡ではスポール剥出後の調整が少ないという。

李起吉は月坪遺跡出土の 22 点の細石刃石核（ブランクを含む）を分類し、クサビ形を基調としながら素材を剥片素材と剥片素材の痕跡が認められないもの（破片・礫）に 2 大別し、素材の用い方、作業面の数と位置から以下のように分類した（表 3）（李起吉 2002）。

表 3　月坪遺跡における細石刃石核の分類

素材	使用部位と側面加工	作業面の数と位置		
		1つ	2つ	
			対向面	隣接面
剥　片	背面を側面に使用	4		
	背面を打面に使用	2		
剥片の痕跡が認められない（破片・礫）	両面加工	4	1	
	剥片の面を打面に使用		1	
不　明				1

これらに打面作成時のスポール、作業面作成時のクレステッドフレイク、そしてそれぞれを再生するための打面再生剥片と作業面再生剥片が存在することから、作業の進行に伴う打面の鈍りを解消するために打面の再生や作業面の再生が行われたことを指摘している。素材が不明とされた製品（図 6：14）は側面に以前の作業面が残っており、打面転移が行われたことを知ることができる。これらが一つの石器群として把握できるのであれば、素材の用い方の多様性、再生技法の多用性、打面転移の採用などが特徴として挙げられる。クサビ形の体部と、平坦な打面を基調としている点に特徴がある。打面に側方からの調整が入るものは、打面の歪みの修正を行ったものであろう。打面形成後も側面に打面上から調整が加えられる場合がある。剥片素材が 1/3 と多い（図 6）。

張龍俊は技法復元として、垂楊介技法（両面加工・スポール剥出：湧別技法類似）、石壮里技法（剥片の側面利用作業面，スポール剥出の有無によって 2 つに分類）、集賢技法（舟形石核：幌加技法・船野技法類似）、下花渓

里技法（自然面を側面にもつもの）、上舞龍里技法（石刃利用：広郷技法）、錦城技法（円錐形石核）、長興里技法（小型三角形石核）の7つの技法を提唱した。そして、全3者が前半期、後3者が後半期と考えている。その中でも石壮里技法が最も古く、錦城技法が最も新しい可能性を指摘した。そしてその境は、氷河期の最寒期ないし15,000BCと考えている（張龍俊2002）。

垂楊介遺跡出土品と月坪遺跡出土品を比較してみると、垂楊介遺跡の場合、クサビ形の体部と平坦な打面を基調としている点で共通するものの、両面加工のブランクが多く、体部の変形性が月坪遺跡出土品に比べて少ない点が大きな特徴である。これらの違いは、それぞれの層位的な位置関係を重視すると、時期的な技術の違いと捉えることが可能である。技術の典型性を左右する要件（変数）に石材環境のバイアスの強弱があるが、両遺跡と石材産地との距離はほぼ同じで、同様の石材環境を有していた点から、ここにその差を求めることはできない。

以上のような細石刃石核の技術的検討と形態の組み合わせ、層位的位置関係などを考慮すると、細石刃石核の製作技術は、クサビ形の削片系細石刃石核の中でも長めの両面体ブランクを準備し、縦方向のスポール剥出によって打面を形成する垂楊介遺跡・曲川（LP1）・大田（LP1）・石壮里（LP1）が最も古く、次いで月坪（LP3・LP4）・好坪洞（LP1・LP2）・上舞龍里1里A区・中洞、最終段階として下花渓里・石壮里（LP2）の順で変化したものと考えられる。第2・3段階への技術変化の特徴は、石核の小型化、素材の多用化、調整の簡略化など、素材調整型から素材依存型の変化として捉えられる。

李隆助・尹用賢らは、後期旧石器時代から中期旧石器時代になるにつれ、細石刃石核の大きさと重量が漸次小さくなる傾向があることを示した。さらに黒曜石と水晶の使用の増加、製作技法の簡略化にともなう角柱・円柱形の増加や打面転移などの増加などを変化の特徴として挙げている（李隆助・尹用賢 1994）。細部では意見の異なりはあるが、ほぼ彼らの指摘どおりの状況を今回の分析において追認した。

2．剥片尖頭器との共伴関係および組成石器について

（1）剥片尖頭器との共伴問題

現在、剥片尖頭器を出土した遺跡の数は9遺跡であり、その数もおよそ70点にも及ぶ。剥片尖頭器の形態はさまざまであり、ナイフ形石器に近いような形態のものも存在する。しかし、いずれも基部加工を必須としており、その器種としての範疇は越えないものと思われる。

その主たる分布はほぼ朝鮮半島中部～南部全域と言ってもよいであろう。朝鮮民主主義人民共和国内の状況は知るべくもないが、最近京畿道北部の抱川郡一東面禾袋里遺跡[4]から多量の剥片尖頭器が出土したことが報じられており（江原大学校遺跡発掘調査団2003）、その分布域は韓国北端まで拡大した。

剥片尖頭器と細石刃の共伴関係に関しては、垂楊介遺跡に代表されるごとく、各報告者は分離したものとして捉えてはいない。最近発見された遺跡においても両者の関係はほぼアプリオリなものとして、何ら検討がなされていないのが現状である。垂楊介遺跡における細石刃と剥片尖頭器の平面的分布の偏りからこれらが時期的に分離される可能性を示したのは松藤和人が初めてである（松藤1987）。

最近、張龍俊は改めてこの問題について触れ、両者が共伴する時期が存在する可能性を指摘した（張龍俊2002）。また、韓昌均は龍湖洞遺跡の30,000年前を越えると主張される剥片尖頭器を根拠に細石刃に先行するものであると述べた（韓昌均 2002）。つまり剥片尖頭器は中期旧石器時代末（韓昌均）もしくは後期旧石器時代初頭（張龍俊）に出現し、細石刃石器群に先行するもので、両者が時間的に平行する時期があるということになる。

細石刃と剥片尖頭器の出土の様相には、剥片尖頭器石器群のみを出土する文化層、細石刃石器群のみを出土する文化層、両者が共伴する文化層の3相（類型）が認められる。これらを土壌クサビ構造やATなどの関連の中で位置関係が明らかなものを中心にその組み合わせを整理してみると表4のようになる。

これをみると、剥片尖頭器出土遺跡はほぼ第3土壌下位に文化層をもち、細石刃と共伴する場合は一部を除いて第2土壌より確実に上位、第3土壌より上位に位置するものがほとんどである。龍湖洞遺跡の剥片尖頭器はその年代的古さから細石刃石器群に先行する根拠として挙げられたが、剥片尖頭器の年代がどこまで遡及するかに

ついての問題は別として、剥片尖頭器が第3土壌クサビ構造より下部にあり、南部地方の旧石器遺跡の編年（小畑・絹川2003）で示したⅣ期に含まれることは確実である[5]。その初現の時期は第2土壌クサビを越える例がないことから、AT降灰時期（25,000BP）を前後する時期と考えるのが妥当であろう。終焉の時期については、両面加工の槍先型尖頭器が出現する15,000BP前後であると考える。

それでは共伴する時期である垂楊介遺跡や月坪遺跡第2次調査（1−1地区）において、これらの出土状況をどう捉えるのかという問題が生じる。垂楊介遺跡においては、平面上はそれぞれが偏りを見せながら出土している状況が認められるが、層位的には分離されていない。月坪遺跡1−1地区では、両者がほぼ同じ領域から出土し、層位的にも2時期に分かれて共存するという。正式な報告書がでていないので、十分な検討はできないが、遺跡に残される石器ブロックが累積的な性格をもつことを考慮すると、これら2枚の後期旧石器時代の文化層は、剥片尖頭器石器群と細石刃石器群に分離できる可能性がないのかと考えている。垂楊介遺跡においても同様の状況と考えられる。第1文化層の遺物の分布図を見ると微妙な分布上の偏りも見出せないこともない（図7）。先の独立した石器群の存在を重視すると、両者は技術的背景も異なることから、剥片尖頭器石器群と細石刃石器群は異なる集団によって残された可能性が高い。

表4　細石刃関連資料と剥片尖頭器出土遺跡の類型表

番号	遺跡名	文化層	剥片尖頭器	細石刃石器群+剥片尖頭器	細石刃石器群	層位 炭素年代
1	禾袋里遺跡	第2文化層	●			第3土壌クサビ下
2	古禮里	上下文化層	●			AT上
3	龍湖洞	第2文化層	●			第3土壌クサビ下 38,500±1,000BP（AMS）※
4	龍湖洞	第3文化層	●			第3土壌クサビ下 ＞38,500±1,000BP（AMS）※
5	好坪洞★	3層		●		第3土壌クサビ下 22,200±600BP～16190±50BP （AMS）
6	三里	2層		●※		第3土壌クサビクサビ上
7	垂楊介	Ⅰ区Ⅳ層（第2文化層		●		第3土壌クサビクサビ下 16,400BP，18630BP
8	石壮里（LP1）	5層（第12文化層）		●		第3土壌クサビ下 20,830BP
9	チングヌル	2層(第1文化層)		●		第3土壌クサビ下 22,850±350BP（AMS）
10	月坪	第1文化層・第2文化層		●		第2土壌クサビ上※
11	竹山	4層		●		不明
12	長興里	Ⅱ層(第1文化層)			●	第2土壌クサビ上・AT上 24,200±600BP（AMS）
13	上舞龍里 1里A区	2層			●	（第3）土壌クサビ上
14	上舞龍里 L地区	採集品			●	（第3）土壌クサビ上
15	下花渓里				●	（第3）土壌クサビ上
16	坪倉里	表面採集（2層）			●	第3土壌クサビ上
17	チャンネ	Ⅱ層			●	（第2土壌クサビ下）※
18	石壮里（LP2）	4層(マンガン層)			●	第3土壌クサビ上
19	老隠洞	A地区5層（第1文化層）			●	第2（第3）土壌クサビ上
20	曲川	Ⅲ層（第3文化層）			●	第1土壌クサビ上
21	金坪	B層			●	第3土壌クサビ上
22	海雲台中洞	Ⅱ層			●	（第3）土壌クサビ上

※製作技法が若干異なり、別器種の可能性もある

（2）共伴石器と型式

細石刃石器群に含まれる石器には、彫器、サイドスクレイパー、エンドスクレイパー、ドリルなどの小型石器の他、チョッパーやハンドアックスのような大型の礫石器も伴うとされる。これらのうち確実に細石刃石器群に伴うものと判断できるものは少ない。以下に特徴的な型式に限り、その可能性を指摘しておく。

彫器は斜刃型（図5：2・5）が北部に多いのに対して、角型が月坪遺跡や老隠洞遺跡から出土しており（図8）、打面を調整しない折れ面を利用した角型タイプが中洞遺跡から出土していることを考慮すると、南部地域に角型が多く、北部に斜刃型が多いという地域的な分布上の差が生じていた可能性もある。角型彫器は、月坪遺跡では同一層から剥片尖頭器も出土しているものの、細石刃石器群である老隠洞遺跡の第3文化層（LP2）において特徴的に出土し、第2文化層（LP1）には含まれないという点を考慮して、細石刃石器群に伴うものと考えておきたい。

エンドスクレイパー（図5：3・17，図6：21）に関しては石刃素材利用のものが北部地域に多いという傾向は捉えられるが、それがすべてではなく、好坪洞遺跡の石英製大型スクレイパーにみられるように、各種の形態がある。これは月坪遺跡などにおいても看取できる傾向である。

細石刃製のドリルが好坪洞遺跡と下花渓里遺跡に認められる。いずれも黒曜石製の細石刃の先端に主に腹面から尖るような加工を施した特徴的なものである。

表5　同一文化層から出土した特徴的な遺物

地図番号	遺跡名	エンドスクレイパー（小型）	エンドスクレイパー（大型）	斜刃型彫器	角型彫器	剥片尖頭器	両面加工葉形尖頭器	ハンドアックス	細石刃製ドリル
1	晩達里洞穴								
2	長興里	○		○					
3	上舞龍里1里A区	○		○					
3	上舞龍里L地区							○	
4	下花渓里	○							○
5	民楽洞								
6	好坪洞	○	○						○
7	三里			○		○※1			
8	坪倉里								
9	チャンネ		○					○	
10	垂楊介	○	○		△	○			
11	石壮里（LP2）						○※2		
11	石壮里（LP1）	○	○	○		○			
12	セムゴル								
13	老隠洞	○	○		○				
14	新幕								
15	チングヌル					○			
16	ミルトン								
17	堂下山								
18	玉果（舟山里）	○							
18	玉果（松田里）		○						
19	下青丹								
20	ヨンソ								
21	トンゴジ								
22	大田（LP2）								
22	大田（LP1）		○					○	
23	竹山	○				○			
24	曲川		○						
25	月坪	○	○			○	○※3		
26	錦城								
27	金坪	○							
28	壬佛里	○							
29	長興里	○							
30	海雲台中洞	○			○				

※1　連続する押圧剥離状の剥離が全周を巡り、若干他遺跡出土品とは趣きを異にする。※2・3表面採集品。

3．細石刃石器群と石材

細石刃の製作に使用される石材は、南部地方において泥岩、ホルンフェルス、安山岩、流紋岩、斑岩、凝灰岩などと呼ばれる黒色ガラス質石材であり、北部においてはこれに黒曜石や水晶、まれに石英岩が加わる。この南部地方の白色風化する黒色のガラス質石材に関しては、すべて同質の岩石であり、暫定的ではあるが、「珪質凝灰岩（珪質頁岩）」の名称が与えられ、これらが白亜紀の盆地の位置と密接な関係があることが指摘された（成春澤2003）。成春澤はこの南部地方に限定的な産地をもつ珪質凝灰岩と北部地方に多い黒曜石を比較し、細石刃石核にみられる製作技法の差異がこのような地域的に不均衡な石材分布に1次的な要因があったのではないかと主張した。この論文では石材環境の南北差を主体に論じているため製作技法との関係については詳しい検討がなされていないが、張龍俊は韓国の細石刃製作技術を論じる中で、湧別技法のような削片系の細石刃技術が中部・南部地方の遺跡を中心として分布するのに対して、北部の黒曜石多用地帯では発達しないことを、それぞれの石材のもつ大きさ（量）による石材環境のバイアスと捉えている（張龍俊 2002）。極東圏の細石刃石器群と石材の関係をみると、沿海州東部地域では主に緑色凝灰岩が使用され、南沿海州地域の溶岩地帯で黒曜石が使用される。この地域では後期旧石器時代に一部白頭山の黒曜石が流入しているが、その量は少なく、むしろ新石器時代後半になって白頭山産黒曜石の使用が活発化する傾向がある（小畑 2003）。また、アムール中流域の細石刃石器群も主体は頁岩や凝灰岩系統の石材であり、黒曜石は使用されていない。このような巨視的な観点に立つ時、晩達里遺跡にみるように、より北部の遺跡に黒曜石利用の比率が増加することを考慮すると、細石刃文化期において両面加工素材を用いた削片系のクサビ形細石刃石核の製作に黒曜石が使用されるのは、白頭山に近い地域での限定的なものであった可能性もある。

表6　細石刃石核・細石刃の石材組成（★は報告書未刊のため挿図や写真で紹介された点数，（ ）内は細石刃）

地図番号	遺　跡　名	珪質凝灰岩	珪質頁岩	水　晶	石　英	黒曜石	その他
1	晩達里洞穴	1				4	
2	長興里	1				4 (10)	
3	上舞龍里1里A区					3 (2)	
3	上舞龍里L地区	2					
4	下花渓里	1		6	2	18	
5	民楽洞					2	
6	好坪洞★	7 (2)				3 (20)	
7	三　里					(15)	
8	坪倉里	1					
9	チャンネ		(1　※1)				
10	垂楊介	9	178		1	14	3
11	石壮里（LP2）	3					
11	石壮里（LP1）	9				1	
12	セムゴル	1					
13	老隠洞★	1 (4)					
14	新　幕						
15	チングヌル★						
16	ミルトン	1					
17	堂下山	1					
18	玉　果（舟山里）	(1　※2)					
18	玉　果（松田里）	2(5)					
19	下青丹	1					
20	ヨンソ	1					
21	トンゴジ	1					
22	大田（LP2）	1(5)		(5)	(43　※3)		
22	大田（LP1）	3(1)					
23	竹　山	2(4)					
24	曲　川	2 (2　※1)					
25	月　坪	18(8)		3	(1)		
26	錦　城	1					
27	金　坪	1(1)					
28	壬佛里	3					
29	長興里★	(1　※1)				○	
30	海雲台中洞★	7(2)					

※1　スポール，※2　打面再生剥片，※3　石英製43点は小剥片で細石刃に含まれない可能性がある。

細石刃文化期の黒曜石の分布は、ほぼ朝鮮半島の北部・中部地方を中心としていることがわかる。これらの黒曜石は、下花渓里遺跡の小型礫を利用した細石刃石核の存在や垂楊介遺跡における100点余という量的安定性、化学分析による白頭山系黒曜石との不一致などから、未発見の在地的な産地からもたらされた可能性が高い（小畑 2003）。しかし、量的には少ないものの和順大田遺跡や晋州長興里遺跡などでも数点の黒曜石が出土し、朝鮮半島の南端に黒曜石が流入している事実がある。地化学的な分析によると、この一帯は新石器時代には西北九州産黒曜石の分布圏となっている（図 9）が、後期旧石器時代に西北九州産の黒曜石が使用された例はまだ確認されておらず、これらが半島在地産であるのか西北九州産であるのかについても、わが国との関連を探る上で興味のもたれるところである。今後の化学分析が期待される。

一般に水晶や良質石英の利用は李隆助・尹用賢（1994）らが指摘するように、時期的に新しい可能性がある。

4．年代的枠組みと系譜

検討してきた結果、朝鮮半島における最も古い細石刃石核の技術はクサビ形石核を基本とする削片系の石器群であった。これらはシベリアのアムール中流域や極東地方にその起源をもつものであることは間違いないであろう。その年代であるが、垂楊介遺跡で16,400BPと18,630BPがでており、最近では22,000BP（AMS）を越える年代が数多く出され、報告書においては、それらがそのまま細石刃文化の時期に代入されている。鐵原長興里遺跡では24,200±600BP（AMS）の年代値が得られ、朝鮮半島はもちろん東北アジアで最も古い細石刃石器群であると評価された（江原考古学研究所 2001）。しかし、先に述べたように、古い年代を出したすべての遺跡の後期旧石器時代の文化層において剥片尖頭器石器群や石刃石器群を含むことを考慮すると、その年代はこれら先行石器群の年代を示す可能性が高い。細石刃石器群に関しては、おそらく18,000BP～20,000BP頃がその出現期としてよいであろう。

終焉の時期はまだ不明である。中石器時代とされる石英製小型石器を主体とする曲川遺跡や下花渓里トドゥン遺跡、石壮里遺跡の中石器時代層などの石器群は、細石刃石器群に次ぐ段階のものである可能性がある。これらの指標石器はこらまで不明であったが、最近江原道周辺の遺跡において赤土の中から土器を伴わなず、打製もしくは磨製の三角形石鏃を出土する遺跡が数例検出されている[6]。これらの石器群には先の石製小型石器が伴なっており、いずれも後期旧石器時代末もしくは中石器時代と判断されている。この石鏃を伴う小型の石英製石器群が細石刃石器群に後続する石器群の可能性が高くなってきた。細石刃石器群の終焉は、年代的にはこれら石器群に先行する時期を想定しなければならないが、年代資料はまだない。

おわりに

朝鮮半島における細石刃石器群のおおまかな編年とその抱える問題について整理してきた。層位学および型式学的検討から、細石刃石器群はシベリアのアムール・極東地域に起源をもつ削片系のクサビ形細石刃石核の製作伝統の中にあり、年代的には20,000年前を越えることはないこと、剥片尖頭器石器群とは異なる系統と時間差をもって出現・消滅することが明らかになった。細石刃石核の製作技術については、今少し資料の詳細な分析と技術型式学的な検討を加えねばならず、将来的な課題である。

わが国との関連については、クサビ形の細石刃石核および随伴する彫器の中に北海道と共通する型式が多数存在することから、とくに韓国北部地域の細石刃石器群に関しては、今後北海道や北部日本地域との比較検討が可能となるであろう。西南日本の石器群との関連に関しては、半円錐形や扁平形とした細石刃石核が野岳・休場型細石刃石核と関連する可能性のあるものであるが、量的にも質的にも安定した状態ではない。さらに西海技法に共通する側方向打面をもつクサビ形石核（Ⅰa類の一部）も量的に少なく、検討に耐えるものではない。これらに関しては、単なる形態的比較ではなく、技術コンプレックスの中でどのような位置づけがなされるのか、つまり独立した技法として成立し得るのかという、技術型式学的視点に立った検討が必要であろう。

本稿を草するにあたり、朝鮮大学校李起吉先生、畿甸文化財研究院洪美瑛先生、国立大邱博物館張龍俊先生からさまざまな便宜とご指導を頂いた。ここに感謝の意を表したいと思います。

註

1）李鮮馥は土壌クサビ構造内の土壌を供給したその上位にある母層が降灰層準であると考えている（李鮮馥2000）。

2）月坪遺跡の第1（LP4）・第2文化層（LP3）はクサビの上部に位置するが、ATが第2文化層から出土している。クサビ構造との位置関係は他遺跡と異なるが、第2文化層自体はAT降灰層準に近いレベルもしくはその上位に位置することになる。

3）抱川郡の禾袋里遺跡でも2枚にわたって剥片尖頭器が検出されたとの報告がある（江原大学校遺跡発掘調査団2003）。

4）本遺跡は3枚の文化層に分離されているが、第1文化層からは黒曜石製の槍先と磨製の流紋岩製の「針」が出土し、ここからも剥片尖頭器が出土したと報告される。これらの石器は打製と磨製の石鏃であり、この文化層はおそらく新石器時代初期の文化層と考えられ、剥片尖頭器が伴うのであれば、これは第2文化層から遊離したものが混在した可能性が高い。

5）龍湖洞出土の剥片尖頭器は現在のところ東北アジアでもっとも年代的に遡る資料である。中期旧石器末に同石器が存在した可能性が指摘されている（韓昌均2002）が、このような石器が出現するのは後期旧石器時代になってからのことで、年代的な再検討が必要であろう。月坪遺跡第1文化層（LP4）から出土したものときわめて類似しており、同じ型式の範疇に入るもので、このような石器が2万年近くも継続使用された可能性はきわめて少ないと考えられる。

6）先の禾袋里遺跡以外に東海市の望祥洞キゴク遺跡がある（江原文化財研究所2002）。

参考・引用文献

（韓国語）

江原考古学研究所　2001『長興里旧石器遺跡』

江原大学校遺跡発掘調査団　2003『抱川禾袋里旧石器遺跡：発掘調査現場説明会・指導委員会の資料』

江原道・江原大学校博物館　1989『上舞龍里』

江原文化財研究所　2002『東海望祥洞キゴク旧石器遺跡』

京畿道博物館・ソウル大学校考古美術史学科　2000『龍仁坪倉里旧石器遺跡発掘調査報告書』

京畿文化財団付設畿甸文化財研究院・廣州市・2001年世界陶磁器エキスポ組織委員会　2003『廣州三里旧石器遺跡』，学術調査報告第39冊

慶尚南道・漢陽大学校博物館・文化人類学科　1999『晋州内村里住居および旧石器遺跡』，南江ダム水没地区遺跡発掘調査報告書第14冊・漢陽大学校博物館叢書第36輯

科学・百科事典出版社1985『平壌付近洞穴遺跡発掘報告』

‘97年文化遺産の年組織委員会・韓国大学博物館協会　1997『新発掘埋蔵文化財図録　大学と発掘』

金尚泰　1998「上舞龍里Ⅱ遺跡の細石刃石器」『科技考古研究』4，7－26頁，アジュ大学校博物館

金恩正　2002『全南地域の細石刃石核の研究－1990年代以後の遺物を中心に－』，朝鮮大学校大学院修士学位論文

木浦大学校博物館・韓国道路公社　2001『咸平長年里堂下山遺跡』

朴喜顯　1989『堤原チャンネ後期旧石器文化の研究』，延世大学校大学院学位論文

朴英哲　1992「韓国の旧石器文化」『韓国考古学報』28，5－99頁，韓国考古学会

孫寶基　1973「石壯里の後期旧石器時代住居」『韓国史研究』9，15－57頁，韓国史研究会

孫寶基　1993『石壯里先史遺跡』，東亞出版社

成春澤　1998「細石刃製作技術と細石器」『韓国考古学報』38，45－49頁，韓国考古学会

成春澤　2000「細石器伝統の進化試論」『科技考古研究』6，7－29頁，アジュ大学校博物館

成春澤　2003「旧石器製作技術と石材分析：韓国の後期旧石器時代の石材についての予備的考察」『韓国上古史学報』39，1－17頁，韓国上古史学会

オヘナム　1999「晩達里遺跡の石核についての考察」『朝鮮考古研究』88，24－27頁，社会科学出版社

延世大学校博物館編　2001『韓国の旧石器』，延世大学校出版部

李起吉　2001「鎭安チングヌル先史遺跡調査概要」『第25回韓国考古学全国大会発表資料集』，131－154頁，韓国考古学会

李起吉　2002「特徴的な遺物：(1) 細石刃石核」『順天月坪遺跡』，朝鮮大学校博物館・全羅南道・順天市

李鮮馥　1993「韓国出土の細石核の形態学－予察」『北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散』，72－75頁，北海道大学埋蔵文化財展示室

李鮮馥　2000「旧石器考古学の編年と時間層位確立のための仮説」『韓国考古学報』42，1－22頁，韓国考古学会
李鮮馥他　1990a『玉果旧石器遺跡』，ソウル大学博物館・谷城郡
李鮮馥他　1990b「新坪里金坪・徳山里竹山後期旧石器遺跡」『住岩ダム水没地域文化遺跡発掘調査報告書（Ⅶ）』，21－76頁，全南大学校博物館・全羅南道
李隆助　1985「丹陽垂楊介旧石器遺跡発掘調査報告」『忠州ダム水没地区文化遺跡延長発掘調査報告書』，101－252頁，忠北大学校博物館
李隆助　1989「丹陽垂楊介後期旧石器時代の舟底形石器の研究」『古文化』35，3－77頁
李隆助　1998「丹陽垂楊介遺跡の最近の発掘成果」『垂楊介遺跡発掘15周年記念学術発表会』，37－68頁，丹陽郷土文化研究会
李隆助・尹用賢　1990「牛山里曲川遺跡」『住岩ダム水没地域文化遺跡発掘調査報告書（Ⅶ）』，77－139頁，全南大学校博物館・全羅南道
李隆助・尹用賢　1992a「和順大田後期旧石器文化－舟底形石器と住居を中心に－」『先史と古代』3，3－38頁，韓国古代学会
李隆助・尹用賢　1992b『和順大田旧石器時代住居復元－支石墓公園先史住居址復元』
李隆助・尹用賢　1994「韓国細石刃石核の研究－垂楊介手法との比較を中心にして－」『先史文化』2，133－229頁，忠北大学校先史文化研究所
李憲宗　1997「東北アジア小型石刃文化の起源問題についての試考」『博物館年報』5，9－31頁，木浦大学校博物館
李憲宗　1998「東北アジア後期旧石器最末期の性格と文化変動に関する研究」『韓国考古学報』39，53－88頁，韓国考古学会
林炳泰・李鮮馥　1988「新坪里金坪里旧石器遺跡」『住岩ダム水没地域文化遺跡発掘調査報告書（Ⅴ）』，23－62頁，全南大学校博物館・全羅南道
張龍俊　2002「韓半島の石刃技法と細石刃技法」『九州旧石器』6，24－58頁，九州旧石器文化研究会
チャンホス　1995「東アジアの細石刃石核の石器製作技術」『博物館紀要』10，39－52頁，檀国大学校中央博物館
朝鮮大学校博物館　2000『鎭安チングヌル旧石器時代遺跡現場説明会資料』
朝鮮大学校博物館　2001『順天月坪遺跡学術発掘指導委員会資料』
朝鮮大学校博物館・全羅南道・順天市　2002『順天月坪遺跡』
崔福奎他　1992「洪川下花渓里中石器時代遺跡発掘調査報告」『中央高速道路建設区間内文化遺跡発掘調査報告書』，13－244頁，江原道
チェスンヨプ　1998「洪川下花渓里トドゥン中石器時代遺跡発掘調査概要」『第41回全国歴史学大会発表要旨　統一と歴史教育』，347－357頁，第41回全国歴史学大会準備委員会・主管・歴史教育研究会
河仁秀　1999「海雲台中洞・佐洞旧石器文化」『第８回嶺南考古学会学術発表会　嶺南地方の旧石器文化』，65－81頁，嶺南考古学会
韓国先史文化研究所・忠清南道公州郡　1994『石壮里先史遺跡11次－12次発掘報告』
韓南大学校博物館　1998『大田老隠洞ワールドカップサッカー場新築地遺跡発掘調査現場説明会資料』
韓南大学校博物館　2000『大田石峰貯水場建設作業地域の旧石器遺跡（龍湖洞）発掘現場説明会資料』
韓南大学校中央博物館　2001『大田石峰貯水場建設作業地域の旧石器遺跡（龍湖洞）3次発掘現場説明会資料』
韓昌均　2000「大田ワールドカップ競技場建設地域の旧石器遺跡」『第43回全国歴史学大会考古学部発表資料集』，1－19頁，韓国考古学会
韓昌均　2002「大田龍湖洞旧石器遺跡」『東北亜細亜旧石器研究』，163－172頁，漣川郡・漢陽大学校文化財研究所
洪美瑛・金起兌　2003「韓国南楊州市好坪洞旧石器遺跡発掘調査概要」『黒耀石文化研究』2，185－193頁，明治大学黒耀石研究センター

（日本語）

小畑弘己　2003「極東地域における黒曜石出土遺跡と原産地研究」『Stone Sources』2，67－88頁，石器原産地研究会
小畑弘己・絹川一徳　2003「前・中期旧石器の型式学：４ユーラシア大陸の前・中期旧石器：１朝鮮半島」『前・中期旧石器問題の検証』，474－483頁，日本考古学協会
古環境研究所　2002「ソウル大学坪倉里遺跡における自然科学分析」『龍仁坪倉里旧石器遺跡発掘調査報告書』，190－195頁
中山清隆　1989「韓国・居昌壬佛里遺跡の晩期旧石器について」『旧石器考古学』39，43－46頁，旧石器文化談話会
松藤和人　1987「海を渡った旧石器“剥片尖頭器”」『花園史学』8，8－19頁，花園史学会

図１　朝鮮半島における細石刃関連遺跡の分布

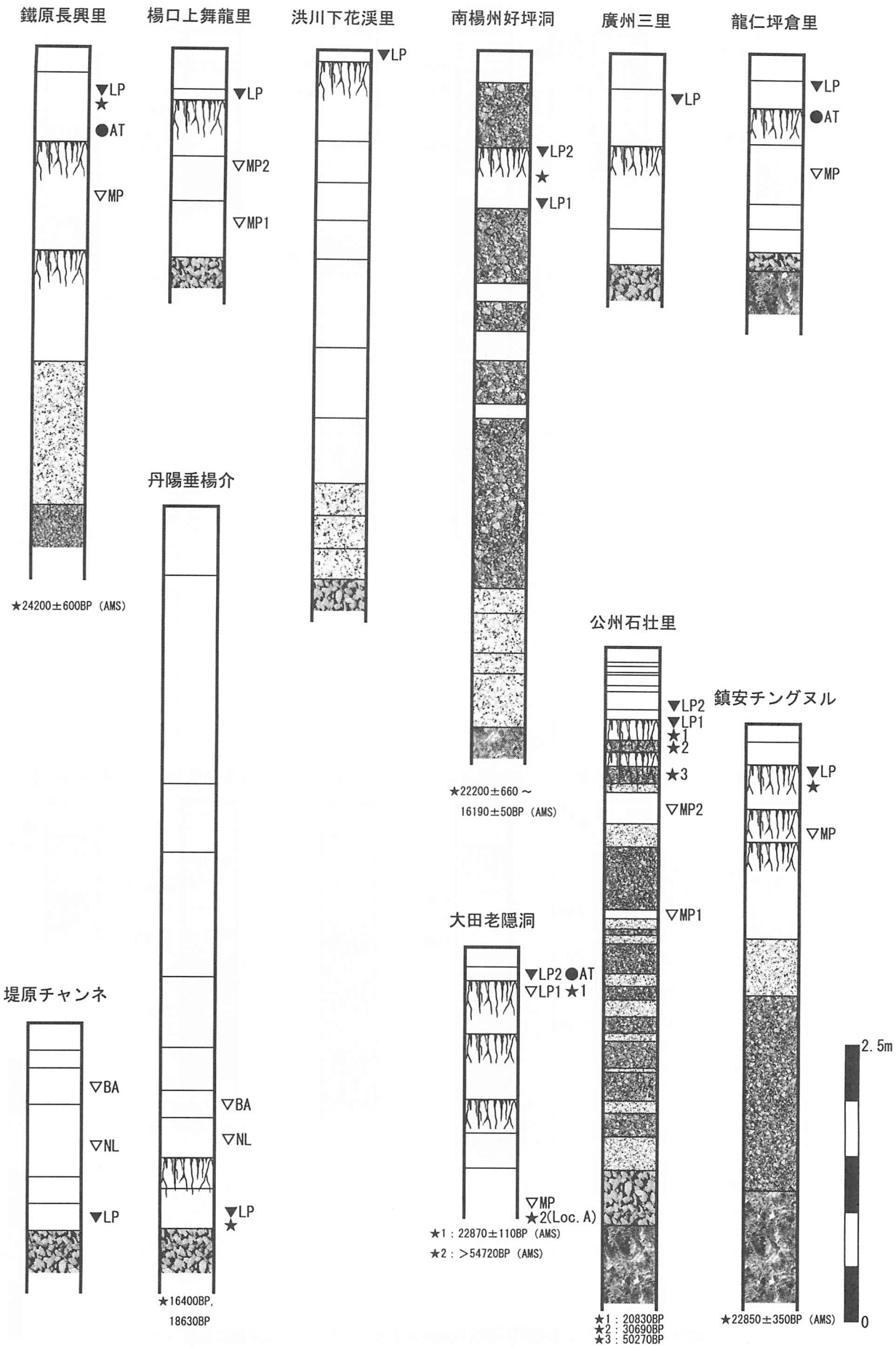


図２　韓国における後期旧石器時代遺跡の土層柱状模式図と文化層の位置（１）

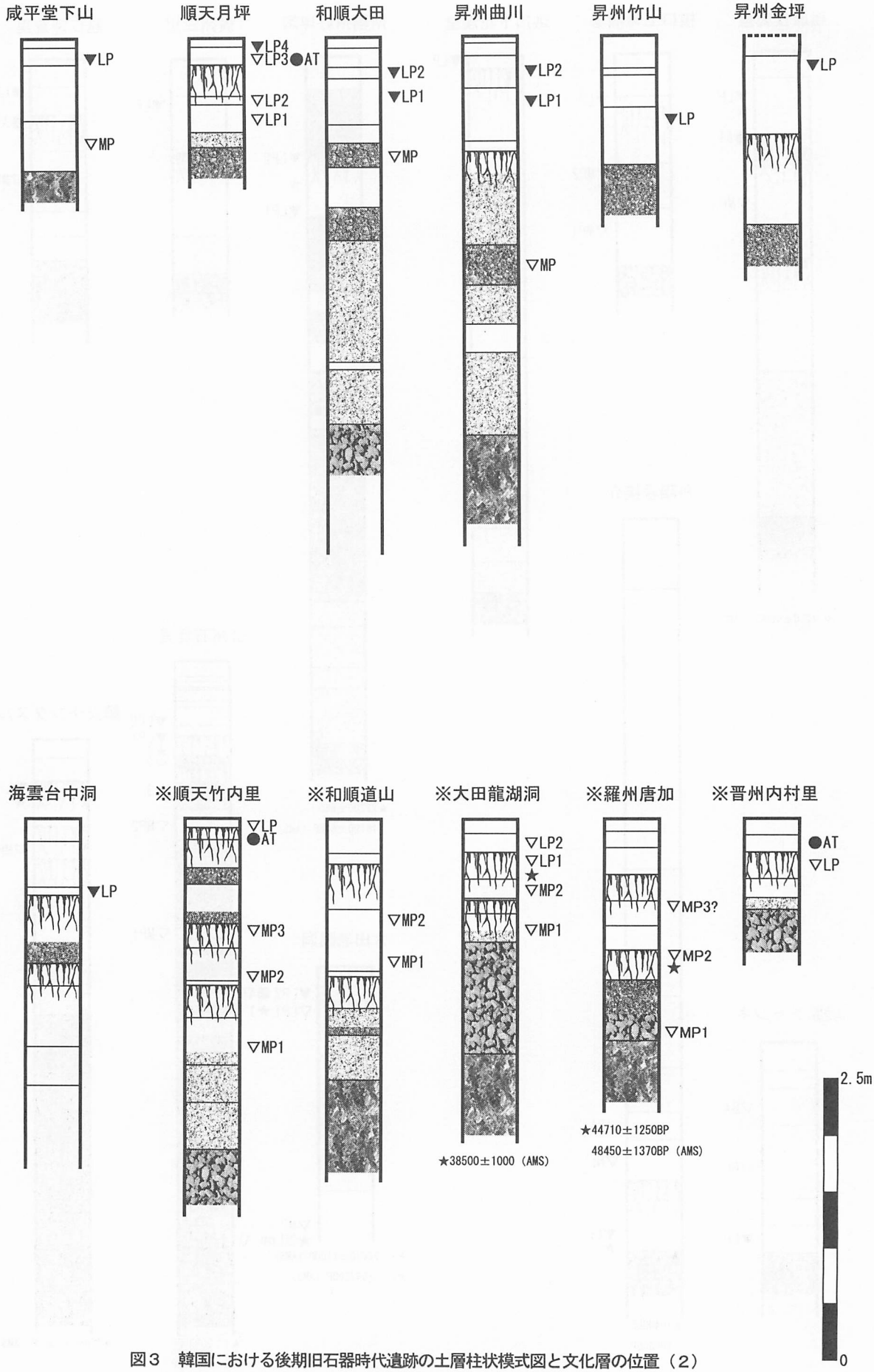


図３　韓国における後期旧石器時代遺跡の土層柱状模式図と文化層の位置（２）

（※は細石刃文化の遺物を出土していない遺跡）

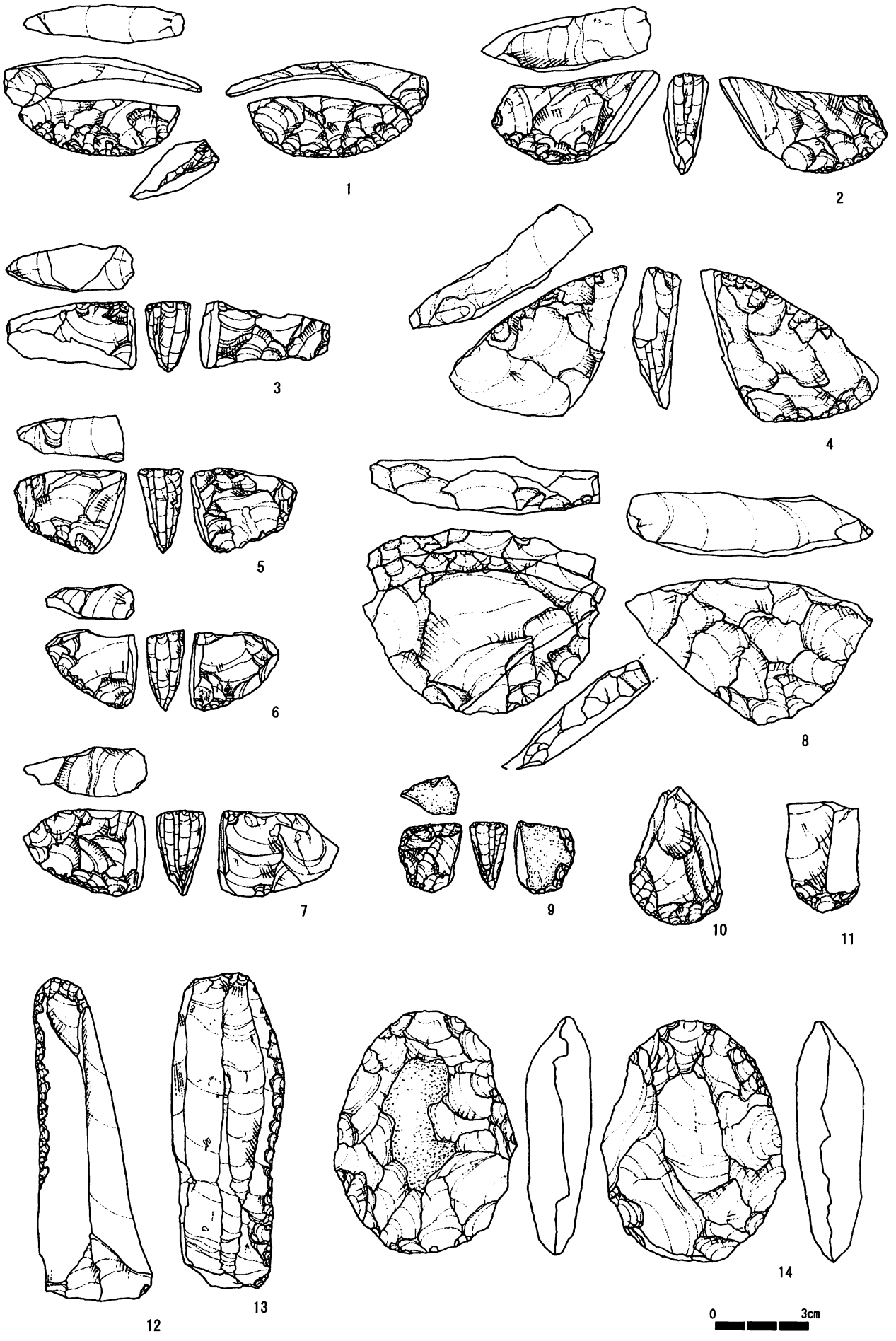


図4　垂楊介遺跡出土遺物（報告書等より再トレース）

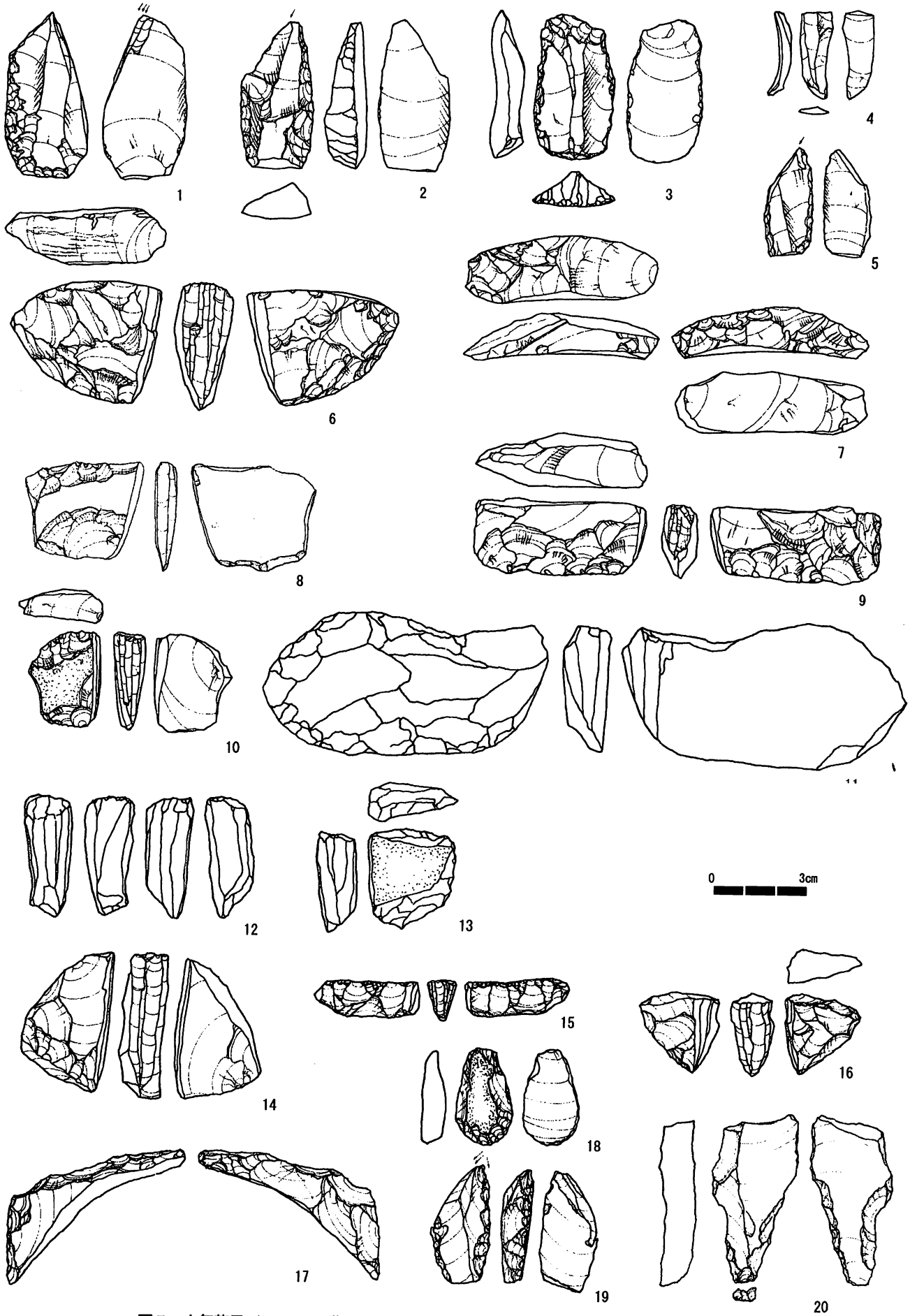


図５　上舞龍里（１～５）・曲川（６・７）・大田（８～11）・石壮里（12～20）出土遺物

（各報告書より再トレース，８のみスケール不明）

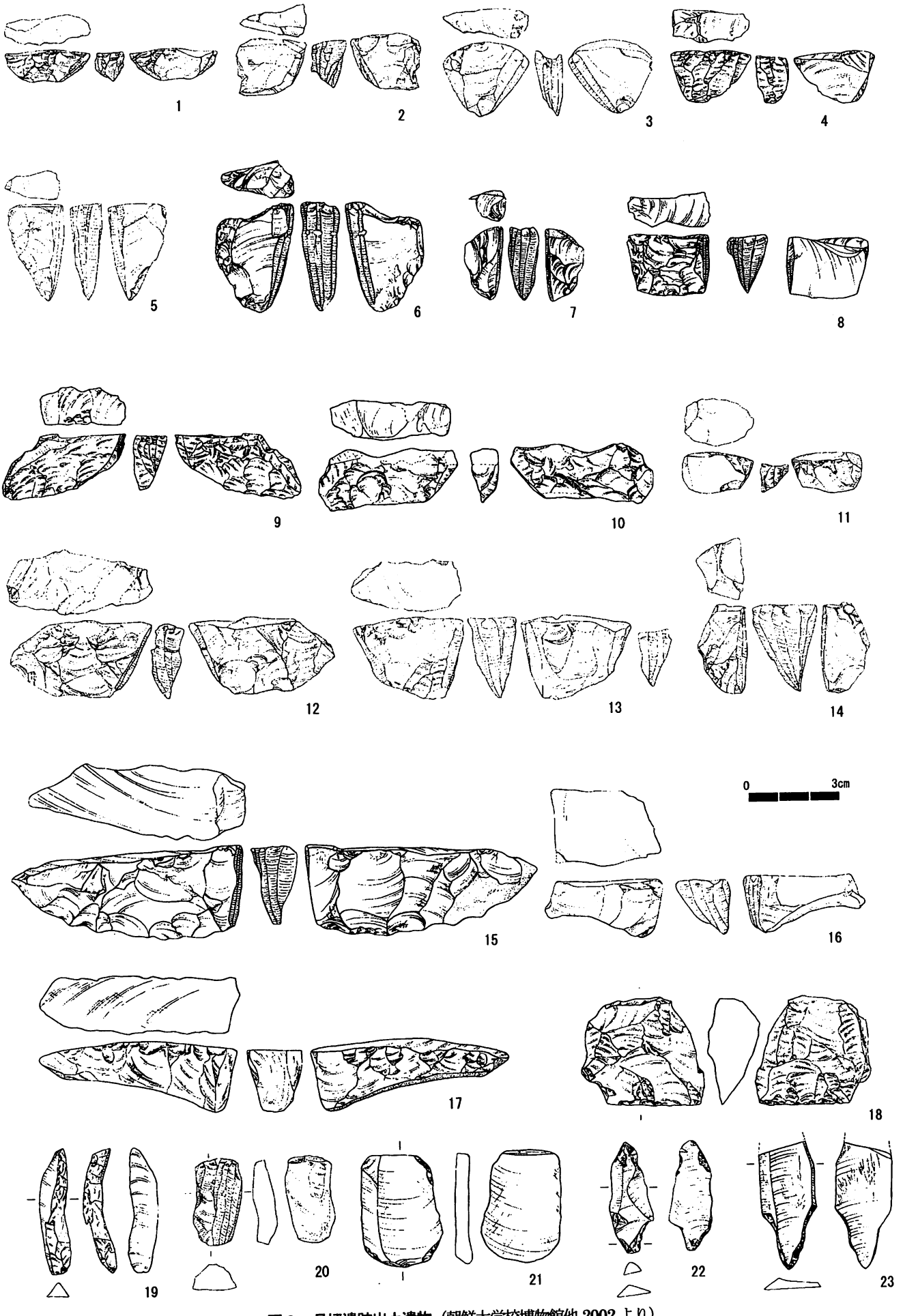
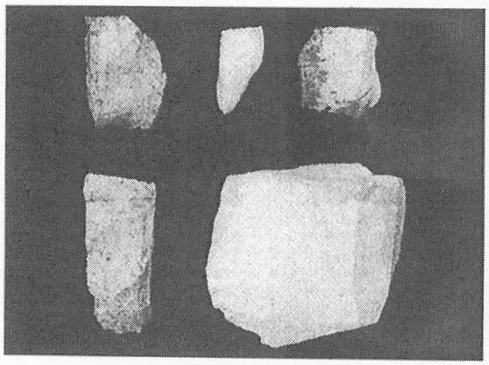
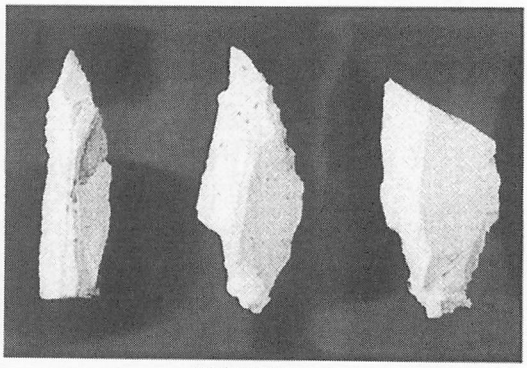


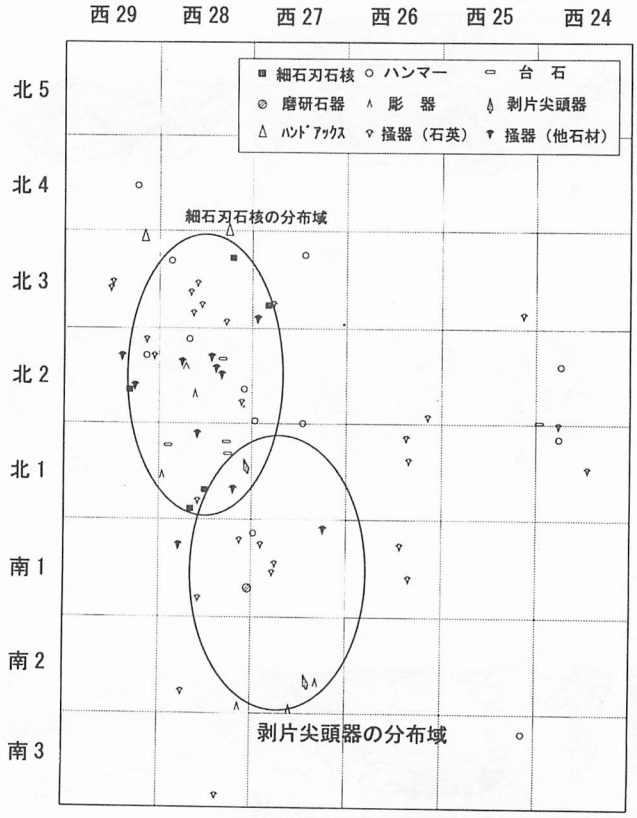
図6　月坪遺跡出土遺物（朝鮮大学校博物館他 2002 より）

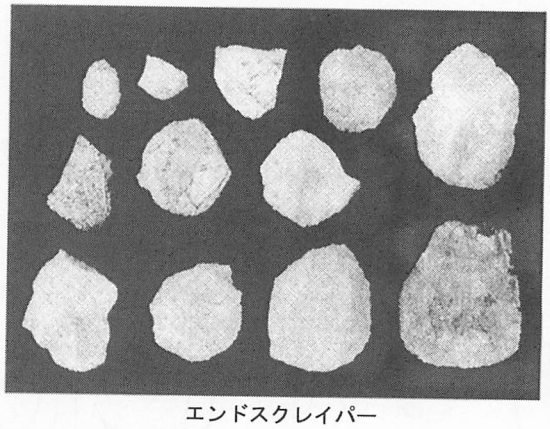


細石刃石核



剥片尖頭器





エンドスクレイパー

図７　月坪遺跡第２次調査区遺物出土状況平面図

（朝鮮大学校博物館 2001 より作成）

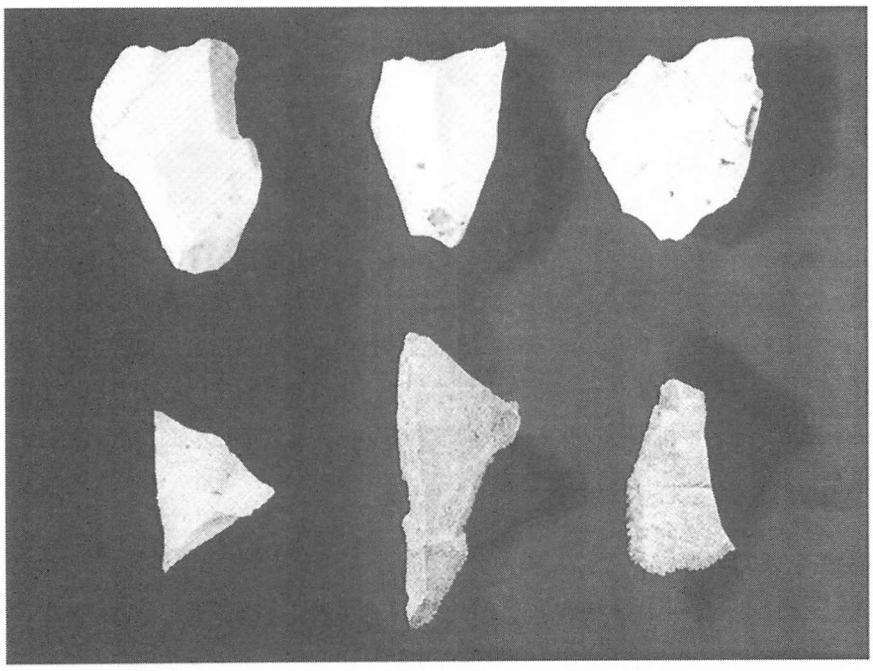


図８　朝鮮半島南部の角型彫器（上段：老隠洞，下段：月坪）
（各報告より抜粋，スケール不統一）

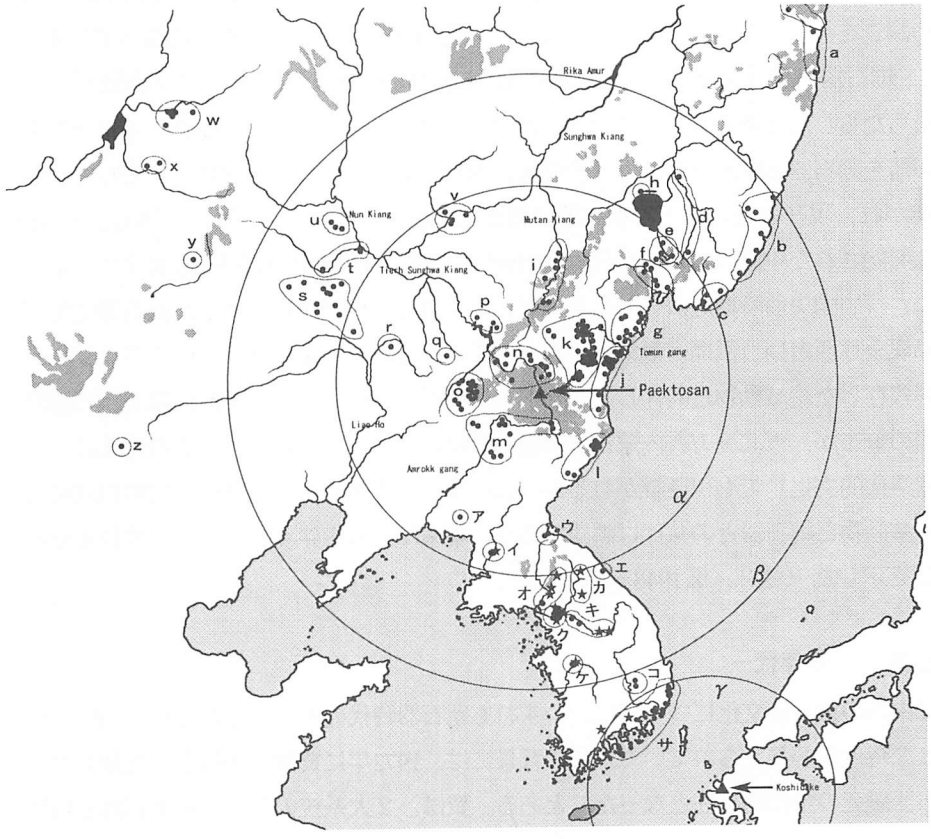


図９　極東地域における黒曜石出土遺跡分布図（朝鮮半島★：旧石器時代）（小畑2003に加筆）

中国の細石器文化研究

－その過去、現在そして未来－

加藤真二

はじめに

筆者はこの５年間、海外渡航、現地での実資料の観察を行っていない。また、資料を分析し、新たな考えを打ち出す時間的余裕も持っていない。このため、おもに旧石器時代の中国細石器文化に視点をしぼって、研究史を振り返り、その歩みと今後の課題について述べてみたい。なお、よく知られているように、中国においては「細石刃文化」という用語を用いず、「細石器文化」と表記されている。記述の便を図るため、この文章でも、中国のものについては「細石器文化」を用いることとする。

１．細石器研究の開始　－60 年代以前－

中国の考古学研究上、細石器は、外国人研究者により、英・仏・露語で表記されて資料報告・研究が始められた（注１）。中国人研究者では1930年に国立中央研究院歴史語言研究所の梁思永が現在の黒龍江省の昂昂溪遺跡を発掘し、1932年、その報告「昂昂溪史前遺跡」で植刃などを「幺（＝幼）石器」と表記した。管見では、これがmicrolithを中国で最初に漢訳したもののようだ（梁1932）。梁は、1936年の「熱河査不干廟、林西、雙井、赤峰等処所采集的新石器時代石器和陶片」においても「幺石器」を用いている（梁1936）。しかし、40年代以降、現在に至るまで、中国でも「細石器」という用語が一般的になっている。実は、この間、江上波夫、水野清一が内蒙古地域の調査を行い、その報告やアンドリュース探検隊の成果の紹介をおこなっている。それらの中でmicrolithに対して「細石器」という訳語を与えており（江上1931、小牧ほか1931）、この訳語が中国に取り入れられ、訳語の変更をもたらしたと考えられる。一方、ボウル、ブリュイ、ド・シャルダンらフランス人研究者が旧石器時代の小型石器を細石器と呼んだことは、その後、周口店第１地点・同第15地点、そして、解放後の賈蘭坡の研究にも引き継がれ、現在も細石器と小型石器の概念上の混乱をもたらしている（Boulleほか1928）。

このように開始された中国の細石器研究は、1949年の中華人民共和国成立前後、裴文中により総括が図られた。1948年、裴は、『中国史前時期之研究』において、バイカル湖付近から南下した細石器文化がジャライノール・顧郷屯→昂昂溪→林西という伝播・傾斜編年をもっていたことを想定した。このうち、ジャライノール・顧郷屯は、細石器が残存した絶滅動物と共伴したことから、中石器時代のもの、それ以降を新石器時代のものとした。また、細石器の分布が、東北地方、内蒙古、新疆などに広がることを示した。この考えは、基本的には、1954年の『中国石器時代的文化』でも引き継がれるが、1965年の「中国の旧石器時代　付中石器時代」では、ジャライノールでの絶滅動物と細石器との共伴は誤認であり、本来は土器を伴うもので、いずれも新石器時代のものであるという認識を示した（注２、裴1948・54・65）。

２．新たな段階　－70 年代－

このように中国の細石器文化については、いずれも新石器時代のものとされたが、70年代以降、新資料の出土により、新たな時代観が与えられていく。この背景には、1972年に賈蘭坡が提示した華北旧石器文化の２大系統論が中国旧石器研究の学問的支柱となったことある。賈は、２大系統のうち、小型石器を特徴とする周口店－峙

峪系を中国を含む東アジアの細石器文化の起源とするものであり、両者をつなぐ旧石器時代の細石器文化の存在を想定した（賈1972）。そして、このころから出土し始めた更新世まで遡ると考えられる細石器がこれにあてられたのである。こうした石器群には、解放後、最初に細石器と絶滅動物との共伴が確認された河南省霊井（周1974）、周口店－峙峪系の上限とされ、同系統は周口店－虎頭梁系と改称されるべきことが主張された河北省虎頭梁（蓋・衛1977）、楔形細石核を含む細石器が土器とは共伴しないことが明らかにされた黒龍江省ハイラル松山（安1978）、楔形細石核にナイフ形石器や荒屋型彫器を含む多様なトゥールが共伴し、内外の研究者の注目をあびた山西省下川（王ほか1978）などがある。これらは、霊井について周国興が後期旧石器から中石器への過渡的段階の可能性が高いものとし、松山について安志敏が新石器と旧石器をつなぐ中石器と主張したほかは、旧石器と報告された。

また、細石器研究史上、注目されるものとしては、蓋培・衛奇による河北省虎頭梁遺跡群の調査報告（蓋・衛1977）がある。この報告では、成果の事実記載のほかに、73101地点の遺物の平面分布図、遺物の組成や出土量の差異から遺跡群を構成する各地点ごとの機能差についての指摘もされている（注３）。さらに残核形状からの推定ではあるが、楔形細石核を使った細石刃技術が復原され、湧別技法に相当する河套（オルドス）技法と、側方連続剥離による打面形成を特徴とする虎頭梁技法が図示された。この結果をもとに、蓋培は、「華北からアメリカへ－華北と北米の旧石器時代の文化関係について－」、「黄河の水は江戸に通じる－華北と日本の旧石器時代の文化関係を概述する－」を著し、北米・日本列島の楔形細石核をもつ細石器文化は、いずれも華北からの伝播によるものであることを想定した（蓋1977a・77b）。

70年代の総括的な研究としては、賈蘭坡の「中国細石器の特徴と、その伝統、起源、分布」がある。ここでは、賈は、中国細石器は、稜柱状石核、錐形石核（鉛筆頭形石核）、楔形石核、扇形石核（船形石核）から剥離される細石刃を特徴とすること、その分布は河北、北京、遼寧、吉林、黒龍江、山西、陝西、河南、寧夏、甘粛、新疆、青海、チベット、雲南、広東に広がること、華北の周口店－峙峪系の旧石器文化を起源とし、それが東アジアや北米に伝播したことを主張した。また、残核の形状などをもとに、稜柱・錐形細石核、楔形・船形細石核の形成過程を想定した（賈1978）。

以上のように、70年代には、細石器が更新世にまで遡って存在することが判明するとともに、華北の小型石器を特徴とする旧石器と積極的に結び付けられ、細石器は、そこに起源をもち、華北から東アジア・北米に伝播することが主張された。また、楔形細石核を利用した細石刃技術の復原が試みられるなど、新たな研究も始められた時期ともいえる。

３．研究の広がり　－80 年代・90 年代－

80年代・90年代になると、新資料の発見とともに、技術論や起源論、共伴石器の分析など、研究の深化が図られた。

１）　新資料の報告

80年代に入ると、70年代に報告されたものを含め、いくつかの地域で集中的に新資料が報告されるようになった。そうした地域には、馬陵山遺跡群を中心とする沂河・沭河流域（山東・江蘇省：徐・加藤1991、山東省文物研究所ほか1986、張1987）、燕山南麓（河北省：謝1996）、泥河湾・大同盆地（河北・山西省：謝1996）、丁村遺跡群を中心とする汾河流域・下川遺跡群を中心とする下川盆地（以上、山西省：中国社会科学院考古研究所下川工作隊ほか1987、石1989、王ほか1994、陶・王1995、陳1996・2000）、淮河流域の平原部（河南省：張・李1996）などがある。この結果、沂河・沭河流域、燕山南麓、淮河流域平原部では、角錐状・船底形細石核が主体となり、他地域では楔形細石核が主体となるといった、細石器文化の地域差が判明してきた（謝1996）。

２）　細石刃技術の研究

蓋培らの虎頭梁遺跡群の報告に際して細石刃技術の復原が行われたことを嚆矢として、細石刃技術の研究も進められた。

陳淳は、中国出土の楔形細石核を含む各種細石核を分類した。特に、楔形細石核は、残核の形状や打面形成のあり方から、札滑型・蘭越型・忍路子型にそれぞれ対応するもの、打面前縁のみを縦方向の小剥離で調整するもの、側方連続剥離で打面形成するもの、多方向調整で打面形成するものの等に分類するとともに、その背景にある技法を想定した（陳1983）。なお、後年、陳は王向前とともに、下川遺跡出土の細石核をもとに、節理面・剥離面もしくは側方連続剥離によって打面を形成した後、打面前縁のみを縦方向の小剥離で調整した楔形細石核を下川型細石核、その技法を下川技法と呼んだ（Chen&Wang 1989）。

蓋培は、虎頭梁遺跡の資料を分析し、日本の峠下型細石核に対応する陽原石核の存在を明らかにするとともに、陽原石核を作出する２つの手法（うち、１つは峠下技法に相当）と虎頭梁技法を統合的に駆使して細石刃を生産する陽原工芸を提唱した（蓋1984）。蓋は、鄧聰とともに、虎頭梁出土の資料をもとに日本の忍路子技法に対応する桑乾技法を提示し、同時に、河套（オルドス）技法によって作出されたスポールの接合資料を始めて示してもいる（Gai&Tang1986）。

王建と王益人は、下川遺跡の細石核を分類・詳述した。それによれば、下川には錐状、柱状、半錐状、楔形、船形の細石核が存在すること、楔形細石核には横長の寛型と縦長の窄型の両種があり、基本的には打面確定後、石核の本体の形成や調整を行うという（王・王1991）。

３）編年・起源論研究

80年代・90年代の編年・起源論研究の基礎には、このころ明らかにされた細石器遺跡の理化学年代の測定値がある（表１）。特に影響が大きかったものは、虎頭梁の11000±210年B.P.、下川の13900±300年B.P～23900±1000年B.P..、山西省柴寺（丁村77：01地点）の26400±800年B.P.などである（注４）。こうした年代測定値が提示された結果、それらをもとにした下川→薛関→虎頭梁という編年が受け入れられていった。

蓋培・鄧聰、陳淳らは、細石刃技術の分析と理化学年代から中国北部の旧石器時代の細石器文化について、角錐状・船底形細石核を主体とし、楔形石核は少なく、かつ先に示した虎頭梁技法や下川技法による段階から、楔形細石核によるものが出体となり、技法も下川技法、河套技法、桑乾技法、陽原技法など多様な段階への変遷を想定している。そして、古い段階の代表的としては下川、柴寺、新しい段階の代表的遺跡としては虎頭梁、薛関をそれぞれあげている（Gai&Tang1986 、Chen&Wang1989）。

このほか、葛治功・林一璞が江蘇省大賢荘遺跡の報告で、霊井における絶滅動物との共伴関係を重視し、霊井→下川・虎頭梁・松山・鳳凰嶺・大賢荘などという編年観を示している（葛・林1985）。また、謝飛は、泥河湾地区にある河北省油房遺跡の調査報告に際して、同地区の楔形細石核をもつ石器群には、虎頭梁石器群に代表される石器製作に両面調整技術を多用し、両面調整尖頭器や半月形スクレイパーをもつものと、油房に代表される片面調整による石器製作を主とし、虎頭梁で特徴的にみられるトゥールを欠くものの２者があり、層位的にみて、前者よりも後者が古いことを明らかにした（謝・成1989）。さらに、周春茂が陝西省大荔遺跡群の報告の中で、遺跡群を形成する育紅河遺跡の石器群について、細石器的要素の少なさ、その技術の古拙さ、下川との層位の対比、文化層に該当する近隣地点の地層の理化学年代（20400±500年B.P.）から、育紅河→下川という編年観を示した（注５、陝西省考古研究所ほか1996）。

編年研究の一貫として、細石器の起源を探る研究も進められている。呉加安や蓋培は、賈蘭坡がいう華北の小型石器伝統に起源を求めている。蓋は、山西省許家窖・峙峪、内蒙古シャラオソゴルなど楔状の小型石核をもつ石器群を初期的な細石器石器群とし、呉は河南省小南海遺跡の石器群を細石器の基盤となった石器群の１つとしている（蓋1993、呉1984）。一方、張森水は、細石器インダストリーについて、水洞溝などの石刃インダストリーからの発展ととらえ、それが中国北部の地域的な文化伝統の影響をうけ、さまざまな文化類型を生んだと理解

している（張1990・1999）。このほか、謝飛は、山西省西南部が華北細石器文化の起源であり、ここを中心として馬蹄形に細石器文化が伝播したと考え（謝1986）、衛奇は、山西省塔水河遺跡の小型石核を原始的な細石核と見なしている（衛1998）。なお、多くの研究者は、細石器文化発生の年代として、下川、育紅河、柴寺（丁村77：01地点）の年代測定値があげるとともに、これら遺跡の細石器が比較的発達した様相を示すことから、始原はより古く遡ると考えている。

4）共伴トゥールの分析

90年代には、細石器と共伴するトゥールの研究も進められている。王益人・王建は下川遺跡出土の楔形石器、彫器の、謝飛らは磔状器（片刃石斧）の、それぞれ集成・分類を行っている（王1993、王・王1998、謝ほか1996）。この結果、細石器石器群を構成するトゥールの詳細が判明してきている。

以上のように、80年代・90年代においては、新たな資料の増加とともに、編年、細石刃技術を中心に研究の深化が図られ、大まかな細石器文化像というものが確立できた時期といえる。ただし、70年代に萌芽がみられた行動論的研究・伝播論などには研究の停滞が見出せる。また、細かな調査手法も姿を消してしまった時期でもある。

4．現状と課題

２１世紀を向かえ、今後、中国細石器研究はどのように進むだろうか。幾つかの課題について触れてみたい。

1）編年・分布・地域性

90年代までの研究により、楔形細石器を主体とする石器群については、下川→薛関→虎頭梁という変遷、また、技術的には側方連続剥離による打面作出が行われる楔形細石核を主体とするものから複数の削片系細石核を組み合わせたものへという変遷がたどれることは、ほぼ認識されたとみることができる。しかし、角錐状・船底形細石核を主体とする石器群の編年、あるいはそれらと楔形細石核を主体とする石器群との関係は、まだ確定していない。また、下川→薛関という変遷についても、後述するように下川遺跡群の石器群の内容や年代測定値の詳細が把握できていないため、確定したとは言い難い。さらに、細石器の発生についても、その過程を把握するには至っていない。従来の調査結果を検討すれば、トゥールの組成や型式、石器製作技術における石刃技術の占める割合、細石刃技術や細石核の組成などについて、各細石器石器群に異同があることが判明する（注６）。編年研究に関しては、もっとも基礎的なことではあるが、層位的に細分した石器群の技術的な詳細の把握するとともに、それぞれの年代測定をする必要がいまだに必要とされるといえよう。特に、清水河流域、下川盆地、泥河湾盆地など、複数の文化層を層位的に検出できる地区での編年の確立が急がれよう。また、最古の細石刃文化の年代とされている下川、柴寺（丁村77：01地点）、育紅河等の年代測定値については、下川のものは、複数の地点の複数の文化層の年代であり、それぞれの地点ごとの石器群の内容が把握できないこと、柴寺、育紅河のものは水成堆積層中から採取された試料の年代であり、石器との同時性に確実性が欠けることなどの問題点を指摘できる（注７）。中国における細石器の起源については、細石器文化の編年確立とともに、十分に解明されていない中国北部地域の後期旧石器時代後半の石器群の探求、近年研究が進む朝鮮半島、沿海州、東シベリア、日本列島など近隣地区の細石刃文化との比較などが大きな課題となろう（注８）。

このほか、ここ数年、中国東北部、西南部・青蔵高原、新疆における細石器文化の報告・研究が提示されてきている（大貫2002、于2003、李2002、新疆文物考古研究所ほか編1997）。その結果、それらの年代や内容が従来、研究の中心であり、様相の解明が進んでいた中国北部のものとは異なっていることが判明しつつある。その一方、華北大平原、山東半島、遼寧省などの中国東北部南部においては、未だ細石器文化の報告がなされていない。中国における細石器文化の展開と変容、中国北部地域と近隣地区の細石器文化の関係などを考える上で、これらの地域は重要な意味をもつところである。今後の調査の進行を注視したい。

2）行動論的研究

杜水生は、泥河湾地区の中期から後期旧石器遺跡における石材利用のあり方についての研究を報告した。それによれば、細石器文化になると、石材の移動距離が数十kmに達すること、優良な石材が選択されるとともに、原石を原産地で粗割し、良質な部分を選択、搬出するようになるという（杜2003）。研究対象地の泥河湾地区には多数の細石器遺跡が知られている。今後、こうした石材使用の状況の分析と蓋らが虎頭梁報告で試みたような遺跡の機能差の究明、出土動物骨の分析などを組み合わせれば、泥河湾地区における当時の人類の行動様式を復原できるだろう。

この課題に関して、その虎頭梁遺跡群や下川遺跡群では、石器群に多種の尖頭器が見られるとともに、蓋培らが示したような機能差を想定できる大規模遺跡と小規模遺跡が組み合って、台地の縁辺およびやや丘陵側に入った地点に分布する状況がみられるのに対して、馬陵山遺跡群では、尖頭器は中国で石鏃と呼ぶような小型のものに限られ、遺跡も小規模なものが分水嶺である狭長な尾根上に密に分布する状況であることが判明する。筆者は、こうした細石器文化にみられる状況差も行動様式や生業形態のあり方の差として理解できるのではないかと考えている（注９）。

３）柿子灘遺跡群の研究

山西省柿子灘遺跡群は、Ｓ１地点の調査成果が1989年に報告されたものであるが（山西省臨汾行署文化局1989）、後年、原思訓らによって同地点の年代学的な研究がなされ、細石刃技術をもつ中文化層は14720±160年B.P.～11490±110年B.P.、同じく上文化層は10490±540年B.P.（いずれもAMS法）であること、細石刃技術を持たない下文化層と中文化層の境界付近の年代は、黄土の推定堆積速度から計算すると、16330年B.P.前後であるとされた（原ほか1998）。さらに、最近の調査で清水河両岸の約15kmの範囲に25ヶ所の旧石器・細石器遺跡が存在することが判明し、組織的・継続的な調査が進行中である（石ほか2002）。2002年に公開されたS14地点の試掘調査の報告では、平面図、個体別資料の分布図、全出土石器のデータ一覧表、篩がけの成果など、極めて精緻で良好なデータの提示が行われている（柿子灘考古隊2002）。今後、本遺跡群の調査や研究が進めば、細石器文化の編年、当時の人類の生業・行動論的研究、遺跡の生成論研究などに大きな成果があがることが期待される。

４）中国における土器の発生

1998年に虎頭梁遺跡群の河北省于家溝遺跡の中文化層で虎頭梁石器群と類似する石器群と土器が共伴したことが報じられた（泥河湾聯合考古隊1998、）。同年、北京市轉年遺跡においても土器と細石器が共伴し、9820±120年B.P.と測定されたことが報告された（郁1998、李ほか1998、金・郁2001）。また、70年代に発掘された黒龍江省の十八站遺跡第１地点で、表土層中ではあるが、土器と細石刃が共伴していた事実が明らかにされた（注10、許ほか2003）。このように、中国北部・東北部でも古い段階の土器が細石器文化、なかんずく削片系の楔形細石刃核をもつものと共伴していたことが判明してきた（注11）。その一方、河北省南荘頭遺跡・西廟遺跡では約１万年前の土器が細石器を伴わない状態で検出されていたり（謝2001）、角錐状や船底形の細石核を主体とする石器群との土器の共伴は確認されていない。今後、中国北部・東北部における土器の発生を考えるとき、細石器文化の様相把握は不可欠なものとなるだろう。

おわりに

以上、大変な駆け足で、中国細石器文化の研究史を振り返り、課題や問題点を指摘してきた。中国細石器文化研究は、20世紀に根をはり、葉を茂らせており、21世紀には大輪の花を咲かせる予感を持たせてくれる。そうした中、日本の細石刃文化研究は、細石器という用語を始めとして、細石刃技術の復原など、多くの影響を中国の細石器文化研究に与えており、これからも、中国細石器文化研究に様々な有効な研究事例や研究手法を提示できると考える。一方、日本旧石器研究における一国考古学的側面を突き破るためにも、また、日本の細石刃文化研究における仮説を証明するためにも、日本の研究者も中国細石器文化研究にさらに多くの関心を払う必要がある

のではないだろうか。このため、日中両国の研究者は、今後一層の学術交流をはかっていく必要があるだろう。

ところで、鳥居龍蔵、江上波夫以来、加藤晋平、佐川正敏らの日本人研究者各氏も中国細石器文化研究に大きな足跡を残している。今回、この文章において、それらに触れることができなかったのは、ひとえに筆者の力量不足によるものである。お許し願いたい。

最後に、本文章を書くにあたって、袁靖、折茂克哉の両氏からご助力をいただいた。また、蓋培、謝飛両氏の論文（蓋2002、謝2001）からは、多くの示唆を受けた。改めて感謝申し上げます。

注

1） 1914年、鳥居龍蔵が興安嶺で発見した細石器を英文で報告したのが、中国における細石器研究の開始とされ、1928年のボウル、ブリュイらによる“LE PALEOLITHIQUE DE LA CHINE”では、シャラオソゴル出土の小型石器に対してmicrolithiqueと記載している。同年、チトフとトルマチェフが現在の内蒙古自治区ハイラルで表採した細石器をロシア語で、また、翌1929年には、ネルソンがアンドリュース探検隊によってモンゴル高原で調査された細石器資料を英文で、それぞれ報告している。なお、“LE PALEOLITHIQUE DE LA CHINE”以外の文献は実際に確認しておらず、参考文献には挙げていない。

2） 裴1965年の「中国の旧石器時代」によれば、ジャライノールにおける絶滅動物と細石器との共伴関係の否定については、1963年出版の『中国石器時代』（『中国石器時代的文化』の第30版）に提示したとされているが、いくつかの年譜によれば、『中国石器時代』の出版は1980年とされている。また、『中国石器時代的文化』の第３版ともされている。『中国石器時代』の実見・確認を済ましていないため、ここでは、『中国の旧石器時代』を同見解の初出としておく。

3） 蓋・衛は、虎頭梁遺跡群を構成する９箇所の地点に、①73101地点に代表される居住時間があまり長くない居住の場：遺跡内で石器製作を行い、石器の出土点数も多く、数基の炉後も見られるもの、②65040地点に代表される狩猟に際しての見張りの場：遠望のきく段丘先端に形成され、少数の完形石器のみで構成されるもの、③65039地点に代表される動物解体の場：泉に近く、トゥールが主にスクレイパー類と尖頭器で構成され、破砕された羊角や動物四肢骨の端部がまとまって出土するもの、④72117地点に代表される石器製作の場：多量の石核、製品、未製品、チップ類が出土するもの、という遺跡の類型を見出している。

4） 中国では、C14の半減期を5730年とした年代測定値が通用している。本論考の記載も半減期5730年によるものである。なお、半減期5568年での測定値については、表１を参照されたい

5） ただし、「陝西大荔育紅河村旧石器地点」（高1990）には、育紅河の文化層出土の動物骨の年代測定値17330±500年B.P.が報告されている。周がこの測定値を採用しなかった理由については、不明である。

6） 筆者も類型案を数案提示している。最近のものは、加藤2000年93～97頁を参照されたい。また、石刃技術についてみれば、中国北部地域の細石器石器群は概ね低調であるが、河北省の爪村上層（唐山市文物管理処1993）、油房（謝・成1989）で例外的に発達している点で注意を要する。

7） 下川については、陳がより従来の年代よりも新しい可能性を示唆している（陳1996）。また、柴寺については、丁村の前・中期旧石器と同様な大形石器や石球が細石器とともに出土したり（王ほか1994）、＞40000年という年代測定値（中国社会科学院考古研究所編1991）がみられる。また、育紅河では、細石器の文化層から第三紀の代表種であるヒッパリオン（三趾馬）が出土している。水成層である遺物包含層中に二次堆積物が含まれていることを示している。

8） 近隣地域との比較ということでは、日本列島の細石刃文化と中国北部の細石器文化の年代測定値に少なからずのずれが生じているように思える。日本列島のものが古く出すぎているのか、中国のものが新しく出すぎているのか、判然としないが、1000年から2000年ほどずれているように思える。専門の研究者の議論を期待したい。

9） 具体的には、虎頭梁・下川両遺跡群は、重装備の集団－待ち伏せ猟－兵站移動型戦略といった行動様式・狩猟戦略と、また、馬陵山遺跡群は、軽装備の集団－追跡・探索狩猟－巡行型戦略という行動様式・狩猟戦略と、それぞれ関連する

と考えている。これについては、別稿を執筆中である。

10) 鄧聰氏からの私信によると、十八站遺跡の石器群には、ルヴァロア石核（打面調整が顕著な扁平な石核か？）から剥離された石刃、石刃素材とした掻器・荒屋型彫器、湧別技法による細石核およびファースト・セカンドスポール、峠下型細石核が見られるという。

11) なお、轉年でも、楔形細石核が出土していると報告されているが、1999年6月に中国科学院古脊椎動物与　古人類研究所李超榮研究室で同遺跡の出土遺物を実見したおりには、細石核は比較的大形の円錐状のものが主体となっており、船底形・楔形の細石核は確認できなかった。

【参考・引用文献】

【欧米語文献】

BOULE,M., BREUIL,H., LICENT,E., 1928 Le paleolithique de la Chine. Archives de l'Institut de Paleontologie Humanie, 4、136p.

CHEN C. and WANG X.Q. 1989 "Upper Paleolithic Microblade Industries in North China and Their Relationships with Northeast Asia and North America." Arctic Anthropology 26-2 pp.127～156

TANG C. and GAI P. 1986 "Upper paleolithic Cultural Traditions in North China" Advances in World Aachaeology 5 pp.339～364

【中国語文献】

安志敏 (1978)「海拉爾的中石器遺存」『考古学報』1978-3 289～316頁

安志敏編 (1987)『裴文中史前考古学論文集』 298頁 文物出版社

陳淳 (1983)「中国細石核類型和工芸初探」『人類学学報』2-4 331～341頁.

陳哲英 (1996)「下川遺址的新材料」『中原文物』1996-4 1～22頁

陶富海・王益人 (1995)「丁村遺址群再次発現細石器文化地点」『文物季刊』1995-1 1～4頁

蓋培 (1977a)「従華北到美洲」『化石』1977-2 1～4頁

(1977b)「黄河之水通江戸」『化石』1977-3 2～4頁

(1984)「陽原石核的動態類型学研究及其工芸思想分析」『人類学学報』3-3 244～252頁

(2002)「談談細石器一詞的涵義」『中国科学院古脊椎動物与古人類研究所20世紀旧石器時代考古学研究』11～12頁 文物出版社

蓋培・衛奇 (1977)「虎頭梁旧石器時代晩期遺址的発現」『古脊椎動物与古人類』15-4 287～300頁

高星 (1990)「陝西大荔育紅河村旧石器地点」『考古学報』1990-2 187～203頁

葛治功・林一璞 (1985)「大賢荘的中石器時代細石器」『東南文化』1 2～27頁

賈蘭坡 (1978)「中国細石器的特徴和它的伝統、起源与分布」『古脊椎動物与古人類』16-2 137～143頁

賈蘭坡ほか (1972)「山西峙峪旧石器時代遺址発掘報告」『考古学報』1972-1 39～58頁

金家広・郁金城 (2001)「南荘頭与華北平原－環渤海地区新石器時代早期文化」『蘇秉琦与当代中国考古学』59～75頁 科学出版社

李超榮ほか (1998)「北京地区旧石器考古新進展」『人類学学報』17-2 137～146頁

李永憲 (2002)「細石器与中国西南的石器時代文化」『長江上游早期文明的探索』34～53頁 巴蜀書店

梁思永 (1932)「昂昂渓史前遺址」『歴史語言研究所集刊』4-1

(1936)「熱河査不干廟、林西、雙井、赤峰等処所採集之新石器時代石器與陶片」『国立中央研究院歴史語言研究所 田野考古報告』1 1～67頁

泥河湾聯合考古隊（1998）「泥河湾盆地考古発掘獲重大成果」『中国文物報』654期
裴文中　（1948）『中国史前時期之研究』　235頁　商務印書館
（1954）『中国石器時代的文化』　68頁　中国青年出版社
裴文中科学論文集編集組編（1990）『裴文中科学論文集』　388頁　科学出版社
山東省文物考古研究所ほか（1987）「山東?城馬陵山細石器遺存調査報告」『史前研究』1987-1　42～58頁
陝西省考古研究所ほか（1996）『大荔－蒲城旧石器』　241頁　文物出版社
山西省臨汾行署文化局（1989）「山西吉県柿子灘中石器文化遺址」『考古学報』1989-3　305～323頁
石金鳴ほか　（2002）「吉県柿子灘旧石器遺址群考古取得新進展」『中国文物報』1003期
石興邦　（1989）「下川文化研究」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』144～154頁　文物出版社
柿子灘考古隊（2002）「山西吉県柿子灘旧石器時代遺址S14地点」『考古』2002-4　15～28頁
唐山市文物管理処（1993）「唐山地区発現的旧石器文化」『文物春秋』1993-4　1～16頁
王建・王益人（1991）「下川細石核形製研究」『人類学学報』10-1　1～8頁
王建ほか　（1978）「下川文化」『考古学報』1978-3　259～288頁
王建ほか　（1994）「丁村旧石器時代遺址群調査発掘簡報」『文物季刊』1994-3　1～75頁
王向前ほか　（1983）「山西蒲県薛関細石器」『人類学学報』2-2　162～171頁
王益人　（1993）「下川楔形析器研究」『文物季刊』1993-1　1～9頁
王益人・王建（1998）「下川彫刻器研究」『文物季刊』1998-3　25～57頁
衛奇　（1998）「塔水河遺址発現原始細石器」
『元謀発現三十周年記念暨古人類国際学術研討会文集』131～134頁　雲南科技出版社
呉加安　（1984）「試論下川文化与小南海文化之間的関係」『考古与文物』1984-1　100～106頁
謝飛　（1991）「泥河湾盆地旧石器文化研究新進展」『人類学学報』10-4　324～332頁
（1996）「河北旧石器時代晩期細石器文化遺存的分布及在華北馬蹄形分布帯中的位置」
『湖西文化研究』14　295～320頁
（2001）「従環渤海地域旧石器文化的発展進程看新石器文化的誕生」
『蘇秉琦与当代中国考古学』39～58頁　科学出版社
謝飛・成勝泉（1989）「河北陽原油房細石器発掘報告」『人類学学報』8-1　59～68頁
謝飛ほか　（1996）「中国旧石器時代晩期砕状器的研究」『東北亜旧石器文化』179～196頁　白山文化
新疆文物考古研究所ほか編（1997）『新疆文物考古新収獲（続）　1990－1996』　785頁　新疆美術撮影出版社
于匯歴　（2003）「黒龍江神泉遺址発掘旧石器晩期原生文化層堆積」『中国文物報』1098期
郁金城　（1998）「北京市新石器時代考古発現与研究」『跋渉集』39～44頁　北京図書館出版社
許永傑ほか　（2003）「黒龍江考古的世紀思考」『考古』2003-2　3～10頁
原思訓ほか　（1998）「山西吉県柿子灘遺址的年代与文化研究」『考古』1998-6　57～62頁
張森水　（1990）「中国北方旧石器工業的区域漸進与文化交流」『人類学学報』9-4　322～333頁
（1999）「管窺新中国旧石器考古学的重大発展」『人類学学報』18-3　193～214頁
張居中・李占揚（1996）「河南舞陽大崗細石器地点発掘報告」『人類学学報』15-2　105～113頁
張祖方　（1987）「爪?文化」『東南文化』1987-2　1～18頁
中国社会科学院考古研究所編（1991）『中国考古学中?十四年代数据集　1965－1991』　487頁　文物出版社
中国社会科学院考古研究所下川工作隊・山西省文物工作委員会
（1987）「山西陽城、大同地区石器時代遺址調査報告」『考古学集刊』5　1～26頁
周国興　（1974）「河南許昌霊井的石器時代遺存」『考古』1974-2　91～98頁

【日本語文献】

江上波夫　(1931)「石器時代の東南蒙古」『考古学雑誌』22-4　228～237頁、22-5　297～308頁

大貫静夫編　(2002)『内蒙古細石器文化の研究』
平成10年度～平成13年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書

蓋培　(1993)「中国の細石刃核について」
『北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散』76～90頁

加藤真二　(2000)『中国北部の旧石器文化』　286頁　同成社

小牧實繁ほか (1931)「蒙古多倫?爾に於ける新石器時代の遺蹟」『人類学雑誌』46-8　292～296頁

徐淑彬・加藤真二 (1991)「中国山東省沂河・沭河流域の細石器文化」『旧石器考古学』43　17～24頁

裴文中　(1965)「中国の旧石器時代　付中石器時代」『日本の考古学　先土器時代』324～350頁
河出書房

表1　中国細石器遺跡の理化学年代測定値一覧表

省・市	遺跡名	試料	実験室No.	測定法	測定値（年B.P.）：半減期5730年	測定値（年B.P.）：半減期5568年	参考文献
黒龍江	大興屯	砕骨	PV-0368	β線計数法	9735± 80	9460± 80	中国社会科学院考古研究所編1991
	大興屯	砕骨	PV-0369	β線計数法	11805± 150	11470± 150	中国社会科学院考古研究所編1991
北京	轉年				9820± 120		李ほか1998
河北	孟家泉				17500± 250		唐山市文物管理処1993
	虎頭梁	動物化石	PV-0156	β線計数法	11000± 115	10690± 210	中国社会科学院考古研究所編1991
	虎頭梁				11000± 210		蓋1993
	虎頭梁				11000± 500		蓋1993
	虎頭梁				11600± 110		蓋1993
山西	柴寺	炭粒	PV-0129	β線計数法	＞40000		中国社会科学院考古研究所編1991
	柴寺	貝殻	ZK-0635	β線計数法	26400± 800	25650± 800	中国社会科学院考古研究所編1991
	下川舜王坪	木炭	ZK-0634	β線計数法	19600± 600	19050± 600	中国社会科学院考古研究所編1991
	下川舜王坪	木炭	ZK-0762	β線計数法	13900± 300	13510± 300	中国社会科学院考古研究所編1991
	下川	木炭・泥	ZK-0384	β線計数法	21700±1000	21090±1000	中国社会科学院考古研究所編1991
	下川	木炭	ZK-0385	β線計数法	16400± 900	15940± 900	中国社会科学院考古研究所編1991
	下川	木炭	ZK-0417	β線計数法	23900±1000	23220±1000	中国社会科学院考古研究所編1991
	下川	泥	ZK-0494	β線計数法	18375± 480	17860± 480	中国社会科学院考古研究所編1991
	下川	泥炭	ZK-0497	β線計数法	18560± 480	18040± 480	中国社会科学院考古研究所編1991
	下川小白樺	木炭	ZK-0393	β線計数法	20700± 600	20110± 600	中国社会科学院考古研究所編1991
	薛関	木炭	BK81016	β線計数法	13550± 150	13170± 150	中国社会科学院考古研究所編1991
	柿子灘	焼骨	BA93186	AMS	10490± 540		原ほか1998
	柿子灘	焼骨	BA93187	AMS	12660± 190		原ほか1998
	柿子灘	焼骨	BA93188	AMS	13590± 220		原ほか1998
	柿子灘	焼骨	BA93189	AMS	14340± 250		原ほか1998
	柿子灘	骨	BA93190	AMS	11490± 110		原ほか1998
	柿子灘	骨	BA93191	AMS	14720± 160		原ほか1998
	趙王村	骨	PV	β線計数法	10290± 110		劉ほか1995
	孟家荘	骨	PV	β線計数法	11960± 150		劉ほか1995
陝西	育紅河	動物化石	PV-0862	β線計数法	17330± 500		高1990

凡例　実験室
BK, BA：北京大学
PV：中国科学院古脊椎動物与古人類研究所
ZK：中国社会科学院考古研究所

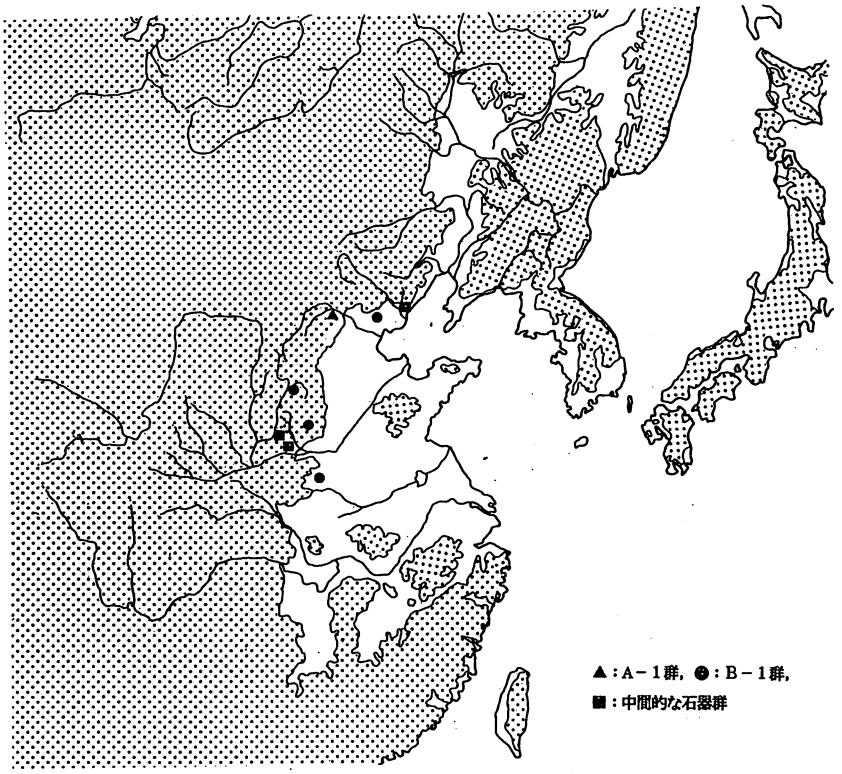


図1　第Ⅴa期の細石刃石器群位置図

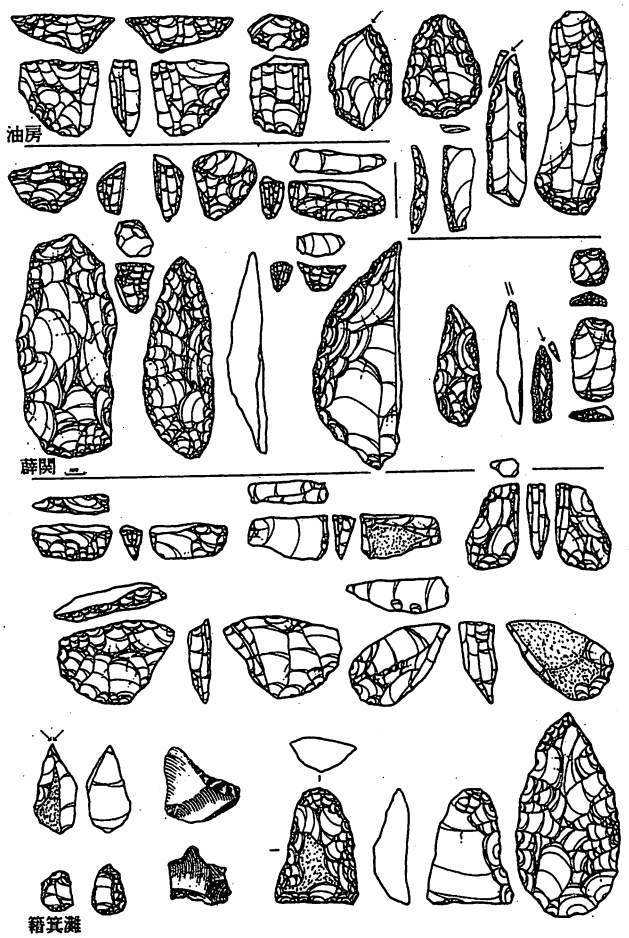


図2　細石刃文化A群の石器群
油房：A—1群、薛関・籍箕灘：A—2群

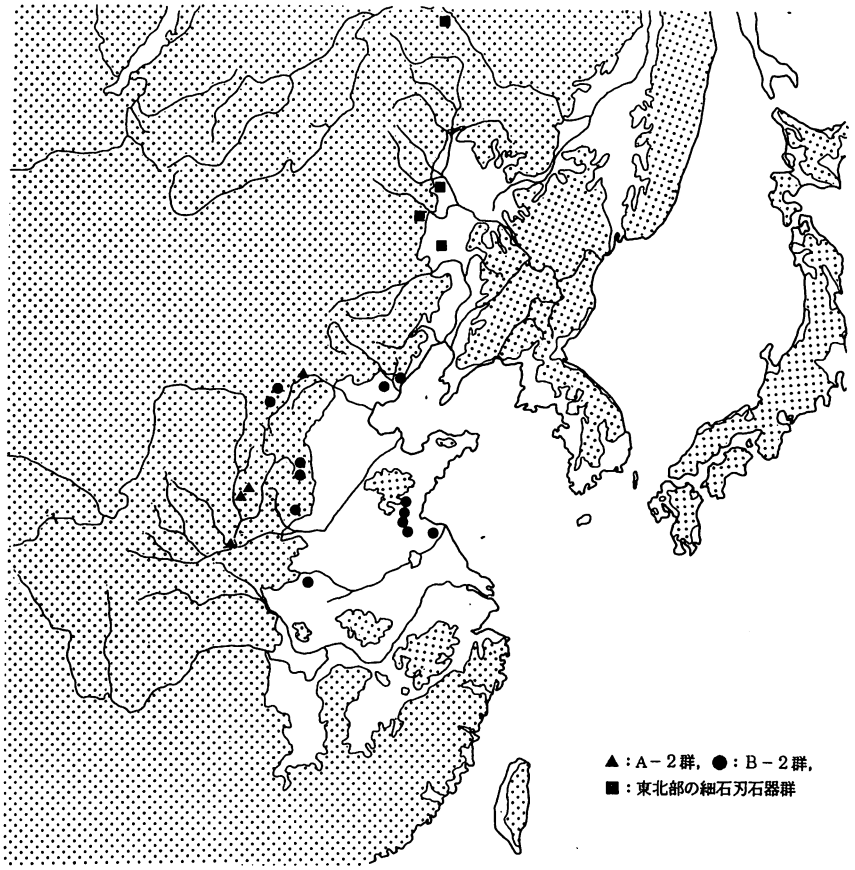


図3　第Vb期の細石刃石器群位置図

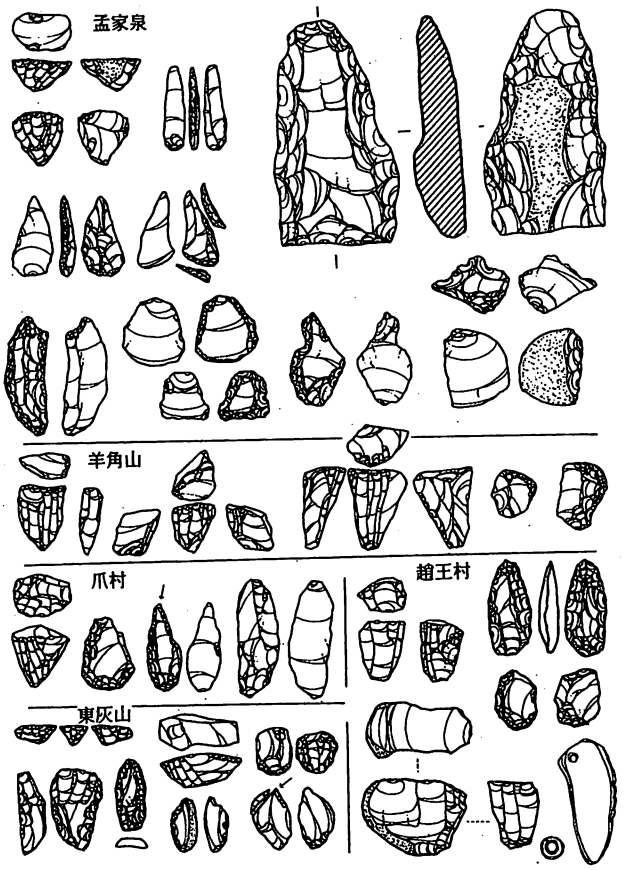


図4　細石刃文化B群の石器群　孟家泉・羊角山・爪村：B—1群、東灰山・趙王村：B—2群

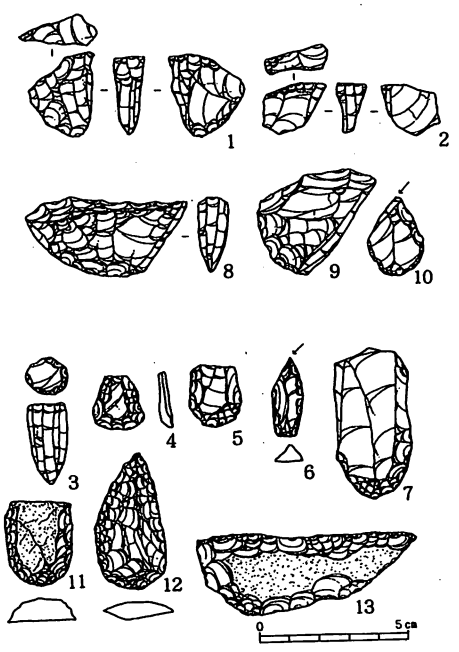


図5　中国東北部の細石刃文化

1～7：甑窯、8～13：嘎査

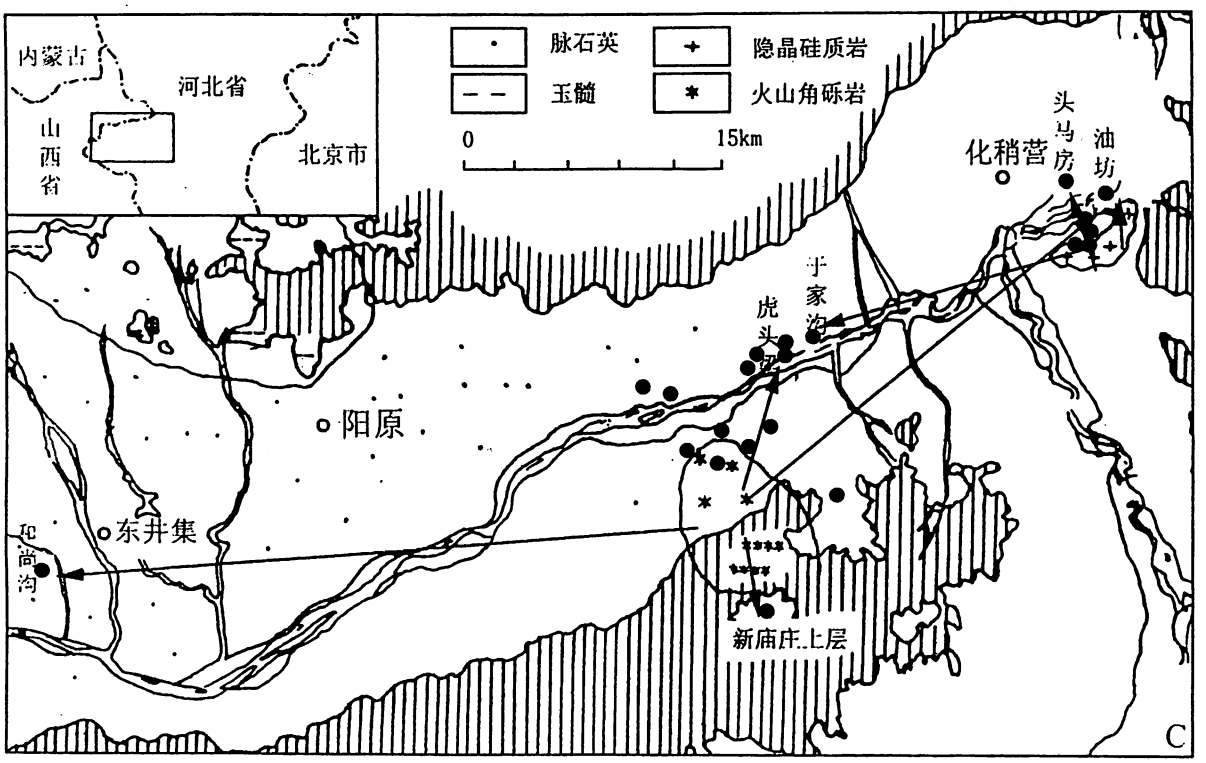


図6　河北・山西泥河湾盆地の遺跡分布図

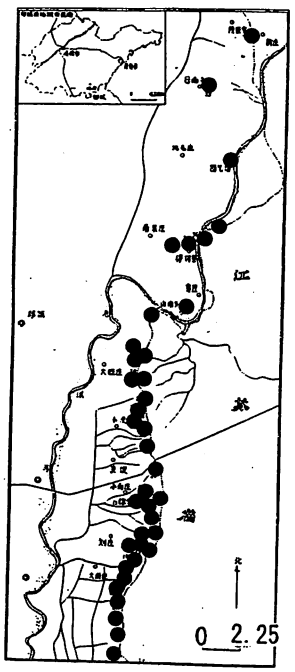


図7 山東馬陵山遺跡群の遺跡分布図

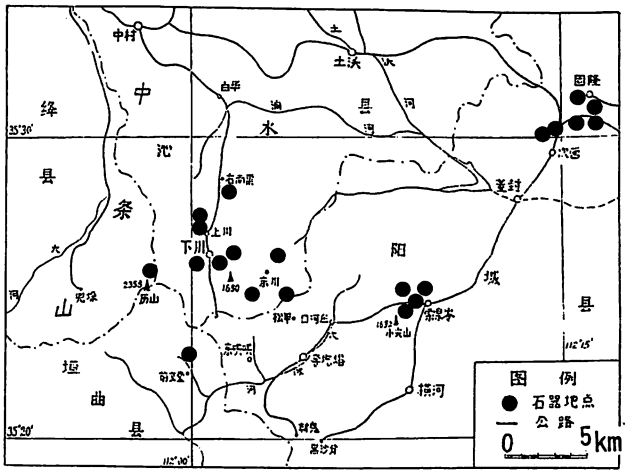


図8 山西下川遺跡群の遺跡分布図

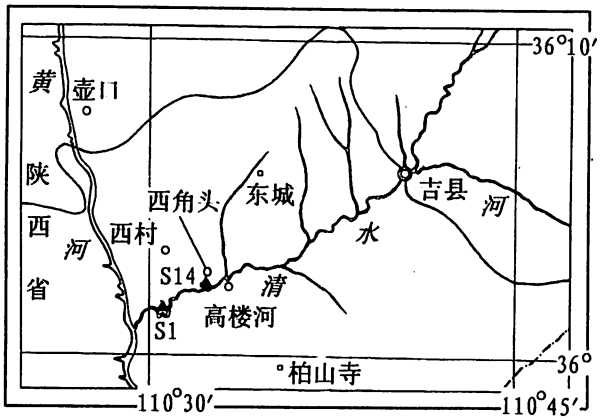


図9　山西柿子灘遺跡群の遺跡分布図

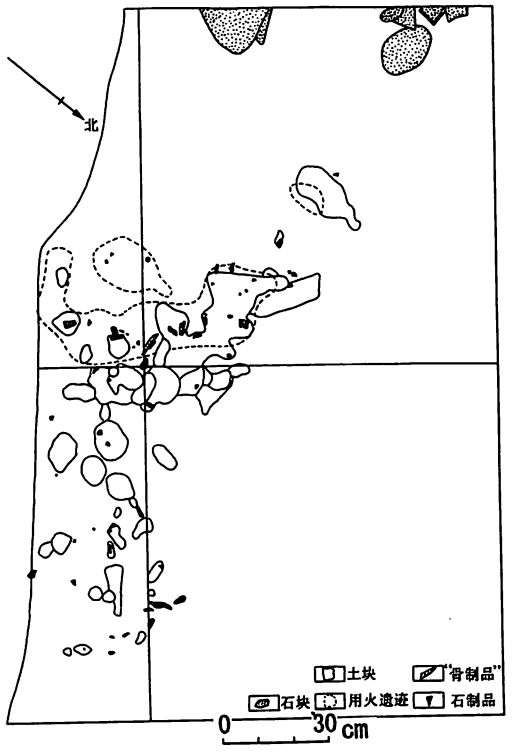


図10　柿子灘遺跡S14地点の平面図

シベリアの細石刃文化

— 研究の変遷と新たな問題提起 —

北海道大学
加藤 博文

はじめに

シベリア地域の細石刃文化研究は、長い歴史を有する。多くの課題がその歴史の中で取り組まれてきた。特に北アジアや北太平洋沿岸地域の人類集団の拡散との関係は、多くの研究者の関心を引き付けてきた。本論においては、このようなシベリア地域の細石刃文化について、その研究の歴史、細石刃技術の多様性、そして近年の研究動向を紹介し、日本列島ひいては北アジア全域の細石刃文化研究に果たす役割について述べたいと思う。

なお既に当該地域については、優れた概説書が先学諸氏により上梓されている(加藤晋 1985, 1988, 木村 1995, 小畑 2001)。また細石刃石器群を集成した資料集も木村英明氏によりまとめられている(木村 1998)。

1．細石刃文化研究の歴史的背景

1-1. 発見の段階：1879－1930 年代前半期

北アジアにおける細石刃文化研究は、ロシアにおける旧石器時代の遺跡の確認とほぼ同時期、19 世紀後半に遡る。ロシアにおける旧石器研究は、1871 年の東シベリア、イルクーツク市郊外の陸軍病院遺跡の発見によってその幕を開ける。細石刃石器群の確認と研究の開始は、これに遅れることわずか 10 年すでに 1879 年にはエニセイ川中流域、クラスノヤルスク市郊外において最初の遺跡が Savenkov, I.T.によって発見されている。今日北アジアにおいて数少ない人骨の出土遺跡として知られるアフォントヴァ山遺跡群の発見である。さらに 1895 年には Ovchinnikov, M.P.によってイルクーツク市郊外においてヴェルホレンスク山遺跡が発見される。ここに 1 世紀を超える歴史を有するシベリアにおける細石刃研究が開始されるのである。

19 世紀から 20 世紀の初頭にかけての研究は、ヨーロッパにおいて進められつつあった旧石器文化の編年研究との対比、人類の北方起源説にからめた人類集団の移住論の解釈に関心が集中していた。そのため石器群の地域的独自性に対する関心は低かった。アフォントヴァ山遺跡もヴェルホレンスク山遺跡も等しく、西ヨーロッパにおいて確立された旧石器文化の編年案に石器群を対比することから研究が開始されていく。アフォントヴァ山遺跡出土の石器群は、すでに 1890 年には Yadrintsev, N.M.を通じてフランス旧石器学会へ紹介され、Quaterfages, A.や G. de Gaye などフランスの旧石器研究者の関心を集めている(Larichev 1969)。しかし時は折りしも人類北方起源論が展開されており、西ヨーロッパの研究者の関心を強く引き付けつつも移住論の枠から抜け出ることはなかった。

アフォントヴァ山遺跡の調査研究は、Savenkov の死後クラスノヤルスク郷土博物館の Auerbakh, N.K.と Sosnovskij, G.P.によって引き継がれ、1930 年代前半に調査報告書が刊行される(Auerbakh 1930, Auerbakh i Sosnovskij 1932)。一方で第一次世界大戦でクラスノヤルスクへ抑留されたオーストラリアの先史学者 G. von Merhart は、1923 年に American Anthropologist 誌上においてアフォントヴァ山遺跡の概要報告を行っている(Merhart 1923)。

ヴェルホレンスク山遺跡は、すでに 18 世紀後半より先史時代遺物を出土する場所として知られていたが、当初 Ovchinnikov は新石器時代の遺跡として認識しており、採集した資料も新石器時代に属すると考えていたようである(Medvedev 1961)。しかし、この資料を実見したイルクーツク国立大学の教授であった Petri,B.E.は、旧石器時代に遡る資料であるとみなし 1919 年に発掘調査を実施、石器群の特徴および更新世の動物遺存体と共伴することを確認、遺跡を旧石器時代に位置づける(Medvedev 1961, Larichev 1969)。Petri によるヴェルホレンスク山遺跡の調査は 1928 年まで継続され、1923 年には成果の一部が "Sibirskij Paleolit" として出版されている。

Petri の調査方法で注目すべきは、この段階において層位的かつグリットを設定した調査が実施され、炉を伴う動物依存体と石器群の共伴を証明する高精度の調査が行われた点にある(Petri 1923, Medvedev 1961)。これ以降のシベリア地域の調査が早くから生活面の検出に成功し遺跡出土資料が当時の生活を復元できる形で集成されたこと、また層位学的研究が早くから進展し、層位学的編年が確立しえた背景に Petri によるこのような先駆的な調査研究があったと評価することができよう。

またこの時期 1920 年代後半から 1930 年代前半には、Geresimov, M.M.によるマリタ遺跡の確認と調査(1928 年)、Okladnikov, A.P.によるブレチ遺跡の発見と調査(1938 年)がなされており、エニセイ川流域やアルタイ地方においては、タシュティク遺跡やペレセレンチェスキー地点などの細石刃石器群が Sosnovskij によって発見、調査された。これ以降 1930 年代後半からは、石器群の系統性やその背景にある人間集団の移住過程に関する議論が展開されていくこととなる。

1-2. 石器群の系統と編年への関心

1930 年代から 50 年代にかけてシベリア地域の研究の関心は、シベリアに分布する「旧石器文化」の系統性に向けられており、東部ヨーロッパ地域を主たるフィールドとする研究者も交えての議論が展開された。また旧石器石器群の編年案の構築が試みられた点もこの時期の研究の特徴として指摘できる。

細石刃石器群の位置づけは、このような石器群の系統性や編年をめぐる議論の中でなされていった。この時期に Petri の教え子の一人であった Gromov, V.I.によって最初のシベリア地域における旧石器石器群の編年案を提示されている(Bonch-Osmolovskij and Gromov 1936, Gromov 1948)。Gromov の提示したシベリアの旧石器編年では、上部旧石器最古の段階にアフォントヴァ山Ⅱ遺跡下層を位置づけ、それに続く第二段階としてマリタ、ブレチ、アフォントヴァ山遺跡群(Ⅰ遺跡、Ⅱ遺跡上層、Ⅲ遺跡)、グレミャチェヴォ・クリューチ、タシュティクⅠ、タシュティクⅡ、タシュティクⅢなどの遺跡を位置づけた。第三段階としてはペレセレンチェスキー地点遺跡ほかのエニセイ川流域の多くの旧石器時代の遺跡、第四段階は先新石器の遺跡でビリュサ遺跡の上層をあてた。この Gormov による編年は、古地形学、古気候学、古生物学の分析を基礎として旧石器時代人の生活と活動の復元を試みており、これ以降のシベリアの旧石器学の基礎的枠組みを確立したものとして評価することができる。細石刃石器群についても、いくつかの段階に細分可能であることが、これによって初めて提示された。

一方、エニセイ川流域の数多くの遺跡を調査し、アルタイ地域の調査を実施していた Sosnovskij G.P.は、別の編年案を 1934 年に提示している(Sosnovskij 1934)。Sosnovskij は、当初北アジアの旧石器遺跡群を前期と後期の 2 段階に区分する案を想定していたが、後に 3 段階に細分をおこなった。前期に属する遺跡としては、マリタ遺跡、陸軍病院遺跡、カイスク山遺跡が挙げられ、中期にはアフォントヴァ山Ⅱ遺跡下層, アフォントヴァ山ⅠとⅢ遺跡、トムスク遺跡、後期にはアフォントヴァ山Ⅱ遺跡上層、ヴェルホレンスク山遺跡などが位置づけられている(Sosnovskij 1934)。中でもマリタ遺跡については北アジアで最古の遺跡として評価している。

これら Gromov と Sosnovskij による編年が提示された時期の北アジアにおける旧石器研究の主たる関心は、北アジア旧石器文化の系統を明らかにすることにあった。すでにシベリアの旧石器石器群について、東ヨーロッパの周知の石器群との類似性を基礎とした東ヨーロッパからの集団移動を想定する見解が Efimenko,P.P.によって提起されていた(Efimenko 1931,1932)。Efimenko は、この段階で東ヨーロッパにおける旧石器文化の編年系統関係を考古学的文化の概念を利用して論じており、シベリアの旧石器石器群についても特にマリタ遺跡の石器群やビーナス像などの特徴から、この時期に東ヨーロッパからの集団移住があったとする仮説を提起した。これに対して Sosnovskij は、エニセイ川流域やアルタイ地方において自らが調査した旧石器遺跡出土資料に基づき西ヨーロッパにおける型式学的分類法によって北アジアの旧石器石器群の年代を編年し系統性を論じることに無理があると考え、北アジアの「旧石器文化」に存在する地域的変異の存在を主張した(Sosnovskij 1934)。シベリアにおける旧石器石器群の系譜を巡っては、このように大きく二つの仮説が存在し、議論がなされていく。しかしながら、今日、我々が関心を向ける細石刃石器群の系統と拡散に関する視座は、この時期にヨーロッパとは別の方

向から生じ、シベリアの石器群をこの議論の中に巻き込んでいくこととなる。

1-3. 石核スクレーパーからクサビ形石核へ

アラスカ大学のキャンパス遺跡から出土した石器を観察したNelson, N.C.は、これらの石器が1920年代にモンゴルで出土した細石刃を伴う石器群に類似し、両大陸の人類史を取り結ぶ重要な資料であるとする見解を1937年にAmerican Antiquity誌上に発表する(Nelson 1937)。特にこの指摘の中で両大陸を結ぶ石器として注目されたものがエンドスクレーパーとpolyhedral coreであり、このpolyhedral coreこそ細石刃核であった。Nelsonに次いでこれらアラスカ大キャンパス出土の石器について触れたRainy, F.G.は、1923年のPetriによるヴェルホレンスク山遺跡の報告を引用しながら、Petriが石核スクレーパー(core-scraper)と呼称したものとこのpolyhedral coreが同一の石器であり、これらの石器がモンゴルのみではなく、シベリアにおいても知られていることを指摘した(Rainy 1936)。これ以後、東シベリアにおける細石刃石器群は新大陸への人類集団の移住を示す資料として注目されることとなる。ヴェルホレンスク山遺跡は、その代表的遺跡として広く注目されるようになる。

1958年、Okladnikov, A.P.はNelsonらの文献を引用し、新大陸とシベリアや中央アジアの住民や古代文化の関連性を示す資料として石核スクレーパーを取り上げ、シベリア地域に広く同種のタイプの石器が分布していることを提示した(Okladnikov 1958,1959)。一方、この時期に石核スクレーパーと呼ばれていた細石刃核を技術形態学的観点から整理し、より明確に定義しようとする動きが始まる。Panichikina, M.Z.は、広くユーラシア大陸内の旧石器時代の石核を分類する中で、シベリア地域において出土することが知られていた石核スクレーパー(core-scraper・нуклеус-скребка)の名称は不適格と主張し、新たにクサビ形石核(wedge-shaped core)という名称を提唱した(Panichikina 1959)。二つの名称の差異としては、前者が形態から機能を推定しその名称を与えているのに対し、後者は細石刃剥離という石核の目的剥片剥離に重きをおいて与えられた名称と評価することができる。特にクサビ形という名称には石核下縁部の形成が剥離作業から見て重要な意味をもつという推定をしていることからもその視点は明らかである。このPanichikinaによる分類の視点については、加藤晋平氏によって紹介がなされており、日本列島の細石刃石核にクサビ形細石刃核という名称を導入することになる(加藤晋平 1976)。

クサビ形細石刃核を有する細石刃石器群の検出は、この後カムチャトカ半島南部、沿海州、ヤクーツク、アンガラ川流域、エニセイ川流域、アルタイ地方において相次いで確認され、シベリアから新大陸への人類集団の拡散を物語る石器としての位置づけがより鮮明化されていく。

1-4. 考古学文化の設定：地域文化モデルの形成

1960年代に入ると、第二次世界大戦後の大規模なシベリア開発計画の中で遺跡の調査事例が急速に増加していく。特にエニセイ川中流域にクラスノヤルスク水力発電所を建設する計画が始動しはじめ、これに合わせた大規模な遺跡調査が組織されている。こうした大規模調査による調査事例の増加は地域的な石器群の蓄積を生み、1970年代以降のからのシベリアにおける各地の石器群を考古学文化として理解する動きが目立ってくる。この動きはこの頃から活発化した石器群の型式的特徴に基づいて考古学的文化を設定する動きと連動したものであり、中央アジアにおけるGrigor'ev, G.P.の研究やコーカサスにおけるLyubin, V.P.による考古学的文化の設定の影響を強く受けている(Grigor'ev 1972, Lyubin 1977)。考古学的文化の認識は血縁的に統合された集団の同一性や言語的・社会的・経済的に組織化された集団的単一性を反映しているとするものであり、考古学的文化が提示するものは民族集団つまりエトノスであるというものであった。

このような考古学文化の設定を積極的にシベリアにおいて行ったものとしては、Abramova, Z.A.とMochanov, Yu.A.による研究を代表的な事例として挙げることができる(Abramova 1975, 1979a, 1979b, Mochanov 1977)。Abramovaによる地域文化の概念は、Grigor'evによるものに基づいており(Grigor'ev 1972, Grigor'ev and Islamov 1974)、「卓越した型式と限定された時空間内で設定されたものであり考古学的文化の歴史的関係には、

社会的および民族的特徴を内部に安定して認めることができる。考古学的文化は領域的、編年的かつ系統的表象である」と述べている(Abramova 1975 c.19)。この表現からAbramovaが考古学的文化を北アジアにおける旧石器文化の起源とその歴史的発展過程を理解するための概念として考古学文化という概念を取り入れ、その分析を進めたことが理解できる。

Abramovaは上述した視点に基づいてまずシベリアを単一の旧石器文化ゾーンとして理解し、その上で内部を南シベリア文化領域、中部シベリア文化領域(またはアンガラ・チュリム文化領域)、北東シベリア文化領域の3つの大きな文化領域に細分した(Abramova 1975)。この細分された文化領域は類似する地域文化の組み合わせによって特徴付けられ、南シベリア文化領域には、スロストキ文化(アルタイ地方)、アフォントヴァ文化とココレヴォ文化(エニセイ地方)、オシュルコヴォ文化(ザバイカル地方)、加えてモンゴルのモルティン・アム遺跡の資料やウリビン・トゥル遺跡の資料も含められている。中部シベリア文化領域は、マリタ・ブレチ文化(アンガラ地方)、アチンスク文化(チュリム地方)、トムスク文化(トミ川流域地方)が含められた。北東シベリア文化領域は、ヤクーツク地方アルダン川流域でMochanovによって調査され、独自性を持った石器群として認識されていたジュクタイ文化(Mochanov 1969)やDikov, N.N.によってカムチャトカ半島南部で発見されていたウシュキ遺跡の石器群(Dikov 1969,1970)で構成されている。これらの地域文化の設定に際しては、石器群の技術基盤や素材供給の傾向などが分析されており、例えばエニセイ川流域に設定されたアフォントヴァ文化とココレヴォ文化の二つの考古学的文化は、互いに共通点を有しながらも、アフォントヴァ文化にはココレヴォ文化には伴わない両面調整技術が見られること、ココレヴォ文化においては石器素材の大半が石刃を素材とするのに対してアフォントヴァ文化では剥片が石器素材を供給していること、アフォントヴァ文化の細石刃には二次調整が見られるのに対して、ココレヴォ文化の細石刃には二次調整が見られないなど、相互の石器群間の差異がそれぞれの考古学文化の設定基準となっている。一方アルタイ地方のスロストキ文化では、クサビ型石核と石刃技術が設定基準となっており、ザバイカル地方のオシュルコヴォ文化は、アフォントヴァ文化との類似性から地域文化が設定されている。

Abramovaはこのような北アジアの考古学的文化の整理を行った後、北アジアの旧石器文化の起源について言及している。アルタイ地域の後期旧石器石器群と中央アジアの中期旧石器石器群との間の石器型式、剥片剥離技術における類似性に基いて、北アジアの旧石器文化の起源は中央アジアからの人類集団の波及によるものであるというのが、Abramovaの主張であった。このAbramovaによる論考は1970年代半ばにおける北アジア旧石器文化に関してはじめて体系的にとりまとめたものである。これ以降の北アジアの旧石器文化に関する議論は考古学的文化と文化領域、そしてその系統性という議論が進められるようになるが、その背景にAbramovaの一連の研究が大きな影響を与えていることは間違いない。その意味においてAbramovaの考古学文化論はシベリアの細石刃石器群の研究に一つの流れを形成したと評価することができる(Abramova 1979a 1979b)。

一方、この考古学文化の視点は、新大陸への人類集団の移住の母体がどの考古学文化であったのかという点から新たな論点を生み出すことになる。Mochanovによるジュクタイ文化の提唱である。ヤクーツク地方のアルダン川流域において独自の地域色を有した遺跡群を調査していたMochanovは、ジュクタイ洞窟の資料に基づいてジュクタイ文化を提唱し、この文化が新大陸への移住集団の母体となったという仮説を提起した(Mochanov 1969)。続いて1977年にはジュクタイ文化の成立過程について言及する論考を発表し、南ウラル、カザフスタン、モンゴル、中国北部を対象とした北アジア全域において二つの文化伝統が存在するという仮説を提唱した。この文化伝統の一方はマリタ文化やアフォントヴァ文化であり、これと対するもう一つの文化伝統としてジュクタイ文化を位置づけたのである。Mochanovはそれぞれ二つの文化伝統をマリタ・アフォントヴァ伝統とジュクタイ伝統として評価したのである(Mochanov 1977)。

このMochanovによる二つの文化伝統の提唱の背景には、当時1960年代以降急速に普及した放射性炭素による遺跡年代の推定がある。Abramovaによる地域的な考古学的文化の設定においても年代的位置づけに関して放射性炭素年代測定法による年代推定が考古学的文化の一つの設定軸である年代枠を決めている。しかし、Abramovaにおいては、あくまで文化設定の主要な軸線が石器群などの型式学的手法に置かれているの対して、

モチャーモフは層位的状況と遺跡から得られる放射性炭素年代に軸線を据えて考古学的文化を設定している。このためジュクタイ文化に属する遺跡の最下層の石器群の年代が極めて古く提示された結果が、直接 30,000 年を遡るジュクタイ文化の成立という仮説を生みだすこととなったのである。

このようなMochanovによるジュクタイ文化、ジュクタイ伝統という概念については、Abramovaによる批判があり(Abramova 1979c)、またその年代についても多くの批判が加えられている(Yi and Clark 1985)。現在においてもジュクタイ文化という考古学文化につては、地域文化としての評価はある一方で、その年代および文化伝統としての理については、賛同者を得るにはいたっていない。

考古学的文化として北アジアの旧石器文化を理解する動きは、1970 年代にはシベリア全域に広がり、沿海州地域における細石刃石器群に関しても、同様の視点での考古学文化の設定がなされた。石刃剥離技術と細石刃技術(ゴビ型石核)を伴うウスチノフカ文化が設定され、この系譜を引く石刃剥離技術（石刃鏃）とクサビ形石核をもつノヴォペトロフカ文化や別系統の石刃剥離技術を欠如し、代わって両面調整技術と細石刃技術が見られるオシポフカ文化やグロマトゥーハ文化などが設定された(Okladikov and Derevyanko 1973)。

シベリア極東地域における考古学文化の設定の背景には、北アジアの石刃技法(石刃剥離技術)の起源に関する強い関心とアメリカ大陸への人類集団の移住過程を石器群の分析を通じて検証とする当時の共通の研究課題が存在した(Powers 1972, Okladnikov 1974, Vasilievsky 1975 など)。またこの地域の考古学文化を特徴付けた細石刃技術の分析には、日本列島において 1950 年代末から 1960 年代にかけて進められた細石刃技術の分析の成果が大きな影響を与えていることは特筆すべきである(Morlan 1967, Hayashi 1968)。1980 年代に入り、相次いで刊行されたシベリア極東の旧石器文化に関する概説書や極東の旧石器文化に関する概説書では、日本列島における研究動向が数多く引用されており、その強い影響を窺い知ることができる(Okladnikov et. al. 1980, Derevyanko 1983,1984)。

1-5. 地域研究の進展と多様化の段階

1980 年代におけるシベリアの細石刃文化研究は、各地での新たな資料の蓄積、継続的調査の展開という様相を呈する。特に西シベリアにおいては、Okladnikov の主導のもとソ連科学アカデミーシベリア支部による調査研究が進められた。エニセイ川流域、トゥーヴァにおいては、ソ連科学アカデミーレニングラード支部考古学研究所による調査研究が展開された。

東シベリアにおける調査はバイカル湖を挟んで大局的に見ると東西の二つの地域に大別できるが(Cis-Baikal と Trans-Baikal)、東側のアンガラ川流域からバイカル湖沿岸地域、レナ川上流域にかけての調査研究は、イルクーツク国立大学によって進められ,東岸のブリヤート共和国とチタ州における調査研究は、ロシア科学アカデミーとチタ教育大学によって調査研究が進められた。ヤクーツク地方においては、ロシア科学アカデミーヤクーツク支部を中心とした調査研究が展開され、数多くの報告がなされている。

シベリア極東地域においては、ロシア科学アカデミーシベリア支部やロシア科学アカデミー極東支部、ロシア科学アカデミー北東アジア総合研究所、極東国立大学、ウスリースク教育大学、サハリン教育大学によって調査研究が進められた。

この時期の研究は、これまでの蓄積の上にたって総合的にシベリア地域の細石刃文化の様相を検討できるようになった点、また地質学的分析や動物遺存体、古環境学的分析が提示され、これ以降の研究の枠組みを形成した点を研究の到達点として評価できるであろう。地質学的研究としては、すでにGromovによって確立されていた枠組みを発展的に継承したTsejtlin, S.M.やYamskikh, A.F.の研究(Tsejtlin 1979, Yamskikh 1969)が挙げられる。さらに地質学の成果を古気候変動の分析へと結びつけたものとしてはKind, N.V.による論考がある(Kind 1974)。一方、動物遺存体に取り組んだ研究としては Ermolova, N.M.や Ovodov,N.D.による研究が提示されており(Ermolova 1971, 1978, Ovodov 1975)、シベリアにおける細石刃文化期の古環境復原、生業活動の復原に重要な資料を提供した。

1980年代までに蓄積された地域ごと調査研究の動向や資料の集成は、段階的に取りまとめられており、シベリア地域の状況を概観するのに有益である(Abramova et al. 1991、Astakhov 1986、Petrin 1984、Okladnikov and Kirillov 1980、Mochanov and Fedseeva 1983, 1991)。広く北アジア地域の集成を図ったものとしては、この時期に刊行された『ソ連邦の考古学』の第1巻となった『ソ連邦の旧石器(Paleolit Sibirii)』(1984)と『世界の旧石器』シリーズを構成する1冊として刊行された『コーカサスと北アジアの旧石器(Paleolit Kavkaza i Severnoj Azii)』(1989)を挙げることができる。ともにシベリアに関しては、Abramovaによって執筆されており、シベリアの石器群が要点を得て集成されている。

1-6. 新たな研究の方向性の模索

1980年代以降のシベリアにおける細石刃文化研究は、地域的多様性の把握、細石刃剥離技術の分析、遺跡単位での生業活動、生活行動様式の復元的研究が目指されるようになる。

シベリアにおける細石刃剥離技術の研究は、先に見たようにPanichikinaによる体系的な石核の形態学的研究に始まり、シベリア地域独自の分析と分類がMedvedevやAbramovaによって行われてきた(Medvedev 1966, Medvedev et al. 1974, Abramova 1971)。地域的様相が明らかになるにつれ、シベリア地域の細石刃技術には、大きく中部シベリアを境にした地域性(アンガラ川流域以東とエニセイ川以西という区分)が存在することが明らかにされている。シベリア東部地域に見られる細石刃技術は、広く細石刃核成形過程に共通性が認められ、1960年代から70年代に日本列島において確立された細石刃技術の復元仮説と対比可能であり、北部中国や朝鮮半島にも類似した製作技術や細石刃核の形態を確認できる。このためシベリア東部地域では、大まかに円錐形とクサビ形に大別し、クサビ形については、日本列島において確立された名称を記載に際して併記したり、技術伝統に触れたりする傾向が見られるようになってきている(例えばDerevyanko et al. 1998, D'yakov 2000, Kuznetsov 1983,1992 など)。また北米への移住との関わりからアラスカ地域の細石刃石器群との対比も見られる(Slobodin and King 1999, Slobodin 2001 など)。

一方でエニセイ川以西のシベリア西部地域においては、東部と異なり変異に富んだクサビ形細石刃核が製作されており、東部におけるように個別具体的な型式や技術が設定されることはなされていない。クサビ形細石刃核が一括して取り扱われ、これに小口型や円錐形の細石刃核が加わり西部地域の細石刃文化を形成している(Drozdov and Artemyev 1993 など)。シベリア地域の細石刃製作技術に関する研究は、大きく東西、二つの地域に分かれる形で研究が進められてきているとみなせよう。

生業活動や遺跡内活動に関する復元的研究もシベリア地域の遺跡研究の特徴として指摘できる。この背景には極東地域を例外として、シベリア地域の大半で遺跡から良好な状態で出土する動物依存体の存在がある。この種の研究の萌芽は、1896年のKashenko,N.F.によるトムスク遺跡の発掘に遡る。トムスク遺跡においては、石器と共伴するマンモス骨の出土状況を観察する目的で平面発掘が実施された。また1919年からのPetriによるヴェルホレンスク山遺跡の発掘調査も石器群と動物依存体との関係をさぐる目的でグリット発掘が採用されている。以後マリタ、ブレチ遺跡などにおいて住居遺構が確認されたことも影響して、シベリア地域の細石刃文化期の遺跡調査においては遺跡内の活動や生業活動の復元が試みられてきた。

しかしながら、現段階にいたるまで出土した動物依存体を積極的に分析対象とした研究は多いとはいえない。細石刃文化期の遺跡において複数の生活面の累積、動物依存体の依存度を活用した季節性の復元的研究は、Ineshin, E.M.らの研究にとどまっている(イネーシン・加藤 1993、Ineshin 1993 など)。この背景には、動物考古学の領域での研究者が育たないことがある。遺跡内の活動復元としては、石器の接合作業から遺跡内の活動復元を行う試みはわずかではあるが実施されている。代表的な研究としてGrechikina, T.Yu.によるココレヴォ1遺跡の分析や、Vasl'ev, S.A.によるマイナ遺跡とウイ1遺跡での研究を挙げることができる(Grechikina 1986, Vasi'ev 1991)。生活遺構に関しては、住居址や炉址が数多く検出されておりこれに関した研究も著されている。住居址に関する報告としては、Aksenovによるマカロヴォ2遺跡検出の住居址があり(Aksenov 1974)、バイカル

東岸においてもKonstantinovによってストゥジュノエ1遺跡などで住居址が報告されている(Konstantinov et al. 1985)。また炉周辺の活動の復元的研究としては、Astakhovによるガルバーヤ遺跡における検討(Astakhov 1986)、コンスタンチーノフによるウスチ・メンザ遺跡の分析(Konstantinov 1987)、Vasl'evによるマイナ遺跡やウイ1遺跡の分析(Vasl'ev 1991, 1996)などを挙げることができる。

1980年代に増加した調査事例を基礎としてシベリア地域の細石刃文化に関する研究は、多様な方向性をもって展開しつつある。また1991年のソ連邦の崩壊以降、シベリアの細石刃文化に関する論考が英文で報告される傾向が増加して来ていることも大きな変化である(Vasl'ev 2001, Slobodin 2001)。West,F.H.の編集によるAmerican Beginingにおいては、Derevyanko, Kuznetsov, Slobodin,Kiriyak,Mochanov, Fedseevaがシベリア極東地域、北東アジア地域の細石刃文化の概要を報告している(West 1996)。近年ではロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所がロシア語と英語の二ヶ国語で雑誌を刊行しておりシベリア地域の研究動向が英文で入手できる状況となってきた。当該地域の研究の情勢は新たな段階を迎えているのである。

2．シベリアの細石刃石器群の様相

シベリアの細石刃文化については、近年概説書が発行されたこと(Derevyanko et al 1994, Derevyanko 1998a)や日本人研究者による集成と検討(木村 1998、小畑 2001)が行われてきており、その様相は広く知られているところである。またシベリアの細石刃石器群については、筆者もなんどか触れてきた(加藤博 1993,1996など)。

シベリアにおける細石刃文化の諸問題は、その起源をどこに求めるのか、また後氷期の気候変動の中で土器の出現という新たな技術革新をいかにして成し遂げたのか、という開始期と終末期に重要な課題を抱えている。また系統性については、北東アジア地域への拡散と引き続いての北米大陸への拡散という人類集団の拡散と移住の問題も内包していることから様々な地域の研究者を巻き込んで議論されてきた主題でもある。

近年では、特にその起源と関係する新たな資料の検出がなされ、石器群自体の変遷観にも新たな解釈が提起されている。この問題は細石刃石器群のみの問題ではなく、後期旧石器石器群全体の技術体系とも深く結びついており、(1)シベリア地域における中期旧石器段階の石器群と後期旧石器段階の石器群との系統関係、(2)後期旧石器段階の石器群の技術基盤の構造と遺跡単位での技術の表現型の問題、(3)これまでの技術発展(進化)的視座の見直しなど石器製作技術の問題のみではなく、現代型人類集団の適応行動にも議論が及ぶことは必至である。

とりわけ重要な問題は、細石刃石器群の起源をめぐる問題である。本論では、紙数の関係上シベリアにおける細石刃石器群の詳細な全体像を描きだすことは困難であり、その起源の問題と巨視的な意味での地域性と石器群の変遷に絞って述べていきたい。

2-1. シベリアにおける第四紀編年

まず石器群の年代学的位置づけの基礎となる第四紀編年を提示しておく。シベリアの第四紀の堆積層は、厚く堆積したレス層と古土壌層の互層が温暖期と寒冷期のサイクルを反映し、気候変動を知る良好な資料となっている。シベリアにおける上部更新世の編年は、レス層と古土壌層の互層を基準として温暖期、寒冷期の変遷として示されている。各シベリア地域第四紀堆積層の基本的変遷については、第4図に示した

		Siberian Glacial stage	Climatical-Stratigrafical stage	Age Kyr	δ^{18}Ostage
完新世				<10ka	1
上部更新世	Würm	サルタン氷期 (22-10ka)	ノリリスク寒冷期	11.4-10.3ka	2
			タイミール温暖期	11.8-11.4ka	
			寒冷期	12.2-11.8ka	
			ココレヴォ温暖期	13-12.2ka	
			ニャバン寒冷期	15-13ka	
			休止期	16-15ka	
			ギダン寒冷期	22-16ka	
		カルガ亜間氷期 (カルギン) (50-22ka)	リボフスク・ノヴォセロヴォ温暖期	30-22ka	3
			コノシェリスク寒冷期	33-30ka	
			マオヘトスク温暖期	43-33ka	
			初期寒冷期	45-43ka	
			初期温暖期	50-45ka	
		エルマコヴォ氷期 (ズィリャンカ) (100/73-50ka)	ムルクタ寒冷期	73-50ka	4
	Riss-Würm	カザンツェヴォ間氷期		130-110/73ka	5

第1図　シベリア地域の第四紀編年

とおりである。が広大なシベリア地域すべてが一様の堆積環境にあるわけではない。西シベリア平原地帯における堆積状況とバイカル湖周辺地域における堆積状況との間には差異も存在する。マクロな視点で第四紀の環境変動を考える際には、地域ごとの変異を理解する必要がある。例えば、タイミール地方では3期の温暖期と2期の寒冷期の計5段階に細分されている。一方西シベリアの平原地域においては3段階に細分されて最近報告されたエニセイ川中流域においても同様に前半の温暖期と中盤のコノシェリスク寒冷期、そして後半の温暖期との3段階に細分されている(Drozdov and Chekha 2003)。よりシベリア東部のバイカル湖沿岸地域では、レス層と温暖期に形成されたチェルノーゼムタイプの埋没土壌が確認され、2段階に細分されている。このような地域的な差異は、後続するサルタン氷期においても同様に存在することを指摘しておきたい。

第四紀における人類集団の活動の痕跡もこれらの堆積物中に含まれており、石器群の変遷は、これらの第四紀の地質学的編年の枠組みの中で捕らえることができる。つまり石器群が帰属する堆積層がレス層であるのか、古土壌層であるのかによって位置づけが可能となるのである

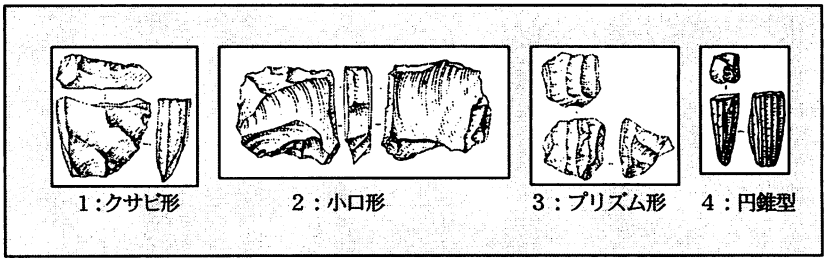
2-2. 細石刃石器群の出現年代

細石刃核が後期旧石器の初頭段階に遡る可能性は、はやくから提起されていた(Medevdev 1983, Akcenov 1986)。さらに1980年から調査が開始されたアルタイ地方のカラ・ボム遺跡の石器群に小口面から小型の石刃を剥離している石核が存在することが指摘され細石刃石器群の起源の一つとして注目する見解も提起された(Petrin and Chevarkov 1992)。しかしながら明確に細石刃石器群との系統関係を見出せないまま議論の進展は見られなかった。筆者もこの点については、1993年段階でも1996年段階においても細石刃石器群の成立過程を石刃石器群の技術的変遷過程の中で、石器の小型化という動きから細石刃が出現するとみなしてきた。またシベリアの旧石器文化について体系的に考察した木村英明氏の見解でも、細石刃石器群の起源はマリタ段階に求めており、細石刃自体の出現も23kaB.P.を遡ることはないという見解を提示している(木村 1993)。

現在、シベリアにおける細石刃の起源は、30ka B.P.を遡る細石刃核(細石核)の事例が増加してきており、再検討する段階にきているといえよう。どのように細石刃石器群は成立したのか、細石刃核の製作技術はどのような技術的基盤において成立しているのかについて検討する必要がある。

2-3. 細石刃剥離技術の変異：細石刃核の類型

細石刃核の出現過程をめぐる議論では、クサビ形細石刃核の祖型をどこに辿るかが論じられてきた。現在の様相は、技術進化的な流れでは困難な状況を提示している。本論では、まず最初に細石刃核の類型化を整理し、段階ごとの出現過程を見てみたい。



第2図　シベリアにおける細石刃核の形態学的類型

出土地：1：ウリャズィ遺跡 2：シュリョンガ遺跡 3：コロレヴォ I 遺跡 4：アヨシュカ III 遺跡

シベリアの細石刃文化研究は、細石刃核の形態学的特徴に注目する中で分類、検討が行われてきた。石核スクレーパー(Petri 1923, Okladnikov 1959)やゴビ型石核(Okladnikov 1951)、そして小口型石核(Ranov 1962)と呼ばれ関心を集めた細石刃核は、Abramova やMedvedev らによる体系的分類を経て(Abramova 1971,1986, Medvedev 1966, Medvedev et al. 1974)、その多様性や地域性が存在することが明らかにされてきている(Drozdov and Artemyev. 1993)。一方で細石刃核の形態に基づく分類法の限界については、細石刃剥離技術の検討が進み細石刃核素材から細石刃剥離作業そして残核の形成にいたる復元的研究が進む中で指摘されている。細石刃核自体の変異や細石刃のみではなくその他の石器群を構成する器種やその素材製作過程と細石刃核製作過程とがどのように技術体系として関与しているかとい

う視点の有効性と重要性が指摘されている(白石 1993)。しかしながらシベリア地域においては、細石刃剥離技術の体系的理解や復元的研究は少なく(Lapnina and Medvedev 1991,など)、形態に基づいた理解がいまだ主流を占めている現状がある。

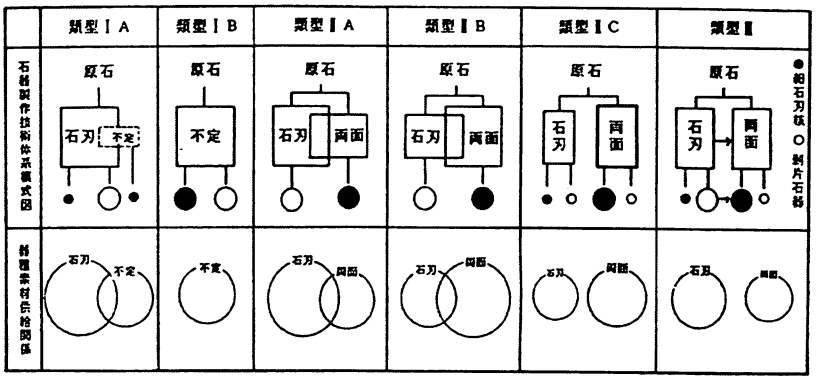
シベリアにおける細石刃核は、その形態的特徴において①クサビ形細石刃核(Panichikina 1959 ほか)、②小口型細石刃核(Ranov 1961)、③プリズム形細石刃核(Medvadev et al. 1974)、④円錐形(Abramova 1971)に細分でされてきた。ここではこれらの記載を統一するために以下のように全て「形」として表記し直すこととする。クサビ形と小口形の違いであるが、この両者の理解にはこれまでしばしば定義や表記に混乱が見られた。本論ではPanichikinaやRanovによるそれぞれの定義に戻り、細石刃核の底部に竜骨部(keel: wedge shaped)を明確に二次調整によって作り出しているものをクサビ形細石刃核(wedge shaped core)とし、底部に竜骨部を作出せず、石核の短部の小口面より細石刃剥離を行っているものを小口形細石刃核(butt core: butt ended core)と呼称する。

次にこの形態学的類型内の細分についてである。円錐形、プリズム形の2類型については、これまでも細分はなされてきていない。本論においても細分は試みる必然性を見出せないため行わないこととする。ただし小口形細石刃核とクサビ形細石刃核については、細分を行っておきたい。クサビ形細石刃核については、いくつかの細分がなされている。その検討の歴史を辿ると、当初は単に残核の形態に基づいた細分が試みられ(Abramova 1971,1986, Medvedev1966, Medvedev et al 1974)、近年はその素材と細石刃に際する打面の作出手法の差異によって細分案が示されている(Kuznetsov 1984,1992、Drozdov and Artemyev 1993)。しかしながら、ロシア側における分類では、いまだ残核である石核の形状に分類の比重を置く傾向が指摘でき、製作技術の差異を表現できていない。一方、石核素材と細石刃剥離に際する打面作出方法に基づいたシベリア地域のクサビ形細石刃核の細分は、木村英明氏による分類案が提示されている木村 1998)。しかしながら白石典之氏が指摘したとおり(白石 1993)、クサビ形細石刃核の細分は、確かに石核素材や打面作出方法によって細分が可能であるが、ひとつの「文化層」から異なる素材や異なる打面作出方法が確認できる。そのため、これに基づいた「細石刃核」の型式設定や技法・技術の設定から人間集団を考察する上での技術が導かれるかどうかに疑問が残る。よって筆者は諸説の折衷ではあるが、石核素材の準備段階で両面調整石器を準 備するか否か、打面作出に際して削片を剥離するのか、あるいは細かな調整によって作出するかという点のみでの細分を本論では提示した

細石刃核の形状	石核素材	石核調整	細石刃剥離打面	例	類例
小口形	礫・剥片・石刃	稀	非削片系		小口形1類
小口形	礫・剥片・石刃	稀	削片系		小口形2類
クサビ形	礫・剥片・石刃	稀	非削片系		クサビ形1類
クサビ形	礫・剥片・石刃	稀	削片系		クサビ形2類
クサビ形	両面調整石器	入念	非削片系		クサビ形3類
クサビ形	両面調整石器	入念	削片系		クサビ形4類

第3図　小口形・クサビ形細石刃核細分案

い。広いシベリア地域の細石刃文化の時空間的把握には、この分類基準が最も全体的様相を理解しやすいと考えている。このような視点から細分したものが第３図に示したものである。これまでも細石刃技術の検討として、その細石刃を生み出す技術に研究の関心が向けられてきたが、再度、細石刃を生産する技術が石器群を構成するその他の器種生産とどのように関わっているのか、つまり石器群自体の剥片剥離技術、道具製作技術の体系的把握を検討することが必要となっている。シベリア地域の細石刃石器群すべてを本論において検討することは、時間的余裕からも紙数の関係からも不可能である。詳細は後日に稿を改めて報告することでその責務を果たしたい。ここでは代表的な石器群を取り上げて検討することから細石刃核の形態上の差異との持つ便宜的に細石刃生産技術と他の器種製作技術とが同一の石器製作技術体系に含まれているか、否かで区分したい。この種の視点として白石典之氏による検討案を採用したい(白石 1993)。白石氏は、石器群における石器製作技術体系を石刃技術、両面調整技術、これら以外の不定の剥片剥離技術に区分し、類型Ⅰから類型Ⅲを設定した。さらに石器製作技術体系と器種素材供給関係からこれら３つの類型を細分し、６つの類型を設定している。本論ではこの類型と上述した細石刃核の形態学的特徴と組み合わせて検討したいと思う。



第４図　細石刃石器群の技術体系模式図

(出典 白石 1993,第１図より転載)

2-4. 第四紀編年における細石刃石器群の位置づけ

シベリアにおける細石刃石器群は、上述した第四紀編年の中で位置づけることが可能である。第１表は、シベリア地域を西シベリア、東シベリア、ザバイカル、シベリア北東部、シベリア極東部に区分し、各地で確認された細石刃石器群を位置づけたものである。現段階において細石刃石器群の出現年代をめぐってこれまで想定されていたよりも古い年代値が提起されているのは、西シベリアの山地アルタイ地方と東シベリアのバイカル湖周辺地域である。その年代はＯＩＳステージ３に遡るものである。

第１表　第四紀編年における細石刃石器群の位置

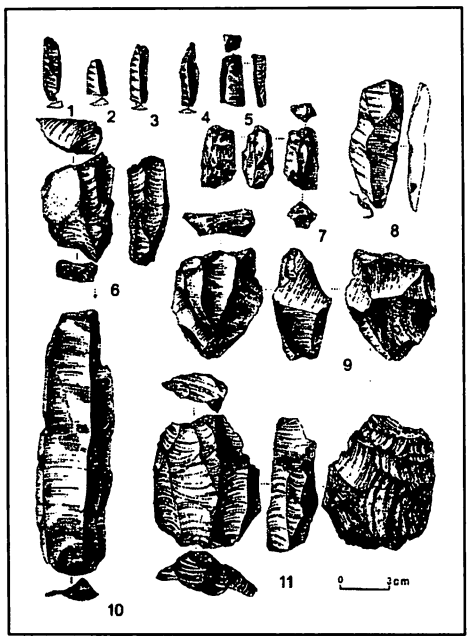
		西シベリア	東シベリア	ザバイカル	シベリア北東	極東
サルタン	ノリリスク寒冷期(11.4-10.3ka)	マイナ(2層) ボリショイ・スリズネヴァ(2-12層) ウリャズィ	ウスチ・ベラヤ(2-13層) ソスノヴィ・ボル(2層) ベルローガ(7-8層) バリショイ・ヤコリ1(3層)	オシュルコヴォ ソハテノ上層 ウスチ・メンザ2	ウシュキ(6層)	ゴルバトカ3(上層) イリスタヤ1 セレムジャ3-4期 イムテン
	タイミール温暖期(11.8-11.4ka)	ノヴォセロヴォ6遺跡 タシュティク1 リストヴャンカ(1-4層) アエシュカ		ストゥージュノエ1 ウスチ・キャフタ	ノーヴィ・レチョン	ウスチノフカ6 ゴンチャルカ1 フーミ
	寒冷期(12.2-11.8ka)	タシュティク1(1層) ココレヴォ3 ココレヴォ4	マカロヴォ1 マカロヴォ3 ウスチ・カレンガ		ヴェルフネ・トロイツカヤ	スヴォーロヴァ4 ガーシャ
	ココレヴォ温暖期(13-12.2ka)	ガルヴァーヤ1(3層) ココレヴォ1(2層) マイナ(3層) ウイ2(0-3層)	ウスチ・ベラヤ(14層) ソスノヴィ・ボル(3層) チェレムシュニク(上層) ヴェルホレンスクⅡ(3層) バリショイ・ヤコリ1(5-9		ベレリョフ	ウスチノフカ4 ゴルバトカ3下層 スヴォーロヴァ3 セレムジャ1－2期 アゴンキⅤ
	ニャバン寒冷期(15-13ka)	リストヴャンカ(7層) タシュティク4、クルタク3 ココレヴォ4下層 アフォントヴァ山Ⅱ(6-7層) マイナ(4層)、ココレヴォ2 ココレヴォ1(3層) ウスチ・カヴァ(後期) リストヴャンカ(3-17層) ストゥリジョワ山(16層)	シュシュキノ2 フェジャエヴォ クールラ3 クールラ1 ウスチ・ベラヤ(15層) バダイ5 チェレムシュニク2		ジュクタイ洞窟(上層)	ウスチノフカ1上層 ソコル
	休止期(16-15ka)	ココレヴォ1(3層) ノヴォセロヴォ7 ココレヴォ4(下層) アフォントヴァ山2(4層)	ソスノヴィ・ボル(5層) クールラ3(下層)	トルバカ(上層)	ジュクタイ洞窟(C層)	ウスチノフカ1下層
	ギダン期(22-16ka)	アフォントヴァ山2(下層) シュリョンカ ウイ1(2層)、クルタク3 マイナ(5層)、リストヴャンカ(19層)モガチノ、トムスク、	クラスヌイ・ヤル(6層) ブレチ マリタ アレクセエフスク ソスノヴィ・ボル(6層)		イヒネⅠ イヒネⅡ ウスチ・ミリⅡ エジャンツィ	
カルガ	リボフスク・ノヴォセロヴォ温暖期(30-22ka)	アファナシエヴァ山 クルタク4(12層) ノヴォセロヴォ13(3層) ウスチ・カヴァ(下層) タラチハ	クールラ2 イギティスキー・ログ1 マリタ(6層)			
	コノシェリスク寒冷期(33-30ka)					
	マロヘトスク温暖期(43-33ka)	ウスチ・カラコル1(10-9層)				
	初期寒冷期(45-43ka)	カラ・ボム8-5層				
	初期温暖期(50-45ka)		マカロヴォ4			

2-5. カルガ(カルギン)亜間氷期の石器群

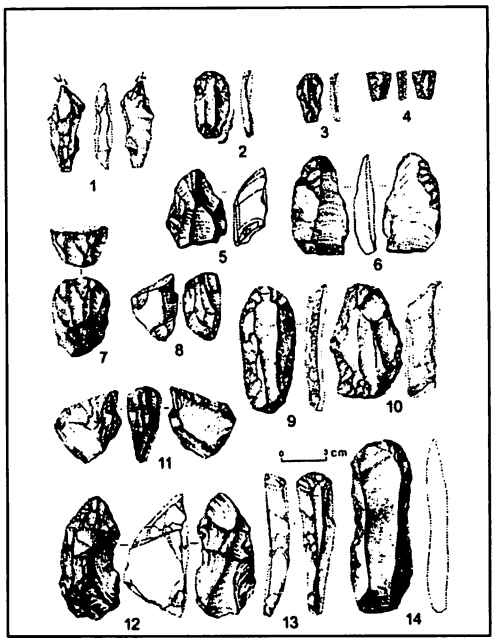
既に指摘したように Petrin らによってカルガ(カルギン)亜間氷期に位置付けられる石器群に小口形の細石刃核が含まれていることが確認されている(Petrin and Chevarkov 1992)。カルガ亜間氷期前半期に属する石器群は、中期旧石器段階の石器群から後期旧石器段階の石器群への移行期として理解され、これまで「ポスト・ルヴァロワ」(Okladnikov 1981)、「カラ・ボム段階」(Petrin 1991)、「マカロヴォ段階」(Medvedev 1983, Aksenov 1989)と呼ばれてきた。年代としては40ka B.P.から30ka B.P.ないしは50kaから30ka B.P.とみなされてきた。

細石刃関連資料を出土している遺跡は、アルタイ山地のカラ・ボム遺跡(Derevyanko et al 1998a)やウスチ・カラコル1遺跡(Dere-vyanko et al.1998b)である。これらの遺跡においては、厚手の石刃素材のスクレーパー類や彫刻刀型石器に伴って、幅1cmから幅3cm程度の細石刃が出土しており、これとともに細石刃を剥離した小口形やプリズム形、クサビ形の細石刃核が出土している。

カラ・ボム遺跡の細石刃核の類型は、小口形1類、小口形2類(第5図6)であり、これらから剥離された「細石刃」も出土している(第5図1−5)。



第5図　カラ・ボム遺跡6・5層出土石器
(出典 Derevyanko et al. 2000Fig.9 より転載)



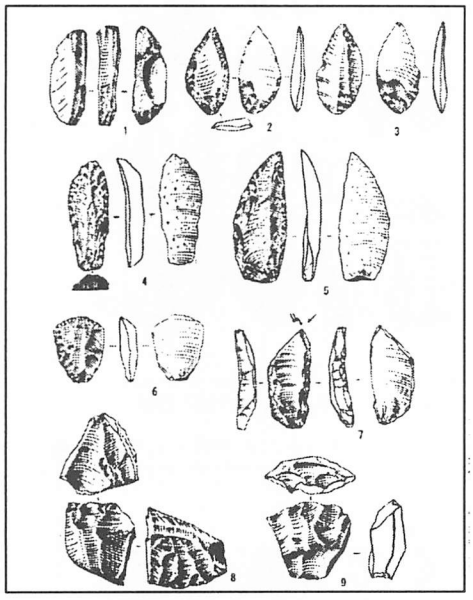
第6図　ウスチ・カラコル1遺跡11−9層出土石器
(出典 Derevyanko et al. 2000Fig.14 より転載)

ウスチ・カラコル1遺跡においては、厚手の石刃を素材としたスクレーパー類や彫刻刀型石器とともに小口形1類と同2類の細石刃核(第6図8,11)、プリズム形細石核(第6図7)、クサビ形1類の細石核(第6図12)が出土している。カラ・ボム遺跡とウスチ・カラコル1遺跡から出土した石器群の年代は、それぞれ放射性炭素年代と電動スピン共鳴法(ESR)によって測定されている。カラ・ボム遺跡6層から得られた炭の年代値は、ca43200±1500yrs B.P.(GX-17597-AMS)である。ウスチ・カラコル1遺跡においては炭からca35100±2850yrs B.P.(SOAN-3259)、9B層：ca33400±1285yrs B.P.(SOAN-3257)；ca29860±355yrs B.P.(SOAN-3358)；ca29720±360(SOAN-3359)という測定値が得られている。一方9B層から得られたＥＳＲ年代測定値は50000±1200年前とより古い年代を示している。石器群の石器製作技術体系は、比較的厚手の石刃によって各種のスクレーパーや彫刻刀形石器の素材が供給されており、類型ＩＡとなる。

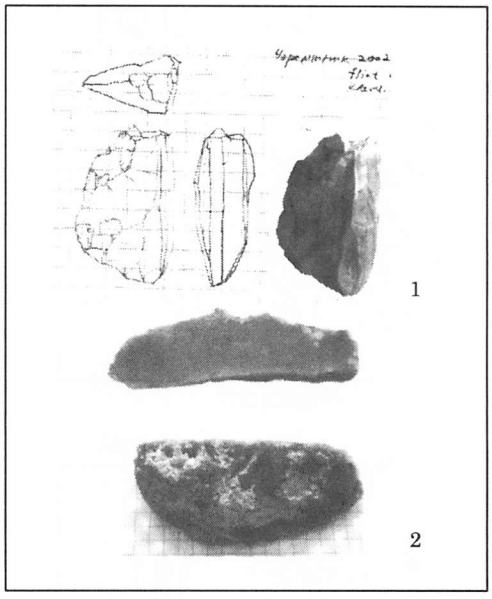
シベリア東部においてこの段階に位置づけられる石器群としては、レナ川上流域に位置するカルガ亜氷期段階

の石器群であるマカロヴォ段階石器群に小口形の細石刃核が伴うことが指摘されている(Akcenov 1978, Medvedev 1998)。このマカロヴォ段階の石器群は、イギテイ浜遺跡、マリタ遺跡(下層)、マカロヴォⅣ遺跡などがある。また2003年度より調査を開始したチェレムシュニク1遺跡下層石器群、バリショイ・ナリン1東遺跡(イルクーツク大学と北海道大学との共同調査、未報告)においてもカルガ亜間氷期の古土壌層から出土する石刃石器群に小口形細石核が共伴している。石器群の様相は西シベリアにおける石器群と共通しており、エンドスクレーパー、彫刻刀形石器の素材は石刃によって供給されている。大型スクレーパーについては背面に礫面を残すものもあり、不定形の剥片を素材としている。細石刃核の類型としては、マリタ下層のものは小口形2類、チェレムシュニク1遺跡下層のものはクサビ形3類、バリショイ・ナリン1遺跡では、小口形1類やクサビ形1類、同2類も見られる。

マカロヴォⅣ遺跡の石器群は、地質学的所見から 50ka-35kaB.P. という年代が想定された。またＡＭＳによる年代測定値としては、出土した炭から ca39340±1300yrsB.P.(AA-8878), ca27706±370yrs B.P.(AA-8879), ca>39000 yrsB.P.(AA-8880)が得られている(Goebel and Akcenov 1995)。石器群の石器製作技術体系は、類型ＩＡに分類される。



第7図　マカロヴォ段階の石器群
1,9:マリタ、2-3,6:マカロヴォⅣ、3,5,7,8:イギテイ浜
(出展Medvedev 1998 fig.32-43より)



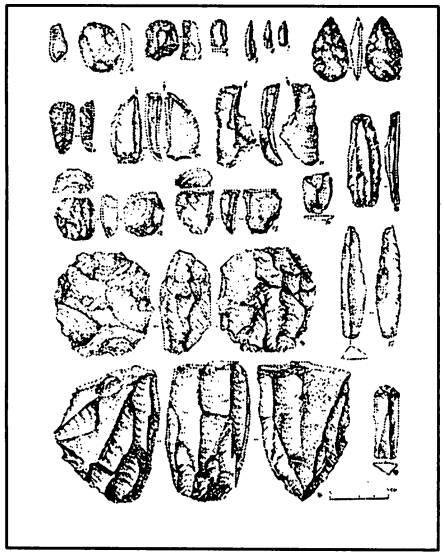
第8図　カルガ亜間氷期の細石刃核・素材
1:チェレムシュニク下層　2:バリショイ・ナリン1遺跡

2-6. カルガ終末期段階の石器群

カルガ終末期の石器群は、これまでマリタ・ブレチ並行の石器群とみなされてきたものである。西シベリアと東シベリア地域において確認されている。現在では山地アルタイ地方のアヌイ2遺跡13-11層、エニセイ川上流域のウイ1遺跡第2文化層石器群、エニセイ川中流域ではタラチハ遺跡、アファナシエヴァ遺跡、ノヴォセロヴォ13遺跡3層石器群、アチンスク遺跡、クルタクⅣ遺跡12層などがあり、アンガラ川流域では、マリタ遺跡下層、イギテイスキーログ1遺跡が、バイカル湖北岸のクールラ下層が位置づけられる。この中でクールラ下層は、年代的に次の段階である可能性も残されている。遺跡数は増加してきている。これらの石器群の特徴は、石刃を素材としたスクレーパー類や彫刻刀形石器、剥片素材の周辺調整、両面調整の小型尖頭器に二次調整をもつ幅1cmから1cm未満の細石刃が出土している。細石刃核の類型としては、西シベリアでは小口形1類、同2類、

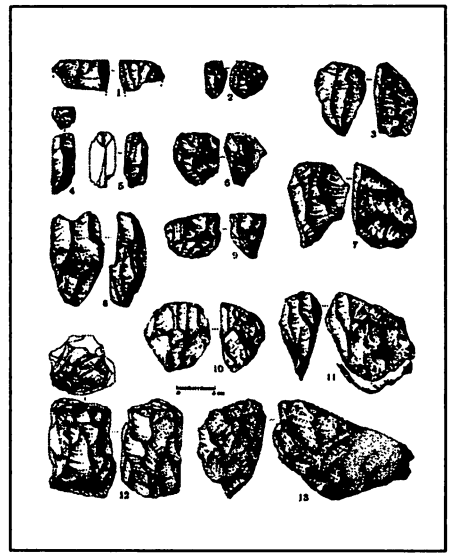
プリズム形、クサビ形１類、クサビ形３類が認められる。石器群の石器製作技術体系はほぼ類型ＩＡに区分される。東シベリアでは小口形１類、クサビ形３類と同４類が確認できる。イギテイスキーログ１遺跡の石器製作技術体系は類型ＩＡであるが、クールラ遺跡下層は類型ＩＢとなる。

測定された年代値は、クルタク４遺跡12層(炭)ca27470±200yrsB.P.(LE-2833)、ノヴォセロヴォ13遺跡３層(炭)ca22000±700yrs B.P.(LE-3739)、ウイ１遺跡第２文化層(炭)ca22830±530yrsB.P.(LE-4189)であり、アヌイ２遺跡 11 層 ca23431±1547yrsB.P.(IGAN-1430),12 層 ca22610±140yrsB.P.(SOAN-2862)、ca24205±420yrsB.P.(SOAN-3006),13 層 ca27125±580(SOAN2868)である。イギテイスキー・ログ１遺跡では ca23760±1100yrsB.P.(SOAN-407)、ca21260±240yrsB.P.(LE-1590),ca23508±250(LE-1592)、クールラ下層石器群は、ca24060±5700yrsB.P.(SOAN-1397)という年代が得られている。



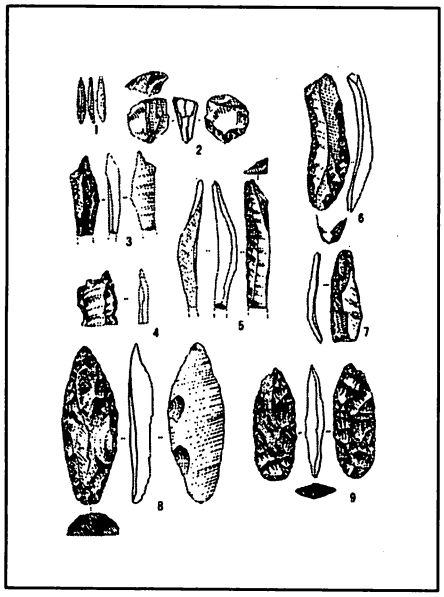
第９図　タラチハ遺跡石器群

(出典 Abramova 1991 Fig.40 より転載)



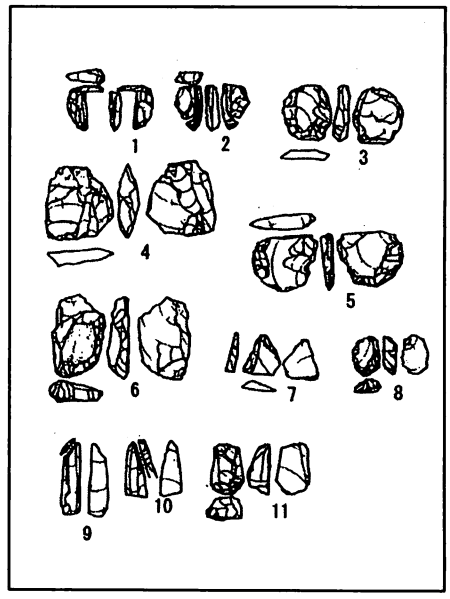
第10図　アヌイ２遺跡13-12層石器群

(出典 Derevyanko 1998 Fig.4 より転載)



第11図　イギテイスキー・ログ１遺跡石器群

(出典 Medvedev 1998,Fig.97-98 より転載)



第12図　クールラ下層石器群

2-7. サルタン氷期ギダン期段階の石器群

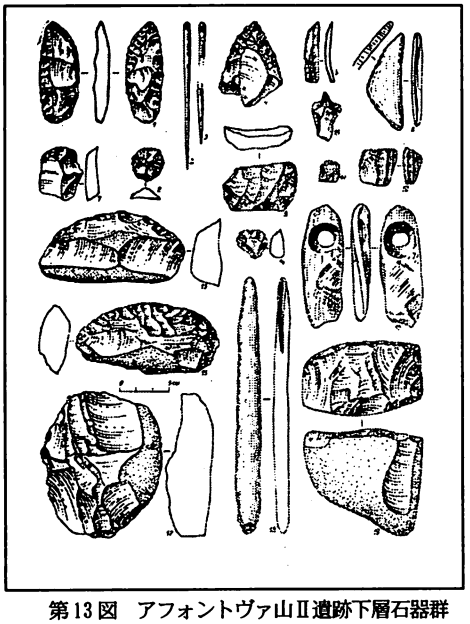
比較的温暖なカルガ亜氷期が終了すると、ＬGMの寒冷期訪れる。シベリアにおけるギダン寒冷期であり、で22-16ka に位置づけられる。この段階には細石刃石器群がこれまでの山地アルタイやエニセイ川流域、バイカル湖周辺地域からシベリア北東部へ拡大した時期である。この段階に属する石器群としてエニセイ川流域においては、リストヴャンカ遺跡19層、アフォントヴァ山Ⅱ下層、マイナ5層、シュリョンカ遺跡などが挙げられ、西シベリア平原のトムスク遺跡やモガチノ遺跡もこの段階に属する。東シベリアではマリタ遺跡、ブレチ遺跡がこの段階に属する。このほかアレクセエフスク遺跡、バリショーヴァⅢ遺跡、クラスヌィ・ヤル１遺跡下層もこの段階の石器群である。マリタ段階の石器群に小型の石刃が伴うことは、はやくから指摘されてきたが、同じ段階の遺跡が増加し、この段階においても細石刃とみなしうるものが安定して生産されているとみなしてよいであろう。

また北東シベリアヤクーツク地方へも細石刃石器群の拡散が認められる。エジャンツィ遺跡、ウスチ・ミリⅡ遺跡、イヒネⅠ遺跡、イヒネⅡ遺跡などの遺跡である。

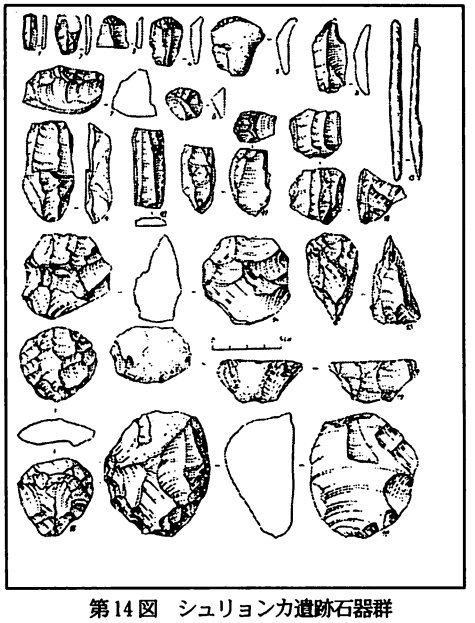
細石刃核の類型としては、マリタ段階の石器群にはプリズム形、小口形１類、クサビ形３類が見られる。クラスヌィ・ヤル１遺跡では、クサビ形１類、クサビ形２類、クサビ形３類が見られる。北東シベリアの石器群では、ウスチ・ミリⅡ遺跡の細石刃核はクサビ形１類、クサビ形４類が見られ、エジャンツィ遺跡ではクサビ形１類とクサビ形３類、クサビ形４類が見られる。イヒネⅠ遺跡、イヒネⅡ遺跡の細石刃核はクサビ形４類である。

この段階の石器群の石器製作技術体系としては西シベリア地方のアフォントヴァ山Ⅱ遺跡下層が類型ＩＢ、シュリョンカ遺跡も石刃素材の石器類をもつが、剥片素材の道具類が目立つため類型ＩＢに区分される。東シベリアの石器製作技術には類型ＩＡ類と類型ＩＢ類とが存在する。クラスヌィ・ヤルは類型ⅡＡに区分できる。北東シベリアの石器群は、石器素材の供給においては石刃の占める割合が低く、剥片類をもっぱら素材として用いている特徴があり、類型ＩＢに分類できる。

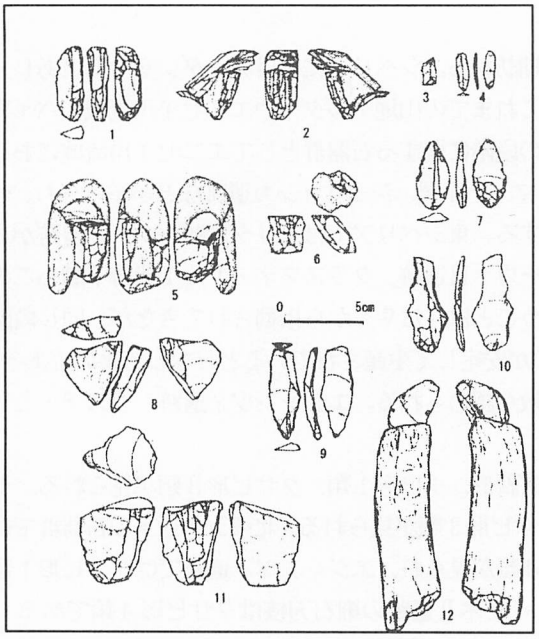
この段階の石器群の年代測定値は、アフォントヴァ山Ⅱ遺跡下層(炭)ca20900±300yrsB.P.(MO-343)、シュリョンカ遺跡(骨)ca20100±100yrsB.P.(GIN-2863)、マリタ遺跡からはca23000±5000yrsB.P.(-)、クラスヌィ・ヤル１遺跡下層から ca19100±100yrsB.P.(GIN-5330)が得られている。ウスチ・ミリ遺跡における放射性炭素年代は、30ka を超える年代値を示され石器群の位置づけに関する議論を巻き起こした。



第13図　アフォントヴァ山Ⅱ遺跡下層石器群
(出典 Abramova et al 1991, Fig.49より転載)

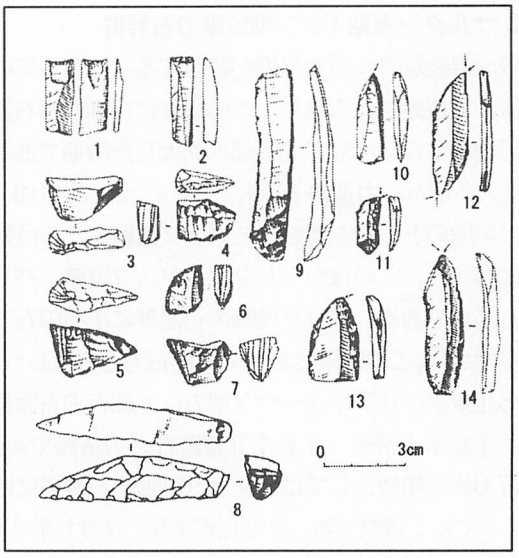


第14図　シュリョンカ遺跡石器群
(出典 Abramova et al 1991, Fig.47より転載)



第15図　ギダン期段階の石器群(1)

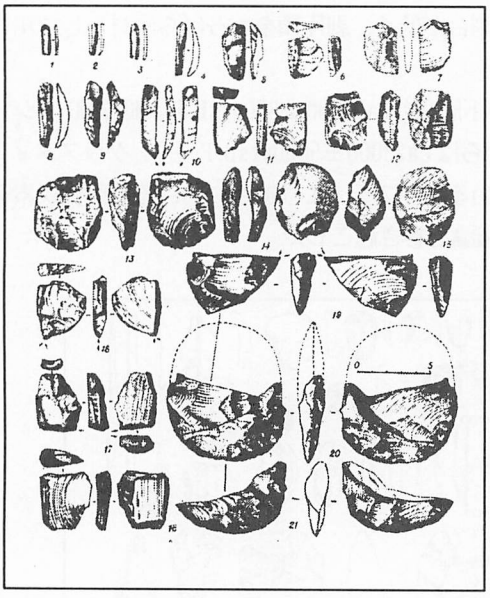
1,7,9-12 :マリタ、2-4 :アレクセエフスク、５－６：バリショーヴァⅢ



第16図　ギダン期段階の石器群(２)

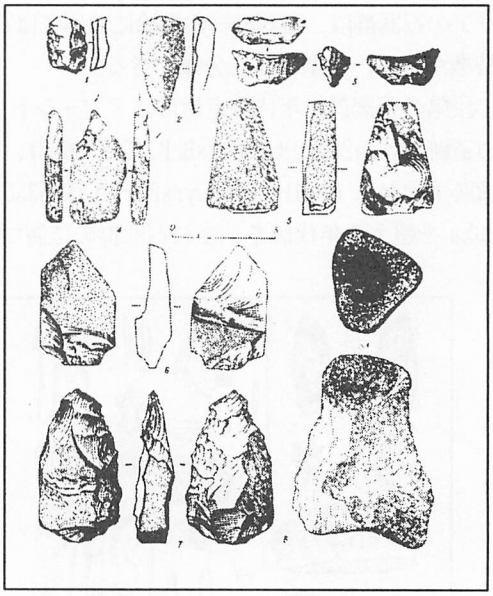
1-14 :クラスヌィ・ヤル１遺跡下層

(出典 Medvedev 1998,Fig.121-122 より転載)



第17図　エジャンツィ遺跡石器群

(出典 Mochanov 1977,Fig15)



第18図　ウスチ・ミリ遺跡石器群

(出典 Mochanov 1977,Fig.9 より転載)

2-8. 休止期からニャパン期段階以降の石器群

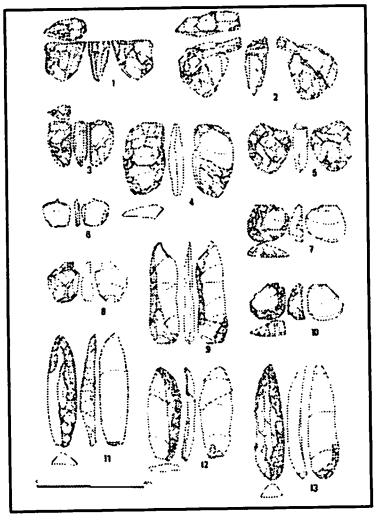
16-15ka のサルタン氷期の休止期から 15-13ka のニャパン寒冷期にかけては、細石刃石器群はシベリア全土に拡散する。シベリア極東地方でも細石刃石器群が確認されており、石器群の様相は地域的特徴を強く示す傾向を見て取れる。特にエニセイ川流域以西の細石刃石器群とバイカル湖沿岸地域以東の細石刃石器群では、細石刃核の形態的特徴、石器群の組成などに差異が現れる。

エニセイ川上流域ではマイナ遺跡、ガルバーヤ１遺跡などで良好な細石刃石器群が確認されている。エニセイ

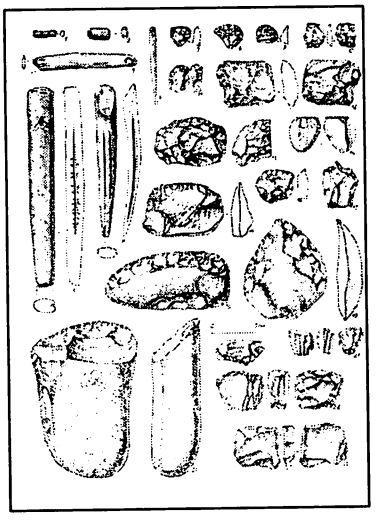
川中流域には数多くの遺跡が分布し、遺跡群を構成している。ココレヴォⅠ遺跡、ココレヴォⅡ遺跡、ココレヴォⅣ遺跡、ノヴォセロヴォⅦ遺跡、リストヴャンカ遺跡などが代表的な遺跡である。アンガラ川流域やバイカル湖沿岸地域、レナ川上流域に遺跡群が形成されている。アンガラ川流域では、ソスノヴィ・ボル遺跡５層、バダイⅤ遺跡、チェレムシュニクⅡ遺跡などが代表的な遺跡であり、バイカル湖北岸にはクールラ遺跡群がある。レナ川上流域の遺跡としては、シュシュキノ遺跡などがこの段階を代表的する石器群である。ヤクーツク地方ではジュクタイ洞窟の石器群が代表的な石器群として挙げら、シベリア極東地域においてはウスチノフカⅠ遺跡が代表的な遺跡である。

細石刃核の類型では、エニセイ川以西の石器群において小口形１類、クサビ形１類、クサビ形３類、クサビ形４類が見られ、特にクサビ形３類を主体とする遺跡が多い。バイカル湖周辺地域ではクサビ形１類、クサビ形２類、クサビ形３類、クサビ形４類が見られる。特にクサビ形１類とクサビ形４類が多く分布する。北東シベリアにおいては、クサビ形３類、クサビ形４類が見られる。シベリア沿海州においては、クサビ形１類が見られる。

また石器製作技術体系の特徴としては、西シベリアにおいては、石刃によって各種の石器類の素材を供給する類型ⅠAと、様々な剥片類が石器素材を供給している類型ⅠBの両者が見られる。東シベリアでは類型ⅠBが主体的である。北東シベリアのジュクタイ洞窟遺跡は類型ⅡCに区分でき、シベリア極東のウスチノフカⅠ遺跡はⅠBに区分される。

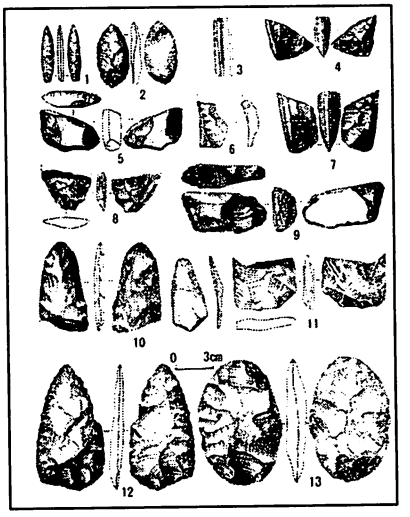


第19図　ココレヴォⅠ遺跡石器群



第20図　ココレヴォⅡ遺跡石器群

(出典 Abramova et al.1991,Fig35)



第21図　ジュクタイ洞窟遺跡石器群

(出典 Mochanov 1977,Fig.2-3)

ココレヴォ温暖期以降のシベリアにおける細石刃石器群は、東西の地域差をさらに拡大させる傾向を強め、温暖期と寒冷期の繰り返しを経ながら後氷期へと変遷していく。細石刃核の類型においては、シベリア西部地域ではクサビ形３類が主体的となり、バイカル湖周辺以東の地域においてクサビ形４類が数多く見られる傾向とは対照的である。しかしながらバイカル湖周辺地域においてココレヴォ温暖期以後の寒冷期(ヤンガードリアスに対比)以後はクサビ形３類が主体となり、これに円錐形細石刃核が加わるようになる。シベリア北東地域やシベリア極東地域はココレヴォ温暖期以降に属する遺跡が多く、多様な細石刃核の類型を伴う傾向を示す。チュクチ半島やベーリング海地域で確認されている遺跡もこの時期のものである。

石器製作技術体系は、西シベリア地域に類型ⅠAや類型ⅡAが見られ、東シベリアから極東地域にかけては類型ⅡB、類型ⅡCが広く見られるようになる。類型Ⅲは北東シベリアから極東地域でその広がりを認めることができる。

3. 細石刃石器群の起源と変遷

3-1. 細石刃技術の出現段階

これまで見てきたように、シベリアにおける細石刃石器群は、その起源をカルガ亜間氷期段階(OIS ステージ3)の石器群にまで遡ることができる。カラ・ボム遺跡の出土状況と年代測定値に従えば、45-43kaB.P.には細石刃技術の祖型を位置づけることが可能である。このようなカルガ亜間氷期における細石刃核の確認によって、これまで想定されてきた細石刃技術の出現過程の仮説、すなわち後期旧石器段階の石刃石器群の成立、さらに石刃の小型化、そして細石刃技術の確立へという技術進化論的な枠組みでの説明は困難となった。カルガ亜間氷期における細石刃核は厚手の剥片などを素材とし、その短部に打面を形成して石核の小口面より細石刃を剥離するものが多い。小口形石核である。またウスチ・カラコル1遺跡では舟形に石核を整形したクサビ形1類の細石刃核も見られる。アンガラ川流域のカルガ亜間氷期段階の石器群にもクサビ形の細石刃核が存在しており、このことより細石刃の出現が地域的な特殊様相ではないことが窺える。カルガ亜間氷期における状況から判断して、出現段階にすでに細石刃を製作する石核の形態には小口形、プリズム形、クサビ形という多様性を有していたことが明らかである。

ではカルガ亜間氷期の細石刃剥離技術は、どのような技術的基盤の上に成立していたと考えることができるであろうか。この問題を解く鍵のひとつは、これらの細石刃関連資料と共伴する石刃剥離技術に見出すことができる。後期旧石器初頭段階の石器群においては、石刃剥離もプリズム形、小口形の石刃核から行われている。石核の整形と剥離工程は、石刃と細石刃という剥離される生産物の大きさの違いのみであり、二つの剥離技術は同様の技術的基盤を有していることが窺える。現在、北海道大学がイルクーツク大学と共同調査を実施しているアンガラ川流域におけるカルガ亜間氷期の古土壌層中の石器群では、クサビ形の石刃核が出土しており、石刃剥離技術と細石刃剥離技術とが共通の技術的基盤を有することが確認された。

シベリアにおける細石刃技術は、OIS3段階に後期旧石器的石器製作技術の成立と期を一にして出現している。このことは細石刃剥離技術が石刃剥離技術に後出するものではないことを示している。このような細石刃技術を伴う後期旧石器初頭の石器群の所在する地域には、先行する中期旧石器段階の石器群が確認されている。後期旧石器的石器群がその出現段階において細石刃技術を保有していたことが明らかとなることで、先行する石器群との間に大きな技術的転換が存在した可能性を考慮する必要が出てくる。細石刃石器群の出現時期をめぐる問題は、シベリア地域の後期旧石器段階の石器群の起源論とも深く結びついてくるのである。

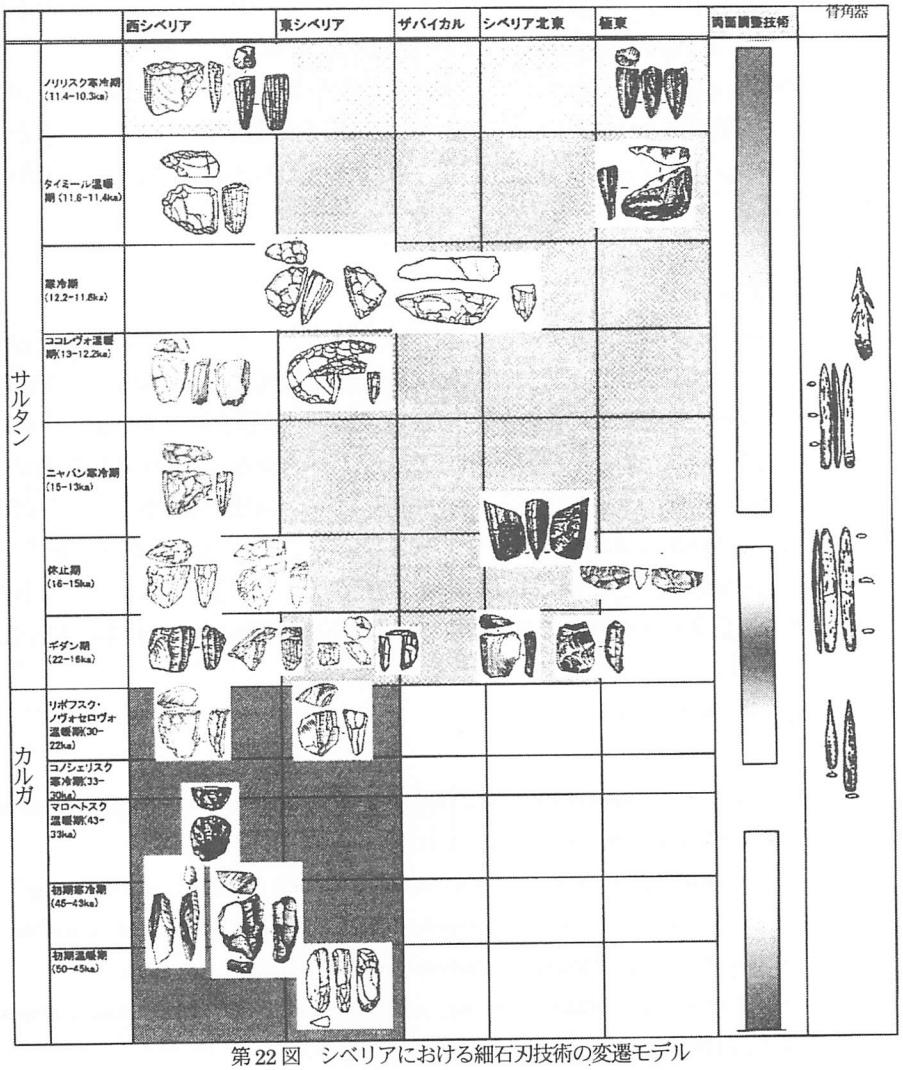
3-2. 細石刃技術の変遷

カルガ亜間氷期にその出現した細石刃技術は、温暖化した環境から寒冷化した環境への変化、後続するサルタン氷期(OIS ステージ2)へ移行するに従い技術的多様性を深化、また特殊化させていく。カルガ亜間氷期からサルタン氷期への移行段階(30-22kaB.P.)では、エニセイ川流域とアンガラ川流域に細石刃石器群が安定して展開している。この段階の細石刃には、二次加工を施されたものが見られる。しかしながら、この段階においては明確な骨角製植刃槍はいまだ確認されていない。よって細石刃の道具としての利用形態は不明ということになる。この段階まで細石刃核の形態には小口形、プリズム形、クサビ形と多様性を示す。

細石刃石器群の変遷において大きな展開期となるのは、サルタン氷期初頭のギダン寒冷期の段階(22-16ka B.P.)である。この段階は、これまで細石刃石器群が確認されていたエニセイ川流域やアンガラ川流域でクサビ形の削片系、非削片系両者の細石刃核から細石刃を製作する傾向が強まる。また北東シベリア地域へも細石刃石器群の分布域が拡大している。これに続く休止期(16-15ka)には、骨角製植刃槍が各地で確認されており、細石刃の具体的道具としての位置づけが明確化する。このギダン寒冷期は、細石刃技術のシベリア全域への拡散期と位置づけることができるであろう。

ニャパン寒冷期にはいると細石刃石器群は、シベリア極東部においても確実に分布が確認されている。すでに述べたように、この段階においてシベリアの細石刃石器群は、エニセイ川以西とアンガラ川以東で大きく二つの

地域性をもったグループに分かれる傾向を示す。特にその差異は細石刃核の形態的特徴、打面形成に削片剥離を行う頻度に現れる。また石器製作技術体系にも東西差が見られるようになる。削片剥離を行う細石刃核を伴う東部の石器群が石器製作技術における比重を石刃剥離技術から両面調整技術へと移行させるのに対して、西部の石器群では両面調整技術への依存度は東部ほど高くはない。さらにこの東西差は骨角製狩猟具の差異にも反映されるようになる。同様に地域差は、サルタン氷期の後半期にはシベリア北東部、シベリア極東部にも顕著となる。このような地域的な差異は、石器製作技術や道具構成にも現れていることから単なる集団差ではなく、気候変動も含めた地域環境の変化、多様な地域環境への適応行動として理解すべきである。



第22図　シベリアにおける細石刃技術の変遷モデル

サルタン氷期最終末のノリリスク寒冷期以降の細石刃技術は、これまでの細石刃核の諸類型に円錐形細石刃核が加わる。この傾向は、西シベリアと東シベリアのみならず、シベリア北東部や極東部において同様の傾向を示しており、シベリア全域に共通したものである。

シベリアにおける細石刃石器群の変遷は、巨視的に見れば、共通した技術基盤から発生し、発生当初から多様な変異を有していたものが、時間の経過とともに、地域的差異、地域的に特殊化したものへと分化していったと見ることができるであろう。

4. 細石刃石器群から導かれる後期旧石器石器群の技術構造の諸問題

本論ではシベリアにおける細石刃石器群の出現過程をめぐる今日的状況、細石刃石器群の変遷について概観してきた。この過程で導かれる後期旧石器石器群のもつ技術構造の諸問題について触れておきたい。カルガ亜間氷期の石器群の多様性については、細石刃石器群以外にも新たな発見が報じられている。両面調整の流麗な尖頭器石器群のカルガ亜間氷期段階における存在である。エニセイ川中流域のデェルビナV遺跡などにおいてコノシェリスク寒冷期(33-30kaB.P.)の層より両面調整の尖頭器を主体とする石器群が確認されている。この後も両面調整の尖頭器を主体とする石器群や、これらを伴う石器群が後期旧石器段階の遺跡に断続的に出現している。

このことからシベリアの後期旧石器石器群の技術構造は、その開始期より石刃剥離技術、両面調整技術、細石

刃剥離技術という３つの主要な石器素材供給システムを有し、それぞれの技術が単独または複合化することで地域単位、遺跡単位、氷期と間氷期のサイクルごとに適応する様相が窺える。この遺跡表現型、技術表現型が示すものは、各技術が本来、後期旧石器的石器群の成立段階において技術基盤として人間集団に保有されていたことを示している。各技術は、その時々、段階ごと、環境単位で適応行動として選択され、技術として駆使されたものと理解するのが妥当であろう。技術の選択的活用、この複数の技術の使い分けや組み合わせに後期旧石器的な石器製作技術の本質的な特質があると評価できよう。この意味においても中期旧石器段階と後期旧石器段階との間には、大きな技術的転換が存在したといえるのである。

この問題は、シベリア地域におけるこれらの技術を保有した人間集団の問題と深く結びつく重要な問題である。この中期旧石器段階から後期旧石器段階への転換期を本質的なものととらえると、そこには人間集団の交代すら想定される。シベリアの細石刃技術の担い手がどのような人間集団であったのか、今後は人類学再度からの検証も待たれる。

5. 将来的課題

現在、われわれも取り組んではいるところであるが、シベリアにおける細石刃技術の起源がさらに古くさかのぼったこと、後期旧石器的石器製作技術が構造化し、遺跡に技術表現型として出現することから今後は具体的にどのような状況下で選択的に技術が駆使されるのか、人間集団の生業活動、生活様式も含めて取り組むべき課題が想定される。シベリアの細石刃石器群の地域性につながる背景で作用した因子は、なにであったのか。削片系のクサビ形細石刃核の選択が空間的にも時間的にも広い領域を示す背景にはなにが作用しているのか。古くて新しい未解決の課題が山積している。ヤンガードリアスに相当する寒冷期(12.2-11.8kaB.P.)にはシベリアにおいても土器が出現するが、これも単に環境変動や定住化という問題から説明できるものではない。細石刃石器群をめぐる諸問題は数多くが未解決であり、やっと取り組みが開始される段階に我々は立っていると言えよう。

参考引用文献 Reference

(英文)

Bonch-Oslomskij, G. and V.Gromov 1932 The Paleolithic in the Union of Soviet Socialist Republics. International Geological Congress Report of XVI Session, Vol. 2, pp.1291-1311. Washington.

Derevyanko, A.P. 1998 The Paleolothi of Siberia. University of Illinoi Press, Urbana and Chicago

Drozdov, N.I. and Ye.V. Artemyev 1993 The Microlithic Industory of the Late Paleolithic Sites of Yenisei River Basin. (ed.) Kimura H. The Origin and Dispersal of Microblade Industory in Northern Eurasia. Sapporo.

Hayashi, K. 1968 The Fukui Microblade Technology and its Relationships in Northeast Asia and North America. Arctic Anthrolopogy, Vol.5, No.1. pp.128-190.

Ineshin, E.M. 1993 The system of Splitting and Adaptation Mechanism. (ed.) Kimura H. The Origin and Dispersal of Microblade Industory in Northern Eurasia. Sapporo.

Merhart, G.von 1923 The Paleolithic period in Siberia: contributions to the prehistory of the yenisei region. American Anthropologist Vol.25.pp.21-55.

Maringer, J. 1950 Contribution to the Prehistory of Mongolia. Reports from the Scientific Expedition to the North-Western Provinces of China under the Leadership of Dr. Sven Hedin. The Sino-Swedish Expedition, publication 34. Ⅶ archaeology.

Morlan, R.E. 1967 Preceramic period of Hokkaido. Arctic Anthropology, Vol.4, No.1, pp.164-220.

Morlan, R.E. 1978 Technological Characterisics of some Wedge-shaped Core in Northwestern North America and North-East Asia. Asian Perspectives, Vol.19 No.1., pp. 96-106

Nelson,N.C. 1937 Notes on cultural relations between Asia and America, American Antiquity vol.2, no.4, pp.267-272.

Okladnikov, A.P. 1959 Ancient Population of Siberia and its Cultures. Peabody Museum, Cambledge.

Powers, W.R. 1972 Paleolithic Man in North Asia. Arctic Anthropology Vol.10, No.2., pp.1-106.

Senboku, Yi and G. Clark 1985 The "Dyuktai Culture" and New World Origins. Current Anthropology Vol.26, No.1, pp.1-20.

Slobodin,S.B. 2001 Western Beringia at the End of the Ice Age. Arctic Anthropology, Vol.38, No.2.pp.31-47.

Slobodin,S.B. and M.L.King 1999 Uptar and Kheta: Upper Paleolithic Sites of the Upper Kolyma Region. West,F.H.(ed.) American Beginnings. University of Chicago Press.

Vasil'ev, S.A. 2001 The Final Paleolothic in Northern Asia: Lithic assemblage Diversity and Explanatory Models. Arctic Anthropology Vol. 38, No.2, pp.3-30.

West, F.H.(ed.) 1996 American Beginnings, University of Chicago Press.

(露文)

Абрамова З.А. 1971 Миклонуклеусы в палеолите Енисея. КСИА вып.126.с.14-21.

Абрамова З.А 1975 Археологические культуры в верхнем палеолите Северной Азии и южной- сибирская культурной обрасть. Соотношение древних культур Сибири с сопредельных территорий. с.19-30, Новосибирск.

Абрамова З.А. 1979a Палеолит Енисея. Афонтовская культура..Ленинград.

Абрамова З.А. 1979b Палеолит Енисея. Кокоревская культура..Ленинград

Абрамова З.А. 1979c К вопросу о Алданского палеолита. Советская Археология №4, с.5-14

Абрамова З.А. 1984 Поздний Палеолит Азиатской части СССР. Палеолит СССР, с.304-346, Москва.

Абрамова З.А 1986 Клиновидные нуклеусы в палеолите Северной Азии. Палеолит и Неолит , с.11-16, Ленинград,

Абрамова З.А. 1989 Палеолит Северной Азии. Палеолит Кавказа и Северной Азии (Палеолит Мира), с.143-243, Ленинград.

Аксенов М.П.1974 Многослойный археологический памятник Макалово II. Древняя история народов юго Восточной Сибири, вып.1, с.91-126, Иркутск.

Аксенов М.П.1986 Проблемы палеолота и мезолита верхней части дольни р.Лены. Четвертичная геология и первобытная археология Южной Сибири. с.32-34, Улан-Удэ.

Астахов С.Н. 1986 Палеолит Тувы. Новосибирск.

Ауэрбах, Н.К. 1930 Палеолитическая стоянка Афонтова гора III. Труды Об-ва изчения Сибири и ее призводительных сил. Вып.7, Новосибирск.

Ауэрбах, Н.К.и Г.П. Сосновский 1932 Палеолитическая стоянка Афонтва гора II. Труды комиссии по изчению четвертичиного периода. Ленинград.

Васильев С.А. 1991 К воплосу о рекоиструкции приочажных комплексов в позднем палеолите. Методы реконструкций в археологии. Новосибирск.

Васильевский Р.С., Е. Л. Лавров и Чан Су Бу 1982 Культуры каменного века Северной Японии. Новосибирск.

Гречкина Т.Ю. 1986 Опыт планиграфического анализа III культурного слоя палеолитической стоянки Кокорево I на Енисее. Палеолит и Неолит , с.17-23, Ленинград,

Громов В.И. 1932 Геология и фауна палеолитической стоянки Афонтова Гора II.КИЧП. Т. I , Ленинград.

Громов В.И. 1948 Палеонтологическое и археологическое обоснование стратиграфии континентальных отложений четвертичного периода на территории СССР (мылекопытающие, палеолит). Трды Ин-та геологических наук. № 17.вып.64.с.362-369.

Деревянко А.П. 1983 Палеолит Дальнего Востока и Кореи. Новосибирск.

Деревянко А.П. 1984 Палеолит Японии. Новосибирск.

Деревянко А.П.,С.В.Маркин, С.А.Васильев 1994 Палеолитоведение. Новосибирск.

Деревянко А.П.,П.В.Волков, Ли Хонжон 1998 Селемдинская позднепалеолитическая культура. Новосибирск.

Дьяков В.И. 2000 Приморье в Раннем Голоцене. Владивосток.

Ефименко П.П. 1931 Палеолит СССР, итоги и перспективы его изчения. Сообщение ГАИМК №3.

Ефименко П.П. 1932 Из исследований в обрасти палеолита СССР за последние годы. Сообщение ГАИМК №9-10.

Кинд Н.В. 1974 Геохронология позднего антропогена по изотопым данным. Москва.

Константинов А.В., К.О.Шлямов 1987 Палеолит Усть-Мензинского комплекса. Природная среда и древний человек в позднем антропогене. Улан-Удэ.

Кузнецов, А.М. 1983 К технике полчения миклопластин-вкладьшей. Советская Археология №3, с.82-89.

Кузнецов, А.М. 1992 Поздне палеолит Приморья. Владивосток.

Ларичев В.Е. 1969 Палеолит Северной, Центральной и Восточной Азии. Новосибирск.

Оводов Н.Д. 1975 Фауна палеолических стоянок Сибири и проблема хронологических и палеоландшафтных толкований. Соотношение древних культур Сибири с сопредельных территорий. с.35-50, Новосибирск.

Окладников А.П. 1958 Древнейшие культуры Приморья в свете исследовании 1953-1956гг. Сборник статей по Дальнего Востока. стр.5-80.

Окладников А.П. 1974 Поселение каменного века на горе Хере-Уул(Восточная Монгория) и докерамические культуры Японии. Историко-филологические исследования. с.332-338 Москва.

Окладников А.П. и А.П. Деревянко 1973 Далекое прошлое Приморья и Приамурья. Владивосток.

Окладников А.П. и И.И.Кириллов 1980 Юго-Восточное Забайкалье в эпохы камня и ранней бронзы. Новосибирск.

Окладников А.П., Бродянский Д.Л.,Чан Су Бу 1980 Тихоокеанская археология. Владивосток.

Паничкина М.З. 1959 Палеолитические нуклеусы. Археологический сборник №1, с.7-77, Ленинград.

Петрин В.Т.и Л.М.Чевалков О возникновении миклолитической толцовой техники скалчвания на примере палеолютической стоянки Кара-Бом. Палеоэкология и расселение древнего человека в Северной Азии и Америке. Красноярск.

Медведев Г.И. 1961 Место культуры верхоленской горы в археологической периодизации прибайкалья. Ворпосы Истории Сибири и Дальнего Востока. с.235-244, Новосибирск.

Медведев Г.И. 1966 Археологические исследования многослойной палеолитической стоянки Краснчй Яр на Ангаре в 1964-1965гг. Отчеты археологических экспедиций за 1963-1965 гг. Иркутск.

Медведев Г.И. 1983 Палеолютические обитатели юго Сибирского плоскогорья и древные культуры Северной Америки. Позднерлейстоценовые и Раннеголоценовые культурные связи Азии и Америки. с.36-41, Новосибирск.

Медведев Г.И., Г.Н.Михнюк и И.Л.Лежненко 1974 О номенклатурых обозначениях и морфолютии нуклеусов в докерамических комплексах Приангарья. Древняя история народов юго Восточной Сибири, вып.1, с.60-90, Иркутск.

Мочанов Ю.А. 1969 Дюктайская верхнепалеолитическая культура и некоторые аспекты ее генеза. Советская Археология №4, с.235-239.

Мочанов Ю.А. 1977 Древнейшие этап заселения человеком Северо-Восточной Азии. Новосибирск.

Мочанов Ю.А. и С.А.Федсеева 1983 Археолгические памятники Якуции.Новосибирск.

Мочанов Ю.А. и С.А.Федсеева 1991 Археолгические памятники Якуции.Новосибирск.

Сосновский Г.П. 1934 Палеолитические стоянки Северной Азии. Трды II межд. Конф. Ассосиации по изчении четвертичнего периода Европы 5, с.246-304.

(和文)

イニェーシン, E. M. . 加藤博文 1993 「東シベリアの細石刃石器群にみる技術適応の一例」『旧石器考古学』47 号 1-16 頁

小畑弘己 2001 『シベリア先史考古学』、中国書店

加藤晋平 1976 「北アジアの旧石器文化におけるクサビ形石核について」『歴史人類』第 2 号

加藤晋平 1984 「日本細石刃文化の出現」『駿台史学　特集　日本細石刃文化の研究 II』60 号、38-56 頁

加藤博文 1993 「シベリアの細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開 II』、140-157 頁

加藤博文 1993 「細石刃石器群における生業活動ーシベリアからの視点ー(上)・(下)」　『古代文化』第 48 巻第 3 号 28-36 頁、第 4 号 19 -28 頁

木村英明 1998 『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書刊行会、札幌

白石典之 1993 「東北アジアの細石刃石器群ー技術より見た時間・空間的変遷とその背景」『筑波大学先史学・考古学研究』第 4 号、1-29 頁

日本細石器文化研究の現状と課題

橋本　勝雄

1　序

日本列島における本格的な細石器文化研究は、矢出川以来、すでに５０年の歳月が経過している。この間、新資料の発見とそれに連動した資料操作が繰り返される中で着実に研究が進展し、編年論及び技術論を中心として機能論、生業論等に重要な成果が得られている（第１表）。

最近では、１９９３年（平成５年）のいわゆる八ケ岳シンポジウムをはじめとして、全国各地で資料集成が格段に進むとともに研究動向が整理され、資料に関しては全国的に蓄積から整備の段階に達しようとしている（佐久古学会・八ケ岳旧石器研究グループ 1993）本稿では、以上の現況をふまえ、今後の具体的な指針を探るために、ひとまず地域研究の現状と課題を検証する。

2　各地の現状と課題

［北海道］

層位的出土例に乏しく、石器群の内容も複雑なために、永らく細石器編年は混迷の一途をたどっていた。やがて、研究の進展と資料的な蓄積により、１９８０年代後半から、タチカルシュナイ 5.や美利河１の層位的事例が加わり、それぞれの細石刃技法を指標として峠下型→札滑型・白滝型→蘭越型・オショロッコ型・広郷型という変遷観が一般化した。

しかしながら、このような単一技法変遷観に対して、同一石器群における複数型式（美利河１及び新道４の調査成果）と生産工程全体の復元の重要性が木村英明によって改めて指摘されている（木村英明 1995）

また、近年千歳市柏台１、同丸子山、白滝村白滝第８、帯広市同南町２、上士幌町嶋木、斜里町越川などの遺跡から、相次いで２万年を超える細石器資料が発見されている。特に柏台１では恵庭ａ降下軽石層下から蘭越型細石刃核を含む良好な一括資料が検出され、その後の細石器編年に大きな影響を与えている。

このように、北海道では旧来の編年観から脱却するとともに、細石器文化の出現が予想外に古くかつ存続期間が長いことが明らかにされようとしている。

「東北・北陸」

東北地方の技術類型は依然として湧別技法とホロカ技法の二者が基調となっており、野岳・休場型は明確な姿を見せていない。

東北地方の湧別関連遺跡では、豊富な石器組成と数量を誇る北海道に比べ、質量ともに零細である。すなわち湧別技法とは技術体系を異にする石刃技法や一部の器種がほとんど潜在化し、湧別技法を中心とした「管理的」で組織的な技術構造のみが現象化している。

このような本州における技術特性については、加藤学による角二山型掻器（茸形掻器）の研究が関連づけられる（加藤学 1998）。加藤の集成により、角二山型掻器の分布が本州に集中することがより一層鮮明になったが、いかなる背景によるものであろうか、さらなる研究の進展が切望される。

なお、新資料としては分布がほぼ空白であった奥羽山脈東部において、岩手県山形村早坂平（荒屋型彫刻刀）、宮城県古川市名生館など関連遺跡が相次いで発見されている。また猪苗代湖周辺の会津若松市笹山原遺跡群も大いに注目される（会田容弘 2001，他）。

北陸地方は、大略北方系の分布圏に属するが、近年、野岳・休場型関連の資料（新潟県田井Ａ、田家池ノ平、

中原野北C）に多少の増加が見られる。

削片系については、新潟県津南町方面（上原E、正面中島）が注目される。特に上原Eでは、擦痕を有する黒曜石製細石刃核に加えて、石刃、槍先形尖頭器、石斧など多様な石器群が出土しており資料的価値が高い。石器組成については、不確定ではあるが茨城県額田大宮に近い。

この他重要な研究成果として、荒川台技法の提唱と中土遺跡の再整理が特筆される。

荒川台技法は、詳細な分析を経て工程復元がなされ、既知の技法とは異質な細石刃生産技術として提唱された（阿部朝衛 2002）。残念ながら本州以西では工程間の比較資料が少ないために、真の意味での位置づけは今後の課題とせざるを得ない。ただし残核形態としては茨城県新地の細石刃核が酷似している。

中土については個体別資料分析により、細石刃石器群とナイフ形石器の二者に分離され、かつてのナイフ形石器共伴説は崩壊を余儀なくされた（新潟県石器研究会 1996）。

[関　東]

関東地方は、野岳・休場型、ホロカ型及び削片系という三類型に象徴化でき、石器群の内容、遺跡の分布・立地及び石器石材に明瞭な差異が見られる。以上の三類型の変遷過程については、関東東部では、赤城編年をもとに野岳・休場型→削片系・ホロカ型、関東西部では、相模野編年をもとに野岳・休場型→ホロカ型→削片系という変遷過程が明らかにされ、黒曜石→在地石材という大筋の石材変遷も提示されている（注１）。

以上の野岳・休場型、ホロカ型及び削片系の三者の分布・立地、石材と技術の相関等の詳細については、悉皆調査をもとに筆者が別にまとめたので、ここでは略述するにとどめる（橋本勝雄 1998）（第１図）。

野岳・休場型は関東の平野部を中心に広範に分布する。遺跡は、一般に小規模で分散化の傾向にある。このような状況にあって、時として大量の原石が供給され、原石から細石刃生産に至る一貫した工程が認められる大規模遺跡が散見される。例えば千葉県成田市新東京国際空港NO67（十余三稲荷峰）では、５か所のブロックから細石刃核１０３点、細石刃核原形３２点、細石刃２３１６点が出土しており、野岳・休場型の一括資料としては日本最大級の出土量を誇る。主要石材は信州系黒曜石であり、接合資料も豊富に含まれている。詳細については、報告書の刊行を待つ他はないが、野岳・休場型の技術面の検討に不可欠な資料といえよう。

さて、野岳・休場型の技術構造は田村隆の言うように、細石器、剥片石器、礫器の三者の技術的独自性が顕在化している（田村隆 1989）。ただし礫器については石核との意見もあり、その認定は流動的である。

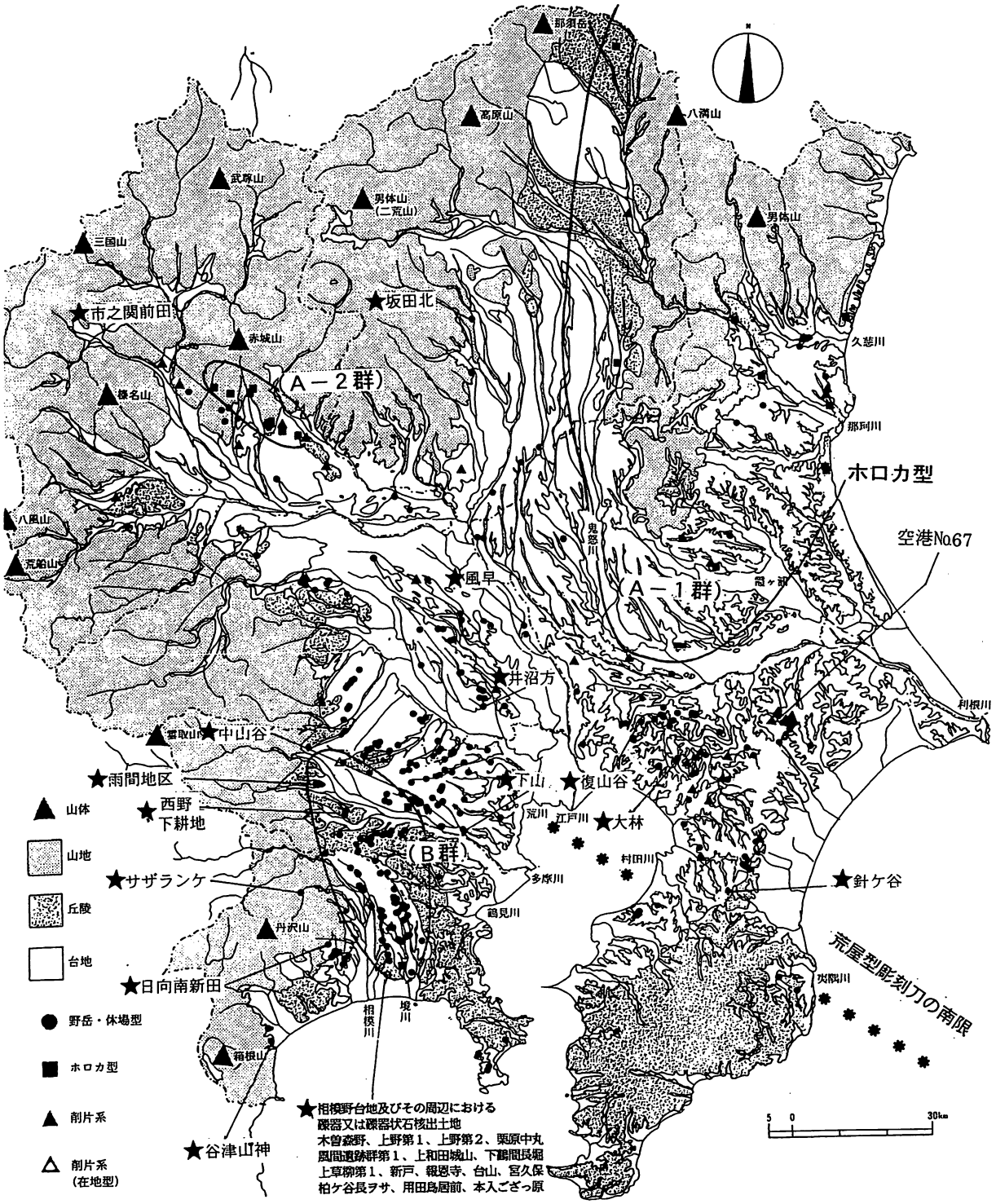
この問題については、堤隆が礫器であることを改めて強調している。すなわち刃部に使用痕が見られるものがあること、剥片に規格性がなく、二次加工が見られないことから目的的に生産されたものではないこと、また粗粒の石材が大半であり、剥片石器の素材になじまないことなどがその論拠である（堤隆 1997）。堤は、さらに礫器の機能・用途を木の伐採や切断・粗割りと認識した上で、その出現の背景には森林植生の拡大と、定住化の進行による木材需要の増大にあるものとしている。しかしながら、この種の石器の分布は第１図に示したとおり、関東西部の周縁部（相模野台地及びその周辺）に著しく偏っており、この分布傾向が検討課題として残されている。なお最近の事例として下総台地東縁部の千葉県針ケ谷遺跡（報文では「石核」）をあげておく（（財）総南文化財センター2002）。

ホロカ型は非黒曜石系在地石材に限定される。関東東部では茨城県、栃木県東部及び赤城山麓（A群）、関東西部では相模野台地及び多摩丘陵（B群）に局所的に分布し、関東中央部の事例は皆無である。A群の北限は福島県南部（石川町薬師堂）である（注２）。

削片系については、資料の蓄積が一段と進んでいるが、資料の内容及び分布域に変更を来す程ではない。新たな研究成果としては、永塚俊司が細石刃核の変形を論じており、周辺地域の現象のひとつとして注目される（永塚俊司 1998）。

[中部高地・東海]

中部高地南部に野岳・休場型、東海方面では駿河以東で野岳・休場型、駿河以西では三重県、岐阜県、愛知県、静岡県西部で在地石材を用いた海老山型が主体をなす。



第1図　関東における細石器遺跡の分布

（橋本1998を改変）

注：図中の太線内はホロカ型の分布
図中の遺跡名は本稿の関連資料
★礫器又は礫器状石核出土遺跡

この他、岐阜県池の原、同宮の前、長野県柳又A、同中ツ原５B、同中ツ原１Gのような削片系の関連資料が散見される。以上の細石刃石器群は在地石材の使用や石器群の変容が見られることから「在地石材の二次的展開」と評されている。同種の石器群は関東地方で見られ、遺構や土器の存在もさることながら、その装備は多岐にわたり、細石刃の存在意義の低下にとどまらず、生業の変化や定住化の傾向とよく調和している。

最近の調査事例としては岐阜県下呂町大林遺跡の削片系がこれに加わる。周知のとおり同遺跡は下呂石の原産地付近に立地しており、下呂石を用いた池の原及び柳又Aとの石材需給（物流機構）を考える上で重要な資料のひとつである（下呂町教育委員会 2002）。

編年研究については、岐阜県宮ノ前の調査所見が重要であるが、これに加えて静岡県西洞では、野岳・休場型とホロカ型が層位的に出土しており当該地域の新知見として特筆される。

この他、押野一貴による静岡県駿河小塚と鈴木忠司による愛知県茶臼山の再整理が重要である（押野一貴 1997、鈴木忠司 1998）。特に押野は「ホロカ型」と「船野型」の技術区分の不明瞭性に言及しており注目される。

[近畿・中四国]

近畿は削片系（兵庫県南大塚山、大阪府誉田白鳥、同新池）、ホロカ型（和歌山県壁川崎等）、野岳・休場型（奈良県桜ケ丘第１等）など多岐にわたるが、分布が希薄でいずれも零細な資料である。かつてこの地域では有舌尖頭器の盛行を背景として「近畿地方には細石器文化がない」とまで極言されたことがあるが、現在でも客体的な地域であることには変わりがなく、地域相の解明には資料の増加を待つ他はない。

中・四国は、山陰及び中国山地周辺、瀬戸内地域、四国という三つの地域区分が可能である。

中国地方では在地のメノウを用いた削片系（島根県八束郡玉湯町杉谷・正源寺・宮ノ前）と黒曜石を用いたホロカ型（島根県東船、同市場、鳥取県上神５１号墳、岡山県牧野第４）の資料的蓄積が進んでいる。後者の用材隠岐島産黒曜石と推定され、非黒曜石製在地石材を基本形とする本州地方では異彩を放っている（丹羽野裕・柳浦俊一 2002，他）。

瀬戸内方面では、最近、森格也や多田仁によって、瀬戸大橋関連資料の再検討が行われているが、細石刃核の出土状態には資料の一括性の保証がなく、分類の前提となる工程の裏づけを欠くので厳密な分析は困難である。また、素材の形状や作業の進行の程度による細石刃核の形態変化などの不確定要素が内在している（森格也 1995、多田仁 2001・2003）。

翻って羽佐島の系譜については、削片系のみを抽出して北方系に関連づける説と細石刃石器群の総体から福井洞穴をはじめとした西北九州方面に求める説に二分される。その意味では、宇部市川津及び広島県冠の削片系に関する評価も微妙である。

四国方面ではこれまで断片的な資料にとどまっていたが、新たに報告された高知県奥谷南は質量ともに備わり検討に堪える資料として注目される。奥谷南についてはブランク及び作業面再生剥片等の関連資料の状況から、筆者は基本的にホロカ型の範疇と考えている。また多様な形態の細石刃核も作業の進行状況を反映しているものと理解したい。しかしながら、このことを結論づけるためには、より詳細な工程復元が要請される。

[九　州]

遺跡分布が濃密な地域として、北海道と並び称される。

最古の野岳・休場型は、広く全土を被っていたが、やがて地域差が明瞭となり、土器出現前後には、福井型、船野型、畦原型及び加治屋園型などの多様な技術類型がモザイク状に分布するようになる。

編年研究に関しては永らく福井洞穴が基準となっていたが、最近ではこれに長崎県茶園が加わりさら補強されている。また、かつて大井晴男が唱えたように、福井洞穴第４層の帰属時期を神子柴・長者久保段階並行期に比定する見解が綿貫俊一・栗島義明によって改めて示され、併せて、野岳・休場型や船野型の見直しが行われようとしている（大井晴男 1967、綿貫俊一 1992・2000。栗島義明 1993・2000）。綿貫らの見解はおおむね妥当なものと評価されるが、野岳・休場型や船野型については、その設定が接合資料をまじえた詳細な分析を背景としたものではなく、このことが種々の混乱の要因をなしている。

3　今後の課題

以上の研究動向を踏まえた上で、研究の課題を技術論及び編年論を中心として整理してみることにしよう。

（1）技術論に関する基本認識

①細石刃生産技術の復元と相互比較　技術面では、原石から細石刃生産に至るまでの全工程を検証し得た例がわずかなために、補完的に残核形態の比較検討に依拠する傾向にある。改めて言うまでもないが、残核形態からの技術復元には限界があり、型式・技法の乱立を招いている。技術的な分析には、工程間の比較検討が不可欠であることを再度強調しておく。例えば細石刃生産の進行に伴う形態的変異（例：ホロカ型→稜柱形）や単一母岩における技術類型の多様性（新道４等）が関連づけられる。現在、削片系及びホロカ型については豊富な接合資料により、工程復元が可能となっている。しかしながら、野岳・休場型に関しては、これまで良好な一括資料に乏しく実態が明らかではない。その点では先述した千葉県成田市新東京国際空港NO67（十余三稲荷峰）は、多数の接合資料を含み質量とも備わった良好な資料である。近々報告書が刊行されるとの由であり、その成果が待望される。

②技術類型の再検討　既知の技術類型のうち、野岳・休場型については、本来土器出現期以前のいわゆる稜柱形の細石刃核を指す。ところが、このような当初の定義が拡大し、素材に規格性がなく、形状が不定形を呈する資料についても時期時期を問わずこの概念が適用されている。研究史を尊重するならば、その認定は原点に立ち戻り、本来は土器出現期以前の階梯に留めるべきであろう。しかしながら、その一方で、野岳・休場型の技術特性が、基本的に石刃技法の小形化にあるとともに、他の技術類型の適用外の存在ではないかという矛盾に陥る。言い換えれば野岳・休場型とは、小形の石材に応用されたナイフ形石器文化期以来の石刃技法一般を指し示しているのではあるまいか。このようなことを念頭に置けば、本来、野岳・休場型とは細石器文化期に普遍的な存在する大枠の概念と認識せざるを得ない。なお、野岳・休場型の分布は本州を中心に大きな広がりをみせるが、全国的に黒曜石との結びつきが強い。特に関東地方では、黒曜石＝野岳・休場型で、非黒曜石製在地石材を用いるホロカ型とは好対照である（橋本1998）。

（2）編年研究の整備

①起源と終末　列島最古の細石刃石器群は北海道で発見されている。一方、本州以西では、野岳・休場型の登 場以降のこととなり、起源論を語る上で、まずは野岳・休場型とナイフ形石器文化との関連性が焦点となる（注１）。

野岳・休場型の石器組成に関しては、細石刃関連に削器、時として礫器を伴う単純な様相を呈し、ナイフ形石器との共伴関係については、否定的なデータが支配的である。このことを含め、永い技術伝統を維持してきたナイフ形石器文化が駆逐され、固有の石器群が短期間に拡散し、急激に消滅に至った経緯から、当初、細石器文化を担った集団は、それまでのいかなる時期に比べても、より排他的で非定着的な技術特性を保持していたものと推察される。ところが細石器文化の終末期には、こうした特性が生活様式の変容によって徐々に変容し、やがて機能分化が顕著となり、装備に占める細石器（＝植刃）の意義の低下を招いたものと推察される。

②地域編年の整備　列島の編年網の整備には、地域編年の確立が先決問題である。ところが、現状では編年網の構築に不可欠な層位的事例は少数であり、全国をカバーするに至っていない。そのため、列島各地の研究動向を通覧すると、特定地域の編年に準拠し、その内容をスライドさせている場合が多い。現状では、火山灰層の堆積条件の良否に地域差があり、将来的にも格差が是正される見込みがないことを考慮すればやむを得ないことではあるが、相模野編年など特定の地域編年を準用する際には、その地域差を念頭に置き、その有効性の検証が前提となろう。

他方、地域編年の充実とともに大陸における状況把握も不可欠である。特に、北方系については、永い存続期間と広範な分布域から影響力の強さが窺われる。巨視的には、福井洞穴・泉福寺洞穴をはじめとする九州一円や中国南部はその影響下にあったものと考えられるが、その実態解明は大陸方面における今後の研究に委ねられている。

（3）機能・分布・生業・石材

技術論・編年論偏重の研究史にあって、豊富な資料の蓄積を背景として石器（特に細石刃）の機能論、生業論及び黒曜石分析による需給機構の検討が垣間見られる。

機能論については、細石刃、荒屋型彫刻刀及び掻器の使用痕の検討により、石器の機能・用途や場の機能が論じられている（堤隆 2000、鹿又喜隆 2002、米田寛 2002）。特に堤は、掻器の生皮や乾燥皮の鞣し作業に関する強い機能的特定性と寒冷適応としての皮革利用に言及している。その傍証として掻器は、より高緯度に分布する北方系に普遍的に存在し、西南日本に分布する野岳・休場型にはほとんど組成されないという。

一方、生業関係については、最近では専ら北方系を対象とした検討が行われている。北方系については、内水面漁撈と鹿猟の二説があり、明確に結論づけられてはいない。この間の事情については仲田大人の論考に詳しい（仲田大人 2002）。

石材論については、鈴木忠司の「細石刃の剥離手法の差」が「石材分布の地方差や産状」に重なっているとの見解に基本的な変更はない（鈴木忠司 1979）。このことを物語るかのように、関東地方においては、分布・立地に関する基礎的資料とし細石刃核の類型分布が示されている。また新たな取り組みとして自然科学との協業化による黒曜石の需給ネットワークの研究が開始されている（堤隆 1998、橋本 1998）

注

注１：これに関連して、関東地方では、立川ローム層第 4 層段階に比定される野岳・休場型の存在が報告されている。事実ならば、編年はもとより今後の細石器出現に関する自生・伝播の問題に影響を与えかねない（下総台地・大網山田台 NO４B、武蔵野台地・練馬区もみじ山等：(財) 山武郡市文化財センター1994、東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会 1995）また、最近の「茨城県旧石器シンポジウム」が刺激となって、情報の空白地域であった関東東部方面の資料集成が進み、この方面の地域相が鮮明になったことをつけ加えておく（ひたちなか市教育委員会・茨城県考古学協会 2002）。

注２：なお先の論考でホロカ型とした埼玉県の二遺跡（本庄市将監塚、日高市向山）については、再検討の結果ホロカ型とは似て非なる資料であり、野岳・休場型の範疇で理解し得ることが判明したので、ここで訂正しておく（橋本勝雄 1998）。

引用参考文献

大井晴男　1967　「日本の先土器時代石器群の系統について」『北方文化研究』第３号　pp,45-93

鈴木忠司　1971　「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8 pp,175-192

鈴木忠司　1979　「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』 pp,1-34

鈴木忠司　1983　「日本細石刃文化の地理的背景」『角田文衛博士古稀記念　古代学叢論』　pp,1-24

橋本勝雄　1983　「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について一第２・３層を中心として」『考古学論叢』Ⅰ　pp,105 - 135

麻生優　1985　『泉福寺洞穴の発掘記録』

鈴木忠司　1985　「再論日本細石刃文化の地理的背景一生業論への視点」『論集日本原史』pp,161 - 191

鈴木忠司　1988　「素描・日本先土器時代の食料と生業」『京都文化博物館（仮称）紀要　第１集　朱雀』　pp,1-40

橋本勝雄　1989「東日本の細石器文化一東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究の動向一」『考古学ジャーナル』306　pp,12 - 21

萩原博文 1989　「西日本の細石器文化」『考古学ジャーナル』306　pp,22 - 26

田村隆　1989　『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書』1.（財）千葉県文化財センター

佐藤宏之　1992　「北方系削片系細石器石器群と定住仮説」『法政大学大学院紀要』第 29 号　pp,55 - 83

綿貫俊一　1992　「長者久保・神子柴文化並行期段階の九州」『古文化談叢』第 27 集　pp,1-33

稲田孝司　1993　「細石刃文化と神子柴文化の接点」『考古学研究』40 - 2　pp,21 - 46

橋本勝雄　1993　「略説・日本細石器文化研究の現状と課題」『史館』第 24 号　pp,1 - 22

栗島義明 1993　「福井４層－その草創期に与えた影響について」『利根川』14

佐久考古学会・八ケ岳旧石器研究グループ　1993　『シンポジウム 1993.10　細石刃文化研究の新たなる展開』
堤　　隆　　1994　「細石刃はどのように使われたか？」『大和市史研究』第 20 号　pp,1 - 29
鈴木忠司　　1994　「日本細石刃文化遺跡地名表」『京都文化博物館研究紀要朱雀』第 7 集　pp,63 - 98
（財）山武郡市文化財センター　1994　『大網山田台遺跡群 1. －旧石器時代編－』
東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会　1995　『東京外かく環状道路練馬地区関連遺跡』
木村英明　1995　「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学の諸問題　北海道考古学第 31 輯』　pp,1-64
森格也　　1995　「備讃瀬戸地域における楔形細石刃核の再検討」『研究紀要』3.集　pp,1-18　（財）香川県埋蔵文化財調査センター
加藤博文　1996　「細石刃石器群における生業活動の検討－シベリアからの視点－」（上）（下）　『古代文化』48-3,48-4　pp,28-36･19-28
堤　　隆　　1996　「削片系細石刃石器群をめぐる技術的組織の異相」『古代』第 102 号　pp,36-61
新潟石器研究会　1996　「新潟県中土遺跡出土遺物の再検討」『長岡市立科学博物館研究報告』第 31 号　pp,123-158
堤　　隆　1997　「更新世最末期における礫器使用行動の意味」『長野県考古学会誌』82 号　pp,29-41
橋本勝雄　1997　「後期旧石器時代の遺跡分布と立地」『考古学ジャーナル』413 pp,12-185
永塚俊司　1997　「荒屋系細石刃石器群における一つの定点」『人間・遺跡・遺物』３　pp,90-117
押野一貴　1997　「静岡県芝川町駿河小塚遺跡出土細石刃核について」『人間・遺跡・遺物』３　pp,118-132
鈴木忠司　1998　「茶臼山　愛知県最初の岩宿時代の調査」『『野帳の会』考古学論集』　pp,1-18 久永春男先生頌寿記念論集刊行会
長崎県岐宿町教育委 1998　『茶園遺跡』
橋本勝雄　1998　「関東細石器考」『千葉県立中央博物館研究報告』5-2　　pp,117-135
松浦五輪美　1998　「細石刃文化研究における二・三の問題」『旧石器考古学』57　pp,55-66
永塚俊司　1998　「細石刃石核の変形」『研究連絡誌』第 52 号 pp,1-8　（財）千葉県文化財センター
堤　　隆　1998　「細石刃石器群における黒曜石利用について－信州産黒曜石を中心に－（予稿）」『第 10 回長野県旧石器文化研究交流会－発表要旨－』　pp,77-86
雨間地区遺跡調査会　　1998　　『雨間地区遺跡群』
吉井雅勇　1998　「新潟県における北方系細石刃石器群について」『新潟考古学談話会会報』第 19 号　pp,14-23
加藤学　1998　「いわゆる角二山型掻器について」『新潟考古学談話会会報』第 19 号　pp,24-34
（財）北海道埋蔵文化財センター　1999　『千歳市　柏台 1 遺跡』
橋本勝雄　1999　「岩宿発掘 50 周年記念　日本旧石器時代研究 50 年と今後の展望　細石器文化」『石器文化研究』7　pp,141-150
鈴木忠司　1999　「日本細石刃文化遺跡地名表・補遺」　『京都文化博物館研究紀要朱雀』第 11 集 pp,65 - 78
栗島義明　2000　「神子柴文化の拡散と展開」『九州の細石器文化』3.　pp,33-42　九州旧石器文化研究会
綿貫俊一　2000　「細石刃文化と細石刃文化の間に位置する長者久保・神子柴文化並行期」『九州の細石器文化』3.　pp,59-66　九州旧石器文化研究会
堤　　隆　2000　「掻器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」『考古学研究』47-2 pp,66-84
会田容弘　2001　「福島県会津若松市笹山原 NO16 遺跡」『第 15 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』pp,144-150
稲田孝司　2001『先史日本を復元する 1　遊動する旧石器人』　岩波書店
（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　2001　『奥谷南遺跡 3.』
多田仁　2001「羽佐島技法の再評価」『旧石器考古学』62　pp,39-50
佐藤雅一・山本克・佐野勝宏・阿部英二　2001　「平成 12 年度　新潟県津南町発掘の成果」『第 13 回長野県旧石器文化研究交流会－発表資料－』　pp,78-87
鹿又喜隆　2002　「重複する使用痕の実験研究」『文化』第 66 巻第 1･2 号　pp,57 - 76

米田寛　2002　「細石刃の使用と場の機能」『法政考古学』第28集　pp,1-26
仲田大人　2002　「「内水面漁撈論」その可能性と課題」『北海道旧石器文化研究』第7号　pp,17-30
丹羽野裕・柳浦俊一　2002　「島根県玉湯町杉谷遺跡・正源寺遺跡・宮ノ前遺跡出土の細石刃石器群について」『中国山地東部の旧石器文化』　pp,88-91　第19回中・四国旧石器文化談話会実行委員会編
下呂町教育委員会　2002　『大林遺跡試掘調査報告書』
北村忠昭・米田寛・長村克稔　2002　「早坂平遺跡」『第16回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』　pp,61-68
津南町教育委員会　2002　『正面中島遺跡』
ひたちなか市教育委員会・茨城県考古学協会　2002　『茨城県における旧石器時代研究の到達点』
泉福寺洞穴研究編刊行会　2002　『泉福寺洞穴研究編』
（財）総南文化財センター　2002　『針ケ谷遺跡』
阿部朝衛　2002　『荒川台遺跡－1989年度調査－』　帝京大学文学部史学科
川道寛　2002　「九州地方の細石器研究の現状と課題」『九州旧石器』第6号　pp,76-87
多田仁　2003　「瀬戸内とその周辺における細石刃文化の一様相」『古代文化』55-8 pp,16-27

		岩宿以前	第１期(1949～1959)		第２期(1960～1969)		第３期(1970～1982)			第４期(1983～1992)		第５期(1993～
		～1948	1949～1955	1956～1959	1960～1964	1965～1969	1970～1974	1975～1979	1980～1984	1985～1989	1990～1994	1995～1999
全国	調査研究	曽根09 ﾏｲｸﾛﾘｽ=細石器31上頁 八幡論文35-37 宮脇47	岩宿の発見＊49，桝形51 矢出川の発見＊53・調査54 鷲羽山・井島54，白滝遺跡群55-61	細石器文化編年表参人56 荒屋発見58 荒屋型彫刻刀59	福井洞穴＊60 湧別技法61 矢出川63 休場64	最初の細石器編年・西海技法65 荒屋技法68 野川月見野68-70	角二山70＊ 小林ｼｽﾃﾑ論70 泉福寺洞穴70-79野岳・休場型71 野辺山型74	海老山型・船野型・矢出川技法・駿台史学細石器特集号79 野辺山ｼﾝﾎﾟｼｳﾑ79-81	加治屋園技法81 相模野編年83＊ 駿台史学細石器特集号84	美利河技法85 代官山技法86	荒川台技法92，佐久考古学会・八ケ岳旧石器研究ｸﾞﾙｰﾌﾟｼﾝﾎﾟｼｳﾑ93＊	白滝遺跡群の再調査95-97
地域別	北海道		狩太西富55，白滝遺跡群55-61	置戸安住56・57，ﾀﾁｶﾙｼｭﾅｲ58，札滑・立川58-59，紅葉山・峠下59	大正・射的山60，白滝服部台・帯広暁61，ﾓｻﾝﾙ64-65，置戸安住62	吉田・中本68，札滑K69	吉村・間村・本沢・祝梅三角山70，増田・水口71-72 ﾀﾁｶﾙｼｭﾅｲV72	勢雄・都D76，上似平76-77，ﾓｻﾝﾙ79	服部台２81，帯広空港A82-83，湯ノ里４83，美利河83-84，帯広空港B84，新道84-86，帯広暁83-89	石川１85-87，幌加沢87-90，嶋木・越川87	丸子山90-，帯広落合91，97，帯広大空91，95，帯広泉町A91	柏台１96-97，白滝遺跡群95-97，帯広稲田１95-96
	東北			金谷原57		越中山E67	角二山70，越中山S70-71，大台野71-73，湯ノ花73	大平山元Ⅱ77-78，大平山元Ⅲ・湯ノ花・月山沢79	下堤D81，大台野81-82，薬師堂82	大刈野87，学壇遺跡群89-93，月岡・大平山元Ⅱ89	狸崎B92，柏山館92-94，耳取ⅠA94	
	北陸			荒屋58	中士64 月岡68					荒川台86-97，荒屋88，89	樽口92-94	正面中島96
	関東		桝形51		逆室63	狭山B68-69	相模野№149・70，向原71，地国穴台72，木苅峠72-73，桝形73，西之台B73-74，下鈑地73，船尾白幡74	後野・報恩寺75，星谷津75-76，坂田北・上草柳第一76，嶺田大宮・上和田城山77，沖鉾78，下鶴間長堀78-79，月見野上野79-82	栗原中丸80-82，三鷹市立五中80-81，下里本邑81，多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ№769・81-82，木戸場・大林82，出山82-83，代官山82-84	升形・大割85-86，かしわ台駅前86，長井台地遺跡群86-89，頭無・長堀北・空港№67・87，白草・市之関前田89，勝坂89-90	芳見沢90，吉岡遺跡群90-94，柳戸・新山91-92，横田91-94，清橋91	柏原95-96
	中部東海	曽根09	矢出川54	男女倉57-60，海老山・柳又A59	柳又A61，62，愛知茶臼山61，63，矢出川63，休場64		小塚71，男女倉72，74，75	出張76-77，中沢田円丸78，尾上ｲﾗｳﾈ79	寺谷80，広野北81-82，仲町・向新田82	寺田・日野１・大奴田場A・中見代Ⅲ85-86，池の原・山中城三の丸第一89，柳又A・宮の前89-95	柳又C・上の原・中ツ原５B90，西洞ａ90-91，包坂中90-95，沢田鍋土91-93，中ツ原１G92，95	牛の松・天間95
	近畿中四国	宮脇47	鷲羽山・井島54					瀬戸大橋関連調査76-82	恩原２84-88		奥谷南94-96	
	九州				福井・直谷洞穴60，63，64，聖岳62，百花台・原63	上場66-74，石飛分校・岩土原68，堂崎69	泉福寺洞穴70-79，船野70，宮地前73，門田74，石峰75-78	加栗山・加治屋園75-76，政所馬渡76	上下田80，81，城ケ平平子82，宮地前83-84，86，狸谷84	松山87，89，市之久保86-87 赤木87，登立88	西丸尾・樫崎B90-91	帖地95- 前山95-96

第１表　全国の主要遺跡発掘調査史（＊＝画期となった出来事）

細石刃石器群研究のパースペクティブ

東京大学文学部考古学研究室
佐藤　宏之

1.　はじめに

長野県矢出川遺跡において、日本で初めて細石刃石器群が確認された 1953 年から数えて 40 周年にあたる 1993 年 10 月に、そのことを記念した研究集会が野辺山で開催されて以来 10 年となった(堤編 1993)。50 周年を記念して、同じ主催者の一方によって再び「日本の細石刃文化」に関する研究集会が持たれようとしている。筆者は、前回の集会において、当時新しい研究視点であった細石刃石器群を携えた先史人の行動論研究に関する理論的なベースの提示とその見通しを報告した(佐藤 1993)が、今回はこの 10 年間に進展した、列島内および列島をとりまく地域での調査・研究の状況に焦点を当てて、細石刃石器群研究の全体的なパースペクティブについて述べてみたい。

2.　細石刃石器群研究のパラダイム・シフト再論-石器文化段階論から構造変動論へ-

もちろん 10 年という短期間の間に、細石刃石器群研究に基盤的な変化が表れ、研究パラダイムが劇的に転換したわけではない。それでも、北海道における柏台 1 遺跡の調査(福井編 1999)や新潟県樽口遺跡(立木編 1996)等の調査結果によって、北海道の細石刃石器群研究が大きく書き換えられつつあることや、朝鮮半島における当該期資料を含む後期旧石器時代資料の飛躍的蓄積によって、九州における細石刃石器群の展開過程に関するシナリオ作りに現実性が増してきたことなど、注目すべき資料の提示が見られている。

しかしながら、細石刃石器群研究のパラダイムに関して重要なことは、これまで安斎正人等を中心として行われてきた先史文化の研究法に関する一連の試みが、構造変動論という理論に体系化されたことにある(安斎 2000; 印刷中等)。筆者もその一翼を担っているわけだが(佐藤 1992a)、細石刃石器群研究の根本的な問題点は、当該石器群を含む更新世末から完新世にかけての文化的・社会生態学的変化を、従来の「石器文化段階論」の枠組みで秩序立てようとする方法論にある。すでに、1993 年のシンポジウムでの白石典之の発表(白石 1993: 第 1 図「細石刃石器群出現期の石器群変遷」)にも端的に表現されているように、「細石刃文化」を標榜しながらも、それが列島各地において文化段階として等質に存在したとはとても見なせないような複雑な様相が説明されていた。この状況は、現在ではさらに輻輳化しており、筆者には、列島の中に「細石刃文化」なる統一的実体が存在するとは、とても考えられない。かつて本州中央部においては、短期間に出現して消え去っていったという現象を捉えて「細石刃文化」という文化階梯が仮設されていたが、北海道を含む大陸側の状況をみれば、各地における細石刃石器群の発生・成立・発展・変容・解体・消失といった「構造」が、各地の文化的・社会生態学的フレームに則って各地に固有な現象であることが容易に理解されうる。いわば細石刃石器群および細石刃生産技術とは、石刃石器群および石刃生産技術と同価の意味を有している可能性を想定すべきではないかと考える。

もはやかつてのように、石刃石器群および石刃生産技術が後期旧石器時代を指標する標準石器・技術であると素朴に考えられないことは、世界の先史考古学の常識であり(安斎 2003)、前期旧石器時代から近現代までの主として狩猟採集民(マヤのような国家形成段階の専門職人等も含まれる)によって、それぞれ相互に独立したコンテクストによって採用された石器生産技術にほかならない。ここまで、広範囲の利用を想定できないが、世界的な視野で見た場合、細石刃生産技術も、多様で複雑かつ固有の状況の中で、各地の集団により選択された一般的な石器生産技術であった可能性が高い。従って、当該地域・集団が細石刃生産技術をみずからの石器生産技術構造に招来し「構造」に内置した固有の具象的事情とコンテクストを考察していく必要がある。構造変動論の立場では、各地の異なる石器群構造の中から、細石器

石器群という現象のみを遊離して照射していこうとする「石器文化段階論」では、更新世/完新世移行期の人類の適応戦略の動態的変化を解明するのは困難であると考える(佐藤 1993)。

そろそろ「尖頭器石器群(文化)」→「細石刃石器群(文化)」→「神子柴・長者久保文化」という石器文化段階論をいったん解体して、列島内各地の構造変動という視座から解釈を進めてみてもいいではないか。

3. 北海道の細石刃石器群研究

(1) 北の半島・北海道

構造変動論の視点では、対象とする考古学的事象が継起した空間と時間の"前後左右"から分析を開始せねばならない。北海道の細石刃石器群の場合で言えば、その前段階である後期旧石器時代前半期から開始し「細石刃石器群期」(山田 1999; 山原 1998; 寺崎 1999)を経て、本州の縄紋時代草創期段階に相当する「尖頭器石器群期」を展望する必要がある。空間的には、大陸から本州東北部までが分析の射程となる。これら北海道の細石刃石器群の"前後左右"との構造的異なりがどこにあるかを探ることが構造変動論であるからである。

北海道の細石刃石器群は、その内容から見て大陸側と強固に連動した一体的な文化変容を遂げていると思われる。若干の変異を捨象すれば、湧別技法の各種細石核やホロカ型・峠下型・オショロッコ型・広郷型細石核(鶴丸他 2000; 佐藤 2002)が大陸側に見られることがすでに知られており、北海道の細石刃石器群に見られる細石核の各型式は、基本的に大陸側で認められる可能性が高い。サハリン島における北海道産黒曜石の利用状況に端的に表れている(佐藤他 2002)ように、更新世末になって宗谷海峡が形成を開始する前の北海道が大陸から張り出した半島であったという地理的条件を基本要件としていたためであると考えられる。さらに、当時の北海道の気候環境・動植物相が大陸側と類似していたと想定されることと、周氷河環境が生み出す地形特性の共通性が、両地域における先史人の適応行動戦略の類似をもたらしたと推定されよう(佐藤 2003)。

(2) 「細石刃石器群前半期」

細石刃文化期以前の後期旧石器時代前半期の北海道は、本州以南の二極構造に基づく石器群構造と基本的には共通しているので、少なくとも前半期前葉においては、一定の密接な交通関係が存在していたと考えられる。前半期後葉から細石刃文化期直前の時期になると、道南には本州系の尖頭形石刃石器石器群が分布する一方で、以東の地域には本州系尖頭形石刃石器石器群の代置石器群である広郷型尖頭形石器石器群が対峙するが、後期旧石器時代後半期には、後者の地域に大陸から拡散した細石刃石器群が北海道内を広く覆うようになる。寺崎等の言う「細石刃石器群前半期」(=後期旧石器時代後半期)においては、本州東北部の尖頭形石刃石器石器群と北海道の細石刃石器群は、津軽海峡を挟んで対峙していたようであるが、本州島北部には湧別技法札滑型・白滝型、美利河技法、ホロカ技法等を保持する集団がしばしば南下し、在地の集団に影響を与えたと考えられる(佐藤 2003)。

その理由は以下のように考えられよう。後期旧石器時代後半期の列島においては、ナイフ形石器石器群が発達する西南日本と尖頭形石刃石器石器群の発達する東北日本に大きく二分されるが、それは東西日本レベルの生態環境の差異に対応した適応行動戦略の社会的差異が技術系に表現されたものであろう。従って、東北日本においては、尖頭形石刃石器石器群と細石刃石器群の有する行動戦略が基本的に類似していたと考えることができる。とはいっても、本州に南下した細石刃石器群の組成は、北海道のそれとは多くの異なりを見て取ることができるので、北海道型の生態適応戦略の直接的な導入とは考えにくい。更新世末の荒屋系細石刃石器群(北方系細石刃石器群)が内水面漁労という新規に開発された資源開発戦略を保有して南下したと推定される(佐藤 1992b)ように、コンテクストに応じた多様な種類の行動戦略を、各々の細石刃石器群が荷担していた可能性が高い。

(3) 「細石刃石器群後半期」

「細石刃石器群後半期」になると、本州以南では縄紋時代草創期に入り、次第に定住傾向を深めていくが、北海道内では石器群構造の変容を示しながらも、遊動型行動戦略に重心を置いた生態適応をなおも継続していたようである。こ

の時期に北海道で見られる後半期型オショロッコ型細石刃石器群や広郷型細石刃石器群は、行動戦略の異なる本州以南には、もはや導入されることはなかったらしい。ただし、交通の方向は、北海道から本州への一方通行ではなかった。八雲町大関遺跡(田川 1960)の資料は典型的な長者久保石器群である。北海道の「細石刃石器群後半期」を代表する大型尖頭器・両面調整石器(陸別町教育委員会 1963)や石斧は、本州から北上して「細石刃石器群後半期」の石器群構造に取り入れられたと考えられる(安斎 2002)。

4. 朝鮮半島およびその周辺地域における細石刃石器群研究

(1) 環日本海地域の地理的条件

北海道と並んで列島への細石刃石器群の流入ルートとして、朝鮮半島経由が存することは大多数の研究者間の了解事項であろう。現在大陸側における細石刃石器群の検出事例を点検してみると、最近資料の蓄積が進んでいる韓国を除いては、進展ははかばかしくない。華北を中心に一定の蓄積をみる中国においても、東北部は事例が非常に少ない。朝鮮半島北部は調査が古く、断片的である。極東ロシアでは、沿海州南部のウスリースク近傍のゴルバトカ、イリスタヤ遺跡群等やウスチノフカ、スヴォロボ遺跡群周辺で調査があり、アムール川流域に拡大しても上流のゼーヤ川流域で集中的な調査が行われ、ハバロフスク市周辺で若干の調査がある程度である。サハリン島ではいくつかの遺跡が知られているが、ソコルII遺跡を除いては断片的または未公表である(木村 1998)。

このように列島への拡散ルートを具体的に検討しようとする場合には、北海道ルートにおいては、北サハリンからアムール川中・下流域の様相が全く不明であること、朝鮮半島ルートにおいては、半島北部から中国東北部にかけての様相が同様に不分明であることが大きな障害となっている。従って、分析にあたっては、あくまでも予察の範囲を越えないことをあらかじめ確認しておきたい。

細石刃石器群の列島への波及過程を考える上で重要な要素は、更新世から完新世にかけての時期に進行したと推定されている現日本海の成立過程の復元にある。現在の知見では、後期旧石器時代において列島と大陸の間に陸橋が存在したとは見なされておらず、最終氷期最寒冷期でさえ、朝鮮海峡と津軽海峡の間はきわめて狭いものの海峡があり、冬季を中心に氷橋程度は存在した可能性が指摘されている。この朝鮮海峡には古黄河が流入していたことは知られているが、北の間宮海峡においても、この時期古アムール川が流下して古日本海に注いでいたと考えられている 1)。間宮海峡はきわめて水深が浅いが、古アムール川の流路に沿ってわずかに大型船の航行が可能な部分がある。ただし、サハリン島はアムール川河口部の北側にも伸びているため、朝鮮海峡とは異なり、陸橋は存在していたと考えられる。

このように推定してみると、氷期の環日本海地域では、大陸から北海道と朝鮮半島というふたつの"半島"が南北につきだしていたという地形条件が考えられよう。従って、北海道および朝鮮半島においては、大陸側とかなり強く連動した細石刃文化の一体的な構造変動があったと仮定することができる。

(2)

ところで、最近の韓国では、剥片尖頭器の出土例がかなり増え、韓国の後期旧石器は剥片尖頭器石器群を特徴とすると言いうるような状況になってきた 2)が、これらの遺跡では細石刃核(特に湧別技法関連)を共伴する例がしばしば認められるようになった。このことから、韓国の研究者の間では、細石刃石器群がかなり早くから朝鮮半島に出現している可能性を考慮する意見も聞かれるようになった。今だ予断を許さない段階ではあるが、筆者もその可能性が高いという予想を持っている。その主要な理由は、前述した通り、朝鮮半島と北海道が氷期に大陸に連なる"半島"であったとするならば、北海道において、柏台 1 遺跡(福井編 1999)のように 2 万年を越える年代値をもつ細石刃石器群が存在する以上、朝鮮半島に同種の細石刃石器群が存在しないとする理由が見あたらないからである。かつて松藤によって否定されたスヤンゲ遺跡における剥片尖頭器と細石刃石器群の共伴関係(松藤 1987)も、あらためて肯定的に理解してもよいのではないだろうか。

さらに、上記の推定が正しいとすれば、韓国で剥片尖頭器と細石刃石器群が共存しながらも九州には個別に招来されたことになるが、それは北海道と本州東北部の間に認められた構造的対置関係と同趣の関係を想定すれば解釈は可能

である。北海道の細石刃石器群は、その器種構成や技術構造・装備等を見る限り安定した「細石刃文化」と呼びうるが、一方本州側のそれは、とても考古学的「文化」と呼び得ない不安定な内容であることはすでに論じている。九州の細石刃石器群を概観すると、安定した一体的な「細石刃文化」と呼称可能な状況にはないと考えられるため、朝鮮半島と九州の関係は、北海道と本州の関係と同形または相同であると考えられる。

北海道・朝鮮半島は、大陸側と一体的な「細石刃文化」であった可能性が高く、一方本州以南の列島各地では、後期旧石器時代後半期以来の在地石器群の伝統に基づいて受容された「細石刃石器群」であったと現在考えている。

なお、「野岳・休場型細石核」を有する稜柱系細石刃石器群の発生の契機は、いまだ不分明である。従来より、内的発生説と南中国起源説が対立しているが、少なくとも南中国の同種細石核は、年代的に稜柱系細石刃石器群の母型とすることはできないと考えられるので、中国南部からの伝播説は受け入れられない。といって、内的発生説も技術的類似をめぐる議論に終始し、構造論的説明が欠如しているため、説得力が弱いと言わざるをえない。

註

(1) 現在でもアムール川の供給する淡水が閉鎖系海域であるオホーツク海に注ぐこと によって流氷が引き起こされることが知られていることから、氷期の日本海はこの二 大大河がもたらす大量の淡水によって、冬季を中心に非常に広範囲に流氷で覆われていたと推定される。この地理的条件が、氷期の列島に厳しい寒冷・乾燥気候を招来したと思われる。

(2) 韓国の剥片尖頭器は、後期旧石器時代を通じて存在していた可能性がある。朝鮮半 島における石刃技法の成立過程がよくわからない現状では解釈が困難な点もあるが、 列島における基部加工尖頭形石器の成立過程に類似するプロセスを、韓国の剥片尖頭器も歩んだ可能性を考慮にいれても良いかもしれない。

引用参考文献

安斎正人 2000 「台形様・ナイフ形石器石器群(1)」『先史考古学論集』6 集、 79-115 頁

安斎正人 2002 「「神子柴・長者久保文化」の大陸渡来説批判-伝播系統論から形成過程論へ-」『物質文化』72 号、1-20 頁

安斎正人 2003 「石器から見た人の行動的進化」『考古学』I 号、78-128 頁

安斎正人 印刷中 『旧石器社会の構造変動』同成社

木村英明編 1998 『シベリアの細石刃石器群』科研資料集、札幌大学

佐藤宏之 1992a 『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房

佐藤宏之 1992b 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説-関東地方を中心に-」 『法政大学大学院紀要』29 号、55-83 頁

佐藤宏之 1993 「細石刃石器群の行動論的分析のための視点」堤編『細石刃文化研究の新たなる展開』299-307 頁

佐藤宏之 2002 「環日本海における広郷型細石刃核の分布」大貫静夫編『内蒙古細石器文化の研究』科研報告書、東京大学、160-168 頁

佐藤宏之 2003 「北海道の後期旧石器時代前半期の様相-細石刃文化期以前の石器群-」『古代文化』55 巻 4 号、3-16 頁

佐藤宏之・ヤロスラフ V. クズミン・ミッチェル D. グラスコック 2002 「サハリン島出土の先史時代黒曜石製石器の原産地分析と黒曜石の流通」『北海道考古学』38 輯、1-13 頁

白石典之 1993 「細石刃文化の出現過程」『細石刃文化研究の新たなる展開』3-11 頁

田川賢蔵 1960 『大関遺跡予報』(私家版)

立木宏明編 1996 『樽口遺跡』朝日村教育委員会

堤 隆編 1993 『細石刃文化研究の新たなる展開』佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ

鶴丸俊明・出穂雅実・高倉純 2000 「大韓民国・上舞龍里Ⅱ遺跡の細石刃石器群」 『北海道考古学』36 輯、97-103 頁

寺崎康史 1999 「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』8 集、 71-88 頁

福井淳一編 1999 『千歳市柏台 1 遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター

松藤和人 1987 「海を渡った旧石器"剥片尖頭器"」『花園史学』8 号、8-19 頁

山田 哲 1999 「北海道の前半期細石刃石器群についての研究-常呂郡訓子府町緑丘 B 遺跡石器群の再検討-」『先史考古学論集』

8集、1-70頁
山原敏朗　1998「北海道の旧石器時代終末期についての覚書」『北海道考古学』34　輯、77-92頁
陸別町教育委員会　1963『陸別遺跡-斗満台地旧石器発見報告書』

八ヶ岳旧石器研究グループのシンボルマーク

旧石器時代の食料といわれるハシバミの葉をデザインしてあり、その下縁は八ケ岳の稜線を描いている。ハシバミは現在でもたくさん野辺山に自生する。

シンポジウム　日本の細石刃文化　II

—　細石刃文化研究の諸問題　—

発行者：八ヶ岳旧石器研究グループ

発行日：2003年10月18日

編集者：堤　　隆

印刷所：ほおずき書籍株式会社

連絡先：〒385-0022　長野県佐久市岩村田1292-4

堤　隆方　八ヶ岳旧石器研究グループ

Eメール　tsutsumi@avis.ne.jp